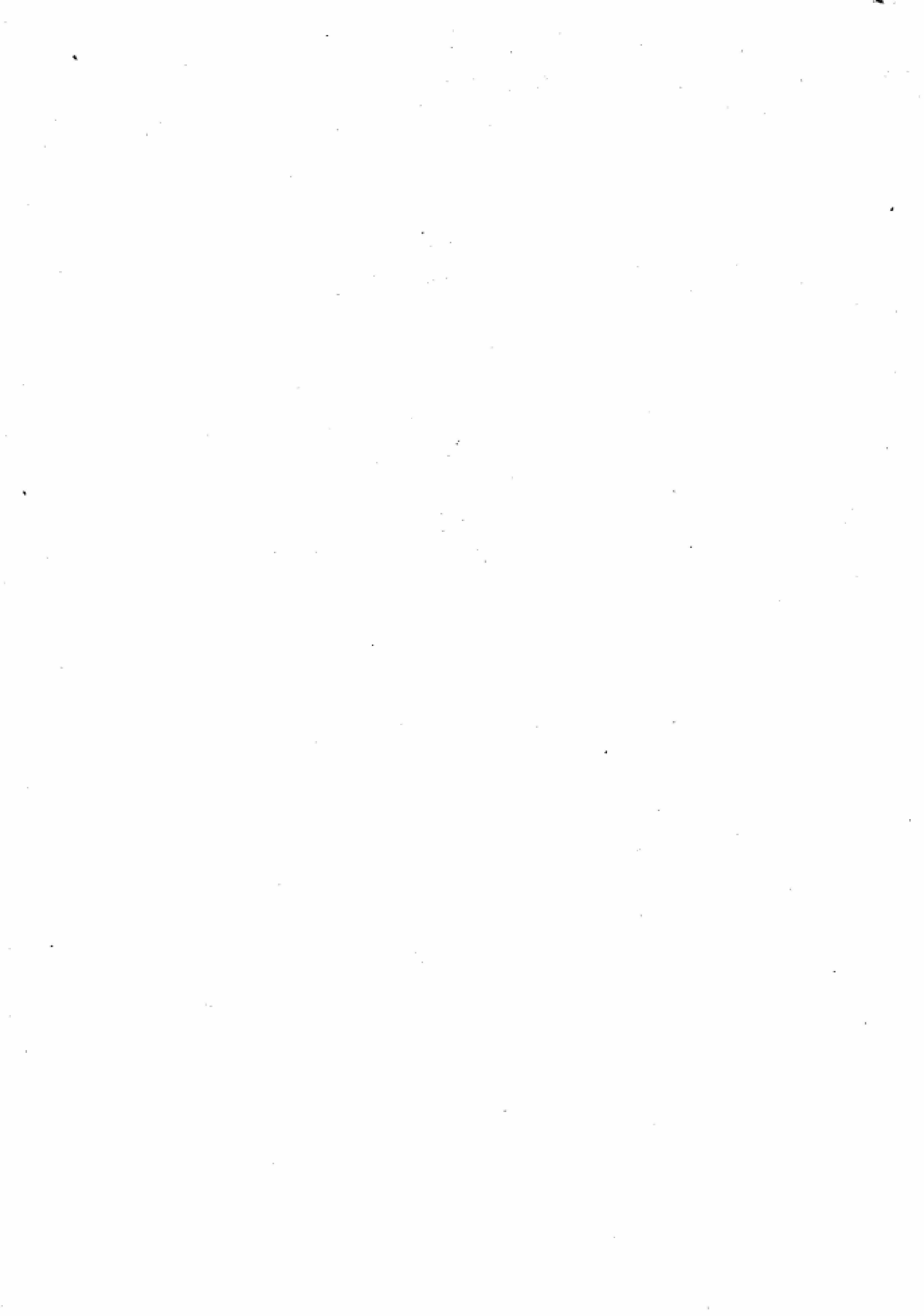


ZEITSCHRIFT

FÜR

PRAEHISTORIE

(SHIZENGAKU-ZASSHI)

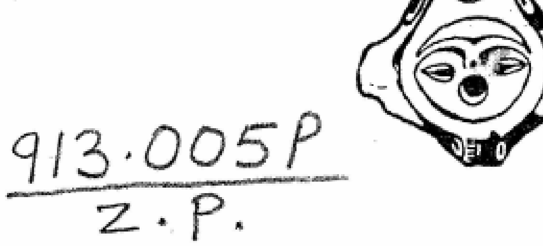
Organ der Japanischen praehistorischen Gesellschaft

Herausgegeben

von

KASHIWA OHYAMA







4. BAND 1. HEFT

TOKIO

märz 1932

Japanische praehistorische Gesellschaft

(SHIZENGAKU-KWAI)

9, Ondeñ, Aoyama Tokio.

Satzungen der Gesellschaft.

1. Der Name der Gesellschaft ist "Shizengaku-Kwai" (Praehistorische Gesellschaft)
2. Der Zweck der Gesellschaft ist das Studium der Praehistorie und ihrer Grenzgebiete und dessen Popularisierung
3. Die Tätigkeit der Gesellschaft erstreckt sich auf
   A Herausgabe kleiner Mitteilungen und Schriften
   B Herausgabe der Shizengaku-Zasshi (Zeitschrift für Praehistorie) (Zweimonatlich) und des Jahresberichts.
   C Veranstaltung von Forschungs-und Studienreisen
   D Veranstaltung von Vorträgen und Ausstellungen
4. Mitglieder
   Die Mitgliedschaft wird erworben durch jährliche Vorauszahlung eines Beitrags von 5 Yen. Personen welche einen einmaligen Beitrag von 200 Yen oder mehr zahlen, werden lebenslängliche Mitglieder. Personen welche sich um die Gesellschaft besonders verdient gemacht haben, können Ehrenmitglieder werden und haben damit die Stellung der lebenslänglichen Mitglieder
5. Die Mitglieder erhalten die Zeitschrift und den Jahresbericht frei, jedoch wird für Zusendung nach dem Ausland das Porto berechnet
6. Rechte der Mitglieder
   Die Mitglieder haben das Recht, die Einrichtungen des Ohyama Instituts für Praehistorie zu benutzen
   Die Arbeiten der Mitglieder sollen in der Praehistorischen Zeitschrift veröffentlicht werden
   Ferner haben die Mitglieder das Recht, an den Forschungs- und Studienreisen der Gesellschaft teil zu nehmen, die Vorträgen und Ausstellungen zu besuchen, sowie die Sammlungen und die Bibliothek der Gesellschaft zu benutzen
7. Ein aus mehreren Mitgliedern, bestehender Vorstand führt die Geschäfte der Gesellschaft
8. Wenn es sich als notwendig herausstellt, können diese Satzungen später geändert werden
9. Das Büro der Gesellschaft befindet sich:

9. Onden Aoyama Tokio
Ohyama Institut für Praehistorie
(Ohyama Shizengaku-Kenkyujo)

für den Vorstand

Fürst Kashiwa Ohyama — Sueo Sugiyama
Isamu Kohno — Kingo Tazawa
Mitsuji Miyasaka

INHALT

I. Abhandlungen (Japanisch)

II. Mitteilungen (Japanisch)

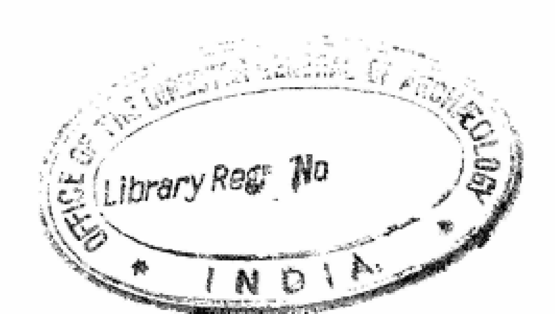
III. Kleine Mitteilungen (Japanisch)

1. Fundort

2. Fundgegenstände

3. Yayoi-Kultur und ihre Familie

TAFEL



史前學會刊行書目

- 史前學雜誌第一卷（昭和四年刊行）（五冊並ニ年報） 定價六圓
- 史前學雜誌第二卷（昭和五年刊行）（六冊並ニ年報） 定價六圓
- 史前學雜誌第三卷（昭和六年刊行）（五冊已刊第六號近刊） 定價六圓
- 研究小報第一號 神奈川縣新磯村勝坂遺物包含地調査報告 大山柏著 定價壹圓 送〇、一〇
- 研究小報第一號 埼玉縣柏崎村眞福寺貝塚調査報告 甲野勇著 定價壹圓廿錢 送〇、一〇
- パンフレット第一號 史前の研究 大山柏著 定價十五錢 送〇、〇四
- パンフレット第二號 石器時代の概要 大山柏著 定價十五錢 送〇、〇四
- パンフレット第三號 未開人身體裝飾 甲野勇著 定價三十錢 送〇、〇四
- パンフレット第四號 石器時代遺跡概說 大山柏著 定價四十錢 送〇、〇四

- 史前學繪葉書 第一輯（外國之部） 定價二十五錢 送〇、〇二
- 史前學繪葉書 第二輯（日本內地之部） 定價二十五錢 送〇、〇二

發行所
府下千駄ヶ谷町穩田九大山邸內
史前學會
振替東京五八九六八番

發賣元
東京市神田區北甲賀町四番地
岡書院
振替東京六七六一九一番

本圖錄に載するもの關東及び奥羽地方出土品を主とし殊に關東地方發見品がその過半を占めてゐる。他地方出土品としては僅に信濃飛驒に各一個を撰べると、畿内及び備中のそれに一葉を、又九州南半部に於けるものに一葉を充てたのみであるのは、これ等縄紋式土器就中その系統の文化が特に關東地方に於て顯著な發達變化を遂げ、更にその延長を奥羽地方に見たる結果に因據するが爲めであつて、近畿以西の地に於てこれを發見することの尠いのは、畢竟周末漢初以來東漸せる支那文化によつて發達生長を遂げた我が上代文化とその部族の占居せし結果に基くところに他ならない。本圖錄が關東及び奥羽地方出土のそれを偏重したかの如き觀を呈せるも亦當然の歸結であつて敢て異むに足らないのである。

猶本集には北海道・千島・樺太等の諸地方に發見された土器の爲めに數葉を割愛してゐる。しかしそれ等の中には縄紋式土器とは全く別箇の系統に屬するものが過半を占めてゐる。

全集四十八葉いづれも極めて鮮明なる玻璃版に附し、別冊を添へて各個に對する解説を加へ更に「縄紋式土器概説」と題して簡明に記述して該式土器の概念を與へんと試みてゐる。洵に斯學の好參考書としてこれを推擧するに吝かでない。「發行所東京神田日東書院」（田澤）

會報

入會

北海道稚内町中通り　關　正

東京市外野方町江古田九三五　堀野良之助

靜岡縣掛川町城内　鴇田忠雄

退會

小川量平

訃報

グスタフ・コシナ

近着ドイツ史前通報に昨冬十二月二十日 Gustaf Kossinna の訃を傳へてきた。ドイツに於て、特にゲルマン考古學の一大權威の逝去せられたことに就ては、茲に弔意を表するものである。

（昭七、三、六）（大山）

或る部分を互に抽出結合せられ得るものか、この點に大なる疑問がある。本論中には、屡々日本に言及せられて居るもの丶、研究の中心は、印度支那、マレー等にあるらしい。それ故、本誌に於て、有光君や私共同志に於て紹介して居る、東印度諸島乃至は、印度支那等の石器などが出てくる。中に、印度支那方面へ、日本新石文化の影響の存するものがあるとて、其例證に曲玉に言及せられて居る（第八四二項）。我が國の方では以前に文化南來說が一部に行はれたが、今度は反對で、先方に日本新石文化進展說が出て居るのは面白い。然しこれ等を眞面目に考へて見ると、こんな大きな問題を、簡單に取り扱はふとするのが、抑々學に對する認識不足に基因するのではあるまいか。

次に日本關係のものは、O. Mengin ; Zur Stenzeit Ostasiens である。卽ち「東亞の石器時代」であつて、印度支那、支那、日本等に亘つて研究せられたもので、前のハイネ・ゲルデルンとは異り、全く史前學的立場に立つて居る。この內容に就ては、近く改めて別に、評論を加へること丶して、今回は其表題を傳へるに止めて置く。特に日本に關した認識不足は、邦文の讀めない外人としては、或る點までは、斟酌もせねばならないが、日本に觸れる以上は、今少し研究してもらひたいと思ひ、これは私として、近く發表を期して居る。獨文論文中にも注意して置く考へでは居る。

この外「エジプトに於ける史前文化の發展」、「人類學、民族學、史前學の精神史學的位置及び其主方向」、「人種史學の方法」等夫々讀んで見たい論文があり、珍らしいのはヲーバーマイヤーの「古代スペインに於ける頭骨に釘打ち」とでも云ふ可き論文で、まだ讀んでは居らないが、有史以降に屬するものらしく舊石研究の同博士の論文としては、其題材が餘りに新し過ぎる。

これを要するに、本書に於て、史前學方面に特に日本關係の存する所は、其內容の如何は第二としても、歐洲一部からは、東洋に向つて研究の步が進められて居る所は、見逃し得ざる所であり、其意味でかく紹介もしたものである。

（昭七、一二、一五）（大山）

日本考古學圖錄大成　繩紋土器　杉山壽榮男著

曩に原始文樣並に原始工藝の二圖錄を刊行して繩紋式土器の一大聚成を試みて斯學の研讚に寄與せらる丶こと多大であつた杉山君は、這臘日本考古學圖錄大成の第十四輯として表題の圖錄を著し、こ丶に前記二圖錄の補遺として三度繩文式土器の聚成を遂げられたのである。絕えず一貫して目的の爲めに專念努力せらる丶同君の勞苦に對して敬意を表したい。

文獻

Festschrift Publication D'Hommage Offerte au P. W. Schmidt. 1928.

本書は表題の如く、ウヰーンの碩學、P・W・シュミット博士の六十歳を迎へられた、紀念論文集である。但し一九二八年の刊行であるから、新刊紹介とも申されないが、中に別記の如き日本史前關係の論文もあること故一應紹介して置く。

このP・W・シュミットは、私の師侍した、史前學者として、ドイツ、ベルリンに居る、シュミットや、同じくドイツ舊石研究の權威である、チユービンゲンのR・Rシュミットとは、別人であり、研究方面も異り、言語學を主とし民族學方面に亙る權威である。從つて直接史前學それ自身に對する專門的な研究者としての立場は見られないが、本書に寄せた史前關係の研究も尠なくないから、これを主體として紹介して見る。

本書は、以上の如き關係に基いて成立して居るのであるから、卷頭に同博士の小照を飾り、且つ叙文の外、同博士の論文年譜がある。これを見れば、直に同博士の研究方面を窺はれる。更に本書の主體をなす諸論文は、其數七十六に達し、從つて本書は四六倍判、九七七項の大著となつて居る。これを論文の種類に基き、大別して、第一に言語學部、第二に民族學並に宗教學部、第三に史前學、自然人類學、社會學其他を取り纒めてある。

この史前學論文は古い文化より始まり、Comte Bégouen と H. Breuil の舊石藝術研究がある。其次にウヰーン L. Franz の史前歐洲に於けるブンメラング等投擲器の研究があり、中石出土の木器等に及んで居るが、遽に觸れ得ない。只形が似て居ると云ふだけで、歐洲出土のそれがブンメラングであるとは、輕々に申し得ない。それがブンメラングである可き根據が確實でなければ、公算は二分の一に過ぎない。歐洲によくあつた論定?であつたが、これが今日迄も行はれて居る一例とも見らるゝ。其次は R. Heine-Geldern ; Ein Beitrag zur Chronologie des Neolithikums in Südostasien. 卽ち「東南アジアに於ける新石時代の編年論」とでも譯さる可きものである。この人はウヰーン大學の講師で、前からアジア方面の研究がある。但しこの內容は、史前學上の遺物と、言語學的研究とが、結ばれたもので、夫々方面に通じないと、細論が出來ない。然しながら、史前學的研究と、言語學的研究とに於ては、根本に夫々其學として立場と研究とがある以上、夫々一科學として研究した結論相互間に交渉を見るものなれば、よいけれども、夫々から

大阪の先史時代遺跡

松下胤信

大阪へ移り住んでから、最早や一ケ月にならうとして居る。此間公務の余暇を利用して、斯學の方面に注視し來つたが、玆に其等の若干を示して、我大阪市の先史文化を窺ふ事にする。

昨年大阪市の地下鐵工事の際、淀屋橋より本町間の地下二十尺乃至三十尺の地底より、彌生式祝部土器其他の遺物を出土した。此等の地は舊淀川の河底であるが、恐らくは上流方面より何等かの條件に依つて、流水と共に運搬された樣相を想起するが、何れにしても、近緣の地に彼等の生活跡を想定する事は許され得べき事實である。其他天滿川發見の祝部土器、住吉區桑津町に於ける彌生式遺跡を低地に跡づける事が出來るが、時に桑津町の其に關しては、後報を以つて報告したいと念じて居る。

次に案北方面を見ると大阪城大手前より彌生式祝部土器の發見を掲げる事が出來る。遺跡形態を示す代表的證跡ある貝塚として、難波六番町南海ビルディング（工事の際の偶發的な發見に基づく）地内の其がある。此も低地に屬する遺跡であるが、多くの彌生式就中コップ型土器を出土して居る。以上に依つて先史大阪市を見ると、彌生式系を以つて主體とし、多くの場合沖積低地に存在する傾向が强く認められる。

其等の基本的な考古學的位地の決定は、後の研究に委ねらるべきであるが、少くとも淀川の沖積過程と、其に伴ふ大阪灣の海水浸蝕面の正比例的な後退からして、低地進出の一時期を抽出する事は困難でない。從つて其等の生活樣式、特に經濟段階の諸相は、大阪灣沿岸の諸遺跡の基礎的考古學的地位を占むる因素であると云つてよい。此等の內容に關しては、改めて後の詳細なる論究の機に待ちたいと思ふ。（一九三二、二、一五）

川越附近發見の有溝石斧

川越市立圖書館に所藏されて居る石器の中に一種の有溝石斧がある。この石斧は普通の有溝石斧より溝の部分の玦入が顯著でなく、その斷面形態も多少丸味を帶びて居る。石質は不明であるが相當堅く、刄部は缺損して居る。出土地は「藤間」とあるが恐らく入間郡高階村藤間であらう。有溝石斧は主として彌生式土器に伴ふ遺物であつて、現に東京附近の目式遺跡からも數例發見されて居る。然し藤間遺跡の性質は今の所解つて居ない。何れ機を得て調査の上報告し度いと思つて居る。（I・K）

見ないとも云ひ得る程であり、特に滑脱し易い魚獲に最適な形式である。直軸有拘の方は、遠く既に舊石末のマグダレニアン文化に精良なものを見て居るが、其以降には、これと對抗する樣な精品は、歐洲では少ない。無いのではない。立派さが足りない。特にスヰス杙上住居系やバルチック系などのは、多くは不器用であり、この形式としてはマグダレニアンに匹敵し得るものは、この沼津出土にある。但しこゝに掲出したのは、沼津出土としては、良品の部に入れ得ないものではある。こんな優品を歐洲人に見せたら、或る人々は、又マグダレニアン文化移行說などゝ飛んでもないことを云ふまいか。現に關東地方の打石斧をカンピニアン形と Mengin は云ふて居る。（拙稿、本誌文獻紹介參照）銛の外、釣針にも優品が存するが、こゝに掲出したのは、同出土の凡品である。この形式にも面白いものがあるが、他日に讓る。長針、所謂浮袋の口と稱さるゝもの等に於ても、こゝでは特記するものがない。最後に圖版右より二行目中央の弧狀をなした、裝飾品と覺しき破片であつて、朱塗りである。これが類似品は色々な形なものが存り、變化に富んで居るから、輕々に全形の複原は出來ないが、中央に楕圓、尖圓等をす一片と考へらるゝが、其形は兎にあれ、本貝塚人が獨り實用的な器具の方面にのみ發展したのみでなく、他の一面に美しい數々の裝飾品を有し、この方面への進展を見て居る。一例證となし得るものである。勿論全般から見て、本貝塚は特に骨角器に多くの優品を見るけれども、石器や土製品の劣つて居るのではない。特に土器、土偶、土印、紡錘車、土製耳飾等の相應にあることは、忘れてはならない。こゝでは單に、圖示した骨角器に就てのみ、槪說に止める。（昭七、一、一七）

彌生式系統

子母口出土の小型彌生式土器

齋藤房太郎

武藏國橘樹郡橘村子母口貝塚から小型彌生式土器が出土したが一見現在の豬口の如くその用途については不明である。土質は優良にして雲母石英等を混じて居ない、高さ 20m. m. 複原すれば口部の直徑 45m. m. 底部の直徑 28m. m. である。色は淡褐色を呈し燒成の不完全な爲か口部に於ては稍黑味を帶びて居る。厚度は口唇部に於て 2m. m. 底部に至るに從つて次第に厚度を增し底部に移らんとする處に於ては厚度 5m. m. となり底部に於ては逆に減じて 3.5m. m. となつて居る。文樣は少しも施されず幼稚な轆轤を使用した痕跡がある。

る。只此等の中に亀ヶ岡前期に屬するものと、後期に屬するものとが存在する事は明かに認められる。

それ故若し此等の土器の全部が竪穴から出るものとすれば或る竪穴中に於て同時代に置かれたと推定される土器を一まとめとして分類し他の竪穴出土のそれと比較研究を試みたなら面白い結果が生れはしないだらうか。

本州北部に於て見られると同樣の年代的序列が北海道に於ても認められるか。或ひは東北に於ては年代的序列が明かに認められるものも地理的に隔離された此地方に在つては殆んど同時に共存したか。と云ふ樣な同式文化の發展又は傳波の問題は將來の研究にこれを俟たねばならない。

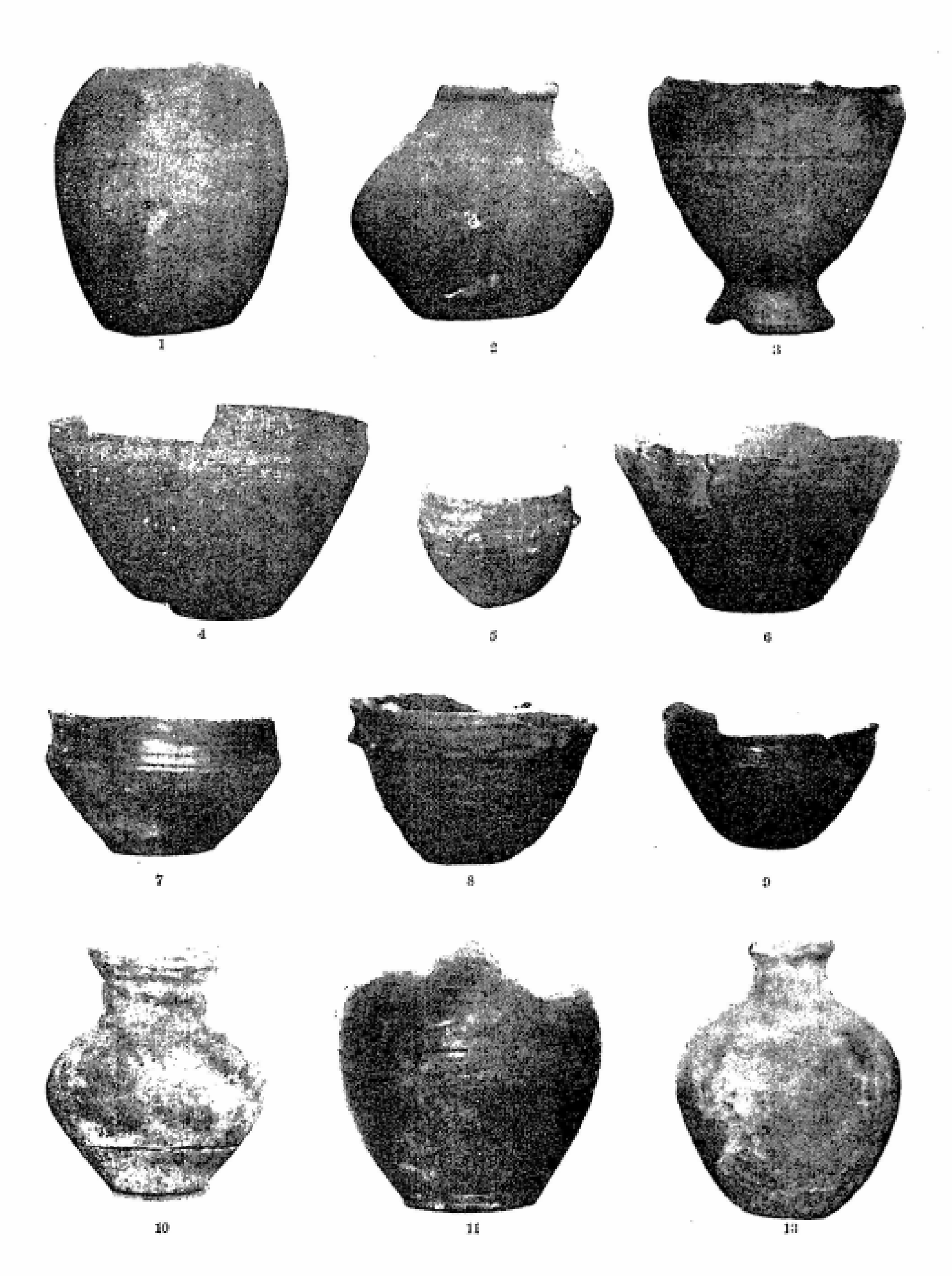
終りに斯る貴重な遺物を寄附された落合計策氏の芳志に對して深く謝感の意を表する。

陸前國稻井村沼津貝塚出土の一部
骨角器

大　山　柏

本貝塚から出土した所の骨角器で、毛利、遠藤兩氏所藏品のみでも、數百點、數へ方によれば、千餘點に達して居り、其種と量に於て、一貝塚出土として、他に類を見ない。先般史前學研究資料として、兩氏より其一部を當研究所に寄贈せられたのが、本卷頭圖版である。この掲出した骨角器の如きは、同貝塚出土としては、類例に富んだものであり、且つ既に杉山氏等によつて、本貝塚出土の一部は、紹介もせられ、讀者に於ても御承知のことゝは考へるが、これ亦、研究資料として圖示した次第である。

本貝塚出土の骨角器全般に就ては、尚一單行書として研究し得るだけの種と量とを有するから、こゝでは、主として圖版の說明に止め、他は後日に讓ることゝする。この圖版で見らるゝ如く、最も精良にして、變化に富んで居るのが骨銛である。—勿論この外、兩氏藏品中には、朱塗りで裝飾品と覺しいより良品等多くを見らるゝが、これ等圖版外は別としてでのことゝする。—この骨銛中には、所謂燕尾銛（圖版左より二行目三個）と稱せられて居る燕尾に似た斜出した尾端を有し、其上方に紐を通すべき孔を有する形式と、他は直軸の一側乃至兩側に拘部を有するもの（圖版中央の二個）との二種類がある。この燕尾銛の如き、紐で手と縛着して、刺突に際し、獲物に刺留して、軸柄より脫落する樣に出來て居り、獨りエスキモー等の土俗に見るに止まらず、材量こそ鐵製ではあるが、我國現用の銛と少しも形式上、變りがない所は、彼れ等の發展が、既にこの文化に於て發育頂點に達し、爾後今日まで、それ以上の形式進展を



北海道上磯町久根別(1—4)及同添山發見土器 (5—13)

土器、頸部下端に三條の繩紋が廻され、それ以下の體部には繩紋が押されて居る、3は臺付鉢形土器口縁に細かい突起を有し頸部には三條の溝が廻らされ、この上下の溝に點列が加へられて居る。繩紋は體部に發達するも臺部にはこれを見ない。4は鉢形を爲し極めて薄手精巧なる作品、口縁及び頸部文様帶はほぼ3と同様なるも點列は上部の溝一條にのみ限られて居る。此外に同竪穴出土器として送られた物に、壺形土器體部一個、同口頸部二個臺附土器臺部二個等がある。

添山遺跡は昭和六年十月に發掘され腐蝕土中、地下一尺五寸位の所より多くの土器及び石器類が發見せられた。5―12は此時出土した遺物の一部である。5は土質粗く粗製の小形鉢型土器口頸部に突起を有する平行線的沈線があり口縁内側には一條の溝がめぐらされて居る。體部には流水紋狀の紋様(所謂工字紋)がつけられ其下には更に平行沈線が施されて底部に及ぶ。繩紋は紋様の一部に僅かにその跡を止めて居る。6は黑褐色無紋の鉢型土器、その製作は頗る粗雜である。7.9は共に鉢形土器、口縁は7に於ては平縁9に在つては小刻を有する小波狀縁、口頸部線様は共に平行沈線より成り體部には繩紋が發達して居る。8は形、紋様共に5に類似するも、口縁上面に線瘤狀突起を有し體部紋様は全く崩れて不整なる平行沈線と化して居る。繩紋を缺き製作施紋共に粗雜である。10は長頸壺型土器、口縁上面に四個の小突起を有し、口部側面及び頸部下端にも沈線が引かれ胴部には繩紋が發達して居る。11は口頸部を缺く壺形土器體部には入組線的線紋(所謂雲形紋)が發達し、此の紋様上に繩紋が押捺されて居る。12は細頸壺形土器、無紋灰白色を呈し粗製品である。口部は上から見ると多少の凹凸がつけられ花瓣狀を爲して居る點は異とす可きである。此等の外5と類似する小形の鉢一個、口頸部を缺く壺型土器一個、臺附土器、臺部一個等がある。

尙昭和四年五月に落合氏等が發掘された土器百點はこれを函館市立圖書館に寄贈されたと云ふ。

以上同氏が史前學研究所に寄贈された土器を通覽すると此等の殆んど全部は所謂龜ヶ岡式土器に屬して居る。陸奥地方を中心とする、龜ヶ岡式土器が津輕海峽を越へて北海道にまで分布する事は相當古くから知られて居た。然し其等が龜ヶ岡式の如何なる楷梯に相等するものであるかと云ふ問題に就ては未だこれを論じたものがない様である。本州北部に分布する龜ヶ岡式土器は更に幾つかの型式に細別されると云ふことは、近年山内清男氏の努力によつて明かになつた。而して山内氏の分類に從へば上磯町出土の土器に於ても各種の形式が見られる樣に思ふ。然し此式の省細なる内容に通曉しない私には、今此の個々に就て一々之を識別する事を得ないのを遺憾とするものであ

混土貝層であり、所々には砂の疑層が複在して居る。この混土層中に、石器、土器片等と骨角器が介在し、層は稍々堅いから發掘困難であると同時に、注意しないと遺物な破壞する恐れがある。丁度この塚底最近き處に成人人骨一體を發見し、小金井、長谷部の兩博士によつて出土せしめられた。これは小金井博士の敎室に寄贈せらるゝに到つて居る。

この混土貝層中よりは、動物殘骸も豐富に出土し、イノシシ、シカ、イヌ等の頭骨、イルカも出れば、鳥、魚骨もある。貝類はこの發掘壕にては、アサリ多く、オキシジミ、ハマグリ、オホノガヒ、ニシ、カキ等が見られ、オキアサリ、バイ等もあつた。全般では更に多く二十餘種を採集し得た。文化遺物に就ては、別項に述べて居る。（昭七、二、十七）

備考 本貝塚名に就ては、私には不明瞭な點がある。本文で說明して居る如く、其位置は、舌狀地の鞍部にあり、圖上で見ると澤田金山に最も近く、沼津の地名は、猶北方約一粁の地點に見らるゝ。但しこの貝塚の所は、沼津領なのか、或は沼津が大字であるのか、當時聞き漏したのは私の手落ちであり、今日明記し得ない所である。又東大の地名表によると、沼津貝塚は高木村とあり、本題名の如き稻井村ではない。稻井村としては、南境貝塚があり、同表で見ると高木村沼津貝塚が本貝塚に當る様である。同表追補中には、稻井村高木貝塚と云ふのがあるけれど、これは別貝塚らしい。發掘者の毛利、遠藤兩君は沼津と呼び且つ有名でもあるから、かく從つたもので、其村名を稻井村にしたのは、同君等の附札に稻井村沼津とあるによつたのであり、地形圖にも、稻井村はあるが、高木村がなく、字に見るのみであることからも、稻井村らしいから、かく云ふたのである。

同 （遺物）

北海道上磯町發見の繩紋式土器 1

甲野勇

圖示する繩紋式土器は、北海道渡島國上磯郡上磯町久根別及び添山遺跡より同地の特志家落合計策氏が發掘されて史前學研究所に寄贈せられたものゝ一部である。

同氏よりの書簡に據れば久根別遺跡は現在の海岸線を隔る事八百米、久根別川の畔に位して居る。昭和六年四月落合氏は有志者と共に此地を發掘され、土器百三十二個、（其內香爐型土器一個、注口土器四個）土偶四個を發見された。圖1―4は久根別遺跡よりの出土品で、此等は東西四間南北三間の竪穴中の深さ三尺の所で同時に發見されたものであると云ふ。石器としては石鏃以外の品は全く伴出しなかつたとの事である。

1は鼓形を呈し全體に繩紋の施されて居る粗製品、2は壺形、

縄紋式系統（遺　蹟）

陸前國稻井村沼津貝塚に就いて

大　山　柏

本貝塚は多年石巻町の毛利、遠藤兩君によつて、順次發掘を重ねられ、其出土遺物、特に精良なる骨角器を出土することに於て、餘りに有名であり、今更これに關して、改めて報告すべきことも無く、旣に其出土品の一部は、隨所に引用もせられて居るけれども、其遺跡の狀態に就て、一通り私自身のノートの整理の意味で書いて置く。

私の同貝塚を見學したのは、昭和四年四月二十三日のことであり小金井博士、長谷部博士、杉山壽榮男氏等と共に、毛利、遠藤兩氏の案内によつて、石巻より萬石浦を經て、折立より標高五七の小峠を越へ澤田金山北側の同貝塚に到つたものである。其位置は陸地測量部發行五萬分一地形圖石卷に於て、萬石浦西北方一粁、圖上澤田金山の澤の字西側にある。表面貝殼の散布して居る所からして考へると、圖上澤の字西側に神社の存する一小丘陵が今日の沖積地—恐らく當時は海であつたであらう—の中に西方に向つて舌狀に突出して居る其鞍部の南北の兩斜面に見るのであつて、地形上、所謂鞍部貝塚をなして居り、東北地方に於て、氣仙村長部の貝塚、赤崎村大洞貝塚等と其類を同ふして居る。而してこの鞍部の比高も餘り大きくない。高々十米内外で、斜面は耕作の爲、處女相を呈して居らないが比較的寛である。

表面は旣に發掘せられた所多い故か、白く貝殼密在して居る部分が認められ、其貝殼は鹹水產もあれば、淡水產も見らるゝ。卽ち淡鹹貝塚であるけれども、場所によつて、鹹水產濃密な所と、淡水產の密集する部分とが見らるゝから、この兩者の部分に於て、果して文化遺物にどれだけの差が見らるゝものか、研究して見たいと考へらるゝ。

同日私共は毛利、遠藤兩氏の好意で、其發掘に參加した。其發掘位置は鞍部を通ずる道路より東側約二十米ばかりの地點で、旣に朝來發掘壕が出來て居つた。表面よりロームまでの深さは一米八十もあるけれども、この部分の斷面に見らるゝ所悉く、

止め！ で水掛論に終つた如く、今日猶多くの議論と疑問とを包んで、水城はブッハウの泥炭中に昔を物語つて居る。

其八 ブッハウの博物館とドュレンリード遺跡

又輕鐵でブッハウに着く。三室程の小博物館を見る爲である。遺物も多く藏されてない。附札がないから、南獨地方の土器に見馴れて居らない私は、手當り次第に寫生を始める。傍に人があり、それは石器時代のではありません。今見た水城のです。と親切に教へらるゝ。私の寫生を相變らず眺めて居つた、S君は何んとも云はない。同君も水城土器は解らなかつたと見へる。今度は澤上住居のをと始めたばかりに、最早や時間がないとて、一同でて行く。遲れて飛び出して、一同を追ふ。ブッハウの停車場に行く。なんのことだ、まだ一時間もある。又出ると、今度はシュ博士に出遇ふ。博士が御茶を飲みたいと云はれるから、一所に御茶を飲む。皆んなが居らない。居らない筈だ、このフエーダー湖第三の石器時代遺跡であり、このブッハウのすぐ東側にあるドュレンリード (Dullenried) を見に行つたのだ。私は驚いて飛び出うとすると、シュ博士が、「同じことだ、澤上住居だから、見ることもなからう。まあ休み給へ。」と云はれて見れば、こゝに出掛けたのは、健脚な學生連のみで、他は停車場附近にゴロ／＼して居る。

今度は同じ輕鐵でも、泥炭貨車でない。腰を掛ける。發車してすぐ東側二三百の所を、S君指して、あれがドュレンリードだと示してくれる。今日一日掛りで來た道を、僅かに三十分でシュッセンリードまでくる。こゝで一同に御別れをする。シュ博士もS君にも、明日は希望者だけがボーデン湖の杙上住居見學に行くのだ。それは約二十名内外で、あとは解散との話。闘將ウヰーン のバイヤー博士 (J. Beyer) スキスのガムス君など「左樣なら」と出て行く。明日からは寂しくなる。たゞボーデン湖の南側はライナート君が案內してくれるとのこと故、安心して見に行ける。且つ私共の一行は、T學士、G. F. 等と學生隊を編成することに話が纒る。面白かつたのは、同宿を約したE君、あわてゝシッセンリードで下車。私と一所に本線の驛前ホテルに來る所を、一つ前で下車したわけ。オーイ／＼と云ふ內。ピー。E君くやしさうに、ぷつぷついゝながら、二軒行軍でくる。明日の足ならしだと。相變らず獨逸人らしい。

後記

其翌日、卽ち八月十三日、私は午前四時半に起される。午前五時三十分の列車で、ボーデン湖に向ふからだ。此日ボーデン湖の南岸見學を終つて、私共の一行だけが更に北進し、其後、コンスタンツより、リンダウに引き返し、ミュンヘンに行つて、解散したのであるが、餘り長くなるから、これで終りとする。

（昭七、一、十九）

く、傍の大土塊を引摑んで、いきなり「公爵進呈！」と唸を生じて飛んできた。S君、M君と這々の體で逃げ出す。幸にもシュ博士やR.R博士等は假眠中であつたが、これが休憩中の一喜劇であつた。然し歐洲では、こんな惡戯も婦人にはするもんでない。女權の强い所であるから。

其七　水城　(Wasserburg)



Fig. 9.　水城外柵の發掘 (Reinerth,A)

午後の二時頃、集れとの號令で、一同どや〜輕鐵に乘り込んで、諸所に會社の泥炭發掘場を眺め乍ら、灌木も疎な、草原に出る。遠くに水がある。これが現今のフエダーゼーで、上野の忍ヶ池を少し大きくした位にしか見へない。西寄りにブッハウ（Buchau）の村が低い岡の上に見へ、寺院の塔のみが、聳へる。草原の最中で下車。鐵路の土手から下は、グシア〜の草原で氣持ちが惡い。僅に堤道になつて居る部分を約七八百米も行くと、小棒で標式が出來て居る。こゝが所謂水城の外圍である。傍には巾五米長さ十米も發掘してあつて、深さは五六十糎に過ぎないが、そこには杭狀をなした、所謂逆茂木乃至鹿柴とでも稱し得る木柵（Palisade）の基部が林立して居る（第九圖）。これが外圍であつて、全掘したのではないが、各所を發掘した結果、東西約百二十米、南北約百五十米程に圍んであり、所によつては二重三重に木柵が見られ、北よりの內柵內には、住家が三棟程も發見せられて居るけれども、餘り多くの文化遺物はないらしい。勿論何等文獻上にも見ないとのことである。僅少の文化遺物中には、青銅器があり、石器時代よりは進歩して居ると稱せらるゝ土器があり、又住家の構造も進歩し且つ金屬器を使用したと覺しき術工のある等の理由から、これを青銅時代のものと、R.R博士やライナート君等は、考定したのである。然しこれには兼ねてから色々問題が藏せられて居る。特にこの水城時代の泥炭層に就ては、むづかしい議論がある。こゝではしなくも總攻擊の形で、ライナート君防戰これ努める。其內でも議論家の Gams 氏など、片手に泥炭塊を摑んで順々と論ずる。果ては子供の喧嘩に親父が飛び出す樣に、R.R博士までが說く。終りがない。止め！

『南獨フエダーゼー行』の寄稿より（大山）

何れに屬するか未詳である。土器に於ても色々問題はあるが、概れ第八圖の樣な、比較的紋樣が簡單僅少で、幾何紋を主體とした樣なものである。これに就てはライナート君がC著で色々と研究せられて居るが、根本に獨逸各系の新石文化を說明する樣な關係を生ずるに至り、あの複雜な、今日に於てすら私には不可解多きそれに及ぶを恐れて、事實を紹介するに止める。



Fig. 8.　Aichbühl 出土土器
（紋樣あるものゝ一例）（Reinerth. c）

午後一時に近く、このアイヒビュール近くで食事に案內せらるゝ、これ亦會社の好意により、若干のビールと一皿のパンと腸詰めとの御馳走になる。これが當時經濟界のドン底にあつた、獨逸としては確に御馳走である。—我が一圓が二十萬マークにも當つて居つた—一同假卓につく。會社に對し幹事の謝辭があり、一同拍手して和する。又答辭があり拍手で迎へる。それから食事中に又もや研究演說が始まる。平素研究好きの連中も、室內とは異り、久々八月の晴天の日に、野外に居るのであるから大部氣分が違ふと見へて、「簡單々々」なる野次が入る。機を見るに敏、睡眠人を射る、R・R博士は、突如立ちあがつたかと思ふたら、最早や、これにてこゝの討論終結を勸議する。それと共に、今より約一時間、午食後の假眠休憩を勸議する」と言葉の終らざるに、各所にブラボーの聲が拍手と共に起り、暫く喝采が續く。私の隣りでは此の光景を見て、「Sehr schlau!」との私語が聞へる。かくて參々伍々、そこゝこゝの灌木の木陰に陣取つて、無樣な午眠を貪る。私は日記を書きノートの整理も終つて、仲善しのシュヲラー君—君はヲーストリア人であつたが、歐洲戰の結果、君の鄕里がルーマニアに編入せられ、今はルーマニアに國籍がある。大戰中は、中尉であつた—と物語る。私は同君とパックを畫いたりして、愉快がつて居ると、惡戲仲間が集まつてくる。當時學生のM君が、あそこに史前研究の仲間の、N孃が眠つて居るから畫いてくれと云ふ。何氣なしに寫生する。それがN孃の傍に置かれて、人々が見ては笑ふ。私共はこつちで、與太話に耽つて居ると、やがてN孃目を覺し、柳眉を逆だてゝ怒る。下手人が私と聞くや、前後の見さかへもな

もらうのが至當に思はれる」と私はR・R博士の前に引き出される。色々と云はれるけれど、今日に於ても、同樣にこの後者に就ては全く不明なのであるから、滿足な答解が出るはずがない。漸く前者に對して「恐らく水上に安全なる生活を求めたのであらう」と云ふに止まつた。今にして見れば、こんな質問をするのが、無理がある。然しこのじぶんには一生懸命であつて、色々と突つこむので、私の廻りには、いつしか人だかりがし、色々な人々が、色々の案を述べる。何れも假說である。老巧なシユ博士は、この位で改めて研究しようと、よい頃合いに切りをつけられ、私は學生達の仲に歸る。この論爭?の御影で私は、すぐ近くに同大學によつて、復原建築せられた、杙土住居（第六圖）(其位置は第三圖 Moorhaus(Nachbildung の・の所）を見る機會を失ふた。

註三　アイヒビユールの澤上住居の遺物

一九一九年以來、こゝの發掘に於て、約二〇乃至二二棟（A著、第四一項）と想定せらるゝ住居跡のことであるから、文化遺物も相應に發見せられて居る。其一面がC著で見らるゝ。但しC著に於ては、文化群を主體として、土器、石器等の形態學的研究を行ふて居るのであるから、個々の出土の狀態等に多くを觸れて居らないから、文化遺物を概觀するには、骨が折れる。土器の所、石器の夫々の所で見て行かねばならないのである。更に困ることは、本著者が既に形式分類を試みて居り、アイヒビユール形（Aichbühler Art）として示されたものが多いから、必ずしも其出土地がアイヒビユールと限らない。まして前述の如く澤上住居が一九一九年以降の發見である以上、それ以前の發見、特にリードシアッヘンに於ては、杙上か或は澤上住居に附屬して居るのか不明である。これを單なる形態學的に區分するのは大なる危險も伴ふ。それ故、こゝの文化遺物として、確認せられ得るものそれも圖示せられたものを求めたなら、意外に少ない。石器として、僅に第七圖2・3の鬪斧及び他の一個を揭出し得るのみである。又御膵りのリードシアッヘンからは、第七圖4の樣な角製土掻きが出土して居るが、前述の如く私には、杙澤

Fig. 7.

1. Düllenried　2. 3. Aichbühl
4. Riedschachen
(Reinerth 1. 4. B. 2. 3C)

『南獨フェダーゼー行』の寄稿より（大山）

が出來て居るばかりではない。各集團間にもこれを存する。(第五圖）それ故、こゝに一個の住居を發見した場合、これが四周に注意すると、交通路を見出し次第にこの部落全部が發見し得る。且つこの部落より他の部落に向ふ通路から、第二の部落の發見も理論上可能ではあるが、勿論か丶る大規模な發掘は行はれたことが無い。又それが澤上住居であると、杭上住居であるとを問はず、夫々其地方に於ける、住居構造の上にも、特色が見らるゝ。今見てきた、リードシアッヘンの杭上住居の如きは、これを最も近いボーデン湖のそれに比すれば高さの著しく低い如き、顯著の一例である」等有益な講話があつた。次に又ライナルト君が、各棟に就て、床の構造、赤土や粘土、石塊等で築いた爐などを説明してくれる。只これだけの構築術工が、假例

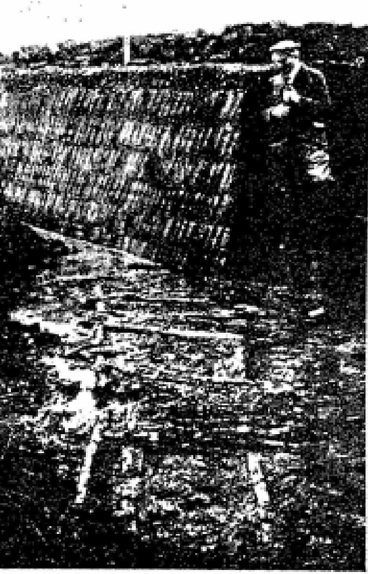


Fig. 5　部落間を通ずる橋

それが新石末であり、若干の金属があつたと假定してもそれでも餘りに進歩し過ぎて居る樣な氣がする。勿論この當時では、我が國石器時代に對し千葉縣姥山の樣な住居跡すら知らなかつた私であつたから、「何故にか丶る住居を營みしものなるにや」の第一問と、「これだけの文化は、突發したものとは思はれない。か丶る住居が生る丶だけの經路がなければならない。所謂原始杭上住居とでも云ふ可き性質のものがあるのか」等の第二問が生れる。これに就て、シュ博士に質問を行ふた所、兎角の反答もなく、いきなり傍に居た、R・R博士を呼び止め、「只今此の如き質問を受けたが、君にこの答解をして

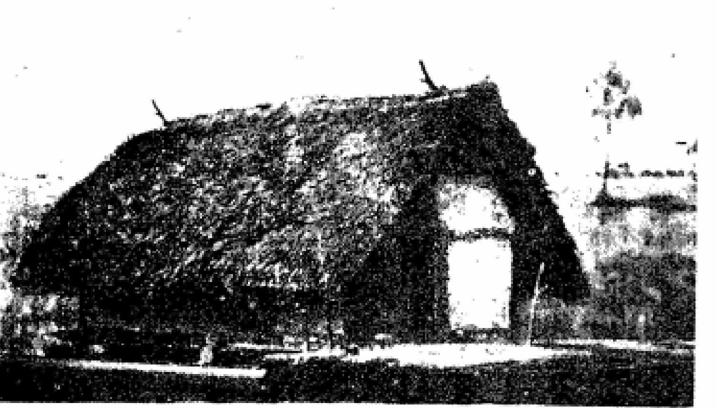


Fig. 6　復原家屋　(Reinerth, A)

居の方が同じ角形でも、不規な所が多いとか、或は家屋乘團の狀態に於ても、杙上より澤上住居の方が、より近く密集して居る等、既に多くを研究せられて居るものがあるのは勿論である。

又これ等の出土遺物、特に文化遺物のことに就ては甚だ不明確であり、且つライナート君もA著に殆んど述べられて居らず、この二三の遺物は、同君の姉妹編とも稱すべき、前年刊行せられた Pfahlbauten am Bodensee.1922, Stuttgart-Augsburg.（B著と假稱）の方に抽出的に出されて居る外、同君の別著、Chronologie der jüngeren Steinzeit in Süddeutschland, 1923. Augsburg.(7)（C著と假稱）の大册によられねばならないから、不便であり、且つ不首尾でもある。想像するに同君としては、このC著で文化遺物は研究してあるから、C著を見れば解る、乃至は研究濟の意味で、こゝで多くに觸れられなかつたことゝ考へらるゝ。

(6) E. Frank ; Die Pfahlbaustation von Schussenried, 1876. Stuttgart. 但しこの書は、私は見たことがない。ライナート君（A著、第二七項）による。

(7) ライナート君のC著は、長さ三五糎、巾二五もある大册で、文化遺物の研究が主をなして居る。私共がチユービンゲンに行つた頃は、本書は出來て居らず、タイプライター刷りが、大學に備へてあつたのみで、發行せられて居らなかつた。このタイプライターのが、一九二一年に出來、本書は一九二三年？に出來たものらしい。前二著にはすでに引用してあるのはタイプライター刷を指したのである。

『南獨フエダーゼー行』の舊稿より（大山）

其六　Aichbühl の澤上住居

こゝでも最早や一通りの表土發掘を終つて、床面が露出して居り、時日を經て稍々乾いた爲、床材も少し堅くもろくなつて居る。其發掘當初は、フニア・フニアであるから細心の注意がなくば、原形を保持し得ないとのことである。掘り出された棟と棟との間、一—三米位の中間に、所々不規則に横材が二三乃至四五本列べてあつて、相互間の交通路をなして居る如く見らるゝ。こゝでも亦R・R博士が説明せらるゝ（第四圖）。其一節には、「これ等の部落は、各住居相互間に交通路


Fig. 4.　アイヒビユールに於けるR. R博士の説明（中央白衣）（著者）

て床として、家を建てゝ居る。この方は、前者の様に數多くはないらしい。この澤上住居は一九一九年に發見せられたとある外、私は知らない。文化階梯はやはり新石時代ではあるが、杙上住居が既に新石末と考へられて居る其上に、層位的に重複して居るのであるから、更に新しくなくてはならない。

又考ふ可きことは、ライナート君の云ふが如く、澤上住居が成立するものであるなれば、或は過去に於て、沼澤中の住居跡發見が一概に杙上住居とのみ認められ、杙の有無に就ては深く注意せられなかつたものが、あつたかも知れないと云ふ點であり、一面に於ては、この澤上住居そのものゝ確實性に就て、より研究を行ふ必要もあり、又他の一面では、澤上住居と雖も木造家屋の性質上、支柱が地中に打込まれる必要もあろふから、長短はあるにしても、地中に杙や柱が皆無とも考へられない。それ故、澤上住居としての杙や柱と、杙上住居としてのそれとの區別が明に鑑別せられないと、層位をなさない遺跡では、判別に困むこともあり得る。まして杙の多寡のみで判定する場合に於て、一般的のものであれば、極限的に明白ではあろふが、萬一澤上住居の床面が高くなれば、兩者間の區別は、不可能のことも生じ得る。恰も我が國に於ける竪穴住居と、平地住居との差に等しい。理論的に中間形が考定せらるゝ所は、考慮に入て置く點と考へる。又このリードシアッヘンの住居跡に就て、この見學當時に於ては、遺憾ながら全く氣付かなかつたことであるが、何故こんな所で層位が出來たかの問題である。勿論偶然にはちがいない。これを杙上時代で考へれば、稍々東寄りではあるが、三方の陸地に對し、殆んど中心に近い位置にある（第三圖）。卽ち長いフェーダー湖の東南端に近い、陸岸に最も遠い所に、構築せられたのである。勿論現フェーダー湖の排水路が湖の西北端に近く開口して居る關係から見れば、このリードシアッヘン附近は、比較的早く沖積もしたろふが、後述して居る如き陸橋の存在から見て、杙上當時、これが陸岸であつたとは考へられない。杙の高さが、こゝのはボーデン湖等の杙と比較すれば、可なり低い所はライナート君の認めた所である。して見ると水深も他に比すれば淺かつたとも考定し得る所ではあるが、この杙上時代は兎に角として、これが程經て沖積し、低濕地の頃に、何故に杙上住居の直上に、第二の澤上生活者が其置を撰んだのか。考察を要する點と考へる。此點にはライナート君も何も觸れて居らない。私の存じて居る所では、當時質問者も無かつたと記憶して居る。勿論、杙上住居は、只今までの例では、單獨住居でない。集團であり、前述した如く村（部落）である。從つて面積も廣いから、次の時代に重層すべき蓋然性の、單獨に比し、より大なるものあるは認めもするが、この様な湖畔で、百米や二百米の移動は、大なる問題とも思はれない。まして同一湖狀ではない。澤上時代は、水が減じて居る。從つて重層して居ることが事實であり、最初からこの位置に營まれたものなれば、眞の偶然である。學界としては有り難い賜物と云はねばならない。而して御隣りの三四百米しかないアイヒビュール（Aichbühl）の方では、重層しても居らない。これが通常の樣にも考へらるゝ。それ故この重層遺跡に就ては、更に澤上住居其のものと共に、將來愼重に研究して見たいとは考へて居る。

更に兩等の細部に就ても、相違の明な所はなる。例へば、杙上住

驗した所である。このリードシアツヘンを始めて見た時には、いやな低地の發掘だなあ、と第一感が生れ、後年自分がこれに類した發掘をやらうなどとは、夢にも浮ばなかつた。實の所、眞福寺、是川等を發掘をして見るにつけて、今少し獨逸で研究して置いたなら、と云ふ後悔の方が多い。又こゝからは最近に於て多くの文化遺物が出土してないと見へて、現場には置いてない。掘り出されて居る部分に時々土器の小破片を見るばかり、であり、又出土遺物に就ては、多く話もなかつた。

　こゝを一通り見てから、すぐ隣りにある古く發掘せられて、深さ六―八十糎もあり、澤上住居より一段深く掘られてある杙上住居を見る。これも床面は見られたが、風雨に曝されて居つた故か、多くの感興を催さなかつた。而してすぐに、こゝから西方約三四百米も隔てゝ居る。アイヒビュールに移る。この間には灌木だの小松などが泥炭上層の表土に生へて居つて見通しがつかない。私はこの時、記念と標本とを兼ねて、一握りの泥炭と覺しきものを包んだが、それは泥がついて居つて中が見られなかつた爲、杙の一部が深く粘土中に入つた部分であつて泥炭の部分ではなかつたもの、今日まで持つて居る、こゝの唯一の記念品である。

註二　リードシアツヘンの兩遺跡

　このフエーダー湖畔の諸遺跡に就ては、ライナート君の好著がある。卽ち Das Federseemoor. 1923, Schussenried（以下、A著と假稱）であつて、これは私共が大會に出席した際、大會參加章と共に、チユービンゲン大學の史前學研究室より、寄贈を受けたものであつて、特にこのフエーダーゼーの見學案内として、作出せられたものらしい。從つて當時これを携行して居り、現地で對照しながら見たものである。從つて本湖の諸遺跡に就ては、本書を見れば、よく解る。特に同君に感謝せねばならぬものは、本書が甚だ平易に書かれ、難解の所なく、私共が割合スラスラ讀める點にある。而して發行が前記の如くシツセンリードである所も嬉しい。四六版、八三項の可愛い本である。

　更に讀者の記憶を喚起する爲、杙上住居と澤上住居との違いに就て、最も簡單に述べれば、杙上住居（Pfahlbau）とは、杙を建てゝ其上に住居を營んだ、所謂高殿風の住居を云ふのであつて、最初スヰスのチユーリヒ湖（Züricher See）に發見せられて以來、スヰスを中心とした各湖に發見せられて居る。文化階梯は新石末期と考へらるゝ外、青銅時代のものも存する。又今日南洋等ではこれを行ふて居るものがある。歐洲航路でシンガポールの西口の所に、近くありありと見られもする。このフエーダー湖にあるのは、新石末のものである。

　これに對し、澤上住居（Moorsiedlung）（ライナート君は其著では多く澤上村（Moordorf）と稱し、前者に對しても杙上村（Pfahldorf）と呼ばれて居る。これは住居が一個のみでないから、かく云はれるのであらふ。單數と複數との區別明でない私共は、住居と云ふて置く。）の方は屋下の杙がない。いきなり、濕地上に材木を横にならべ

『南獨フエダーゼー行』の舊稿より（大山）

シッセンクエレは、[5]舊石末のマグダレニアンの遺跡であるが、明瞭な狭義住居跡であるか、未詳である。今に泉があつて、其名を止めて居る。只こゝの特徴視せらるゝものは、其遺物層が凝灰岩（Tuff）に覆はれた下にあり、且つ遺物を包含する地層は、よく保存せられた濃褐色の苔（Moos）層である。然しこゝでは、この特徴も、其後の覆土によつて、充分に見られなかつたのは、遺憾であつた。氣早やの學生連は、小園匙で發掘したけれども、この苔層は見るに至らない。其内、乘車！　とくる。我れ勝ちに列車に飛び乘る。只今の我現狀なら、驚きもしないが、この當時、十餘名の女學生徒が、列車飛び乘りの手際のよいのには、感心もした程である。

(4) こゝで寫した寫眞は、不幸にして失敗に終つた。他の捨子石の例は、前揭小著、前、圖版第八、其三にある。

(5) シュッセンクエレの寫眞もない。一八六七年に O. Faas によつて發表せられた、斷面圖は各書に散見する。前揭小著、前、第六二項、挿第二十八圖にも揭出した。

其五　Riedschachen　杙上住居と澤上住居跡

漸く午前十一時頃、シッセンクエレからこれ亦十分程、一丘陵を橫斷して、灌木の野原にきた。こゝがすでに舊フエーダーゼーの一部であり、列車は泥炭上を走つて居るのだ。只でさへ動搖が大きい輕鐵が、地盤の悪い泥炭上を走るのだから、甚しいのも當り前である。叉野原で停車、飛び下り。すぐ近くに發掘場がある。先着のライナート君は、もう一生懸命だ。前日から來て居つたらしい。定めし遽かに御化粧もしたことであらう。

こゝが舊フエーダー湖であつた時代の杙上住居の上に更に層位的に澤上住居が見らるゝと云ふ、本湖に於ける三遺跡の一つと稱せらるゝ Riedschachen の遺跡である（第三圖）。目下は全く泥炭層中に埋沒して居る。これが泥炭會社によつて泥炭採集により、どんどんと出てくるのである。勿論學術的には、古く一八七六年頃より知られて居つたと云ふことではあるが、[10]必ずしも泥炭會社の利益と一致はしないものがあると考へるが、學術の爲に多大の便宜を與へて居る會社に對しては、後で各學會長によつて感謝せられ、美しいものがあつた。

こゝで一同は集つて、表土から約四〇—六〇糎の深さに、長さ約二〇米、巾約一五米も發掘せられて、そこには上層の澤上住居の最早や泥炭化して居る木材を列べた床面が、ずつと露れて居る所で、R.R. 博士の一般口演とライナート君の發掘說明を受け、てんでに周圍から見る。發掘せられた部分の下には淺く所々に水溜りがあり、泥炭層の發掘には水が付物であり、排水の考慮がなければ、學術發掘が殆んど不可能にまで近いことが、後年私が始めて、我國眞福寺泥炭遺物層發掘に於ても、體

學講座）前。第二編。第二四三項。挿第百四十四圖にある。

(2) 岩手縣氣仙郡の諸洞窟を調査したことは、人類、第四〇の十に八幡氏と共に、報告してある。

(3) ホーレフエルスの洞窟の寫眞も、前掲小著、後、第七項、挿第九圖に揭出してある。又注意を要す可きことは、このホーレフエルスなる地名が、近く二ケ所にある。それ故、こゝの方は Hohlefels bei Schelklingen であり、他のは bei Hütten である。

其四　フエーダーゼーまで

翌十二日、午前六時五十分發のフエーダーゼー、湖畔のブッハウ(Buchau) 行きの輕鐵に、やつと間に合ふ。次の驛からは、一行が乘り込む。一人の遲參者も無い。何所までも軍隊式である。この驛から、もの〻十分も走つたかと思へば、最早や下車、こゝが所謂氷河公園（Gletschergarten) である。(第三圖〇の位置) 公園とは云ふもの〻、百坪足らずの所に、大きな氷河堆石と云ふよりも、所謂捨子石 (Findligsbrock—Erratischer Brock) と云ふのが、ゴロゴロしてゐる。[イ] 吾れ吾れ日本人の目から見れば、平凡な景色ではあるが、それでも、遙か南の彼方に、幽にアルペンの連山が見らるゝ。而してこの棄子石も、あそこから、こゝまで運ばれたものとのことである。こゝでR・R博士や二三の講演がある。其内に特別な御迎い列車がガタ〱やつてくる。これは、フエーダー湖の泥炭會社の好意である。但しこの列車は、同社の泥炭運搬の無蓋車で、きたない。久々故國習志野の陸軍輕鐵を思い浮べる。乘れ！と云ふ聲で我れ勝ちに飛び乘る。ピーでガタガタと走つたかと思ふと、又丘陵端で列車が止まる。皆んなが下るから、一緒に飛び下る。こゝが有名の、Schussenquelle 遺跡であつた。(第三圖×印)

Fig. 3　フエーダー湖附近一覧圖

『南獨フエダーゼー行』の寄稿より（大山）

らざることを申せば、この當時私は、其後の樣に舊石研究に手を染めて居らなかつた。從つて單なる常識と、好奇心を以て眺めたに過ぎず、そこに積極的な研究心を有して居らなかつたことを、告白するものである。當時に於て、ベルリンに歸つて間もなく、私は舊石研究を行はざるを得なくなり、手を出し始めて、直にこの欠陥に直面した。一通り見ては居る。地形も層位も、遺物も一通りは、知つては居つたものゝ、不足が多かつた。再度の調査と、チユービンゲン大學にR.R博士を訪ひ、其教を受け、且つ同大學に藏して居る、この遺跡出土物を、研究させて戴くことの必要を感じたものゝ、意を果し得なかつたことを深く遺憾として居る。

但しR.R博士の共名を發揚した大著、Die Diluviale Vorzeit Deutschland. 1912. に於て、これ等遺跡の細部は、知ることは出來る。又この附近はドイツのウエゼール河谷と稱せらるゝ程、舊石遺跡が、獨逸としては、密在して居る地方であるが、これ等に就ては同博士の大著中に精しく述べられてある。

この兩遺跡はチユービンゲンから、バイエルンとウユルテンブルグの國境にある Ulm 市に通ずる鐵道支線上、Schelklingen と云ふ小驛で下車すれば、驛名と同じ一小部落があり、東北方に向つて、Ach-Tal なる小谷が流れ、この谷中を鐵路と道路とが、ウルムに通じて居る。この谷底の道路を、東北方、卽ちウルムに向いて、行けば約一粁で、道路の左側（西北側）に、路面より約十米も登つた丘陵中腹に、ジルゲンスタインの洞窟がある。[(1)] 從つて一度見知つて置けば、列車からも、容易に見らるゝ。この洞窟でR.R博士の遺跡說明があつた。特に「洞窟發掘に際し、遺跡存否を見るには、先づ入口に近い部分を試掘せよ」と云はれた一言は、私の歸朝後、小金井、長谷部兩博士と氣仙の洞窟調査[(2)]に、用立つたのである。

こゝの見學も大急ぎで、元の道を引返し、對岸の半粁も隔てて居らない、ホーレフエルに向つた。こゝはジルゲンスタインよりも、洞窟の位置は低く、殆んど丘陵脚にある。大きな露岩の直下に開口して居るから、これも發見容易である。[(3)]（第二圖）。こゝまできたが、最早や次の列車まで幾何の時間もない。說明も早々にして、シエルクリンゲン驛に引き返し、次のウルム行きの列車に乘つた。車中からはよく見へる。特にホーレフエルスの方が。

私共はウルムで乘換へて、獨瑞國境のボーデン湖行きの列車に乘つて、間もなく、Schussenried なる一小驛で下車を命ぜられた。一行はこれから輕鐵に乘つて、驛名と同一村落の農家に宿泊するのであるが、私だけは、敬意を表されてか驛前の一軒屋のホテルに宿泊を命ぜられた。私が宿に入る頃、輕鐵の時間連絡が惡いとて、元氣の學生達が、二粁程もある村に、大きな背囊を脊負ふて、學生歌を合唱しながら、並木道を步調よく消へて行つた。

(1) ジルゲンスタインの洞窟寫眞は、小著、歐洲舊石器時代（考古

この近くには、舊石時代終末のマグダレアン文化に屬する、シツセンクエレ (Schussenquelle) の特殊遺跡も存する外、フエーダー湖には、有名な時代未詳な所謂水城 (Wasserburg) まであるから、實地見學には、もつてこいの所である。

只それが單獨旅行であるなれば、南獨とは云へ、田舍の奥で

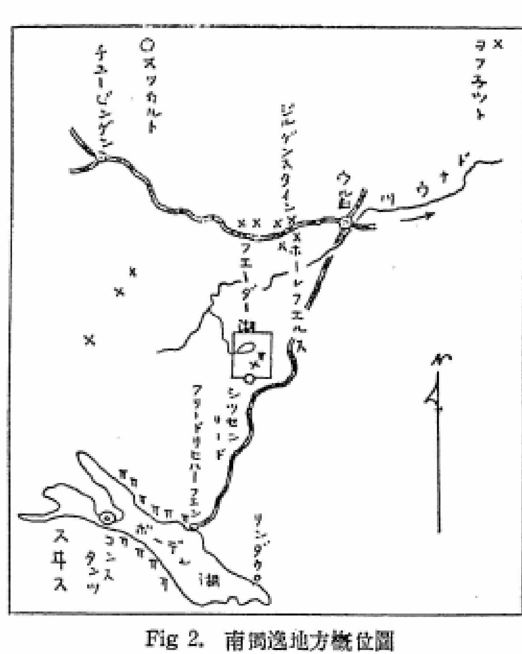


Fig 2. 南獨逸地方概位圖

不便も無駄も多からうが、幸いチユービンゲン大學の主催に基く、見學旅行である以上、總てが好都合で、好んで參加もした次第である。而して、こんな旅行團の生るゝに至つた理由から述べさして載かう。

『南獨フエダーゼー行』の舊稿より　（大山）

今から九年前の一九二三年に私は獨逸に居つた。其年の八月に、南獨 Bayern の Tübingen 大學に於て、獨逸の史前、土俗、人類學の諸學聯合大會が催され、私は師のシユミツト博士 (Hubert Schmidt. 以下シユ博士と略稱) と共に參加し、この大會後に前述した見學旅行が、同大學主催のもとに行はれたものである。而して同大學に於ては、獨逸舊石研究の權威、R.R. シユミツト (R. R. Schmidt) 博士が、この旅行團の指導に任じ、其下に當時まだ助手であつた、新石研究に從事して居る若いライナルト君 (H. Reinerth) が居つて、直接發掘研究中でもあつたのである。

其三　舊石洞窟の一日

八月十一日の朝、チユービンゲンを出發し、新石時代の城跡と稱する一遺跡を見學したが、單なる包含地で、地上には遺物の散列すらもない。早々にして、一行は、汽車──四等車で、シユ博士も、土俗會長のウヰイレ博士も、人類會長のウキルヒヨウ博士も一緒に──有名な舊石時代の洞窟遺跡である、Sirgenstein や Hohlefels に向つた。(第1及び第二圖)

註Ⅰ　Sirgenstein と Hohlefels

この二遺跡は、獨逸の舊石研究には、最も重要でもあり、又有名でもあり、且つ洞窟遺跡としても、典形的でもある。實際舊は

『南獨フエダーゼー行』の舊稿より

大　山　柏

其一　はしがき

この表題に示した舊稿は、全く忘れて居つたのが、つい此頃、文庫の整理をした際、見付け出したもので、この南ドイツのフエーダーゼーに遊んだのは、もう一昔も前の、大正十二年のことであり、この舊稿は大正十四年に或る雜誌の爲に書いたものであつたが、行き違いの爲發表せられずに、手元に歸つて、其儘本箱の中に投げ込んであつたものである。然しこれを今更、その儘、上稿することも出來ないし、さりとて私自身としてはこのまゝ紙屑にしてしまうのも惜しい氣がするので、かく舊稿の文意を傷はない程度に、燒き直して上稿した次第である。從つて肩の張つた研究とは異り、輕い氣分で讀んで戴き度い。

元々この目的とする所は、この地方に遊ばれる方々への、一參考となれば幸であると、云ふに過ぎない。それにしても、私一個に於ては、泥炭發掘などの實地を見學して、今日でこそ、何んとも思つては居らないが、當時は眞面目に何か御土産をと、心掛けて居つた氣持があつたことが、隔世の昔の様にも、遠く思ひ浮ばるゝのである。

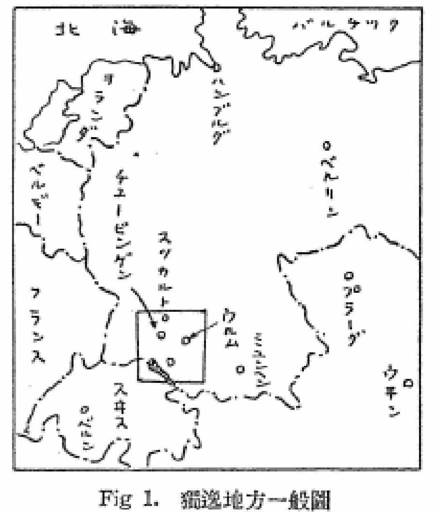


Fig 1.　獨逸地方一般圖

其二　發　端

この Federsee に於ける諸遺跡は、新石文化に屬する所謂、湖上生活（杙上住居—Pfahlbauten）や杙上住居に近緣ある所謂澤上住居 (Moorsiedelng) 跡の存するので有名であり、且つ

遺跡が存することが明かである。同時に諸磯式土器並にそれ以前の繩紋式の遺跡もある。而してこの磨石斧はその型式から前者に屬するものと見做して差支えなからう。さすれば鶴見川沿岸に於て石器を出す彌生式遺跡を一例を加え得たことになる。鶴見川沿岸では太尾（考古學一ノ五・六所載拙著）、下早野（同誌二ノ三拙著、同誌には早野としたるも高橋光藏氏よりの注意によりこゝに訂正する。所示の地圖に於ける地點も誤つてゐる）の二彌生式遺跡に於ても石器が出土した。

之に殿袋を加えた三遺跡土器を比較して見れば大體同種であるが、形態紋樣に於て殿袋の彌生式土器は太尾のそれ程複雜、發達せず、下早野のそれより幾分有繩紋破片に富むことが考へられる。固より下早野及殿袋は發掘した結果ではないから斷定することは出來ないが。兎に角、太尾或は下早野で見なかつた第三型磨石斧を程遠からぬ殿袋の地から得たことは愉快である。資料の増加につれ關東彌生式土器も伴ふ石器の性質が次第に分明して行く。この外同じ事實を諸所で見聞してゐるが、それに就いては追つて報告したいと思ふ。

耳飾を着けた土偶

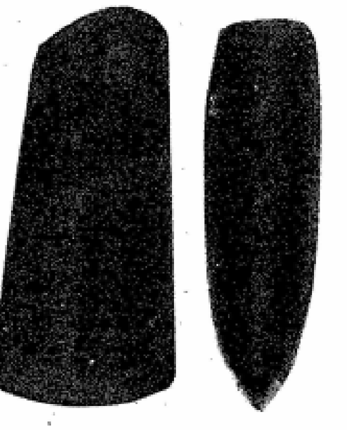
繩紋式石器時代の人間が、身體裝飾として滑車狀耳飾を使用した事は、當時の人骨の耳部より斯る品が往々發見される事によつて確定的なものとなつた。同時代の土偶でこれを着けた狀態を示す物は、金山貝塚出土品で最初にこれを指摘されたのは故坪井博士であつた。其後川村眞一氏は細田貝塚發見の土偶中に棒狀耳飾を附す例を示された。最近僕の手許にある土偶の材料を整理した際不測も陸奥九戸郡輕米發見の土偶にそれらしき物を見出した。此品の圖は人類學雜誌第二八六號の卷頭圖版として掲載され、今は人類學教室に保存されて居る。顏面のみで體部を缺くも、形は大きく中空で頗る精巧な作品である。顏面表情は一種の神祕性を有しネグロの彫刻を聯想させるが一面寫實的な所もある。耳は普通の土偶では形式化し或は全く之を缺くも、此土偶では寫實的に表現され耳朶の下端に、中央に凹みのある半球狀凸起が附けられて居る。これは其の位置、形狀より見て一種の耳飾と推定される。金山發見品は所謂木菟土偶で此式の物は安行式に伴ひ、又それに現された耳飾も同式に多く伴ふ大形有紋の品である。細田の例は粗製なる故よく解らないが此式に伴出する耳飾は中形で裝飾に乏しいものである。輕米の土偶は多分龜ケ岡式土器に伴ふものと思はれる。同式の耳飾は數種あるが、最も特徴的なものは茸狀を呈し無紋丹塗りの小形品である。この土偶の耳飾は恐らくこれか又はこれに近似する形式の物らしく思はれる。（甲野）

武藏國殿袋發見の磨石斧

八幡一郎

一月十日、快晴の日曜なるを幸ひ同志の諸君と鶴見川沿岸の遺跡を踏査した。その節土地の加藤鐵藏氏が所藏する武藏國橘樹郡日吉村駒林下組殿袋出土の一磨石斧を實見した。この磨石斧は私が屢々第三型と呼んだところの型式のもので、長さ一五糎・頭部幅五糎・刄幅七糎・厚さ四糎程あり、斷面は凡そ楕圓形を呈する。頭部は平滑ならず、著しい敲痕を止め、その半ばは他側と不均整に傾斜面を作つてゐる。頭部全面の敲痕並に片側の傾斜は恐らく附柄に關係するのであらう。側緣線は刄に向ふに從つて稍開き氣味である。刄は所謂蛤刄をなし、銳利ではあるが、幾分磨滅してゐる。すべての點から第三型の特徵を具へ、彌生式關係の石斧ならずやとの印象を與へる。

その石斧を發見した邊を表面採集して見ると少からぬ彌生式土器の破片が得られ、之に混じて古式繩紋土器もある。彌生式土器を採集破片から概略述べると次のようである。厚さは極めて薄く、色は黄褐色を呈し、土質至つて緻密である。壺形が寡からずあるらしく、二重口緣のものもあり、又高杯の臺部もある。無紋の破片が多い。內に丹塗が一、二片あつた。有紋破片では刷毛紋あるものに富み、精細な繩紋を附したもの之に次ぐ。而して繩紋は地紋的性質のものより、頸部以上、口唇などに局部的に帶狀に附した類の方が多い。口唇には切目を附したのもある。



殿袋の臺地上には他の地點にも彌生式土器の散布してゐるところがあり、更に接續する箕輪貝塚の附近にも竪穴斷面及彌生式土器の散布が認められるから、この邊一帶の各所に彌生式の

土質は粗い、燒成は不良である。

第四圖下は第二類に屬すべき深鉢形土器にして底部を缺く。口徑二六糎高さ二一糎あり、土質は粗にして砂を混じ、燒成は比較的良好である。色調は黃灰色を呈す。

第四圖上は注口土器にして底部を缺く、黑褐色を呈して稍厚手にして粗である。口徑一〇糎胴幅一三糎。猶注口土器片數片を發見した。

土器底部は圓形底にして安定よく特殊のものを存せぬ。僅に所謂「網代底」六個を算したに過ぎない。把手に就いては見るべきものが殆んどないから省略する。

此等の土器片の出土狀態は前述の如く正規の發掘を行つたのでない所から總てを明にする事は出來ないが、層位によつて土器の異なる樣な事もなく、各層中より出土した。就中貝層及び貝層下、黑土層に接する所に比較的多く發見された。最後に本貝塚は所謂薄手式の土器の遺蹟にして關東に於ける代表的遺蹟でもあり、特に厚手式の紋樣形式の加味せられた土器を若干出土するに至つて、貴重なる遺蹟でもあつた。

(1) 千葉縣香取郡良之村貝塚調査報告　史前學雜誌第一卷第六號
(2) 茨城縣行方郡麻生大宮台貝塚調査報告　史前學雜誌第三卷第四號拙稿
(3) 甲野勇氏茨城縣小文間貝塚調査報告　史前學雜誌第一卷第一號
(4) 甲野勇氏著　埼玉縣柏崎村眞福寺貝塚調査報告
(5) 八幡一郎氏下總國富塚遺蹟　人類學雜誌第四十七卷第一號

ネアンデルタールの人骨發見回顧

近着、ウオツヘ誌に、本年は、當初に、カール・フールロットにより、一八五六年に發見せられてから、七十五年を經過するとて、其回顧が、イーフキーピクによつて、簡單に報ぜられ、この紀念すべき人骨と共にミユンヘンのモリソン教授のネアンデルタール人の復原圖と共發見地であるネアンデルタールの或る處に建てられて居るネアンデルタール人が棍棒をもつて居る立像の圖と共に揭出せられて居る。モリソンの復原像は立派であるが發見地の立像は、誰れが復原したものやら、學術的のものとは、受け取り惡い。日本などの田舍によく見る、御地像樣と云ふた樣な古拙味が見られる。(Die. Woche ; Ht. 39, 1931)（大山）

を呈するものが多い。甲野氏の眞福寺貝塚(7)第二類土器並に八幡氏の下總富塚遺跡(8)の第一類土器に全く相當する土器である。

第五類（第二圖一―二）

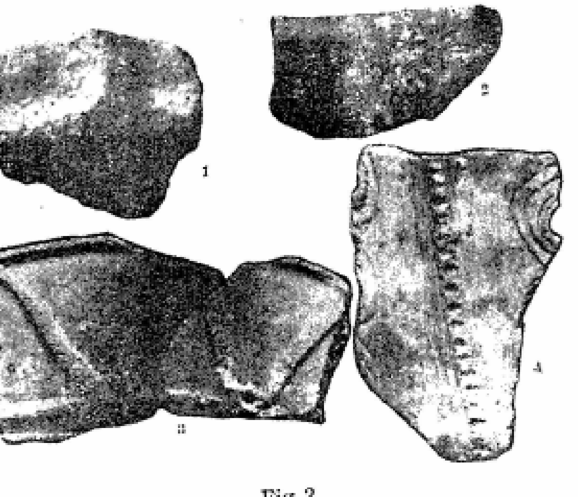


Fig 2.

所謂厚手式土器の特徴を持った土器にして、粗雜な波線紋並びに雄勁なる隆起線紋による渦卷紋を有する。然して此種の土器片は僅に三個を出土したのみであり而も小破片であるが、所謂薄手式土器が主體を占める中に混在することは注意を要する。

以上の如く土器片を大別する事が出來るが、猶此他繩紋のみの粗雜な椀形土器破片や極く薄手の小形土器片を發見した。又第二圖4の土器片の如きは、圓を描ける所に貫通孔の跡が四個歴然と認められ土器の斷面形態から見ても自分には全く不可解な土器片である。



Fig 3.

又第二圖3は口頸部に於ける所謂內面に紋樣を附せるもので繩紋を一部殘した半肉彫のかなり巧なものもある。第三圖は前記の分類の何れにも屬しない土器片である、器形から見れば所謂薄手のタイプを持つが、紋樣は薄手式の持つ樣式の中に厚手式の渦卷紋の流れた所謂「雄勁なる隆起線紋」に似たものが走つてゐるのは就中興味を感ぜしめる。

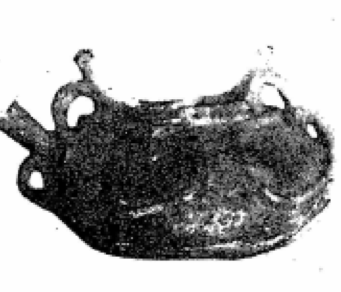


Fig 4.

下總良文村貝C系及び常陸麻生貝塚第三類土器に相當する深鉢形の土器に屬する破片が多い。口邊部は土器の大いさによつて多少異なるも大略四箇又は五箇の緩かな波狀隆起あり、此隆起部に貫通孔があつて把手狀をなすものが多い。而して繩紋は

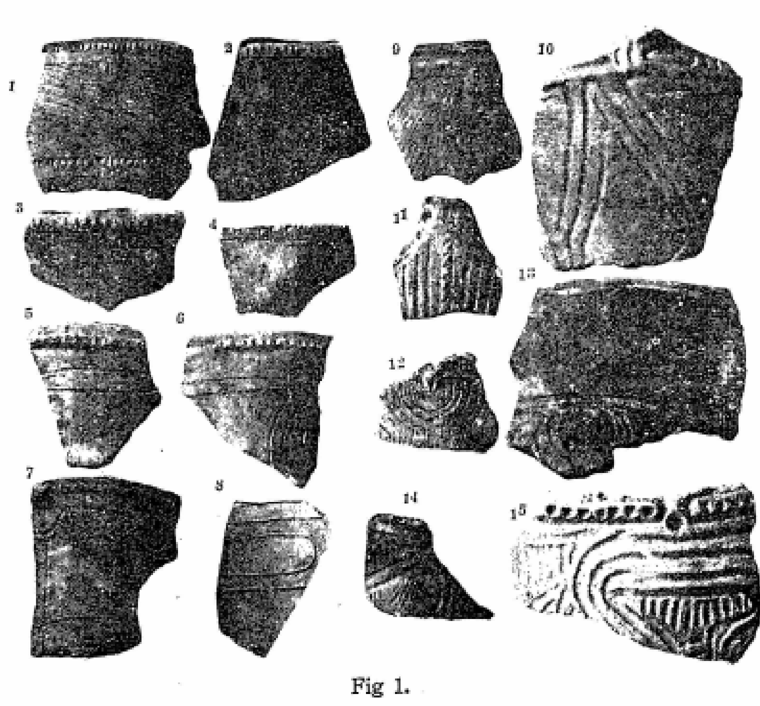


Fig 1.

土器全面に見られ、紋樣は複雜な曲線及び直線の彫刻線紋によつて縱に構成せられてゐる。此種の土器は土質粗にして砂を混じ燒成は比較的不良である。出土量は第一類に次いで多く本遺跡の主位を占めてゐる。

第三類（第一圖五—八）

口頸部胴部等から觀察を行へば、形態は第二類と同じく深鉢形をなす。土器片は比較的薄く且つ黒色を呈し、土質燒成共に良く頗る堅い感のする土器である。紋樣は口頸部に近く連續的小刻ある紐狀隆起線を廻らし而して８字狀をなした小隆起を附してゐる。口頸部から胴部にかけて、直線曲線及び繩紋擦消し等の手法を用ゐた精巧な紋樣帶によつて裝飾せられてゐる。此種の土器は、下總良文村貝塚及び同國小文間村貝塚(3)のａ系ｂ類に相當し、今回の發掘に於ては比較的小量であつた。

第四類（第一圖一—四）

胴體部に膨らみを持ち口頸部に至るに從つて稍狹ばまつた水甕樣の器形を推想せしめるものが多い。裝飾は主として口頸部に發達し陵起線を廻らし共の上に連續的に半月狀壓痕を施した帶狀線によつてゐる。而して繩紋は尠く櫛目紋が特に多く使用せられてゐる。土質は稍粗であるが燒成は比較的よく、黄灰色

横濱市三澤貝塚の土器に就いて

池上啓介

昭和四年六月本研究所諸員並に村田重義、石野瑛氏等と共に表記の貝塚の發掘を行つた。貝塚は横濱市青木町三澤にあり、同地に所在する横濱第二中學校東方約百米の地點にある。遺跡附近は所謂相模丘陵が東京灣方面に於て鶴見川及び帷子川の兩溪谷によつて、最も複雜な地形を呈して居る。貝塚は北側及び南側共溪谷に狭まれて細長く延びた標高約三十米の丘陵上に在る。發掘を行つた當時該貝塚は住宅地經營の爲め大規模の工事が行はれ、貝殼の存在せし部分は大半失はれてゐた。從つて正規の發掘を行ふ餘地もない所から貝殼の殘存せる一部分を各個に僅かに試掘壙を設けたに過ぎなかつた。ドクトル・マンロー氏以來歷史ある貝塚の消滅せんとするに際して、お名殘り發掘とでも云ふべきものであつた。今この當時に獲た土器片に就いて、簡略な記述を試みた次第である。發見せる土器片は約千三百點の多數に達せるが完全に近きものは僅に二個を算ふるのみで他は何れも碎破せる殘片に屬する。即ち口頸部一一二、胴部一一二〇、底部六二、把手七である。此等各部分破片の紋様及び形態を主として見るなら、大體圖示せる如く五種類に大別せられる。

第一類　(第一圖一—一五)

此種の土器片は口の廣い壺形土器を想像せしめるものが多い。口頸部が上方に向つて斜に開き、緩かな肩部を有するのが特徴である。而して口頸部は繩紋を缺き又特別な裝飾紋も少く僅に口唇部に深く太き彫刻線を廻らすことに依つて意匠せられてゐる。紋様は頸部から胴部にかけて同心圓紋を基調とする曲線紋の發達を見る。此種の土器片は最も多く且つ大形破片が多い。千葉縣良文村貝塚出土土器のＣ系ａ類、(1) 土器に相當する。他に常陸椎塚・武藏千鳥久保・同高田等の諸貝塚にも此種の出土例が多い。

第二類　(第一圖九—一一)

奈良縣史蹟名勝天然記念物調査會第拾回報告　昭和三年
(4) 森本六爾　大和に於ける史前の遺跡　考古學雜誌　第一四卷第一二號　大正一二年
(5) 鞍手古月の貝塚　考古學雜誌　第一三卷　第一一號　大正一一年
(6) 下浦甃　鞍手古月の貝塚と附近の石器時代遺物包含層とに就て　考古學雜誌　第一四卷　第六號　大正一二年

附記　稿終つて後、京城帝國大學教授藤田良策氏より來簡あり、それによれば同氏は遠賀川沿岸に於て櫛目紋系土器を出す遺跡を發見せられたとの事である。今來稀に聞く重要な發見である。その地名、遺跡の狀態、遺物の内容等に就ての詳細は、簡單なる私信の事とて明がでない。何れ藤田氏によつて報告されるであらう。最近の經驗によれば、朝鮮風の所謂櫛目紋系土器の分布は以外に南方にまで及んで居たらしい。（北九州の例は全く知らなかつたが）。櫛目紋系土器は南鮮にまで分布して居るから、同地方と地理的に比較的近接したこの地方にまでその系統のものが存在して居ても敢て不合理な事はないであらう。古記錄に現れた「塢舸水門」を以て現在の遠賀川河口なる蘆屋附近に比定す可きや否やに就ては、斯る方面の事情にうとい僕には全く解らない。然し蘆屋が後世相等水路の要津とされて居た事は事實である。斯うした事から見ると遠い過去に於ても此地方が水上交通の要點とされて居たらしく考へられる。卽ち博多附近が昔時の海外交通の中心であつたのに對して、此の附近も亦その一要地を爲したものではないであらうか。所謂櫛目紋系土器の存在も此間の消息を物語るものゝ様に思はれる。

蛤　殻　圃

下木月村の枝村に蛤殻圃と云所あり。其地の圃の中、一段許に地底をほれば蛤殻（カイガラ）多く出る故に所の名とす。上にはおほくあらはれ見えず、少は顯る。土民是をほりて燒て蛤粉とし、白土に用ゆ。又此郡古門村の枝邑、道中と云所にも蛤殻池とてあり。小山の下なる淺き沼あり。蛤がら甚多し。遠賀郡楠橋村の境内にも、蛤殼はたけあり。かやうの所他國にもあり。山城國綴喜郡田原鄉の内、湯谷村に鹽の谷と云所に古き蛤多し是海邊には十二三里あるところ也。（筑前國續風土記、卷三十三より）

この木月村蛤殼圃は現在の古月村木月貝塚に當るものらしく、此地は既に寺石、下浦其他の諸氏によつて研究され其の性質も明かになつた事は既述の如くであるが、道中の蛤殼池と云ふ貝殼の出土地に就て其後に調査された事はなく、從つてそれが將して貝塚か、或ひは若い時代の介化石層に屬するものかと云ふ點に就て未だ明かにされて居ない。又、山城國鄉の内、鹽谷より出ると云ふ「古き蛤」は恐らく化石貝類であらう。（I・K）

この楠橋貝塚と其の對岸に位する鞍手郡古月村木月貝塚の二ケ所である。木月貝塚は不幸にして見學する事を得なかつたが、淡水産貝類を主體とし[5]繩紋式及び彌生式土器[6]を出す興味ある遺跡であると云ふ。即ち貝類より見れば此の兩貝塚は共に淡水産貝類を主體とし、これに多少の鹹水産貝塚を混へた所謂主淡貝塚である。斯くの如き性質を有する兩貝塚の存在より推定すれば、嘗て此の附近一帶が入江狀を呈し舊遠賀川河口が此の邊に開口し、多量の淡水を注入しつゝあつた時代に相前後して此等の貝塚が築積せられた事を窺ふ事が出來る。

土器は楠橋貝塚に於ては、前述の如く彌生式要素を多分に有するも、尙多少これと相容れざる特徴を合せ持つ樣に思はれる。石器は以前寺石氏の採集された磨製石斧、石鏃及び近年某氏の見出された所謂「石の庖丁」等の數例を擧げる事が出來るが、筆者は何れもその實物に接せず、僅かに寺石氏報告中に掲載された磨製石斧の圖（第三圖）を見たのみである。同圖に據つて推測すれば、此の石斧は粗製らしい偏平のもので、刄部は所謂「片刄」を爲す物の樣である。片刄形式の石斧は日本各地の彌生式遺跡から同種土器に伴出して居る。たゞ寺石氏の採集品は圖の明瞭でない爲めか、典型的の彌生式系片刄石斧とは多少形式を異にして居る樣にも見える。然し合田氏の所謂「石の庖丁」が眞實の石庖丁であつたならこれは彌生式土器に伴ふ標式的石器である。斯く石器にあつては有力なる資料に乏しきも、强ひて想像すれば多少彌生式的傾向が認められない事も無い。

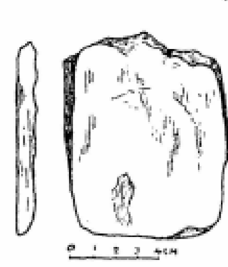


Fig 3.　楠橋貝塚發見磨製石斧（寺石氏に據る）

これを要するに、本貝塚出土の土器の大部分は所謂彌生式に屬し、石器に於ても朧氣ながらこの傾向が窺はれる樣に思はれる。たゞ少量ながら彌生式的でないと考へられる疑問の土器片が存在する事を特に附記して置き度い。而して將來の大規模なる發掘調査に依つて、筆者が彌生式的でないと推定した形式を持つ土器の完全又はそれに近い程度の品が發見され、或ひは土器式別に對しより有力なる標式的遺品が見出された曉には、現在の如き小破片に基く判定の可否も自ら明かになるに相違ない。そして更に附近諸遺跡との比較研究によつて本遺跡の文化的位置が決定される日を心から期待するものである。

註

(1) 貝原篤信　筑前國續風土記　寶永六年（益軒全集　卷之四　明治四三年）

(2) 寺石正路　九州の貝塚　東京人類學會雜誌　第五卷　第五號　明治二三年

(3) 吉田宇太郎　高市郡新澤村大字一石器時代遺跡調査　五二頁

層中より「石の庖丁」を見出されたとの事であるが、その形態に就ては明確な記憶なく、從つてこの所謂「石の庖丁」が將して眞の石庖丁か或ひは又單なる石の利器かは全く知る由もない。

V

以上で楠橋貝塚並びに同地出土の遺物に關する大體の記述を終つた。此の貝塚は從來少數の石器類を出して居るが、金屬器の發見に就ては未だこれを聞知しない。

土器類の大多數は其の土質、燒成、色調等或ひは器面に刷毛目を有し、又有孔底のある事等に於て所謂「彌生式土器」の特徵を具備して居る。然るに少數の異例、即ち第一圖１・２・４に示すものは前者と趣を異にし、口緣部形態或ひは施紋位置等の諸點で、稍彌生式土器的ではない樣な所が看取される。同圖１に示される隆起平行線紋に類似する裝飾は、大和新澤(3)、同唐古(4)出土の彌生式土器にも認められるが、斯る線紋は紋樣としては極めて普遍的なものである。それ故斯樣な紋樣分子を抽出比較する事に依つて直ちに土器の式別に役立たせる事は不可能で、寧ろ如何なる形式の土器の何の部位にこれが施されて居るかと云ふ點が式別の規準と爲る場合が多い。前記大和出土の土器の器形は主として壺形で、その施紋位置は口頸部、胴部等であるが、第一圖１のものは口頸部内側の彎曲度より測定すれば、口徑一八糎内外で其の側面形態よりして一種の鉢形土器の口邊と推定され、施紋位置もその上方に限られて居る觀がある。同圖４は直徑二二糎内外、３は直徑二一糎内外、何れも小破片なる爲め多少の正確味を缺くが恐く兩者共に一種の波狀緣を形成するものと認められる。若し此の推定にして眞ならば、此等の土器片は筆者の現在懷く彌生式土器の概念と一致しない。何故なら筆者の寡聞なる未だ彌生式土器に波狀緣ある事を聞知しない爲めである。波狀緣は繩紋式土器に在つては最も普通である。然しながら筆者は上記の理由によつて此の數例の土器を直ちに繩紋式土器と考へるのではない。此等の土器と雖も其の土質、色調燒成等に於ては一般彌生式土器と軌を一にして居る。寺石氏は嘗てその報告中に本貝塚出土の土器を繩紋土器として居られるが、氏の採集された土器は「飾紋の如きは磨滅して見るを得ず色は總て灰色又は褐色なり」と記された樣に紋樣は皆不明瞭なもの丶みで、繩紋式土器の特徵を明確に具有するものは無かつたらしい。然し當時は未だ彌生式土器の提唱なく、石器時代の土器即ち繩紋土器と云つた樣な思潮が漂つて居た爲め、氏も亦簡單にこれを繩紋土器と記されたのではないかと思ふ。

VI

遠賀川沿岸に存在する貝塚として現在知られて居るものは、

土器は概して薄手で地色は暗褐色、灰黒色、黄褐色、等を呈し土質は緻密なものと稍粗大で長石末を混へたものとがあり、その表面は比較的粗雑なものが多く、篦磨きを施して器面の光澤

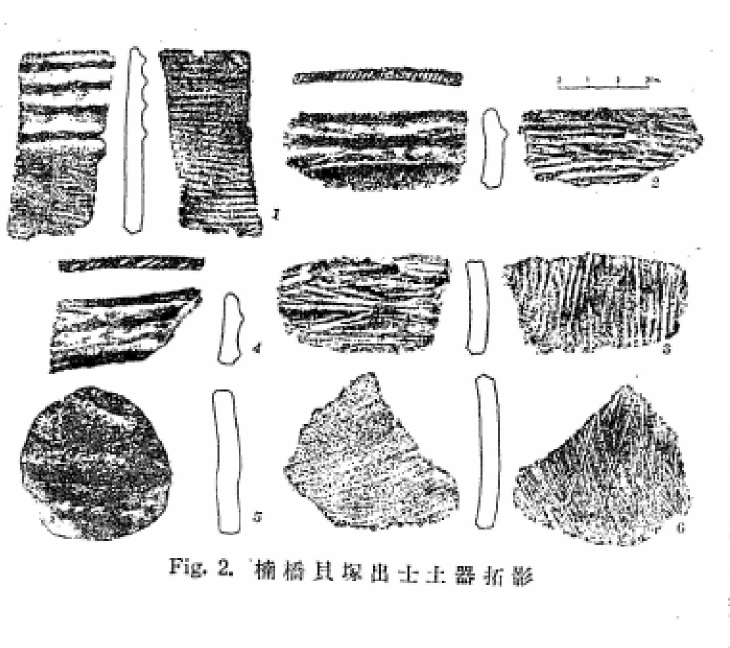


Fig. 2. 楠橋貝塚出土土器拓影

をつけ、或は丹を以て塗彩した例は未だ發見されて居ない。

口頸部破片の中には、反りを持たないものと（第二圖1）僅かに内反するもの（第二圖2）とがあり、口縁は明かに平縁に屬する例（第一圖1・2 第二圖1・2拓影）と波狀縁と推定される物（第一圖3・4 第二圖4拓影）とがある。口頸部の裝飾は外側に一條乃至數條の細い隆起線を附加し（第一圖1・2・4、第二圖1・2・4）口脣上に斜めの小刻（第二圖4）及びU字形の刻み（第二圖3）或ひは繭の如きものを並べて押し附けたと思はれる樣な壓痕等を附した例（第二圖2）が見られる。胴部と覺しき破片の中に、第二圖3に示す如き條痕を有するもの最も多く、無紋これに繼ぎ、比較的細かい刷毛目（第二圖6）を有するものも亦多少ある。斯る刷毛目又は條痕は表裏二面共に施された例もあるが、表面のみ或ひは裏面のみに限つてつけられた場合もある。紋樣を有する胴部破片としては第一圖の5如き沈線紋が一例見出されて居る。

又、土器の或物はその製作に當つて「輪積み」の手法を採用して居た事は第一圖6の如き破片より想像出來る。

底部は全部平底で底面と胴下部との接着部のクビレは著しくなく其中の一例は底面部に孔が穿たれて居る。

此の他、土器破片の周圍を缺き取つて、圓盤狀にした物が一個出土して居る。（第二圖5）。

石器類は今回の調査の際には發見しなかつたが、寺石氏は石鏃・磨製石斧（第三圖）、未製石器等を採集され、又合田氏の談に據れば數年以前にこの貝塚を發掘された方（姓名未詳）は、貝

に達せず、それ以下は出水量甚だしき爲め作業を中止するの止むなきに至つた。貝層上部は相當泥土を混へて居るから、表土との限界は明瞭でなく、表面より深さ五〇—六〇糎位までは後世の攪亂を受けた形跡があるが、それ以下は全くの處女地で、泥土を混へる量も下部に至るに從つて減少して行く傾向が認められる。

Ｄ地點の試掘の結果は表土一二糎の下に、比較的土を混へざる厚さ約一五糎の薄い貝層があり、其の下底は直ちに赤褐色の土層に達して居る。

貝層を組成する貝類は次の如きものである。

(1) Corbicula japonica *Prime.* adundant.
(2) Ostrea gigas *Thunberg.* scarce.
(3) Anadara subcrenata *Lischke* scarce.
(4) Meretrix meretrix *Linné.* scarce.
(5) Thiara libertina *Gould* scarce.
(6) Vipiparus *sp.* rare.

黑點を附したものは淡水産貝類

卽ち本貝塚の主體を爲す貝はヤマトシヾミであつて、其の殆んど全部は小形乃至中形のものである。鹹水産貝類は前者に比し量に於て甚だ少く、又カワニナ・タニシの如き純淡水産貝類も多少發見されて居るから、本貝塚はこれを「淡水産貝類を主體とする貝塚」と見て差支へないであらう。

獸骨としては僅かに猪?の尺骨片、脊椎骨等を數片見出し得たのみである。又貝層中より砂岩質拳大の礫、黑曜石片等を數個發掘したが何れも加工の跡が認められないものゝみであつた。土器破片は貝層上下を通じて包含されて居るが何れも少破片許りでその量も亦多くない。

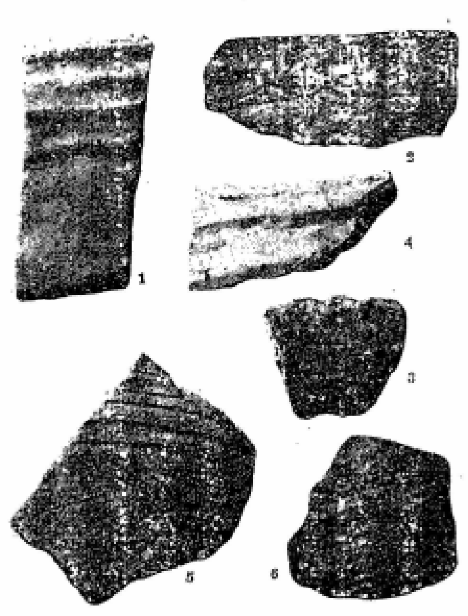


Fig. 1. 楠橋貝塚出土の土器 (約½)

IV

出土した土器の破片は總計五十餘個、發掘地の體積に對しこの發見數は餘りにも少い。しかも此等は皆少破片で全形を明かに知り得るものは全くない。たゞ口頸部及び胴部破片の數例より推定すれば、鉢形、壺形等を爲すものがある樣に思はれる。

II

貝塚の所在地は洪積層?に屬する低丘阜で、遠賀川本流とその一支流との間の沖積地中に挾在し、現水田面との比高は目測する所四米位ある。地表に貝塚の露出して居るのは、此の丘の南端に當る合田近氏の宅地(A)、と其の西方に連る桑畑(B)、同氏宅地西南方の水田中(C)、桑畑(B)西北方約五〇米の所(D)、及び合田氏宅北側の畑地(E)等である。

以上の各地點中A—Cは相連續した同一貝層に屬するらしく、その露出面は大略不整楕圓形を爲し、東西に長く(三五米位)南北に狹い(一二・三米位)。此部に於て土地は南方水田に向つて緩く傾斜して居るが、更に又人工的の段階を設け、所謂「段畑」の如くに作られ其の水田に接する部分の如きも〇・五米乃至一米の高さの段を爲し、貝層の一部は此處にその斷面を現して居る。斯樣な現在の地形より推測すれば、此の斜面は過去に於て更に南方までなだらかな傾斜を以て延長して居たのであらうが、後世の土木工事の結果現在の如き狀態を呈するに至つたと考へられる。それ故今水田中に露出する貝殼(C)は嘗て(A)(B)と連續して居たのであらうが、此間の土壤を削り取つて水田とした爲め現在では前者との間の明かな連結を失つたものと見る可きであらう。

Dは表面に貝殼の散布する面積狹く(二米平方位)EはDに比して面積及び貝殼散布量に於て勝るもA—Cに比較すれば遙に少規模である。

斯の如く此の附近の地形は後世の人爲的變化を受けて居るが筑前國續風土記に「近年園に爲す」と云ひ、或ひは「木屋瀨村の里人多く取て燒て蛤殼(粉?)とす」とある事より見れば、此地が開墾され貝塚の貝殼が村人によつて般出され始めたのは恐らく寶永の初め頃であつたらう。

III

發掘は前記諸地點に就いて一々これを行ふ事を得ず、僅かにAに於て二米平方を、Dに於て貝層の有無を驗する程度の試掘を爲したのみである。

Aに於ける發掘地は合田氏住宅の南方斜面が高さ約五十糎の段を爲した部分—此の斷面に貝層が露出して居る—より二米の幅を以て北方、即ち斜面上方に向つて長さ二米餘の地域を發掘した。此處は約三〇糎内外の黒褐色、粘着性に富む表土を以て覆はれる。此層中には中量の貝殼片を混へて居るが、土器の破片は極めて稀で、而かも微細なる斷片のみであつた。貝層は發掘地の南端に於て最も深く、地表より一・三米の深さの所で湧水を見、一・五五米(表面より一・八五米)に至るも未だ其の底

貝塚鎖談 二

甲野勇

筑前國遠賀郡香月村楠橋貝塚

I

楠橋貝塚は九州鑛業會社線、木屋瀬驛の西方香月(カツキ)村楠橋(クスバシ)小字赤溝(アカミゾ)俚稱貝殼畑にある。貝原篤信の筑前國續風土記、(1)遠賀郡の條に「蛤殼圃(カイガラバタケ)」として「楠橋村の西南に蛤殼(カイガラ)塚とて、方一町ばかりなるひきゝ岡あり。滿地皆蛤殼なり。土の底ほど蛤殼益多し。近年は圃になしける故土交れり。何故こゝに集ると云事をしらず。鞍手郡木屋瀬村の里人多く取て燒て蛤殼と(粉?)す。年を經て多くとりなば後は漸少なく成ぬべけれども、只今見る處の奇異をしるすのみ。」とあるが、この蛤殼圃が現在の楠橋赤溝貝塚に相當するものである事は、その位置地勢並びに地名等より推測して全く疑ふ餘地はない。從つて該記事は簡單ではあるが過去に於ける本貝塚の狀態を知る上に於て參考とす可き點が多い。たゞ貝原氏はこの貝殼畑の成因に就て古人にあり勝ちの無稽の臆説を述ぶる事なく「何故こゝに集る事を知らず」と書かれて居るのは、考古學黎明期以前の當時としては全く無理のない所であり「只今見る所の奇異をしるすのみ」として現地の狀態を簡潔に記載された點は敬服に價する。

其後明治廿二年頃寺石正路氏は本地を調査し、これが石器時代の貝塚である事を確認せられ、其の略報は當時の東京人類學會雜誌(1)に掲載されて居る。

筆者は此等の報告を賴りに昨年の七月廿九日卅日の二日間に亙つてこの貝塚を調査する事を得たが、廿九日は時間の關係上遺跡地を概察するに止め、翌卅日は人夫二名を使つて終日發掘調査を爲す事が出來た。以下簡單に發掘の經過並びに出土せる遺物に就て略述しよう。只この地は下關要塞地帶内に存在するので精密なる地圖を缺き、寫眞の撮影、實測を行ふ事が困難なる爲め、調査上の不備な點が多いのは筆者の遺憾とする所である。

績による調査が必要である。こゝに使ひ古された少數の材料によつて、更めて野澤の土器の特異性を指摘するのは、甚だ遺憾であるが、又、徒なことではないと思う。

以上の考按は數年前に得たものであつて、爾來方々で放送して歩いた。一昨年本誌に投稿する心算で原稿を書き、そのまゝ藏ひて置いた。今甲野氏から急に原稿を求められたので、舊稿に少しばかりの字句の修正を行ひ、八幡氏の附説に關する批判の項を削除して間に合はせることにした。猶附記すべきことは八幡氏が野澤の土器の底部に平織の布の壓痕を發見されたことである。（人類學雜誌昨年十月頃）これは彌生式のあるものに見られるが、陸前の枡形式には未だ檢出されない。又氏は敢然野澤の土器を彌生式と斷定して居られる。これに關して申し述ぶべきことが色々あるが、まあ止めて置いた方が宜からう。

キユービエーがラマークか

今から丁度百年程前のことではある。其頃ラマークの稱へた進化説は、醋所にキエービユーの地變説によつて論破せられて、ラマークは悲慘なる敗者であつた。其基く所は、當時一般の社會狀態、學術進運の有り樣等が、未だラマークの卓見を納れきれないに發するものがあつたにせよ、直接論爭の勝敗の多くが、進化説なる大局に立つて、全般の狀態を眺めて居るラマークに對し、個々の動物に精通して居る、キユービエーの個々の件々を舉げての突擊に破れたのである。個々の精通もよい。決して否むことでなく、遵すべきである。只個々の精通が個々に執はれないことが最も大切であり、執はれた結果が、恐らくはキユービエーの轍を踏むに過ぎないと考へらるゝ。昔から鹿を追ふの獵師と云ふて居るのも、此邊の消息を語つて居るのではあるまいか。これは獨り進化説に限つた現象でもなささうで私自身に一生懸命に反省したいと考へて居る。

（昭・七・二・二〇）（大山）

心な吟味に俟つべきである。野澤式の縄紋式土器系列に於ける位置は層位的には證明されない。この式には磨消縄紋が行されて居るから、その盛行する期間に位置を占むるであらう。堀之内式から安行式までの諸型式は間隙型式の挿入を許さぬ程連續的發達が認められるから、野澤式はこの期間以外に屬するであらう。以前に占めることは加曾利E、堀之内間の系統的發達から見て許されない。卽ち安行式以後に位置すると見ねばならなくなる。この時に當つて第二の土器が陸前の桝形式に多少近似して居ることは暗示に富むで居る。陸前の桝形式は大洞A′式土器を含む或る種の型式の上層に認められ、(稲浦島貝塚) 明に龜ヶ岡式以後に屬するものである。彌生式的特徴もあり、龜ヶ岡式からの傳統も見受けられる。又土器底部に稻の壓痕のあつた例もある。野澤式はこの型式に並行して上野方面に存して居つたものと想像されないでもない。この地方には安行式の分布がある。この式は龜ヶ岡式前半に並行するものと思はれるから、陸前の桝形式は龜ヶ岡式以後である如く、野澤式も亦安行式以後のものらしく思はれる。しかし安行式と野澤式との間に型式の間隙あるか否かは未だ不明である。

野澤式の分布は不明である。沼田博士は磐城棚倉の土器がこれに類似し、しかも管玉も伴出したことに注意されて居る。この遺跡の土器の文樣は大野氏の文樣の原三十圖上、三十八圖下に紹介され、そしてこの文樣を有する土器は出所不明人類學敎室藏として原始工藝中に紹介されて居る。この二例は特異なものではあるが圖示された限り野澤のものとは近似してる點は少い。八幡氏は前述の如く信州南佐久郡町田の土器これと似てると云はれて居るが、この遺跡の土器が野澤式に同定し得るか否かは未定である。上文の如く桝形式中と類似の例があるが、他のものは互に似て居ない。

野澤式の器形が彌生式的であることは古くから認められて居る。しかし彌生町出土の彌生式土器とは文樣に於いて非常に相異して居る。かくの如き狹義の彌生式は關東地方では主として相摸・武藏に於いて見られ、甚だ廣大な分布を持つては居ないやうである。上野・下野・常陸等、關東北部には東北地方と同樣紹介された例が無い。そして上野・下野方面には彌生式的な形態を示し、傍ら縄紋を有する土器が知られて居る。これを含む土器型式は未だ確定して居ない。野澤式との關係も全く不明である。狹義の彌生式と略々同時代に、しかもその北方に隣り合つて分布して居た型式は勿論充分な調査を經て確定されるであらうが、この邊にその緒があるやうに思ふ。

關東地方に於いて安全に縄紋式と云ひ得る末期の型式は安行式である。この式の分布範圍に於ける、それ以後の、そして彌生式を含む土器諸型式に關しては、猶ほ多くの材料と正規の手

貳)。頸と體上半(肩)とは區別し兼ねる程よく移行して居る。頸體に亙つて細い縄紋が加へられ、その上に纖細な線による文様が加へられる。縄紋の磨消しは無いらしい。文様は頸部のものと體部のものとに二分される。前者は並行線化されたもので、一部の人々が工字紋と呼ぶかも知れない文様である。體部の文様には下限に四條の溝があつて、頸部文様の下限との間の縄紋面に二重に輪廓された半月狀の波文が器周に數個加へられ、その間隔の上方に下向きのV字狀の波紋が附加されて居る。類例は桝形式にも、關東の他型式にも認められない。

四、筒形の特異な土器（挿圖四）

原始文様集第三輯二十五圖、中谷氏注口土器論文九十八頁第三十圖、體は大體に於いて筒狀、口部は少しく澎隆する。全外面に磨消縄紋の手法による文様が加へられて居る。沈線は直線的で縦線と横線との連續からなつて居る。類例は信濃南佐久郡櫻井村町田から出て居る。その一例（八幡氏報告圖版第一6.原始工藝百十五圖8）は筒形よりむしろ瓢形で體外面には矢張り直線的な磨消縄紋が加へられて居る。第二の例（八幡氏報告挿圖第十四圖1）は口部澎隆し野澤の例に近似する。體上半に磨消縄紋、下半に縄紋がある。磨消縄紋の下限には溝二條、上限には一條ある。後者と口緣との間には縄紋が殘されて居る。

中谷氏はこの土器を擧げて厚手式工字文として居る。しかし所謂厚手式なる大別には磨消縄紋が全くない型式が多く、終末に近い細別型式に於いて漸くそれが始まるのである。そしてこの初期の磨消縄紋の文様は野澤の土器のものとは丸で異つて居る。私には野澤の例の如きものを厚手式とは認め難い。これは口部の澎隆する形態が偶々厚手式のものと近似することからの誤解であらう。八幡氏は南佐久郡町田の土器の特異性を認め、類品が下野國に存することに注意し、更に堀之內式と同傾向を示して、特異に發達したものと看做して居られる。又先史時代前期（縄紋式）の終末に於いて奥羽地方系統の土器、打出紋土器等と共に相前後して生じた形式とも考へられて居る。このうち打出文あるものは古式土器の嫌疑のあるものである。

予は氏と共に町田のやうな土器が縄紋式末期に位するものとは認めるが、この式が堀之內式から特異な即ち一地方に於いて多系的な發達を遂げたものであるとは考へない。

以上四例の土器は夫々形態裝飾に於いて異つて居るが、今まで詳細の明にされた關東地方の土器型式の孰れにも屬しないものである。かくして野澤の土器は未だ注意されなかつた型式の存在を示すものである。これらの土器が果して一型式に屬するか、それ以上の細別型式に分屬するか、又他の如何なる土器と共に型式を形成するかに關しては他日の發掘調査とその結果の細

下野河内郡國本村野澤の土器（山内）

1.—4. 下野野澤　5. 陸前七郷村藤井　6. 7. 陸前桝形囲

十一圖版に寫眞が掲げられて居る。(挿圖一) 壺形土器の口頸部に顔面が表現されて居る。顔面は大きい。眼及び口は粘土の隆起によつて表はされて居る。この點は安行式に伴ふ土偶の顔面に若干の類似がある。頬には凹點が多數加へられて居る。

沼田氏によれば類品が下總岩井から出て居るとのことであるが、私は未だその實物を參照する機會を得ない。繩紋式土器に於ける顔面附土器は、(A)把手又は口縁の突起及びこれを含んで附近に加へられる場合と、(B)その他の場合とに分けられる。Aの場合は(1)諸磯式(獸面？　相摸諸磯・常陸浮島、其他上野・信濃諏訪等に分布する。) (2)勝坂式(所謂顔面把手の主要なもの、武藏國分寺・相摸勝坂・甲州・信濃の各地)のものがよく注意されて居るが、(3)所謂薄手式のものにて若干例知られて居る。以上の三群の間に系統的關係があるか否かは問題である。殊に(3)と(2)の間の時期に屬する加曾利E式及び前後の土器に伴ふ顔面把手は未だ發見されて居ない。B類の顔面附土器は東北では亀ケ岡式の直前に限られ、關東に於いても略同樣の型式である。顔面の位置には種々の場合がある。今こゝで列擧することは避けたい。その一部に顔面が壺形土器の頸部に加へられるものがある。類例が少いが孰れも野澤の例とは趣を異にして居る。

二、壺形土器第一例 (挿圖二)

原始工藝百十四圖版5 (寫生圖) Munro: Prehistoric Japan の一九一頁第一〇七圖。(寫眞)形態は壺形。肩は餘り張つて居ない。體上半には文樣帶がある。上限には溝が二條あるが下限には無い。文樣は磨消繩紋の手法によつて居る。沈線は纖細で繩紋も亦細い。一種の渦文を形成して居る。類似の渦文は關東の堀之內式の鉢形土器の體部に屢々見られるが、それとは異つた特徴がある。渦文の內側を廓する線が延長して、その外側を廓する線と並行する弧を畫き、相對する渦文からの同樣の延長とV字狀の尖端に於いて交つて居る。斯くの如きV字狀尖端ある例は堀之內式の場合には見受けないやうである。これに反して陸前の桝形式の壺形土器には屢々渦文又は同心圓の上方にV字狀をなして交る弧を見ることがある。原始文樣集第一輯中の一葉(番號記載なし)には桝形發見の二例が圖示されて居る。(挿圖六、七) 同樣の渦文のある例は他の遺跡からも出土して居る。(挿圖五) 原始工藝圖版解説にはこの野澤の土器は厚手式のものと書かれて居るが、後述四の土器と同樣何かの誤解であらう。マンローの圖では口の外側に繩紋帶が見えて居る。これも屢々桝形式にも見られる特徴である。

壺形土器第二例 (挿圖三)

大野氏文樣の庫五十二圖(文樣)、原始工藝百四十四圖4(寫

下野國河內郡國本村野澤の土器

山 內 清 男

この遺跡から出た土器で圖解されて居るものが四例程ある。これらは、皆、明治三十二年小林與三郎氏がその他の遺物と共に、人類學敎室に「獻納」されたものゝ一部であると思はれる。氏の發掘調査及び遺物の說明は沼田賴輔氏によつて筆記され、人類學雜誌十五卷百六十六號に發表されて居る。管玉が同時に發見されたこと、特殊の顔面附土器が、就中注意されて居るが、沼田博士はその註解のうちに土器に就いての所見を述べられ、形態はむしろ彌生式に類して居るが、繩紋や文樣は繩紋式土器と異らないと云はれて居る。この遺跡の土器の特異性が注意され、彌生式への近似が認められたのは、斯の如く、今から三十年前に遡り得るのである。

關東地方の石器時代土器に二三の型式別のあることは古くから認められて居る。昨今はこの方面の調査が進行し、古き型式別は大別であるに止まり、眞に標準とすべき細別型式は更に多數に上ることが明になつた。その數は余の腹案によれば既に二十を超えて居る。人類學雜誌四十三卷四百六十三頁「下總上本鄕貝塚」史前學雜誌二卷二號「斜行繩紋に關する二三の觀察」のうちに各型式の名稱を列擧した。しかしこれらは概略にすぎないのであつて、更に細別型式に分れる場合、中間に新型式を挿入すべき場合などがあるのである。野澤の土器はこの系列に未だ加へられなかつた一型式(假稱野澤式)の存在を示すものである。これに關しては、發掘調査を行つて充分型式の內容を明にして後、公表する心算であつたが、都合によりこの豫報を試みることにした。

先づ個々の土器に就いての所見を述べよう。挿圖は私自身の計畫的に集めたのでないから、不統一であり、紙面の都合で縮少されて居るから、親しく原圖を參照されることを希望する。

一、顔面附土器

小林沼田兩氏の報文中に木版で紹介され、近年原始文樣集五

るまいといふ假定から生ずる疑問が介在する。前者に對しては今後の研究を期すべきであるが、後者に就いては或る點迄考慮を加へる必要がある。しかし現在に於て關東地方に奥羽薄手式土器のみの單獨遺跡がなく、又何れもそれが前期に位するもののみである事等からなほ支持し得らるゝと考へてゐる。同時に南漸説・併存説・摸倣説も亦決して私は全然否定し去るのではない。たゞ南漸説に於ては何故關東に存する奥羽薄手式土器がその前半期のものに限られてゐるかに就いての疑問と、又東北地方に於ける厚手式土器や薄手式土器は恐らく何人も北漸を認めて居りながら何故該式土器のみ南漸とすべきかの理由に就いての説明を必要とし、併存説に對しては日本上代の情勢から、縄文土器が何れも同時に同様の階段を示現し得る理由と、假令各地の土器が同一の推移を示してゐるようとも、それが直ちに時間的にもほゞ等しいといふ理由の妥當な説明が必要であり、なほ關東地方の奥羽薄手式土器が何故發達しなかつたかに就いても亦疑問となり得ると考へるのである。又摸倣説は最も妥協的な考説ではあるが、それにも前述の南漸説と併存説に對する疑問が同様にいひ得られるのではあるまいか、又異質文化の接觸に於てはそれが充分に認められるであらうが、同質文化のしかも薄手土器自身に變化する素地を有しながらこれを摸倣する理由に對しても猶相當説明を欲しい感がある。

要之するに現在に於ける奥羽薄手式土器論に就いてはなほ解決を今後に屬すべき事項が多々存する事と思ふ。愚論も亦解決の途上に投じた一石として寛大に看過し斯學研究の一隅に加へられて好意ある是正を賜らば幸甚の至りである。

發生問題と深く關聯する所があるので、先づこれに對する吟味を加へた結果、自己の淺い知見によれば關東薄手式土器が奥羽薄手式土器の母體たり得ること、即ち繩文土器そのものゝ有する本質上から起り得るものと觀するに至り、奥羽薄手式土器は大體關東に於て發生し東北に於て完成の域に到達したと考へたのである。一方これを廣く日本上代文化の推移の上から見ると、繩文土器使用者は大和朝廷よりして低級文化人とせられ、東夷・蝦夷・土蜘蛛等と蔑稱せられた人々を指すものであり、殊に關東及び東北地方に多數存在するものは多年大和朝廷と折衝を重ねた蝦夷がこれを代表してゐるとし、古傳說並に歴史に反映する事實からそれ等は何れも東漸又は北漸せるを最も妥當なりとし、この間接的證明から關東繩文土器の北漸を考へ、その一部を占むる奥羽薄手式土器もその大勢に應じて北漸したものであらうと說いたのである。

重ねていふ。私は奥羽薄手式土器のみの北漸を說くのではない。恐らく關東に於て發達した各種の形式は時間的の差こそあれ何れも北漸してゐるものであらうと考へるのである。思ふに關東に於て前期と認らるゝ厚手式土器は同じく早い時期に東北に移行し、又次で盛行した薄手式土器も同樣であり、最も遲れて出現した奥羽薄手式土器は同じく最も遲れて東北に移行したものであらうと考へるのである。然してその移行の時期に就いては遽かに決定し難いが、關東に於ては古典に於ける古傳說時代に於いてそれがほゞ成されたであらうと考へる。四道將軍派遣や日本武尊の東征等はそれ等の時期を暗示する物語ではあるまいか、從つて漸次蹋躋せられた繩文土器使用者は蓋し歴史時代に入つてもなほ東北には存在したであらうと考へてゐる。

最後に以上の私案に對してなほ頗る不備な點と思はるゝ事は、關東と東北との中間地帶たる上野下野及び岩代磐城方面の繩文土器に對する資料の乏しい事と、全ての繩文土器が必ずしも一方向的にのみ推移するものではあ

て見ても決して支障を來す事はあるまいと考へてゐる。然しこれはその大勢を述べたものであつてその間局部的に小異の存在する事は免れない事實であるが、關東及び東北地方の如く常に西方から高級文化の漸進してゐた場合は、低級文化の保持者たる石器時代人は大體に於て東漸又は北漸を餘儀なくせしめられたであらうと思ふのである。即ち繩文土器使用者は數次の文化的折衝によつてその都度或は融合し又は北漸したものであらう。故に關東に於ける繩文土器の全ての形式は時の前後はあらうが遂次北漸したものと見做すべきである。東北地方に關東薄手式土器や厚手式土器の存在する事は何れも同樣の理由に基くものであらうと思ふ。要するに關東に於て發達した繩文土器は階段的に東北に遷延し、關東とほゞ同樣の狀態を呈したものであつて、唯獨り奥羽薄手式土器のみの問題ではないと思考するのである。日高見國が常陸地方から北上川地方に移つた事はこの片鱗を物語るものといふべきであらう。

六　結　語

愚論多岐に亘り、且つ論旨生硬にして不徹底な箇所の多かつたであらう事を痛感するが、大體に於て私の奥羽薄手式土器に對する卑見は上述の如くである。最後に所述を要約し重ねて現在の愚見を吐露し、更に將來に對する研究問題と、先學諸氏の御叱正を仰いで結語としたい。

奥羽薄手式土器は石器時代のある時期に於ける關東と東北との關係を見る上に頗る重要な問題たると共に、延いて日本全體の石器時代論にも少なからぬ係はりを有してゐる。そこで私は先づ關東と東北に存する該式土器の特質に就いて檢討し比較した結果、そこに若干の差異ある事實を發見した。その差異の基く所は一方該式土器の

ぬ點であらうと思ふ。然らばこれに該當する遺跡遺物は如何なるものであらうか、私は夙に喜田博士等の稱せらるゝ如く關東及び東北地方に多數存在する繩文土器主體の石器時代遺跡遺物を措いて他に比擬すべきものはないと考へたい。玆に於て人或は蝦夷即ちアイヌの先入主に拘泥して疑問を挿むかもしれない。しかし蝦夷は果してアイヌと同一なりや否やは別問題である。蝦夷といひ土蜘蛛といひ又佐伯と呼ぶのは、當時の文化人たる大和朝廷から低級人たる石器時代人を呼ぶ賤稱に過ぎないので全く支那流の稱呼である。そこに人種的區別を認めてゐたものではない。前述書記の文中「往古以來未染王化」といひ、又常陸風土記に「彌阻風俗」とあるのはその間の狀態を物語るものである。故に九州の熊襲も隼人も大和の國栖も亦同樣である。關東及び東北地方の未開人を呼ぶのに蝦夷の名を多く用ゐてゐたのは、東夷の中蝦夷と賤稱せられた者が最も强暴で且つ永く皇威に叛いたが爲めである。即ち蝦夷は考古學上より觀て繩文土器使用の人民を代表する假稱であると認める事が出來る。

上述の如く古典に現はれてゐる蝦夷が關東及び東北地方に存する石器時代人を意味するならば、古傳說や史實の微する所によつて、それが漸次北漸しつゝあつた事は否定し難い。又それは日本文化の推移といふ大勢上からも亦當然の歸結といはねばならぬ。私は日本上代に於ける高級文化の保持者を大和朝廷によつて代表せらるゝものとし、それは古傳說に反映せらるゝ如く九州に於て大陸文化の洗禮を受け、漸次東方に遷移し遂に大和朝廷の樹立となり、更に東方へ數次の文化的飛躍が試みられたものがこの東夷征討であらうと考へてゐる。即ち日本上代文化の曙光は九州に發し大和に入りて固定的となり、更に第二段の活躍が漸次東方に波及せられたものであつて、その大勢は常に東漸的であり、又關東及び東北地方に對しては北漸的であつた事を認めたいと思つてゐる。

これを遺跡遺物に於ても青銅器や彌生式土器の分布狀態から朧氣ながら推察し得られ、又繩文土器の分布に就い

告せられた中に「朕聞、其東夷也、識性暴强、凌犯爲宗、村之無長、邑之勿首、各貪封界、並於盜略、亦山有邪神、郊有姦鬼、遮衢塞徑、多令苦人、其東夷之中蝦夷是尤强焉、男女交居、父子無別、冬則宿穴、夏則住樔、衣毛飲血、昆弟於疑、登山如飛禽、行草如走獸、承恩則忘、見怨必報、是以箭藏頭髻、刀佩衣中、或聚黨類、而犯邊界、或伺農桑、以略人民、擊則隱草、追則入山、故往古以來、未染王化」と詳かに述べて居られる。又常陸風土記茨城郡條には「古老曰、昔在國巣、山之佐伯、野之佐伯、普置掘土窟、常居穴（中略）狼性梟情、鼠窺掠盜、無被招慰、彌阻風俗也」と記してゐる。果して彼等が言ふ如く强暴無道の蠻人であつたか否やに就いては暫く措くとしても、當時の文化民たる大和朝廷の人々から見れば可なり低級文化の保持者たりし事は想像するに難くない。故に彼等の占居區域を日高見國と呼び所謂化外の地としてゐたのであつた。さて上述の未開人即ち東夷が多數且つ長期間關東及び東北地方に亙つて居住し、大和朝廷に歸順しなかつた事も亦古典の上から認める事が出來る。即ち祟神天皇の朝四道將軍を派遣せられて東方十二國を征すといひ、後豐城入彦命の東國分封を見、次いで景行天皇の朝日本武尊の東征となるに至つた。かくして東夷は漸次退去し、所謂日高見國は北方へと移行したが、猶確實な歴史時代に入つても未だその餘燼は永く皇威を蔑にしたので、仁德帝の朝田道の東征があり、舒明天皇の御代上毛野形名の討伐が加へられ、齊明天皇の朝には阿部比羅夫の平定があつて、奈良朝初期には多賀城と出羽柵を設け陸奥及び越の蝦夷を鎭壓するに至り、最後に桓武天皇の朝坂上田村麿の大征討となり、かくして長期間數次の折衝を經た後漸次北方に跼蹐せしむるに至つたのである。

扨て上述の如く關東及び東北地方に亙つて多數且つ長期間に亙り蟠居した東夷については考古學上から何等の徴證が認められぬであらうか。即ちこれを考古學上彼等の遺跡遺物が全く存在せぬと考ふる事は何人も肯定し得

以上縷述した如く、私は關東に於ける薄手式土器と奥羽薄手式土器とは全くその本質を等うし、その間僅かな飛躍によつて推移すべきものと考へ、且つ種々の點から奥羽薄手式土器の未完成の姿を關東に認めたいと思ふのである。猶伴出遺物に就いても土器と同樣な解釋が施されると信じてゐるがその個々については省略する。しかし一方に於て東北地方にも關東薄手式土器は存在するから、或物は東北に於て發生し完成したものも有り得べきであつて、單に私は東北地方に於ける該式土器全部が關東に於て發生し北漸したとするものではないが、それにしても歸する所は北漸であつて、同一の傾向を有する事は云ふ迄もない。

五　日本上代文化の推移と縄文土器

古典を繙く時上代に於て各地に種々の名稱を以て呼ばるゝ未開人の占居した事實が存する。九州に於ける熊襲隼人・肥人等大和には國栖を始め多數の土酋があり、殊に東國は永く化外の地であつた爲め、殆んどそれ等未開人のみが蟠居してゐた事を知り得られる。これに對しては通稱して東夷とも呼び又その中最も猖獗を極めた蝦夷を以て代表せられ、永く皇化に均霑しなかつた事は更めて說く迄もない事實である。かの東國の狀勢を記した唯一最古の地理書たる常陸風土記に據れば、これ等未開人に關する記事が隨所に散見し、或は「東夷之荒賊」といひ又は「山賊」と呼び、時には「國巣」或は「山之佐伯・野之佐伯」等と記し、且つ又俗語に「阿良夫流爾斯母乃」とも「都知久母」（土蜘蛛）とも「夜都賀波岐」（八握脛）等とも呼んだ事を記してゐる。而して彼等は當時の大和朝廷の人々からしてその風俗を頗る異にして居つた事は、書紀景行天皇二十七年に武內宿禰が東夷巡察後の奏言にも「其國人男女並椎結文身爲人勇悍」といひ又同四十年日本武尊に東夷を征討せしめ給ふた時に豫め警

し難いであらう。要之するに奥羽薄手式土器に現はされた諸要素は何れも關東薄手式土器から發生し得ないと斷ずる事の出來ないもので、たゞ形態の倭小と複雜化及び生地の堅硬等土器製作技巧の進歩に伴ふ變化と、それに隨つて表現せらるゝ文様の自然的變化、卽ち壓縮や帶狀化及び施文部の限定等が生じ、これに應じて地文たる繩文も粗大より纎細となる事も亦當然であらう。これ等の變化は一方に於て厚手式土器から薄手式土器への移行を殆んど疑ふ人のない事實と比較するならば、これも亦左程困難を感ずる程度のものではあるまいと考へらるるのである。しかし假に上述の變化を若し强いて外來の刺激に因ると見るならば、私は同質文化所産たる東北の奥羽薄手式土器に蒙るよりも、その當時に浸潤しつゝあつたと思はるゝ彌生式土器から與へられたものと見るのも一見解かと考へるのである。

次に前述の如く關東に於ける奥羽薄手式土器の特質として、生地・文様・形態等が全く東北に於ける該式土器と同一ではなく、その間若干の差異が存し、寧ろ酷似又は類似の程度にある點は、又以てその間の消息を傳ふるものではあるまいか、私はそれ等の事實を關東薄手式土器から奥羽薄手式土器へ移行する過渡期の姿を示すもの、卽ち一方に關東薄手式土器の臭味を殘存するが爲であらうと考へたいのである。故に奥羽薄手式土器は關東薄手式土器の或時期に於て發生し得る可能性を信じ、該式土器未完成の姿相は關東地方に存在すると考へるのである。又重ねて既述の如く關東地方に該式土器を主體とする單獨遺跡が無い事も亦この事實から自ら導き出さるゝ事は言ふ迄もあるまい。更に關東に於ける該式土器が東北に於ける該式土器と比較して、文様上から何れもその前半期のものと一致するといふ點は、一層それを裏書するのではあるまいか、又關東に於ける該式土器の分布區域が主として多摩川以北なる點も亦合せて當然の結果といひ得らるゝであらう。

を伴出する關東薄手式土器を吟味する必要が起つて來るのである。諸先學の假稱に從へばそれ等の薄手式土器は安行式又は加曾利B式等と呼ばるゝもので、薄手式土器中に於ても後期に屬すべきものとせられてゐる。就中安行式と呼ばるゝものは最も緊密な關係を有する。私も亦從來の知見によつて夙にその事實を肯定してゐた一人であるが、それ等の薄手式土器と奥羽薄手式土器とは果して如何なる關係に立つであらうかに就いての見解には稍相違を有してゐる。前述の八幡・甲野・山内の諸氏は、直ちに兩者を結合せしむる事に躊躇せらるゝ樣に見受けられる。しかし果して兩者にそれ程明確な差違を與へ得らるゝであらうか。又或はそれを奥羽文化の影響によつて生じた現象ともせられてゐるが、それ等の現象を外的影響によつて說明せねばならぬ程兩者に顯著な差異を認むべきであらうか。私見によればこの現象は繩文土器自身の發達過程に於て出現し得る事ではあるまいか、換言すれば關東薄手式土器から奥羽薄手式土器への移行は、薄手式土器自身の素地に具有してゐるものではあるまいかと考へるのである。今試みに關東地方發見の奥羽薄手式土器中、完形品を採つて比較するならば、眞福寺貝塚や余山貝塚及び下沼部貝塚等から發見せられた鉢形土器や注口土器・香爐形土器の形態並にそれに盛られた文樣が、何れも伴出する薄手式土器から漸次移行し得る道程を看取し得らるゝと信ずるのである。鉢形土器に施された所謂入組文やX狀文と呼ばるゝものが、薄手式土器の文樣中にその源流を認め得られないであらうか、又口緣部に存する突起が、薄手式土器に多く見る所謂把手又は緣瘤と脈絡がないであらうか、又奥羽薄手式土器に特有な形態とせらるゝ香爐形土器も、薄手式土器中の臺附有孔土器を顧慮する時、それが突如として發生した形でない事が推定し得られるではないか、又奥羽薄手式土器に多い底面に文樣を有する丸底皿形土器が、關東薄手式土器にも存在し、その他注口土器に於ても器形の變化とそれに伴ふ文樣の變化は決して兩者の間に漸遷する要素を否定

るが故に順次縄文土器自身の精緻な研究が完成せらるゝに隨つて自ら解決さるゝものであるとの深遠なる考慮の下に顧慮せられない爲であるかもしれない。しかし今奥羽薄手式土器を説くに當つては一應の解釋を施して置かねばならぬと思ふ。

右に就いて先づ最初に當然考へられる事は、奥羽薄手式土器の最も豐富に存在する東北地方の遺跡に就いて檢討する事である。それは遺跡の層位的研究と、遺物の形式的研究とが第一に考慮せらるゝであらう。東北地方に於ける先學各位の意圖も亦これに注がれて居り、從つて個々の遺跡に就いては頗る詳細な報告が發表せられてゐる。しかしそれ等の貴重な業績は各々個々の遺跡に於ては重んずべき記録であるが、それを綜合して東北地方に於ける奥羽薄手式土器が如何に發生し如何なる過程のもとに發達を遂げたかに就いての考説には未だ接して居らぬ。或人はこれを東北に存する關東薄手式土器から漸遷したと説き、或人は奥羽薄手式土器はそれ自ら發達したものであると述べられて、私はその去就に迷はざるを得ないのである。そこで例によつて暴論を敢てすれば、私は上述の如く奥羽薄手式土器の特質から、先づ前提として該式土器は東北地方に於てはほゞ完成した域に達したものである事を認めたい。それは土器そのものゝ形態・文様及びそれ自身の發達變遷の跡からも辿り得ると共に、該式土器を主體とする單獨遺跡が多數存在する事からも容易に首肯し得らるゝと信ずる。次に然らばその完成の域に到達する以前の姿相が何れかの地方に存すべきである。東北地方の何れにか、又は關東地方か、或はその他の地方か、何れにしてもこれを探求する事は興味ある問題であらうと考へられる。

翻つて關東地方の縄文土器を見ると、幸にして該式土器の存在を見、しかもそれが東北地方に於けると稍狀態を異にしてゐる。卽ち第一に單獨遺跡がなく、必ず薄手式土器の或物と混在してゐる。故に先づ奥羽薄手式土器

關東に於ける奥羽薄手式土器（下）

大場磐雄

四　關東薄手式土器と奥羽薄手式土器との關係

關東及び東北に於ける奥羽薄手式土器の特質に就いての愚見はほゞ上述の如くである。然らば次に兩者の關係は如何なる理由の下にかゝる現象を呈するに至つたかを説くのが順序ではあるが、私はなほ一つ殘された問題として奥羽薄手式土器の發生に關する憶説を逞しくさせて頂きたい。

既に説いた如く奥羽薄手式土器が突如として出現したものでない事は誰しも否定し難い事實であらうと思ふ。それはかくの如く形態に於ても文樣に於ても繩文土器發達の頂點及び以後の姿相を示して居り、時間的にも後期に置くべき事は衆人の肯定する點であるから敢て贅言を要しないが、又一面に於てそれが他の繩文土器と全く異なつた獨自の發生に成るものと認むる事も現在に於ては不可能である。然らば繩文土器が如何なる時期に達した時かゝる現象を呈するであらうかは當然觸れなければならぬ重要な點であらうと信ずる。この點に就いては從來特に詳述せられた人の無いのは寧ろ不審といふべきではあるまいか。奥羽薄手式土器の研究家は、單にそれが薄手式土器の後に踵ぐものとして説かるゝのみであつて、薄手式土器から奥羽薄手式土器への移行狀態に就いては餘り説かるゝ所がなく、或は故意に觸るゝ事を避けらるゝやの觀無きを得ない。尤もこれは相當重大な問題であ

文獻

會報

餘白錄

目次

資料

史前學雜誌

第四卷 第一號





陸前國稻井村沼津貝塚出土骨角器の一例（$\frac{1}{6}$）

Beispiele der Knochen und Geweihgeräte

aus dem Muschelhaufen Numazu, Prov. Rikuzen.

史前學會々則

一　本會ヲ史前學會ト名付ケル

二　本會ノ目的ハ史前學研究ヲ主體トシ、併セテコレニ關連スル諸學ヲ考究普及スルニアル

三　本會ノ事業ハ左記ノ通リデアル

研究小報及パンフレットノ發行

史前學雜誌(年六回隔月發行)及年報ノ發行

調査並ニ研究旅行、臨時講演會並ニ展覧會ヲ催ス

四　會員

本會ノ趣旨ニ贊成シ年額金五圓ヲ前納スル者ヲ以テ會員トシ金貳百圓以上ヲ一時ニ納ムル者ヲ以テ終身會員トスル

特ニ本會ニ貢獻シタル會員ヲ名譽會員ニ推選シ、終身會員ニ準ズル

五　本會員ハ隔月發行ノ史前學雜誌並ニ毎年一回發行スル年報ノ配布ヲ受ケルモノトスル(但海外在留者ハ別ニ遞送料ヲ要スル)

六　會員特典

本會々員ハ大山史前學研究所ニ於テ研究ノ便宜ヲ受ケ其研究ヲ雜誌ニ於テ發表スルコトヲ得ル

本會ノ調査並ニ研究旅行、講演會及展覧會ニ出席シ、本會所藏ノ資料圖書等ヲ使用閲覧スルコトヲ得ル

七　本會ニ數名ノ幹事ヲ置キ、本會ノ會務ヲ執ル(將來必要ニ應ジテ本會々則ヲ變更スルコトヲ得ル)

八　本會ハ事務所ヲ左記ノ所ニ置ク

東京府豐多摩郡千駄ケ谷町穩田九
大山史前學研究所内
史前學會
電話青山一二五番

幹事　大山柏　甲野勇　宮坂光次　田澤金吾　杉山壽榮男

會計　岡田義一

投稿規定

寄稿の範圍は史前學研究を主體とし、之に關連する諸學を包括す。寄稿者は會員並に會員の紹介ある者に限る

原稿は返還せず、但し寫眞、圖表等は豫め申出であるものに限り之を返還す

原稿掲載の先後は編輯者に一任されたし

寄稿者の希望に依りては内容に關し相談に應ずることあるべし

寄稿の別刷は豫め申込みある場合に限り、當分所要部數の實費及び送料を申受け應ず

昭和七年二月二十九日印刷　第四卷第一號
昭和七年三月　一　日發行　定價一圓

編輯者　東京府豐多摩郡千駄ケ谷町穩田九番地　大山柏

發行者　東京府豐多摩郡千駄ケ谷町穩田九番地　岡田義一

印刷者　東京市神田區表猿樂町二　中村修二
株式會社開明堂東京營業所

發行所　東京府豐多摩郡千駄ケ谷穩田九大山史前學研究所内　史前學會　電話青山一二五番　振替東京五八九六九番

發賣所　東京市神田區北甲賀町四番地　岡書院　電話神田二七七五番　振替東京六七六一九番

史前學雜誌

第四卷　第一號

史　前　學　會

ZEITSCHRIFT

FÜR

PRAEHISTORIE

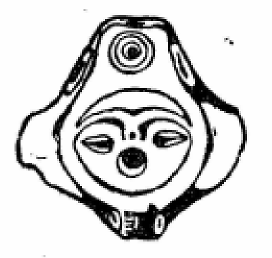
(SHIZENGAKU-ZASSHI)

Organ der Japanischen praehistorischen Gesellschaft

Herausgegeben

von

KASHIWA OHYAMA



Sondernummer

Der chronologische Verlauf des europäischen Palaeolithikums.

4. BAND 2. HEFT

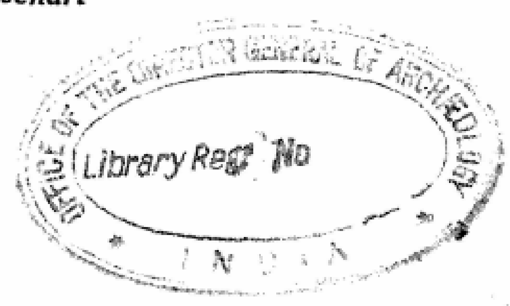
TOKIO

März 1932

Japanische praehistorische Gesellschaft

(SHIZENGAKU-KWAI)

9, Onden, Aoyama Tokio.



Satzungen der Gesellschaft.

1. Der Name der Gesellschaft ist "Shizengaku-Kwai" (Praehistorische Gesell schaft)
2. Der Zweck der Gesellschaft ist das Studium der Praehistorie und ihrer Grenzgebiete und dessen Popularisierung
3. Die Tätigkeit der Gesellschaft erstreckt sich auf
   A Herausgabe kleiner Mitteilungen und Schriften
   B Herausgabe der Shizengaku-Zasshi (Zeitschrift für Praehistorie) (Zweimonatlich) und des Jahresberichts.
   C Veranstaltung von Forschungs-und Studienreisen
   D Veranstaltung von Vorträgen und Ausstellungen
4. Mitglieder
   Die Mitgliedschaft wird erworben durch jährliche Vorauszahlung eines Beitrags von 5 Yen. Personen welche einen einmaligen Beitrag von 200 Yen oder mehr zahlen, werden lebenslängliche Mitglieder. Personen welche sich um die Gesellschaft besonders verdient gemacht haben, können Ehrenmitglieder werden und haben damit die Stellung der lebenslänglichen Mitglieder
5. Die Mitglieder erhalten die Zeitschrift und den Jahresbericht frei, jedoch wird für Zusendung nach dem Ausland das Porto berechnet
6. Rechte der Mitglieder
   Die Mitglieder haben das Recht, die Einrichtungen des Ohyama Instituts für Praehistorie zu benutzen
   Die Arbeiten der Mitglieder sollen in der Praehistorischen Zeitschrift veröffentlicht werden
   Ferner haben die Mitglieder das Recht, an den Forschungs- und Studienreisen der Gesellschaft teil zu nehmen, die Vorträgen und Ausstellungen zu besuchen, sowie die Sammlungen und die Bibliothek der Gesellschaft zu benutzen
7. Ein aus mehreren Mitgliedern, bestehender Vorstand führt die Geschäfte der Gesellschaft
8. Wenn es sich als notwendig herausstellt, können diese Satzungen später geändert werden
9. Das Büro der Gesellschaft befindet sich:

   9. Onden Aoyama Tokio
   Ohyama Institut für Praehistorie
   (Ohyama Shizengaku-Kenkyujo)

für den Vorstand

Fürst Kashiwa Ohyama, Sueo Sugiyama
Isamu Kohno, Kingo Tazawa
Mitsuji Miyasaka

INHALT

Sonderausgabe

Der chronologische Verauf des europäischen Palaeolithikums.
von
Kashiwa Ohyama

Zur Zeit interressieren sich die japanischen Praehistoriker für die fremde Steinzeit, besonders für die des Palaeolithikums, trotzdem noch keine sicheren palaeolithischen Funde von den japanischen Inseln bekannt sind. Aber es mangelt für das Studium des Palaeolithikums an japanischen Schriften; nur eine einzige habe ich im Jahre 1929 öffentlichtet, doch ist diese Arbeit nur kurz und einfach; wenig auf die Chronologie einzugeben. Um die Kenntnisse meiner japanischen Kollegen über das Palaeolithikum weiter zu fördern, habe ich hier von E. Lartet 1861 an bis zu O. Menghin 1931 in 36 Tabellen die Chronologie der Palaeolithikums bearbeitet und kritisch besprochen. Der Inhalt ist folgende:



主要文献

Josef Bayer ; 1927.

(L. 1) Der Mensch im Eiszeitalter. Teil I. II.

Moritz Hoernes ; 1903.

(L. 2) Der Diluviale Mensch in Europa.

George Grant Mac Curdy ; 1924.

(L. 3) Human Origins.

Gabriel de Mortillet ; 1885. (II Ed.)

(L. 4) Le Prèhistorique.

大 山 柏 ; 1929.

(L. 5) 歐洲舊石器時代 (考古學講座)

同 上 ; 1929.

(L. 6) 史前學研究史 (史學。七の四)

Edouard Piette ; 1907.

(L. 7) L'Art pandant l'age du renne.

Fritz Wiegers ; 1928.

(L. 8) Diluviale Vorgeschichte des Menschen.

（85） M. Hoernes (L. 2) S. 88 參照。

其九　結　語

これで一通りの概述を終つたが、再び卷頭にもどり、本研究をなした所以を繰り返して置き度い。何故なれば、舊石研究の如きは、我が國から遠く離れて居るのみでなく、其實際資料に對しても通常僅に文獻を通じて見るに過ぎない爲、兎角大摑みにこれを眺める結果、餘りに簡單に取り扱ひ過ぎることを恐れる故である。私としては舊石研究者が一人でも二人でも増すことは、甚だ望ましいことではあるが、さりとて其研究が餘りに簡素である結果、其認識不足を生ずることは欲しない。忌憚なく云はせて戴くならば、そんな傾向が皆無でもない樣である。それが爲にかく多くの編年を紹介し、表面的のみでなく、一部分は內面的にまで踏み込んで述べ、以て簡單なものでない所以を述べた考へである。然しながら他の一面から見て、此の如き混亂に等しい狀態にあるからとて、これを蔑視する必要は毛頭ない。各碩學の鋭意研究した結果が以上の如く、未だ定論を見ないのは、決して沈滯した結果ではない。生々發展して行く一過程上にあるからこそ、かく論議多岐に亘るものであつて、研究の蓄積はやがて前途に大きな光明を見る可く、其前提にある。只以上の如き研究過程と現況とをよく辨へて、遠く日本よりも研究を進む可きである。特に實際に直面して居らないだけ、認識不足も生じ易い反面には、冷靜に局部的に捉はれず、夫々を大局的に且つ公平に見ることが出來る位置にある所も、私共の共有する一大特典である。故にこの特典をして意義あらしむる如く、御互に研究を進めたいと思ひ、こゝにこれが了解と協力とを御願して此稿を閉づるものである。（昭七、五、十四稿）

では、獨り地方色として特色の見らるゝのみでなく、そこに時差をも加味せらる可きである。この考慮の存するものと考へらるゝものは、僅にコツロフスキー（第二十四表）只一人のみである。ヘルネスの如きも早くこの點に着意はして居つたもの〻(77)、其第一次編年（第九表）が他の原因から失敗した爲、切角この着眼も編年上に見ることが出來なかつたことは、遺憾の限りである。然しながら、時間的にも、空間的にも進歩はしつゝある以上は、當然こゝまで研究の到着してくることも、今や時日の問題であつて、果して何時誰人によつて、上述の如き最後の綜合にまで達成せらるゝかは、期待と興味とを持つものである。

（78） Commont に就ては、部分的な研究で顯著なものは、暖ムステリアンの研究や、アブエビーユの研究等があるが、私はそれが綜括せられて、一覽の樣になつたものを見出して居らない。更に捜索して見る。

（79） Joseph Dechelette; Manual d'Archéologie. 1924. は、概覽して見たが、プール等の一説はあるも、彼れ白からのを見付け出さなかつた。恐らく中を讀んだら解りもしようが、其暇がないのでかく除いたのである。

（80） 獨では、K. Schuchhardt や E. Werth; Der fossile Mensch. 1921. S. 563. 等があり、佛にも D. Peyrony; Éléments du Préhistoire. 1923. P. 18. 等もある。これ等は歐洲大戰後の爆發期の所産として餘りに多くなつたからで、他意ない。

（81） この關係に對し、私は拙著(L. 5) 續編 S. 136. 參照。但し同項には重大なる誤植がある。同項にて私はプレ・シエレアンを第二氷期としてあるが、第二氷間期で、同樣にシエレアンが第三氷期となつて居るのも、第三氷間期の誤植である。前後を讀まれたなら、私がプレ・シエレアン及びシエレアンを暖期卽ち氷間期として取り扱つて居ることが、了解せらるゝことゝ信ずる。

（82） これ等各氷河に就ては、拙著(L. 5) S. 21―45. 參照。

（83） 黃土の概念に就ては、拙著(L. 5) S. 59―60. 參照。

（84） Raymond Vaufrey; Le Paléolithique Italien. 1928. に於ては、イタリーの後期舊石に Faciès Grimaldien (P. 85―)と云ふて居り、F. Wiegers (L. 8) S. 62―63 に於て、Hundisburger Stufe, Markkleeberger Stufe, Weimarer Stufe, 等多くの階梯を作出してあるが、煩を避けて略した。

とした範圍が、手頃の廣さではあるまいか。これを離れると、前述の如き四周各地に地方色を見ても居る。然らば少なくとも歐外には、他に成立を異にする舊石文化があるとしても、何んの不思議もない。今日の歐洲舊石文化が必ずしも全世界の舊石文化であるか否かは、今後に待たねばならないが、少なくとも遠く佛國舊石文化圈外にある地方まで、無條件で其標準を以て律することは不同意である。再び歐洲舊石に歸つて見ると、佛國舊石文化外に地方色に基く夫々の編年の生れてくる餘地はあり、現に一部に提唱せられても居る。(3)カプシアンの如きこの好例であつて將來編年にも地方的色彩の加はつて行くと共に、其結果煩雜になることも覺悟せねばならない。

第三には、最後に歸着すべき問題であつて、第一として述べた時間と第二の空間問題との配合關係である。この兩者に就ては、順序として別々に述べてはきたものゝ、史前學なる性質上、當然相結ばるゝものであつて、今迄に揭出した諸編年にも、或る意味での配合は出來て居るが、私はその不充分の點をより嚴密に指摘するものである。從來多くの編年中には單に佛國舊石文化を中心とし、これが地方色、乃至は他の文化の同時的並立存在に對する考案に缺けたものが多い。最も極端に云へば編年と云へば、單に時的經過を追ふのみであつて、時的に上下關係を結ばるれば足ると云ふ樣にまで見られた。然るに文化現象は、獨り時的經過にのみ、其違いが見られるのみでない。其文化中樞とこれが其外周とでは、同時代であつても甚しい差のあることは、卑近の例を以てすれば、今日の都會と田舍との差の如きものである。まして交通不便な史前時代、特に文化低い舊石時代では、この開きがより大きくてよい。この現象に就ては、第二に述べた如く、漸く其機運に向ひつゝあるものゝ、其認識がまだ淺い。且つこの現象は一文化圈内に於ても、時的の差異—時差—の存在が可能である。卽ち同一文化圈内にあつても、文化中樞では文化進展して其第二期に入つても、外周圈では依然第一期狀態にあり得る。卽ち外周圈

互間の區分が明でないものが歐洲に多い。特に形態階梯と編年階梯の混同に於て然りである。私の考へでは、單に形態階梯を編設したからとて、必ずしも編年階梯たり得るかは吟味を要する。場合によつては、逆現象すらも起り得る。形態階梯上、古形としたものが編年階梯上、退歩の結果である樣なことも生れ得る。又形態階梯は認め得ても、編年階梯にまでなり得ない樣な場合も起り得る。故に形態階梯を見て、直に以て編年階梯とはなし得ない。この目で舊石編年、特に其內容細分を見ると、吟味を必要とするものが容易に發見せらるゝ。又今一つの見方は、時的經過に伴ふても、文化は或地方を對象とする場合、必ずしも其地で一連不斷に繼續するとのみは定められない。中間に人類を見ない時代があつても不合理ではない。この考を有したものは古くヘルネス(第九表)やマッカーディイ(第二十八表)等に見られもするが果して、どれだけこれを認識して表示したかは、これ亦再吟味を必要とする。

第二には空間の問題である。元來歐洲舊石とは稱するものゝ其文化中樞をなす所は、佛國平地であり、既にピレニー以南、イタリー、英、獨、中歐等に於ては、同じ舊石階梯內に於ても、地方色が見らるゝ。而してこの地方色に就ては、一の5にも揭出した如く、最近多く氣付かれてきたのは結構なことではあるが、亦當然のことにも思はれる。而して從來無理に佛國を中樞とする舊石文化(Franco-Catabarische Kultur)—佛國舊石文化—を標準として、獨り歐洲に止まらず、遠くエジプト、小アジア、シベリア等までも、これに基いて編年して行つたのが、多少なりとも反省を見たのは悅ぶ可き傾向である。歐洲に於てすら、多くの地方色を見るのであるから、遠く交渉もなく自然環境をも異るアフリカやシベリア等の他地方で、よしそれが歐洲と同一文化に屬するものであつても、より大きな地方色のある可きことは、當然過ぎる當然である。まして佛國舊石文化の如き、佛國地方を中心

場は、氷河や黄土と同樣であり、史前學側から云へば、早く解決しても欲しい。

以上の如く姉妹學方面に於て、未だ史前學として要求するだけに進捗を見て居らない結果は、其文化編年をより强固にすべき基礎に缺陷を生ぜしむることゝなる。卽ち其根柢をなす自然現象研究の一部に進展を見ないのであるから、不安定の基礎に樹立せられた舊石編年の動搖性の多きことも、止むを得ない現象と認めねばならない。それなら此の如き動搖性に富む、姉妹學方面との交捗を最少限度に打ち切り、こゝ暫くは全く文化編年のみを、孤立的に取り扱ふたら如何、との疑も起り、又實際にもこんな樣な考かとも思はれる人々もある。然しそれは不幸にして大なる危險も伴ふ恐れがある。舊石研究は其性質上、常にそれが舊石時代に屬す可きことを認識してかゝらねばならないから、單なる文化遺物のみでは、認識不足も生ずる。又新石時代などとは研究法の異るものもある。其文化遺物の如き、種と其變化に乏しい。それだけでは中々文化研究の總てを盡し得ない。これが爲により多くの姉妹學的研究を行ふて、文化研究に資せねばならない。又實際にも文化遺物に特徵少なく、今日以て問題を醸して居るものに、獨のタウバッハーエーリングスドルフ乃至は墺クラピナの如き、前期舊石とは考へらるゝが、其一大特徵である握り槌の出土がない。此の如き場合にも出會するのであるから、やはり或る所までは、其確からしさを自然現象に求めねばならない。從つて前述の如き或る程度の動搖をも甘受せねばならない。

この外、舊石編年の方法に就ても、私に忌憚なき所見を許さるゝならば、摘發すべき不足不充分が存する。第一は時に關した問題である。特に單なる文化遺物の研究に於て其形態學的研究の結果によつて成立した階梯—私はこれを形態階梯（Typologische Stufe）と名づける—と自然現象等或る確からしさに基き編設せられた階梯—これを編年階梯（Chronoligische Stufe）と云ふ—と乃至は畧同樣義で稍々より廣き文化階梯（Kulturstufe）の三者相

であり、氷河なる自然現象の研究であれば自然科學の範圍でもある。それ故史前學上からは、史前文化鮮明の爲、必要の範圍に於て觸れるのであつて、積極的に氷河學的研究を自から行ふ可き立場ではない。從つて氷河現象それ自身の研究は、夫々の氷河學者に待ち、其結果と文化現象とが相結ばる可きが理想である。それ故今日の如く、三氷四氷兩說ある樣な場合は、メンギン（第三十六表）の樣に兩者を併用するのもよい。ヲーバーマイヤー（第三十二表）の如く淡然と氷期に觸れるのも一案ではあるが、內容の不鮮明を免れない。たゞブールやヲスボン或はツヰーガースの如き元々地質學者であるから、これ等が深く氷河論に突入するのは何等の異論はない。寧ろもつと積極的にも進んでもらいたいが、さりとて純なる史前學者としては、これに引きづられる必要はない。前述の立場を守れば充分である。只氷河學の研究進捗が史前學者の要求する程度に進んで居らない爲に、こゝに亦問題を惹起する。現況に於ては、アルプス氷河ですら、三氷四氷の兩說對立して居る。外にスカンジナビア、英國氷河があり、夫々の編年があると共に、[82] 夫々相關關係に就ては、未詳のものが多い。而して舊石文化は夫々の氷河中心近くにまで分布して居るのであるから、史前學者としては、早くこの關係を解決して欲しいのである。而して動もすれば、必要方面から强氣に、氷河內容の深くにまで踏み込むものが出來るのである。一面からは、前述した樣な地質と史前學と兩者の立場を有する人々から誘はれもする。然しながら、史前學の使命を閑却しないなれば、現況上これも致し方がない。只本來ならば前述し如く、氷河學者の研究に待つが最も妥當穩健である。

動植物群關係は目下平靜であり、從つてこの方面に多くの問題を見ない。目下研究上困難でもあり問題を藏するのが黄土（Loess）である。[83] この新古の黄土に就ては色々問題もあるけれど、これ亦其內容は氷河問題と同樣、全く地質學上の問題であり、只古黄土には前期、新黄土に後期舊石時代が連關して居る。段丘の研究も全く其立

目を要するとしても、尚この上に、餘地は充分に認めらるゝ。從つてこの長大に過ぎる様な夫々の文化階梯內に於ける內分傾向の著しいのも、一つには夫々各個の研究が充實してきた結果でもあるが、同時に個別的に其內容に於て、始原期、盛期、終期等に內分せられて行くのも、決して不當のことではない。只今日の發見研究狀態に於て、何處まで新階梯を認め、或は夫々の內分を認識するかには、嚴重なる吟味を必要とし、決して無條件を以て鵜呑には出來ない。

次には氷河關係である。根本に於て文化編年をして、其確實性を增大せしめんとするには、其基礎を何等か動かない時的經過に伴ふ自然現象と結ぶがよい。これが爲には、舊石編年の黎明期以來見て來て居る様な、單なる動物群だけや、乃至は單に層位學的事實等夫々が單獨の現象のみでなく、これ等の自然現象が互に結び合さるれば、合はさるに從つて、これに伴ふ文化階梯の時的位置はより强固となつて行く。これが爲、舊石時代間の一大背景をなした氷河現象の進退と、文化階梯とが互に結ばるれば、獨り夫々の文化期に不動性を與へるばかりでなく、夫々の文化內容をもより明にすることが出來る。然しながら、文化編年と氷河編年とは、互に無條件では結合困難である。中に一致する所も不具合も出來てくる。要は文化上の地方的範圍と時的經過とが、氷河編年上よりの影響の程度にある。今回はこれ以上にこれ等の結合方法の內容に就ては觸れないが、編年を吟味するには、大切な一條件と考へる。

現實の問題としては、舊石始原と氷河關係であるが、前揭の如く、目下の大勢は兩氷說の第二氷間期以前にありとし、私自身にも同様に考へても居るが、[8] これ亦其細論は後日に讓りたい。次には8に述べた如き傾向を如何に見るかの問題である。元々單なる氷河現象を對象としての研究は、氷河學(Glaziologie=Gletscherkunde)の領域

7、舊石始原は最少限度に於て、三四兩氷說の第二氷間期說が有力である。

8、一面に於ては、氷河學（Glaziologie）の範圍にまで踏み込んで研究しようとするものと、他は消極的に氷河概念にのみ觸れようとする二傾向が見らるゝ。

三、其他の姉妹學關係。

9、動植物群關係は一通りの資料充實した故か、大きな動きがない。

10、動植物群以外に、何等か編年資料を得る爲、黃土や河岸段丘の研究等主として地質學方面への交涉研究の一傾向を見る。

以上が私の氣付いた所であつて、此樣な舊石研究の內實は、識者に對しては勿論遼東の豕ではあるが、他の一面に於て此方面に多くの歡心を持たれない一部の讀者には、或は意外の事情であるかも知れない。歐洲舊石編年と云へば、文化に七期は動かぬ所で、氷河關係其他も、大勢の歸する所がある樣に見られ勝である。成る程、文化の七期（或は六期）には、或る鞏固さを有して居り、其順位も略決定的とはなつて居るが、これとてまだ〲細位の變化は保障し得ない。この消息はブロイ（第三十三表）を見られても思ひ當るものがあらう。他の一面に於て、舊石文化が何れの氷河時代から始まつたにせよ、其始めから終りまでの時的經過は、其實年代こそ解つては居らないが、決して短いものでない。否驚く可き程の悠久な經過である。この長大なる時的經過內に於て、僅々六期や七期の文化階梯のみで全舊石文化が移行したのか、此の間に猶、吾人等の知らない、氣付かない、文化階梯の存したか否か。これは今日全く未詳のことであるにしても、理論としては、文化階梯の增加も否む可き何物もない。如何に舊石文化が猶最も低き文化階梯にあり、文化低ければ低きに比例して、文化移行には多大の時

（77）例ば、Die Grundlagen zur Universalgeschichte der Menschheit. 1929. の如きものがある。

其八　綜括批判

今迄に略時的經過に從つて、編年當初より今日近くまで、私の氣付いた研究者の編年に就て、其一通りを述べた。勿論それには不備も不足もある。歐洲著名の史前學者として、佛國だけでも L. Capitan, V. Commont,[78] J. Dechelette[79] R. Verneau 等の編年もないし、更に英獨其他にも漏れは多いと考へる。又中には二三は略したのもある。[80] 然し舊石編年の一般經過としては、其大局は述べた考へである。而して、これが今日に於ける主要傾向を要記すると、次の様になる。

一、文化階梯

1、文化階梯は其最少限がプレー・シエレアンを含んで七期が多い。

2、最近新に階梯編設の一傾向を見る。

3、七期階梯内分傾向の著しいものがある。

4、前期舊石に於ける所謂塞騣ムステリアン問題に就ては、大勢の趣く所がない。同様に後期舊石に於けるソリユートレアン問題も大勢がない。

5、地方色の認識が漸く緒に就てきた。これと連關して、研究の範圍が歐外にも及ばんとしつゝある。

6、一部には舊石上限の關係上、原石問題が再燃せんとして居る。

二、氷河關係

一覧表（S. 30—31）とに分れ、且つ夫々地方別も行はれて居るのを、私が勝手に兩者を一纏めとし、且つフランス地方を立前とした分だけにしたから、或は原著者より叱られるかもしれない。

（73）フラックスホールなる地名は、英國であると考へらるゝ故、モア其他の研究を見たならば、鮮明はするものと考へらるゝけれども、未だ實際に勉強して居らない。何れは増補も出來る時がくるとは考へては居る。他にブロイはコツロフスキーと共に Etudes de stratigraphie paléolithique dans le nord de la France la Belgique et l'Engleterre. (l'Anthr. Tom. XLI. N.5—6. 1931. Tom. XLII. N. 1—2. 1932.)（未完）に研究を發表して居るから、こゝからも、資料が得られよう。

（74）クロマーの所謂石器の發見地に就ては、私には疑が深い。第一には其地層は鮮新なりと其研究者モアの云ふ所ではあるが、同じ英國内の研究者である、Abbott はこれを Günz-Mindel Interglazial 卽ち第一氷間期と云ふて居る（G. G. Mac Curdy; (L. 3) P. 97)。而してパイヤーの如きも其氷間期として居ることは本文で述べた所であり、マッカーデーも單にこれをプレー・シエレアン（L. 3) P. 106. に入れ、これをその編年（第二十八表）に照して見るとプレー・シエレアンは第一氷間期として居り、E. Werth; Der fossile Mensch. I. 1921. S. 563. も亦アボツトと同論である。此の如くにモアの鮮新説に對しても相當に反對の存して居る所は、兎にあれ其根本をなす地層決定に弱い所が存するものと考へる。特に今日では未だ充分なる連絡が英國氷河編年とアルプスのそれとの間に出來て居らぬ様であるから、尚更地層決定は確實性を要求して居る。第二にはクローマーのフチーレストベッドは其所謂石器發見地層は、史前學上の單層であつて、層位のあるのでない。從つて孤立的である以上、他との比較は一層愼重であつて欲しい。第三にはこの發見地は所謂遺跡として、人爲の結果を物語るものではなく、單なる土中より遺物を發見せらるゝのみであるから、一つに其出土物が人工か否かにあるのであるから、こゝにも弱い所がある。これを出土物のみによつてクローマリアンなど、編年は、再考に價する。第四にはこの層には多くの單なる自然石もあり、これより抽出したものらしいから、其人工か否かに就ても、研究の餘地がある。第五には其石器なりと稱せらるゝものは、寫眞や實で見ると人工顯著で疑いないとまでは申し得ない。これのみで人爲決定は原石論と同様に、公算は二分一に過ぎないから、この歸納は決して強いものでない。等のことがあるので、私は愼重に研究をして見たいと考へて居ると同時に輕率を誡めたいと思ふ。

（75）F. Birkner; Der diluviale Mensch in Europa. 1925. S. 48. 等參照。

（76）ウキーガースには尙 Diluvialprähistorie als geologische Wissenschaft. 1920. なる著作があるが、これは（L. 1）と其内容に大差がないから、こゝからは編年一覧を作出しなかつた。

るが、これは彼れが世界中の石器時代を見る爲めに、かく大摑みに摑握したに過ぎない。兎に角、同じウキンのバイヤーも隨分大摑みに纏めた論文もあるが、(71) これはそれ以上であるらしい。從つて動もすると、纖細な研究と注意とに缺ける點が出てくる樣に思はるゝのである。然しながら本表としては、氷河編年を三氷四氷の兩說を併せ用いたり、其舊石始原を四氷說の第二氷期（Mindelglazial）（三氷說のリス氷期）にして居るが、しかもこれはメスビニアンとし、且つ其位置は比較的氷河の影響少なき北阿として居る所などは、ヲスボン、ブロイに從はるゝこともなく又バイヤー、ウキーガースの如く、七編年期を固守することもなく、新にシアロジアンをシエレアンの以前に加へる等其說の可否は第二としても、そこに細心の注意もあり、面白くもあつて、彼れ獨自の立場も認めらるゝ。これで甚だ概雜ではあるが、只今私の手元で搜出した編年表を一通り個別的に夫々に就て概評した考へである。而して次にこれ等を綜括して眺めて見る。

(67) M. C. Burkitt; Prehistory, 1925. XXVI. Archaeological divisions. より。但し本表には、第三十一表として揭出した外、新石時代、青銅、鐵時代の總ての編年があるけれども、他を略した。

(68) H. Obermaier; Diluvialechronologie; Reallexikon der Vorgeschichte. 1925. による。

(69) 本表は H. Breuil; Palaeolithic Industries from the beginning of the Rissian to the beginning of the Würmian Glaciation. (Man XXVI, 1926.) に發表せられたものと考へるが、これを見てない。O. Menghin; Weltgeschichte der Steinzeit. 1931. S. 22. の表中よりブロイのだけを抽出した。

(70) J. Bayer; (L. 1) S. 175. による。

(71) F. Wiegers; (L. 8) による。本書中には、この樣に取り纏つた表が見當らない。依つて S. 162—196. までの見出しにある文化階梯と其氷期關係とに基いて、私が作出したものである。

(72) Oswald Menghin; Weltgeschichte der Steinzeit. 1931. による。但しメンギンの原表は、プロトリテクム一覽表（S. 24）とミオリテクム

者でもあり、爲に其三氷説を、人々が著しく注目するに到つて居る。これに就ては、尙後述しよう。

最後に第三十六表として揭出したのが、メンギンであつて、其原書は最近入手したもので、未だ書評だに試み

編年第三十六表　O. Menghin, 1931.[21]

Eiszeiten nach dem Hauptsystem		Südfrankreich	
Geologische Gegenwart		Asturien Spättardenoisien Arisien	Miolithikum
Post-glazial	Daunstadium	Frühtardenoisien Azilien	
	Gschnitzstadium	Frühazilien Uebergangsmagd.	
	Bühlstadium	Magdlénien(3–5)	
Würmglazial	Würmglazial	Solutréen (1–3)	
		Aurignacien (2–6)	
Riss Würm-interglazial		Spät / Mittel / Früh } Moustérien	Protolithikum
Rissglazial	Riss Würm-interglazial	Spätacheuléen	
Mindel Riss-interglazial		Frühacheuléen	
		Chelléen Chalossien	
Mindelglazial	Rissglazial	Mesvinien (Gafsa) in Nordwestafrika	

てない。其文化階梯には新しい彼れ獨特の術語がある、中に了解に難むものもあるが、大局上文化内容に於て、他と大差がない樣である。只前期舊石を Protolith、後期舊石及び中石文化を併せて、これを Miolith となして居

にも思はるゝ。[51]而してこの第三十三表は單なる前期舊石時代のみであつて、ブロイの最も得意とする後期舊石文化の缺除は、私の遺憾とする所であり、將來の追補を心掛けて居る。

バイヤー第三次（第三十四表）は、これを五年前の第二次（第二十二表）と比較すると、相變らず大差がない。其文化階梯もブレー・シエレアンを含んで七期として動かない。而して同樣の三氷期説を有するウキーガース（第三十五表）と共に漸次共鳴者を增して居る現象すら見らるゝ。[53]バイヤーは其表中に於て其第一氷期(M)の上に、Red-, Norwich-Crag 等の Crag を揭げて居るから、例のモアの硏究を見て居る解であつて、特に其氷間期の所の上には、Forest bed としてクローマーを擧げてはあるが果して其文化所產を認むるかは明でないが、これを認むるとしてもブレー・シエレアンかシエレアンに屬するものとして、ヲスボン、ブロイ等のクローマリアンを認めて居らない。そこにも亦彼れ獨自の見解も見らるゝ。これに對し同樣三氷説のウキーガースも亦、十五年前の其第一次（第十三表中央）[54]に大差がない。最初から其第一氷間期にブレー・シエレアンを置いて動かない。四氷説か三氷説かは別としても、最初から舊石始原をより古く見た所は、最近の傾向を指導した一大原因でもあり、或る意味の勝

編年第三十五表　F. Wiegers No. II. 1928.[52]

Geologische Stufe	Kultur- Stufe
Post Glazial	Azilien-Tardenoisien
Bühlstadium	Magdalénien
III. Glazial	Solutréen
	Aurignacien
	II. Obere Moustérien
2. Interglazial	I. Untere
II. Glazial	II. Obere Acheuléen
	I. Untere
1. Interglazial	Chelléen
	Praechelléen
I. Glazial	——

リアンを設定しシエレアンを細分したが、アシウレアンは單在せしめたのとは相異る所であり、手近の資料の充否によつても、こんな相違が起るのではあるまいかと想像を催さしむる。このブロイの新研究が、心境の變化？の一大原因と私の考へるものは、已述の英のモア等のクローマー附近の研究である。其發見者はこれをアーリー・シエレアンと號したのをブロイが研究し、これをアーリー・シエレアン乃至は從來の樣にプレー・シエレアンと稱し得ないにせよ、少なくともそれが人工遺物である可きは、疑いないとなし、こゝにクローマリアンを編設したものである。それ以前の階梯としてヲスボンもブロイも編設して居るフラックスホーリアンに就ては、目下私の手元に研究資料不足で充分なる批判を下し得ない。[三] それでも、ブロイから見れば、發見者が鮮新となしたに對し、これを第一氷間期まで繰り上げ、且つ文化階梯として、クローマリアンと新にしたのであるから、こゝには相當の研究と理由ともある可きことゝは思はるゝが、私は更に私自身としても、今一度よくこれを研究もして見るが、一面にはブロイの自重をも望まざるを得ない。それも史前學なる性質上、事實の前には改變も止むを得ないとしても、猶研究の餘地が存する樣

編年第三十四表　J. Bayer, No. III. 1927.[三]

ら、四氷説の第三氷間文化始原説から一躍して二氷期二氷間期を一飛びに飛び起したのだから大きな改變である。それが舊石研究の一軸心をなし舊石史前學の一大權威のことであるから學界の耳目を聳動せしめもする。其

編年第三十三表　Breuil, No. II. 1926.[2]

（前期舊石編年）

Würmglazial	Spät- Mittel- Moustérien
Riss-Würm Interglazial	Frühmoustérien (Combe-Capelle I) Levallois IV (Montières)
	Micoquien III (St. Acheul) Levallois III (Muchenbled zu Montières) Weimer Kultur
Riss-glazial	Micoquien II (Muchembled zu Montières) Levalloisien II (Crayford, Northfleet, Montières)
Mindel-Riss Interglazial	Micoquien I Levalloisien I (=Mesvinien) Acheuléen II u. III (Sturry) Clactonien
Mindelglazial	?
Günz-Mindel Interglazial	Acheuléen I Chelléen Cromerien
Günzglazial	Foxhollien

文化階梯を見ると、前期舊石のみで、新にフラックスホーリアン、クローマリアン、クラクトニアン、レワロアシアン、ミコキアン等新たなる階梯が賑々しく編設せられ、これが從來のシエレアン、アシユウレアン、ムステリアンと相伍して居る。且つアシユレアンはI—IIIまで細分せられ、前表ヲーバーマイヤーは、プレー・ムステ

編年第三十二表　H. Obermaier, No. III. 1925.(3)

Südliche Kulturen.	Spanien.	Westliches Europa.	Mittel Europa. Nördliche Kulturen
Endcapsien.	Kalte Fauneneinschläge		Azilien
		Spätglazial	M. Magdalénien
Jung Capsien	Magdalénien	Kalte Fauna der letzten Eiszeit	S. Solutréen
	Solutréen	Hochglazial	
Alt Capsien	Ober Aurignacien		A. Aurignacien
		Frühglazial	M. Moustérien
Moustérien			
Acheuléen			A. [Acheuléen]
Chelléen		Warme letzte Zwischeneiszeit　Chelléen	Prämoustérien
	Kaltes Chelléen (?)	Kalte Fauna der vorletzten Eiszeit	
Prächelléen		Warme vorletzte Zwischeneiszeit　Prächelléen =	Ältestes = Prämoustérien

Letzte Zwischeneiszeit）等單に氷期や氷間期と云ふに止めて居る。これはこの素が西歐中歐等に跨る關係上、アルプス氷期に依るの不具合を避けたものとも解せらるゝが、踏み込んで言へば、單なる氷河編年の動搖や各氷河の相關問題に直接觸れない爲ででもある樣に見へ、從來に無く弱氣が讀まるゝが、この方がより賢明かもしれない。それにしても、新しく都合のよい文化階梯の多產と改變とは、夫々研究の結果であり、進步とも言はれもしようが、改變は厭はぬとしても、これに伴ふ確乎たる基礎がなければ、何時までも動搖しまいか。且つ新階梯の創造には、それだけの理由を明にしないと、判斷に困むものが出來、手輕な改變創造は反つて權威を失墜せしむる。

ブロイ第二次（第三十三表）も亦、大改變である。これはヲスボン第二次（第二十五表）につぐ、思ひ切つた改變である。ヲスボンの方では、第三紀（鮮新）にまで文化始原を下げ、其フヲックスホリアンをこれに當てゝ居るが、ブロイはこゝまではきてない。其フヲッスホリアンは兎に角、ギュンツ氷期（第一氷期）として居る。然しなが

く佛國標準編年を採用したに止まらず、細分までして居る。其氷期關係は第一次より延び第二氷間期にプレー・シエレアンを以てし、こゝにも延長傾向が見らるゝ。ヲーバーマイヤー第三次（第三十二表）は其十年前の第二

編年第三十一表　M. C. Burkitt, No. II. 1925.[2]

Campignien	Danish Kitchen Midden etc. Maglemose	Glacial Succession
Azilien	Tardenoisien Upper Lower	Daun
Magdalenian	VI V } Types of Art „mobilier“ and evolution of harpoons IV	Gschnitz
	III II } Evolution of lance points I	Bühl
Solutrean	Upper Middle Proto	
Aurignacian	Upper-Gravette point Middle beaked burin Lower. Châtelperron Transition. Audi point	Achen
Mousterian	Late Early	Würm
Acheulean		Ealy Würm
Chellean		Riss-Würm
Pre-Chellean		Riss Mindel-Riss

次(第十七表)に對し又亦改變して居る。其文化階梯に於て、第二次に寒古、暖古、新等のシエレアンを編成したのが、今度は寒シエレアンと單なるシエレアンが殘り、新に最古プレー・ムステリアン、ただのプレー・ムステリアン等が編設せられた。氷期關係は不鮮明となり、最終氷期（Letzte Eiszeit）だの暖最終氷間期（Warme

l'Europe. Cong. Inter. Anthr. et Arch. Préhis. Geneva. 1912. Tome. I. P. 277—290. にあり粗製握り槌等の文化遺物と暖系の古象(Elephas antiquus) 等が出土し、それがプレーシエレアンとすべきか、シエレアンに入る可きかに就ては問題もあつた。(拙著、(L. 5) S. 180. 參照)。これをチーバーマイヤーはシエレアンとして居る。この外前期舊石に屬する遺跡研究等は共著、Fossil man in Spain. 1924. にある。

(66) マックカーディは Cromer, Forest Bed に對し、ギア其他が上部鮮新とするに對し、Abbott の第一氷間期 (Günz-Mindel) 說を引用して居る。(L. 3) Vol. I. P. 97. これから見ると、彼れの第一氷間期プレー・シエレアン說が生れ得るものと判斷することが出來る。テスポンの樣にクローマリアンとしなくとも、これをプレー・シエレアン中に含ませば足るのである。

其七　最近の編年

これで漸く最近までに辿りついた。元々歐洲大戰以降の編年に就て多くを述べる心算であつたが、これ等の編年に到達するまでには、前述の如き經過を見て居るのであつて、一つには其過程を明にし、他には萬一にも編年なるものが簡易に作出せられ得るとの誤解かにも備へたものである。ローマは一日にしてならずとは、私共の研究にも其例が多い。この各種の編年表の如き夫々一頁に綴らるゝのみではあるが、この表は夫々の舊石研究の結唱に外ならない。然かも舊石史前學の碩學夫々が研究して作出した個々の表には、夫々の學風も、個性も、學の傾向をも織り込まれた貴重なるエッキスであると同時に、內容を充分に吟味しないと、消化不良をも起し得る。

この一九二五年以降今日までには、大戰直後の鬱積した樣な多數を見當らない。僅に次に取り纏めた、六表に過ぎない。然しながらこれとて決して平靜ではない。それには色々の問題もある。

先づバーキットII（第三十一表から）見て行くと、これが第一次（第十八表右）と比較すると、文化階梯は悉

い。この捺標が Die ältere Steinzeit in Polen. („Die Eiszeit" Zeitschr. f. allg. Eiszeitforschung. H. 2. S. 112—163. 1924.) にある由であるが、これすら見てない。J. Bayer; (L. 1) S. 25—26. によつて居る。

(54)　(53)に同じ。

(55)　(50)の Osborn and Reeds の文獻に發表せられたものであるが、Bayer; (L. 1) Fig. 7. によつて居る。

(56)　編年第十八表は、(48)の如くチーパーマイヤーによつたのであるが、其參照文獻中に M. C. Burkitt; Pleistocene desposits in England, and the Continental chronology. (Proceed. of the Prehistor. Soc. of East Anglia for 1919—20. Bd. 3.) があるから、これに掲出せられたものと思はれるが、見てない。

(57)　暖ムステリアン問題に就ては、前掲(29)の3に觸れた如く、既に古くより問題が存して居つたが、舊石編年それ自身が確立するまでに立到らなかつた爲、問題視せられずにきたが、どーやら文化上の六期編年が成立すると共に、再び問題となつて居る。猶これに關しては、拙著、(L. 5) S. 226—241, 259—266. 參照。

(58)　この寒シエレアンは既にチーパーマイヤー（第十七表）の採用した所であり、マカリスターは襲用したに過ぎない。但し何物を指すかは甚だ曖昧である。單なる假設の樣に思はれる。

(59)　M. Boule: Les Hommes Fossiles. 1923. P. 48—49. に本表があるが、不用意にウキーガー (L. 8) S. 51. より轉載し後に飜譯せられて居つたことに氣付いたが、其まゝにした。

(60)　W. J. Sollas; Ancient Hunters and their Modern Representatives. 1924. P. 668. による。

(61)　George Grant Mac Curdy; Human Origins. A Manual of Prehistory. 1924. Vol. I. P. 84. (L. 3) による。

(62)　Hubert Schmidt; Vorgeschichte Europas. 1924. S. 10. による。但し本表には更に西歐、中歐、地中海地方の細分があり、地方的異同を明にしてあるが、表が大き過ぎた故、惡いとは思ひながらこれを略した。

(63)　Jacques de Morgan; Praehistoric Man. 1924. P. 70. による。

(64)　J. Reid Moir の原石其他の研究の1端に就ては、拙著、原石文化問題（生物學講座）一九項、註三、參照。又同氏のそれに關した文獻は、同拙著、文獻四、S. 9. 10. No. 113—120. に掲出した。

(65)　Torralba はマドリッド郊外にあり、古くより有名である。既に Marquis de Cerralbo, Torralba, la plus ancienne station humaine de

察と考へる。Hシユミツトの編年（第二十九表）も前二者と大差がない。たゞ問題のアーヘンシワンクングを第三氷間期となした點位であるが、前二者と共に比較的穩健なる考察と思はれる。

最後のものが、モルガン（第三十表）である。此表の出來方にも讀み惡い所もあるが、同じ佛國でありながら、稍々異る所のあるのは、前期舊石のみを Palaeolithic となし、後期舊石は三編年は認めて居るが、この表には略されこれを Archaeolithic とした點である。其氷期關係はシエレアンを第二氷期として暖期を認めてないが、これ亦第三氷間期舊石始原論ではない。然しこれとて化石人類研究所一派の說、特にブールとは異る所があり、大局的には大勢に順應して居る。

（46） Lucien Mayet: Abri-Sous-Roche Préhistorique de la Colombiére prés Poncin (Ain). 1915. p. 180. による。

（47） Hugo Obermaier; Das Paläolithikum und Epipaläolithikum Spaniens. (Anthropos, XIV—XV. 1919—1920. S. 174.) による。但し同表の所に、これは一九一六年の發表 (El Hombre Fósil. 1916) したものとあり、同書が見當らないから、かく前揭によつたものである。

（48） H. Obermaier; Diluvialchronologie; Reallexikon der Vorgeschichte. 1925. による。

（49） W. Soergel; Loess. Eiszeiten und palaeolithische Kulturen, eine Gliederung und Altersbestimmung der Loess. Jena 1919. に發表したものゝ由であるが同書を見てない。J. Bayer; (L. 1) L. 24 によつて居る。

（50） H. F. Osborn and Ch. A. Reeds; Old and new standardsds of pleistocene division in ralation to the prehistory of man in Europe. (Bull. of the Geo. Soc. of Amer. Vol. 33, No. 3, S. 465. 1922.) に揭出せられたものであるが、同書を見てない。J. Bayer; (L. 1) S. 30. による。

（51） R. A. S. Macalister; A Text-book of European Archaeology. 1921. P. 593—595. による。

（52） J. Bayer; Kritische Gruppierung und Neubenennung der geologischen Abschnitte des Eiszeitalters. (Mannus, Bd. 14. S. 257. 1922) による。

（53） L. Kozlowski; Starsza epoka kamienna w Polsce (Paleolith). 1922. に揭出せられたのであるが、ポーランド語で讀めないし、見てもな

て、其說の可否は別としても、其自信に對しこれが氣魄を滿へしむるものがあり、一服の清涼劑の想がある。されど時勢の進運は一刻も猶豫をしてくれないと共に、人々の捨て去つた孤壘に、果して守り遂げられようか。先づヲーバーマイヤー（一九一六）去り、ヲスボン（一九二二）改め、終に最後の友、ブロイ（一九二六）も亦袂を分ち、今や全く彼れ一人、友なき身となつて居る。

このブール編年の翌年卽ち一九二四年には、英のソーラス（第二十七表）米のマックカーディ（第二十八表）及び獨のフーベルト・シュミット（第二十九表）佛のモルガン（第三十表）が夫々其編年を發表して居り、こゝに期せずして、佛、英、米、獨の諸家の傾向を比較することが出來る。ソーラス（第二十七表）に於ては、地質學區分を採用して居り、ブレー・シエレアンを認めてないが、ムステリアン1がミコクアンとして、暖ムステリアンを認めて居る。米のマックカーディ（第二十八表）は、遠く歐洲を離れて直接研究の渦中にない。從つて比較的公正な立場にあり、ヲスボンの樣に極走してない。これが內容を見ると、四氷說を採用して居り、ブレー・シエレアンを第一氷間期（Günz-Mindel）にまで下降せしめ、且つ第二氷期（Mindel）に文化期を見ない。卽ちブレー・シエレアンを孤立せしめてある所に、特色を見る。これは一つには、モア其他のクロマー問題に對する用意も含まれると[85]共にこの長大な氷期の實年代間に、如何に夫々の文化期の經過時間が悠久であろうとも、六期や七期で滿し得るものとは考へられない。それが化石人類研究所派の如く第三氷間期舊石始原說ならまだよいが、このマッカーディの如く第一氷間期說なれば、そこに文化上の溝渠が出來たとて怪しむに足りない。否從來多くが氣付かずに、僅にヘルネス（第九表）のみに明示せられた他は、一連に夫々の文化期を連接せしめてある。故にこの文化溝渠の考慮は、前述したコッロフスキー（第二十四表）の文化期並行存在の考案と共に、重要なる考

に、從來化石人類研究所の一員として、其派の人々と緊密なる連絡を有し、且つ相互切磋のもとに作出せられた、舊石編年に對する反逆の第一聲を放つに至つた。この編年たるや、相變らず四氷期説に從つて居るもの丶、舊石始原のプレー・シエレアンを第二氷間期に繰り上げたのみでなく、寒シエレアン、暖古シエレアン、新シエレアン等こ丶に多くの階梯を編設して如何にも古い方へ賦し出された様な形である。此階梯多産は一つにはトラルバ等スペイン地方の粗造握り槌に基く所もあり、次に動物群の考慮もあるとは考へらる丶が、他にはこの改變を緩和するの一手段ではあるまいか。更にこの表では中石（Mesolith）を認めないで、續舊石（Epipalaeolith）を使用して居るが、今日の大勢では何時まで持久し得るか、最早時間の問題に過ぎないが、こ丶にこの中石問題に就ては、觸れない。

かくヲーバーマイヤーによつて、編年改變の第一聲が放たれ、一九二二年には、上述のヲスボン第二聲を叫びこ丶に其編年の破綻を大にする結果に到達すると共に、前掲してきた如く歐洲大戰後の諸家は、殆んど悉く化石人類研究所一派の第三氷間期舊石始原説をば、認めて居らない。この大勢のもとに化石人類研究所を代表するブール第三次編年（第二十六表）を見る必要がある。

處がブールを見ると、其第一次（第七表）第二次（第十三表內）と比較して見ると其根柢には殆んど變化がない。其氷期に對する見解も相變らず四氷説を採用せるのみでなく、其獨自の第一第二氷期は第三紀（Tertiaire）との考を捨て丶居らない。只其文化期に於て、第一次の當時（一八八九年）四期階梯のものを、新しく六階梯とし、これにアジリアンを過渡期として加へたに過ぎない。學界の大勢が上述の如く、四周悉く非なのに對し、斷乎として二十餘年の自説を守つて居る。頑冥と云はば云はれもするかも知れないが、自信の無い朝改暮變論者に比し

これより先、歐洲大戰の勃發は敵國人（墺？）たるの故を以て、ヲーバーマイヤーは化石人類研究所に止まるを許されず、彼れはスペイン、マドリッド大學に移つた。而して彼れは戰禍を外に、悠々研究繼續の幸を得たのみに止まらず、

編年第三十表　J. de Morgan; 1924.(註)

Pliocene. Upper.	Alluvia of the plateaux. Moraines of the first great glacial extension.	*Elephas meridionalis. Rhinoceros etruscus. Equus stenonis*, etc.		Eolithic industry (?)
	Transitional layers of the Forest-bed of Saint-Prest de Solilhac.	TEMPERATE CLIMATE.		
Pleistocene. Lower.	Moraines of the second great glacial period.	*Elephas antiquus, Rhinoceros merki, Hippopotamus.* COLD, DAMP CLIMATE.	Chellean type predominating.	
	Alluvia of the middle terraces, calcarious tufa.	Epoch of the *Hippopotamus.* MILD CLIMATE.		Palæolithic industry.
Middle.	Moraines of the third great glacial epoch.	*Mammoth, Rhinoceros tichorhinus, Bear, Hyæna*, etc DAMP, COLD CLIMATE.	Acheulean type predominating.	
	Débris of the Caverns, loess, and alluvia of the lower levels and terraces.	Epoch of the *Mammoth.*	Moustierian type predominating.	
Upper.	Higher floors of the caverns. The upper loess.	Epoch of the *Reindeer* fauna of the steppes. COLD, DRY CLIMATE.		Archæolithic industry.
	Transitional strata.	*Cervus elaphus, Castor.*		Mesolithic industry.
Modern	Recent alluvia, Peat.	Modern species and domestic animals. CLIMATE APPROXIMATING TO THAT OF TO-DAY.		Neolithic industry: Metals.

從來兎角暗黑視せられがちであつたイベリア半島に光明を捧ぐるの榮を擔ふた。其前期舊石中、問題視せられて居つたトラルバ（Torralba）(註)其他の前期舊石の研究や、カプシアン（Capsien）の鮮明等多とすべきものが多い反面には、學界に波瀾を生みこれをして多事ならしめて居る。其イベリア半島の究明は、彼れをして其從來稱道し來つた舊石編年に動搖を起し、終にこの第二次編年（第十七表）を生むと同時

編年第二十九表　H. Schmidt, 1924.[82]

Geol. Gliederung	Klima	Tierwelt	Mensch	Kultur	
Tertiär			?	Eolithen ?	
Älteres Quartär	2 Eiszeiten 1 Zwischen-eiszeit			Eolithen ?	
2 Zwischeneiszeit (oder letzte)		Südelefant, altertüml. Pferd	Kiefer von Mauer Schädel v. Piltdown	Stréppen Prä-Chelléan	Faustkeilindustrie
	Warm	Altelefant, Merckisches Nashorn, Flusspferd		Chelléan	
	Gemässigt	Eindringen d. arkt. alpinen Tierwelt, ohne Renntier	Skelette von Le Moustier, = Spy, Chapelle-aux-Saints, = La Ferrassie, = La Quina, Krapina. Neandertalrasse	Acheuléen	
III. Risseiszeit (od. Würmeiszeit)	Kalt	Mammut, sibir. Nashorn		Moustérien Handspitze	
		arktische Nagetier			
		Renntier Wälder: Bison, Hirsch, Pferd			
3 Zwischeneiszeit (od. Achen-schwankung)	Gemässigt Kälter	Rückgang der hocharktischen Tiere Waldfauna wie vorher	Aurignac-Rasse Combe Capelle	Aurignacien	Klingenindustrie
IV. Würmeiszeit (oder Bühlstadium)	Kalt	Arkto-alpin	Skelette. v. Cromagnon, u. a. i. Dordogne, Mentone, Brünn, Predmost. Cromagnon-Rasse	Solutréen	
		arktische Nagetiere		Magdale-nién I	
Abschmelzzeit	20000v.Chr.	vorwiegend Renntier			
Joldiameer Eismeer	Kälte abnehmend	Weissbirkenstufe = Beginn der Föhrenstufe		Magdalé-nien II	
Ancylussee Süsswasser	Boreal	Föhrenstufe = Hirsch, Elch	Ofnet-Rasse älteste Kurzköpfe	Azilien Tardenoisien (Kleinformen)	
Litorinameer Salzwasser	Atlantisch 5000 v. Chr.	= Eichenstufe	Rassenmischung	Campignien (Grossformen)	

が大陸と英國とでは、互に個々に研究する様な傾きがあつたに對し、互に其相關々係に就て、一層相接近するの

編年第二十八表　G. G. Mac Curdy, 1924.(三)

Correlation of Ice Age and Cultural Chronology

Ice Age Chronology		Cultural Chronology	
	Post Daun	Neolithic	Campignian
	Daun Advance		Maglemosean
	Gschnitz Advance		Azilian-Tardenoisian
Holocene		Mesolithic	
	Bühl Advance		Magdalenian
	Achen Retreat		Solutrean
	Würm Advance		Upper Aurignacian
IV Glacial (Würm)	Lanfen Retreat		Lower Aurignacian
	Würm Advance		Upper Mousterian
III Interglacial (Riss-Würm)			Lower Mousterian
III Glacial (Riss)			Upper Acheulian
			Lower Acheulian
II Interglacial (Mindel-Riss)			Upper Chellean
			Lower Chellean
II Glacial (Mindel)			
I Interglacial (Günz-Mindel)			Pre-Chellean
I Glacial (Günz)			
Pleistocene		Paleolithic	
Pliocene		Eolithic	Foxhallian
			Ipswichian,
			Cantalian(?)

一楔機ともなつて居る。兎もあれ、このクローマーを肯定した結果、其編年を根柢から改めたのが、第二十五表のヲスボンであつて、これを其第一次(第十四表)と比較したならば、時的に最短期論者が、一躍して最長期論者に改變したのであるから、こんなに大きく改變した他の例がない。改變論のレコードホルダーである。改變の是非は兎に角としても、この結果は其第一次編年(第十四表)には從つて居つた、化石人類研究所一派に對する反逆ででもある。否ヲスボンは其第一者ではない。それ以前、反逆者がある。而してそれは、外からではなくして其一派の内の内から出て居る。それが一九一六年のヲーバーマイヤー(第十七表)である。而してこの關係を明にする。

編年第二十七表　W. J. Sollas, 1924.(註)

Age.	W. Europe.	C. Europe.	Industry and Hominidœ.
Monastirian, Upper	La Madeleine Chancelade Bruniquel Laugerie Basse Placard	Schweizerbild Kesslerloch Andermach Schussenried Sirgenstein	Magdalenian Homo sapiens
Monastirian, Upper	Solutré Lacave Placard Trilobite	Sirgenstein Predmost	Solutrean
Monastirian, Upper	Aurignac Font Robert La Gravette Chatelperron La Ferrassie L'Abri Audi	Metternich Krems Achenheim Willendorf Sirgenstein	Aurignacian H. Sapiens
Monastirian, Upper	Le Moustier La Quina La Chapelle	Sirgenstein Karstein Achenheim	Mousterian II H. Neandertalensis
Monastirian, Lower	St. Acheul La Micoque Laussel La Ferrassie Grimaldi	Taubach Ehringsdorf Krapina Wildkiekli	Mousterian I. or Micoquian H. Neandertalensis
Monastirian	Conliège St. Acheul East Anglia Hampshire	?	Acheulean III
Tyrrhenian, Upper	St. Acheul Laussel?	Achenheim Markkleeberg	Acheulean II
Tyrrhenian, Lower	St. Acheul	Huntisberg	Acheulean I
Tyrrhenian, Lower	Chelles Caversham	Mauer	Chellean H. Heidelbergensis Eoanthropus

			Geologische Ablagerungen	Fauna	Kulturen	Menschenrassen
Quartär	Holozän oder Gegenwart (Alluvium)		Heutige Ablagerungen. Moore. Klima dem gegenwärtigen ähnlich	Die jetzt lebenden Arten. Haustiere.	Eisen- Bronze- Kupfer- } Zeit Jüngere Steinzeit. Epoche des Übergangs: Azilien	Homo sapiens
	Pleistozän (Diluvium)	Oberes	Obere Schichten in den Höhlen. Oberer Teil des Löss. Klima kalt, trocken, Herrschaft der Steppen oder Tundras Post glaziale Phase	Steppenfauna Epoche des Ren Tundrenfauna	Paläolithikum Oberes { Magdalénien, Solutréen, Aurignacien	Homo sapiens fossilis { Rasse von Chancelade, Rasse von Cro-Magnon, Rasse von Grimaldi
		Mittleres	Hauptausfüllungen der Höhlen. Löss. Ablagerungen der Niederterrasse. Moränen der letzten Eiszeit. Klima kalt. feucht	Epoche des Mammut. Elephas primigenius. Rhinoceros tichorhinus usw.	Moustérien	
		Unteres	Unterste Höhlenausfüllungen. Ablagerungen der mittleren und unteren Terrassen. Kalktuffe. Grosse Zwischeneiszeit. Klima milde. Moränen der vorletzten Eiszeit	Epoche des Flusspferdes. Hippopotamus amphibius. Elephas antiquus. Rhinoceros Merckii	Unteres { Acheuléen, Chelléen	Homo Neanderthalensis Homo Dawsoni Homo Heidelbergensis
Tertiär	Pliozän	Oberes Pliozän	Ablagerungen der Hochstufen. Grosse Zwischeneiszeit, Eiszeit	Epoche des Elephas meridionalis. El. meridionalis, Rhin. etruscus, Equus Stenonis	?	?

編年第二十六表 M. Boule, No. III. 1923.(2)

一面では、英國舊石史前學者に大きな衝動をも與へ、大陸關係を誘起する等、波動の範圍も廣いが、これ等は畧

編年第二十五表　H. F. Osborn, No. II. u. Ch. A. Reeds, 1922.[註]

CORRELATION OF MARINE, TERRACE, CLIMATIC, RACIAL, CULTURE AND LIFE STAGES 1922

CHANGES IN SEA LEVEL - MARINE STAGES | RIVER TERRACE | GLACIAL AND INTERGLACIAL | PLANT LIFE | STONE CULTURES | HUMAN RACES | STAGES OF MAMMALIAN LIFE

CURVE IN PART AFTER DEPERET, BOULE, LAMOTHE. DATA FROM DEPERET, GIGNOUX, C. REID | CURVE IN PART AFTER PENCK, OBERMAIER. DATA FROM PENCK, KEILHACK, LEVERETT, DEPERET | DATA FROM OSBORN, PIRET, DEPERET, COMMONT, BOULE, PENCK, OBERMAIER

BY HENRY FAIRFIELD OSBORN AND CHESTER A. REEDS, 1922

89 —

して、直接クロマー附近の研究に就て見ると、モアはクローマーの Forest Bed を上部鮮新（Upper Pliocen）層

とし、其遺物はプレー・シエレアン近似形（モアのアーリー・シエレアン）をなすとのことで、こゝに從來多く

編年第二十四表　L. Kozlowski, (B) 1922.(五)

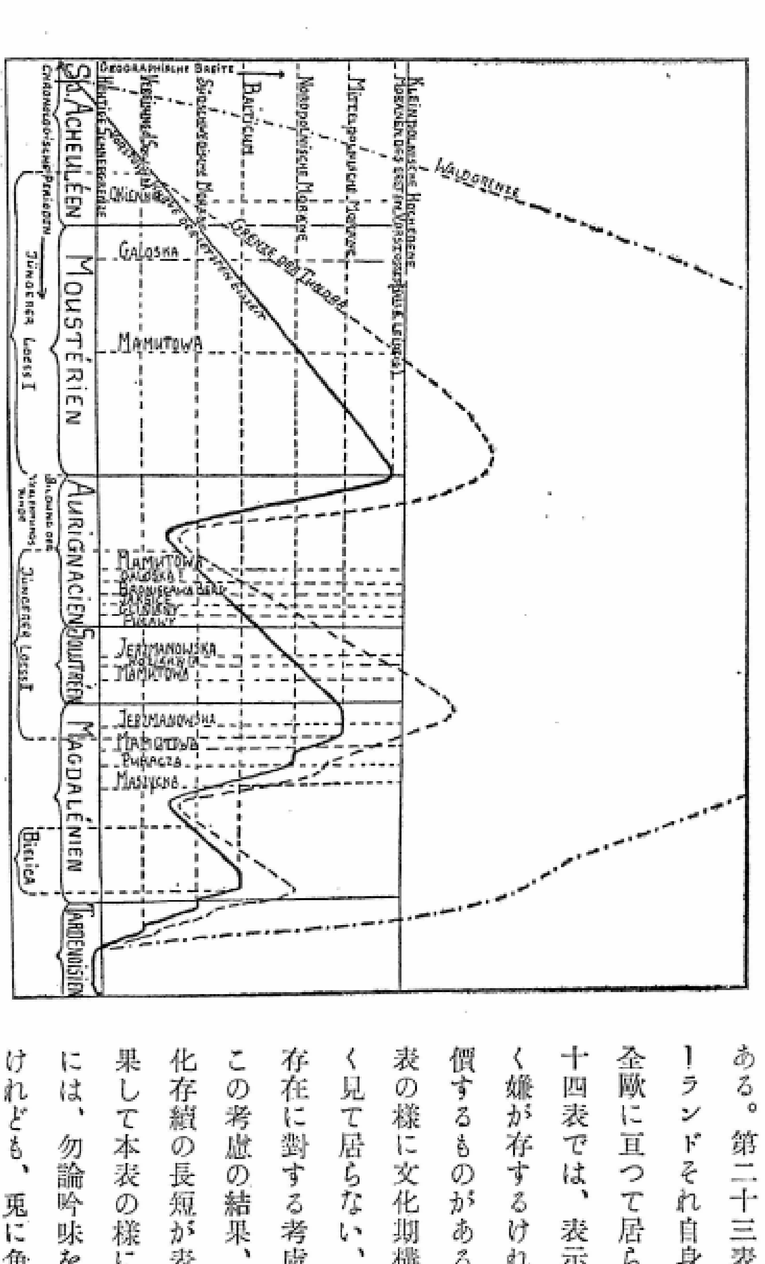
Levallois
Chelléen　Acheuléen
La Micoque
Premoustérien　Moustérien
Interglazial
Interglazial
Interstadial
Interstadial
Unter. Capsien　Ober. Capsien　Tardenoisien
Magdalénien Mitt. Eur.　Azilien
Maglemose
Aurignacien　Magdalenien
Mezina
Font-Robert　Chwalibogowice
Solutréen
Campignien

て居る）や、後期舊石に於けるソリウトレアン問題や、カプシアン關係まで樂に觸れて居るのは、一つに文化期並行存在可能の見地に胚胎して居る。而して更にまだ見る可き諸家の諸表がある。

こゝの諸家を見る以前、前に保留して置いた、第十七表ヲーバーマイヤーと今述べずにきた第二十五表のヲスボンとを、こゝに掲出したブール(第二十六表)とを對比して見る必要がある。この關係を明にする爲には、話は横道に走る樣だが、或る方面の研究に就て述べねばならない。それは歐洲大戰以前からのことではあるが、英國に於ける J. Reed. Moir の Cromer 附近の研究である。このクローマー附近は英國に於ける原石發見地として古くより有名であり、このモアによつて屢々研究し報道もせられて居る。(三) 處が歐洲大戰直後に於て再びこれを研究し發表するや、漸く諸家の目に止り、たゞに原石問題を再燃せしめたに止まらず、原石と舊石との移行關係、乃至は舊石始原問題等こゝに舊石問題にまで及ぼしてきたのである。又この問題は他の

々我流に猪突して居る。ゾルゲル（第十九表）やバイヤー等と同様に個性を發揮して居るのが、第二十三及び同

編年第二十三表　L. Kozlowski, (A) 1922.[38]



二十四表のコツロフスキーである。第二十三表の方は、ポーランドそれ自身のもので、全歐に亘つて居らないが第二十四表では、表示の明確を缺く嫌が存するけれども研究に價するものがある。第一には表の様に文化期構成が従來全く見て居らない、文化期並行存在に對する考慮であつて、この考慮の結果、地方的に文化存續の長短が表示し得る。果して本表の様にあるか否かには、勿論吟味を必要とするけれども、兎に角この考慮の存する所は特に多とせねばならない。從つて本表には寒暖ムスラリアン問題（彼れはミコクをアシウレアンにし

十一表）も、第二十表と同じく、表として見よくはない。文化は七期を認めた上アジリアン以下中石文化期に及

編年第二十二表　　J. Bayer, No. II. 1922.(82)

Alluvium >< Jungquartär >< Mittelquartär >< Altquartär >< Pliocän

んで居る。ブレー・シエレアンは第二氷間期であり第三氷期にシエレアンに(?)を附して、コールド、シエレアンを編年せんとする端緒をなして居るのが目につく。(83)其反面にムステリアンの褒貶問題に對しては顯著でない。次の第二十二表はバイヤー第二次であるが、これを第一次一九一二年（第十五表）と比較して見ると、丁度十年を經過して居るが、殆んど內容に變化がない。强いて云へば文化期中に、新しくブレーシエレアンを入れた位で其三氷期說や、氷期と文化關係等に就て變りがない。益

85 —

Günz Galaciation

Günz-Mindel Interglaciation

Mindel Glaciation

No certain traces of humanity in any of these phases.

1 British Association Report, Ipswich [1895] p. 825.

2 Proceedings, Bournemouth Natural Science Society. Vol. II. [1908—1910], plate iv. In the accompanying text there implements are described as Palaeolithic, but they have all the appearance of being Neolithic.

3 Prehistoric Society of East Anglia, I. [1914], p. 43.

Mindel-Riss Interglaciation

Man probably appeared in Europe in this phase. Pre-Chellean (?).
Limpsfield gravels (?).
Second Terrace in Somme and Thames valleys.

Riss Glaciation

Chellean flints fractured by ice, found at Saint-Acheul (?).

Riss-Würm Interglaciation

Steppe period.	Early Chellean.
	Third terrace in Somme valley.
Forest period.	Full Chellean with tropical animals.
	Third terrace in Thames valley.
	Fourth terrace in Somme valley.
	Anticipation of Mousterian at Montières and at Mentone may perhaps have been about this period.
Steppe period.	Acheulean begins to develop out of Chellean. Older Lösse beds.
	Valley terrace gravels in Thames.
	Acheulean passing into Mousterian.

Würm Glaciation

Mousterian culture.
Subsidence with ponding of warters in Thames and Somme. In the Laufen oscillation. probably, occupation of Wildkirchli Cave. Emergence with cutting of deep beds of Thames and Somme.

Achen Oscilation

Steppe period.	The Aurignacian invasion.
	Eastward movement of the Aurignacians and development of Solutrean culture. The latter Löss beds deposited.
Tundra period.	Return westward of the Solutreans.

In Scandinavia. the Yoldia period.

Bühl Stadium

The Magdalenian stage.
Invasion of the Iberian Peninsula by the Capsians.

Bühl-Gschnitz Metastadium

Beginning of Asiatic invasion.
Growth of the Azilian culture.
Movement northward of the first settlers on the Baltic.
Beginning of the Ancylus period.

Gschnitz Stadium

The Azilian-Tardenoisian stage.
Development of the Campignian culture
Maglemose.

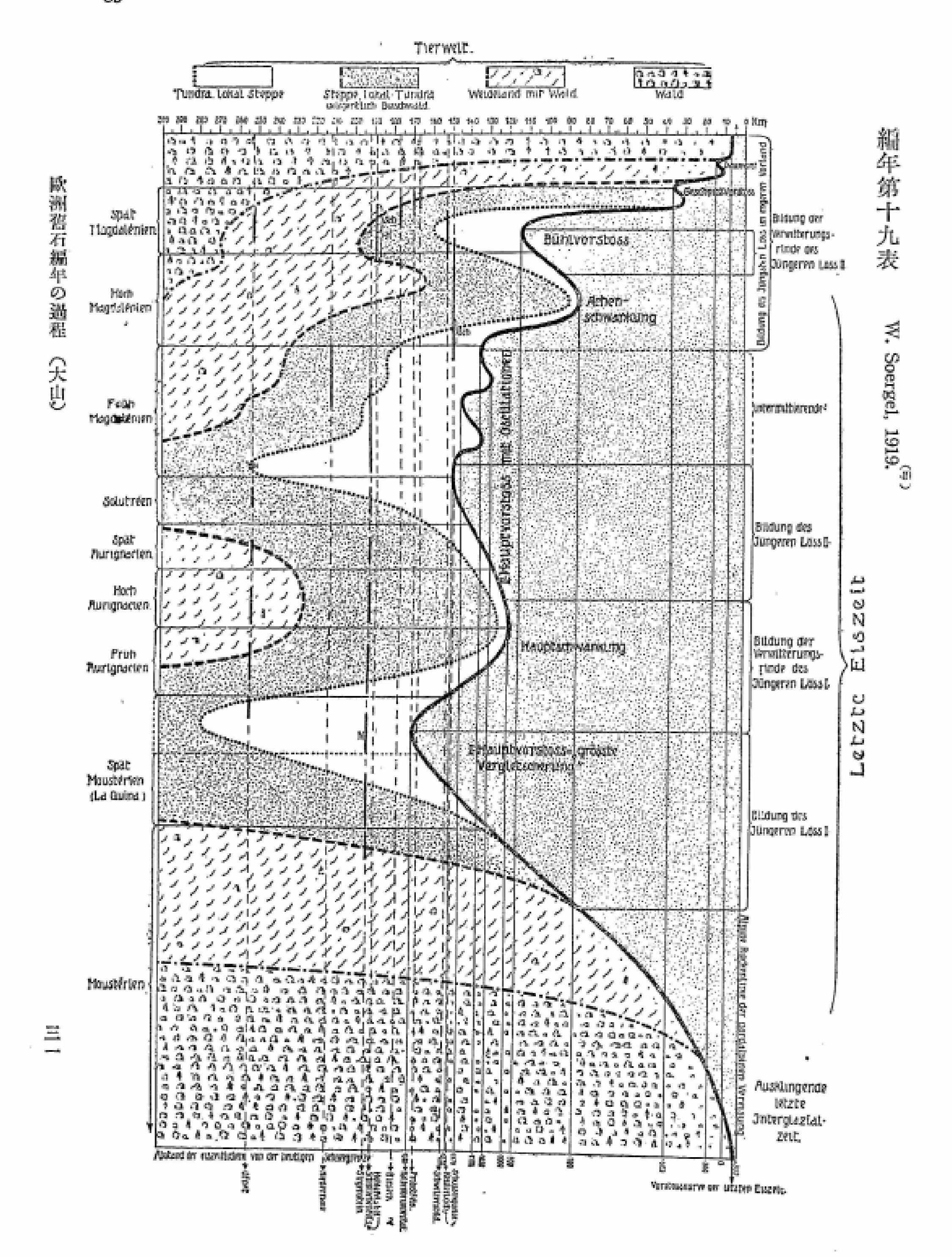
Daun Stadium

The Danish Shell-heaps on the shore of the Littorina Sea.
Spread westward and southward of the Campignian industry.
First appearance of man in Scotland (Azilian) and Ireland (Campignian).
Gradual development of Neolithic culture, which follows the Daun Stadium.

編年第二十表　Depéret, 1918—1921. Mayet, No. II. 1920—1921.(三)

Fauna	Recent	Flint industries
Quaternary=Pleistocene=Age of Man	Fourth Postglacial moraines	Azilian, Tardenoisian, Magdalenian Solutrean
	IV. Monastirian Stage, D. péret—After Monastir, Tunis. Mediterranean shoreline of 18—20 meters. Lower river terraces of 18—20 meters. Glacial moraines of IV Glaciation=Alpine-Würm of Penck (Würmien-Mecklenburgien.) Mousterian industry in formation. Cold mammoth-reindeer fauna. Third Interglacial regressive period=Riss Würm recession of Penck.	Aurignacian Mousterian (Cold.) Acheulean (Warm.)
	III. Tyrrhenian Stage—Defined by Issel, horizon of Strombus bubonius. Mediterrancan shoreline of 28—32 meters. Erosion of middle river terraces of 28—32 meters. Glacial moraines of III Glaciation=Riss of Penck (Rissien-Polonien.) Chellean industry ot base of 30-meter terrace.Primitive amygdaloid Weapons and warm hippopotamus fauna associated. Second Interglacial regressive period=Mindel-Riss of Penck.	Chellean (Pre-Chellean ?)
	II. Milazzian Stage, Depéret. After peninsula of Milazzo, Northern. Sicily. Mediterranean shoreline of 55—60 meters. Middle-high river terraces of 55—60 meters. Glacial moraines of. II Glaciation=Mindel of Penck (Mindélien-Saxonien.) Maximum glacial exténsion in northern and Southern Europe. First Interglacial regressive period=Günz-Mindel of Penck.	"No traces of the existence of man on Continent of Europe". Mayet, 1921.
	I. Sicilian Stage (=Cromerian, England. Gulf of Conque d'Or, Palermo, Sicily. Mediterranean shoreline of 90—100 meters. Erosion of highest river terraces of 100—110 meters. Glacial moraines of I Glaciation=Günz of Penck (Günzien-Scanien).	

編年第十九表　W. Soergel, 1919.(5)



あるとは云へ、こゝに夫々の細部を見る以前に、注目す可き傾向は、其文化編年上の六期（七期）區分は、猶大局を支配して居るとは云へ、氷期關係に於ては大戰前に有力視せられた化石人類研究所一派の四氷説による第三氷間期舊石始原説は全く影を潜めて、見ることの出來ない所である。

編年第十八表　英國諸家編年（1917—1920）[4]

Geologische Stufe	Ch. E. P. Brooks 1917 (1919)	M. C. Burkitt 1920
Bühlzeit		Magdalénien
Achen-schwankung		Aurignacien
Letzte (4?) Glazial	Magdalénien und Solutréen	Mousterien
Letzte (3?) Interglazial	Jüngeres Moustérien	Alt-Palaeolithikum
Vorletzte (3?) Glazial	Aelteres Moustérien Acheuléen	Praechelléen-Stufe
Vorletzte (2?) Interglazial	Chelléen	—

これ等の個々に就て概見して行くと、編年第十八表のバーキットの方で面白いのは、例の英國學風の遺存？とも思はるゝ前期舊石の綜合せられたものがあるが、其原著を見てないから細論出來ない。第十九表に於ては、ゾルゲル獨自の表示ではあるが、ムステリアン以前が掲出せられてないから、全般が見られないのは遺憾である。第二十表は構成上見惡い。其上に氷期區分を多くが採用して居るアルプス氷河を從として、所謂地質學的區分で示してあるので、これに馴れない私共には、更に困惑を增さしむる。內容はプレー、シエレアンが第二氷間期に始まつて居り、特出すべきはアシユーレアンを寒暖として居る點で、ミコク其他の暖ムステリアン問題に連關した用意でもある。[5] マカリスター（第二

編年第十七表

H. Obermaier. No. II. 1916.(32)

I. Erste Eiszeit (Günzzeit)	Ohne sichere menschliche Spuren
1. Erste Zwischeneiszeit	
II. Zweite Eiszeit (Mindelzeit)	
2. Zweite Zwischeneiszeit	Prächelléen (Homo heidelbergensis)
III. Dritte Eiszeit (Risszeit)	Kaltes Altchelléen?
3. Dritte Zwischeneiszeit	
a) Anfangsphase	Warmes Altchelléen
b) Mittelphase (Warme Waldzeit)	Jungchelléen, Unteres Acheuléen
c) Endphase (Kühle Steppe)	Oberes Achelléen, Unteres Moustérien (Homo neandertalensis.)
IV. Vierte Eiszeit (Würmzeit)	Oberes Mousterien Unteres Aurignacien (Homo sapiens, vor. fossils)
4. Postglazialzeit:	
a) Achenschwankung (Kalt)	Oberes Aurignacien, Solutréen
b) Bühlvorstoss (Kalt)	Magdalénien
c) Ancylusperiode	Epipaläolithikum
d) Litorinaperiode (Klima-Optimum)	Protoneolithikum
V. Geologische Gegenwart	Neolithikum bis zur geschichtlichen Gegenwart

次にムステリアンが暖ー寒ー暖に跨つて居る點は注目に價し、こゝに寒暖夫々のムステリアンに對する用意がある。次に表で見らるゝ様に、編年中にソリユートレアンを傍系的位置に置き、文化はヲーリナシアンよりマグダレニアンに直系的に修行を認めた所に、この編年の一大特色があり、こゝにモルチエ以來學者を惱し來つた後期舊石文化修行問題再燃の烽火ともなつて居る。たゞ折角これだけに出來た編年として、氷後期に（Post gl.）於ては單にアーヘンシワンリングを掲出したのみで、他の Bühl, Gschnitz, Daun 等の氷後の小變動が見られない所に物足らなさを感ずる。更に第十七表のヲーバーマイヤーに就ては、述ぶ可き多くが存するが、これは化石人類研究所の關係上、ブール一九二三年の編年（第二十六表）と共に述べることゝし、こゝに共評論を暫く保留して、歐洲大戰以降の各編年に修つて行く。

この十餘の研究は、大戰間の憂欝に對する放散で

礎を置くもの丶、第三氷期(Riss. Gl.)の次には、一小氷間期(Riss-Néoriss Intergl.)と同樣な小氷期(Néo-Riss-

編年第十六表 L. Mayet No. 1, 1915.(三)

Quaternaire Supérieur		NÉOLITHIQUE	
		Azilien	
		Magdalénien récent.	
	Post-glaciaire	Magdalénien	
	Oscillation d'Achen	Magdalénien ancien.	Solutréen
		Aurignacien récent	
Quaternaire Moyen	Glaciation de Würm ou 4e époque glaciaire.	Aurignacien	
		Aurignacien ancien.	
	Interglaciat. Neoriss-Würm	Moustérien récent.	
	ou 3e période interglaciaire	Moustérien	
	Glaciation néo rissienne	Moustérien ancien.	
	Interglaciation Riss-Néoriss		
	Glaciation de Riss ou 3e époque glaciaire.	Acheuléen	
Quaternaire Inférieur		Chelléen	
	Interglaciation Mindel-Riss ou 2e période interglaciaire.		
	Glaciation de Mindel ou 2e époque glaciaire.		

gl.)が編年せられて居る。而つて、舊石始原は第二氷間期(Mindel-Riss Intergl.)にあるから一氷間期だけ古い。

（40） 同右、S. 108 による。其洪積的時代全般の表は四一項にある。

（41） J. Bayer; Chronologie des Temps Quaternaires. (Congrés International d'Anthropologie et d'Archéologie Préhistorique. Genéve. 1912. s. 156.) による。

（42） 化石人類研究所 (Institut de Paléontologie humaine, fondation Albert Ier, Prince de Monaco) は、一九一〇年巴里に設立せられたものであつて、ブール所長となり（現在）ブロイ・チーバーマイヤーがこれに加つたものである。學者として數も少ない史前學者中、この錚々たる碩學三名を集め得た爲、當時の史前學界に對し一大中心を形造つたのであつて、從つてこの人々の意見が學界に強く響いたのも無理がない。

（43） この四氷說に對し、ブールの考は編年第七表の如く第三氷間期以降を以て、洪積と認めそれ以前を第三紀に考へて居る樣であるが、洪積が第三紀かの問題を別とすれば、ブロイやチーバーマイヤー等との一致點が見らるゝ次第である。

（44） （16）揭出の拙著參照。

（45） 英國に於ては其前期舊石を Drift Age, Drift Type 等と稱し、後期舊石に Cave Age, Cave Type とのみ稱して居つたのは、單に保守的な傳統のみが然らしむる所と考へて居つたが、Garrod; The Upper Palabeolithic Age in Britain. 1926. を見たら、其後期舊石資料の著しく貧弱であることが知ることが出來た。この點獨墺等の一部と軌を同ふして居る。

其六　歐洲大戰直後までの編年

歐洲大戰中に於ける研究としては、後述して居る樣な僅々二例に過ぎないが、平和克復と同時に編年研究は反對に爆發して居る。今別に今日までの間に區劃すべき顯著な切れ目はないけれども、說述の便宜上、假に一九二五年までを、こゝに含めて見て行く。

先づ順序上歐洲大戰間の研究を見ると、次の二表の如く佛のマイエーとスペインのヲーバーマイヤーとである。このマイエー（第十六表）は前述してきた化石人類研究所派の編年に從つてない。氷期はペンク四氷說に其基

大勢を支配してきたに過ぎなかつたのであつて、大戰終了と共に學界は他事となり、大なる動搖を見るに至つて居る。

（32）ブロイのチーリナシアン復活は、一九〇六年モナコで開かれた國際人類及史前考古學大會（Congrès International d'Anthropologie et d'Archéologie Préhistoriques）の席上、Les gisments Présolutréens du type d'Aurignac. の題名のもとに發表せられたものである。この論文は僅々二七項に過ぎない短論文ではあるが、これが歐洲舊石編年に缺くことの出來ない重要文獻の一つであつて、よく所謂佛國學派の天才主義？を代表して居る。この內容に就ては更に將來紹介する機の有ることゝ考へるが、其要旨は先づ當初に層位學的位置等遺跡を硏究し、文化遺物特徵として、オーディ型、シアテルペロン型、グラベツト型なる三型式の尖頭石器、嘴型石器（Lames etranglées）龍骨狀石搔き（Grattoirs carénés）等の主要石器と、割尾骨鏃（Pointe à base fendue）の如き顯著な骨角器を揭出して居るから、今日と雖もチーリナシアン特徵として、僅に他の二三を加へ得るに過ぎない有り樣で、ブロイがよくこれを摑んで居る。且つ藝術編年にも及んで居るからこの二七項の短論文中に要を盡したものとも稱し得る簡潔にして金玉の論文である。

（33）M. Hoernes; Natur und Urgeschichte des Menschen. 1909. Bd. II. s. 151—162. 參照。

（34）マグレモーゼに就ては、拙著、マグレモージアン文化概說。本誌。三の二、三號參照。

（35）タルデノアシアンとは佛の Fère-en-Tardenois（Aisne）に於ける細石器（Microlith）の發見地に基き、ジー・ド・モルチエが編年したものである。最近に至つてブロイ等の硏究に基きカプシアンの終末文化であると認められて居る。

（36）カムピニーは Seine-Inférieure 縣 Blangy 近くにある竪穴住居跡であつて、一八九七年、Ph. Salmon; G. d'Ault de Mesnil; L. Capitan 等の史前學者によつて、發掘硏究せられた結果、これをカムピニアンなる一編年期とせられたもので、北歐の貝塚構成時代と平行文化と考へられて居り、今日の中石文化の後期に當るものである。これに就ても未だ詳細を紹介したことがないから近く發表を期して居る。

（37）Hugo Obermaier; Der Mensch der Vorzeit. 1912. s. 332. に依る。

（38）R. R. Schmidt; Die Diluviale Vorzeit Deutschlands. 1912. s. 266. に依る。

（39）H. F. Osborn; Men of the Old Stone Age. 1914. s. 33. による。又本表の右端ブール、ブロイの所にチスポンにはチーバーマイヤー、R・R・シュミツトを加へてあるが夫々別示したから、其名を除いた。

にプロイに基く所が多かつたのではないかと、私は考へて居る。

然しながら、この外形的に平靜に落ち付かんとして居つた舊石編年の内部には、この時旣に夫々各種の萠芽の萠

編年第十五表　J. Bayer, No. 1. 1912.[5]

Époques géologiques — Courbe climatique	Caractère climatique	Gisements géologiques	Faune et flore	Races humaines	Industries
Alluvium	forêts	formation d'humus	faune et flore actuelles / cerf commun renne très rare	Homo recens	Du commencement de la période néolithique jusqu'à présent. / Azilien Tardenoisien
d, γ, β	steppe	Daun-Moränen / Gschnitz-Moränen gisements semblables à lœss dans les Alpes / Bühl-Moränen	Microfaune arctique.	Race de Cro-Magnon	Magdalénien
W	toundra	Jung Endmoränen Basse-Terrasse	Faune arctoalpine.		Solutréen
	steppe	Jung-Aurignacienlöss	Eleph. prim.; Rhin. tich.; Ursus spel.; Equus cab., Rang. tar.		Aurignacien
RWI	forêts	Aurignacienwaldzeit Décomposition de la surface de l'Alt-Aurignacienlöss	Prépondérance d'animaux préférants un climat modéré retraite de la faune arcto-alpine	Homo aurignac	
	steppe	Alt-Aurignacienlöss			
R	toundra	Alt-Moränen Haute-Terrasse (Décomposition de la surface du lœss ancien)	Microfaune arctique. / Faune arctoalpine.	Homo neandertalensis	Moustérien
	steppe	Lœss ancien (Acheuleen-Löss)	faune mixte		Acheuléen
MRI	forêts	Période de forêts Chelléenne	Eleph. antiquus / Eleph. meridionalis. / Rhinocéros Merckii, etc / Rhododendron Ponticum / Buxus sempervirens dans les Alpes	Homo heidelberg?	Chelléen

+300　0　300

limite actuelle des neiges étern.

FIG. 4 – JOSEF BAYER. — Système de chronologie quaternaire

へ出でんとして居つた所は見逃すことが出來ない。前掲の諸表中の獨のウキーガース（第十三表）墺のバイヤー（第十五表）の如きは、この當時は同じく獨のR・R・シュミット（第十二表）の如き、化石人類學派說によつて壓迫せられ、極言すれば異端視せられても居つたのではあるが、決して前述の化石人類研究所一派の說に對し異論が無かつたのではない。たゞ時遇々歐洲大戰が起り學界の進展を見ることが出來なかつた爲、化石人類學派の說が共まゝ其

編年第十四表　H. F. Osborn No. 1, 1914 (註)

POST GLACIAL "Newer Loess"
DAUN
GSCHNITZ
BÜHL
IV. GLACIAL WÜRM, WISCONSIN "Upper Drift" "Lowest Terraces"
LAUFEN
3. INTER-GLACIAL RISS-WÜRM SANGAMON "Middle Loess"
PREHISTORIC
NEOLITHIC
8 AZILIAN-TARDENOISIAN
7 MAGDALENIAN
6 SOLUTREAN
5 AURIGNACIAN
25,000 YEARS
4 MOUSTERIAN
50,000 YEARS
3 ACHEULEAN
75,000 YEARS
2 CHELLEAN
100,000 YEARS
1 PRE-CHELLEAN
125,000 YEARS
150,000
UPPER PALAEOLITHIC
LOWER PALAEOLITHIC
GRIMALDI
CRO-MAGNON
GR MALDI
NEANDERTHAL
KRAPINA
PILTDOWN

Glacial Epoch　Culture Stages　Human Types

これには單なる舊石問題の外、其背後に於ける一部中には、これ等所謂化石人類研究所一派の悉くが、原石否定論者であることも一顧せらる可きである。(註) 卽ち原石を否定する以上は、文化始原を若く見ても何等支障を生じないのみならず、反つて悠久に過ぐる洪積的代に於ける時的經過に對し、其後半部に六期を壓入して文化變移が短く取り縮つて綴らるゝ以上、編年各期相互間にも、互に相密着した相關々係が結ばるゝ樣な形式を生み、一見夫々間には文化的溝渠もない樣に思はれ、編年學的形式としては、如何にも整然たるものゝ如き外觀を呈するを以て、かくこの說が學界を風靡した所以である。

舊石文化の中心地である佛國に、碩學を集めた研究所が出來、其學說が前述の樣であるに對し、當初よりラボックの傳統に基き、單に舊石文化を前後の二期分類で進んできた英國に於ても、この佛國編年の餘波?を受け、こゝにも六期分類への進展が見らるゝ。其舊石文化資料に於て、特に後期舊石文化資料は、これを佛國平地に比較して見ると、著しく貧弱であつて、其資料上からも六期分類に進まなかつた、理由は認められもするけれども、(註) この傾向を生むに到つた一動機には、特

この五表九學者の編年に於て、少なくとも舊石六文化期（プレー・シエレアンを入るれば七期）は悉く一致し

編年第十三表　一九一二—一四年諸家綜合編年。[30]

Geologic Time	Penck, 1910 Geikie, 1914	Wiegers, 1913	Boule, Breuil, 1912
Postglacial.	Magdalenian	Bronze. Neolithic. Azilian.	Magdalenian. Solutrean. Aurignacian.
IV. GLACIAL.	Solutrean.	Magdalenian Solutrean Aurignacian. Mousterian	Mousterian.
Third Intergracial.	Mousterian.	Mousterian	Early Mousterian. Cold Acheulean. Warm " Chellean. Pre-Chellean.
III. GLACIAL.	Mousterian.	Old Acheulean.	
Second Intergracial.	Acheulean. Chellean.	Warm Acheulean. Chellean.	
II. GLACIAL.		Pre-Chellean.	
First Interglacial.			

て何等の變化もない。其氷河關係に就ては、ブール、（第十三表）ブロイ、（同上）ヲーバーマイヤー（第十一表）等所謂化石人類研究の設立[31]に伴ふて、其一派の團結的意見が中堅をなし、獨のR・R・シユミツト、（第十二表）米のオスボン（第十四表）等の賛意を得て、氷期編年はペンクを根柢として四氷説に從い[32]舊石始期を引き上げ、シエレアンを最後の氷間期（第三氷間期＝ペンクのリス・ウユルム氷間期）に編年して居る。

Breuil）のヲーリナシアン復活にある。[註] これ以降舊石編年は今日多く行はれて居る様な六期編年となり、これが根柢を動かす程の問題も起らなかつた爲、一時安定性を生じて前記の如く、編年問題も多く文化それ自身の問題でなく氷期關係に當面して居る。流石のヘルネスも編年第九表には過誤を自認したと見へ、一九〇九年の大著には愼重に取り扱かつて、編年一覽も掲げてなく、再び六期編年を認めて居る。[註]

編年第十二表　R. R. Schmidt. 1912.[註]

勿論この間に於ては、六期編年の前後延長には變化もあり、舊き方ではプレー・シエレアン加入問題が生れ、新しい方では、六期に續いてピエトのアジリアンを加へたのみでなく、北歐のマグレモーゼ、[註] 佛のタルデノアシアン、[註] カムピニアン[註]等の中石文化が增補せられて、從來よりの滯渠問題（Hiatusfrage）を解決しようとする方向にも研究が進むと共に、一方では前述の姉妹學關係の精進と共に、六期內の編年細分へも進まんとする傾向が見らるゝ。今これ等を次に列擧しよう。

立して居る。これは一面に舊石文化全般を取り纏めた述作が多数に生れ出した傾向と一致する。然しながらこの

編年第十一表　H. Obermaier, No. I 1912.[37]

Zeitstufe	Fauna	Kulturstufe
I. Eiszeit (Günz Zeit)	Kalt.	
1. Zwischeneiszeit	Warm	Ohne menschliche Spuren.
II. Eiszeit (Mindel Zeit)	Kalt	
2. Zwischeneiszeit	Warme Waldfauna	Menschliches Unter-Kiefer von Mauer. Vorpaläolthische, noch nicht näher. bekannte Primitiv Industrie.
III. Eiszeit. (Riss Zeit.)	Arkto-alpine Tierwelt.	
3. a) Beginn der dritten Zwischen eiszeit.		Desgleichen.
b) Mitte der dritten Zwischen Eiszeit.	Steppenfauna	
	Warme Waldfauna	Chelléen.
c) Ende der dritten zwischen eiszeit.	Steppenfauna.	Acheuléen und älters Monstérien.
IV. Eiszeit (Würm Zeit)	Arkto-alpine Tierwelt.	Monstérien.
Postglazialzeit;	Steppenfauna.	Aurignacien und Solutréen
α) Achenschwankung.	Arkto-alpine Tierwelt.	Magdalénien
β) Bühlvorstoss		Azylien
γ) Gschnitzstadium	Waldfauna.	
δ) Daunstadium	Waldfauna.	Proto Neolithikum.
Geologische Gegenwart.	Waldfauna.	Voll Neolithikum.

傾向を生んだ一面には、文化編年に一安定性が生れたからであつて、この端を開いたのが一九〇六年プロイ(H.

(28) 本編年は M. Hoernes (L. 2) S. 8—9. にある。但し本編年の形式の一部は改め、動物群等は除いた。

(29) ヘルネスの前期舊石の一期還原は (L. 2) 中に詳論せられて居る。今これを細述する餘裕を有しないが、これを要約すれば、彼れはモルチエの三期編年に進んで居るのは承知の上（同書第五項）で、次の理由のもとに一期還原を試みて居る。

1、大局から見てこれ等三期の特徴には大差がない。所謂握り槌文化である。

2、これ等の代表的石器（主として握り槌を指す）は獨り西歐に止まらず、イタリヤ、北阿、エジプト等にも見らるゝが、果してこれ等までも、モルチエの如く三期區分で進めるか否か。其夫々のファウナも亦これと平行するか。

3、歐洲に於てもムステリアンが果して寒期のみであるか疑がある。タチバッハ、クラピナ等は暖期である。（大山註。後の暖ムステリアン問題であつて既にこの當時に着眼せられて居る）同様に佛の Villefranche-sur-Saône (Beaujolais) の砂坑中よりは、代表的なムステリアン型石器が出土するに拘はらず、動物群には、寒のマンモス、厚毛犀に伍するに暖の古象、メルク犀を以てして居る。從つて單なる寒暖の動物群のみによつて、シエレアンとムステリアンとは分ち得ない。

4、動物群なるものは、單なる地理的見地から見ても南北には差がある。

等の理由から以上の一期還原を試みて居る。特に其三に附註した如く、暖ムステリアンによく氣付いた結果、未だ研究が進んで居らなかつた爲、當時餘りによく解り過ぎて、反つてこれに災されたものである。然しこの失敗は決して不名譽でない。失敗は失敗に違いないけれども、既に暖ムステリアン、それが今日未解で多くの學者を惱して居るのに拘はらず、其異狀に早く氣付いた爲に、これに引つ掛つたのであるから、研究の結果である。特に一九〇三年頃としては偉とすべきである。

(30) 本編年は A. Penk; Die alpinen Eiszeitbildungen und der praehistorische Mensch. Arch. F. Anthr. XXIX 1903. に發表したものを、J. Bayer (L. 1) S. 19. に表示したものに依つて居る。原著は見て居らない。表中（1921 fallengelassen）はバイヤーによる。

(31) F. Birkner; Der Diluviale Mensch in Europa. 1925. S. 44. Anm.

其五　歐洲大戰までの編年

この一九〇〇年當初より一九一四年までの間、持に一九一〇年以降の僅々兩三年間に、同時に多數の編年が林

珍品考古學者ではない。而して史前學は一八六九―一九〇六年間に五十七論文が發表せられて居る。

(21) 本表作出の年次に就ては私には明でない。M. Hoernes; (L. 2) S. 32. に依つて居る。而してこれにも其年次が記されてない。只其項註には、ピエトの編年に關した諸文獻を列記してあるが、何れも私の手元にない。其註の最も新しき文獻年號を以てすれば、一九〇一年であるから、それ以降でないことだけは確かである。それ故上述の如く其最初と最後の年號を採用して置いた。

(22) M. Hoernes; (L. 2) S. 33. 參照。

(23) La Tourasse は小洞窟であつて、Haute-Garonne 縣にあり Harlé, 1894. これが發表を見たが、層位學的調査を行はれたかは疑問とせられて居る。而してこゝよりは有拘骨銛と彩礫 (Bemalte Kiessel) とが出土したとのことであるから主要代表遺物たる二者は兼有して居る。但しこゝの動物群として馴鹿と獅子の骨が共出して居る所から、マグダレニアン末から本期に亘つて居るのではないかと疑はれて居る。

(24) Mas d'Aziel は天然の大トンネルであつて、兩口を有する洞窟とも云い得る。長さ四百米もあり、中に小川が貫通して居る。(私の實査紀行は、拙稿、歐米見聞記、人類、四〇の五にある) こゝには數箇所の遺物層があり、其一つからピエトは千餘點の人工遺物を發掘したのみならず、この横貫する小川の氾濫により、層位中に明に氾濫層によつて區畫をなした所がある。このピエトの發掘點に於ては九層をなして居り、下より第五層までがマグダレニアンであつて、第六層がアジリアン、第七層がアリジアンである。此樣な明確なる層位を有し、且つ豐富な資料を出土した爲、今日ではモルチエのトゥラシアンを採るものなく、アジリアンとピエトの編年に從つて居る。

(25) アジリアンは (18) に述べた如く、マスダジール第七層を云ふのであるが、直接ピエトの報告を見て居らないから詳細は私に不明である。たゞこの層中には蝸牛の一種 (Helix nemoralis) が多いので、ピエトは „Etage coquillier“ とも云ふた程である。こゝより若干の獸魚骨と共に、磨石器と土器と共に骨角器が出土し、其上層卽ち第八層の盛新石時代と區別せらるゝ故、アジリアンと新石文化との過渡期とピエトは考へたのであるが、若干の疑問も存し且つマスダジール外に平行關係と認む可き顯著な遺跡がない。從つてこの方はアジリアンの樣には普遍化して居らない。今日の目から見ると、或は新石初期ではないがとも考へらるゝ。(アジリアンに就ては、M. Hoernes; (L. 2) S. 80 參照)

(26) このブールの編年もブール自身の發表に依つたものではない。Emile Cartailhac; La France Préhistorique. 1889. P. 46. によつたものであるから、ブールの編年がこの著より幾何まで過去に遡るかに就ては、私は保證し得ない。

(27) 本表は直接この通りにルトーが發表したのではない。ルトーの編年表として J. Bayer (L. 1) S. 29. にベイヤーが取り纏めたものを再錄したのである。

編年第十表 A. Penk, No. I. 1903.(註)

Geologische Zeitabschnitte	Geologische Ablagerungen, Klimacharakter	Fauna	Kulturstufen
Alluvium Daun-, Gschnitz-, Bühl- } Stadium Achenschwankung (1921 fallengelassen)	Postglaziale Rückzugsmoränen	Hirschzeit des Schweizersbids Rentierzeit des Schweizersbilds Mammutzeit des Kesslerlochs } Jüngere Primigeniusfauna	Tourassien Magdalénien
Würm-Eiszeit	Schotter der Niederterrasse, Jungendmoränen		
Riss-Würm-Interglazial	Steppenphase } Höttinger Breccie (1920 in das MRJ verschoben) — Jungerer Löss. Waldphase } Höttinger Breccie (1920 in das MRJ verschoben) — Kalktuffe v.Weimar, Flurlingen, Schieferkohlen von Dürnten, Wetzikon usw.	Lössfauna von Niederösterreich u. Mähren Jüngere Antiquusfauna (Taubach. Villefranche, Wildkirchli)	Solutréen Warmes Moustérien
Riss-Eiszeit	Schotter der Hochterrasse. Altmoränen der nördl. Westalpen Steppenphase—ältererLöss	Ältere Primigeniusfauna. Höhlenfunde mit Moustérienfauna rechts der Saône u. der Rhône unterhalb Lyons	Kältes, Moustérien
Mindel Riss-Interglazial (4mal solange als Riss-Würm-Interglazial)	Waldphase	Ältere Antiquusfauna	Chelléen
Mindel-Eiszeit	Jüngerer Deckenschotter aüssere Altmoränen der nördl. Ostalpen		
Günz-Mindel-Interglazial			
Günz-Eiszeit	Älterer Deckenschotter		

るが、(20) 一つに氷期接合に災されたものらしい。然しピエトのアジリアンやアリジアンまでをよく採用して居る所に面目は見らるゝ。勿論この編年は氷河學者であるペンク（A. Penk）によつて壓倒せられた。

このペンク編年は、流石に氷河學者だけあつて、自然界方面は形式上申分がない。且つ文化方面に對してもヘルネスが第一氷間期にシエレアンをあてたのを、第二氷間期と一期若く見、アシウレアンを除いて、ムステリアンを寒暖とした所に苦心も認めらるゝ。但しこの寒暖問題は、ペンクは寒の後に暖ムステリアンを編年して居る點は、注目に價すると同時に、この影響は今日まで殘つて居る。次に後期舊石になると問題がある。ソリユートーレアンはよいとしても、マグダレニアンが餘りに長きに失する。同表の樣にこの間にアーヘンシワンクングがあれば、益々不可解となる。これはバイヤーが同表に註書きして居るが一九二一年にはアーヘンシワンクングを取り除かれたとあり、バイヤーはペンクが其第三氷間期（Riss-Würm-Interglazial）に編入したと云ふて居る(21)如く、根本に於てこのアーヘンシワンクリグには動揺性があるけれども、この表の樣では、動物群と衝突したり等不合理も出來てくる。然しこの裏にはヲーリナシアン問題が伏在して居る結果、かくペンク編年が出來たことゝも思はれるから、無暗に非難するのではない。

これを要するにこの時代の先覺者は、文化編年を强固にすべく、ヘルネスと云いペンクと云い、其着眼と努力には敬意を表する所であり、これより氷期と文化とが相結ばるゝに至る緒についたのであつて、舊石編年上からは重大なる進展なのである。

（20） ピエトの遺作全部に就ては、彼れの殁後の記念出版、E. Piette ; (L. ?) 中に表示せられて居り、其内容は地質學、（一八五五―一九〇六年間十四）古生物學（一八五五―一八七六年間八）自然人類學（一八七六―一九〇六年間十三）の諸論文が發表せられて居るのであるから決して、

ブール（Marcellin Boule）は元來地質學者である。從つて舊石研究に當つても、よく其本領を發揮して居る。但し地質に關する彼れ獨自の見解を有して居ることは、本表でも其一端が見らるゝ。其地質區分に於て洪積が短く、氷期の下半部はこれを第三紀として居る。それ故彼れに從へば、洪積初期がシェレアンである。この文化編年は全くモルチエの第二次編年と同一である。只こゝで最も注意すべきは、流石に地質學者だけあつて、氷河に着目して居る點であつて、其後に氷河編年と結合せらる可き最初の動機を生んで居る所である。

他には原石認定論の急先鋒ベルギーのルトー（A. Rutot）は遠く漸新世よりの編年を試みて居る。これは文化階梯にも獨自のものもあるが、只今研究して居る舊石編年に對し餘りに遠く第三紀にまで深入りするを避けこゝでは單にこの當時に於ける一編年として參考に供するに止める。

次にヘルネス（Moritz Hoernes, 1852—1917）は一九〇三年に其第一次編年とすべきものを發表して居る。

編年第九表　M. Hoernes, 1903.(6)

I. Eiszeit	
1. Interglacialezeit	Chelléo-Moustérien
II. Eiszeit	(Hiatus)
2. Interglacialezeit	Solutréen
III. Eiszeit	
3. Intergla-cialezeit	a. Magdalénien b. Asylien
IV. Eiszeit	Arisien (Hiatus)
4. Postglacialezeit	Neolithikum

本表は見方によれば、ヘルネスともある可き人としては甚だ粗造である。氷期と文化期とを接合したのは流石にヘルネスであるが、夫々の研究が充實して居らない。特にヘルネスとしては、この時代が彼れの舊石研究のスランプ機であつたので、モルチエの前期舊石の三期區分を排して、一期に還原しシェレヲ・ムステリアンにしてしまつた。これには彼れとしての理由もあ

編年第八表　A. Rutot, 1903.[5]

Époques	Grands Divisions	Sub divisions	Divisions en Belgique	Fauna	Industrie humaines	
Terrain tertiaire	Eocène	Inférieure Moyen Supérieure			Groupe des Industries éolithiques	
	Oligocène	Inférieure Moyen				
		Supérieure				Industrie de Thenay? (France)
	Miocène	Inférieure Moyen				
		Supérieure				Industrie du Puy-Courny (Cantel)
	Pliocène	Inférieure	Distien'			
		Moyen (glaciaire pliocène)	Scaldisien			Industrie du Chalk Plateau du Kent(Angleterre)
			Poederlien			
		Supérieure	Amstelien			
			Icenien			
			Cromerien	Elephas meridionalis		Industrie du Forest Cromer Bed. de Saint-Prest.
Terrain quaternaire	Premier glaciaire	Progression des glaces	Moséen	Elephas antiqu., Corbicula fluminalis	Groupe des Industries paléolithiques	Industrie de Reutel (reutelienne)
		Recul des glaces				Industrie reutelo-mesvinienne 〃 mesvinienne
	Deuxième glaciaire	Progression des glaces	Campinien	Mammouth		Transition du Mesvinien au Chelléen Industrie chelléenne 〃 acheuléenne
		Recul des glaces	Hesbayen	Helix, Pupa et Succinees		Industrie moustérienne
	Troisième glaciaire	Progression des glaces	Brabantien			Industrie ébournéenne
		Recul des glaces				
	Quatrième Glaciaire	Progression des glaces	Flandrien			Industrie tarandienne
		Recul des glaces				
Terrain moderne						Industrie néolithique 〃 du bronze 〃 du fer Industries actuelles

はモルチエの撰んだに拘はらず、其資料不足な La Tourasse[51]に依らず、資料豐富なピエトの研究した Mas d'Aziel[52]に基き、アジリアンを採用してピエトを不朽ならしめて居る。且つピエトは獨りアジリアンを編設したのみでなく、新石文化の以前にアジリアン[53]を加へて以て、當時問題となつて居つた、新舊兩石器時代間の溝渠問題の緩和に備へた點は敬服に價する。

これと前後して出來たと思はれるのが、ブールの第一編年である。

編年第七表　M. Boule. No. I. 1889[54]

Divisions Gèologiques			Phènoménes Physiques.		Éléments de la faune	Divisions Archéologiques: Périodes.	Divisions Archéologiques: Époques.
	Tempsactuels…………		Climat voisin de láctuel. Formation des Tourbieres …		Espèces actuelles. Races domestiques…………	Du fer ……… Du bronze	Romaine, Gauloise, Celtique.
Quaternaire.	Propre-ment dit	supérieur…	Froid et sec. Dé-pôts des cavernes.		Elephas primigenius … Rhinoceros tichorhinus. Cervus tarandus. Saïga tartarica.	De la pierre polie ou Neo-lithique.	Madelénienne. Solutréenne.
		inferieur …	Continuation des mêmes régimes. Climat donx et humide, lit ma-jeur des fleuves. dèpôt d'alluvions.	Extension glaciaire.	Elephas antiquus. Rhinoceros Merckii.	De la pierre taillée ou Pa lèolithique.	Moustierienne. Chelléenne.
Tertiaire.	Pliocène	supérieur…	Climat chaud, précipitations atmosphèriques abondantes.	Extension glaciaire.	Elephas meridionalis. Rhinoceros leptorhinus.	Aucune trace certaine de l'Homme en Europe.	
		inferieur …	Période d'erosion. Dépôts glaciaires et continentaux. Climat chaud et unife.	Extension glaciaire.	Mastodon arvernensis. Rhinoceros leptorhinus et R. etruscus.		

編年第六表　E. Piette, No. 1. 1894—1901。(31)

Quaetär	Klima	Fauna	Industrie	Stufen
jüngeres	Gemässigt.	Der Gegenwart	Geschliffene Stein-Werkzeuge.	Pélécyque (Robenhausien)
			Übergang.	Arisien (Etage coquillier.)
	Kalt und feucht.	Der Gegenwart (Edelhirsch u. Eber sehr häufig).	Feuersteintypen wie in der vorhergehenden Zeit, flache Hirschhornharpunen.	Asylien (Étage des galets coloriés).
älteres oder. Pleistocän.	(Trocken) Kalt	Elephas primig. Rhinoceros tichorhinus.	Kleine Feuersteinwerkzeuge. Schnitzerei in Knochen usw. Période glyptique. Bildende Kunst.	Gourdanien (Cervidien) (Étage de la gravure).
				Papalien (Eburneen, Éléphantien, Étage de la sculpture).
	(Feucht)	Cervus tarandus.	Schaber und Spitzen einseitig retouchiert.	Moustérien (Eiszeit).
	Warm.	Elephas antiquus. Rhinoceros Merckii, Hippopotamus.	Grosse, mandelförmige, auf beiden Seiten grob zugehauene Steinwerkzeuge.	Acheuléen (fortschreitende, aber noch wenig intensive Abkühlung .
				Chelléen (Vorherrschaft des Elephas antiquus).
				Tillousien (Übergangsz., Charakter durch d. Zusammenvorkommen von Elephas meridionalis, antiquus u. primigenius).

れない。これも前述のモルチエのヲーリナシアン削除に引つ掛つて居るのではあるまいか。次がグアダニアンでこれはマグダレニアンと同一である。其次にはアジリアンがきてモルチエのトゥラシアンに代つて居る。今日で

地質學にも自然人類學方面にも研究があり、決して單なる好古家ではないのであるが、(二〇)彼れの舊石文化に就て多くの關心を持つたのが、後期舊石時代であり、且つ其藝術方面であつた。これが爲兎角其研究に或る疑惑をも起さしむるものがある。極言すれば、珍奇に走る好事家的研究ではないかとの誤解であつて、今日に於ても其立場上、動もすればモルチエに壓倒せられがちである所以も玆に存して居る。卽ち研究者としては不幸の立場にある點は同情に價すると同時に話は横道に入るが、我國の研究に對し以て他山の石となす可き最も適切なる一例でもある。佛國平地の如き後期舊石藝術の一大寶庫でもあり、佛人をして史前にも我地にサロンありと叫ばしむる樣な卓越したもの丶多々發見せらるゝ以上、發掘研究者としては、其珍奇の出土に眩惑せられがちなことは、發掘研究者のよく知る所であり、往々其出土の悦びは、研究眞理を超越もし、こゝに緩みも生ずる。極端に云へば墮落もし易い。この樣な珍奇出土は我が國にも多い。翻つて見れば、所謂珍品考古學は獨り過古のみに存したものでなく、私共自身にも尙深く喰い入つて居る。而してビエトの如き誤解を受くることが切角眞面目の研究をも抹殺までする。話を返して先づビエトの編年に入る。

この編年は、其編年期名に於て、モルチエ編年と著しい違もあるが、大局的には大差がない。其第一階梯はテイルージアンなるものがあるが、其詳細は私には解らない。其動物群や次のシエレアン等と取り纏められて居る所から見ると、これが原石を指すにあらずして、今日のプレー・シエレアンを指す如くに、私には思はれる。其他の前期舊石は全くモルチエと變りがない。これはビエトの得意な方面でないから、モルチエに從つたとも見られる。後期舊石は其主研究方面の藝術的見地より、(二一)パパリアンを設定して、これに彫像時代と冠して居る。ヘルネスはこれをソリユートレアンと認めて居るが、彫像は今日のヲーリナシアン所産であから、こゝに兩者の混同が免

(13) ムステリアン或はソリユートレアンの石器に就ては、前掲拙著、(L. 5) 參照。

(14) このチーリナシアン削除の結果は、後述して居る樣にブロイが一九〇六年に復活せしむるまでの間、兩者の混同が當然に起る。少なくともモルチエを中心とした一派に於て。それ故この間の年次に於ける研究は、特に注意して取扱はないと、飛んだ過誤も生れ得る。其顯著な一例は、クロマニチン (Cro-Magnon) 洞窟にある。同洞窟は三つの文化層より成るが、悉くがチーリナシアンである。これをこゝから出土した人骨に冠して、よくクロマニチン人と稱せらるゝのはよいが、文化階梯上からは單なるチーリナシアン人である。然るをハウザーの如くコンブ・カペル (Combe-Capelle) 發見人骨をワザ〳〵 Homo Aurignacensis Hauseri などと云ふと、クロマニチン人の文化は何れにあるのか、云ふ樣な認識不足も生ずる。もしクロマニチン人が後期舊石人全般の總稱であるなれば、それでよいが、マグダレニアンには直接出土關係が無いことを辨へて置く可きである。

(15) 本編年は G. de Mortillet, (L. 4) P. 21 に依つたものがあつて、一八八三年の第一版は見て居らないから知らない。

(16) 原石問題に關しては、拙著、原石文化問題。(岩波講座。生物學) 參照。

(17) シエレスの研究は、一八七八年に調査し八一年に次の樣に報告した樣に記憶する (Chouquet ; Quaternaire de Chelles. Géologie. Faune. Acheuléen et Moustérien. Matériaux, Toulouse 1881。實はこれを記入したノートが只今見當らないから、甚だ不始末ではあるが、暫く保留を許されたい。

(18) この新石時代の標式としては、既に古く一八五四年より研究の端を發した、スヰスの杙上住居系を以てして居るのも、當時の狀勢としては、當然でもある樣に思はれる。これ等新石發見研究に就ては、拙稿、(L. 6) 參照。

(19) 本編年は G. et A. de Mortillet ; (L. 4) の第三版、一九〇〇年に發表せられたものゝ由であるが、第三版を有して居らないから、M. Hörnes, 1903 (L. 3) S. 4. に依つて居る。これは獨譯せられて居るが、若干簡畧にする爲、邦譯も加へた。

其四　一九百年前後に於ける他の編年

モルチエに對立して、この頃研究して居つたのが、ピエト (Edouard Piette, 1827—1906) である。ピエトは

編年第五表　G. et A. de Mortillet, No. III. 1900.[13]

Paläolithische Periode	Epochen	Klima	Fauna	Industrie
Übergang	Tourassien	Dem gegenwärtigen sehr ähnlich.	今日の動物群	扁平鹿角製骨銛（新舊過渡期）
Oberstufe	Magdalenien	Kalt und trocken.	北系動物群	小形燧石器 骨角器 形象藝術
	Solutréen	Gemässigt und trocken. Rückgang d. Gletscher.	野馬多し。馴鹿，マンモス存在	月桂葉鎗 側缺鎗
Mittelstufe	Moustérien	Kalt und feucht. Grosse Ausdehnung der Gletscher.	寒的動物群 マンモス，厚毛犀 洞熊，麝香牛	手持尖頭器 握り槌凋落
Übergang	Acheuléen	Gemässigt u. feucht.	過渡動物群 マンモス出現 古象消滅	小形優良握り槌
Unterstufe	Chelléen	Warm und feucht.	暖的動物群 河馬，メルク犀，古象	粗大握り槌

l'industrie humaine. Comptes rendus de l'Acad. des sciences, Paris 1869, Bd. 68. にある由であるが、これ亦見てない。Wiegers, (L. 8.) S. 13 に依つて居る。但しウヰーガースが果して忠實に全文を採錄したのか、抄錄したのかは明でない。他に多く同編年として採錄してあるのは、殆んど第二次乃至第三次編年である。

を綜合した全史前編年であり、史前文化より有史文化に亙つて、其是非は兎に角としても、脈絡ある編年であるから、これを揭出する。

本編年には、原石（Eolith）[16]を肯定した關係上、先づ其編年を加へ文化始原を第三紀に置いてある。舊石編年中には新にシエレアンとアシユウレアンとを取り纏めて一期となしムステリアンの前に加へたのは、彼の第一次編年以降にシエレスの研究[17]等が進んだ關係もあるが、原石肯定論者として、從來認め來つたムステリアンに對し、原石との中間關係を明にする用意でもあつて、よく行屆いても居る。ヲーリナシアンの削除は、前述の樣に形態學的移行の中斷かを恐れた故かとも私は想像して居る。この時代には未だ中石研究が進んで居らないから、直に新石時代に移つて居るのも止むを得ない。[18]青銅時代以降に就ては、私の研究範圍外でもあり、本論と餘り遠くもなるから、これを畧する。只本表で目につくのは、佛國標準である故か、一向他國に及んで居らぬ點で、特にデンマーク等の石器時代が參酌せられて居らない。

この第二次編年以降も相變らず研究は進んで行き、こゝに第三次の編年を生んで居る。大モルチエは一八九八年には歿したけれども、其甥アー・ド・モルチエ（Adrien de Mortillet, 1853—1931）との共著に於て一九〇〇年に發表を見た。

本表はこれを第二次編年に比較して見ると大差がない。たゞシエレアンとアシウレアンとが互に獨立したのと其最後にトウラシアンなる今日の中石時代（アジリアンに同じ）が新に補入せられて、新石時代への過渡をなして居るのみであるが、兎にあれ時代の進運に從つて、漸次改全の有り樣がよく見らるゝ。

（12）このモルチエ編年は、G. de Mortillet; Essai d'une classification des cavernes et des stations sous abri, fondée sur les produits de

次編年に際しては、ヲーリナシアンを断然削除して居る。

この第一次編年以降、研究發展の結果は一部舊石編年内容にも改變を加ふると同時に、一面に於ては大局上より、全般的な史前編年を生むに至つて居る。これが第四表に示した第二次編年である。今直接舊石編年には關係

編年第四表　G. de Mortillet, No. II. 1883.[15]

Temps.			Ages.	Périodes.	Époques.
Actuels.		Historiques.	du Fer.	Mérovingienne.	Wabennienne, Franque, Burgonde.
				Romaine.	Champdolienne, Décadence romaine.
		Protohistoriques.			Lugdunienne. Beau-temps romaine.
				Galatienne, Etrusque.	Marnienne, Gauloise, 3e Lacustre.
					Halstattienne, des Tumulus, 1re du Fer.
			du Bronze.	Bohémienne.	Larnaudienne, 2e Lacustre en majeure partie.
					Morgienne, 2e Lacustre partie.
		Préhistoriques.	de la Pierre.	Néolithique Pierre polie.	Robenhausienne, 1re Lacustre, des Dolmens.
Géologiques.	Quaternaires.			Paléolithique. Pierre taillée.	Magdalénienne, des Cavernes en ma jeure partie, du Renne presque totalité.
					Solutréenne du Renne partie, du Mammouth partie.
					Moustérienne, du Grand Ours des cavernes.
					Chelléenne, Acheuléenne, du Mammouth partie, de l'Elephas antiquus.
	Tertiaires.			Eolithique.	Cournyenne.
					Thenaisienne.

なき部分もあるが、兎に角、史前學、原史學、有史學等の區分と、文化上からの石器、青銅、鐵時代等の階梯と

設者たるの榮冠を彼れに捧げらるゝ所以である。其特徴比較的顯著でない前期舊石時代内の編年が當初に出來なかつたのは止むを得ないとしても、後期舊石編年中に見落してならない所がある。其第四期には正しくマグダレニアンが編年せられて居るにも拘はらず、其直下の第三期にはヲーリナシアンが入り、其次の第二期にソリユートレアンがきて居る點で、今日とでは第二第三期が入れ代つて居る。これを本編年を辿つて行くと、握り槌(Coup de poing) がソリユートレアンに至つて消滅し、これに代るにこの表にこそないが、握り槌に比してより精良尖鋭な月桂葉鏃 (Pointe en feuille de laurier) や側缺鏃 (Pointe à cran) 等の如き標式石器の出顯を以てすれば、見方によれば形態學上からは移行が考へらるゝ。[三] 而してそこに僅少なる骨角器の出現は、第三期への移行を物語る。其三期ォーリナシアンに入るや、割尾骨銛 (Point à base fendue) が標式せられ、これが骨角器主用の第四期への移行過程となつて居り、これ亦單なる形態學上からは、無理からぬ所である。これが今日の如くに、オーリナシアンが先きで、其後にソリユートレアンが入つてくると、ムステリアン對ソリユートレアン、オーリナシアン對マグダレニアン共々形態移行の間に、系統を異にする樣な文化が間在することゝなり、上述の樣に都合よく形態學的說明が不可能となる。只ムステリアン對ソリユートレアンの方は、單に標式主要遺物が互に石器であるから、かく結ばれたのであるが、握り槌と月桂葉鏃、側缺鏃等とでは、要素を異にする。握り槌は尖端、重量、臂力を以てする打突具であるが、月桂葉鏃等は尖端を主用とする刺突具である。それ故こゝによしムステリアンの手用尖頭器 (Point à main) を入れるにしても、尚若干の距離はある。であるからこの方の移行關係は第二としても、ヲーリナシアンーマグダレニアンの方は、立派に移行關係が、今日よりも讀まるゝ。それであるからこの後期舊石編年に就ては、今日まで大きな謎と惱とが遺つて居る。これには流石のモルチエも困つたと見へ、其第二

其三　モルチエ編年

モルチエ（Gabriel de Mortillet, 1821—1898）以前の編年は何れも古生物學者の編年であり、今日の舊石史前學が未だ獨立せず、古生物學者によつて研究せられて居つた時代であつたことを忘れてはならない。それがモルチエによつて、先づラボックに從つて新舊兩石器時代を打石及び磨石時代に區分し、然る後、舊石時代を更に夫々其標式遺跡に從つて編年した所に史前學獨自の立場を發揮して居る。其編年は類次改變を見たが、其當初に出來たものは次表の樣である。

編年第三表　G. de Mortillet, No. I. 1869.(21)

IV.	L'Epoque de La Madeleine マデレーヌ時代 馴鹿骨角器。 動物彫畵 寒系動物群 La Madeleine, Laugerie-Basse, Bruniquel
III.	L'Eoque d'Aurignac オーリニアック時代 骨角器，特に割尾骨鏃 (Point á base fendue) Aurignac, Cro-Magnon
II.	L'Epoque du Solutréen ソリユートレー時代 握り槌消滅 燧石製石器多し 骨角器僅少 Solutré, Laugerie-Haute
I.	L'Epoque du Moustiérs ムスチエー時代 握り槌 (Coup-de-poing) 打製面を有する石器 骨角器なし Le Moustiér, Saint Acheul

この編年に於ては、兎に角、文化遺物の特徴を擧げ、これが代表的遺跡を加へた、純然たる舊石史前學上の編年であり、前三者の編年とは全く其趣きを異にして居る。それ故、モルチエ編年として、舊石編年の創

洞熊時代以前に古象期を設け、マンモス期を消除した等研究のある所は見らるゝ。更にこの一八八六七年には佛の古生物學者 Paul Gervais によつて編年せられたものもあるが、前二者と大差がない。(11) 而してこの樣に舊石編年が兎に角芽へてきたのであるが、見らるゝ如く、基礎が古生物學的要素の上に立ち、未だ純なる史前學上の編年とまでには到達して居らない。僅に後年に文化的基礎が見出されてきたのみである。

(5) トムセン (Christian Jurgensen Thomsen, 1788—1865) の三大文化期編年等史前學史に就ては、拙稿、史前學研究史。史學。七の四。參照。(L. 6)

又デンマークのウォルサエ (Asmussen Worsaae, 1821—1885) は、最も古く一八五九年には、石器時代内に於て、新古の編年、卽ちデンマーク貝塚構成時代（中石文化）と、新石時代との區分を試みて居るから、石器時代内に於ける編年の開祖である。前掲、拙稿、(L. 6) 一二五項參照。

(6) ブーシエー・ド・ペルト (Boucher de Perthes, 1788—1868) の研究に就ては、拙稿 (L. 6) 參照。其小傳は小牧實繁氏、先史學史の1節。小川博士還暦記念、史學地理學論叢。參照。

(7) ラルテ (Edouard Lartet, 1801—1871) に就ては、拙稿、(L. 6) 一二四項參照。

(8) 此編年は、E. Lartet; Nouveller recherches sur la coexistence de l'homme et des grands mammifères fossiles. Annales des sciences naturelles, Paris. 1861. に發表せられたものゝ樣であるが、私は本書を見たことがない。これを Wiegers (L. 8) S. 12. によつて居る。

(9) この絶滅種中、チーロックスのみが、人工前に保護生存しては居るが、特別と見てよい。

(10) 此編年は F. Garrigou ; Age du renne dans la grotte de la Vache, vallée de Niaux, près de Tarascon (Ariège). (Extrait du Bulletin de la société d'histoire naturelle de Toulouse, avril 1867.) に發表せられた由であるが、私は見てない。Wiegers (L. 8) に依つて居る。

(11) P. Gervais; Recherches sur l'ancienté de l'homme et la période quarternaire. (Zoologie et paléontologie générales, nouvelles recharches sur les animaux vertébrés vivants et fossiles. Paris 1867—1869.) に編年を發表してある由であるが、これ亦見てない。Wiegers (L. 8) によつて居る。この編年の Garrigou との違は I の古象に代るに、南象 (E. meridionalis) を以てし、II はマンモスを復活させ、III は前二者と同じく馴鹿Vに代上系新石文化を持つてきて居る。

編年第一表　Edouard Lartet, 1861.[8]

IV	テーロックス時代 (Bison Priscus)
III	馴鹿時代 (Cervus tarandus)
II	マンモス時代 (Elephas primigenius)
I	洞熊時代 (Ursus spelaeus)

この編年は、其代表動物が悉く歐洲に於ける絶滅種である所に特徴づけらるゝが、[9]未だ文化上の編年ではない。本表はこれをラルテの多く研究した遺跡上から、今日の編年に照すと、Ⅰはムステリアン (Le Moustier) Ⅱがソリュートレアン (Laugerie-Haute) Ⅲはマグダレニアン (Laugerie-Basse) 等のウエゼル河谷地方の遺跡に基くものと思はれるが、Ⅳは何れなるや私には明でない。それにしても、未だ誰人も編年的考慮を浮べて居らない、この時代によく動物群の相違に着眼したばかりでなく、其内から特に絶滅種のみを撰み出した所には、敬服に價するのみならず、後年、ラボック、モルチエ等の編年の動機をも基礎づくつて居る。而して舊石編年と云へば、大モルチエに覆はれて居る様な有り様に對し、こゝに敬意を捧げると共に、其功績を錄するものである。

其後 F. Garrigou はラルテの編年を改良して次の如きものを編設した。

編年第二表　F. Garrigou, 1867.[10]

V. 青銅及鐵時代
IV. 磨石器時代
III. 馴鹿時代
II. 洞熊時代
I. 古象時代 (Elephas antiquus)

この編年は既にラボック新舊石編年以降であるが、ラルテ編年に基く結果、Ⅲまでは前者に從い、ⅣⅤにラボック等の考への入り込んだ、過渡期の編年として面白く見らるゝ。又ラルテ編年には睽系が明でないに對し、其

と述べられて居り、チラング語の方は、同誌、歐文目次の所に記して居る。
叉氏の來朝については、鳥居龍藏博士、ドルメン第二號。昭七。五。參照。

(3) 佛領印度支那石器時代に就ては、日佛會館、アグノーエル氏の好意により、本誌、三の四、五號等に紹介を始めたが、まだ全部を盡したのではない。尚後も引續き紹介もして行く。

(4) 邦文で歐洲舊石を研究したものは、單なる翻譯物か、或は斷片的のものゝ外、取り纏つたものが殆んど見當らない。僭越ではあるが、拙者、歐洲舊石器時代（考古學講座）(L. 5) に一通りは紹介して居る。但しこれは甚だ不出來で、近く改む可く目下準備中である。從つて歐洲舊石等を見らるゝには、只今では邦文では無理である。是非とも歐文に依られざるを得ない。こゝに紹介して行く諸家の考案も、原意を失はない爲、歐文のまゝを掲出したのも、歐文に親まるゝ爲にとも考へたからである。

其二　舊石編年の黎明期

石器、青銅、鐵時代なる根本的な三大文化期編年なるものが、トムセンに發し、(5)佛のブーシエ・ド・ペルトによつて舊石研究の端が開かれ、(6)引續き一八六五年には英のラボック(Sir John Lubbock[Lord Avebury]1834—1913)は石器時代を新舊に分つた。このラボックの區分に依つて、茲に始めて舊石時代(Palaeolithikum)なるものが確認せらるゝに至つた。それ故、このラボック編設以前に既に先覺者が居り、編年は試みてはきたものゝ、史前學的立場は猶明確を缺いで居る。それでも既に佛のラルテは、(7)其古生物學的立場より、一八六一年には、史前時代を次の如くに編年して居る。

ある。それ故これ等を理解するにも、一通りの中石、舊石文化の會得も必要であると同時に、この南方方面からも我が史前學界に、大きな刺戟を受けつゝある。又北に於ても、カムチアツカやアリユーシャン群島方面でも研究が進みだして居るから、餘りに安眠を許さない。一世紀も前の様な氣分で、呑氣な島國の深眠は、やがてベルリの急鐘に狼狽したのでは、既に遲い。一應は豫察し、知識も向上して、萬一に際して認識不足に陷らないことが必要と考へる。

兎に角、直接我が國に於ける舊石、中石等の存否問題に觸れずとも、近き周圍に存在を報ぜらるゝ以上、其個個に就ても研究すべきは、勿論ではあるが、根本に於て舊石研究の標準が、今日歐洲にある以上、先づ夫々の四周研究に先立つて、舊石文化に對する、正確なる認識を必要とする。これが爲には歐洲舊石を見て置かねばならない。(1)

この歐洲舊石文化は、遠くから見ると、如何にも定論的に不動の様に見らるゝが、内部は常に動搖して居る。特に歐洲大戰以降に於て、歐洲それ自身内に於ける編年にも波瀾を起すと共に、他に若干乍ら北阿、小亞細亞等の舊石發見と共に、これが連關問題に及び、場面は漸次擴大せられつゝある。從つて歐洲舊石編年としても、見方によれば、多種多様である。今これ等に關し、其概要を大約研究發展の順序に從つて見て行き、其大勢を眺めながら、愚見をも開陳したい。

(1) 歐洲石器時代、乃至は世界の石器時代等のよく取り纏つた遺作は、私は不幸にして見て居らない。皆無ではないが、手頃なのがない。それに對し舊石時代のみを取り纏めたものは、比較的多い。中石時代や新石時代のみを取り纏めたものも、不幸にして未だ見てない。こんな關係から、舊石研究には、中新石に比して入り易い。其文獻に就ては、拙稿、石器時代に關する歐米の文獻。人類。四一の六、七、八、大正十五年。參照。

(2) カーレンフエルス氏の一遺作に就ては、有光氏、東印度群島石器時代概要。本誌。二の六。參照。但し有光氏は、主として英語の論文に依る

歐洲舊石編年の過程

大山柏

其一　はしがき

最近我が學界に於ても歐洲等の石器時代に就て、次第に多く着目せられてきたことは、史前學上大に悦ぶ可き現象であることは、改めて申すまでもない。而して其内でも舊石文化關係のものが多い。これは一つに文獻關係にも基く所とは考へるが、[1]兎にあれ切角研究の傾向ある舊石文化に對し、表題の如く編年過程を述べて、萬一の參考にと婆心を起した次第である。

特に最近支那、滿洲、蒙古等に於て舊石文化發見の報があり、北京原人骨にも文化遺物隨伴問題も起り、從來の如く對岸の火災視も出來なくなつて居る。又此頃では時々我內地にも舊石發見の報がないのでもないが、多くが專門外の報道であり、從つて其認識不足も免れないのは遺憾である。又以上とは全く別に、今回日本石器時代研究に來朝せられた、ジアワのカーレンフエルス氏（Van Stein Callenfels）[2]や或は佛領印度支那のマンスイ氏（H. Mansuy）コラニー孃（M. Colani）[3]等日本から見れば、南方關係の各地に於ても研究が進められつゝある。これに對し幾何まで關係の存す可きかは將來に殘された問題ではあるが、特にこれ等南方に於ては、獨り新石文化に止まらず、より原的な方向にも研究が進められ、こゝにも中石文化、乃至は舊石關係にまで及ばんとしつゝ

目次

史前學雜誌　第四卷　第二號

歐洲舊石編年の過程

大山　柏

史前學會々則

一　本會ヲ史前學會ト名付ケル

二　本會ノ目的ハ史前學研究ヲ主體トシ、併セテコレニ關連スル諸學ヲ考究普及スルニアル

三　本會ノ事業ハ左記ノ通リデアル
研究小報及パンフレツトノ發行
史前學雜誌(年六回隔月發行)及年報ノ發行
調査竝ニ研究旅行、臨時講演會竝ニ展覽會ヲ催ス

四　會員
本會ノ趣旨ニ贊成シ年額金五圓ヲ前納スル者ヲ以テ會員トシ金貳百圓以上ヲ一時ニ納ムル者ヲ以テ終身會員トスル
特ニ本會ニ貢獻シタル會員ヲ名譽會員ニ推選シ、終身會員ニ準ズル

五　本會員ハ隔月發行ノ史前學雜誌竝ニ毎年一回發行スル年報ノ配布ヲ受ケルモノトスル(但海外在留者ハ別ニ郵送料ヲ要スル)

六　會員特典
本會々員ハ大山史前學研究所ニ於テ研究ノ便宜ヲ受ケ共研究ヲ雜誌ニ於テ發表スルコトヲ得ル
本會ノ調査竝ニ研究旅行、講演會及展覽會ニ出席シ、本會所藏ノ資料圖書等ヲ使用閲覽スルコトヲ得ル

七　本會ニ數名ノ幹事ヲ置キ、本會ノ會務ヲ執ル(將來必要ニ應ジテ本會々則ヲ變更スルコトヲ得ル)

八　本會ハ事務所ヲ左記ノ所ニ置ク
東京府豐多摩郡千駄ケ谷町穩田九
大山史前學研究所内

史前學會
電話青山一二二五番

幹事　大山柏　甲野勇
宮坂光次　田澤金吾
杉山壽榮男
會計　岡田義一

投稿規定

寄稿の範圍は史前學研究を主體とし、之に關連する諸學を包括す。寄稿者は會員並に會員の紹介ある者に限る

原稿は返還せず、但し寫眞、圖表等は豫め申出であるものに限り之を返還す

原稿掲載の先後は編輯者に一任されたし

寄稿者の希望に依りては内容に關し相談に應ずることあるべし

寄稿の別刷は豫め申込みある場合に限り、當分所要部數の實費及び送料を申受け需に應ず

昭和七年七月十二日印刷
昭和七年七月十五日發行
第四卷第二號
定價一圓

編輯者　大山柏
東京府豐多摩郡千駄ケ谷町穩田九番地

發行者　岡田義一
東京府豐多摩郡千駄ケ谷町穩田九番地

印刷者　中村修二
東京市神田區表猿樂町二
株式會社開明堂東京營業所

發行所　史前學會
東京府豐多摩郡千駄ケ谷穩田九大山史前學研究所内
電話青山一二二五番
振替東京五八九六九番

發賣所　岡書院
東京市神田區北甲賀町四番地
電話神田二七七五番
振替東京六七六一九番

史前學雜誌

第四卷　第二號

歐洲舊石編年の過程

史前學會

ZEITSCHRIFT

FÜR

PRAEHISTORIE

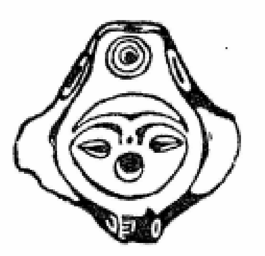
(SHIZENGAKU-ZASSHI)

Organ der Japanischen praehistorischen Gesellschaft

Herausgegeben

von

KASHIWA OHYAMA



4. BAND 3.4 HEFT

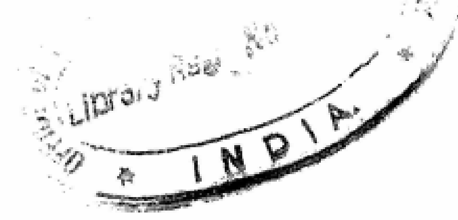
TOKIO

November 1932

Japanische praehistorische Gesellschaft

(SHIZENGAKU-KWAI)

9, Onden, Aoyama Tokio.



Satzungen der Gesellschaft.

1. Der Name der Gesellschaft ist "Shizengaku-Kwai" (Praehistorische Gesellschaft)
2. Der Zweck der Gesellschaft ist das Studium der Praehistorie und ihrer Grenzgebiete und dessen Popularisierung
3. Die Tätigkeit der Gesellschaft erstreckt sich auf
   A Herausgabe kleiner Mitteilungen und Schriften
   B Herausgabe der Shizengaku-Zasshi (Zeitschrift für Praehistorie) (Zweimonatlich) und des Jahresberichts.
   C Veranstaltung von Forschungs-und Studienreisen
   D Veranstaltung von Vorträgen und Ausstellungen
4. Mitglieder
   Die Mitgliedschaft wird erworben durch jährliche Vorauszahlung eines Beitrags von 5 Yen. Personen welche einen einmaligen Beitrag von 200 Yen oder mehr zahlen, werden lebenslängliche Mitglieder. Personen welche sich um die Gesellschaft besonders verdient gemacht haben, können Ehrenmitglieder werden und haben damit die Stellung der lebenslänglichen Mitglieder
5. Die Mitglieder erhalten die Zeitschrift und den Jahresbericht frei, jedoch wird für Zusendung nach dem Ausland das Porto berechnet
6. Rechte der Mitglieder
   Die Mitglieder haben das Recht, die Einrichtungen des Ohyama Instituts für Praehistorie zu benutzen
   Die Arbeiten der Mitglieder sollen in der Praehistorischen Zeitschrift veröffentlicht werden
   Ferner haben die Mitglieder das Recht, an den Forschungs- und Studienreisen der Gesellschaft teil zu nehmen, die Vorträgen und Ausstellungen zu besuchen, sowie die Sammlungen und die Bibliothek der Gesellschaft zu benutzen
7. Ein aus mehreren Mitgliedern, bestehender Vorstand führt die Geschäfte der Gesellschaft
8. Wenn es sich als notwendig herausstellt, können diese Satzungen später geändert werden
9. Das Büro der Gesellschaft befindet sich:

9. Onden Aoyama Tokio
Ohyama Institut für Praehistorie
(Ohyama Shizengaku-Kenkyujo)

für den Vorstand

Fürst Kashiwa Ohyama — Sueo Sugiyama
Isamu Kohno — Kingo Tazawa
Mitsuji Miyasaka

INHALT

I. Abhandlung

II. Mitteilungen (Japanisch)

III. Kleine Mitteilungen (Japanisch)

1. Fundorte

2. Fundgegenstände

TAFELN

Die Aufgaben der japanischen Praehistorie im Rahmen der internationalen Forschung.

Besprechung im Ohyama Institut für Praehistorie
am 22. Mai 1932.

Nach einer einleitenden Begrüssung der Erschienenen erteilte der Leiter der Versammlung Fürst K. Ohyama zuerst Herrn Dr. P. V. van Stein-Callenfels das Wort, dem er noch besonders dafür dankte, dass er trotz seiner akuten Erkrankung an Malaria es sich nicht habe nehmen lassen zu erscheinen.

Herr Dr. van Stein-Callenfels :

Meine Herren !

Leider leide ich heute unter einem Malariaanfall und bin zudem etwas heiser, sodass ich Sie um Entschuldigung bitte, wenn ich vielleicht nicht alles geben kann, was mein Plan war, und wenn vielleicht durch das Fieber meine Ausführungen an Klarheit verlieren sollten.

Ich stehe nun am Schluss meiner 2 monatigen Studienreise in Japan, und da möchte ich zunächst den Herren Fürst Ohyama, Prof. Dr. Koganei und Dr. Goto in Tokyo, Prof. Dr. Hasebe in Sendai, Prof. Dr. Hamada und Dr. Kiyono in Kyoto meinen aufrichtigen Dank sagen für die grosse Liebenswürdigkeit, mit der sie mir entgegengekommen sind. Ohne ihre Führung und Hilfe würde ich niemals in der kurzen Zeit so tiefe Einblicke gehabt haben, wie sie mir zuteil geworden sind.

Auf Grund einer Besprechung mit Fürst Ohyama habe ich mir nun gedacht, dass es vielleicht zweckmässig und zum Nutzen der internationalen Praehistorie wie der japanischen Praehistorie sein dürfte, Ihnen hier in einem Kreise von Fachgenossen meine Gedanken auseinanderzusetzen.

Man kann in der Praehistorie zwei verschiedene Richtungen unterscheiden, die lokale und die internationale.

Die lokale Richtung versucht die Entwicklung in einem bestimmten Lande

festzustellen und beschäftigt sich dazu mit Detailfragen;

die internationale Richtung hat zur Aufgabe, die grösseren Völker—und Kulturveränderungen festzustellen.

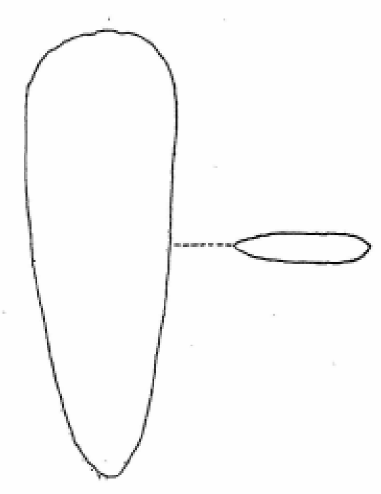
Die japanische Praehistorie z. B. untersuchte hauptsächlich die Keramik und hat damit zwei grosse Perioden der japanischen Praehistorie, Jōmon und Yayoi festgestellt. Jōmon wurde dann wieder in 3 chronologische Perioden eingeteilt, usw.

Dies sind für die japanische Praehistorie wichtige, sogar sehr wichtige Fragen; für die internationale Praehistorie aber nicht. Denn wenn auch die Bedeutung der Keramik in Japan sehr gross ist, so handelt es sich doch nur um eine lokale Entwicklung. Im Süden haben wir dagegen Jahrtausende hindurch gar keine Entwicklung der Keramik. 2—3000 Jahre hindurch finden wir nur die sogenannte "Schnurkeramik", wie sie hier in der I. Periode Jōmon vorkommt; die weitere Entwicklung ist im Süden unbekannt. Ihr Studium ist daher wohl für Japan wichtig, aber international von geringerem Interesse.

Deshalb stelle ich heute die Frage

"Was kann Japan der internationalen Praehistorie geben?" Und darum habe ich Fürst Ohyama gebeten, heute nur Praehistoriker einzuladen, um einen Austausch unserer Gedanken über diese Frage herbeizuführen.

Um nun auf die internationalen Gesichtspunkte hinzukommen, gebe ich Ihnen zunächst eine Uebersicht über im Süden und Südosten Vorhandenes, das für die japanische Praehistorie von Interesse ist. Vieles davon habe ich schon in meinem Vortrag in der Maison Franco-Japonaise gegeben, sodass ich mich hier kurz fassen kann.



C. Fig. 1.

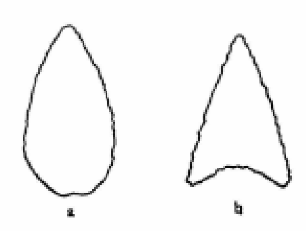
Als erstes ist zu erwähnen ein Steinbeil

von einseitig zugespitzter Form und ovalem Querschnitt.

Dieses Beil kommt von Japan bis Britisch Indien vor, aber in Indo-China, in Malakka, auf Sumatra, auf Java nicht, und ist heute noch auf Neuguinea bei den Melanesiern in Gebrauch. Daher der Name "Papuatypus".

Woher ist dieses Beil gekommen? Von Britisch Indien? Oder von Japan? —Die Frage blieb rätselhaft, bis ich schliesslich zuerst in Nord-Celebes gleiche Beile in praehistorischen Gräbern gefunden habe, und dann im Prince Bishop Museum in Honolulu eine ganze Reihe solcher Beile, die von Guam stammten.——

Weiteres brachte dann eine Ausgrabung in Ost-Java (Sampoeng.) Dort fanden sich 3 Kulturschichten übereinander, und zwar in der obersten (a) neolithische Aexte, in der mittleren (b) Manufakte aus Bein und Horn, in der tiefsten (c) keine Aexte, keine Manufakte aus Bein und Horn, aber *Pfeilspitzen*, sowohl mit konvexer (a), wie mit konkaver (b) Basis.



C. Fig. 2.

Wir haben dabei Andeutungen, dass auf Java die Pfeilspitzen mit konvexer Basis älter sind als die mit konkaver. Wie sind diese Funde zu erklären?

Die Deutung der *Steinäxte in Schicht a* ist einfach. Es sind polierte Steinäxte, wie sie zu Ende des Neolithicum von den Deutero-Malaien gebraucht wurden.

Dagegen waren die *Manufakte aus Bein und Horn in Schicht b* ein Rätsel. Erst Ausgrabungen in Grotten in Nord-Tonkin i. J. 1924 und später brachten einen Fortschritt. Dort fanden sich nämlich

1. primitives nur geschlagenes Steinmaterial (Faustkeile),
2. Protoneolithe, Aexte, geschlagen, aber mit Anfängen von Polierung nur an der Schneide (O. Fig 3). Dazu Bein—und Hornmanufakte wie auf Java, aber nur sehr wenig; auf Tausende Beile nur einige, dagegen auf Java nur Bein und Horn, aber kein Stein. Eine Kulturverwandtschaft war da; aber über das Wie? konnte man nur sagen, dass sie jedenfalls nicht unmittelbar sein kann.

In der tiefsten *Schicht c* auf Java fanden sich dagegen keine Manufakte aus Bein oder Horn, sondern nur *steinerne Pfeilspitzen*, die sicher neolithisch sind. Auch habe ich dort auf einem Raum von 200 km im Umkreis mehrere Werkstätten solcher Pfeilspitzen gefunden.

Woher kamen sie? - Jedenfalls nicht von Westen; denn in Siam, Malakka und Indo-China findet man wohl Pfeilspitzen aus Knochen und anderem Material, aber keine einzige aus Stein. Es ist also die gleiche Sache wie mit dem Papua-Beil.

Nun hatten die Vettern Sarasin vor etwa 40 Jahren in Mittel-Celebes in einer Grotte gegraben und dort kleine steinerne Pfeilspitzen mit konvexer Basis gefunden, die geschlagen und gezahnt waren. Als ich nun die gleichen Pfeilspitzen auf den Philippinen bei Manila fand, war es mir klar, dass sie, weil sie nicht von Westen gekommen sein können, vom Norden gekommen sein mussten. Ich suchte dann Aufschluss in der japanischen praehistorischen Literatur, aber da die Arbeiten in chinesischen Zeichen gedruckt waren, zu deren Erlernung ein europäischer Wissenschaftler wirklich keine Zeit hat, musste ich auf den veralteten Munro zurückgreifen, wo ich solche Pfeilspitzen abgebildet fand.

Wie also die Lösung des Knochen-Manufakte-Rätsels von Indo-China, so war die Lösung des Pfeilspitzen-Rätsels von Japan zu erwarten, und deshalb bat ich meine Regierung, mich nach Indo-China und Japan zu schicken, welchem Gesuch dann auch stattgegeben wurde. …………

Zunächst ging ich nach Hanoi.

Dort, in Süd-Tonkin hatte die Ausgrabung der Grotten von Pha Duc neben zahlreichen steinernen Faustkeilen auch relativ viel mehr Manufakte aus Knochen ergeben als die früheren Ausgrabungen im Bac Son Massiv. Es schien, dass je weiter man nach Süden kam, um so mehr die Manufakte aus Bein und Horn gegenüber den Steingeräten zunahmen.

Ich hörte nun, dass weiter im Süden in einem Moor ein Muschelhaufen Da But sei, aus dem grössere Funde von Knochen-Manufakten bekannt seien. Dort

in Da But habe ich dann auf Vorschlag der französischen Regierung selbst ausgegraben und mir dabei die Malaria geholt, die mich heute so beim Vortrag behindert.

Das Resultat der Ausgrabung entsprach meinen Vermutungen. Es zeigte sich, dass wir eine sichere Migration dieser Kultur, des sog. Hoabinhien, nach Süden feststellen können, bei der mehr und mehr die Manufakte aus Bein und Horn an Stelle des Steins treten, eine Migration, bei der die Grotte von Sampoeng (Java) die Endstufe bildet. Nämlich

von Nord nach Süd :

Hoabinhien I : primitive, roh geschlagene Faustkeile,

Hoabinhien II : Faustkeile mit Anfang des Polierens nur an der Schneide (Sog. Protoneolithe),

Hoabinhien III : Weiterentwicklung der geschlagenen Faustkeile, die feiner werden ; wenige Manufakte aus Bein und Horn,

Hoabinhien im Süden : mehr Manufakte aus Bein und Horn, weniger Steine,

Hoabinhien III/IV (Malakka) : mehr polierte Steine, andere Manufakte ?

Hoabinhien Java : nur Manufakte aus Bein und Horn, kein Stein.

Dass wir mit Recht von einer Migration und einer Entwicklung sprechen können, beweisen die *anthropologischen Ueberreste* :

Hoabinhien I : melanesische Schädel (=Praedravida, Australoide Melanesier)

Hoabinhien II/III ? : melanesische Schädel—indonesische Schädel,

Hoabinhien im Süden : melanesische Schädel,

Hoabinhien III/IV (Malakka) : melanesische Schädel,

Hoabinhien Java : melanesische Schädel.

Die Migration der Melanesier aus ihrer alten (der Ur-?) Heimat in Indo-China über Java nach Neuguinea steht also ausser Zweifel und wird weiter dadurch bewiesen, dass zugleich mit dem Hoabinhien auch die melanesische Rasse aus Indo-China verschwindet. Das Neolithicum dort ist indonesisch oder später,

nicht melanesisch. Die Rasse hat gewandert, nicht nur die Kultur.

Die II. (b)-Schicht der Grotte auf Java wäre damit erklärt; es bleibt noch die Frage: Woher kommen die Pfeilspitzen der III. (c)-Schicht?

Ihnen als Fachkollegen brauche ich nicht weiter zu erklären, dass die III. Schicht die älteste ist, dass die Pfeilspitzen also älter sind als die melanesische Migration. …………

Die Lösung des Rätsels war nur in *Japan* zu finden. Als ich jedoch nach Japan kam, habe ich nicht viel danach gesucht. Denn als ich die Sammlung von Fürst Ohyama besuchte, fand ich dort, was ich nie geahnt hätte,

typische Hoabinhien Faustkeile.

Nach diesen habe ich dann überall gesucht und fand sie auch in der Sammlung des *Kaiserlichen Museums in Ueno*, wo mir Herr Dr. Goto sagte, dass sie zum Teil aus der Umgegend von Tokyo, zum Teil aus Kyūshū stammten, und auch in *Sendai* in der Sammlung von Prof. Dr. Hasebe, in der Nähe von Sendai gefunden.

Ich habe die Frage mit Fürst Ohyama besprochen, und er machte mir den Vorschlag, zur weiteren Untersuchung einen Muschelhaufen bei Kikuna auszugraben, der unter einer 3m dicken Schicht Alluvium liegt, also sicher sehr alt ist.

Dort haben wir dann typisches Hoabinhien II gefunden, aber viel weiter entwikkelt als in Indo-China. Wir fanden:

a den typischen Hoabinhien Faustkeil,

b sog. Kurzäxte (hache courte), geschlagen,

c sog. Protoneolithe, Aexte mit leichter Polierung nur an der Schneide,

d Neolithen aus dem Frühneolithicum,

e Nadelspitzen aus Knochen mit Loch,

f Pfriemen aus Knochen,

g steinerne Pfeilspitzen mit konvexer und mit gerader Basis.

Es handelt sich also typologisch um ein weiterentwickeltes Da But, wo ich ebenfalls Steine und Knochenmanufakte fand, aber letztere nur bis zum Pfriemen

entwickelt, nicht weiter, während Kikuna die Nähnadel mit Loch lieferte. Da es sich nun um eine so bedeutende Weiterentwicklung handelt, habe ich Fürst Ohyama den Vorschlag gemacht, der gefundenen Kultur den neuen Namen Kikunanien zu geben.

Damit komme ich nun auf die Aufgaben der japanischen Praehistorie im internationalen Verband zurück; und als erstes haben wir da die Frage des

Hoabinhien,

die für die ganze Praehistorie Ostasiens von ausserordentlicher Wichtigkeit ist.

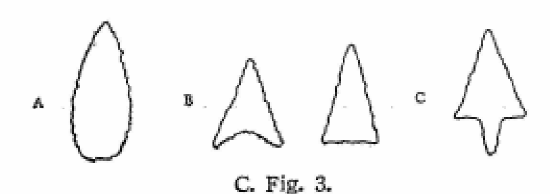
Im Süden ist, wie ich ausführte, das Hoabinhien nur mit der melanesichen Rasse verbunden ; in Japan mit welcher ?

Von den mir bekannten Funden aus Kyūshū, aus der Umgegend von Tokyo, von Kikuna und von Sendai sind nur die von Kikuna wissenschaftlich ausgegraben ; bei den andern handelt es sich vielleicht nur um Oberflächenfunde. Auch Kikuna steht erst im Anfang der Ausgrabung ; es müssen Wohnplätze und Bestattungen zum Vorschein kommen, was natürlich bei einem so grossen Muschelhaufen nicht in 14 Tagen möglich ist.

Es ergeben sich dabei die Fragen

1. Woher kommt die Kultur ?
2. Welche Rasse gehört dazu ?
3. Welche Typologie weist sie auf ?

Im Süden handelt es sich, wie gesagt, nur um Melanesier. Sollte auch in den heutigen Aino eine melanesische Beimischung sein? Ich erinnere daran, dass man vor 50 Jahren die Aino mit den Europäern zusammenbrachte, und dass die Anthropologie die Australoiden als mit den Europäern verwandt betrachtet. Ist eine solche melanesische Beimischung vorhanden ?—Die Antwort, ob ja?, ob nein? muss die japanische Praehistorie geben.



C. Fig. 3.

Ich komme nun wieder auf die

Pfeilspitzen zurück. Auf meiner Reise habe ich wenig mehr darüber erfahren, als dass alle drei international unterschiedenen Typen in Japan gemischt vorkommen.

Sind diese in Japan immer "gemischt"?

Die Amateure sagen ja, weil sie im gleichen Muschelhaufen vorkommen. Doch dies ist kein Beweis. Denken Sie an die Grotte in Java, wo sich in 3 Schichten 3 Kulturen und 3 Rassen fanden. Und auch wenn sie gemischt vorkommen, so bleibt die Frage, ob sie von Anfang an gemischt waren. Meines Erachtens ist das nicht der Fall.

In Indo-China, Siam, Burma, Borneo und Sumatra finden wir keine; auf Java, Celebes und den Philippinen nur A und B, die von Norden gekommen sein müssen. Warum nur A und B, wenn die 3 Typen von Anfang an gemischt waren? Oder gab es damals nur A und B? und ist C jünger? Finden sich dafür in Japan Beweise?

Aber auch in Japan kommen A, B und C nicht überall gemischt vor; C findet sich besonders im Norden, B hauptsächlich im Süden. So fand Prof. Kita unter 3000 Pfeilspitzen aus Tottori keine vom Typ C, und nach einer statistischen Aufstellung von Dr. Akabori (Kyoto) findet sich im Norden B nicht. sondern nur A und C; dann kommen A, B und C vor, worauf C nach Süden zu allmählich verschwindet, bis es auf Kyūshū gar nicht mehr vorkommt.

Gab es nun früher nur A und B? Und ist C vom Norden her später eingedrungen? Oder stammen A und B auch aus dem Norden oder anderswoher?

Sie erinnern sich, dass A und B im Süden gefunden wurden vor der Migration der Melanesier. Sind nun A und B nach Süden gekommen, ehe das Hoabinhien nach Japan kam? Oder ist das Hoabinhien mit A und B nach Japan gekommen?

Dies alles zu untersuchen ist die zweite Aufgabe der japanischen Praehistorie im internationalen Verband. —

Ich fasse zum Schluss nochmals zusammen:

Heute und für die nächste Zukunft giebt es für die japanische Praehistorie zwei wichtige Aufgaben von internationaler Bedeutung :

I. Das *Hoabinhien* ist in Japan an verschiedenen Stellen gefunden. Durch gründliche wissenschaftliche Ausgrabungen wären festzustellen a) die Kulturschicht, b) die Typologie, c) die zu der Kultur gehörige Rasse.

II. Die Verbreitung der *Pfeilspitzen* wäre zu untersuchen a) in Japan, b) vielleicht auch auf dem Kontinent.

Dabei ist zu bedenken, dass die beiden (ältesten ?) Typen A und B auch in der jüngeren Shabarakh-Kultur in der Mongolei gefunden wurden. Sind also auch A und B von Norden nach Japan gekommen ? …………

Meine Herren ! Ich wollte hier keinen Vortrag halten, sondern ich habe Fürst Ohyama gebeten, Sie als Fachkollegen hierher einzuladen, damit wir in einer Diskussion unsere Ansichten austauschen können.

Ehe wir damit beginnen, spreche ich aber meinen Kollegen, den Herren Prof. Dr. Koganei, Fürst Ohyama, Dr. Goto in Tokyo, den Herren in Sendai und in Kyoto nochmals meinen herzlichsten Dank aus für ihre Hilfe und ihre Gastfreundschaft !

Wenn ich zum Schluss noch einem Wunsch Ausdruck geben darf, so ist es der, dass recht viele von Ihnen auch nach dem Süden kommen und mich auf Java besuchen. …………

Leider kam es im Anschluss an die Ausführungen doch nicht mehr zu der von Dr. van *Stein-Callenfels* gewünschten allgemeinen Diskussion. Jedoch führte Fürst Oyama dem Vortragenden gegenüber aus, dass sein Bestreben sei, zunächst im Kwantō die lokalen praehistorischen Kulturfolgen genau festzustellen, und dann von dort aus allmählich nach dem Norden (Tōhoku und Hokkaidō) und nach dem Süden (Kinai und Kyūshū) weiter vorzugehen. Als Grundlage der genaueren Chronologie diene aber die Keramik. Ehe man nicht in einem engeren Gebiet auf sicherem Boden stehe, laufe man Gefahr, sich in Hypothesen zu verlieren.

Dr. van Stein-Callenfels betonte demgegenüber nochmals, dass der Süden keine Entwicklung der Keramik habe, und daher Jōmon II nicht von internationaler, sondern nur von lokaler Bedeutung sei. In einem Vergleich zwischen der englischen Praehistorie, die Lokalforschung treibe, und der französischen Praehistorie, die im internationalen Verband arbeite, führte er aus, dasss man durch Lokalforschung zu keiner Klarheit kommen könne: über die englische Praehistorie sei man noch heute völlig im Unklaren, während über die französische Praehistorie volle Klarheit herrsche.

Ein Praehistorikertag in Japan würde die wichtige Aufgabe lösen können, allgemeine grosse Richtlinien der Forschung festzulegen, wie man auch in Hanoi ein Programm für den ganzen Süden festgelegt habe, das den einzelnen Praehistorikern der verschiedenen Gebiete vorschreibe, welche Aufgaben als am wichtigsten zuerst zu lösen seien.

Prof. Dr. Koganei fragte schliesslich noch nach dem Vorkommen der Jōmonkeramik ausserhalb Japans, worauf

Dr. van Stein-Callenfels antwortete, dass sich das Jōmon I mit der einfachen sog. Schnurkeramik überall im Süden finde, und zwar vom Hoabinhien bis zum Neolithicum ; dass aber Jōmon II dort ganz fehle und eine rein japanische Entwicklung darstelle.

Mit einem nochmaligen Dank an Dr. van Stein-Callenfels und an die Erschienenen, insbesondere an Herrn Prof. Dr. Koganei schloss darauf Fürst Ohyama die Versammlung. Die Uebersetzung der Ausführungen von Dr. van Stein-Callenfels ins Japanische während der Versammlung und die Abfassung des Referats besorgte Dr. C. von Weegmann. Das Referat wurde von Dr. van Stein-Callenfels durchgesehen.

Van Stein Callenfels 博士の横顔

本誌に起稿されたヴァン・スタイン・カーレンフェルス博士は、蘭領ジャワのスラバヤ博物館に職を奉じて居られる考古學者である。氏は以前から東南アジアの石器時代の研究に從事された方で、その業蹟の一つは既に先年の本誌にも掲載された事もあつた。今度の來朝はこの方面の研究をより完全にするために爲されたものであると云ふ。日本に來られたのは本年の三月末頃であつた。當時鳥居博士、三宅氏等の方々は、氏に關して各種の視角から觀察を試みられ、これをドルメン誌上に載せられた。それ故、今頃になつて氏の事を紹介するのも少し古いと思ふが、萬一ドルメンを讀まれなかつた讀者諸氏の爲めに、氏のプロフィルを紹介して置く。氏は身長百八十糎、體重百五十瓩、長髮、有髯の堂々たる體軀の持主で、髭も恐ろしく大きい。舶來の塙團右衛門とでも形容すれば一番適切であるかも知れない。塙團右衛門は豪傑で且つ斗酒を辭さない。カーレンフェルス氏も水の代りに朝からビールをあおる程度の酒豪で、その上强烈なマニラ煙草をたて續けに長いホールダーにつけてふかす愛煙家である。學問に對しては極めて熱心であるがその學說はなか〳〵勇ましい。然し氏は甚だ朗かなユーモリストである。氏の樹立した人世のクローロジーは仲々面白い。第一期は食慾一方の時代、第二期のお洒落の時代、第三期は物質慾、名譽心の時代、第四期は研究慾の時代、第五期は發掘を見物しながらビールを呑む時代。この最後の楷梯がカーレンフェルス氏に當てはまる。研究所を參觀された中、古式土器と伴出する自然面を利用し他の一方を chipped した粗雜な一種の打石斧に就て非常に興味を持たれたので、丁度其時計畫して居た菊名貝塚ーこゝには此種の石器が極めて多いーの發掘に參加される事となつた。この發掘は四月十八日から卅日頃まで繼續し、多量の遺物を發見する事が出來たが、カーレンフェルス氏も毎日殆んどかゝさず熱心に見學された。發掘の結果は他日正式に報告するから此處では述べない事にする。毎朝十時頃までに貝塚に集る筈になつて居たが、所謂 Zweite Periode 連が少しでも遲刻すると、彼氏忽ちポケットから時計を出して見せながら、「昨夜はギンザか?ダンスホールか?」と聞くからやり切れない。そのくせビールの呑めない奴は本當のプレヒストリアンでない。アマチュアだと豪語するから愉快である。

　五月二十二日には「國際的研究の一分課としての日本史前學の使命」と云ふ演題のもとに、史前學研究所に於て講演をされたが、この講演は日本に於て獲られた新しい知識に基いて氏の今までの考へを再吟味されたものである。O・A・Gのウェークマン博士が通譯筆記の勞を取られた。來會者は四十餘名、東大の小金井博士、慶大の橋本、松本教授等の顏も見えた。たゞ會場の狹隘の爲め、本會々員諸氏全部に御通知する事が出來なかつたのは司會者側の最も遺憾とする所であつた。(Zweite Periode 生)

識し正しい方向に向つて動きつゝある樣な傾向を生じて來たのはよろこばしい。斯學が大衆化されるに從つてかうした地方研究團體は急速に增加するに相違ない。そして此等の團體が健全な發達をとげた曉には、所謂專門學者の研究と雖もこの樣な團體の支持なくしては行はれない樣になるであらう。

雜誌大和考古學も地方專門雜誌の一つとして生れたものである。菊判四十頁ほどの小雜誌であるが、內容はなか〳〵豐富で、論說の如きも相當の力作がのせられてあるのは心强い。然しここに望蜀の感を述べれば、より多くの地方的資料と大和なるフイールドの各時代の斷面を示して吳れる樣な研究に特に力をそそいで戴き度いのである。(甲野)

會報・雜報

入會

北海道上磯町　落合計策
東京市澁谷區羽澤町九六　森木六爾
Ponorogo, Java.　Van Stein Callenfels
北海道札幌市北四條西七丁目　河野廣道
山形縣酒田山王臺　白崎良彌
熊本縣菊池郡淵水村字住日吉神社　坂本經堯
東京市目黑區紅葉ケ丘一二七九　松宮左京
東京市目黑區三田二〇六　北村嘉太郎

退會

木村善吉　荒井幸之　吉川長雄
羽田一成　上原景爾　石田憲晉
白井長助　關口健一郎　榊道造
谷中國樹　神田重夫　石川武雄

轉居

仙臺市鍊屋下一二〇　伊東信雄
京都市左京區田中樋ノ口町六二大澤方　齋藤忠
仙臺市東二番町八六虎岩方　山本枡藏
東京市荏原區玉川奥澤五五一　宮下孝雄
大阪市外布施町菱屋西二七ノ四　中谷治宇二郎
臺灣、臺北市龍口町三ノ一八　坂元箪二
東京市澁谷區代々木本町八三七　筑波藤麿
神戸市林田區大塚町六丁目三ノ二渡邊方　楠目勝俊
大阪市東淀川區豐崎町南濱一ノ一七松下別莊內　松下胤信
新潟縣佐渡國河原田町　原田廣作
靜岡市宮崎町淺間神社內　白井光男
東京市板橋區練馬向山町四一　柴田常惠
奈良市林小路四〇　新井和臣
朝鮮京城府崇三洞九九松下四郎　藤井誠一
滿洲奉天浪速通三二大滿蒙新聞社內　菅崎三文

て居る所である。(同書、一〇三項及び圖版第十二) 而してそれが只の二片ではあるが、Gamble 第二洞窟第四層發見であり、其發見者は Prof. J. H. Fleure. で其發見日時の記載までしてあるから、出土の事實は間違ひ無さ相である。然しながら、本書の著者も、流石にこれは認めては、居らないで上層よりの陥入と見て居るのは、頗る當を得て居る様に見らるゝ。今迄に確實に土器の出土した礫石發見地は歐洲にも北阿にもない。これが確實出土とすれば、私には初めてゞある。勿論後世の混入と認められたものは多くある。只この事實は、事實として、記載してある所に、本著者の學に對する忠實さが見られて、ゆかしい。又この様な異例に遭遇した際に、とる可き模範の一つでもある。

更に夫々の個々に就ても、色々論評を加へたきものがあるけれども、今回はこれを割愛して、單に全般を概記するに止める。而して本書は四六倍版、二八三項の大著であり、圖版として三十一葉の寫眞版と挿圖として四十六圖の凸版と、二葉の地圖とがある。其挿圖として出されたものも、殆んど全紙大のみであるから圖版と稱す可きもので七十餘葉の圖版があると思へば間違はない。價未詳。(昭七、十、十一)(大山)

大和考古學 (大和上代文化研究會發行)

時々專門家の方から「考古學に關する地方雜誌が多過ぎて困る」と云ふ非難を聞く事があるが、筆者はそう思はない。考古學的事象は各地に數限りなく存在して居る。これを少數の雜誌が掲載し切れないのは解り切つた事である。それならば各地の細かい考古學的データの如きは、これを全然ふりすてゝ顧る必要がないのであらうか？否。勿論、現在相當の研究機關を背景とする少數の專門雜誌と雖も全く此點を無視して居るのではない。試みに此等のうちの一冊を開けば、雜報或は資料等の欄が設けられ其處にいろ〱の地方に於ける資料又は新發見が雜然と羅列してある。筆者はかうした雜誌の斯うした編輯方針を非難するのではない。此等の雜誌には別の使命があるから。それ故地方專門雜誌の使命は前記の如き雜誌の測てなかつた、或ひは測てゝも及ばなかつた方面、即ちおのおのの地方のデータを克明に蒐集し、或ひは小地域の考古學的調査を爲す點にある。それ等の雜誌は元來或る地方を對象として成立するものであるから、これを通覽する事によつてその地方の考古學的展望を爲す事が出來よう。かうしてA地方B地方C地方……全國的にと斯樣な調査網と發表機關網が張られたなら我國の考古學は恐らく飛躍的進歩を爲すに相違ない。地方雜誌が從來非難され、無視される傾向があつたのは、斯の如き本來的の使命を忘れ、ドグマティックな迷論や一人よがりの所謂論文が載せられたりしたからであつた。然し今や地方研究團體もその使命を明確に認

住居跡」とでも云ふ可きであり、其下に小さく、Ein Beitrag zur Erforschung des Mesolithikums.（中石時代の研究資料）と說明があるので、見當がつく。然しこのトイトブルガー・ワルドが獨逸の何處にありやと云へば、西獨逸の Lippe 領にある。この中石時代の研究であつて、本著者が如何なる人かに就ては、私は一向に聞いたことがない。內容は多くの個々の遺跡の記載と、これが綜括研究とであつて、甚だしく部分的でもあり、又局地的でもあるから、私の樣な中石文化研究者には、大切な參考にもなるけれども、決して一般的のものでない。而して本著者はこの中石文化を更に砂上住居者群と黃土住居者群とに分ち、夫々研究せられて居り、中に多大の細石器の出土を見て居る。而して本書の表題下に特に附して置いた如く本書は、リッペに於ける一地方出版とも云ふ可きであるから、萬一にも本書を得るには、これを書かないと、通じないかも知れない。本書は四六倍版、一〇七項、六〇葉の發掘、遺物等の圖版が附せられてある。價未詳。（大山）

L. S. B. Leakey ; The Stone Age Cultures of Kenya Colony. Cambridge. 1931.

本書は表題の如く「ケニア殖民地に於ける石器時代」とも云ふ可きものである。ケニヤ地方とは、中部アフリカ東海岸より、ピクトリア・ニヤンザ湖附近に亘る地方を指すのであつて、南は舊獨領東アフリカを隔てゝローデシアに對する。而して先きに、N. Jones ; The Stone Age in Rhodesia. 1926. と M. C. Burkitt ; South Africa's Past in Stone. 1928. の發表を見、南阿より中南阿に亘り、一通り其石器時代が概見せられて居つた所、今回本書によつて、より北部が明にせられ、南阿と中阿東海岸地方とが、一通り見らるゝに至つたのは、特に本著者に其勞を謝せざるを得ない。

本書はこれを十一章とし、1.一九二六年以前の發見。2.氣候變移。3.第四紀動物群。4.ケニア文化編立の概要。5.ケニア・シェルレアン及びケニア・アシュールレアン、ナニユキアン（Nanyukian)。6.ケニア・ムステリアン及びスティルベー（Stillbay)。7.ケニア・ヲーリナシアン。8.ケニアの中石文化。9.ケニアの新石文化。10ケニア文化と歐洲及南亞との對比。11同上續。等の各章よりなつて居り、章別でも見らるゝ如く、同地方に於ける舊石研究が主體をなして居る。而して上述5―6にあるのが所謂握り槌文化の一つであり、相變らず歐洲標準を以て律して居るけれども、中に新に編年設定せられたものも交へ、幾分新しみは見らるゝ。只この地でも果して歐洲氷期所產である後期舊石文化の樣な文化、即ち7のケニア・オーリナシアン等の如き文化が存したか、私は大なる疑問を持つ。特に惑さるゝことはこのケニア・オーリナシアンには土器片の出土を報じ

Hugo Obermaier ; Urgeschichte der Menschheit. 1931. (Geschichte der Führenden Völker, I. Band.)

本書は單行本でない。本卷は二部に分れ、其第一部には、Dr. Joseph Bernhart ; Sinn der Geschichte. があり、其第二部が本書である。この第一部のベルンハルトの「歷史の精神」とでも云ふた中にも、色々面白いこともあるとも考へるが、未だ讀んでも居らず、從つて單に表題を記するに止める。

第二部の著者ヲーバーマイヤーに就ては、私は餘りに多くを紹介して居るから、これを避け、內容に入る。この舊石研究の一權威が、新に執筆せられたことに就ては、多大の興味と必要とを感じ、本書をわざ〳〵獨逸に註文したのである。所が其叙文を讀むと、期待は全く裏切られた。それは專門家の間に讀まる可く書いたのではなく、一般教養ある人士に對する史前學知識の普及にあるとのことで、少なからず落膽した。それでも其序文中に面白い文句がある。卽ち「假死の狀態にある數千年の史前時代の成し得る限りの復活への建設である」と述べ居る所に著者の抱負も讀まれて氣持よくも見らるゝ。本書の內容は、大體を二部に分ち、第一部は化石人類であつて、更に其中をAの第三紀人類問題とBの氷河時代の人類とに分つてある。第二部の方は、新石時代及び史前金屬時代の人類の表題のもとに、一の新石時代、二の青銅時代、三の鐵時代なる三分題がある。

これだけが、菊判二百頁弱に綴られて居るのであるから、總てが簡略である。而して本著者の最も得意とする方面は、本書の第一部であるから、これに餘分な紙數を費されて居るのも當然の歸趨でもあり、新石、靑銅、鐵と加速度を加へた簡略さに書かれて居る。然しながら、新舊兩石文化に於ては、一通り歐外にも觸れ、ヲルドスだの北京原人等東亞にまでも及び、アメリカまで概覽して居る。それであるから本書の目的とする如く、單に史前文化を概覽するには、本著者の該博なる知識と相待つて、良好なる參考書であるが、其代り專門的研究には、餘りに簡に失する。特に史前文化を假死より呼び覺すと云ふ本著者が、全卷を通じて僅に六葉の圖版と十四挿圖のみを以てして居ることは、よし學術以外の經濟問題等に禍せられた結果ではあるにしても、餘りにと云ひ得ない程、それ程貧弱であり、史前學なる學の本質に對する誤解も生じ得る。こゝに一大欠陥のある所は誠に遺憾にたへない。尙內容の個々に就ても、相變らず本著者の個性が見らるゝけれども、本書の目的が上述した樣である以上、これ等には觸れない。本價額は目下國貨に變動多いから明にし得ないが、十マーク內外と考へる。(大山)

Hermann Diekmann ; Steinzeitsiedlungen im Teutoburger Walde. 1931. (Wittekind-Verlag-Bielefeld)

本書の表題は、「トイトブルガー・ワルドに於ける石器時代の

と云へば、漸く勿れ家飼文化の中にある。然し更に其小目出しに於ては五つゝに分れ、其最後のe)北縄紋土器文化の中にある。これが内容に就ては、將來細論する機會の存することゝ思ひこれを保留するが、兎に角、前述の松本博士の外、ペルッ、小金井博士、マンロー等の述作を見て居り、勿論認識不足の多々存するものゝ、世界史の一端としては其勉强は多とせねばならない。日本の外、前述の如く東洋各地に亘り、私共が最近やり出した佛領印度支那の如きよく讀んで居る點は、其内容の是非は第二としても、これが努力と奮鬪に對しては、讚辭を呈するに吝かでない。よくもこれだけ世界に取り纏めたものである。只不幸にして、これだけ努力して世界を取り纏めたに對し、餘りにデータを離れて、其結果を掴握して自身のものとなさんとし過ぎて居る。自から其大局を消化せんとして、細部は鵜呑にした觀すらある。其大局を掴握せんとする研究と勇氣とには、敬意を拂ふけれども、本書の內容は今日の要求からは、餘りに飛び離れて居る。それが必ずしも、今日の要求を先きへ一歩飛び越へた、超努級的な仕事としては、餘りに突飛過ぎる。今少しデータをいかして、歸納を縮め、現實の發見研究を會得せしめないと、少なくとも著者の研究だけの程度に勉强して居らないものには、不可解の所が多いと考へる。單に不可解のみに止まらずそこに消化不良を起す心配さへある。忌憚なく云へば、著者に消化不良の崇ひがある以上、これを讀むものにはより大きな消化不良を起さすまいか。特に從來の慣例を離れ新しく樹立せらる可き文化區分の如きは、愼重に取り扱つて新にせざるを得ない理由を、より鮮明に歌ふ可き學術上の義務がある。もしこの義務を輕く考へ、單なる思ひ付き程度に、新區分を行ふことは考へねばならぬ所と思はれる。勿論この四六倍判六四八頁の大著には、著者が五十葉の各種遺物の圖版と七葉の地圖とを附して、認識のより確實を期して居る點は、諒とするも、決して充分でない。此大著としては少なくとも倍加する必要がある。但し各圖版の內容は、各書より集めて、悉くが凸版とした點などは、垢ぬけがして居り、著者獨自の立場が讀まれ、其撰擇の如何は別とすれば、こゝにも努力と研究とが認めらるゝ。只これ等が單に遺物のみであつて、一向に遺跡圖や出土寫眞等の揭出のないのは、歐米の一傾向とは云へ甚だ寂しい。そこに史前學研究上の根柢問題も起つてはくる。其引用文献にも不足がなく、Xの索引も丁寧であつて、これ亦難がない。これを要するに本書は、初心者が世界の石器時代を初めて通觀する爲には、餘りに、ドクマが多過ぎる。一通りに批判の出來る研究者には、面白い參考であり、且つ廣きに亘る一手引ともなることゝ考へる。又この大著として、價が五十マークに近いことも、止むを得まい。(大山)

文　獻

O. Menghin ; Weltgeschichte der Steinzeit. 1931.

本書は最近入手したものであつて、其全部を讀んでは居らない。然し其內容は表題の如く、世界石器時代史とでも云ふ樣な、浩瀚なる述作である。而してそこには、著者獨自の名稱や區分があつて、從來の慣例に依らないものも多々ある。これを十章に分ち、最初よりI.叙論、II.古考古學 (Paläarchäologie) に於ける編年學的基底、III.古石文化 (Protolithische Kultur)〔大山註、前期舊石文化を指す〕IIII.中石文化 (Miolithische Kultur)〔大山註、通常用ひられて居る中石文化 (Mesolith) を指すのでない。後期舊石文化と通常の中石文化とを含んだ文化を指す〕V.原新石文化 (Protoneolithische Kultur) VI.混合新石文化 (Mixoneolithische Kultur) VII.民族學及び言語學的探査の結果及びこれが古考古學に及ぼす關係。VIII.人類系統及び人種問題。IX.普遍史的歸締と文化哲學的展望。X.索引。等に分たれる。これを見ると其臨甞も想定し得よう。而してこれ等各章は夫々、其文化階梯に從つて、獨り歐洲に止まらず、アフリカ、アジア、アメリカ等の各地に亘り、これを多く編年一覽に取り纒められても居る。其一例を擧げれば、II.の古考古學に於ける編年學的基底の所にある東亞新石時代編年一覽の如きは、西、中、東部シベリア、沿海洲、滿蒙、支那、日本、印度支那、マラッカ、西インドチシア、東インドチシアに亘つて居るのであるから、頗る廣範である。而して夫々が編年せられ統一せられて居る。日本の如きは、松本彥七郎博士の編年に基き、新、中、古新石時代に分たれ、最早や編年完成した觀がある。從つて他の各地でも、同樣に僅少文獻を不消化に取り扱つて居るのではないか、との疑問も生ずる。舊石關係（本書のIII.IV.は拙稿、歐洲舊石編年の過程に於て述べてあるから畧し、直接日本に關係ある新石文化を見る。それ前に其一般を見るとV.の原新石文化の中には、目新しく珍奇な表題がある。卽ち豕飼文化 (Schweinezüchterkulturen) 有角飼畜文化 (Hornviehzüchterkulturen) だの御獸飼文化 (Reittierzüchterkulturen) 等、一寸人目を却すものがある。而して著者は眞面目に牧畜文化とでも稱すべきものを內分したものらしい。これがVI.の混合新石文化に入ると、又變つて居る。卽ち村落文化 (Dorfkulturen) 市街文化 (Stadtkulturen) ステップ文化 (Steppenkulturen) 等の區分が見らるゝ。さてそれなら日本新石文化は何れに取り扱はれて居るか

る當時の海岸環境の存したことも考へられ、本魚に對する史前民の漁不漁問題にも觸れてこらるゝのである。

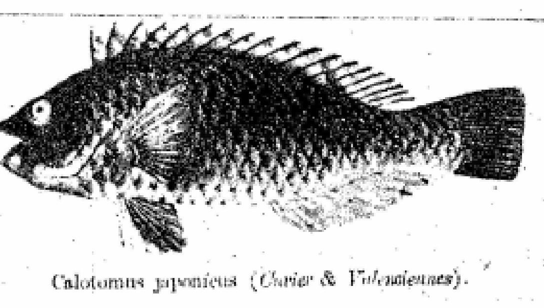
要するに、今述べた樣に本魚の出土からして、史前學上の研究問題も生れてくるのであるから、單なる天然遺物として、放置も出來なくなる。これは獨り本魚に限つた例證ではないが、氣付いた一例として、これを述べて參考に資する所以である。勿論其種の決定や、習性等の天然現象に就ては、史前學者として自から研究するには當らない。夫々專門の魚學貝學者等から鑑別も受け又色々聞知した上、史前學研究の對象內に入り得べき限りを採用すればよいのである。又單に文化遺物のあるものが獨り其型態學や術工學的研究のある場面に止まらず、猟漁等の對象を得る時には、研究を一入深く導き得ること、信ずるものである。

肅愼之矢

楊嶽樓藏、寄古圖錄と云ふ寫本の中に肅愼の矢と稱するものが出て居る。鏃は澤瀉葉形をなしこれに柄が附けられ、更にそれが矢柄に着く樣に出來て居る。此の形式の矢は現在の北方民族の間に普通に見られるものである。是川一王寺遺跡から出土して居る骨器にもこれと類似した形式のものがあるし、所謂アメリカ式石鏃とも一脈の關連がある樣に見える。此等の類似は單に使用法―着柄法に基づくものか、或ひは更に深い文化的關連があるのか。近い將來に於て恐らく斯うした問題が眞面目に討議される日が來るに相違ない。(I・K生)

い。色は毒々しい青味を帶びた褐色であるが、これが亦保護色であつて、海草間にをるのが、中々見出しにくい。

此の如き習性を有するのであるから、萬一にも遺跡より本魚の出土を見るならば、これよりして色々研究すべき件々が出てくる。第一には、史前民が捕食したものであるなれば、如何なる漁法を以て、本魚を漁獲したかの問題である。もし前述の記述に誤りないとすれば、史前民が銛で刺突した場合が多からうとの想像も許され得る。かくこの假定に立脚した場合には、本魚の出土地にはこれを刺突すべき、銛等の刺突器があつてもよい。即ち本魚骨の發見からして、一搜索指針も得らるゝ。第二には、本魚を刺突するには、潛水刺突が最も有利であるのであるから、史前民が潛水刺突を試みたか否かの判斷資料ともなる。もし本魚外にも潛水刺突の漁法が有利な樣な他の資料が、本魚と同時に出土するか、否かによつて其公算にも及ぼしてくる。第三には本魚の出土は、其出土地附近に於て、當時の住民たちの漁撈圏内に本魚の棲み得る樣な岩礁の存在した地形環境復原の一資料ともなる。且つ岩礁存在の有無は獨り本魚のみに止まらず、他の同樣習性を有する魚類は勿論、貝類に於ても、着棲生活を營むものがあるから、特に貝塚發掘の如き場合であるなれば、本魚と對比すべき貝類の出土が如何にあるかを見れば、そこに相關々係も發見し得る。必ずしも岩礁とは限らないが、カキやウネナシトマヤガイ等は着棲する貝類であり、且つ我が國の鹹水產貝塚には、よく見る種類であるから、これ等との共出は、公算をより大にする。又反對にカキや其他岩礁に生活する貝類の多く出土する場合には、本魚の出土可能であ



第一圖　ブダイの外形　（動物圖鑑より）

第二圖　鹿兒島縣出水貝塚出土ブダイの齒骨

的形態圖。

3. 壺形土器　高さ 8.4 c.m. 口徑 6.4 c.m. 頸部直徑 5.8 c.m.
腹部直徑 8.5 c.m. 底部直徑 5.4 c.m. 口脣部厚度 0.3 c.m.
底部厚度 0.6 c.m. 平面的形態凡正圓。

燒成は不完全な爲か三個共暗黒色の斑ある淡褐色を呈し、成形法は卷上法?乃至輪積法と推測される。猶内面・外面共に粗い刷毛目文が施され又朱が使用せられて居る。

（昭和七・一一・四）

動物の研究

ブダイ (Calotomus Japonicus (Cuvier & Valenciennes)

大山柏

ブダイと云ふただけでは、讀者の多くが、御解り悪いと思ふが、兎に角我縄紋式に屬する貝塚からは、稀に出土して居る魚の一つである。其出土する部分は、圖の様な齒乃至顎の部分で他の部分は、私共には解らない。私共の研究所にある　例は貝塚出土であつて、他に幾何出土して居るものか、詳細に研究して見たことが無いけれども、決して多出するのでは無い様である。又縄紋式貝塚以外にも發見せらるゝものか否かも、私には不明である。

然しながら、獨り本魚に限つた問題ではないが、魚類出土に餘り多くの關心を持たれないで、採集漏となる場合もありはせんかと考へ、史前學上、魚類研究の一例證に本魚を引き合に出したものである。

本魚は圖示した様な、魚類としては特別に近い様な堅硬な齒と顎とがあるから、この部分の出土に當つては、比較的認識容易でもある。この様な强い口部を有する理由として動物學者より、本魚は主として岩礁の間に棲息し、岩礁に着棲する海草の類を、主要食料とし、これを嚙るに適應する齒顎を有するのであると聞知して居る。又私自身が駿河灣に於て漁夫よりは、本魚は殆んど釣れないし、又網にかゝることも稀であると聞いても居る。又更に私共の青年時代には、駿河灣で本魚が潜水して、銛で突く最も大きな對象であつた爲、私自身には記憶鮮かなのでもある。而して本魚は其行動甚だ痴鈍で、多くは岩礁にある凹陰に密着して動かない。而して銛を一二尺の處まで寄せても、通常動かないから刺突は甚だ樂である。駿河灣に於ても、長さ一尺内外のものが、通常二―四ヒロの深さに多く、稀に二尺以上のものまで刺獲した記憶がある。然しこれは必ず潜水を必要とし、いくら水が澄んで居つても、水面からは發見し得な

高三豬富松峯吉氏の談話に依れば、二鉾共貝塚のさして深所ならざる所より出土せりと云ひ、二個中一個は三十數年以前に出土せりと謂ふ、小形の方は全表面相當に光澤を有し色は白銅色、出土せし當時にはその表面に何等銹を見ずと云ふ。大形の方は光澤殆どなく相當の重量を有し色は暗褐綠色を帶ぶ。伴出物は不明である。この貝塚の貝殼は今日、余の記憶に依れば主として Arca granosa. らしく、猶ほ表面採集にて僅に赤色塗料をほどこせる土器底及び高杯樣土器の中部と想像される土器破片を拾得した。

　前記二鉾共未だ學界に其の形態が發表せられて居らぬものと考へられる故當時のスケッチをここに載せ識者の御參考に供する。

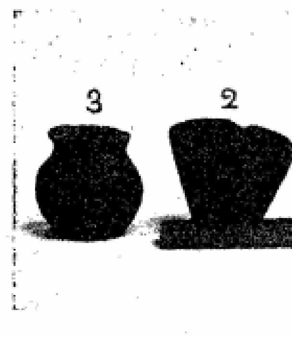
（昭和六・五・七）

世田ヶ谷鶴岡出土の彌生式土器

齋藤房太郎

寫眞に示す土器は東京府荏原郡世田ヶ谷町代田鶴岡出土の彌生式土器にして畏友故藤森精之助君の採集に依るものである。

　近時頻々たる住宅建設の爲遺跡は今や全く消滅に歸し自分の知る範圍内では未だ何等報告もされて居ない樣であるから消滅した遺跡の遺物として此處に御報告して置かうと思ふ。





1. 高杯?(臺破損)高さ 8.25 c.m. 口徑 11 c.m. 括部(臺)直徑 5.5 c.m. 口唇部厚度 0.55 c.m. 臺厚度 0.55 c.m. 平面的形態凡正圓。

2. 高杯?(臺破損) 高さ 8.4 c.m. 口徑 10.7 c.m. 括部(臺)直徑 5.3 c.m. 口唇部厚度 0.65 c.m. 臺厚度 0.65 c.m. 平面

茅山式、諸磯式、所謂薄手式等の土器類及び石鏃―黒耀石製、有柄のもの多し―が混出して居る。此等の材料は表面採集品であるからその出土狀態は全く解らない。けれども關東に於て茅山式が諸磯式より古く、諸磯式は所謂薄手式より古い事は他の遺跡に於て證明されて居る。其處でこの新型式の土器をこの中のどの部分に編入さす可きかゞ問題となる。勿論發掘調査を行つて居ない現在に於てこの樣な問題を輕率に決定する事はさく可きであるが、單に技工上より觀察すると此種の土器は前にも述べた樣に諸磯式の或物と類似し厚手式の或物とも多少の共通點を持つもの丶樣に見える。所謂厚手式と諸磯式との關係は近年に至つて、前者が新しく後者が古いと云ふ事實が證明された。けれども型式上よりは兩者の間に一の成りの Hiatus がある樣に考へられて居た。然しこの新型式の土器は、再三述べた樣に兩者の特徴の一部分づゝを幷有して居る。こゝに此種土器群の研究の價値と意義とがひそむ樣に思はれる。又、將來その編年的位置が決定された曉には、中部以西に於ける類似土器との年代的對比も可能となり、本邦西南部に於ける繩紋式文化の流動を究める一契機となるに相違ない。

終りにこの貴重なる資料に就て研究發表の自由を寬容せられたる伊丹眞太郎氏の厚志に對し深謝の意を表する。(未定稿)

附記。この小編は筆者の身邊多事の際、早急に執筆したものである爲め、比較研究の資料も充分でなく、又文の、推敲の暇なき爲め記載の明確を缺いた所が多い樣に思ふ。何れ後日遺跡の實査を行ひ更に多くの資料を得て後正式の報告を試み度いと希望して居る。

彌生式系統

筑後塚崎烏帽子塚附近貝塚出土の銅鉾に就いて

永澤讓次

過ぐる昭和三年十二月二十七日佐賀高校に在學中久留米附近を旅行した際、久留米驛から西南へ走る大川鐵道の塚崎驛の東北部數丁の所に當る烏帽子塚及びその北に接して遺存せる彌生式貝塚を見學したことがあつた。この烏帽子塚及び貝塚は筑後川に面した段地にあつて兩遺蹟は極めて接近してゐる。然して貝塚からは曾て石包丁、石器、彌生式土器等を出土し貝塚の大部分は發掘ずみである。烏帽子塚は今日一個所に少しく樹木の茂つた塚跡らしき形態をそなへ居るに過ぎず、塚に就きて詳細のことは不明である。

此處の貝塚より二個の銅鉾を出土した。所有者三潴郡同村字

多いらしく胴部以下に發展する場合は餘り多くない樣に思はれる。

さて此種の土器に最も類似した物は、先年宮坂光次氏が長野縣下中山村蟹掘古墳中より發見された縄紋土器である。(史前學雜誌、第二卷第一號)此の土器は全體カリパー狀を呈し、口頸部には隆起線より成る一種の波狀紋が發達して居る。この波狀紋の末端は鉤狀に彎曲して居るが完全な渦卷となつて居ない。圖dに示す破片は恐らくこの蟹掘發見品と類似の紋樣構成を持つものと考へられる。又、此の型式と多少共通する特徴を有する土器は近畿、中國兩地方に於て往々にして發見されて居る。河内、國府(京大、考古學研究報告、第三册) 備中、里木(同册) 紀伊、鳴神(鳥居博士、有史以前の日本) 播磨、大藏山(直良氏寄贈、史前學研究所々藏遺物に據る)等から發見される土器の或物は土質其他の點で多少相違する所もあるが、大體に於て近似した型式と云ふ事が出來る。

斯樣な型式の土器は從來關東に於て全く發見されて居なかつたものである。然し部分的の手法上よりみてこれと類似するものは指摘するに難くない。即ち隆起線上に半裁竹管を以て施した連續的半月狀壓痕は諸磯式に稀に認められる同種紋樣と近似し、所謂厚手式の或物にも凸線上に斯種の壓痕を有するものもある。但し後者は線の太さ施紋位置及び施紋狀態等の點に於て十三菩提出土品とは可成り相違して居る。形態に於ても内屈する口頸部を有し、更に又全形カリパー狀を呈する所は諸磯式・厚手式と共通して居ると云へよう。

野川十三菩提遺跡からはこの新型式の土器の他に前記の如く

關東に於ける繩紋式土器の一新型式に就いて

甲野　勇

昨年會員伊丹眞太郎氏の蒐集に係る神奈川縣橘樹郡宮前村野川出土の石器時代遺物を拜見した際に，同地小字十三菩提（ボダイ）から發見されて居る土器破片の中に關東―特に東京附近―としては特異な型式に屬する物のある事に氣が附いた。伊丹氏も此等を採集された當時から既にその特異性に注意され，此種の物は特に綿密に搜索された結果，同氏の手許には隨分小さな破片に至るまで蒐集保存されて居た。

我々の間で普通に野川遺跡と呼ばれて居るのは，俚稱「原」と云ふ所で，此處は所謂厚手式土器を豐富に出す遺跡であつて，此地に就ては既に大場磐雄氏（考古學雜誌，第十三卷第十―十一號）池上啓介氏（本誌，第三卷第四號）等の記載がある。伊丹氏の言に據れば「十三菩提」遺跡は，前記「原」遺跡の東南方，一支谷を隔てた臺地上に存在し，遺物散布區域は相當に廣いらしいが問題の型式に屬する土器は，そのうちの小局地にのみ限つて散列して居るとの事である。

伊丹氏が同地に於て蒐集された土器破片の中には，裏面に條痕を有し表面に細隆起線紋をもつ茅山式土器（圖q）直角に屈折する口唇を有し器面に半截竹管を用ゐて不整直線紋を施した諸磯式土器（圖n）所謂薄手式土器（圖o・p）等に混じて此等の何れの型式にも屬さない一種の土器が存在して居る。これは圖a―lに示す樣な小破片であつて，全形を推定し得る樣な例は全く發見されて居ない。此種の土器片の口頸部は稍內屈するものが多いらしく，製作は槪して薄手であるが，土質は石英末を混じてやゝ粗く，地色は大體に於て褐色或ひは黑褐色を呈する。繩紋は普通の單方向繩紋で撚子の大さは中等度，口緣は平緣（圖a・d）と小刻を附けた物（圖b）とがある。紋樣は隆起紋と沈刻紋との二種があり，前者は土器面に幅二粍內外の隆起線を附着させ此線上に半截竹管を以て連續的に半月狀壓痕を施し（圖b・d・e―g・j―l）又は稀に半截竹管によらざる直線的小刻を線上に附けた例も見出される。（圖・i）後者は器面に半截竹管を用ゐて連續的半月狀壓痕を印したもの（圖a・c）及び同樣の器具を以て單なる平行沈曲線を引いたもの（圖h）等がある。此等は直線狀（圖b・i・k・l）鋸齒狀（圖d・g）又は圖eの如き弧線の組合せ等に配置されて居る。破片から推定して見ると斯の如き紋樣は口頸部から胴部最上部の間に帶狀に施されて居る例が

の二個は黑耀石製である。石匙も燧石製であり、第一次の稍々大なる剝取の上に第二次の細かい剝取を試みられた結果、かく形が整ふて居る。

此れ等は主として演習場の表面での御採集であるから、共隨伴遺物は不明である。從つて、繩紋式に屬す可きか彌生式文化の所產かは明確ではない。只兩者共何れに屬するにせよ、此の如き優品が九州北岸地方に見る所は、注目に價する。從來精良石器と云へば、兎角東北地方を直に聯想せしむる程、東北にはこれが多い。然しこの樣な優品が九州にも存する所は、辨へ可きであり、將來これ等の所屬文化が知らるゝに於て、より考ふ可きことも生ずる。

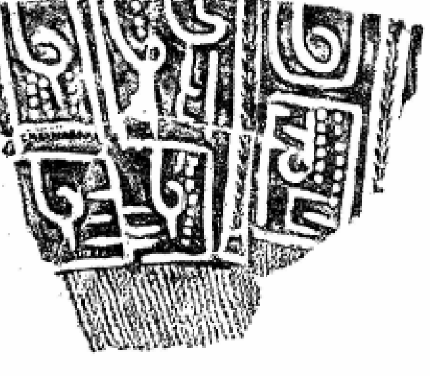
李王殿下が御多忙且つ御多務の軍職の御暇に、かく史前學上にも、御注意がとゞき、獨り御採集遊ばすに止らず、私共の研究所へわざ〳〵御貸下げを賜つて、研究の資料へと、學術の御尊重に對しては、誠に恐惶に耐へない。それにしては、本研究は餘りに簡に過ぎるけれども取り急いで、これを報告し、更に將來、九州の史前學文化を總覽するの日、再び研究を行ふことゝし、今回は殿下の御思召の次第を同學の諸友に報ずることを第一義とて、こゝに述べた次第である。

（昭七・一〇・一二）（大山 柏 謹記）

武藏久ヶ原庄仙出土の土器片

中根君郎

當破片は武藏荏原郡池上町久ヶ原庄仙。口部の廣い甕形土器の口緣部。厚手で燒は相對的に立派です。粘土の柔かい時に描文したのでしようか、線の側に少しづつ盛り上りがあります。それの爲か、



來つ上つた直線、曲線は大變太い線のものです、そして吾々に柔かみと溫かみとを與へる樣です。この文樣には可成り見るべきものがあると思ひます。現存の大いさ二〇糎。

織物」をやつてする取り巻きのみでは充分でなかつた事を物語るものではないだらうか。そして、第二次の取り巻きの織物も第一次のそれと同じものであつた様に観察される。

3、4、に於ては縄目は細長き紡錘状を呈し、6に於ては一層之が精細であつて揃つてゐる。7は甕形土器の上緣に施された地紋であつて、縄紋は横に施されてゐる。吾々はかのアメリカ土人の叩き板を想起する。3、4、或ひは6の如きかゝる手段に近い方法によつて爲されたものが多かつたであらうと思はれる。5は現存に於て高さ十一糎、底徑六糎の土器に施された縄紋の一部分を示めしてゐる。條と條との間隔は前述のものと比較して可成り廣く縄目は小さく、細長い。拓本に見られる様な不規則な押され方は、之が織物或は綱物によつたものと解するよりも、小さな叩き板—間隔をおいて紐を順次に巻きつけて行つた所の—を無秩序に叩いて成つたものと解したい。

（昭和・七・四・一二）

李王家御貸下の石器類

大山　柏

李王殿下が此程大分縣の陸軍演習場に御出張の際、御採集になつたもので、先頃御殿より研究の爲、御貸下を得たものである。

圖に示した如く石鏃と一個の石匙とであつて、悉く優品揃いである。石鏃は悉くが無柄式であり、右上の一個が淺く凹缺して居る外は、剜抉部が深い。又上段向つて右より三個と、右下の一個とが所謂將棋形であり、又第二段右端は、所謂鋸歯形剝取が行はれて居り、これと同様で、これ程に顯著でないものに、第三段の右より二つ目と、其左の稍々大形なものとの二個がある。石質は區々で燧石、サヌカイト、及び第三段の右より二番目、下段右端

繩紋ある土器片 II

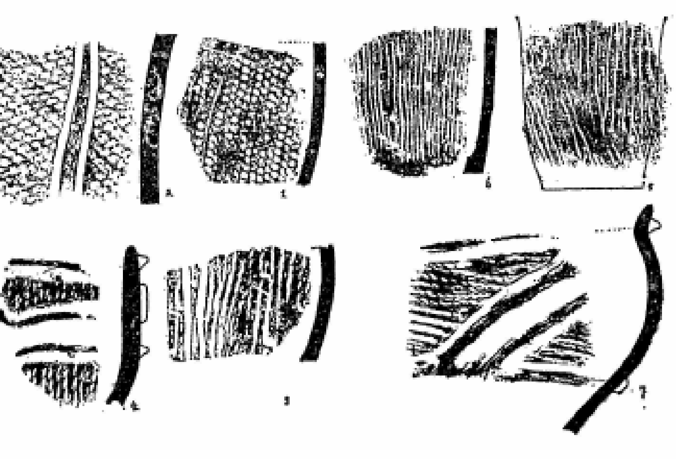
中根君郎

不勉强の爲に、資料が中々集らない。繩紋そのものの全き本質が僕自身によく理解出來ない。かう云ふ事が僕の進行を鈍くする。けれど多くの資料に接してゐる中にその本質は本來の性質を夫々に解き放なして明瞭に自分の目の前に現はして來はしないだらうかと云ふ自惚の下に僕は努力する。

資料として、こゝに千鳥久保貝塚の繩紋ある土器片を紹介する。全て夫等は平凡である。けれど一遺蹟に於ける多くの土器に施された繩紋の種類を知る事は、—そしてある時は繩紋と器形との規約も窺ふ事が出來る樣に思はれる—此の小さな繩紋土器片の研究に於て役立つ事と思ふのである。

僕は此の遺蹟で採集した中から次の七片を採り上げる。七片の中、大體に於て1、2の繩目は粗大であり、3、4、7の夫等は細長く、6は精細であり、5は擬似繩紋に屬するかとも思はれる。

1は破片より想像してその器形は甚だ大形のものであらう。夫々繩目は楕圓形或ひは殆んど球狀を呈する。そして土器表面への此の織物主體の押され方は大變淺い。此の事實は粘土の硬い、軟いによる事もあらうが、此の場合の丸き繩目は、繩目の長きものと比較する時は、寧ち兩者間の織物原料の相違を示すものではないだらうか。



2。之は腹部に於てその徑約三十六糎，厚さ一糎を算する大形の甕形土器の一部分の拓本である。全體として見る時は、席を押したるが如き感じである。2に於ては次の事實に注意する即ち、「席狀の如き織物」が二度押されてゐるのである。故に繩目はダブつて、不規則な形狀を示めしてゐる。此の事實は此の大形の土器なるが故に、完全なる土器成形を得る爲には、第一次の「席狀の如き

四　植物壓痕ある土器

圖11は尾形氏の所藏にかゝるもので神奈川縣津久井郡川尻村小松ケ岡出土々器である。黒褐色厚度一糎燒成堅硬。彌生式後期の色彩を多分に持つて居る。所で面白い事には器面に確かに植物と覺しきものゝ壓痕が押捺せられて居る事である。此は植物原體を其まゝ捺印されたと解するを妥當とす可く、葉莖枝幹等の澱渕として浮動して居る。植物種名は專門學者の學示を得て確定されるのであつて門外漢の私は其の敎示を期待して居る。

五　一土版に對する考へ

圖12・13は武藏南多摩郡原町田出土と稱する土版である。赤褐色を呈し表面滑澤上部に懸垂用の小孔を穿つてある。紋樣として人體の象徵的彫法と、渦卷の簡單な配置其他がある。此土版は曾つて八王子方面調査の際一見したのであるが極めて素朴的臭味を具備して居る如く感得するもこれを以て眞正の土版なりや否やは多少の疑ひなきを得ない。寧ろ色々の點から僞物としての色彩が强いと私は思つて居る。

六　北海道小樽手宮出土の一岩版

圖14は明治三十四年七月尾形順一郎氏が、手宮古代文字裏の高橋忠作氏所有地で採集せる岩版である。石質は輕石の如きもので、圖の如き印刻を施してある。一參考資料として提示しておく。

七　横濱市神奈川區菊名町對甲臺

圖15・16は曾つて報告した宮谷貝塚に程近い對甲台出土の土器である。此處からも貝殼押型紋が往々に出土する。說明は要しないが横濱市史文化硏究上の好資料として且又宮谷貝塚比較資料として呈示しておく。

（昭和七・一〇・一三）

偶然の一致か、或ひはかゝる土製品の有する共通性か、猶土製品は上羽貞幸氏が新川村上貝塚で發見せられたものとその大いさに於いて全く一致しやうとしてゐる事であります。或ひは全く同一の製作者によつて之が爲されたと解する事が妥當であるかも知れません。形狀は殺斷面に於いて精確な楕圓形であります。

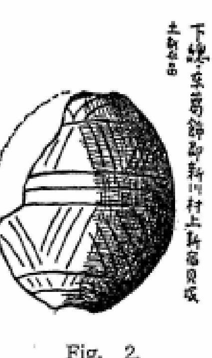


Fig. 2.

立體土製品（考古學研究第二年第三號、八幡一郎氏論文參照）の一資料ともなれば幸甚と思ひます。

考古雜錄

松下胤信

近い過去となつてしまつた、學生時代を回顧して、色々な思出の情が湧いて來る。煩雜なそして目まぐるしい一日の生活を終つて、扨ともかくも自分の机と書架に對すると、曾つて愛讀した懷しい考古學書が、私の心の琴線に觸れる。其處で斷片的な資料を聚成して、せめてさうした日の心の落ちつきと、純情に燃える私を取戻して見たい氣持で、此小さなメモランダムを編んだ。

一　神奈川縣津久井郡内鄉村調查

三四年前であつた。茲に調查日記が無いので調查期日を記す事の出來ないのは殘念であるが八月も軈て終らうとする或日私は相州津久井郡内鄉村へと旅立つた。中央線與瀨驛で下車し相模川の溪流を眺めつゝ土地の採集家であり土俗研究家たる鈴木重光氏を御訪ねして一夜の心からなる款待を賜り豫期した以上の收穫を得て歸宅する事が出來た。圖1は同村増原出土の土器片でその紋樣が遮光器狀を成す物、圖2は同じく増原、圖3は同郡湘南村小倉出土で爪形紋を配するに竹管紋を附して居る。此等の遺跡は主として相模川溪谷の段丘上に存するのである。

二　神奈川縣中郡比々多村探查

此方面の探查も三四年前に數回行つた。圖4は同郡大根村北矢名出土、圖5・6は比々多村三ノ宮村宮上出土、注口土器の殘片である。特に後者は暗黑色を呈し器面に磨きを加へられS字狀紋の配列を見る。前者は粘土の紐帶を横列に附紋して居る。

三　北海道繩紋土器斷片

圖7—10は北海道後志國余市町チャシ遺跡發見の繩紋系土器である。大體黑褐色燒成は軟弱である。尾形順一郎氏の北海道在職時代、明治卅八年の採集と承る。

併記した。同圖Cは平行曲線紋の普通の物である。段下は把手の主なる物を提示した、いづれも纎細にして偉大ならず後期の物であることを示して居る。

第三圖に示す深鉢形土器は近來此地點の土を掘取り他を埋立てたる際自分の發見したもので、口緣を下に伏せてあつたゝめに上部即ち底は鋤鍬のために破壞されて存せず、僅に復原して現形を保つに至つた。從て底部は今少しく長かつたものと考へられる。現寸に於て高さ二九糎口徑二七糎半底部の徑十五糎把手の高さ二糎厚約八ミリ燒成極て堅く色は赤褐色繩席紋を斑に施したるのみにて他に何等紋樣がない。把手は低い山形四個を有す。此附近開墾既に年久しく相當の遺跡地を有しながら完形品を見出す事は殆ど不可能に屬す然るに此地點に於て貧弱ながらこの土器を發見し得たる事は深く喜悅に耐へぬ次第である。

最後に同圖Dは最近畏友二宮氏が東久留目村に於て採取された土器破片である。全體の紋樣も異樣な點があり下部の編物形紋樣が頗る珍とするに足ると思ふ。是は他の小破片から見て繩席の織始めか或は織止めであることは間違ひないが、繩席の織始め若くは織止めを押捺したる紋樣は初學の自分としては始めての見聞であるのでついでに附記して先輩諸氏の御指敎を仰ぎたいと思ふ。

同（遺物）

下總上新宿發見の紡綞車狀土製品

中根君郎

當遺物は下總國東葛飾郡新川村上新宿貝塚の發掘品で丁度半分を缺失してゐますが、全體を知る事が出來ます。長さ五・八糎最大幅徑四・五糎。中心孔の直徑一糎。燒成は充分で大變堅い。文樣は拓本、及び略圖に見らるゝ樣に中央に三つの平行線、上下に一本或ひは二本の並行線を描き、殘餘の表面に山形を構成する樣な夫々の斜行線、中心孔に近い上下の並行線に於いては夫々小さな孤線、或ひは短かい線を刻んでゐます。全表面に文樣を充塡する意圖を知る事が出來ます。かゝる線は相當粘土の乾燥した時に爲されたのか線の刻みが淺く非常に剋明に描こうとした努力がうかがはれます。

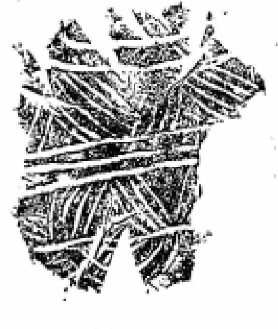


Fig. 1.

石器は石斧・石皿破片・石棒破片・凹み石等が發見されて居る。石斧は打製島田形・磨製若は半磨製の物があり、第四圖上段左から二番目の磨製石斧は長さ僅に七糎余の小形の物であるが、青色の美しい石質で能く研磨され少しの瑕もなく實用品とは思へない様である。下段左方の物は半磨製で略完形、中央の物は同半磨製にて下部を缺失して居る、右方は石皿の破片である植木植替への際發見されたものである。

Fig. 3.

Fig. 4.

　土器破片は第二圖上段右方に示すもの第五圖Aは黒色を呈した薄手のもの、同圖Bは口緣一部の破片であつて口緣上部に小い刻み目があり、縄紋の下地に平行直線及曲線紋様を畫いたものである、右方曲線は恐くは大きく8字形を畫いたものであつたらう。これ等の紋様ある破片を發見する以上8字形紋様のある破片のあるべき筈のやう考へらるゝが、今日まで此地點では未だ一個も發見せぬのは寧ろ不思議である。次は長さ十三糎もある偉大なる注口である、其土質から看て稍疑なき能はずと雖も地層の下部から出たものであるから

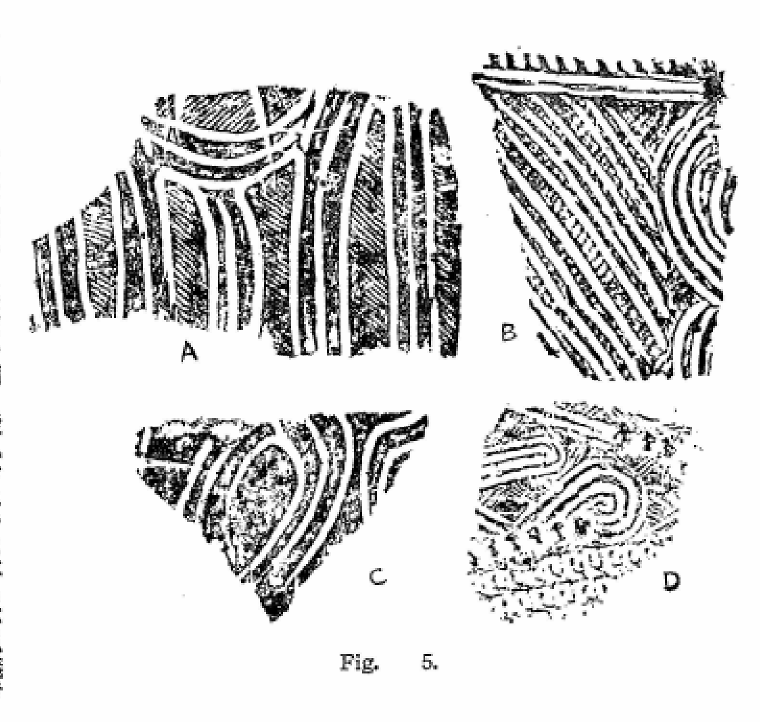


Fig. 5.

つて御嶽は南は妙正寺川を隔てゝ片山の丘に相對し、西は中新井川を中にして氷川神社東福寺及東京市療養所の在る字寺山の臺地に呼應し、北方は小い谷を隔てゝ地頭山と相向ひ、唯東方のみが芳花園住宅地から葛ケ谷の臺地に接續して居る。地圖の中

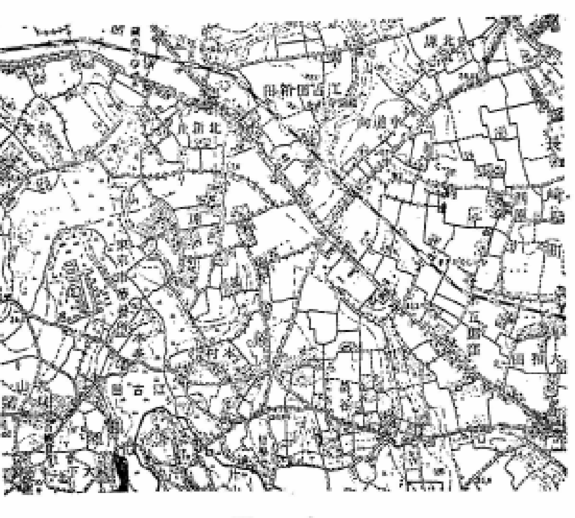


Fig. 1.

央本村とある村の字の地點に當る。地圖には單に本村とあるが東と云ふ字を誤脫したものである。この御嶽は勝景の地である關係からか江古田の内でも尤も夙くから開けた所と云はれ、元この地に御嶽神社の遙拜所があつたゝめに御嶽と云ふ地名が殘つて居るので、寛永慶安の頃までは現今寺山に在る東福寺氷川神社及び第六天社等皆この地にあつたのである。然し、現在は雜木林植木畑等となつて其間に多數の土器の破片を散列して居る。私が寸暇ある毎に採取した此地點の遺物の主なる物に就いて簡單ながら報告する次第である。

此地は丘の突端から東京へ方約一町程の間に繩紋薄手の土器破片の濃厚なる散列を見る、稀に彌生式土器の破片もありまた黑色薄手燒成極て堅緻な土器で頸部に二三條の帶狀浮紋を周らし小い刻み目を付けた矢張彌生式系土器と見らるゝ物の破片もある。然し隣接する

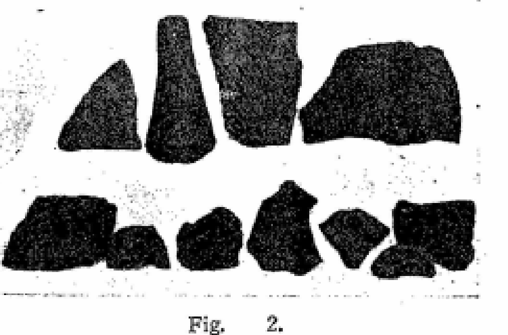


Fig. 2.

葛ケ谷臺地から中居邊にかけて多數見出さるゝ白色若は赤色の埴瓮に屬する彌生式の物はこの地點には見出せぬ。また、繩紋派中の押捺紋若は渦紋が、周圍の中新井村辨天、江古田天神山、下沼袋大下、等には多數發見さるゝに拘らず是亦此地點では絕無と云つてよい。

次郎三郎氏宅地の附近に主として散列して居るが、その面積はさのみ廣くなく散布量も亦餘り多くはない。吉田氏の談によれば上羽氏の所藏されて居る遺物は、以前同氏宅地の一部の土手狀を爲した部分を開墾した際發見したものであると云ふ。現在吉田氏の所にも石鏃が多少蒐集されて居るが此等のうちで無柄の物が多く有柄のものは少い。又石鏃の原料として黒曜石は餘り使用されて居ない。

土器は破片許りであるがその大部分は眞福寺と殆んど同樣で、私の所謂帶狀繩紋系、紐線紋系の紋樣が優勢である。然し表面採集の結果によると、此等の形式の土器以外にこの直前の形式—丁度大森貝塚に多く見る樣なもの—も亦多少混在して居る。彌生式土器は私の搜索した範圍では全く發見し得なかつた。

この結果を要約すると「小深作遺跡は二分する谷の中央に突出する半島狀の臺上にあり、その面積は餘り廣くない。併かも出土した遺物の種類は相當に豐富である。土器の大部分は所謂「安行式」に屬し之に多少「安行」直前の形式を混へる。」と云ふ事になる。

安行式土器、木兎土偶の存在、玉類が發見される事、石鏃は無柄式が多く、又その原料として黒曜石を餘り使用しない事、石劔の存在等の諸條件は此の遺跡が關東に於ける繩紋式石器時代終末期の文化型式を顯著に示現するものと云へよう。斯うした點で本遺跡は眞福寺、又は鳩ケ谷丘陵先端の諸遺跡—新井宿、安行、東貝塚等—と相俟つて同時期研究の爲めの重要な遺跡と云ふ可きである。たゞ疑問の環石は色々の點から見て矢張り前記の土器と伴出したものと考へる方が穩當らしい。然らば、この環石の存在は彌生式の文化要素の一部が此の時代の繩紋式文化中に滲透したと見る可きであらうか。私はそれを斷言するほどの勇氣を持たない。寧ろ私は環石のうちに彌生式文化と關係を有するものと、繩文式文化の本來的の所産品との二通りがある樣な氣がする。そして前者は大陸に於て旣に環石の型をとつたものが我國に流入したもので、後者は日本內地に於て環石的なものから環石へ變化したものではないかと云ふ臆測を秘かに懷いて居る。而して小深作の環石の如きはおそらく後者に屬するのではないかと想像して居る。

江古田御嶽の石器時代遺跡に就いて

堀野良之助

東京市中野區野方町江古田東本村の內御嶽は哲學堂の北方に當り、落合町葛ケ谷の臺地が妙正寺川の河盂に向つて南は哲學堂の在る和田山となつて終り西は御嶽となつて終つて居る。從

資料

繩紋式（遺跡）

武藏國北足立郡春岡村小深作遺跡

甲野勇

東京帝國大學人類學教室編纂の「日本石器時代住民遺物發見地名表（第五版）」に據ると小深作遺跡からは、土器・土偶・石鏃・石劔・打石斧・環石等の遺物が發見されて居る。報告者は上羽貞幸氏である。上羽氏が此地に於て蒐集された物の一部―土偶・石劔・小玉―は「考古圖集、第廿號」に掲載されて居る。此等出土品のうちで特に注意す可きは土偶と環石であらう。土偶は大形、中空の所謂「木兎土偶」で下肢を缺くも中々優秀な作品である。環石は破片であつてその半分を殘すのみであるが、全形を推定する事は出來る。全體の直徑一〇・四糎、中央孔の直徑一・八糎、最大厚一・六糎、刄は所謂「蛤刄」を爲し、砂岩質の岩石より作られて居る。木兎土偶と安行式（眞福寺式）土器とが共存關係を有する事は從來の諸例より見てほゞ確定的な事と考へられる。然し環石の方はどうであらうか。畏友八幡一郎氏は此種の遺物を一括して「環狀石斧類」と稱し其等が彌生式系の遺物ではないかと云ふ疑問を呈出された事がある。（考古學第一卷第二號）將して八幡氏の推定の如くこれが彌生式系の遺物とすれば、小深作遺跡に於ても彌生式土器の存在する可能性はある事となる。安行式土器が關東に於ける繩紋式土器の編年的系列の終末に位置する事は、最近の研究の結果に照合して明かな事である。其處でこの遺跡に於て私達は繩紋式系文化の終末期と、彌生式系文化の或る時期との接觸を如實に知る事が出來るかも知れないと考へた。然し不幸にして小深作の土器に關する私達の知見は今迄皆無であつたが、此の夏私は此の遺跡を訪ね多少の採集を試みた結果、同地出土の土器の性質を確める事が出來た。左にその結果を簡單に報告しよう。

小深作遺跡は總武鐵道七里驛の西北六―七〇〇米、中惡水川の一支流の爲す谷がY字形に分岐する中間の半島狀に突出した低丘陵上にある。附近の水田面と丘陵上面との比高は極めて僅かで從つて丘側の傾斜は甚だゆるやかである。遺跡の大部分は宅地、畑、桑畑と爲つて居て、遺物―主に土器片―は同地の吉田

舊獨領東アフリカ、ヲルドウエーに舊石器發見

先づヲルドウエーの地點を明にすれば、アフリカ東海岸の中部に、舊獨領東アフリカがあり、其北が英領ケニア殖民地で、西北には大湖ビクトリア・ニアンザがある。この舊獨領の北境中央には、ケニアとの間にナトロン (Natron—S.) 湖があり、同湖の西南方には、エヤシー (Eyasi—S.) 湖が存する。このナトロンとエヤシー兩湖間には山地が介在し、このヲルドゥエーは、エヤシー湖東北端より北方にあつて、中間山地の西北邊にある。

此地は既に一九一四年に Prof. Dr. H. Reck. によつて、古生人類の發見があつたのであるけれども、時適々歐洲大戰の勃發を見、この貴重なる發見に就ても、多く傳へられて居らない。(1) 一九二六年に於て、同博士は再びこれに關して報告もして居るけれども、これ亦特殊研究者の外、知られて居らなかつた。(2) 丁度其年頃から、舊獨領の北隣のケニア地方には、L. S. B. Leakey によつて、石器時代の研究が開始せられ、一九三一年に至つて、同氏により The Stone Age Cultures of Kenya Colony. の發表を見たのである（本誌文獻欄参照）。所が同氏は、この發表後に於ても研究の手を緩めず、更にケニアを越へて、隣りの舊獨領に及ばんとして、このヲルドウエーの調査に取りかゝつた。其際其發見者である、Reck 博士を招聘し、共に發掘に從事した。

この調査は昨一九三一年秋に行はれ、其結果、多くの象、河馬、鰐、羚羊其他アフリカ洪積動物群と共に、千五百個に達する石器を發見したのである。これ等の石器は、地層中に散在することなく、或る個所に密在發見せらるゝ。而してこれ等石器發見個所の略中央附近より、人骨の發見を見たものである。其石器として代表せらる可きは、握り槌 (Faustkeile) であつて、其作出精良で、これを歐洲の前期舊石器時代と比較したならば、アシウレアンと對比せらる可きものであると、Leck 博士は述べて居る。

然しこれ等は近著 Die Woche. H. 31. にLeck 博士によつて最も簡單に報ぜられたに過ぎないのであるから、詳細は Leakey 氏の報告を待たねばならない。又人骨に就ては、兩者の間に可なりの意見の相違もあり、Leck 博士は、より古く見て、其動物群よりして中部洪積となし、歐洲のネアンデルタール人よりも、より古しとなして居るに對し、Leakey 氏は前述の著書に於て、これを疑ひ中石時代ではあるまいかと述べ、もしそれが發掘者の云ふ如き地層即ち Kamasian であるなれば、それはアシユーレアンとすべきだが、人骨そのものは Homo sapiens に入れらる可きではあるまいか。（同書十六—七頁）と云ふて居るから、これも後報を待たねばならない。

（大山）

(1) H. Reck ; Erste Vorläufige Mitteilung über den Fund eines fossilen Menschenskelets aus Zentralafrika. Sitzungsberichte d. Nesell. naturforschender. Freunde. Berlin. 1914. (評者未見)

(2) ibid ; Prähistorische Grab-und Menschenfunde und ihre Beziehungen zur Pluvialzeit in Ostafrika. Mitteilungen aus den deutschen Schutzgebieten. Band XXXIV, Heft. 1. Berlin. 1926. (評者未見)

エジプト石器時代文献一覧

Blanckenhorn, M.

1. 1921. Aegypten Handbuch der regionalen Geologie 2e. Heft Bd. VII, 9.

〃 〃

2. 1921. Die Steinzeit Palästina-Syriens und Nordafrikas.
(Das Land der Bibel III Heft 5, 6., IV Heft I)

Currelly Cat, Ch. T.

3. 1913. Stone implements.

Hall, H. R.

4. 1905. Palaeolithic implements from the Thebaid.
(Man. No. 19 (p. 33—37); No. 42 (p. 72))

de Morgan, J.

5. 1896. Recherches sur les origines de l'Egypte.
L'âge de la pierre et des métaux.

〃 〃

6. 1926. La Préhistoire Orientale.
(Tome.'II 1—31)

Obermaier, H.

7. 1924. Aegypten.
(Reallexikon d. Vorgesch.)

Petrie, F. L.

8. 1915. The stone age in Egypt.
(Ancient Egypt)

Schweinfurth, G.

9. 1903—4. Steinzeitliche Forschungen in Oberagypten.
(Zeitschr. f. Ethnol. Verh. 1903. S. 798, 1904. S. 766)

〃 〃

10. 1909. Ueber altpaläolithische Manufakte aus dem Sandsteingebiet von Oberägypten.
(Zeitschr. f. Ethnol. J. G. 41. S. 735—744)

Seligman, C. G.

11. 1921. The older palaeolithic age in Egypt.
(Jour. anthr. inst. 51 (1921) S. 115 ff.)

Stern, H. F.

12. 1917. The palaeoliths of tne Eastern Desert.
(Harvard African Studies. 1. 1917)

Vignard, E.

13. 1920. Une station aurignacienne à Nag-Hamadi (Haute-Égypte.)
(Bull. de l'Institut franc. d'archéol. orientale. Bd. 18 Kairo 1920)

〃 〃

14. 1921. Stations paléolithiques de la carriére d' Abou el Nour, prés de Nag-Hamadi ebd.
(Bull. de l' Institut franc. d' archéol. orientale Bd. 20 1921)

〃 〃

15. 1923. Une nouvelle industrie lithique, le Sébilien ebd.
(Bull. de l' Institut franc. d' archéol. orientale Bd. 22 1923)

Virchow, R.

16. 1888. Die vorhistorische Zeit Aegyptens.
(Verhandlungen der Berliner anthropologischen Gesellschaft. 1888. S. 352, 354)

Werth, E.

17. 1928. Der fossile Mensch.
(Teil III. S. 665—669)

らるゝが、後期舊石には、無いのではないけれども、典型的のものが稀である。

（9）カプシアン文化の梗要に就ては、（1）の拙者、續編(S.71—85)參照。又これに關した文献一覧も文献第十二。(S. 86—88) に掲出してある。

（10）J. de Morgan ; L. 6. p. 101. De l'absence de néolithique en Égypte. 參照。

（11）エジプトの中石文化認定に對しては H. Schmidt : Vorgeschichte Europas. S. 10—11 の表中明に Kurna Kultur III. として示されてある。これが文化内容の說明はこゝでは割愛する。

アフリカ西海岸方面の石器時代

エジプトの舊石器の說明をする爲、これを中心としてアフリカの各地に舊石文化の存したことを引用したが、獨り地中海や紅海沿岸、乃至は東海岸方面のケニアだのローデシア等に止まらず、石器時代文化の跡は、西部海岸地方にもある。モロッコやサハラにも石器時代の跡を見る外、サハラの西南、佛領セネガルのカールタ(kaarta)地方にも、最近簡單ではあるが報告せられたものがあり、舊石も新石も共に存する由である。

R. Furon : Les gisements préhistoriques du Kaarta (Soudan). L'Anthr. Tom. XL. N. 1—2. 1930. p 31—35.

更に南に下ると、ベルギー領コンゴーにも石器時代の跡が既に古く發見報告せられて居る。この地發見の石器時代文化は、前者と同様に舊石と新石の兩文化の様に報ぜられて居るけれども、今日の目から見ると、果して舊石文化であるかは、更に研究に俟するが、この發表以降にどれだけ新しい報告があるか知つて居らないから、單に石器時代存在の一例とするに止めて置く。

（大　山）

X. Stainier ; L'Age de la pierre au Congo, (Annales du Musée du Congo. Série III.) Bruxelles. 1899.

金石併用時代の所産とモルガンが述べたもの（第六圖）とを明にして、掲出した石器の研究と、これを説明するエジプト石器時代の概念とを移つて置く。元々この地は、地理的に見ても、我が國とは餘りに隔てがあるけれど、歐外舊石の一研究資料ともと思ふて、かく述べたものである。舊石器と云へば、何んでもかでも、歐洲と云ふ傾向に對して、他の資料を提供する一端でゞもある。而して他日エジプト全般の石器時代を研究するの時に、こゝに述べて居らない、地形や生物環境や發見地の狀態、天然遺物等と共に、今迄述べ足らない所も併せて、より完全に導く可く、今日は共道程の第一歩を辿るに過ぎないものであることを告白して置く。

最後に私共としては、特別に希望もして居らなかつたに拘はらず、私共のヲックスフォードへ參考として寄贈した僅少な日本石器時代遺物に對し、此の如き立派で有意義の資料を數多く寄せられたセーリツクマン博士に心からなる感謝の辭を捧げて本稿を閉づる。

（1）これ等各地出土の握り槌の一例は、拙著、歐洲舊石器時代（考古學講座）續編、S. 74. Fig. 78 (Egypt); S. 75. Fig. 79. (Somali-Land); S. 76. Fig. 80. (Rhodesia); Fig. 81. (Syria); S. 77. Fig. 82. (India); S. 78. Fig. 83. (Tunis); 等は例出してある。

（2）別項文獻欄、L. S. B. Leakey; The Stone Age Cultures of Kenya Colony. 1931. 參照。本書には、多數の圖版があり、各種石器が見らるゝ。

（3）ミコク型に就ては、（1）の拙著、正編、第二五九項「ミコク共他の問題」及び挿第一六一圖——一六四圖並に卷頭圖版第二十九參照。

（4）ムステリアン手用尖頭器に就ては、（1）の拙著、正編、第二五七項並に、挿第一五四圖、挿第一五六圖——挿第一五九圖及び卷頭圖版第二十七・二十八。參照。但し同書では假名で「ポアン・ド・マーン」と書いて居る。

（5）石搔の一般的使用考案は、（1）の拙著、正編、第一八七項及び挿第百六圖に紹介してある。但し同書ではグラトアと書いて居る。

（6）龍骨狀石搔きに就ても、（1）の拙著、續編第一七項、挿第十五圖參照。但し同書に於ては「グラトア・カレネ」と書いて居る。

（7）圓板形細石器に就ては、（1）の拙著、續編、第八五項及び挿第九十一圖參照。又 Raymond Vaufrey; Le Paléolithique Italien. 1928. Fig. 31—34. の中には、典型的の本器が圖示せられて居る。

（8）歐洲舊石器に於ける石鏃例は、（1）の拙著、

1．プレー・シエルレアン。正編挿第百四圖最下段の二個。挿第百五圖。但し「ラクロア」と書いて居る。以下も同樣。

2．シエルレアン。同挿第百十四圖最下端。同挿第百十五圖最上段中央。

3．ムステリアン。同挿第百十五圖。1・2・4・5・同挿第百六十圖。

4．晩ムステリアン。同挿第百六十七圖。向つて右二個。

以上の如く、歐洲では前期舊石文化中には、比較的容易に見

sants de pierre)（第十圖）等が認められたに過ぎない。勿論各石器個々に就て、特に握り槌等には夫々の特色もあるけれど、全般的には種類に乏しい。而して第四圖の一部にある石搔きや、小形器の如きは、從來の舊石器には取扱はれて居らないものもある。而して面白いことは、最近に中石文化を認められたが、尚、新石文化は一向に認められず、直に飛んで金石併用文化を見るとせられて居る。[11] それであるから、

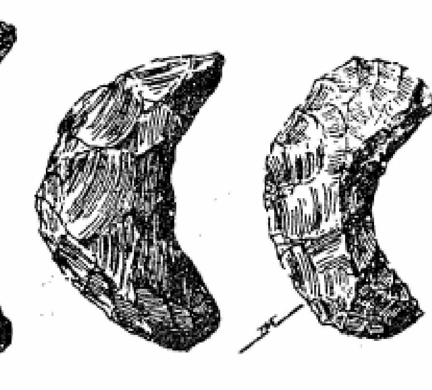


Fig. 10.
エジプト出土半月形石器
(J. de Morgan ; L. 6. Fig. 10)

文化期未詳の石器が澤山にあり、極端に云へば、未發表？に葬らるゝの嫌が深い。例へば骨角器などが、有無不明である。從來は前期舊石から一躍金石文化に飛んで居つたのであるから、そこには色々な不合理も矛盾も生れまいか。最近には、Toulch 其他の貝塚が發掘せられ、多種の發育した打石器と簡單な骨角器も出土し中石文化を認めざるを得なかつた結果、從來の中間的に位置した各種遺物が、中石文化に投入せられつゝある傾向も見らる。

それ故、エジプト石器時代の研究は如上の內容をよく心得て見ないと、飛んだ失敗もする。又今の有り樣では、落ち着きがない。從つて今後に色々な發展も見られ得ると信ずる。只歐洲後期舊石の如き、或はカプシアンの如き文化が存するか否かは、斷言出來ない。私に忌憚なき想定を許さるゝなれば、一部にはカプシアンの如き內容中に、他の一部により發育した握り槌或はこれより發育した巨石器（Macrolith）乃至は双部利用器である粗形斧等が相混在する文化が存したのではあるまいか。これが後期舊石文化とも續いて前期中石文化ともなり、然る後に Toulch の如き後期中石文化に達するのではあるまいか。これには準據もあるが、紙面の關係上、單なる假説とするに止めて置く。[12]

十一、結　語

これでエジプト舊石器として、今日確認せられて居るもの、（一—第三、第五圖右）と、所屬未詳で明日を待つもの（第四圖）と

より寄贈の品に就て述べて居り、エジプト舊石文化それ自身を研究して居るのではない所は、豫めこれを明にして置く。さりとて、今個々に述べ來つた各舊石器に對し、一應は總括もして置きたい爲に、其文化概要に觸れて、各石器をより鮮明にして置く。

今迄、エジプトよりは比較的多く握り槌の出土が認められ、人々より所謂握り槌文化（Faustkeile-Kultur）の一つに數へられて居つたが、エジプトにはこれ迄、歐洲に於ける後期舊石文化の樣なものが發見せられて居らない。所がチュニス・アルゼリア地方には、歐洲後期舊石文化と對應するカプシアン文化[9]があり、最近にはエジプトより遙かに南方ではあるが、ケニア地方にも、カプシアンに近い樣な文化が提唱せられつゝある。又北方に對してはシリア・パレスタイン地方にも、握り槌文化以外の文化と稱せらるゝものもあるらしい。して見るとエジプトにも、これに近い文化があつてもよさ相にも思はれる。從來は其標準を握り槌文化である歐洲前期舊石に求めた結果、歐洲の諸例に從つて、石器としては、握り槌（小形器を含む）手用尖頭器、石掻、石剣等が文化遺物の中心をなす樣に考へられ、僅に本地の特殊形として、凹缺石剣と半月形石器（Crois-



Fig. 8.
エジプト出土凹抉石刴
(J. de Morgan ; L. 6. Fig. 31)

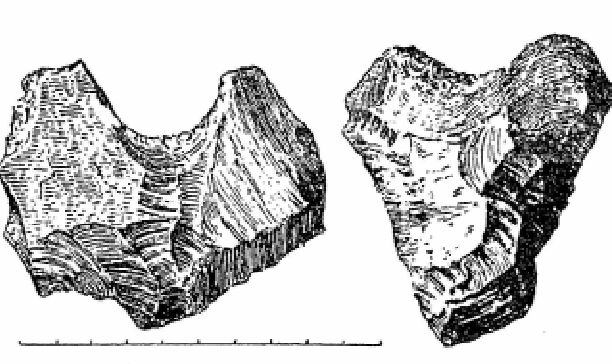


Fig. 9.
Tarbend (Algérie) 出土凹抉石刴
(J. de Morgan ; L. 6. Fig. 392)

か、金屬楔形なりと斷定するものもある。それもよいが、そこに明確なる理由が示なれない以上は、單なる想定であり、假設でゞもあるから、理論ではない。意見とでも云ふ可きものである。このモルガンも亦一意見と見るより外はない。さりとてこれ



Fig. 7.
エジプト出土有角石器 (1/1 N. G.)
(J. de Morgan ; L. 6. Fig. 130)

を舊石器なりと强調すべき、强き理由は、只今何もない。であるから、こゝでは疑問の石器として、後日類形の確實なる出土狀態が明になつてから、本器の文化期所屬を定めよう。それまでは保留するけれども、何故こんなものを、こゝに揭出したかと云へば、そこには後述して居る樣な根本問題もある上、本器の作出技工から云へば、他の舊石器と同樣であり、石質も同じく黑褐色の燧石であつて、術工學上からは、舊石とするも何んの不都合が起らない。又型態學上からは、これを刄部利用の打割具と見れば、他の舊石文化には全く無い所から、認め難く、寧ろ中石文化所産と見るが穩當に思はれる。然しこれと全く同一ではないが、近い關係を疑はれる石器がある。卽ち第八圖に示したもので、本地の外、アルゼリア方面よりも類形が出土し(第九圖)、これ等は舊石器と認められて居る。それ故この凹抉石剣(Racloire concaves)が舊石器であるなれば、本器が肩部のより發育したものとしてより進展した器型としても、これが中石文化に位置せしむることは、不當とも申されまい。よし舊石であつた所で別段不合理とすべき所はないと考へる。其出土が不明である以上には、止むを得ず、これを術工學的と型態學的に見るより外にない。而して術工學上からも、型態學上からも、舊石器であつても不合理でないとなれば、疑問を附して揭出しても何んの不都合もないと考へたからである。

十、エジプト舊石文化の特異相

エジプト舊石文化に未だ確たる編年學的研究の成立して居らないことは、卷初に述べてもあり、其舊石器にしても、こゝに揭出したもののみではない。こゝでは今回セーリックマン博士

う。其術工は相變らず粗雜であり、大きな打裂痕がよく見らるゝと共に、これに對す齊形剝取が不完分な爲、かく粗雜となる。而してこの剝取たるや、第一次的のみであつて、第二次的の補正も行はれて居らない、特に下端に於ける蛤刃部の如き第七圖に示した樣な、鋭角的ではなく、尖鋭なる可き打割具たる可き一要素を缺いて居る。この點は第七圖に示した典形的のものとは、大に異つて居るけれども、平面的に見れば同一樣式に取り扱ひ得る。又他に第六圖と第七圖との中間的な鈍刃を有するものがあるから (J. de Morgan; L. 6. p. 106. Fig. 129) 研究上これ等を一類として取扱ふ一方法として假りに平面形を立前として、又は鈍より鋭に亙る範圍を含めて、こゝに取り纒めて置く。



Fig. 6. 有角石器
Um Sellimat 出土
(上線幅 9 糎 3. 中央高さ 7 糎 5)

　以上の如き實物の記述のみでは、何等の疑もない。又この出土の精確なることも不明である。從つて出土地層も解らない。然るにこの第七圖に示したものは、エジプト石器時代研究の權威である碩學モルガン所載（文獻6）であり、モルガンはこれを燧石器と認めないで金石併用期所産となし、本器に附するに「銅斧摸造石斧」(Hache en silex jaune paraissant une copie de hache en cuivre.) なる稱呼を以てし、これが原型と認めらるゝ Kahoun 出土の青銅斧 (L. 6. p. 107. Fig. 132) まで掲出せられて居る。而してこれ等に對する說明は簡單に特殊樣式であると云ふて居るのみである。さてそうなると、本器はモルガンに從へば、當然燧石器でなく本研究より除外せらる可きである。然しながらいくら青銅斧や銅斧に類形があるからとて時間的に共存し、且つは寧ろ金屬斧が先行し、これを模せざるを得ない理由がなければならない。一般に石器が先行すべきが原則であり、此の如きは文化進展上からは反對現象なのであるから、これを明にするだけの確實な論據が示されない以上は、公算二分一に過ぎず、所謂水掛論ででもある。世の中は廣い。よくこれに似た議論があつて、金屬器でなければ作出不可能と

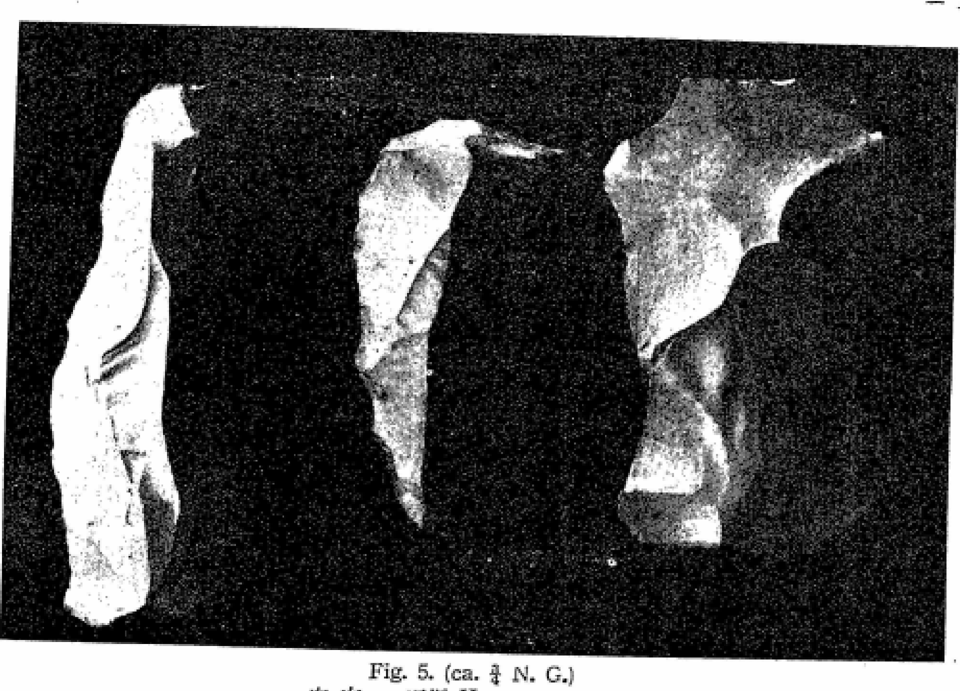


Fig. 5. (ca. $\frac{2}{3}$ N. G.)
向右　石剝 Hammama 出土
中央　石剝 Wasif 出土
向左　不明石器同上

これを掴む體部があれば、其構成要素は足りるのであるから、外形は色々にも變化は可能である。即ち型態様式に種々相が見らるゝのであるから(六)、こゝに揭出した兩三個位では、充分な特徴を掴み得ない。この二個共掘り植と同じくHammama出土であるから、其出土は確實と見てよい。

又第五圖向つて左の一個は寫眞で見ると、石掻様に見へるが、石掻の最も重要部分である長軸下端に掻刃がない。直角に近く切斷せられて居るから、石掻きとは申されない。さりとて緣邊の剝取刄使用、即ち石剝ぎとするには、肉厚きに過ぎ且つ體部が狹長に失する。只今は止むを得ず、不明石器とするに止むる。出土地はWasifと讀める樣であるが、字が消えて居つて明でない。

九、疑問の有角石器

最後に遺つたものが、第六圖である。これに對し私が勝手に有角石器と名づけたものである。形を正面から見ると、上緣は稍々斜傾しては居るが略直線的で其兩端に僅かばかりであるが凹抉して居り、爲めに肩の所が凸出して居るが如くに見らるゝ。而して下部の刄部が蛤刄狀に輕く弧形をなして居る。これが今少し左右等齊でより典形的なものが、第七圖であるから、これと對比すれば、本器がより明瞭に寫されよ

端もムステリアンのもの程尖くない。こゝにもエジプト式が窺はれる。

六、石掻き (Grattoir = Kratzer)（第四圖）

第四圖下段に並列してある四個がそれである。[5] これも製作粗惡で齊形をなして居らない。これも打裂片利用であるが、其長軸に對し、其下部の搔用刄部に止まらず左右の緣にも粗雜不規なる剝取を加へて居る所を見ると、獨り石掻きとして、搔刄利用のみに止まらず、緣刄をも使用する、石搔と小刀とを兼ねたものかも知れないが、明かではない。其搔用刄部の剝取も良好でなく、これ等は典形的な優品とは認め難い。又他にこれと云ふだけの特色も見られない。但し本器が確實に握り槌と共出するか否か、引いて舊石器なりや否やに就ては、出土狀態未詳で確言出來ない。

七、小形石器類（第四圖）

第四圖中央にある五個を指すが、特定の石器ではなく夫々異つて居る。向つて左端の不規圓狀をなして居るのは、薄肉であり、所謂圓板形石剝ぎ (Scheibenschaber) の中でも入れ得べきものかも知れないが、餘りに薄過ぎる。剝取も粗である。

向つて左より第二の石器は、打裂片利用であつて、下面に打瘤が見られるが、これ亦何物か決定し得ない。オーリナシアンの一特徴をなす龍骨狀石搔き (Grattoir caréné) に近い樣にも見られる。[6]

次に向つて右に三個の小形器があり、如何にも細石器 (Microlith) と申し述べたいものではあるが、これ亦作出餘りに御粗末である爲、これに躊躇する。只丁度最右端の二個位の大さ乃至は僅に小形で、より精良な所謂圓板形細石器(Micro-Scheibe)がシシリー島附近より出土して居ることだけは、注意をして置く。[7] 又これ等各器も前述の石搔きと同樣、出土が確實でない。

八、石剝ぎ (Racloir = Schaber)

第五圖の向つて左にある一個を除く、他の二個がそれである。六に述べた石搔と對比すると、著しく薄肉であり巾廣でもある。而して石搔きが、長軸の末端に剝刄を以てした稍々鈍な搔刄を以て、搔剝削斷等の任に服するに對し、本器の方は、同じく剝取による刄を以てするが、刄幅も前者より廣く、且つ其刄もより鈍でなく、丁度我が國に見らるゝ打製の石匙や磨製ではあるが石包丁等の樣な任に服すると考へられ、其刄部構造は、大約我が石匙位の厚さと幅とがあると見ればよい。

これも決して作出良好ではないが、石剝ぎとしては、狹長な形であり石搔と紛れ易い。勿論石剝ぎには、所用の刄と刄幅と

して、表題の如く別に取扱つて置く。

五、手用尖頭器 (Point à main=Handspitze)

第四圖上段に見らるゝ三個が本器である。但し本器としては甚だ薄肉小形に屬するものではある。本器も歐洲ムステリアンの一特徴石器とせらるゝし、ムステリアンの手用尖頭器の殆んど大部が、打裂片を利用して、作出せら(1)れて居り、從つて其一面には打裂面が其儘殘つても居ると同樣に、こゝに揭出した三個の內、二個(中央及び向て右)までは、打裂片利用である。其大さは最大(圖の左端)のもので、長さが五糎五強であり、ムステリアンのよりは小形である。其尖

Fig. 4. 各種石器
上段　手用尖頭器
中段　小形各種石器
下段　石搔

第二圖又び第三圖に掲出したものが、それである。こゝに例出した内で最も長身のもの（第二圖右上）でも長さ一〇糎であり、丁度歐洲殿ムステリアンに於ける所謂亞形握り槌、乃至はミコク型（Micoque Typus）と云はれるものと、畧其大さを同ふして居る。(8) 其形から云へば、前述の如く、第二圖と共にエジプト式であつて、よく其特徴を發揮しても居る。但しこゝに注意を要す可きは、本器位の大さの圓形をなすもの（第三圖右下）は、人によつては、握り槌としないで、これを圓板形石器（Disqus）と稱して居るけれども、根本に於て圓板形石器の用途に就ては、未詳の所があり、多くが單に型態學上、様式區分の一稱呼に過ぎない。特に第三圖のものは、右下の一個を除く悉くが、鈍ではあるが尖端を有して居り、且つは其一個は寫眞でこそ圓板狀にも見らるゝが、これ亦大きく折損した痕があり、決して第一次型態とは認められないから、こゝでは握り槌の一亞形と





Fig. 3. 小形握り槌

向て右上	Hammama 出土	（長さ10糎）
同　右下	同上	（上下7糎5）
同　左上	Wasif 出土	（長さ8糎7）
同　左下	？	（長さ8糎）

其作出術工が粗雜であり原始的である所からセ博士は所謂シエルレアン型であると附註せられても居る。其形は握り槌としては、甚しく尖端を缺き、もしも握り槌なる器具が、型態學上、尖端十（プラス）重量使用の打突具でありとするなれば、其構成上、重要なる一要素をなす尖端が、餘りに鈍化し過ぎて、構成要素の一機能が甚だ薄弱となつて居るから、握り槌としても、決して典形的のものではない。型態學上からは、握り槌と認めても、其外周に位置せしむ可き程度のものである。第二圖に揭出したのは、後述して居る小形握り槌とも稱す可き部類に入る可き大さであつて、長さ八糎であるけれども、其型態は鈍い、尖鋭とまでは申し得ないが、エジプト型の一典形である。勿論今迄に發見せられて居るエジプト出土の握り槌の中には、比較的尖鋭な尖端を具備する單なる握り槌としての典形的のものが、無いのではない。(J. de Morgan; L. G. Tom. II. p. 20. Fig. 25) 然しながらエジプト出土握り槌としては、この樣な典形的のものは寧ろ少ない方である。エジプト握り槌の多くは、第二圖の如き尖端が鈍で巾が廣いものか、さなくんば、より鈍な楕圓形、（第三圖上）有頭楕圓形（第三圖左下）等が多く、中には圓形（第一圖向右）乃至は有頭圓形（第一圖向左）も稀れでない。卽ち此の如きものがエジプト握り槌の一特色である。又同じ北阿であつても、チユニス、アルゼリー地方になると、可なり尖鋭な握り槌の出土も見て居るから、こゝにも互に地方色が見らるゝ。但しこの第一圖に圖示した兩個共に打裂部の中斷せるものがあり、そこに不規則ながら剝取も加へてある所から見ると、或は兩者共に、第一次には、尙これ以上の尖鋭な尖端を有したものが、折損補修の結果、第二次的に本器の樣な鈍端な握り槌を生じたものではないかとの疑が深い。兩者共に濃い黑褐色の燧石製であり、これ亦エジプト石器一般に通ずる燧石の色調を有し、こゝにも一地方色が見らるゝ。

Fig. 2. Hammama 出土
小形握り槌（長さ8糎5、幅7糎8）

四、小形握り槌

石發見地と同樣に、段丘等に於ける礫石層（洪積層）よりの發見が多い。從つて狹義の遺跡として、何等か人爲の跡を止むる

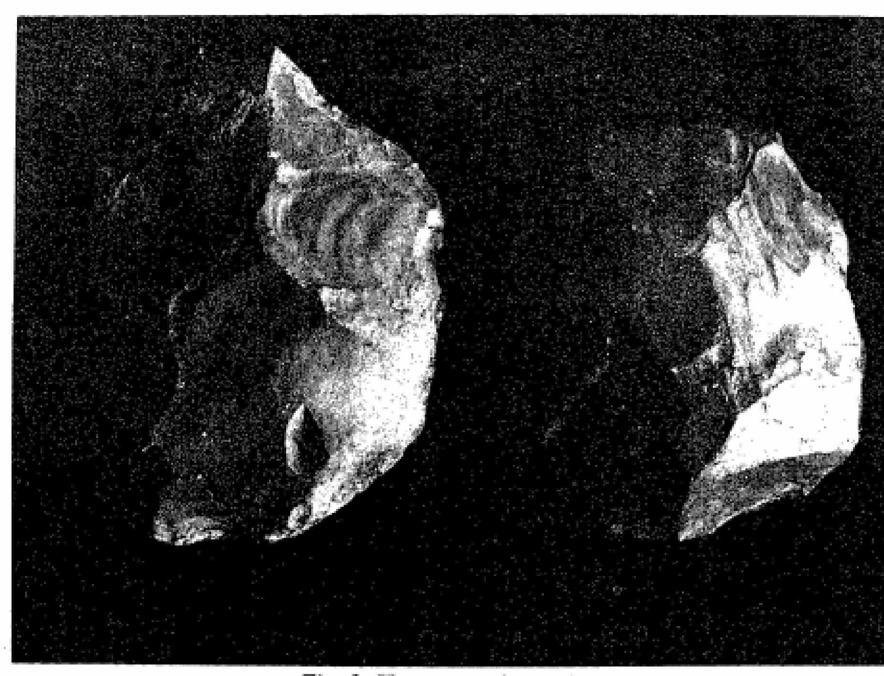


Fig. 1. Hammama 出土握り槌
（向つて左、長さ12糎5　向つて右、長11糎）

ものを見ない。即ち嚴格に云へば遺物發見地である。これは洪積時代に於て、歐洲とは異り、氷河の影響の甚しくなかつた結果、當時の人類が、あはてゝ洞窟岩陰等に逃入する必要も少なく、野外に簡易な生活も營めたものと私は考へる。從つて今日に多くの痕跡を遺さないのではなからうか。これが爲か、出土狀態の不明瞭なものや曖昧なものも生じ、中には地表近くにまで發見せらるゝものも存する樣に見らるゝ。特に沙漠地帶に於て然りである。しかし一般に洪積層出土のものは、これは舊石器とすることに支障はない。又僅少ながらも洪積動物群と認めらるゝ自然遺物の隨伴するものがある。

三、握り槌 (Coups de poing=Faustkeile)（第一圖）

獨り本地に止まらず、上述したアフリカ各地及び、小アジア等には、歐洲前期舊石と同樣に、握り槌が發見せられ、爲に所謂握り槌文化 (Faustkeile-Kultur) の分布圏内に置かれても居るが、果して西歐、アフリカ(握り槌は南阿にも發見せらるゝ)小アジア、印度に亘る廣大な地域に、一言にして握り槌文化と云はるゝ如き、一元的文化の存在したものであるか否かに就て、今日の狀態では到底肯定も否定もなし得ない。

こゝに掲出したものは、上部エジプト Hammama 發見のものであるが、この發見地の內容は、私には全く解つて居らない。

エジプトの舊石器

——セーリッグマン博士より交換寄贈石器の研究——

大山柏

一、はしがき

先年來朝せられた英の碩學、C. G. Seligman 博士から、先年エジプトの石器を本研究所に寄贈を受けたものであるが、當時發掘調査に追はれて、しまひ忘れて居つたものを思ひ出し、こゝに其舊石器のみを取り纏めて、紹介しておく。

二、エジプト舊石文化一般

エジプトに於ては、既に一八六九年 A. Arcelin によつて舊石器の發見を報ぜられて以來、文末文獻一覽でも見得る如く各國の史前學者によつて研究せられて居るけれども、其内容に於ては、後述して居る如く確呼たる編年成立を見て居らず、單に歐洲前期舊石を準據として多くが單に型態學的に、シエルレアン型だのムステリアン型などゝ云はれて居るに過ぎない。近年に至つて、同地方にも中石文化の存在が多く肯定せられ、中には從來舊石器として取り扱はれたものゝ一部が清算せらつゝもある(十。參照)。

元々北部アフリカに於ては、獨り本地に止まらず、西よりモロッコ、チュニス、アルゼリア、トリポリ地方等の地中海沿岸の各地に於ても舊石器を見、本地より東に於てもソマリー地方にも發見せられ[1]、ニール河上流地方を南に越へて、中部アフリカの東海岸地方[2]にも出土を報ぜられ、北方スエズを越へた對岸のシナイ半島より、シリア、パレスタイン地方にも、存在して居るのであるから、本地を中心として見れば、東西南北各方向に夫々舊石發見地がある。

エジプト地方に於ては、これ等舊石器の大部は、歐洲前期舊

存在してゐる、これは Nassa Thersies を割つてその殼口のみを取り作つたものであつて、出土の時には連接して存在して居つた。この中には例外的に大なるものは長さ一六ミリにも達するものが存在してゐる。他になほ十箇の Cypraea に孔を作つて物も存在してゐる。以上の如き貝製品の外に半碎した綠色の玉も見られ、六角形そろばん玉形の象牙の玉も存在してゐる。これはその表裏兩面に線刻紋様を有し、兩面は輕い凸面を成して中央に孔を有してゐる。紋様は斜線によつて充塡された四箇の三角形と四本の平行線を各表裏面に有してゐる。以上の如き垂飾の外に本遺蹟から耳飾が發見されてゐる。いづれの頭骨の附近に在つたものであつて、一は徑七・ミリ厚さ八ミリ圓形の眞珠貝製、他は徑八ミリ厚さ三五ミリの魚骨製であつて、共に孔は存しない。これは現在のカムボヂヤの老母が使用してゐる耳朶裝飾と同一であるのみならず、ソムロンセン遺蹟からも骨製土製の類品が發見されてゐる。他になほ骨製のヘヤピン樣の物が出てゐるが不完全で不明瞭である。

土器

土器は破片のみであつて、完全な物は見ることが出來なかつた。色は濃赤であつて、小さい目の籠目の跟跡が存在してゐる。網を卷いて作つた籠に土を塗つたものであつて、これはマイパに於てもその例が存在してゐる。土器の底はU字形であつて、他に口緣や頸部の破片が存してゐる。中には胴上部に線紋を有し、その線の間に網目を印した物や、又赤色を塗つたものが存してゐる。（この例はドンホイ貝塚に於ても見られた）土器はいづれも手揑ね製である。

人骨

人骨中には成人もあつた事はその齒の發見によつて知ることが出來るが、大部分は小兒骨であつて、しかも七―九才位を主とし、最も良く保存せられた頭骨も九才位の物であるからこれによつて人種の決定や比較は非常に困難であり、かつ危險でもある。かつ人種決定のために人骨を比較する時に、その中に文化遺物を持つて來て、文化との比較も同時に行つてそれによつて人種を決定しやうとするのは危險であり避く可き事であると考へられる。（樋口清之筆記）

一定して居つて、大體に於て頭部と腰部に存在してゐる、又反對にこれによつて人骨の埋葬の狀態を推察するのにも參考となり得る。嘗つてマンスイ氏はミンカムより一塊の貝を持歸つたがその中には三十八箇もの多數の美しい小玉が連つて存在して居つて頸飾の跟跡を見ることが出來た。

磨製石斧

石斧殊に磨製石斧は印度支那式 (type indochinois) と呼ばる可きものであつて、綠色の dacite verte やフタニットから成るものと、完全な磨製ではなく半磨製の type cosmopolite と呼ばれる物との二種が存在してゐる。前者は果して斧として用ひられたか否かは疑問であつて、あるひは土掻き等にも用ひられ、時には小形の物の如きは grattoir と稱する方があるひは當つてゐるかも知れない。多くの石斧は肩を有してゐる。

打製石斧

打製石斧も石質はフタニットであつて、長さは十一・一糎、厚さ一・八糎に達するものがあつて、佛國の新石器時代の打石斧に似てゐるところが見られる。未完成品も存在し、石の自然面の一面を利用して一面は凸曲面を成し他は平面又は凹曲面を成すものが存在してゐる。刄は凸曲刄を成してゐる。

石庖丁

斧とはその形を全然異にした、長さ一五・二糎、厚さ二・一糎の原始形の庖丁が存在してゐる。柄を有して居つてエヂプトの金石併用期の遺物に似てゐる。

裝飾品

貝製小玉は四二三箇も發見された。形は圓形であつて、徑三—六ミリ、孔徑一—三ミリ、厚さ〇・六—二・五ミリの極く小形の物である。兩面は平であつて平圓板狀を成してゐる。大形の玉は八箇出土したが、多くは徑一一・五—一二・七ミリ、孔徑五—七ミリ、厚さ三—五ミリの間であつて、形は良く整つて、貝の殼頂を直截し、上面のみ良く磨製して貝の內面はそのまゝにしたものであつて、孔は正中央に無いものも存在してゐる。他に Nassa Thersites Brug 等の貝殼に孔を作つたもの一七六箇存在してゐる。これは長さ一糎位の大さで孔は必ずしも正圓ではない。この有孔貝殼の出土した附近には小兒の頭骨が存在して居つて、あたかもミムコツピー族の土俗に於て小兒が死ぬ時これを網袋に入れその網に小貝を附着させて母親が頸に掛ける風習と併せ考へて、この有孔貝殼も一種の裝飾品と見做すことが出來る。なほ他に約八ミリ位の大さの耳形の貝が八十六箇

出て墓であることが知られるが、この洞窟は奥行廿五米で奥に行く程次第に巾が狭くなり、天井の高さは奥では半分位にまで低くなる。床面には大きい礫石が存在して居るが、これは上から崩落したものか、又は水の浸蝕の時殘されたものか不明である。この床の高さは現在の水面より六米の高さにあるが大洪水の時には水に浸されることが現在でもある。石器時代には海がこのミンカムまで來て居つた事が種々の事情から考へることが出來る。而してかつて De Pirey 師によつて發見された Dong Hoi の貝塚の高さともこの遺蹟は同一であるのは注意すべきであつてこれによつても石器時代の海岸線がこゝまで來て居つた事を知ることが出來る。C洞窟には人骨の埋葬があつたが、この埋葬は果して幾組位この中に存在してゐるのか不明であるが、大部分は水に洗ひ去られて當時に於ては今よりなほ一層の多數であつたことを推想することが出來る。

次に以上の三洞窟よりもなほ河下にあるD洞窟を見るに、これは Moulini 氏が嘗つて發掘したのであるが、その壁には一箇の孔が存在してゐる。これは長軸を南北にした幅七十糎、深さ八十糎の大さで、床面は大體水平であつて、奥はやゝ床高くなり、西の方に於ては床が孔外にまで延び、東の方の穴壁には更に小孔が存在してゐる。この穴の基盤は石灰岩でその上に遺物を有する貝層が存在してその貝層の上に tuf の層が存在してゐる。この tuf は二センチ位の厚さで遺物はなく、別の一部に於ては貝層上に別の一層を有して居るが貝層とは全然性質を異にして居つて、明かに貝層は石器時代の物であることが知られる。この層からは多數の人骨が發見されて墓地であることは明かであるが、完全な物は少く肩胛骨・撓骨・肋骨等の骨が散亂して發見された。しかし中には生體に於ける相互關係を明かに示して存在した物も存在したが、しかし完全に全部が揃つてゐない上に、何人分存在するのか不明であつて、墓として決定するのには困難な狀態に存在し、又假りに墓であるとしても洗骨葬であるのか否かも明かではない。がしかし中には明白に骨に附着してゐる肉を削り取つて埋葬した痕跡のあるものも存在してゐるので、假りにかゝる事を一般に行つたとすれば、當然骨が散亂するのは普通であつて、亂雜な人骨の出土狀態はこれによつて説明されるかと想はれる。しかし一般の副葬品 (mobilier funiraire) は大體良く整頓して置かれてあつて、頭部附近に打製石斧一箇、磨製石斧二箇とあつた例や、又著者自身の發掘時には頭部附近に石斧三箇と土器及び四ヶ所に群集して存在した玉類が存在してゐる例がある(四ヶ所合計四一三箇の小玉と他に幾箇かの大形の玉とが存在した。)又副葬品として Nassa 貝に孔を作つたものや、耳形の玉、Cypraea 貝に孔を作つた玉等が存在してゐる。大體に於て玉類と土器とはその存在の位置

佛領印度支那の石器時代（第三回）

——パット氏、ミン、カム新石器時代洞窟墳墓の發掘——

Etienne Patte ; Resultats des fouilles de la grotte sepulcrale neolithique de Minh Cam (Annam).

アグノーエル譯述

Minh Cam の遺蹟は Dong Hoi 縣に在り Rao Tro 河と Rao Nay 河とが作る三角狀地の上に在つて、當地の守備隊長 Mauline 氏が發見した。遺蹟は Rao Nay の右岸の長く續いてゐる岩壁（ミンカム岩と稱されるところの）の中に存在して、全體にて數箇存在してゐる樣である。今本文に於て述べる洞穴の一は入口が二箇になつて居つて、奥に至る程その床は高くなり、奥壁に於て接合して通じてゐる。A口の方を見るにその入口は浸蝕されて居ることが明白で地面より三米七十五糎の高い所に龍頭形裝飾（corniche）樣を呈して層が突出して殘つてゐる。その中に二箇の層の存在が認められる。下層は貝層であつて、層中の貝は粉碎して固着してゐる。上の層は鐘乳石（Stalagmite）樣の石灰質が固つて成つた層であつて、丁度貝層はこの層に附着して浸蝕から殘つてゐるのである。すなはち貝層の上面は昔のこの洞穴の床であつて、その上に石灰質が沈下し、後貝層は下の方から水のため洗はれ浸蝕されて殘つてゐるので、これによつて舊時の洞穴床面を知ることが出來るのである。この事實はこの洞窟の河下にあつて人骨の出た洞窟に於ても認められ、又他の河下の洞窟に於てもこの事實は認められた。貝層の中からは牛の骨や有肩石斧土器片や食物調理場の跡も存在してゐた。この貝層は河下の洞窟（C洞）の貝層と同一の性質を有しかつレヴェルが同一であるから兩者は同一年代の物であることが知られる。上の方の層（B層）からは粗末な土器片が發見されたが、その床は極めて凹凸不整であつて床面は一帶に砂利が存在して居た。C洞窟には人骨が埋葬されて居つ

に感謝するものである。其是非は兎に角としても、櫛目土器と織物土器との相關關係に對する一端、櫛目土器のヲカ河畔に needs存在すること、並に著名なるウヲロソウ遺跡の一端に觸れ得たこと等は、知ることが出來た。更に將來研究して見ねばならないのは、著者の第二第三類の土器である。本書では總て簡單に失して其眞相を摑握し得ないけれども、大局的に見て、著者の如く夫々の一文化と見ても、櫛目土器との近緣は否まれない所であり、他の見方をすれば、櫛目土器の或る一類とも見られようから、これも類例增加を待たなければならない。何れにせよ櫛目土器系文化資料の一端として、本文を紹介したのであつて、爾後資料の累加によつて、其文化相の鮮明に努めたい。

（昭和七年六月十三日稿了）

附記 尙本文を載せた、Eurasia Septentrionalis Antiqua. IV. 1929. 中には B. Joukov, Les modifications chronologiques et locales de la ceramique de certaines cultures de la pierre et du métal en Europe du Nord-Est. : M. Voévodski : Les moyens méthodiques pour l'étude de la céramique. : A. V. Zbrujev : Der Wohnplatz von Lipki im Gouv. Vladimir. 等の重要文獻がある。特にこの最後のものは、新石時代の織物紋土器を有する遺跡であり中に本文著者の第三類土器群にも觸れて居る。それ故これ等に就ても漸次紹介して行く考へである。

(1) 本報告に於て著者は、ニジニノブゴロット附近の遺跡分布圖を揭出してあるが、圖が微細に過ぎて復寫困難の爲、これを割愛した。又本報告中には、年次研究帶の區分等もあるが、これ亦略した。

(2) 私にはウヲロソウヲの細位が明でない。其槪位はニジニ、ノブゴロットよりヲカ河を西南にたどつてくると約百粁程の所に Murom なる町が同河の左岸にある。このムーロム町の河向ふ北寄りの附近らしく、そこに遺跡密在し、其一つがウヲロソウヲであるらしい。この重要遺跡位置としては、槪位に止まるを遺憾とし、將來の增補を期して居る。

(3) 櫛目土器 (Kamm Keramik) と云はず、櫛目彫紋土器 (Kamm-Grübchen Keramik) と云ふことは、獨り本著者に限らず、歐洲でよく云はれても居る。それは本土器の一特徵をなす、小刺孔を櫛目と倂記したのであつて、場合により、櫛目なく小刺孔のみ存する樣な場合にも適用せられ得る用意でもあり、中に彫紋土器 (Grübchenkeramik) と云ふものすらあるが簡略に櫛目土器と云ふて置く。

(4) 石器時代の下限問題、卽ち金屬との關係に就ての私の考は、拙稿、史前學と石器時代研究。本誌。二の三。參照。

(5) 織物紋土器の名は、拙稿、H. Schmidt 博士、「東亞の史前」を讀みて、人類、四〇の一一、一二。（大正十四年）中に書いては置き、同書、第十五圖版、4、にシュ博士より、ボロゴへ（シベリア）出土の同土器を揭出してはあるが、說明はして居らない。

(6) こゝに注意を要することは、ロシア・シベリア地方の金石時代以降の土器は、獨りこの織物紋土器に止まらず、更に研究を要す可き他の式土器が存する。それ故、この地方の金石以降の土器は、織物紋土器一類と早合點してはならない。

(7) Tallgren ; Die russischen und asiatischen archäologischen Sammlungen im Nationalmuseum Finlands. (Eurasia Septentrionalis Antiqua. III. 1928.) Fig. 157. よりこれは東部 Wogulen 地方 Pelymka 河畔の石器時代の山城跡より石斧 (Hammeräxte)（有孔？）と共に出土したものである。

に金屬器文化に到達して居ると認めらるゝ。と云ふだけで、これには圖がない。私はこの織物紋土器に就ても、いつか紹介しようと考へて居つたが、肝心の櫛目土器すら怠慢であつた爲、

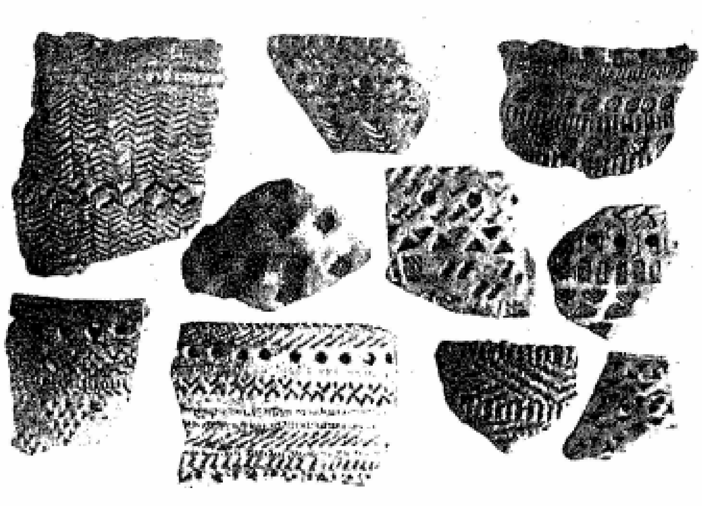


Fig. 6.　織物紋土器

（Jaugren (7) より）

他に名前を述べてこれが内容には觸れて居らない。(6) こゝでは、櫛目土器それ自身を認識する爲、其關係に就て見れば、此種土器が著者の云ふ如く、石器時代末より主として金石時代以降に見られ、且つこれ亦、北歐、歐露方面よりシベリアに及んで居る。其特徴とす可きものは、織物乃至編物等の押紋にある（第六圖）。この第六圖は其最も顯著な一例を私が撰んだものであるが、總てがこんなに顯著ではないらしい。而してこの土器と雖も、中に小刺孔や、櫛目紋の存するものがあり、櫛目土器との或近縁を物語つて居る。この詳細に就ては將來に述べることゝし、極限的に櫛目土器との相違の存することだけを云ふに止める。(6)

四　評　論

著者は前述三に於て述べた第四類、織物紋土器の簡單なる記載を最後として、これが綜括な結論はない。從つて以上本論を通覽すると、蛇尾の感がある。其個々に於ける記載不充分の點は夫々指摘もしたが、結果に於ては概報の形式である。これ等は第二として、櫛目土器系文化資料として見る時、櫛目土器それ自身の研究以外に、多くを得られないことは遺憾である。それでも、遺跡として住居跡なるものがあり、土器以外、誠に僅少ながら、遺物（第三圖）に觸れ得た。これからこれを動機として、漸次文化相全般に對する資料集成への出發點としたい。然し櫛目土器それ自身に就ては、より認識を高めたことは著者

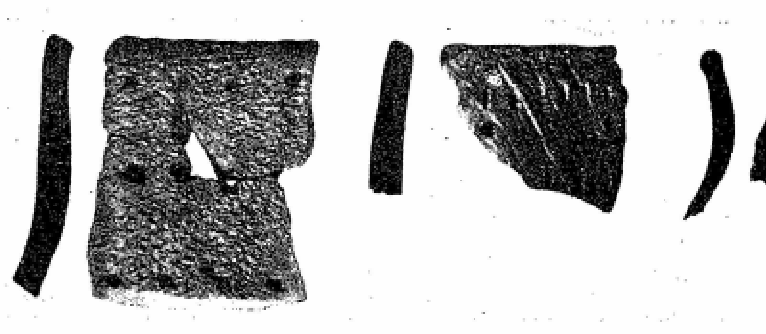


Fig. 5.　Jefanovo 出土土器　(Bahder より)

が足りない。只第四圖向つて左のものは櫛目土器と見らるゝ。それが全く異るものであるにせよ、寫眞の上ではよく似て居る。

　著者の第三類たるスルブノーチエウワリンスク式に至つては更に難解である。特徴として記されたものなく、只この式土器は織物紋土器と密接なる關係ありとなし、この式土器を出土する九遺跡中八までは、織物紋土器を混出するとて、第五圖にこれを掲出し、櫛目土器混出は殘りの只一箇所に過ぎない。而して櫛目土器混出の際にも層位的事實は認めなかつた。恐らくこの式土器の末期に於て、かく織物紋土器との交渉を見たのであらう。又この式土器には、よく發育した燧石製石器に青銅器を混出するに止まらず、この末期に於ては鐵器すらも知られて居つた。と述べられた外には何等の記載がない。これを點檢して見るに、先づ土器であるが、第五圖の説明が上述の通りで、著者自身で個々に就て説明はして居らず、明確に櫛目土器に織物紋土器との混合文化所産と認めたものとは云ふては居らない。然し第五圖を見ると、向つて左の一個は、所謂織物紋らしいものが見らるゝ上に、櫛目土器の一特色たる小刺孔(Grübchen) があるから、これが著者の兩者混交である如く解せらるゝ。然し中央及び右の二個は、それ程までに顯著でなく、寧ろ櫛目土器の特性を帶びて居る樣に見られ、そこに織物紋土器の影響が何れにあるのか、私には判斷に苦むものである。次に著者記述の如くこの種土器には、旣に金屬伴出があるのであるから、石器時代としても末期である可く、場合によつては金石併用時代乃至それ以降として取り扱はねばならないかも知れない(1)が、石器、金屬共に内容が述べられて居らないから、こゝにも疑點を將來に遺して置く。

　第四類、織物紋土器に就ても、記載は簡單である。單に他の三類と混出せるものが主體をなし、僅に二箇所のみ共純なる遺跡がある。この種土器には燧石製石器が伴出するけれども、旣

何等述ぶる所が無い。甚だ遺憾ではあるが、それでも第三圖には三個の遺物がある。左端の有孔垂飾は何製か原料不明であるが、其中央のは立派な骨紡であつて、櫛目土器系文化中にも此の如きものゝあることは、特記して置かねばならない。右端の骨角ヒ狀のものは破片であり、これだけにては何んとも申し得ない。

第二類の土器、卽ち著者のウヲロソウヲ――チョロモニチア式と號するものに就て著者は、本土器形式は從來ロシア諸家の氣付かざりしもので、櫛目土器とは多くの特性上區別せらる可きものであるとて、本式の特徵を次の如くに述べて居る。第一に其土質に於て貝、羽、毬毛、植物等の混在を認むる。第二には厚手であり、第三には櫛目乃至は彫紋の固有的な紋樣を有する。第四には特にチョロモニチア出土の土器に於ては、其口片端（大山註。口唇）には內外に反轉せるものが見らるゝとて、第四圖にこれを示して居る。又他の遺物として各種の燧石製石器、骨角器を出土したと述べては居るが、何等の內容も示されないし、この方は寫眞もない。從つて石器や骨角器に特徵があるのか否かも不明である。而してチョロモニチア及びウヲロソウヲI兩遺跡共に靑銅小片の出土もあつた由である。只私はこゝで、特に注意を要することゝ考へるのは、この著者の特徵として述べた、貝其他の混在である。この土器の寫眞（第四

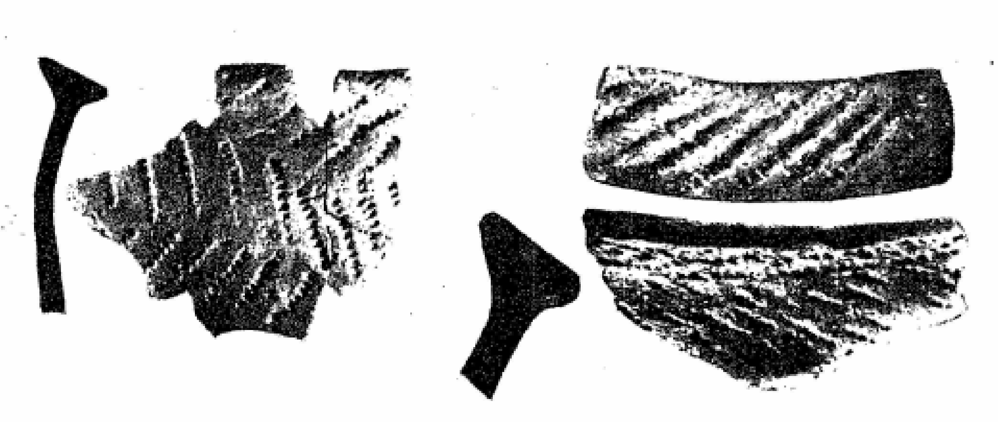


Fig. 4.　Cholomonicha 出土土器（Bahder より）

圖）から見ると、左の方のは其表面滑かに見へるが、右の方のは表面が寫眞の故か、粗に見へ、脆いとは書いてこそないが、脆そうに思はれる。それから見ると或は我國の所謂纖維土器とでも云ふ樣な、性質を持つて居るのではあるまいか、その疑も出てくるのである。又それが左右兩者同在するのであるなれば、亦見方も變へねばならない。要するに、これだけでは資料

第四類　織物紋土器（Textilkeramik）十四遺跡。
（但し本土器には燧石製石器隨伴）

備考　遺跡數は夫々の土器を含んだ數であつて、一遺跡二種以上を含む場合も夫々に算入してある。

Fig. 2.　櫛目土器
（B. Kosino IV. 出土。Bahder より）

以上の區分は、勿論單なる形態學的のものであるらしい。然しながら切角かく分つたものの、其個々に就ての說明が餘りに單純に失して、一向其特徵を知り得ないに止まらず、土器の挿圖が僅に四葉（第二—五圖）で、これからも、私には判斷に苦む。特に第二第三類が、果して櫛目土器と相異るものでなるか否かゞ、第一の疑問である。著者は其出土に對し、後世の攪拌等により、其層位的區分が出來なかつたと述べて居るから、益々疑問を强める。

其第一類土器である櫛目土器に就ては、單に第二圖掲出のものは、其施紋單純であるから此種土器としては、後期に屬するものと著者が判斷して居る外、說明がない。第三圖も亦櫛目土器と其隨伴遺物の一部とであるけれども、これに就ても言及せらるゝものがない。私は、立派な典形的な櫛目土器と考へる。又著者は土器の外、燧石製石器及び多くの骨角器と動物遺骨とが發見せられたと述べては居るものゝ、これ亦其內容に就ては、

Fig. 3.　櫛目土器其他
（Bladycino I. 出土。Bahder より）

district et gouv. du Vladimir. (Congr. Inter. Arch. e. Anthr. Moscou. Tom. II.)）には、土器の記載はあるも、圖がない。其記載の上から櫛目土器とは考へたが、未だこの當時櫛目土器の稱呼が



Fig. 1.　Bladycino の底住居蹟　（Bahder より）

行はれて居らなかつたものか、明確を缺き、爲に若干躊躇もした。然るに本報告と對比するとそれが櫛目土器系に屬す可きものであることが、私に肯定が出來たので、先づ本研究を紹介する方がよいと考へ、かく著手したもので、近くこの古い方をも紹介する考へである。實の所は、ウヲロソウチ研究が面白かる可きことは、私は既に氣付いて居り、これを本誌上にも書き、或るものにも備へて置いた。それは拙著、「マグレモージアン文化概說。本誌。三の二、三號。第七三項。「註四」、釣針始原考、の中に於て結合釣針の一例として、ウヲロソウチ出土を報じ、且つ第二十七圖にこれを揭出し、共上（79）に於て、「我が國石器時代研究上面白き研究が揭出せられて居る」云々とまで觸れて置いたのである。而してこのバーダーの報告中には、從來より有名であるとばかりで少しもこの古い研究の內容に觸れて居らないのは甚だ遺憾に考へる。

これ等の多くは、河岸にある砂埠（Dünen）地に於ける住居跡である。（第一圖參照）これに就ては著者は發掘期を分ち夫々の期間に於ける各地の住居跡數と位置に就て詳記して居るが、肝心の個々住居跡の狀態、特に遺物包含の模樣等には何等觸れて居らない。

三　土　器

著者の發掘調査した住居跡は共數三十七に達し、この結果共の出土々器を次の四類に分つことが出來ると云ふて居る。

第一類　櫛目彫紋土器（Kamm-Grübcen Keramik）（註）。二十六遺跡。

第二類　ウヲロソウヲ－Ｉ－チョロモニチア式土器（Volosovo I-Cholomonicha Typus）。四遺跡

第三類　スルブノ－チュウワリンスク式土器（Srubnochva-lynsk Typus）。九遺跡

本題目のもとに研究し始めたのは、本號を當初とする。

更に御斷りをして置きたいことは、この櫛目土器系文化と稱するものは、私が從來から「バルチック系新石文化」或は「極北バルチック系」等の名のもとに呼び來つたもので、これは獨語の「Baltische Kultur」乃至は「Arkt-Baltische Kultur」を譯述したに過ぎないのであるが、今回櫛目土器それ自身に出發して、研究擴大の結果を齎した以上、前述の如く前研究に關連せしむる爲、舊稱を用ひずかく櫛目土器系文化と稱したに過ぎないので、そこに何等の他意ないことゝ且つこれ等は異名同文化に過ぎないものであることとを明にして置く。

又この櫛目土器系の文化全般に就て資料を集成して行く關係上、從來の樣な土器のみを對象とするものとは異り、必然的に櫛目土器系以外の近緣關係ある他系文化にも觸れざるを得なくなる。從つて往々この近緣關係を辿つて、他系文化にまで及ぶ可きことも生ずることは、豫め御斷りをして置く一つである。

其五　ヲカ河谷附近の住居跡群研究

(Otto Bahder ; Zur Erforschung der neolithischen Wohnplätze im Okatale. Eurasia Septentrionalis Antiqua. IV. 1929.)

一　はしがき

本研究は歐文表記の如く發表せられたものであるが、これを抄譯し且つ拙考を加へて參考に供する。本文中に著者と稱するのは、バーダー氏を指すのであつて、拙考には大山乃至「私」として、著者と區別する。而してこの著者が、史前學者として、如何なる經歷、位置、述作等があるかに就ては、全く明知してない。

二　一般及び遺跡

本研究は著者自身に於て、一九二四—二八年の五年間に亘り、歐露の略中央にある、ニジニ、ノブゴロット縣 Gouv. Nizui-Novgorod ウラジミール縣 Gouv. Vladimir 等に於て、主としてヲカ河畔の諸遺跡を調査した結果の略報である。(1)

このヲカ河は巨流ウヲルガの一支流であつて、ニジニ、ノブゴロット市附近で本流に合する。而して著者によつて研究せられた諸遺跡が點在するものゝ、特にヲカ河右岸ウヲロソウヲ(Volosovo)(2) 附近に密在するものがある。

［大山註。二］ウヲロソウヲ遺跡群に就て

本遺跡群は既に古く、一八九三年に報告せられた著名なる遺跡群である。只この原報告 (P. Koudriavtsev ; Les vestiges du l'homme préhistorique de l'age de la pierre près du village volosca

の遺物も同様ではあるが、正しく其特徴を握把すべきである。
而してそこには落ちのないことも必要であると共に、偏してはならない。よく外國の研究等に見る様な、抽出的な比較研究の様なものは甚だ危險千萬であるのみならず反つて害すら起し得る。さればこの櫛目土器の研究に於ても、成し得る限り全稱的に研究してゆきたい。勿論其資料として取り扱ふ可きものが、直接に實物でない。多くが抽出掲載せられた寫眞、繪畵等である。從つてこれに基くのであるから、或る所までは認識不足も止むを得ない。又これ等の記録も、吾れ吾れの知り度いと思ふことも悉くは書かゝれては居らない。從つてこれよりも、認識不足は累加する。然しさりとて、完全研究を企圖すれば、文献上の研究が殆んど不可能とも極論せらるゝことゝなるのであるから、これ等から生ずる不足不備は、豫め考慮に入れて取り扱ふ可きである。而してこの様な不充分な資料中より其特徴をよく握把せねばならないのであるから、そこに勉強の必要も生じてくる。それにも拘はらず、萬一にも早呑込みで、取り扱ふものなら、そこに大きな認識不足を生じ、甚しいのになると物笑の種にまでもなり得る。それであるから、この櫛目土器を正解するには、先づ成し得る限り、多くの資料を集成して、其多數資料によつて、判断の基礎をより堅固にせねばならない。此の目的でかく集成しつゝある。

三 櫛目土器系文化に就て

總て土器それ自身のみが、直に以て文化全般を指すものでないことは、今更言ふを要しない。其文化を代表する場合は多い。我が縄紋式文化と稱する如き其好一例ではある。但し縄紋式文化の特徴は獨り土器そのもののみに存するのではない。他の土製品、石器、骨角貝器等にも、其輕重はあるにしても、特色は存する。又獨りこれ等の文化遺物に特徴を見るのみに止まらず、貝塚、住居跡等遺物に對應すべき遺跡に於ても、これを見ることが出來得る。從つて前述の如く土器を以て文化相を代表することは咎む可きことではないにしても、土器即文化相であるとは必ずしも申されない。故に土器自體と文化相とは、明に區別せらる可きである。今迄述べ來つた櫛目土器集成は單なる土器の研究範圍を出でなかつたものであるが、最近の趨勢は、この土器研究の範圍の超越を恐るゝものがあるので、かく題名までを變更して、これに順應しやうと考へたのである。この結果、獨り土器に止まらず、其文化相全般に亙つて、これが研究資料の集成に着手したものであるが、從來集成したものも亦、これに包含せらる可きであるから、從來よりの研究續行の意義を含めて、以下集成して行くものを「其五」となしたものであり、

し、決して資料が不足で休止したのではなく、全く他に追はれて怠つて居つた所、櫛目土器研究は急轉して、一部では日本石器時代研究の直接對象内に及びはしないかとまでの、心配が出てきた。勿論此の如く急轉することに異存はない。只そこには檢討を要す可き條件がある。

第一には櫛目土器に對する正しき認識であつて、それには私の前掲してきた諸例では不足不充分であるから、其特徴を充分に會得する爲には、資料の豐富な程、よりよい。

第二には一言に櫛目土器と云ふけれども、其分布を見ると北歐方面よりシベリアに及んで居る。其東北方延長が何處まで及んだかは、暫く別として、歐洲に於て櫛目土器(Kammkeramik)と稱せられものに於ても、細かに見ると若干の差はある。又前述の分布上から考へても、その廣大なる地的環境内に於て、所謂地方色があつても不思議はない。寧ろある可きと思ふ。從つて、これ等の地方色の存するものとして、これを綜括して櫛目土器として見る時には、廣き内容を有するだけそれだけ、範圍は廣くなり、そこに或る細い特質が消されてもゆく。これは我國の繩紋式土器を綜括する場合に、東北、關東其他に見る或る部分が見られなくなると同樣の立場にある。特に我國よりの研究としては、其西より卽ち歐洲側と、東よりのシベリアとに、同じ櫛目土器でも、相異があるか否か、より明に見る可きである。であるから、櫛目土器と一言で餘りに簡單に取り扱いたくない。

第三には、この櫛目土器の研究に於て、其の内容變化の程度を研究する必要がある。卽ち代表的な最もよく特色を發揮したものに對し、同じ櫛目土器でも、殆んど其特徴を捉へ得ない樣な、櫛目土器としては、中心より遠く其外周的に位置すべきものゝ存在に對する研究である。それが地方色の結果であるか、或は他文化との交渉の結果であるかを問はず、これを知る可く研究を要する。

第四は時に關した研究である。これも前述した廣い分布を見る以上には、其遲速がある可きであり、そこに時的差異も考へらるゝ。たゞ今日遺憾なことは、この櫛目土器に就て、少なくとも私には、確乎たる編年的研究を知つて居らない。其土器それ自身の型式上、新古を論ぜられたものは見らるゝけれども、それは型態學的研究の範圍を出でないのが多いから、確からしさが足りない。これを直に以て編年的に見ることには、吟味と考慮とを要すると共にこれ等歐洲等の研究を浮々と鵜呑にすることは出來ない。要は時の經過に從つても、夫々變化の存す可きことを辨へて研究すべきである。

第五には土器の研究方法である。これは獨り櫛目土器の研究に限つたものではない。獨り土器に止まらず場合によつては他

櫛目土器系文化資料集成

——櫛目土器集成續論——

大山柏

續論に際して

一　御断り

櫛目土器に就ては、既に本誌一の一、以來、一の二、一の三、二の三(其四)、の順序に番號を追い、櫛目土器集成の表題のもとに、揭出して來たのであるが、其後は私の怠慢から其儘となつた。所が其後に櫛目土器に關して、一部學界の着目をひき、此頃これに對して關心を持たれてきたことは、悦ぶ可き現象であると共に、其結果私自身に反省を要す可きものを生じた。それ故こゝで其集成に入る以前に、先づ私の考へを述べ、總てを明にして置きたい。

二　櫛目土器それ自身に就て

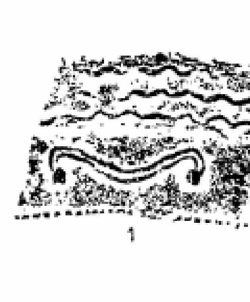
今迄發表してきたものは、其表題の如く、單なる櫛目土器それ自身に就ての集成のみであつて、其土器を有する文化全般に亘つてのものではなかつた。それは單に日本石器時代研究を中心として、南方關係の認識に對應して、北方關係に對する輕い意味の認識の一助とした爲であつて、然かも最初の方針は文章上の説明を多く略し、圖の集成によつて、其土器の性質を示し、これが足らざる所を文句で補ふとしたのであつた。元々この集成はこの土器が最初より日本石器時代研究に直接關係あるものとして、より深き近緣研究までの意味ではなかつたのである。將來に於て其近緣の有無を探究す可き基礎として、先づ櫛目土器それ自身を正しく認識せんが爲であつた。所がこの研究に對

此種は形體の變化に乏しく甕形及び壺形のみである。色は黒又は黒褐色にして、無地の肌の肩部口部に細き曲線を附着させる模様の變化少く、線條紋の上下に一、二種の凹紋を施し、中には凹紋のみ附けたものもある。



Fig. 13.

此の種の燒度は最も高く、完全なる土器の發見多く前述の如く共存品より見て本土器は末期の所產品と考へられる。



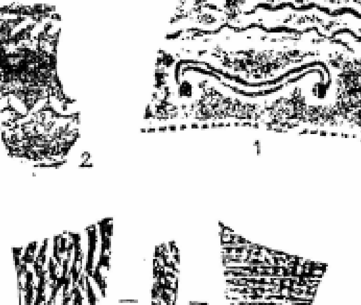


Fig. 14.

私は各項に渉つてこの市街地の遺跡の各地點別に土器を類別したが、これ等はその存在地の地形及び地層の構成狀態に基いて、年代を推察する事が出來やう。又E類土器の出土地點から第十四圖の如き浮紋土器と伴つて祝部土器（第十四圖４５）に類似した物を發見する事がある。拙文ながらこれをもつて網走の土器の大體の記載を終る事とする。御判讀にの上御參考なれば幸甚である。稿を終るに臨んで高田耕吉君の助力を感謝する。　（昭和七・七）

指痕を見、口邊部は薄く韮線位の太さの曲線が帯狀に廻され、又耳形を點々と附してある。其他幅二糎又は三糎の高低ある山形模樣を帯狀に附したる物も多く見受られる。A類より厚手なりど口邊部は割合に薄く、底は二糎餘の厚さを持つて居る。

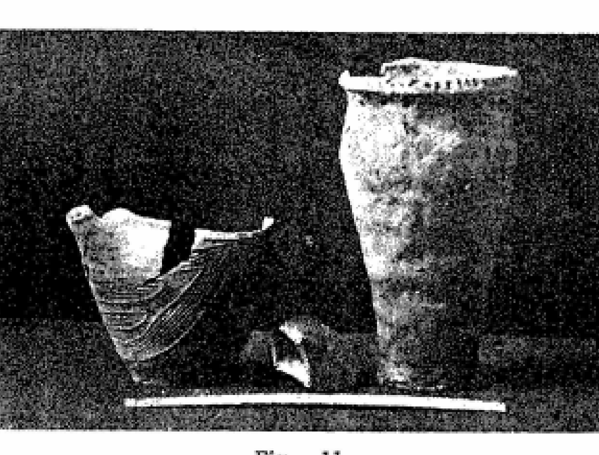


Fig. 11.

前者は砂の混入多く、B類の物は小石を混和せる物が多い。中には徑一糎大の丸い小石の混入を見受ける事がある。色は黒褐色である。

C　類

此の種の出土面積は遺跡中最も廣く、地肌一面に細い繩痕あり、其の表面は種々の模樣を印し第八圖の如く多樣にして形に於ても變化に富み、壺形・鉢形・甕形・鍋形・丸形等にして、環耳・瘤耳・袋耳（第十一圖中央）注口（第十一圖左）を有する物が多い。燒度は前者より高く土砂の混入も少く緻密である。小形は高さ四糎位より六十糎餘の大形に及ぶ。

色は茶褐色多く、底部に刻紋、押紋（第十三圖）等を有し、又赤色を塗つたものもある。

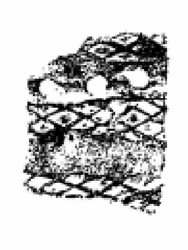


Fig. 12.

D　類

此種は最も薄手にして、外面は黄褐色、內側に黒又は赤の塗料を用ひた物が多い。

主に細密なる粘土を用ひ、砂の混入少き爲め形は最もよく整へられて居る。然し形の變化は少く、深鉢形（第九圖）のほか、高盃、バスケット形等がある。

模樣は、繩痕をあまり見ず、腰部より口邊部に至る間は細い沈線を以て、格子形・矢羽形・鋸齒形を描くもの多く、曲線は少い。此種の土器と共に小形石斧（長さ七糎幅一糎）の出土を見る。薄手にして燒成は不充分で、透水力甚しきを以て內部に塗料を用ひてあるのかも知れない。

E　類

A 類

此種の土器の完全なるもの少く、現在發見されて殘るものとしては四五個あるのみである。

形は圓筒形最も多く、（第十一圖1（口徑十四糎、底徑九糎、高さ二十糎））破片より推察して壺形の物は見られない。

模樣としては、口邊部に波狀紋が多く、粗い繩紋の上に帶繩紋を廻し、其の間に垂繩紋を加へ、帶繩紋の下に徑一糎位の輪形を押したるを多く見る。

Fig. 9.

色は赤褐色多く、厚さは一・五糎餘、粘土に多量の砂を混じてある爲め燒度高きも質は脆い。模樣としては第二圖第十二圖に示す如き各種のものが見られる。

B 類

此種の完全なるものは未だ發見されて居ないが大形の破片は多い。此等はA類に類似するも繩痕を認めず、無地の肌に所々

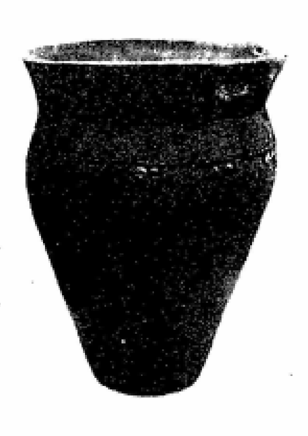



Fig. 10.

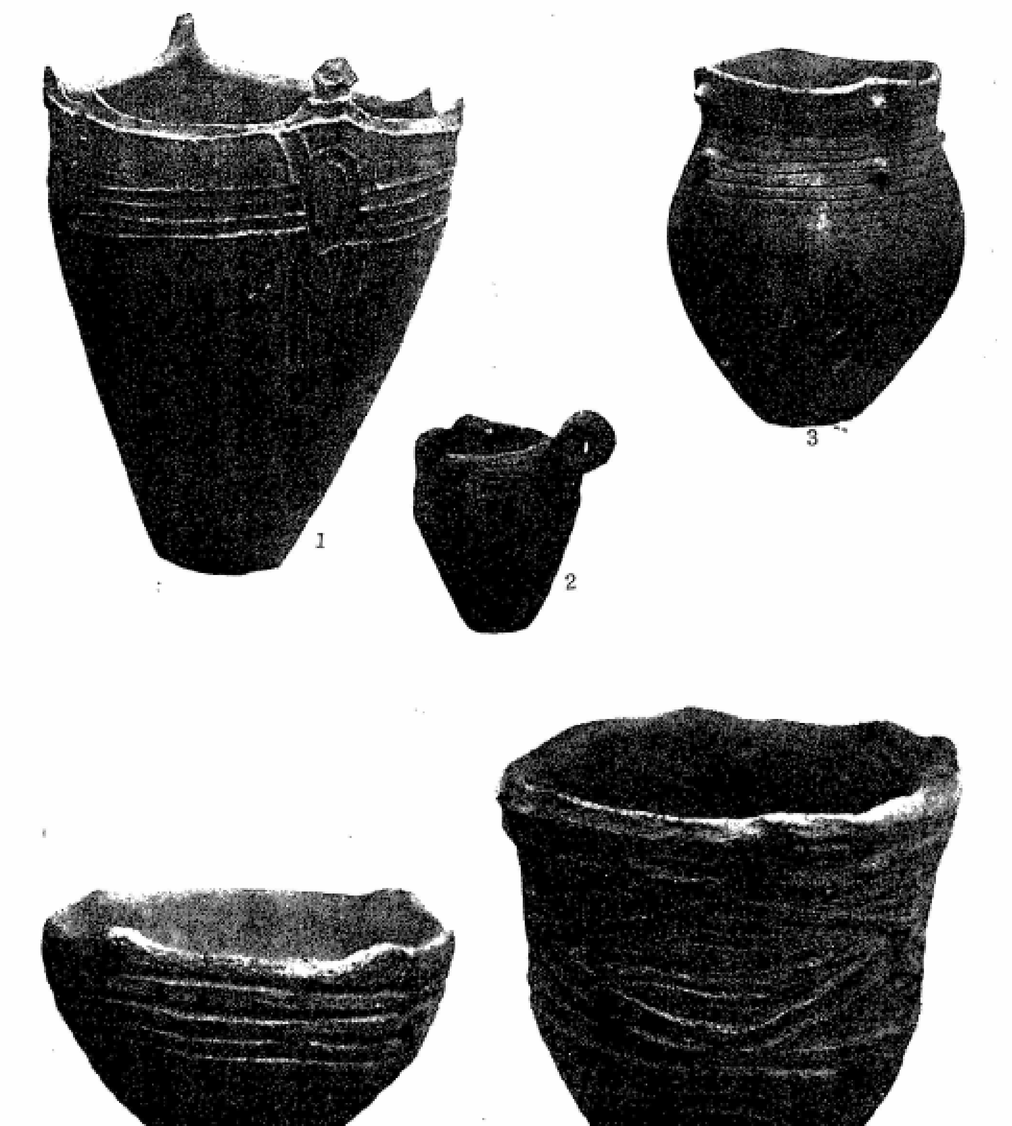


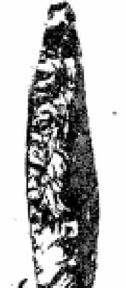
Fig. 8.

土器

市街地に於て出土した土器はこれを其の紋様の構成並に土器の性質に基いて次の如く大別する。

A類　厚手縄紋土器（第七圖１２３）

Fig. 6.



B類　厚手浮紋土器（第七圖４５）

C類　薄手縄紋土器（第八圖）

D類　刻紋土器（第九圖）

E類　薄手浮紋土器（第十圖）

以上五類の外、厚手無紋にして質も弱く、且焼度も不充分で表面のみ焼け、内部は粘土其のまゝの如き土器も發見されて居る。この種の土器は最も變形に富み、壺形、椀形等で他に装飾品と思はれる注口付燈心皿形の物もある。棍棒狀、劍狀の土製品も出土して居る。此等は新市街(2)(3)地點の境界附近に多く、皆副葬品土器の如く、實用品以外別個に見る。以下此等の土器を大別して誌さう。

Fig. 7.

(3)地點　新市街の網走川河口に近い新しき段丘地帶である。此の地帶には、網走附近にても最も珍らしき、徑拾米、乃至拾五米餘、深さ貳米にも達する大形の竪穴がある。竪穴は、〇・四米位の表土に覆はれ、底部に十糎位の厚さに赤粘土を敷き、稍中央部には徑二十糎餘の玉石を角形に列べて作つた爐が發見された。穴の中央に、家根の支柱と思はれる徑二十糎位の丸太の土中深く差込んである物が現存して居る。穴の中部からは、石斧、石鏃、薄手浮紋土器片等を出し、又石鏃製造の跡と思はれる黑耀石破片の集積所々に見受ける。

穴居跡の間隔は六米乃至十四五米ほどで、其の間は一面シジミ、アサリ、カキ、ホフキ、海ツブ等より成る厚い貝層があり、薄手浮紋土器・石斧・石鏃・骨角器等を包含して居る。又所々の地下一米位に、埋葬せる人骨あり、副葬品らしき完全なる薄手浮紋土器の二、三片・石器一、二・鐵製の鏃身（第四圖下）等が人骨と共に列んで伴出した。河岸に接し、厚さ三米位の包含層をなし、下層より薄手縄紋土器、上層より薄手浮紋土器を出土し、この薄手浮紋土器層より、多數の骨器（第五圖）及び漁具に用ひられたと思はれる錘石（第四圖上）等が發見される。又一部分には、魚鳥獸骨の一米厚の層があり。(2)地點との境界には、薄手浮紋土器と薄手縄紋土器とが混出し、人骨の露出あり、貝層中にも亦人骨が見出されるが、此の埋葬法は前者と異つて居る。

Fig.　5.　骨角器類

以上遺跡の狀態及び土器の出土に就て各地點別に述べしも、以下土器に付細記しやう。（第六圖は薄手土器と共存の石器）

が、當所よりは、最も大形にして厚手なる浮紋土器が厚手縄紋土器と共に出土して居る。又上部からは薄手縄紋土器地表よりは刻紋土器が發見される。

斯の如く數種の土器が層を成して出土するに依り、當所は厚手土器使用時代が最も古く發達し、年と共に砂にて覆はれ、次に薄手縄紋土器使用時代の住居となり、再び砂層にて覆はれ、最後に刻紋土器使用の住居となる等幾つかの時代を經過したものに相違ない。現在殘つて居る竪穴は最後の刻紋土器使用時代の物であつて、當所より出土する刻紋土器の模様は多く直線模様である。竪穴の長方形を爲す事と、穴の整列する處が最も注意すべき點と思ふ。

(2)地點　舊市街(2)地點と同時代の物と看做す可き、薄手縄紋土器を多く出土するも、又、多數の刻紋土器をも伴出する。

Fig. 3, 2. 新市街（一）地點穴居址

此の地點の面積は最も廣大にして、竪居群も數十を算ふ事を得る。

(1)地點と(2)地點の間は低地を成し、以前河床部に在り堆積を受けた平坦面を形成し、川に添ひ平坦面が下流に續いて居る。(2)地點の段丘は海岸に接する程高度を增し、ゆるやかなる斜面を形造つて居る。

この段丘の川岸に添ひ一面に經四・五米の稍圓形を成せる竪穴跡が密集して居る。海岸に接する程竪穴跡は少く、土器は、河岸より薄手縄紋土器、海濱より刻紋土器を出土して居る。

Fig. 4.　上，石錘　下，鐵製槍身

手繩紋土器（第二圖）、刻紋土器（第二圖下段）等が混出し、石斧・銳利なる石鏃・皮剝等も出土して居る。

B　新市街

Fig. 2.

(1)地點　網走川上流一粁半、左岸に擁立する五拾米餘の断崖の突端部より、河岸に至る市街地の最も奥部に位する地にして、高さ八米、巾二十米、崖より河岸に堤防狀を成す。この蒲鉾形の台地の地表に、約三米に五米位の長方形の竪穴群が、規則的に十二、三個づゝ二列に整列して居る（第三圖2）。斯の如く整列する竪穴は他に見られない。當處は昨年河川埋立の爲め今はその一部を殘すのみである。土取の當時は土器が相當多く發見された。此處の最深部からは當地方に於て最も珍らしい土器と共等の出土狀態を見受けた。網走出土土器は前者（四種）の外、副葬品（第三圖上）と看做す可き厚手無紋土器紋のみであつた

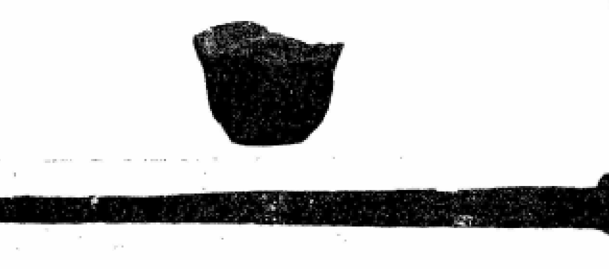


Fig. 3.　上, 副葬土器　下, 鐵器

し、今は見受け難きも猶處々より土器・石器・骨角器等の出土を見る。

Fig. 1.

市街の南方約四拾米余の断崖を作る丘陵（桂ケ岡）の上に、御供形のチヤシが存在して居る。

網走は先住民族時代より聚落に適せる事は、多數遺跡の存在する事によつて推察し得る。

遺跡の説明上第一圖により、新舊兩市街地を各地點別（圖中123を附す）に記述する。

A　舊市街地

(1)地點　市街を圍む約四〇米の断崖を爲す丘陵の隆起部を利用して空壕を穿ち、盛土を以て段を作り、御供形の小孤陵二個を設けチヤシとして居る。チヤシの上部に數個の徑三・四米の楕圓形を成す竪穴がある。附近には、シジミ、アサリ、ツブ等より成る薄い貝層が所々に露出し、其中より厚手縄紋土器（第二圖12）が見出された。此處は磨製石斧、黒耀石製鏃等も發見されたが他種土器の混出を見ない。

(2)地點　網走川の浸蝕に依り形成されたる、五・六米の砂層段丘が、オコツク海の風波の爲、海岸に接するに從つて地帯は高度を増し、網走川の上流二百米餘に至れば、河岸平坦面と平行して段丘を失す。

此處よりは薄手縄紋土器（第二圖34）の出土あり、發見されたる石斧・石鏃等は(1)地點と大差無きも、土器の形態及び模樣に於て著しき特徴を有する。

(3)地點　最も海岸に近い所で、海岸段丘の先端前方に、海

北海道網走町出土々器に就いて

米村喜男衛

緒言

網走町附近の遺跡遺物に就いては、考古學雜誌第拾貳卷第五號に荒澤雄太郎氏が報告せられ、清野謙次先生近著『日本石器時代人研究』の北海道東北部紀行中に、網走川右岸（此の右岸とあるな筆者は本文に於ては網走川の海に面したる左岸なる爲め左岸として誌るす）發掘（大正拾五年八月）の記にて述られて居る。又昭和六年筆者の著書「アイヌ人と其の史前」にて、網走地方の先史及び遺跡遺物に就き述べし處、喜田貞吉先生始め其の他の諸氏より、網走出土土器に就き詳しき報告をとの求めありたるにより、本誌の一端を借り、主として網走町市街地一圓の遺跡中より發見せられたる土器の出土狀態、并に其等に對する私考を記し、以て諸氏の當地方研究の參考とし、併せて御教示を給らば幸甚の至りである。

遺跡

土器を出土する此の遺跡は、北海道オコック海沿岸唯一の良港たる、一邊拾五町餘の稍三角形を成せる網走町市街地一帶を言ふ。

市街の中央西より東にオコック海に注ぐ網走川がある。市街は河口兩岸の台地に形成された聚落で、右岸（南）台地は舊市街地、左岸（北）台地は新市街地として區劃されて居る。

網走の地名はアイヌ語アパシリ（入口の陸地）と稱へられ、右岸舊市街地より發達した結果生じた地名であらう。又左岸新市街地は先年迄最寄村と稱へられ、最寄保安林、最寄神社等在り、最寄はアイヌ語モイオロコタン（灣内の村）より轉化せるものである。新市街地一帶には今尚百余個の竪穴群が存在する。又舊市街地にも相當竪穴群があつたが、市街の發達と共に消滅

補　記

小原氏の如上研究發表に就ては、確かに御相談を受けて居る。且つはこの御相談を受けたのは、當春のことであり、其遺物の主要部分も亦、當研究所に御預りしても居る。然るに其當時著名貝塚の發掘に追はれて、研究を怠つて居つた所、小原氏は急に靜岡縣下に赴任せられた結果、終にこれ等の遺物研究を、手取り早く研究して、小原氏の希望に添ひ得る樣に運び得なかつたことは、全く私の落度であり、玆に陳謝するものである。折角これまで研究せられて居るのであるから、後の部の遺物研究は、私と同氏と相談の上で、これを取り纏めこれを本紙上に發表して研究を完了したいと考へる。今回は紙面の都合や、御相談の時日が餘りに裕りがない爲、かく前編とでも云ふた形式のもとに、かく發表した次第で、其責任は私にあること勿論である。（昭七・一〇・四）

大　山　柏

うかがふに地表より約二十糎の表土の下方約六十糎の間に遺物が認められ、東方に行くに從つて、此の層はやゝ厚くなる傾向を持つてゐる。（第六圖）

三　遺物出土の概要

遺物は貝類のまばらな混土層の中にあり層位による遺物の差異は全然見られず、土器を主とし少數の石器及貝器を檢出した。土器は其の全形をうかがひ得ない程の小破片になつて居た。これを要示して見る。

自然遺物

貝　類

ヒレジャコ
ナガジャコ
ヒバリガヒ
クロテフガヒ
テウセンサヾエ
スイジガヒ
ヤコウガヒ
オニノツノガヒ

棘皮動物

ウ　ニ

魚　類

アダイ

哺乳類

イノシシ

人工遺物

土　器
石　器
貝器等

（詳細は後日の研究に際して述べる。）

後　記

以上で筆者は德之島面縄第一及び第二貝塚の發掘調査の事實に就て概說した。貝研究の一主要部分である人工遺物に就ては、研究もし、其或るものは公表しても居り、今回これも併せ報告しようとしたのであるが、其發表前、一應これを大山研究所の人々に相談した所、成る可く詳細な研究發表を希望せられた結果、人工遺物の研究を一先づ割愛して、本文の如く單なる實地踏査の部分のみを、先づ發表し、其人工遺物研究には同研究所の助力を得て近く改めて發表を期し、報告の總てを完了する考へである。

第二　面縄第二貝塚

本貝塚は筆者が昭和五年十月同處第一貝塚を發氏の歸途同村面縄尋常高等小學校北方崖際の小道を通行中偶然發見したるものである。

一、貝塚の位置及狀態

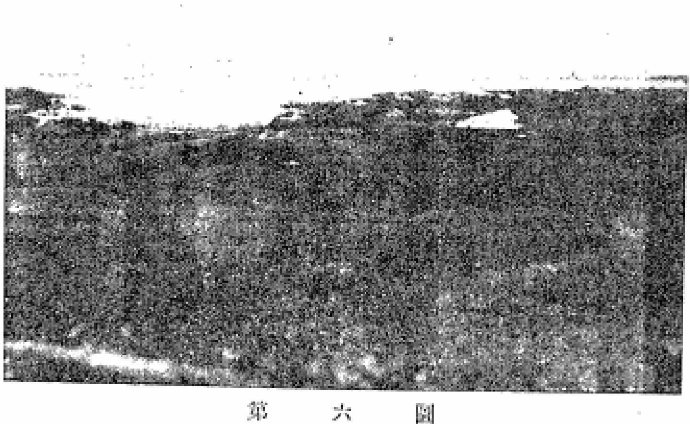
本貝塚は徳之島伊仙村大字面縄字西濱、面縄尋常高等小學校の北方裏側にあり遠く上面縄に北面し、上面縄を發し附近小平地を蛇行して面縄小學校東部を過ぎて海に注ぐ小溪流と、大平洋の黒潮のもたらす白砂との作る小平地にあり、脆弱な砂岩質の層上に形成されたものゝ如く、現在は前述小溪流の雨期に於ける不定期の河水に逐年侵蝕されて成された約五米の斷崖上部にあり、下方は河水の枯れた河床に崩れ落ち、不日此の貝塚の失はれる事を示して居る。

現在の貝塚は同貝塚の南端と思はれる所をわづかに保ち、その中心は、かつて失はれたと思はれるより北方にあつた事を思はせる。

貝類は極めて少く散在し、オニノツノガヒ、カキ等が主で、面縄第一貝塚が主としてヒバリ貝の美事な貝層を持つのと著しいコントラストをなして居る。

二、發　掘

昭和五年十月五日、面縄尋常高等小學校北方裏手のある斷崖の斷崖に接して若干の甘藷畑がある、この畑地の北端、斷崖に接する部分を發掘したのであるが、前述の如く、貝塚の大部分



第六圖

面縄第二貝塚遠望
（學校の向つて右側が崖際）

は失はれ、ほとんど此の斷崖緣邊附近が其の南端をなすものゝ如く、出土品は極めて少く、層位的關係も又明瞭に知るよしもない。只此の北方に面する斷崖に露出する二三の遺物を以て、

部は砂粒を多く混じた粘土層で、直ちに隆起珊瑚礁に接し層位的區別は見受けられなかつた。

五 遺物出土の狀態

出土遺物は全貝層を通じ檢出され、それらの遺物の間に特種の差異は認められなかつた。只貝層の底部より開元通寳が一枚出土した事は注意すべき事である。

此の貝塚の土器は南島の貝塚の多くがそうある如く、小破片に割れて、全體の形を明に察し得ない事は殘念である。

又二段に形成された本貝塚に於て兩部の遺物出土の狀態は變化なく、下段の貝層は上段のそれに比して淺く約五十糎―六十糎を示してゐる。

六 出土遺物

自然遺物

貝類

ニシキウヅ　Trochus maculatus Linne
アマガヒ　Nerita (Puperita) japonica Dunker
ヒレジャコ　Tridacna squamosa Lamark
ナガジャコ　Tridacna elongata Lamark
シャゴウ　Hippopus hippopus Linne
ホシダカラ　Cypra
ミミガヒ　Haliotis asinina Linne
ヒバリガヒ　Modiolus barbatus Linne
クロテフガヒ　Pinctada Margaritifera Linne
ホラガヒ　Charonia tritonis Linne
リウテン　Turbo petholatus Linne
スイジガヒ　Lambis (Harpago) chioga Linne
ヤコウガヒ　Turbo marmoratus Linne
レイシ　Thais (mancinella) bronni Dunker
アンボンクロサメ　Conus literatus Linne
サラサバテイ　Trochus (Pyramidea) niloticus Linne
テウセンサザエ　Turbo (Senectus) Porrulus Philippi
オニノツノガヒ　Cerithium (aluco) nodulosa Bruguiure
カコボラ　Cymatium (monoplex) Pathenopeem Salis
イトマキボラ　Fasciolaria (Pleuroploca) brapeziem Linne
キバタケ　Ferebra (oxymeris) Crenulata Linne
ヤマダニシ　Chclophorus herklatsi martrns.
アサリ　Paphia sp.

魚類

ブダイ
フグ
サメ

棘皮動物

ウニ

哺乳類

イノシシ
シカ

人工遺物

土器其他

（詳細は後日の研究論文に讓る）

見せられたものである。これが耕作の爲其表土は削平混亂して居るもの丶後述小部分の外すべては、處女層であり混亂した形跡は更に、認められなかつた。（第五圖・第六圖）

本貝塚を形成する貝類は大部分ヒバリ貝で貝塚底部に多くの巨大なる夜光貝、シャコ貝が重なり合つて檢出された。ヒバリ貝を主とする事は本貝塚の一つの特色として擧げてよからう。

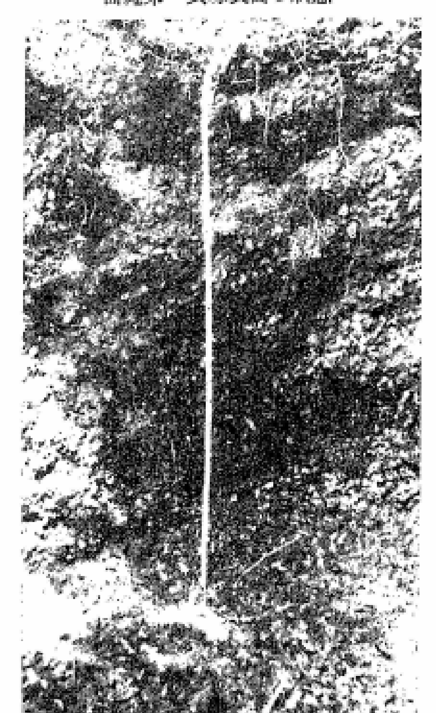


第五圖
面縄第一貝塚表面の狀態

三 發掘

本貝塚は先づ昭和三年七月面縄小學校訓導大村行信氏及同校生徒に依り小部分發掘され同五年山崎五十磨氏の依賴により再び小發掘が行はれ遺物を鹿児島市の同氏のもとに郵送する所があつた。筆者は昭和五年十月三日、四日にわたり上段部貝塚を東西二米―南北四米發掘した。其の全貝塚の發掘調査は或事情に依り同年行ふを得ず、從つて不充分なる材料の發表を差控へて居たが、昭和六年七月再び德之島に至り、前年度に於ける未發掘の部分を、ほとんど發掘した。

發掘作業は人夫四人を督して之に當り、先づ東西に幅一米、長さ二米の試掘壕を掘り、其れに依つて南北に發掘を進めた。かゝる發掘法を採らしめたのは、貝塚中處々に隆起珊瑚礁が不規則に存在して甚だ發掘を困難ならしめた事による。



第六圖
面縄第一貝塚發掘斷面

四 各層の狀況

腐埴質土壤よりなる表土は約十糎を算し、其の下方約一米主としてヒバリ貝を以て形成された純貝層を持ち、表土下約二十糎附近に厚さ約五糎のウニの殼及針が密集して層をなし、貝層下部には巨大なる夜光貝、シャコ貝の類が多く集まり、其の下

る同島伊仙村大字面縄にある。

この面縄は戸數約六十戸、東南に面する海岸地帯にあり、貝塚は字上面縄と字西濱との中間面縄尋常高等小學校西方約二百米を隔て丶標高二十米の斷崖をなす、隆起珊瑚礁の小溪谷の西面する側にある。（第二圖・第三圖）



第　三　圖

面縄第一貝塚を西方崖上より望む
（旗の立つ下部が貝塚）

二　貝塚の状態

本貝塚の東方は直ちに約七米の斷崖があり西方は其の斷崖下より幅約八米の畑地を、へだて、約六米の斷崖がある（第四圖）。南方は約三米程低き段階をなし面積約四坪ばかの畑となる。即本貝塚は此の小溪谷東側に上下二段に分れて存し、面積は約一畝ばかりで、此の小溪谷は亞熱帶及熱帶植物を交へた叢林に包まれ（第三圖・第五圖）兩斷崖下には、風葬をなして洗骨したる人骨數多が見らる丶。貝塚は開墾等に依り貝殻が地表に散布して居たに拘はらず久しい間、其貝塚なる事に注意したものがなく、昭和三年七月に至つて偶然にも面縄尋常高等小學校訓導大村行信氏に依り發

第　四　圖

面縄第一貝塚の東方崖下より貝塚遠望

(5) (3)の報告參照。

(6) 濱田、長谷部兩博士并に島田氏、薩摩國出水町尾崎貝塚調査報告、（京都帝國大學文學部考古學研究報告、大正九年―十年）參照。

第一　面縄第一貝塚

一　地形及地質

九州及臺灣の間に連鎖をなす琉球列島は大別して先島、沖縄、大島群島であるが本貝塚は大島群島、徳之島にある。同島は奄美大島の西南約三十浬、北緯二十七度四十分より二十七度五十三分、東經百二十八度五十二分より百二十九度三分の間に位置し、南北約七里東西約四里の小島で、行政的には鹿兒島縣大島郡に屬し、舟運頗る悪く、鹿兒島港より約二百五十浬、奄美大島名瀬港より約五十四浬の南方海上にある。（第二圖）

第二圖

1. 地形　大島に比し峻嶮ならず、背柱を爲す山脈は島の中央部を南北に走り、海岸に向つて緩傾斜を爲す。中央部井久川岳（海拔六七三米）最も高く、是より西南に陵夷し、海岸は洪積期に隆起した珊瑚礁低原を形成し、此の卓子原は往々珊瑚石灰岩の絶壁を以て海に臨み海中水際線下にも珊瑚礁布置し艀船の碇泊に極めて不便を感ぜしめる。

山岳中井之川岳に次で高きものは、ヨフサ岳剣岳、犬田布岳で、何れも卓子原中にあり急峻ならず、河に於ては井久川岳西麓に其の源を發し、西南に流れて西阿木名の北方、海中に注ぐ秋利神川最も大きく、他は何れも小溪流である。

2. 地質　略述すれば大部分は古生層で、一部第四期層より成り、火成岩には古期迸發岩、花崗岩、閃緑岩あり、新期迸發岩には石英斑岩及玢岩等があり處々に小岩脈をなして居る。古生層は主として硬砂岩、粘板岩、硅板岩、石英岩、輝綠凝灰岩、石灰岩等よりなり下部には一部、輝岩、角閃岩を露出して居る。地層の一般走向は島の主軸延長の方向に略々平行で東北より西南に走り、琉球弧島の地質構造線に一致し、西北に急斜し水平層は見られない。

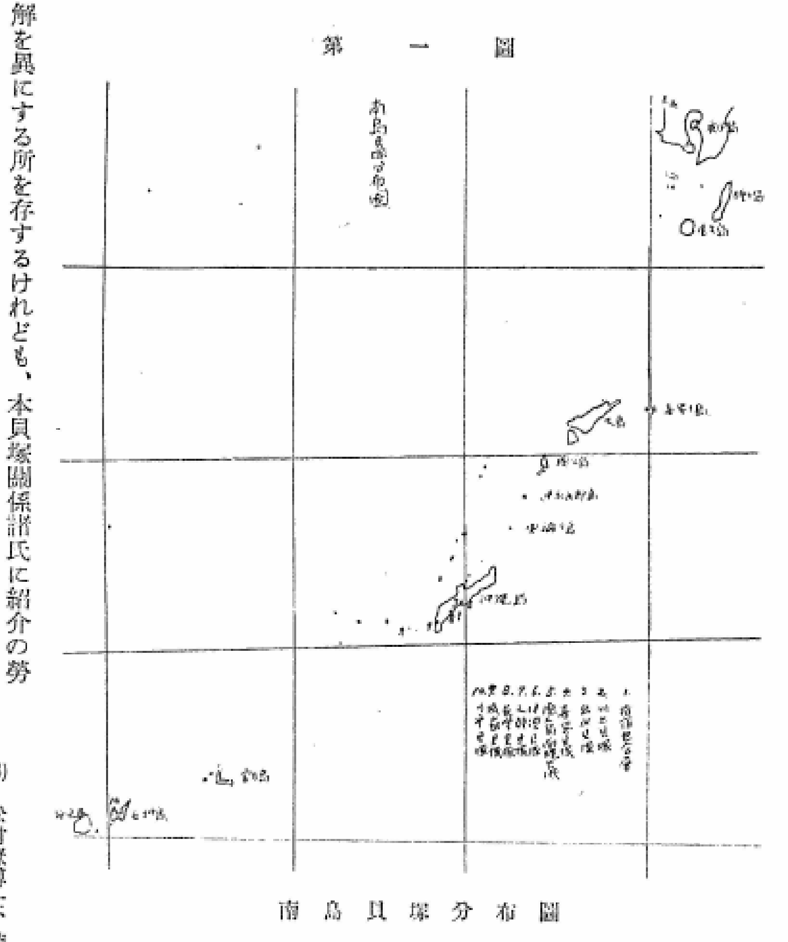
3. 貝塚の位置　同島山脈の西南に緩く傾斜する山脈が海に入

に於ける諸貝塚が發見された事は其等の相關關係を明にする上に慶賀すべき事であらねばならぬ。（第一圖）

筆者は德之島諸貝塚の發掘者として學術上少しく山崎氏と見解を異にする所を存するけれども、本貝塚關係諸氏に紹介の勞をとられたことに就ては、先づ感謝を表して置く。

次に筆者の發掘に當つて常に心からなる嚮導の勞を惜まれなかつた同村廣瀨祐良氏、並に宿舍として其の自宅を供され諸種の便宜を與へられた種ケ島德次郎氏父子、同地小學校長中島氏及同校職員生徒諸子、及村當局の御厚意を紙上を借りて謝意を表すると共に數度の手紙を以て筆者を励まし御鞭撻された恩師西村眞次教授の御指導並に大山史前學研究所諸氏のもれなき御配慮、杉山壽榮男氏の御助言等は又筆者の忘れ難い所、共に併せ記して御禮の言葉に代へる。更に一言御斷りすることは、本報告は單に野外作業の經過を主としたものであつて、後述して居る理由から、遺物研究の總てを、畧し、後日改めて報告することにした點である。

第一圖



南島貝塚分布圖

(1) 山崎氏は別に、鹿兒島縣大島郡德之島面縄貝塚に就て。考雜。二〇の十。に報ぜらるゝ所があつた。この貝塚は、本文後述して居る、筆者の所謂、面縄第一貝塚に當つて居る。

(2) 小牧實繁、那覇市外城嶽貝塚發掘報告（人類四二の八）

(3) 松村瞭博士、琉球荻堂貝塚、（東京帝國大學理學部、人類學教室研究報告、第三編、大正九年）參照。

(4) 大山公爵、琉球伊波貝塚發掘報告（大正十一年）附錄第二。參照。

奄美大島群島徳之島貝塚に就て

小原一夫

緒言

昭和四年以來、主として南九州、薩南諸島、奄美大島群島、琉球列島、先島諸島に殘された我日本古代文化の遺物并に殘存を調査研究しつゝある私は、昭和五年十月、及昭和六年七月、鹿兒島縣大島群島徳之島を訪ふたが、此の兩年の渡島の主たる目的は南島入墨の眞の姿を明にする爲であり、從たる目的は此等の島々の考古學的の研究にあつた。

昭和五年夏山崎五十磨氏の本貝塚に就ての報告を鹿兒島新聞紙上に於て見るを得た筆者は同氏の紹介によつて同年十月親しく發掘するを得た。[1] 本貝塚は同島伊仙村、面縄(オモナワ)にあるが、同村面縄尋常高等小學校北方畑地に、他の貝塚がある事をはからずも發見し之も併せ小發掘を試み若干の遺物を得た。かくして昭和六年七月再度の渡島の折り同村廣瀬誠良氏は龜津村本河(ホンゴウ)に新貝塚を發見され筆者に其の調査を望まれ、之が發掘を行なつた。筆者は發掘順に從ひ前記山崎氏報告の貝塚を「面縄第一貝塚」、小學校裏手の貝塚を「面縄第二貝塚」本河發見の貝塚を「本河貝塚」と便宜上命名し以下其の命名に從ふ事とする。

從來學界に紹介された此の方面の貝塚としては、沖縄縣八重山郡川平貝塚、同縣那覇市外城嶽貝塚、[2] 同じく中頭郡中城村荻堂貝塚、[3] 同じく具志川村天願貝塚、[4] 同じく美里村伊波貝塚、[5] 等で、其他若干の遺物發見は知られて居つたにしろ、琉球諸島と南九州との中間連鎖をなす所の所謂薩南諸島―即ち大島郡―に於ては、前述した山崎氏が最近報告せられた以外、顯著な報道もなく、これ等琉球諸貝塚は、地理的に連鎖をなす薩南諸島を飛び越へて、直に遠く南九州薩摩國出水郡出水貝塚、[6] 及同國日置郡市來町川上貝塚等が知られて居り、これ等の中間關係等は久しく明にされず暗黒に近い狀態にあつた。而して兩者を比較研究せんとするには直ちに數百浬を距れた琉球諸貝塚の遺物を以て薩摩國のそれに求めなければ他に方法がなかつたが、近年鹿兒島縣大島郡喜界ヶ島貝塚、及同縣甑島手打貝塚並に徳之島

層位が表土近くと云ふきりで確定的に編年論に及ぶ事が出來ない。そして私は未だA類上層或はB類とこのC類土器との間に様式的に深い溝があるを思はざるを得ない。又それだけにこの二者の關聯の究明は本遺蹟のみならず茅山式土器性質闡明の上にも重大な役割をするものと信ずる。そして本遺蹟にあつては最上層と思はれるこの土器は私も諸磯式土器との關聯を多分に有して居ると思ふ。武藏バンシン臺貝塚には諸磯式土器を含有する貝層以下に蓮田式及び茅山式を認めるとの事である。（註五）下總に於ける蓮田式土器の出土遺蹟として小金町幸田貝塚が揭げられて居る。又これ以外に於ける纖維土器と本遺蹟との關係、或ひは纖維を含まない土器とのそれには本報告にあつては論及せず記載をひかへる事とする。

註一　本誌第二卷第三號山内氏「纖維土器に就て（追加第三）」四八頁。

同二　本誌第一卷第三號山內氏「纖維土器に就て（追加一）」八五頁。

同三　本誌第二卷第三號大場氏「纖維土器出土の遺蹟に就て」二〇頁。

同四　本誌第一卷第二號山內氏「關東北に於ける纖維土器」三〇頁。

同五　山内氏前揭書（註一）五〇頁。

（昭和七・六・一〇）

層にあるものと見る事が出來さうである。而してこの中Ａ類は所謂茅山式土器であり、Ｃ類は蓮田式土器と同性質のものとすることが出來やう。Ｂ類は確立に困難であるがＡ類の一變形と見られさうである。

七、本遺蹟から鐵滓の伴出を見たが、比較的古式土器と考察されて居る土器類と共存せるは最も注目すべき事實である。

私は本遺蹟の文化的位置決定の一方法として右の中最も資料の豐富と思はれる土器に於いて、他遺蹟との比較觀察を試みやうと思ふ。そしてそれが本遺蹟編年の相對的位置の決定に於いても資する何ものかあると信ずる。

山內氏は關東地方の纖維土器を樣式的に三戶式・子母口式・茅山式・蓮田式の順序あるものとの假説を樹てられた。(註一) 又その層位的事實に於いて同氏の槻木町貝塚の報告がある。即ちそれによると條痕のある土器が表土及び貝層より發見され貝層以下黑土層より薄手の纖維の混入のない土器が發見される由であるが、猶少數例なるを以てその決論を避けられた。(註二) 兎に角、私としては未だ茅山式土器以前に來る土器が如何なる形式のものであるか決定的の報告に接して居ない。それ等はともあれ本遺蹟の例を見ると最下層に所謂茅山式土器を認めそれ以前の形式に屬するものは層位的に發見する事が出來なかつた。のみならず本遺蹟Ａ類下層土器が比較的整形がよく行はれて居り茅山貝塚・吉井貝塚・下總に於ける古谷貝塚に一般に見られたるそれ等土器と同樣、粗雜なる面を有して居るものと存するが極少數である。それで本貝塚に於いてはこのＡ類下層の土器が先づ最初に製せられたものとは思はれる。そしてこれは前述茅山式土器を出す諸遺蹟の最下層土器究明の後は暗示される何者かある筈である。

又大場氏は茅山・吉井の二貝塚に就いて遺物に層位的差異が無く、又種々の事情より該式土器使用の年代は左程長期間のものでないと合せ述べられて居る。(註三) 既に述べた如く該遺蹟にあつてはＡ類下層より上層に至る發達過程に就いて層位的事實をも確め得た。そしてこれがＢ類なる一樣式土器を伴つて居る事も報告して置いた。そして茅山貝塚にもこの上層土器に類似なものがあるらしい。今後それ等の茅山式遺蹟の層位的事實の發表を切望して止ない。

猶、山內氏は纖維土器に關する最初の論文中で既に「內面に條痕ある型式は、條痕のない型式よりも古さうである。」と結ばれて居る。(註四) しかしこの條痕のない土器が何を限定されて居るか私には想像が困難である。その後、前述の如く茅山式土器の順位に蓮田式を揭げられて居る。本遺蹟にあつては稍それ等が裏書されたやうだが、何分その蓮田式の一種と思はれるＣ類土器の

維土器に就て(追加第三)」赤星氏本誌第二卷第六號「茅山貝塚と共の土器」等にそれに就いての記載があるが、赤星氏は以上の三人で大體お決めになつたと云はれて居た。

同三　考古學雜誌第二十卷第十一號赤星氏「相模白須遺蹟」七八〇頁。

同四　赤星氏前揭書(註二)。猶私は本遺蹟出土の土器文様の分類に於いても比較研究に容易な様に出來るだけ赤星氏と同様の名稱を以て分類した。

同五　赤星氏前揭書(註二)二八頁、同氏はこれに就いて卓見を述べられて居る。

同六　本誌第一卷第二號山内氏「關東北に於ける纖維土器」附圖版中及び赤星氏前揭書(註二)附圖中。

同七　山内氏前揭書(註二)四六頁。

同八　大場氏は過去長年考古學雜誌に諸磯式土器に關する記載なされ居るがその中に武藏國箕輪貝塚がある。山内氏はこれを蓮田式に分類されて居るし、私も曾つてこの貝塚で所謂纖維混入ある土器片を採集した。又私の諸磯遺蹟で採集した土器片にもその纖維の混入は全然認められない。

同九　この纖滓の分析に親友横濱高工電氣工科宮崎君の勞を煩はした。こゝに感謝の意を表して置きます。

本遺跡位置の決定に就いて

私は以上三章に亙り本遺蹟に於ける大體の概說的報告をなした。今それ等を要約すると次の如くである。

一　地理的位置に於いて特種性を示す。

二　本遺蹟の周圍には數個の繩文式遺蹟が存するがそれ等は相互に何の影響をも及ぼして居ない。

三　遺蹟は宏大なるものと云へないが、その層位に於ける遺物殊に各種土器の包含狀態は本遺蹟をして最も價値あらしむるものである。

四　本貝塚に於ける貝量中ハイ貝が相當の位置を占めて居るのは我々に何者かを暗示して居る。そしてこは該樣式遺蹟に共通の様である。

五、石器の伴出は僅少である。そしてそれ等が本遺蹟中の何種の土器に附隨するものか明言は出來ぬが何れもA點貝層中に存したので、多分A類(茅山式)に屬するものと思はれる。

六　私は本遺蹟出土土器をABCの三類に分類し猶A類を下層上層に制定した。その層位的位置は先づ本遺蹟最下層にA類下層土器存しこれは漸進的發達を遂げてA類上層土器となり貝層の最上部に於いて止る。これに附隨してB類土器存し下層よりも上層にその率が多いやうである。この外に層位的確定は望まれないが、B區表土近くにC類土器が存するが大體本遺蹟にあつてはこれが最上

氏は蓮田式を掲げて居る。(註七)そして大場氏の諸磯式土器の分類中にもこれ等は入るらしい。(註八)そして見ると本C類は蓮田式に類似があり、大場氏の諸磯式土器の内に入るべきものであるらしい。以上は本C類中に縄文があり又前述した通り諸磯式土器との類似文様があるところから今のところ私としてもそれ等分類の中に包括されるに矛盾も持たない。そして見ると本飛の臺貝塚にあつては同遺蹟に於いてA類或はB類をこゝに附屬せしめて所謂茅山式土器と、C類即ち蓮田式或ひは廣義の諸磯式土器が出土する事となる。そしてそれ等二者の間に未だ形式的に空隙はあるが今迄に得た資料によつては後者は前者より層位的に上位にあるといふことが出來るやうである。

其他遺物

本遺蹟から出土する鳥獣の遺骸が甚少なる事を第二章で述べて置いたが、これと伴つて本貝塚からは骨角器は全く發見されなかつた。とは發掘の不完全にもよるかもしれないが、その鳥獸遺骸の少ない事がそれ等の事實を暗示してゐるのではなからうか。又本遺蹟の表面に小形の土錘を數個發見したが發掘に於いては一例も見なかつたので本遺蹟の果して所産であるかは疑はしいのである。殊に彌生式遺物分布の濃厚な本地域にあつては余程注意しなければならないのでこゝではそれ等の遺物が表土近くに存する事だけを記載するに留めやう。

次に注意すべきは、鐵滓の伴出である。(註九)これは僅か一塊の伴出であるが、A發掘地區の貝層中に存した。その狀態はその鐵滓が貝殼を凝固して居るもので拳大の塊である。猶これと同時に粘土塊がやはり貝殼を凝固して居る同形のものが出土したがこれには鐵分は含まれて居ないらしい。これ等の事實は大いに注意を拂つて觀察さるべき問題である。そして貝層中に包含されて居たこと或ひは貝殼片を凝固して居る等は出土品の確實性を語るものである。しかしこれが果して該遺蹟構成の民族によつて、使用されたものであるかは、文化的に重大なる問題であつてこの單なる一例を以てそれ等の事實を總論的に論記してしまふわけにはゆかない。殊に比較的幼稚な石器の存在或ひは茅山式土器を相當古式のものとする人々のある今日、それは確に矛盾的の存在と云はなければならぬ。しかしながら私は本調査の當事者としてこゝにそれ等の事實を報告し唯その責を全うして置く。そして今後該遺蹟は勿論他の該樣式遺蹟に於ける同樣の事實を待つてそれ等の日に於いて始めて斯論を左右すべきものと信ずる。

註一　本誌第二卷第二號大場氏「纎維土器出土の遺蹟に就いて」一八頁。

同二　茅山式なる名稱は大場氏前掲書、山内氏本誌第二卷第三號「纎

無いがＡ類上層よりは粗厚である。文様は相當の變化を存し所得土器片の悉くに見られる。(第十圖參照)

本類に始めて繩文を見るが本調査に於いて私の見たのは此の三例だけである。卽ち(一)(二)(三)がそれでその中(二)は非常に荒いものである。施紋法に就いて云へば竹管文が一例あるが所謂諸礒

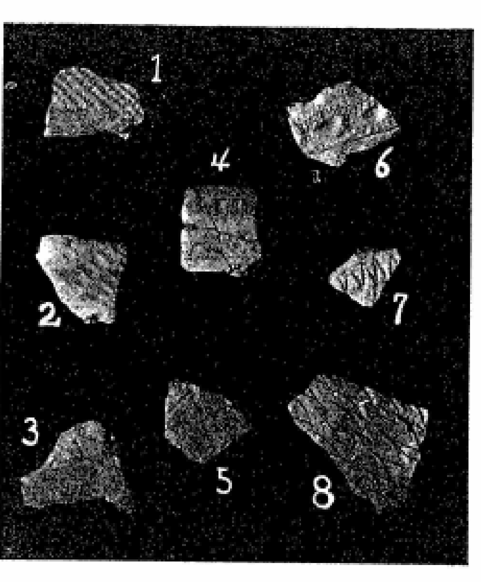


Fig. 10　土器片　C類層

式的の色彩が濃い(同圖四)。又葉脈文が一例あるが箆描きであつて葉脈實體の壓痕文ではない(同圖五)。尙本類中の一異彩として貝殼押型文がある。同圖(六)はフネ貝科の放射脈ある貝殼の邊端を土器面に垂直に捺して行つた點列文上に多分同じ貝殼によつたのであらうと思はれるが、その殼頂の部分を捺したのである。(七)は同じく放射脈ある貝殼の邊端を交叉的に捺して施紋したのである。私は曾つてこれと全く同樣の文樣ある土器片を三浦半島諸礒遺蹟で採集して赤星氏に報告して置いた事があつた。さうして見ると諸礒式土器にもこの種の文樣は共通であるらしい。(八)は放射脈のない貝殼例へば蛤の樣な貝殼の邊端でやはり垂直に捺して行き最後に放射脈のある貝類の殼頂でその上を流水文的に旋文した手法が窺はれるが、何れの土器片も面白い施紋法で興味がある。

その他、土器形態及び製法等に就いても觀察したいが、あまり資料が稀少である上に何づれも零碎な殘片に過ぎないので徒らな憶測を避ける事とする。唯同圖(六)の土器片は口邊部であつてその口緣に木棒の押捺のある事はＡ類・Ｂ類の諸樣式と共通する點である。

本類は以上の事實から見ると本類土器がＡ類・Ｂ類と完全に分立する諸點を見出し確かにそれ等土器との關聯に於いて何等かの空隙を認めざるを得ない。殊にあれまでに發達したＡ類上層との比較に於いては變差と云ふより總體的に云へば寧ろ本類は反對に墮落形を呈して居ると見られる。しかし又一方に於いては何等かの關聯があると見られる點も尠く無い。例へば文樣の分子に於いて土器上緣部の押捺に於いて、殊に倶に所謂纖維を含有して居る事に於いては明に土器製作に於ける文化の一流動である筈だ。「內面に條痕のない、纖維を含む土器」として山內

文的なものである。五は平行直線の沈文の各線上に半裁竹管を押したものであるが此の破片は文様のみならず各點に於いて非常に發達した様式を具備して居るので今度この種のものが多數出土するやうであつたら當然一分類として分立せらるべきものと思つて居る。他に幼稚な細隆線の一例がある。

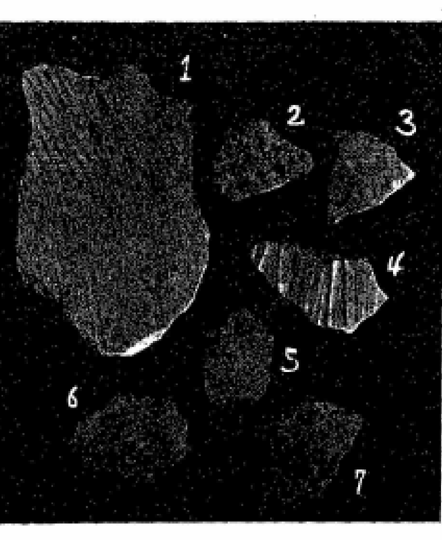


Fig. 9　出土土器片

B類層

土器形態はやはり鉢型のものが主なやうである。底部は破片の出土なき爲め不明である。口邊部はA類に見られる様な山型の弱い隆起が認められる。(第九圖二・三)又口緣部の押捺文も存する。土器の製法を觀察するには資料が貧弱である。

以上本類土器を概觀するに條痕こそ有しないがA類土器との共通點を多く發見する。それで私は本類はA類土の一異種とする。そしてA類との層位關係は何分土器片の出土數が少くて確定することは出來ないが、今迄の經驗によるとそれは並行的に存して居たものとするより仕方がない。そしてA類下層よりも上層に接觸率が多い様である。本類は他の遺跡にも必ず存するものと信ずるが誰も摘出して居ないので比較研究は不可能である。

C類　本類は發掘の結果得られたものでは無く私が本遺跡調査中B區發掘附近で採集したものである。B區發掘の結果は殘念ながらこれ等土器の層位的確定の何等の手懸りも得ることが出來なかつた。しかし本類土器片が表土近く散在する事實は層位的にもA類・B類の土器より上層に存在する事を意味して居るのではなからうか。私は本調査に於いて八片の採集をみた。しかしこれ等僅少の土器片は本遺跡の性質或ひは他様式遺跡との關聯を究明するにその持つ役目は非常に重大である。これ等は獨り本遺跡のみに止まらず、該様式遺蹟或ひは關東に於ける土器編年の上にもそう云はるゝものと信ずる。

本類土器破片には多少の差こそ何れあれも所謂纖維を含んで居り、條痕は全く見られないが、B類土器とは様式的に完全に一分類として別に制定されるものと信ずる。燒成は比較的不完全なものが大部であつて褐色を呈する。しかし器面が相當平滑にされて居るものがある。器厚は七粍ー一一粍でB類と大差が

し、非常に自由な描法を認める。（第八圖十三・十四）

土器の形態は下層土器同樣深鉢型のものが大部分を占めて居るが、圓底を有するものがあるところから見れば淺鉢形のものも幾何かある樣である。そして本類土器には尖底も平底も未だ見る事が出來ない。土器の口邊にはやはり山型の隆起を認めるが非常に下層のものよりは小規模である。第八圖一・二・七）乳狀の突起は無い樣である。又本層土器の口緣部にも木竹による押捺が見られる。口徑の大きさ形狀を知る材料を持たぬが、下層のものより幾らか小形に變じたものと察せられる。茅山貝塚に於いて多數見られる[註五]土器腹部に小孔を有するものが本類として僅に一個發見された。（第八圖一二）又隆起帶をするものも一個だけ存する。

本層土器の製法に就ては下層のそれと大した變化を土器片そのものよりは認めることが出來ないが、本類土器片が下層のそれと比べて器厚或ひは整形の點に於いて、何分の進化を示して居るのであるから、その製法に於いても何等かの進歩があつたものと解さないわけにはゆかない。本類土器は未だ確定的に分類せられて居ないので他の遺蹟との比較は困難であるが、諸氏の報告を參照すれば類似なものは確に認めることが出來る。即ち比較的粗雜ではあるが茅山貝塚からは出土するらしい。[註六]

要するに本A類土器は本遺蹟出土の土器の主體を示し、遺蹟の最下層位より發生し貝層上部で終つて居る。本報告にあつてはこれを層位的に下層上層に別けたが、こは土器の發達過程を强調せん爲めであつてそれは何れも一系統をなす土器である。今後この先行的土器の樣式と共に、この後に來る土器に於いて最も興味がそゝがれるものと云ふべきである。

B類　本類はAB兩發掘地區共に認められ貝層中に主として遺存しそれ以外には稀である。所得土器片は四〇個存し出土土器量の八・四％を示す。何分にも未だ發見數が少いからその發達狀態も明言出來ぬのでこゝではこれ等を總括的に述べて置く。

本類の特長は土器の內外面ともに條痕を有さない事である。纖維は多少の差はあつても悉く含有して居る。燒成は非常に完全なものと不完全なものとがある。從つて土器には褐色を呈するものと黑色を呈するものがあり、燒成の完全なものでは黝黑色を呈する。器厚は七粍—一一粍を範圍としその表面は粗雜のものが多い。本土器が條痕を有さない事を先に述べたが、土器面の整形は放射脈を有さない貝殼例へば蛤の如き貝でなされたとも見られるし、他の器物によつたかも知れないが更に角整形は行はれてゐる。

文樣は非常に少く第九圖に示したる二例と他の一例の三例である。卽ち施紋法は（四）は木片の先による押捺文と云ふより刺突

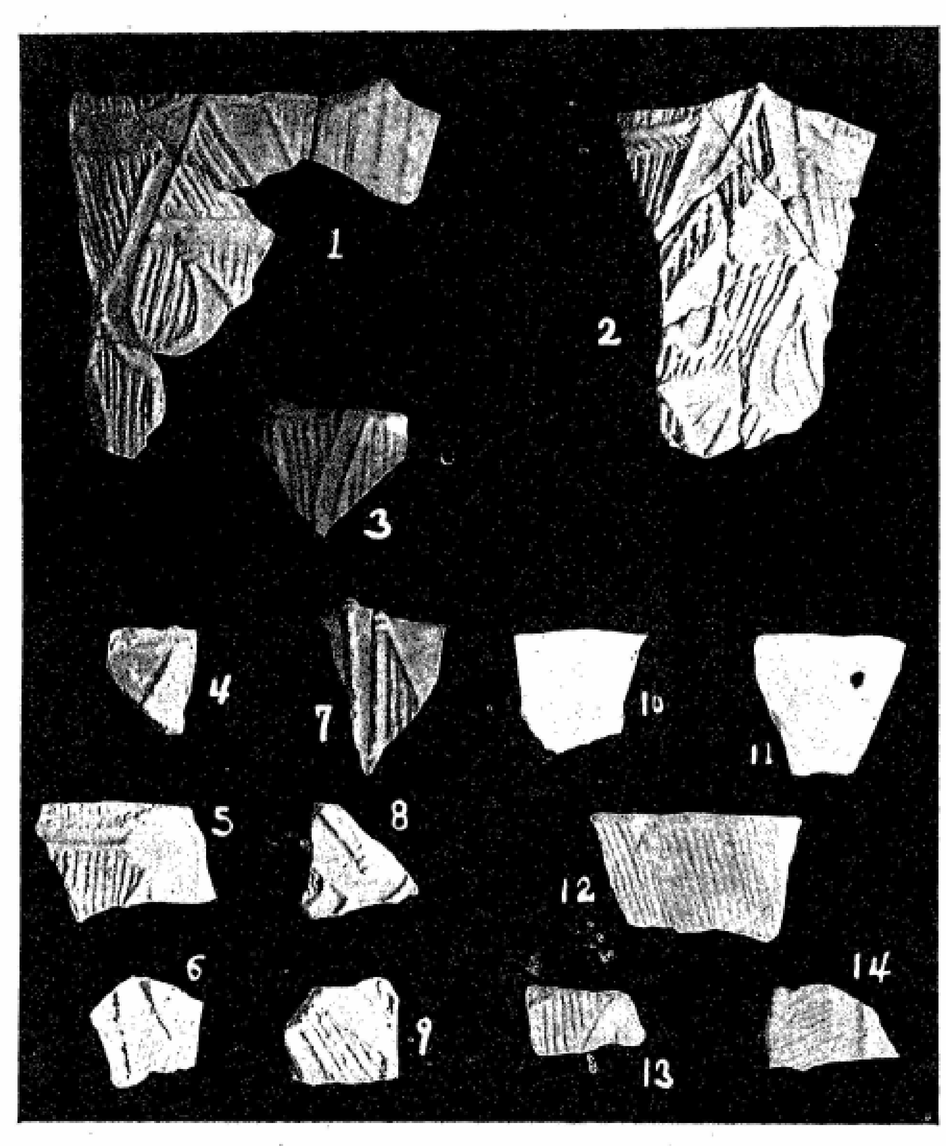


Fig. 8　出土土器片　A類上層

本類土器片中に文様のあるものは一六例で土器片中一四・〇%を示し、下層の三・八%に比較すれば非常な増加である。その中細隆線文が一四例を占め非常に極盛を示して居る。その總體的に見たる文様は著しく變化に富むものであつて、それが何に由來されて居るかは想像に困難である。(第八圖一—九)他の二例は沈線文であつて下層に見られた三角形を畫くと云ふ規矩を脱

又口邊は第五圖の如く通常四個の山型の隆起をなすものと、第六圖一の如く乳頭狀の突起をなすものがある。それ等の上縁部は多く木竹の押捺がなされる。口徑は二〇糎内外のものが主で極端に小さいものも或ひは大きなものも無い。その形は楕圓型に歪む場合が多い樣である。他の遺蹟に多く見られる土器腹部の隆帶が僅か三個しかないのは土器整形の變異を示すやうである。

本樣式土器の特種である尖底が本類の中に含まれて三個存する。(第七圖一・二・三) 又鉢型土器に伴ふと見られる平底のものも存する。(第九圖一・二・三) これを見ると尖底土器はある特種な用途の爲に故意に製せられたと思はれる。そしてその尖底はいづれも貝層の下部から出土したのであるが第七圖中(一)は殘灰を伴つて出土し、殊にその面のもろくなつて居る所からそれ等は用火關係の什器ではなかつたらうか。

次にその製法を觀察するに手捏ねながらも一段一段と順次に土を重ねてゆき最後にそれを平面的な土器面にする手工が窺はれる輪積法の祖形的なものとも見られる。又前に土器の口縁部に押捺文のある事を述べたがよくその口縁部を見るとその部分だけ土器の胴部完成後に紐狀土をめぐらして載せたやうである。これはこの面が土器製作臺に附着して居た事を示すので、この場合土器は底部を上にして造られたものと推察する。そしてこれは土器の底部が尖底とは限らないが、上部土器體を支へるに不充分な底である事を暗示する。そしてそれ等の土器片中には尖底に附屬するものがあるかも知れない。

以上本類に就いて大體の卑見を述べたが、本類は確に茅山貝塚・吉井貝塚等を始めとして武藏に於ける茅山式と稱せられる遺蹟出土土器と同一系統のものであるが、私自身がそれ等の遺蹟で採集した土器に本類を照して見ると本遺蹟のものより粗雜なものが多い。本遺蹟のものにも粗雜なものもあるがその土器面が比較的平面的なのは本遺蹟の最下層にあると思はれる、本類として一つの異色であるやうに思へる。

上層型　本類は下層より進化した一群と見られる。そして下層との間に時間的空隙は無いやうである。從つて下層の土器と混在する場合もあるが、主に下層の上位に存し、貝層の上部にその強い特色が見られる。所謂纖維は猶含まれて居る。燒成は非常に完全に近くなり土器片は褐色を呈するものもあるが大部分黑色を呈する。器厚は下層のものより遙かに薄くなりその厚さは五粍―八粍の範圍を出ない。殊に土器面は凹凸が尠くないと云つてもよい樣である。條痕は本類に到つては内外面ともに盛んに抹消が行はれたと想へるし若し殘存して居てもその條痕が整然として文樣の役目をなしたのではないかと見られるのである。(第八圖一二參照)

皆本類中に包括した。又本類は前にも述べた如くA地區の發掘の結果その包含土器の樣式が、下層より上層に到る、漸進的なる事實を認むる事が出來た。そしてこれは該樣式土器の編年に於いても活用さるべきものと信ずる。よつて本類の叙述法或ひは分類法としてそれ等の事實を强調せんが爲めに本報告にあつては本類を更に下層、上層の二つに分けて見た。この分類は土器それ自身が漸進的なる發達形式をとつて居る爲め非常に困難であるが、それ等の分類に於いて過渡期なるものは多分性によつて類別した。しかし最下層のものと最上層のものを比較する時は、容易にその變化を認めることが出來るであらう。

下層型　貝層下にある有機質土層より貝層下部にその色が濃い第五圖に示したるものは完全に貝層下有機質土層中に存した。これ等の土器片は何れも山内氏の云ふ纖維を多量に含むやうである。燒成は不完全なるもの多く主に褐色を呈してゐる。器厚は六粍―一四粍の厚いもので面は凹凸のあるものも存するが比較的平坦であるのは注意を要する。條痕は器の內外面、或はその何れかの半面に存するものとある。條痕そのものは施文的意志のもとになされたのでないことは云ふ迄もない。

文樣はあまり施されなかつたと思ふ。それは本樣式土器の特色として施文は土器の上部口邊近くになされるのであるが、今本類に屬する土器の口邊部破片を見ると一二個の中僅に第五圖土器の一例のみであつて、他のものには見られないまして腹部破片に於いては本類土器中一二例であつて、土器全部の三・八%に過ぎない。文樣は細隆線文六例（第六圖四）、木竹による押捺文三例（第五圖、第六圖二・三）沈線文二例（第六圖六・七）、ハイ貝の頂部を押したと思はれる貝殼押型文一例（第六圖五）である。以上の文樣は茅山貝塚の土器文樣と一致する所が多い。（註四）

Fig. 7　A區出土　土器底部

土器の形態は第五圖の土器より大體察せられると思ふが、他の土器片によつても單調な深鉢型のものが大部分のやうである。そしてその口邊部は最上端に於いて外側に開くものもある。

遺　物

石　器

該様式遺蹟出土の石器に就いては型態的に注目せらるべきであるが、これ等の層位的確定を具備して發見されたものが非常

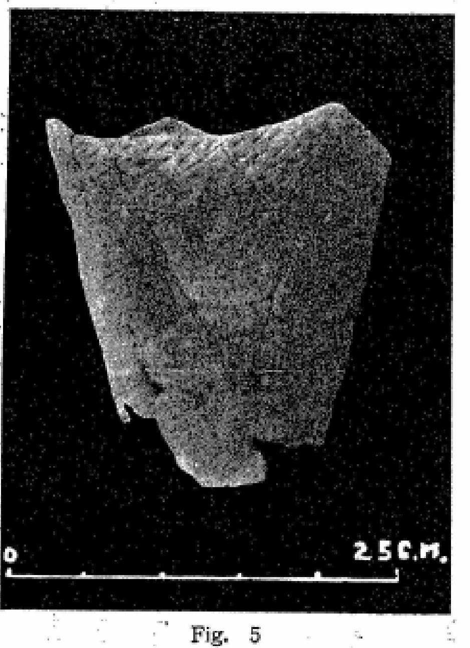


Fig. 5

に尠い。これはその遺物包含量が他の様式遺蹟より遙かに僅少な事實によるのであらうか、本遺蹟に於ても僅かに燧石様のもの數個と硅岩或は瑪瑙石等の小破片が一二個發見されたが何れも人工も加へられて居ない様であつた。

土　器

本遺蹟出土の土器を層位的價値を具備せしめて形式的に分類すると、大略左の三種類に制定される。

A類　本類は所謂「茅山式」(註二)と稱せられるもので出土土器の主體をなして居る。これに屬する土器片四二四個（中一個は稍完形なれど底部を缺く第七圖參照）存し出土土器量の約八九・八％を示す。

Fig. 6 該遺跡出土　土器片
（A 類 下 層）

本類土器の特色である土器面に於ける條痕は赤星氏もフネ貝科の貝類（アカ貝類）によるもので、その大部分は土器整形の結果による自然的所産であるとされて居るが、(註三)本類中その條痕が器の內外面に存するものと、內面外面のどちらか一方に存するものとある。それ等は系統的には大差ないものとして何れも

本貝塚構成の生物遺骸は殆ど全部が貝類であり、脊椎動物の遺骸としては鳥類の骨骼が二三片發見されたに過ぎなかつた。

貝類は二枚貝巻貝總べて次の十八種類で比較的數量の多いものより列記する。

かき Ostrea (Crassostrea) lapérousei Thunberg. はいがひ Anadara granosa Linné. きさご Umbonium costatum Kiener. しほふき Mactra vrneriformis Reeve. うみにな Batillaria multiformis Lischke. まてがひ Solen gordonis Yokoyama. おきしじみ Cyclina sinensis Gmelin. はまぐり Meretrix meretrix Linné. かゞみがひ Dosinia japonica Reeve. せるぼう Anadara subcrenata Lischke. あかにし Rapana thomasiana Grosse. いてふれらとり Tellina (Merisca) diaphana Deshayes. あかがひ Anadara inflata Reeve. あさり Paphia philippinarum Adams & Reeve. つめたがひ Polinices (Neverita) didyma Bolten. はりさゞえ Astraea (Bolma) modesta Reeve. れいし Thais (Mancinella) bronni Duuker. やまとしゞみ Corbicula japonica Prime.

（貝類の鑑別は日本動物圖鑑及び東京科學博物館職員の方々に據る）

これ等の種類を見ると本貝塚の貝類は殆んど鹹水産を主として僅かに最後のヤマトシヾミのみが淡水産であつて、しかも調査中、目にとまつたものは數個に過ぎなかつた。又右の種類中ハイガヒが相當に多く存する事實は注意を要する。即ち私は現在東京灣にはハイガヒを見ないと云ふ事を屢々聞いて居るのであるがその是非はともあれ、この種の現在の主なる分布區域が瀬戸内海九州及び臺灣等南方の海であることは事實であらう。[註一]

該樣式遺蹟である下總古谷貝塚或は武藏子母口貝塚に於いてもハイガヒの量が相當の位置を示めてゐる事實を見た。又三浦半島の茅山貝塚からも多く出土するらしい。[註二] ひるがへつて他の樣式遺蹟の狀態を見ると、本遺蹟所在の溪谷と同溪谷にある前貝塚貝塚及び貝殼掘込貝塚、或ひは藤原・姥山・古作の諸縄文式遺蹟には存する事は存しても非常に少量なる事を調査によつて知つた。又彌生式遺蹟にも存するが、やはり少量であるらしい。[註三]

これに對して私はこの特種なる相異はその遺蹟構成の住民の習性上から來たものとするよりも、氣候或ひは海流等の地理的變遷より來るものとして當時の地理的狀態の推示或ひは遺蹟の編年的位置の決定に資する事實とする方が妥當性が强い樣に思はれる。兎に角該方面の返究者によつてそれ等の具體的事實が決定されんことを切望する次第である。

註一　日本動物圖鑑第一一七二頁。

同二　本誌第二巻第六號赤星氏茅山貝塚と其の土器二八頁。

同三　下總東葛飾郡國分村須和田彌生式遺跡及び近日發見された九段牛淵公園内貝塚にもハイガヒが少量存する事を知つた。

に臨む斜面迄は一五米の距離がある。發掘は東西に長さ三〇平方米の矩形になされた。本地點に於いては表土下凡四〇糎にして貝層に達するが或る箇所にては一米以上のもの下方に於て始めて貝層を見た。これ等貝層上の有機質土中には遺物は僅少であつた。貝層は非常に厚薄の變化が甚しく恰も波の打てるが如くに堆積されて居る。その最も厚い箇所では五〇糎を算へる。又貝殼を全く見ない箇所も存した。この貝層下には再び一米から五〇糎許りの有機質土が介在し壚坶層に達する。又貝層が直ちに壚坶層に接する箇所もあつた。壚坶層の面はかならずしも平坦ではない。（第三圖參照）

遺物は貝層及び貝層下の有機質土中に認められ壚坶層中には全然存しない。就中土器は本A地區に於いては正しく一系統の編年的流動を見、貝層下有機質土層より貝層上方に到るまでその發達過程を觀察する事が出來る。又貝層下層に簡單なる爐の趾らしく思はるゝものを存し燼灰等も亦主にこの層より發見された。貝層下有機質土は稍褐色を帶びてゐる。

B地區　本發掘地域は遺蹟の西北部で、A地區の西方約廿間の地點であり、南方の斜面まで約二〇米の距離がある。こゝでは方四米許を發掘した。

本地區はA地區に比較すると極めて單調な狀態にあつた。卽ち、耕土平均二〇糎にして貝層に達し、貝層は厚さ二〇糎內外を保ちつゝ堆積し、その下方は約五〇糎厚の有機質土を存して壚坶層に達して居り、壚坶層の面は略平坦である。（第四圖參照）この地區は貝塚の末端近くらしくその主要部は更に南方に偏してゐるらしい。本地點に於いて注意せねばならぬのはA地區出土の土器片と同系統のものを包含する外、その表土近くにあつて異つた樣式を持つ一種の土器片が發見される。この種土器片の出土狀態を確定せん爲めに特に留意したが該地區にあつては未だ適確にこれを觀察することが出來なかつたのを遺憾とする。

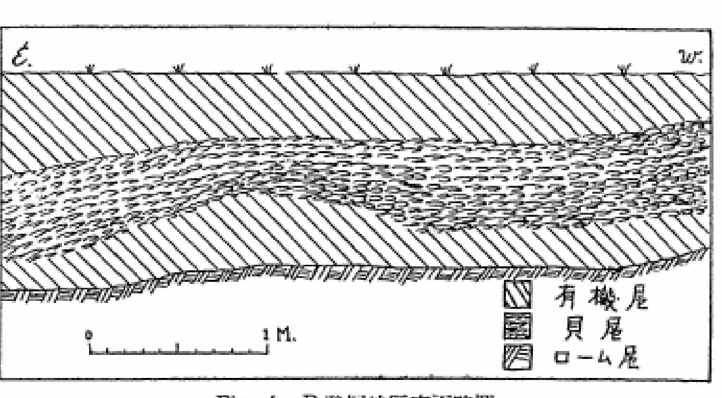


Fig. 4.　B發掘地區南面略圖

貝塚を構成せる貝類その他

存するが、その末端の一部は水田に面せる斜面にも到つて居るものと解せられる。猶調査に當つて注意せねばならぬのは、下總東南の海岸に面せる卽ち該地域を含む一帯は廣範なる彌生式遺蹟或ひは遺物の分布地であり、現に本貝塚の東方二町許の所

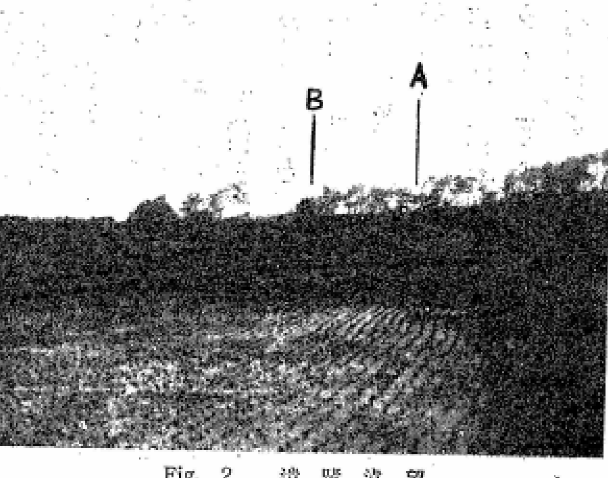


Fig. 2. 遺蹟遠望

には狐塚なる一圓形古墳存し、（第一圖參照）未だその性質をも究明して居ないので本遺蹟地にそれ等遺蹟の遺物が混入して居るかも量知れぬので本遺蹟採集の遺物と雖もその層位の確定せざる限り一義的の資料として取扱ふことが出來ないのであつて、これ私が本調査に當りその層位的確定に注意した所以である。

層位

該様式遺蹟の層位の確定は種々なる方面から見て、注目せられて居つたのであるが、調査に際しては少しでもその決定的事實をこゝに報告出來たことは私の最も喜びとする所である。

Fig. 3. A發掘地區南面略圖

遺蹟

本遺蹟はその地域の中央部が耕作の爲め相當攪亂せられて居る事を聞いたのでこの中央部を境として東西の二箇所を選んで發掘調査を行つた。記載の便宜上東方の發掘地區をA、西方のそれをBと名づける。

A地區　この地域は遺蹟の東北部にしてその位置より水田

貝塚の數個點在するを認め、更にその西方同町大字寺內には彌生式遺蹟の存せるを見る。(註三)これ等多數の縄文式の諸遺蹟或は彌生式遺蹟と本遺蹟が文化的に如何なる關聯を有するかは本遺蹟一個の問題のみならず、該樣式遺蹟の編年的或ひは文化的位置を決定するに重要なる觀察點であるが、こゝには單にそれ等遺蹟の關聯は層位的には未だ如何なる形式に於いても認める事の出來ない事實を寸記するに止めやう。(註四)

註一　本貝塚と次の藤原貝塚は未だ東大人類學教室編纂の地名表に報告されて居ないからこの機會をかりて報告して置く。下總國東葛飾郡船橋町五日市貝殼掘込（貝塚）土器、新石斧、石皿、凹石、出土、

同二　下總國東葛飾法典村藤原（貝塚）土器、人骨頭部破片出土、

同三　大山公爵著「石器時代遺蹟概說」五八頁。葛飾郡大字寺內發見の竪穴を圖示されて居られるがこの樣式の竪穴は、下總南部に於ける彌生式竪穴の一特色である。

同四　本誌第一卷第三號に山內氏が姥山貝塚から纖維土器の破片一個の出土を報告せられて居るが本樣式に屬するものか、又その出土層位も解らないのでこゝでは補用しないこととする。

Fig. 1.　遺蹟附近の要目
▲飛ノ臺貝塚　▲縄紋式貝塚△未調查貝塚

遺　蹟

總　說

本遺蹟構成の主體をなすものは貝塚とこれに層位的に關聯を有する遺物の包含層である。本研究はその主觀的遂究として表面に於ける平面的觀察及び發掘による層位的調查を主としてなされたものである。

本貝塚は現在水田に南面せる臺地上に存し、その完全なる貝層は表土下二〇糎或は二二〇糎にて達する。その狀態を概觀するに形狀南北に狹く東西に延びたる楕圓形であつて、卽ち前述水田とは並行に存するのである。面積約三百坪許と測定され既に述べたる如くその主部は平坦なる臺地上に

下總飛ノ臺貝塚調査概報

杉原荘介

本遺蹟は千葉縣東葛飾郡葛飾町大字西海神字飛ノ臺に存するによつて飛ノ臺貝塚と名づける。私は本遺蹟出土土器片の特種なるを認めそれ等が山内清男氏等の提稱さるゝ纖維土器の一種類に屬すると考へ、或は又大場磐雄・赤星忠直氏等の假稱せらるゝ茅山式土器と略同性質のものなるを知つたのは昨春の頃であつた。而してその後數回に亘れる調査の結果、本遺蹟性質究明の必要を痛感し、先づ南關東に於ける同様式遺蹟の調査を行ひその文化的關聯の流動を見出すことに努力し、翻つて本遺蹟に對しての客觀的視力を養つた。

本年二月、私は植草氏父子の同情ある援助によつて前後五回に亘る發掘調査を行ひ思ひもよらぬ進展を見る事が出來たので、更にその萬全を期せんが爲めに本調査は今後も續行するつもりでは居るが、こゝに豫定の楷梯を終へたので一先づ調査の結果とその概略を報告する次第である。起草に際して先づ終始調査の便宜をはかつて下さつた遺蹟地の植草氏父子を始めとし、調査の援助或は示教を賜つた赤星・黒田兩學兄等の諸氏に、深甚なる感謝の意を表します。

遺蹟の地理幷環境的觀察

現在東京灣沿岸の主要町船橋町の存在する沖積層の低地が下總臺地に入江狀をなして彎入せんとし、始めて西方に向ひて小枝谷を分岐する。遺蹟はこの小枝谷の北岸卽ち南面せる洪積層の臺地上に存する。

本遺蹟は東方上記船橋町を隔てゝ對岸同町貝殼掘込貝塚[註一]の繩文式遺蹟と相對峙し、北方前貝塚貝塚を始めとし藤原貝塚[註二]・姥山貝塚稍西に偏して古作貝塚の諸繩文式遺蹟を存し、又西方には葛飾町大字印内の地に遺物の出土なき爲め性質不明なれども小

會者大山氏は、討論終結を宣言して、全く本會合を終つた。

本講演に當つては、カーレンフエルス氏の講演は、ウエークマンによつて邦譯せられ、且つ自分（ウエークマン氏を指す）筆記を、カーレンフエルス氏が素讀せられたものが本稿である。

ウエークマン氏署名

圖版說明　ジヤワ出土の石器類

圖版第二第三に揭出した、ジアワ出土の石器類は、カーレンフエルス氏が來朝の際、交換の目的で携行せられ當研究所に於て、日本石器時代遺物と交換した一部である。

圖版第二の方は、本誌別項同氏の講演中にも、屢々述べられて居るホアビニアン石器（4）の外は、同氏の所謂新石器であり、特に石鏃（1—3）に就ては、多くの歡心を持たれて居る。又この石鏃中には大形なものがあり、この圖版第二の3の如きすら、長さ約三糎もあり、同氏の携行品中には、3と同型で長さ六七糎に及ぶものもあり且つは肉厚もあるから、最早や石鏃と呼ぶ可きか、問題を藏するものまである。石質は燧石の樣である。

4のホアビニアン形石器は、砂地にでもあつたものか、表面甚だしく摩損して、打製原形がよく見られない爲、よく說明を聞かないと、人工品である可きか、疑も起す程度である。

圖版第三の方は、同氏の石斧製作過程を示された一部であつて、先づ打製して所望の概形を造り、然る後に磨研するものだとのことで、同氏は色々な製作過程にある形式を持たれ、其一部が本圖であるけれども、これだけでは其過程を完全に圖示し得ないのを遺憾とする。（大　山）

これに對し、カーレンフエルス氏は、

『南洋方面に於ては、土器の發展變化に見る可きものなく、從つて繩紋式IIなるものゝ如きは、單なる局地的意義を存する外、國際的なる價値を認められない。今茲に比較を述ぶるなれば、英國に於ける史前學の研究は、常に局地的に終始して居るに對し、佛國史前學は、國際的なる立場に於て研究せられつゝある。其結果として英國的なる局地研究が、世界史前文化の鮮明に、殆んど齎し得る所がない。今日に於ても、英國史前學が、全く暗黒であるに對し、佛國側が甚だ鮮明なのと對照せらる可きである。

日本史前學界に於ても、恰もハノイに於ける東洋史前學大會にて、各學者の全南洋方面に於ける、研究分課を決定した如く、先づ研究上の大綱を定め、夫々各地各個の史前學者を統一して、其大綱に向つてする各自の研究分課を規定することが出來れば、重要なる諸問題も容易に解決することが出來ると考へる。』

小金井博士は、次の質議をせられた。

『繩紋式土器なるものは、果して日本以外の何地に發生したものであらうか。』

カーレンフエルス氏

『繩紋式土器Iは、所謂繩目土器（Schnurkeramik）であつて、南洋方面では、到る所に發見せらるゝ。而してホアビニアンより新石時代に亘る間を通じて見らるゝ。而して繩紋式土器IIなるものは、南洋方面には全く無く、日本に於て純なる發育を遂げたものである。』

而して、この討論の最後にも、カーレンフエルス氏は又もや小金井博士に再度の感謝を述べられたる後に、司

（大山註）蒙古の Schabarakh 文化とは米國アンドリュース探險隊の發見研究した文化である。

諸君！　私はこゝで諸君に對しまして、講演を試みるものではありません。私は大山氏に請ひまして、此席には諸君の樣な、專門家のみの御參集を願ふたのでありますから、私の考察を先づ開陳しまして、これに對します討論を試み、以て諸君と腹藏なき意見の交換を致したいのであります。

私は本講演は謝辭を以て開始致しましたが、再びこゝに東京に於きます、小金井博士、大山公爵、後藤學士、仙臺や京都の各位に對し、私に對する援助と接伴とを、心から感謝して、謝辭を以て本講演を終りたいと存じます。

最後に、もしも私に私の諸君に對します希望を述べることを許さるゝに於きましては、日本の諸君の、一人たりともより多く、南洋方面へ來遊せられ、而してジアワにあります私の草廬を御尋ね下さることであります。

以上を以て講演を終り、同氏の希望せられた如き、如上の講演に對する檢討に移ろふとしたが、不幸にして同氏の希望に添ひ得べきものがなかつた。只大山氏は、次の樣な意見を提出せられた。『史前學の研究上に於ては、先づ第一に局地的に其文化內容を明かにせねばならない。日本で例出するなれば、私共としては先づ關東地方に於て確乎たる根柢を樹立せねばならない。それが根柢より發して、漸次研究を擴大し、北方（東北及び北海道）に、又南方（畿内及び九州）に研究を及ぼし、全日本研究を總括する。それには土器に基く適確なる編年學的研究に基礎づけられねばならない。もしも局限せられた地域に於て、精確なる研究を遂げざる以前に、大局的なる研究に走るとも、それは單なる假說に陷る危險に當面する』

民族移動の以前の時代に見らるゝと云ふ現象であります。又ホアビニアンが日本に到達する以前に、AとBとが南方に將來せられたものでありましようか。或はホアビニアンと共に、AとBとが日本に到達したものでありましようか。この様な色々の問題を解決すべき第二の責務が、國際的なる立場の上よりした、日本史前學の負ふ可き所なのであります。

私が只今迄に述べてまいりました所を、總括して見ますると、次の様になります。卽ち今日と近き將來とに於きまして、日本史前學として國際的立場に對します、重要なる二つの責務を見るのであります。

I。各種の狀態に於て發見せられます所のホアビニアンに對し、根本的なる學術發掘により、これを解決すること。

a。文化層。

b。形態學。

c。文化所產民族。

II。石鏃分布上の研究。

a。日本內の研究。

b。大陸關係。

此際AとB型（最古形式？）が蒙古の若きShabarakh文化に於ても、發見せらるゝと云ふことを、考慮中に入れなければなりません。それ故AとBとが、北方より日本に入りしものなりやとの疑も辨ふ可きであります。

ても、猶疑い存する所は、最初より混交して居つたのか、或は後世に混交した結果を生じたかにあります。私の着眼致しました所は、尙この事態に止まりません。

印度支那、シアム、ビルマ、ボルネヲ、スマトラ等では、石鏃の發見がなく、僅にジアワ、セレベスとフキリッピンとにA型とB型とを見るのみである所からしますと、石鏃なるものが、北方より移入せられたものと見なければなりません。よし北方に於きまして、三型式が當初より相混在したものであつても、何故にかくABの兩型のみが南方に存在するのでありましようか。或は當時に於きまして、始めにABの兩型のみ存し、C型なるものは新形式のものなのではありますまいか。此消息を日本では、如何様に認識せらる可きでありましようか。

然し日本に於きましては、AとB型とは普遍化して居りますものゝ、C型なるものは、到る所に混出しては居りません。C型の多く發見せらるゝ所は、北部日本でありまして、B型は主として南日本に多くあります。喜田博士は鳥取縣に於て、三千の石鏃を發見せられたに拘はらず、其中にC型を見出して居られないし、京都の赤堀學士の統計的集成によれば、北日本にはB型を見ないのみならず、多くはA型かC型であり、次にAとBにC型が加はり、且つC型たるや、南方に行くに從つて漸次消滅して、其九州に至るに及んでは、最早や全く見ることが出來ないのであります。

さてこれ等のAとBとのみが、早く存在し、而してCが遲れて北方より來つたものではありますまいか。或はAもBも亦北方より來つた形式であるのでしようか。又はさにあらずとしても、他の何處に發生した型式なのでありましようか。

こゝで回想を煩したいのは、私が先きに述べました如く、このAとBとは南洋方面に於きまして、メラネシア

なる表面採集かの樣に思はれます。菊名の如き大貝塚に於きましては、僅に十四日間の發掘では、其全貌を知ることは、無理ではありますけれども、そこには必ずや住居跡も、墳墓も存在し、これが出露を見なければならないのであります。而して私が菊名の發掘により、生じた所の疑問は次の樣であります。

1. 何所より本文化が來つたものであるか。
2. 如何なる民族によつて、この文化が形成せられたか。
3. 遺物學上、如何なる形態形式を示すか。

前述してきた如く、南方に於きましては、ホワビニアン文化はメラチシア民族にのみ相關々係があります。今日のアイヌなるものは、或はメラチシア系統の混交が存するのではありますまいか。私はこれに就きまして、今より約五十年前、アイヌが歐洲民族中に編入せられ、他にヲーストラリヤ系統（Australoiden）も亦、歐洲民族との間に近緣關係を稱へられたことがあるのを、想起するものであります。

此の如きメラチシア民族混交が、果して實際上、存在したのでありましやうか。この答解が、これを肯定するも、はた亦否定するのも、懸つて以て、日本史前學者の雙肩にあるのであります。

さて私は、こゝに再び石鏃問題に立ち歸ります。私の今回日本旅行に際しまして、日本には、圖示(C. Fig. 3)して居る樣な、A.B.C型なる三種の國際的普遍化せる形式の石鏃が、相混出することを體驗したのであります。さてそれなら、此三形式は常に混交出土するのでありましようか。素人は恐らく「然り」と答へ、それが同樣貝塚より出土すると云ふでありましようが、それは當を得たものではありません。諸君に考慮を煩したいのは、ジャワの洞窟に於ては、三層、三文化、三民族を發見して居ることであります。而して、よしそれが混出するとし

a。典形的なるホアビニアン形握り槌。(O. Fig. 6)
b。所謂打製短形斧。(hache courte = Kurzaexte)
c。所謂、原新石形石斧にして、單に刄部のみを、僅に磨研せられたるもの。
d。前期新石器時代式（Fruehneolithikum）なる新石器。
e。有孔骨針。
f。骨　錐。
g。無柄石鏃と、これが尾部の凸出した形式のもの。

以上の結果からして見ますと、前述した印度支那の Da-But 貝塚と比較して見ますと、菊名と同じ様な石器や骨角器を發見して居りますけれども、菊名の方では、縫針に穿孔を附せられて居るに對し、Da-But の方では單に錐が發展して居るに過ぎない様に、菊名の方が形態學的には遙に發展して居るのであります。私は此の如き顯著なる發展を遂げて居る菊名の文化に對し、玆にキクナニアン（Kikunanien）なる新稱呼を以てせんことを、大山氏に提唱したものであります。

今迄に御話ししてきた經過に照し、再び話を日本史前學の國際的立場に對する責務にもどして見ますと、先づ第一にホアビニアンの問題が、東亞全史前學上、ことの外重要であることが考へらるゝのであります。

只今私が述べ來つた如く、南方方面に於けるホアビニアンは只メラネシア民族と結合せられて居りますが、日本に於きましては、果して如何なる民族と結ばるゝのでありましょうか？

これ等日本に於けるホアビニアンの發見地は、恐らく菊名の學術的發掘を除いては、他の九州や仙臺等は、單

それ以來私は絶えず注意して居つた結果、上野の帝室博物館に於ても、後藤學士の說明により、一つは東京近郊、他は九州に發見せられたものを見、仙臺に於ては、長谷部博士の集品中、同地發見のもの等、日本發見の多くのホアビニアン形握り槌を見ることが出來たのであります。

私はこのホアビニアン研究に關して、大山氏と相談しました所、神奈川縣菊名貝塚は、三米も深く沖積層下に埋沒せる故、最も古き貝塚である可きを以て、この貝塚のより廣き發掘研究をしたならば、更に得る所があらうとの同氏の勸誘によりまして、同貝塚の發掘に參加したのであります。

[大山註。菊名貝塚の發掘に就きましては、既に昨六年來、私共の研究所に於ける懸案の一つでありまして、研究所としては、已定計畫である關東繩紋式文化の編年學的研究の後、これが發掘を企圖して居つたものであります。其際適々カ氏の來朝を見たので、この發掘參加を勸誘したものであり、獨り地層の深さに止まらず、私共の編年方法上、古き階梯を認めたものであります。この方法に就きましては、編年學的研究豫報に述べてありますし、又菊名貝塚の發掘は、このカ氏が參加せられた、第一期發掘を終つたのみで、近く發掘續行の豫定でもありますし、これ等の經過に就きましては、將來發表を期して居ります。]

O. Fig. 6.
横濱市菊名貝塚出土の打石器
（カ氏の所謂 Kikunanien）
Sog. Kikunanien nach Callenfels vom Muschelhaufen Kikuna bei Yokohama.
（10.7cm lang, 4.6cm breit）

この菊名貝塚よりは、典形的なホアビニアンIIを發見したもの丶、印度支那に比しますと、遙に發展した形式であります。而して本貝塚出土の主要遺物は次の様であります。

同　　II／III?。メラネシア型頭骨――インドネシア型頭骨。

同　　　南方。メラネシア型頭骨。

同　　III／IV（マラッカ）。メラネシア型頭骨。

同　　　ジアワ。メラネシア型頭骨。

メラネシア人の古き故郷（原メラネシア人?）は、印度支那にあつて、それがジアワを越へニユーギニアに入つたことは、疑ひなき事實であり、これと同時にホアビニアン文化が、このメラネシア民族と共に、印度支那より消滅して居ることが知らるゝのであります。ホアビニアン文化に續く、印度支那の新石文化は、インドネシア人の所產であるか、或はメラネシア人の後に、それ以外の民族によつて形成せられたのかであります。此の樣に、獨り文化のみに止まらず、民族なるものに於ても、夫々移動が存して居るのであります。

ジアワの洞窟第二層（b）に對しては、未だ疑問が殘存せられて居ります。尙其第三層（c）に於ける石鏃の由來に就きましては、如上の如くこれを解明することが出來ますが、この石鏃たるや、メラネシヤの移動よりも、より古き時代のものであることは、諸君の樣な專門家に對しましては、これ以上に說明する必要はありません。

この謎を解く可き鍵は、一つに以て日本にあります。然しながら、私が日本に到着し、未だ幾何も探査に從事しないに拘はらず、私は大山研究所に於て、全く私の豫期して居らなかつた所の、典形的なるホアビニアン握り槌を發見したのであります。

［大山註。この演者の日本に於けるホアビニアン握り槌と云はるゝものは、私共研究所に陳列してある神奈川縣子母口貝塚出土の楕圓形の小形打石器を指したもので、最初にこれを見られた瞬間に、驚異の聲を出されたものであります。］

ふ、文化移行の確實なる傾向、卽ち所謂「ホアビニアン」の南下變遷が確認せられたのであります。

[大山註。圖版第二の4の様石器もホアビニアンの一形式と見てよいと考へる]

今これを北より南に向つて其移行を次の様に示すことが出來ます。

ホアビニアンI。原始的粗なる打製握り槌。

同　II。握り槌にして、刃部のみ原始的な磨製部分を存するもの。(所謂、原新石)

同　III。より發展し、從つてより精良となりたる打製握り槌。僅少なる骨角製品の隨伴。

同　III。南方に於ては、骨角製品は、石製品より數量增大。

同　III/IV。(マラッカ)より多くの磨製石器。骨角製品?

O. Fig. 5.
所謂　原新石器
印度支那 Bac-Son 出土
Sog. Proto-Neolith
von Bac-Son (Indo-China)
(10.5cm lang, 4.6cm breit)
nach H. Mansuy

同　ジアワ。單に骨角製品を見るのみであつて、石製品なし。

以上の如き文化方面の外、更に人類學的遺物に徴しても、文化移行並に發展を物語ることが出來ます。卽ち

ホアビニアンI。メラチシア型頭骨。(Praedruvida, Australoide, Melanesier)

如何にして、この印度支那に於ける骨角製品の謎と、ジアワの石鏃問題とが、解決せらる可きでありましようか。これが爲に、私の政府は私を印度支那と日本とに派遣し、以てこの問題解決に資せしめんとしたのであります。



O. Fig. 4。印度支那 Bac-Son 出土の握り槌 (Bac-Sonien)。
Sog. Bac-Sonien Faustkeile von Bac-Son (Indo-China)。
nach H. Mansuy (10.5cm Lang, 7.4cm breit)

私は先づハノイにまいりました。この南東京に於きましては Phu-Duc 洞窟發掘に當りましては、多くの握り槌と共に、比較的多量の骨角製品とが出土して居ります。これは先きに申し述べましたバクソン (O. Fig. 1) の發掘に際してよりも、より多く出土し、其位置が南によれば、よるに從つて、骨角製品が石製品に對し、其數量を増す現象が見らるゝのであります。

更に私は、印度支那に於きまして、より南方の沼澤地にある Da But 貝塚に於きまして、一大骨角製品遺跡を發見したのであります。この貝塚は、佛國官權の勸誘によりまして、私自身發掘を行ふたのでありますが、今日苦しんで居るマラリアの様な、飛んだ御土産まで頂戴してまいた所なのであります。

この地の發掘の結果は私の期待をより强固にならしめたのであります。卽ち上述した如く、南方に傍るに從つて、漸次骨角製品の數量を增すと共に、石器に代り、ジアワの Sampoeng に至つて其終末階梯を形成すると云

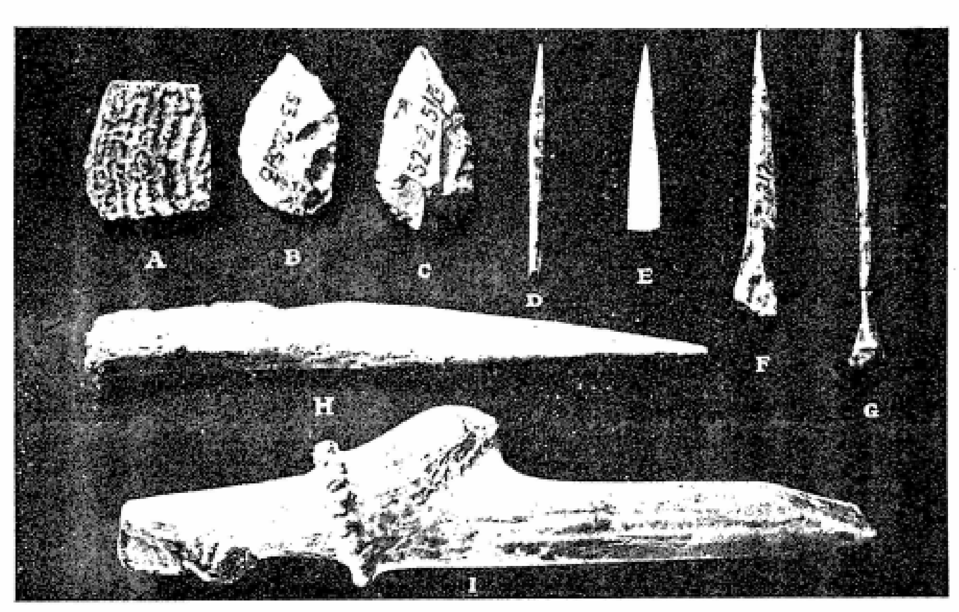
な、骨角製品を伴ふも僅少に過ぎない。卽ち東京の方は多數の石斧の中に若干の骨角製品があるに對し、ジアワの方では、骨角のみであつて石器はないのであります。

この東京とジアワとの兩文化間に於きましては、文化連絡の存するものがあることを認められますが、さてそれなら、如何なる近緣關係が相互間に存するのでありましようか。由そこに其近緣關係が存するものであつても、兩者の文化が直接互に相結び得らるゝものではありません。

ジアワの最下層 c に於ては、只石鏃を發見したのみでありまして、骨角製品は見付かりません。而して私はジアワは Sampoeng の二百粁の周圍にある各發見地に於きまして、この樣な石鏃を發見して居ります。

この樣な石鏃は果して何所よりジアワに將來せられたものでしようか。其何れを問はず、西方からではありません。而してシアム、マラッカ、印度支那の各地では、骨角鏃か乃至は他の原料を用ひ、石鏃を見ないのであります。それ故この石鏃將來問題は、恰も前述したパプア型石斧と同樣な立場にあります。

嘗て今より約四十年前、サラジン (Sarasin) 氏の甥は、中部セレベスの洞窟發掘を試み、こゝより小形な有柄式の樣な石鏃にして、鋸齒形に打製せられたものを發見しました。これと同型式な石鏃を私はフキリッピンのマニラに於て見ました。それ故この型式の石鏃なるものが、西方より來つたものでなく、それが北方より侈入せられたものでなければならないことが、明かなのであります。かくして私は、日本に於ける史前學上の文獻を搜索しましたが、日本に於きまする史前學上の文獻の大部が、漢字で發表せられ、この日本文字を修得するだけの餘裕を有して居らない結果、其發行年次の古きにも拘はらず、マンロー氏の日本史前學によらねばならなかつたのであります。而してこの述作中に於て、やはり私の心掛けて居つた上述の樣な石鏃圖を見出したのであります。



O. Fig. 3. Sampoeng　出土骨角器等の一例
Knochen-Geweih u. a. Geräte von Sampoeng
nach Callenfels.　(stark verkleinert)

此結果私共は、ジアワに於ける石鏃は、無柄の方が有柄の方よりも古き型式であることを知ることが出來たのであります。而して如上の發見に對し、これを如何樣に解說すべきでありましようか。a層に於ける石斧に對する解釋は單純であり、それはDeutero-Malei の新石時代末期に用ひられた磨石斧なのであります。

これに對しｂ層の骨角製品は、下記の樣な發見があるまでは、一つの謎であつたのであります。所が最初に一九二四年印度支那の東京に於ける或る洞窟發掘に際し、左記の樣な發見があつた外、更に尙他にも發見が續いたのであります。東京の洞窟發見は

1。原始的な單なる打製のみの石器資料（握り槌 = Faustkeile)（O. Fig. 4）

2。原新石器類（Proto-Neolithe)、打製石斧にして、刃部にのみ始原的な磨製を試みられたるもの（O. Fig. 5)。これにジアワに於ける樣

本問題を解決し又これに關した忌憚なき意見の交換を行はんが爲、特に司會者と相談の上、かく今日史前學者のみを御招待申した次第であります。かくして話題はこの國際的なる眼目に觸れ來つたのでありますが、私はこれに對し、先づ南洋方面及び東南方面の特異相の概念であつて、特に日本史前學に感興深き部分を開陳して、如上の問題解決の一資料として諸君の御參考に供したいと考へます。但しこの南方並に東南方の一般事情に就きましては、既に日佛會館に於ける私の講演に盡きては居りますが、更にこれを要述すれば、次の様であります。

第一に申し陳ぶ可きことは、尖頭をなし、且つ蛤刄を有する形式の石斧（C. Fig. 1.）[其實例は圖版第二左端にもある(大山)] であります。この石斧たるや、日本より英領印度に亘り分布を見ますが、印度支那、マラッカ、スマトラ、ジアワ等には發見せられて居りません。而して今日猶、ニューギニアのメラチシア人によつて使用せられつゝあります故、これを「パプア型石斧」と呼ばれて居ります。

此型式の石斧は、何處より來つたものでありましようか。英領印度の方からでありましようか。或は又日本からでありましようか。この疑問は、私が北セレベスに於ける史前時代に屬する一墳墓中より、これを發見し、又ホノルヽに於けるプリンス、ビショップ博物館にあるグアム島發見の、これ等の一群を見付け出すまで、私には謎として殘されたものなのであります。

更に亦、東ジアワの Sampoeng (O. Fig. 2) の發掘に當り三つの文化層を發見しました。其最上層（a）よりは、新石時代の石斧、中間層（b）よりは骨角製品、(O. Fig. 3) 最下層（c）よりは、石斧と骨角器等を發見しませんでしたが、こゝよりは有柄式の様な形式のものと（C. Fig. 2. a）無柄式の石鏃（C. Fig. 2. b）とを發見しました。[a 形は O. Fig. 3. B. C. にb形は圖版第二9. にもある(大山)]。



O. Fig. 2　ジャワ　Sampoeng　岩陰の發掘
Abri　Sampoeng (Java). nach　Callenfels.

しては、數千年を通して、土器の發展に見る可きものがありません。少なくとも、二—三千年間を通し、私共はたゞ所謂繩目土器 (Schnurkeramik) を見るのみであり、これが日本に於ける繩紋式第一期に連關する所のものであります。

［大山註。私共の關東に於ける前期繩紋式土器を指さゝれて居る。］

而して此繩目土器は存續し、其以降に於ける發展に就ては、未だ南洋方面に於ては知られて居らないのであります。この樣な有樣でありますから、日本に於てこそ、土器研究が重要視せられ、又其必要をも認められますが、更に國際的見地から見ますと、あまり歡心の少ない對象であります。

此樣な見地からして、今日私は諸君に向つて、次の樣な問題を提出致します。卽ち

『日本としては、如何なる研究が、國際史前學に提供せらるゝものでありませうか。』

なる方向とに區分することが出來ます。

局地的方向なるものは、一つの限定せられたる地方に於て、其地方内の細目に就ての研究であります。これに對し、國際的方向なる研究の負ふ所は、大局的なる、民族乃至は文化の移行の決定の如き、局地的なる範圍を超越した所の研究なのであります。

O. Fig. 1 南洋附近一覽圖

玆に日本史前學なる立場に於て、これを例出して見るなれば、日本史前學研究としては、其主要なる對象は土器の調査であつて、これに基き共二大時代を劃する繩紋式及び彌生式が生れ、繩紋式は更に三つの編年期に區分せらるゝ等の如きがそれであります。

〔大山註。繩紋式の三編年期と云はれて居るのは、私共の研究所で研究して居る、關東に於ける繩紋式編年を指して居るのである。〕

此の如き研究は日本史前學としては、必要な研究でありますけれども、更にこれを日本を超越した所の國際的見地から見ますると、必ずしも必要ではないのであります。よしんば日本史前學として土器の研究が、缺くことの出來ない程大切な意義があるにしても、それは單に日本なる局地的なる對象に於ける場合に過ぎないのであります。この樣な日本史前學の內容に對し、これを南洋方面と照して見ますと、同方面に於きま

して居る。

【ウエークマン氏註】本筆記は、カーレンフエルス氏の素讀を受け、且つ其際若干の訂正を受けた所があり、又抄畧もして居るから當日其儘ではない。特に謝辭等に就ては、變更を受けた部分の存する所は豫め御斷りして置く。

司會者大山公爵の挨拶、特に本日カーレンフエルス氏のマラリアの發作で甚だ不快の狀態にあられるに拘はらず、講演を敢行せらるゝことを感謝せられた。

ワン、スタイン、カーレンフエルス博士、

『諸君！

不幸にして今日、私はマラリアの發作中であります。それ故、或は私の企圖した、講演計畫の全部を御話出來ないかも知れません。又總てが明晰を期し難いかも知れない點は、豫め諸君の御宥恕と御了解とを得て置きたいと考へます。

先づ私は、私の二ケ月間に亘る日本に關する研究旅行の終結に際し、玆に東京に於ける大山公爵、小金井博士、後藤學士、仙臺の長谷部博士、京都の濱田博士、淸野博士等御世話になりました各位に對し、其懇情を深謝するものであります。

私は今日、日本史前學なるものが、獨り日本國の範圍に止まらず、より廣く國際的なる立場の上に、如何なる分課を有して居るかに就て、司會者と相談の上、只今御集りを願うて居る樣な、史前學に對する專門家である各位に御傾聽を煩し度いと存じたのであります。

根本に於きまして、史前學なる學は、二つの異つた方向、卽ち一つは狹き局地的なる方向と、他は廣き國際的

國際的研究の一分課としての日本史前學の使命

（昭和七年五月二十二日、大山史前學研究所に於て）

ウワン・スタイン・カーレンフェルス氏講述
フヲン・ウエークマン氏筆記
大　山　柏　翻　譯

［大山註］　本講演は、當日獨逸語でなされたものであり、これをウエークマン氏が筆記せられたもので、別項歐文欄にある樣な、記述をウエークマン氏より受領した。この筆記中には當日の講演に參加せられたり、或はカーレンフェルス氏自身の史前學に對する概念を呑み込んで居られない方々には、筆記簡單に過ぎて、本講演を了解せられ惡い所も多いと考へる故、翻譯に當つては、若干の補正も行うて居ることを、豫め御斷して置く。

又本文中には色々な挨拶など重複し、最後には討論めいた所もあり、不要の部分もあるけれども、文章形式として、歐文の方は、歐洲に於ける講演筆記の形式通りであるから、それを生す爲に、重複を厭はず、なる可く畧さない樣にした。

元々本講演の目的とした所は、本文中にもある如く、カーレンフェルス氏の希望として、獨り日本に於て、所謂對內的な研究とでも云ふ樣な立場より一步進んで、國際的な研究に進んでもらい度いと云ふ所が根底をなして居り、こゝでこそ云はれては居らないが、以上の見地よりして、國際的な用語を以てする發表を希望して居られ、且つ獨り日本內地に止まらず、共周圍の關係に就ても常に着眼せられ度いとの意向を常に洩らされて居つたが、本講演に於ては、餘りに自己の研究領域なる南洋方面に偏し、この眼目の徹底が不充分である所は、遺憾に堪へない。

又本講演に當つては、研究所の施設不充分な所もあり、幻燈、寫眞、繪畫等を用ひらるゝことなく、黑板に簡單な圖を畫かれたに過ぎなかつたのであるが、これが、多くの讀者の爲、譯者の獨斷で若干の挿圖を補入して居る。これが爲ウエークマン氏より送附の案圖には、C. Fig. として番號を附し、歐文欄中に入れ、大山補入の分のみが、O. Fig. として番號を與へて本翻譯中に挿入

文獻

會報

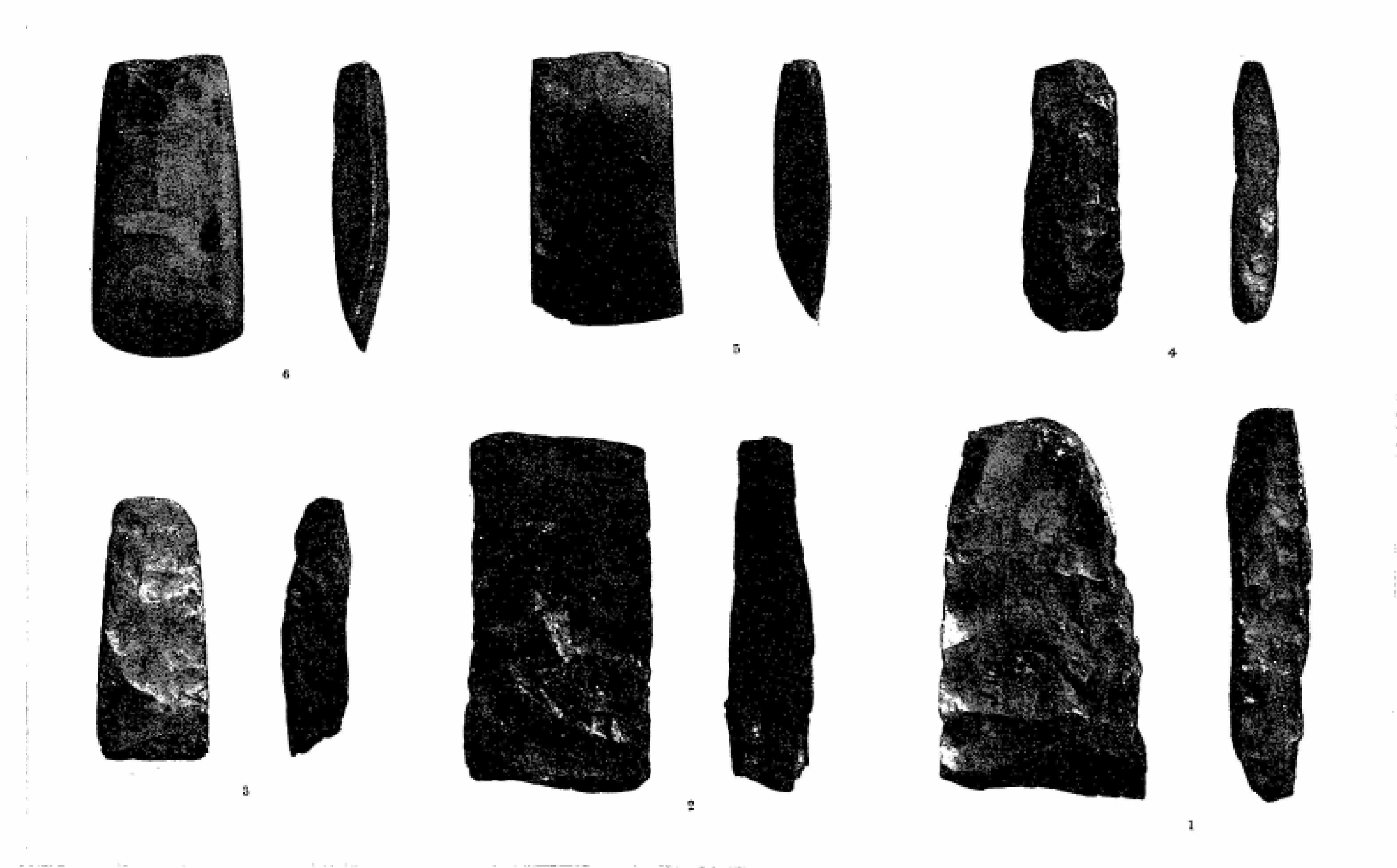
餘白録

目次

史前學雜誌

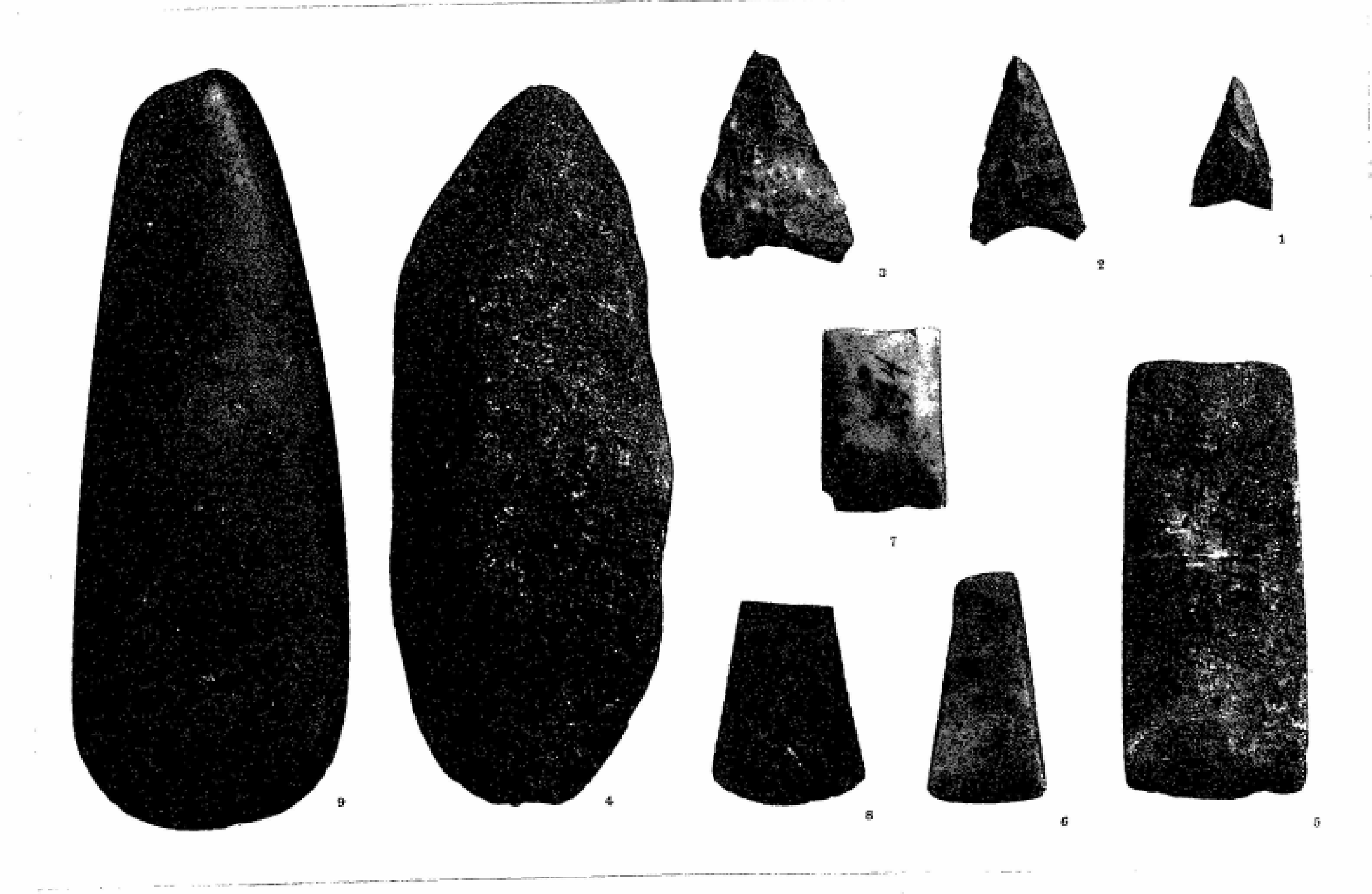
第四卷 第三・四號





ジアヮ出土の石器（½）二（カーレンフエルス氏寄贈）

Steinwerkzeuge von Java No. II (wie No. I)



ジアヷ出土の石器（$\frac{1}{2}$）一（カーレンフエルス氏寄贈）

Steinwerkzeuge von Java No. I (Geschenk von Van Stein Callenfels)

史前學會々則

一　本會ヲ史前學會ト名付ケル

二　本會ノ目的ハ史前學研究ヲ主體トシ、併セテコレニ關連スル諸學ヲ考究普及スルニアル

三　本會ノ事業ハ左記ノ通リデアル

研究小報及パンフレットノ發行

史前學雜誌(年六回隔月發行)及年報ノ發行

調査並ニ研究旅行、臨時講演會並ニ展覽會ヲ催ス

四　會員

本會ノ趣旨ニ贊成シ年額金五圓ヲ前納スル者ヲ以テ會員トシ金貳百圓以上ヲ一時ニ納ムル者ヲ以テ終身會員トスル

特ニ本會ニ貢獻シタル會員ヲ名譽會員ニ推選シ、終身會員ニ準ズル

五　本會員ハ隔月發行ノ史前學雜誌並ニ每年一回發行スル年報ノ配布ヲ受ケルモノトスル(但海外在留者ハ別ニ郵送料ヲ要スル)

六　會員特典

本會々員ハ大山史前學研究所ニ於テ研究ノ便宜ヲ受ケ其研究ヲ雜誌ニ於テ發表スルコトヲ得ル

本會ノ調査並ニ研究旅行、講演會及展覽會ニ出席シ、本會所藏ノ資料圖書等ヲ使用閲覽スルコトヲ得ル

七　本會ニ數名ノ幹事ヲ置キ、本會ノ會務ヲ執ル(將來必要ニ應ジテ本會々則ヲ變更スルコトヲ得ル)

八　本會ハ事務所ヲ左記ノ所ニ置ク

東京市澁谷區穩田町九
大山史前學研究所內
史前學會
電話青山一二五番

幹事　大山柏　甲野勇　宮坂光次　田澤金吾

會計　杉山壽榮男　岡田義一

投稿規定

寄稿の範圍は史前學研究を主體とし、之に關連する諸學を包括す。寄稿者は會員並に會員の紹介ある者に限る

原稿は返還せず、但し寫眞、圖表等は豫め申出であるものに限り之を返還す

原稿掲載の先後は編輯者に一任されたし

寄稿者の希望に依りては內容に關し相談に應ずることあるべし

寄稿の別刷は豫め申込みある場合に限り、當分所要部數の實費及び送料を申受け需に應ず

昭和七年十一月二十二日印刷　第四卷　第三號　第四號　合本
昭和七年十一月二十五日發行　本號ニ限リ　定價　二圓

編輯者　東京市澁谷區穩田町九番地　大山柏
發行者　東京市澁谷區穩田町九番地　岡田義一
印刷者　東京市神田區表猿樂町二　中村修二
株式會社開明堂東京營業所

發行所　東京市澁谷區穩田町九大山史前學研究所內　史前學會　電話青山一二五番　振替東京五八九六九番

發賣所　東京市神田區北甲賀町四番地　岡書院　電話神田二七七五番　振替東京六七六一九番

史前學雜誌

第四卷　第三號第四號

史前學會

Sonderausgabe

von

Zeitschrift für Praehistorie

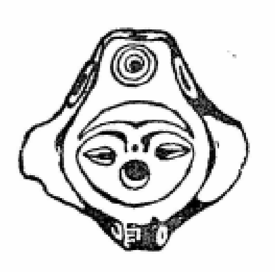
(SHIZENGAKU-ZASSHI)

4 BAND 5/6 HEFTE. 1932

FINDET MAN IN JAPAN PALAEOLITHIKUM?

von

KASHIWA OHYAMA



März 1933

TOKIO

Japanische praehistorische Gesellschaft

(SHIZENGAKU-KWAI)

9, Onden, Aoyama Tokio.



Satzungen der Gesellschaft.

1. Der Name der Gesellschaft ist "Shizengaku-Kwai" (Praehistorische Gesellschaft)
2. Der Zweck der Gesellschaft ist das Studium der Praehistorie und ihrer Grenzgebiete und dessen Popularisierung
3. Die Tätigkeit der Gesellschaft erstreckt sich auf
   A Herausgabe kleiner Mitteilungen und Schriften
   B Herausgabe der Shizengaku-Zasshi (Zeitschrift für Praehistorie) (Zweimonatlich) und des Jahresberichts.
   C Veranstaltung von Forschungs-und Studienreisen
   D Veranstaltung von Vorträgen und Ausstellungen
4. Mitglieder
   Die Mitgliedschaft wird erworben durch jährliche Vorauszahlung eines Beitrags von 5 Yen. Personen welche einen einmaligen Beitrag von 200 Yen oder mehr zahlen, werden lebenslängliche Mitglieder. Personen welche sich um die Gesellschaft besonders verdient gemacht haben, können Ehrenmitglieder werden und haben damit die Stellung der lebenslänglichen Mitglieder
5. Die Mitglieder erhalten die Zeitschrift und den Jahresbericht frei, jedoch wird für Zusendung nach dem Ausland das Porto berechnet
6. Rechte der Mitglieder
   Die Mitglieder haben das Recht, die Einrichtungen des Ohyama Instituts für Praehistorie zu benutzen
   Die Arbeiten der Mitglieder sollen in der Praehistorischen Zeitschrift veröffentlicht werden
   Ferner haben die Mitglieder das Recht, an den Forschungs- und Studienreisen der Gesellschaft teil zu nehmen, die Vorträgen und Ausstellungen zu besuchen, sowie die Sammlungen und die Bibliothek der Gesellschaft zu benutzen
7. Ein aus mehreren Mitgliedern, bestehender Vorstand führt die Geschäfte der Gesellschaft
8. Wenn es sich als notwendig herausstellt, können diese Satzungen später geändert werden
9. Das Büro der Gesellschaft befindet sich:

9. Onden Aoyama Tokio
Ohyama Institut für Praehistorie
(Ohyama Shizengaku-Kenkyujo)

für den Vorstand

Fürst Kashiwa Ohyama, Sueo Sugiyama
Isamu Kohno, Kingo Tazawa
Keisuke Ikegami

SONDERAUSGABE

FINDET MAN IN JAPAN PALAEOLITHIKUM ?



von

KASHIWA OHYAMA

Einst waren die gegenwärtigen japanischen Inselgruppen ein Teil des eurasiatischen Continents, wie das heutige England, wenigstens in der Zeit zu Ende des Pliocaen, weil sich auf Japan in den diluvialen Schichten *Stegodon orientalis, Elephas namadicus, E. indicus, Girafia* und andere continentale Fauna finden. Aber wann trennten sich die japanischen Inseln vom Festland, inbesondere wann war die Zeit der Senkung der letzten Landbrücken? In dieser Hinsicht ist eine genauere Datierung vom geologischen oder palaeogeographischen Standpunkt noch nicht erforgt.(1)

In der diluvialen Zeit hat Japan keine starken Gletscher wie Europa. Solche gab es nur in den höheren Gebirgsgebieten, und deshalb fanden wir in den ebenen Gegenden in den diluvialen Schichten weder *Elephas primigenius, Rhinoceros tichorhinus, Rangifer* noch andere arktische oder Hochgebirgsfauna. Ausserdem gibt es in Japan auch keine Lössbildung; die allgemeinen diluvialen Schichten bestehen aus Geröll, Sand, Ton und Lehm (rote Erde). In der letzteren finden sich im allgemeinen keine fossilen Reste.

Dies ist also die Naturumgebung in welcher sich eine palaeolithische Kultur hatte entwickeln müssen. Die frage ist ob sie vorhanden war? Ich denke die eigentliche palaeolithiche Kultur ist nur einfache Jäger-Kultur, und die Palaeolithiker kannten die Fischerei nur wenig

oder gar nicht. Ich kenne jedenfalls noch keine sicheren palaeolithischen Fischer-Funde. Ich will nicht bestreiten, dass einige Palaeolithiker auch gelegentlich fischen konnten, doch handelt es sich nicht um Hauptlebenserwerb, sondern nur um Nebentätigkeit. So wusten sie nur wenig vom See-Leben. Wenn also die japanischen Inselgruppen schon in der Tertiärzeit vom Festland getrennt waren, konnte der palaeolithische Jäger nicht nach Japan kommen. Aber seit dem Mesolithikum kannte man schon die Fischerei, und wir finden zum erstenmal echte Fischer, wofür es in Europa nicht wenig Beispiele gibt, z. B. die bekannten Kjökkenmöddinger in Dänemark,[2] England,[3] Spanien,[4] und Portugal.[5] Wenn es solche mesolithischen Fischer im Osten gab, konnten sie nach den japanischen Inseln, auch wenn diese damals schon vom Festland getrennt waren, kommen. Doch bis jetzt fanden wir auch von ihnen noch keine Spuren.

Wenn aber in der Zeit des Diluviums oder noch später, bis zu Anfang der Alluvialzeit die Landbrücken noch blieben, so konnten nicht nur die Palaeolithiker, sondern auch die mesolithischen Jäger ruhig bis nach Japan gelangen. Deshalb hegt die Entstehung der palaeolithischen Frage für Japan bei der Bestimmung der Trennungszeit durch die geologische Forschung.

Während des Verlaufs unserer japanischen praehistorischen Forschungen, die schon über 50 Jahre lang dauern, untersuchte man räumlich vom Norden zum Teil die Chishima Inselgruppen, (千島列島) Karafuto (樺太) (Sachalin), und Hokkaidô (北海道), bis zum Süden die Insel Taiwan (台灣) (Formosa) und die Riukiu Inselgruppen (琉球群島),[6] ca. 11000 neolithische Fundstätten sowie mehrere Funde aus späterer Zeit. Trotz dieser räumlichen sowie Ausdehnung der Forschungstätigkeit trafen wir noch keine Spuren des Palaeolithikums. Wenn aber in Japan wirklich das Plaeolithikum vertreten war, müsste man wenigstens irgendeine ältere Industrie entdecken, die palaeolithisch aussieht.

Ich haben um. Y. Koganei (小金井) und K. Hasebe (長谷部) die typische Kalkhöhle Megami (女神) in dem Höhlengebiet vom Kreis Kesen (氣仙), Prov. Iwate (岩手) (Nord-Ost Japan) bis zu den diluvialen Schichten untersucht, eben wegen der palaeolithischen Frage. Wir haben aber dabei keine Gegenstände in den diluvialen Schichten entdeckt, trotzdem in den oberen alluvialen Schichten neolithische sowie spätere Funde sich finden. Auch einige andere Höhlen ergaben das gleiche negative Resultat.

So kann ich schliessen : eine sichere Beantwortung der Frage des Palaeolithikums in Japan, ist erst nach der Bestimmung der Trennungszeit durch die Geologie zu finden. Aber ob und wann diese Bestimmung erfolgt, ist ganz unbestimmt. Darum können wir vorläufig die Frage nur von unserer praehistorischen Seite behandeln. Von der Grundlage der gegenwärtigen Funde habe ich nicht viel Hoffnung auf palaeolithische Funde, weil bis jetzt noch keine sicheren Spuren davon vorliegen.(7) Und auch wenn man etwas finden wird, so dürfte dies nur bei besonderen sowie seltenen Gelegenheiten sein, gegen über den zahlreichen neolithischen Funden. Aber bei dem Mesolithikum ist es wieder anders ; darüber werde ich vielleicht bei nächster Gelegenheit berichten.

Im japanischen Teil behandele ich die Frage für die japanischen Praehistoriker ausführlicher, um die Kenntnis des Palaeolithikums weiter zu fördern.

Für die Mithilfe bei der Korrektur dieses Arbeit danke ich Herrn Dr. phil. C. von Weegmann Tokio.

Ammerkungen

(1) Darüber siehe : J. Nagasawa ; Die diluviale Zeit Japans. (unsere Praehis. Zeitschr. Bd. V. No. 2. 1933.)(noch nicht erschienen)

(2) A. P. Madsen, S. Müller u. a. : Affaldsdynger fra Stenalderen i Danmark. 1900.

(3) R. A. S. Macalister : A Text-Book of European Archeology. 1921. Hier findet sich Muschelhaufen Oronsay (S. 533—537).

(4) H. Obermaier ; Das Palaeolithikum und Epipaläolithikum Spaniens. (Anthropos. Bd. XIV—XV, 1919—1920.) Hier über Asturien.

(5) C. Ribeiro ; Les Kjökkenmöddings de la Valée du Tag. (Cong. Int. Anthr. Arch. Praehis. Lisbon, 1880.)

(6) Darüber siehe meine Arbeit ; Die Kjökkenmöddinger von Iha in Riukiu. 1922. (Resumé auf Deutsch)

(7) Neulich in "The Journal of the Anthropological Society of Tokio" Vol. XLVI, 1931 meldet N. Naora ; 'On the Discovery of Palaeolithic Relics in the Prov. of Harima." Aber es sind gar keine palaeolithischen Funde ; die meisten sog. Kulturreste sind Naturstein, nur einige Steine kann man allenfalls als Eolithen anzusprechen.

Tafel

Crotte du Prince (Grimaldi)

(nach Boule)

(L. 28.) 1907. L'art pendant l'age du Renne.

S.

Soergel, W.

(L. 29.) 1922. Die Jagd der Vorzeit.

V.

Vaufrey, Raymond

(L. 30.) 1928. Le paléolithique Italien.

W.

Werth, E.

(L. 31.) 1921. 1928. Der fossile Mensch.

備考.

本文獻は直接本論文述作に参酌したのみで、一般參考の意ではない。又插圖等隨所に引用したものも集成してない。

昭和八年三月十五日印刷
昭和八年三月廿五日發行

日本舊石文化存否研究
定價二圓五十錢

著者　大山柏

發行者　岡田義一
東京市澁谷區穏田町一丁目九

印刷者　中村修二
東京市芝猿樂町二
開明堂東京營業所

發行所　大山史前學研究所内
史前學會

發賣所　東京市神田區駿河台町一ノ八
岡書院

O.

Obermaier, H.

(L. 18.) 1924. Fossil Man in Spain.

Ohtsuka, Y. 大塚彌之助

(L. 19.) 1931. 第四紀 (岩波講座、地質、古生物)

Ohyama, K. 大山柏

(L. 20.) 1931. 原石文化問題 (岩波講座、生物學)

Ohyama, K.

(L. 21.) 1928. デンマークに於ける貝塚構成時代 (史學、七の二)

Ohyama, K.

(L. 22.) 1928. 史前學研究史 (史學、七の四)

Ohyama, K.

(L. 23.) 1926. 石器時代に關する歐米の文献 (人類、四一の六－八)

Ohyama, K.

(L. 24.) 1931. マグレモージアン文化概說 (本誌、三の二、三)

Ohyama, K.

(L. 25.) 1932. 歐洲舊石編年の過程 (本誌、四の二)

Ohyama, K.

(L. 26.) 1928. 歐洲舊石器時代 (考古學講座) (續編を含む)

P.

Peyrony, D.

(L. 27.) 1923. Élements Préhistoire.

Piette, E.

(L. 8.) 1900. Les station de l'age du Renne. Langerie-Basse.

H.

Hamada, K. 濱田耕作

(L. 9.) 1922. 通論考古學

Hasebe, K. 長谷部言人

(L. 10.) 1927. 自然人類學概論

Hörnes, M.

(L. 11.) 1903. Diluviale Mensch in Europa,

K.

Kiyono, K. u. Kanazeki, 清野謙次、金關丈夫

(L. 12.) 1928. 人類起源論

L.

Laekey, L. S. B.

(L. 13.) 1931. The stone age culture of the Kenya Colony.

M.

Martin, H.

(L. 14.) 1928. Études sur le Solutréen de la vallée du Roc (Charente).

Menghin, O.

(L. 15.) 1931. Weltgeschichte der Steinzeit.

de Morgan, J.

(L. 16.) 1925. La Préhistoire Orientale.

de Mortillet, G. et. A.

(L. 17.) 1903. Müsée Préhistorique.

を與へられたく、又著者への敎示と推敲とにも一臂の勞を惜まれざらんことを御願して、本著を閉づる。

（昭和八年三月五日稿了）

主要參考文獻一覽

B.

Bayer, J.

(L. I.) 1927. Der Mensch im Eiszeitalter.

Breuil, H.

(L. 2.) 1903-1913. Breuil 論文集成 (Breuil の拔刷四十五論文を集成したもので單行本ではない)

Burkitt. M. C.

(L. 3.) 1928. South Africa's past in stone.

C.

Capitan, L. et Peyrony, D.

(L. 4.) 1928. La Madeleine.

Cartailhac. E.

(L. 5.) 1911. Les Grottes be Grimaldi.

(本書は數名の分擔より成るが、考古學擔任者の名をとる。但し引用せるものは、夫々分擔者名を掲出。)

G.

Garrod, D. A. E.

(L. 6.) 1926. The upper palaeolithic age in Britain.

Girod, P.

(L. 7.) 1906. Les station de l'age du Renne. Stations Solutréeunes et Aurignaciennes.

Girod, P. et Massenat, E.

今述べてきたことが、餘りに冗長に過ぎると、或は讀者の叱正も受けるかも知れないが、それは發見なき今日、受身の悲哀である。又萬一其發見があつても、其儘に葬らるゝことも恐ろしい。數少ない史前學者の眼と耳とが、果してよく我內地總てに及ぶか否かを考へて見ると、玆に婆心を起さゞるを得ない。まして、我國には、從來舊石研究者を殆んど持たなかつたのであるから、此方面への關心も少なく、閑却もせられて居つたのではあるまいか。して見ると、こゝで少しでも多く、認識への資料を提供したいのである。只本著は、直接存否の如何よりも、先づ正しき舊石認識に費す所が多かつたが、それも根柢を確立して置く方が、より有意義と考へたに外ならない。それとて舊石文化內容の如きにも、僅に觸れたのみであつて、決して總てを盡したのでもない。單なる研究の端緒であり、更に奥深いことは申すまでもなく、本著が幸にして、其際に於ける最初の指針となり、これに出發して研究が進み得れば、著者として私は理想の幸福である。顧みれば、一八四六年、ブーシエー・ド・ペルト(Boucher de Perthes, 1788—1869)によつて舊石文化を提唱せられて以來、碩學相繼ぎ、歐洲では、舊石研究も異常の進步もして居る。それが今日まで發見せられ、亦研究せられた數も量も多かる可きことを、追想して見たなら、僅々一冊や二冊の小論文で、詳細を盡し得ないことも、容易に肯定せられ得る所と考へる。加ふるに、不幸にして我が國では、舊石研究者の殆んど無かつた現況に於て、更に內容が不明であつたと考へる。それにも拘はらず、現實に其有無を探査せんとするには、何が必要であるかを思へば、私自身の如き、舊石專門外のものであり、己れを省みて、不安に劫へながらも、かく執筆した次第である。而して我が史前學界としては、我新石以前の全く暗黑なる祖原文化の究明に對しては、歐米等より先驅せらるゝことなく、我學界獨自の力を以て、開發すべき大なる義務を感ずる。もし幸にして、著者の本意が、讀者に納れられ得るものであらば、協力同心の勞

考出し得るが、我國最初の舊石發見を立前とし、且つ組み合せた範界にする爲、この考を取り入れてない。

4.こゝでは舊石存否を立前として居るから、新、中石のみ存して、舊石の無い場合の如きを、取り扱つて居らない。

以上は舊石實在するとして、理論上あり得べき場合の一例であり、其内でも有り相に思はるゝのが、IとIIの1である。又IIIの場合を特に挿入した理由は、我が北邊の樺太、北海道、露領沿海州等の地は、今日近くまで文化低い所謂未開の民族が住し、僅少の地を除けば、其殆んどが未だ高等文化に潤ふたことのない地方であるから、萬一にもこの地方に舊石文化を存したとすれば、以外に長期に亙つてこれが存續が可能であるから、沖積舊石の如きが、生じないとも限らない故、かく設けたのである。但し沖積舊石文化と雖も、早く日本島が分離して居れば、一般舊石と同樣、渡來は困難と考へる。同樣の目で我南邊を見ると、臺灣には未開民族が占據する部分もあるが、近くに支那大陸の先進文化もあり、地形上からも北邊よりは、現在大陸よりは距離も遠いから、北方程の心配が尠ない。

要するに、我が內地に舊石文化を見ても、已述の如く其內容は全く想像し得ざる所であり、且つ我內地に最も近い舊石發見地は、滿洲國、蒙古等であり、朝鮮にも確たる發見を聞知して居らないから、手近に範例もない。全く白紙狀態で、これに直面せざるを得ないのであるから、受身の史前學者としては、豫め各方面へ、手を擴げて、何れの場合にも、善所するだけに、研究が整ふて居らねばならない。

四十三　終　結

II 舊石と新石とのみ出土の場合

1. 互に關係なし

新石
（沖積）
＝間＝層＝
舊石
（洪積）

2. 相關出土

（沖積）
新石
＝＝＝
舊石
（洪積）

III 特殊の場合（沖積舊石）

1. 新石、沖積舊石

新石
（沖積）
沖積舊石
＝＝＝
（洪積）

2. 新石、沖積舊石、舊石

新石
（沖積）
沖積舊石
＝＝＝
舊石
（洪積）

IV 新、中、舊石出土

新石
（沖積）
中石
＝＝＝
舊石
（洪積）

備考

1. 新、中、舊石各文化間に、間層がある場合は、IIIの1—2、IVの各場合にも出來得るが、餘り複雜になるから、畧した。
2. 舊石文化內にも、各階梯を見る場合もあり、且つこれ等の中で、相關の有無も、考へらるゝが、これ亦畧した。
3. 時的經過と、空間とを併せ考へると、一方に舊石文化が存在すると同時に、同じ我內地の他の一地には中石文化の共存も、理論上からは

化にして、我内地に比較的長時に存在を見たとすれば、我が内地に於ける天然環境の支配を、より多く受け、そこに獨自の地方色も生れ出づると考へる。よしそれが、從來發見の舊石文化の一支流であるにせよ、其時間經過を追ふて、其環境支配が行はれ、漸次始原文化とに距離も生ずる。從つて、我内地に舊石文化を見、且つこれが我内地の天然環境の支配を受くるだけに立ち至つた後ならば、其文化内容は、必ずしも從來發見の各舊石文化と一致するとは限らない。寧ろ異色を有することゝ思はれる。勿論文化低い舊石階梯であるならば、色々相似現象も見られようが、大局的に特異相があることゝ考へる。

更に考ふ可きことは、從來我が内地發見の新石文化と舊石存否との關係である。我内地發見の新石文化に於て、最近私共は關東地方に於て、繩紋式文化に三階梯の存することを確認したのであるが、其最も古き階梯と雖も、尚新石文化の範圍を出でゝは居らない。從つて今日發見の現實としては、從來と變りなく、新石文化以降しか、見當つて居るに過ぎず、僅に新石文化の上限に一歩を進め得たのみである。それ故舊石文化との間には、尚大なる隔てがあり、以上を基礎として上限文化に向つても、臆斷を下し得ない。此結果、萬一我内地に舊石文化を發見しても、容易に現在發見の新石文化への、文化修行は見られないと考へる。今舊石文化を見るものとして、有り得る場合を想定して見る。

I　**舊石文化單獨發見の場合**

地　表
(沖積層)
舊石層
(洪積層)

四十二　我內地舊石存在の蓋然性

舊石文化なるものが、已述の如く、主なる生業が狩獵であり、漁撈等水に親みが、尠ないか或は殆んどない樣な、生活內容であるなれば、日本諸島が今日の如く、或は今日に近く、大陸と分離し、これに渡來するには、直接徒涉游泳するなり、或は舟筏を利用するなり、そこに何等か、水に對する理解と知識とが、芽へて居らぬ限り、渡つては來られない。卽ち我內地には舊石文化の存在を肯定し得ない。勿論、漁撈生業に從事するだけに進んで居る中石文化であるならば、此限りでない。

要は日本諸島大陸分離時機の問題である。只この問題たるや、直接史前學上の研究對象でなく、地質學、古代地理學 (Palaeogeographie) 等の研究に屬する故、これが解決を見ない以上には、渡來の有無に就ても、明に判斷が出來ない。舊石時代に大陸と陸續きか、或は氷上通過とか、直接交上交通によらず、我內地に到達し得るならば、舊石文化を見得る可能性は充分にある。この可能性を否定すべき何物もない。さりとて可能性を認め得ても、現實に存在するかは、自づと別問題であり、只其蓋然性を認識したに過ぎない。

今日の所、少なくとも私自身に於ては、日本諸島分離時機に就て、適確なる知識を持つて居らない。從つて、其存否解決の鍵がない。それ故無條件でこれを否定するものではない。常に存否交々の場合を考慮はして居る。而して、陸上交通可能の場合に於て、舊石人が渡來したとして、其假想の上から、一應これを眺めて見る。然し此の如き條件のもとに、我內地に舊石文化を見るにしても、これが文化內容は全く想像の範圍外にある。只其文

6. 小　括

さてこゝで抄錄要記してきたことを、更に小括して見ると、單純に考へると、何んでもない樣に見らるゝ、舊石文化それ自身の內容に於ても、研究す可き諸件を包含して居ることが、了解せられたと考へる。歐洲の如きでは、舊石專門の研究家の居ることからも、これが一端が窺はれ得ると信ずる。遠目に概括的に見て居つた舊石文化も、さて自分等の手元で現實に取り扱ふ段取りとなつて見ると、そこに種々相が認められきて、決して私が殊更に難論して居るのでないことが、了解せらるゝと考へる。要するに、一見單純の如くに見えても、簡單には取り扱はれないのであり、そこに學術の深みがある。さりとて、我國史前學上からは、この存否問題に就ても、機會に遭遇することに、觸れて行き、これが解決にまで進まねばならない。よし自分等で直接解決が出來なくとも、少なくとも本問題に關した資料を增加して、將來解決せらるゝ日に、備へるだけの義務を持ちたい。それ故、勉强を要するとか、或は面倒であるとか等、消極的理由によつて、本問題を回避することは出來ない。萬一にも、それらしき發見を見る以上には、斷然これに專進すべきである。さりとて、研究の不實は切角重大問題をして、反つて學界より輕視せしむる結果も生ずることは、從來の諸例に微しても明である。これが爲に、かく本文を草したものであつて、幸に研究の參考とでもなれば、起草の目的は充分に達成したことになり、且つ一面では本問題に就ても、閑却せらるゝことなく、學界よりの注意が喚起せらるれば、これ亦一部の目的達成にもなる。尙最後に直接存否問題に關した一部資料を開陳する。

に狹義の遺跡と見なす必要もない。現實のまゝを明にするのが、學に忠な所以でもある。

4. 發掘調査關係

舊石器と覺しき發見がある以上には、學術的な發掘調査が必要であり、この結果、遺跡學的研究が遂行せらるると共に、遺物學上の資料が、正しく偏らずに、採集せられ且つは共存在狀態に就ても明に知り得らるゝから、其の存否を見るには、是非發掘調査を行はねばならない。これが爲には、豫め發掘調査に對する素養を得て置くことが必要であり、新石文化に對してでもよいから、發掘の體驗を重ねて、自信を以て現實に臨まないと、發掘に當り色々の支障も過誤も生れてくる。

5. 遺物學的關係

舊石遺物も亦、其種と變化とに乏しい。此中から其文化相を究明するのであるから、觀點を誤ると、途方もない見當違も起る。この現象は舊石研究の先輩である歐米等にも見られ、隨分我田引水的な如何はしい論述もある。それ故これ等に惑はされてはならないと共に、常に吟味を必要とする。而して全般大局上から、これを眺めて決して個々に捉はれてはならない。又珍品だの、抽出的研究だの、文化平面を無視してはならない。さりとて全稱的でない、假數の統計の如きも、科學的なる言葉に捉れた結果であつて、自から數量を過信してこれを誤用し、反つて數量に支配せられたに過ぎないのであるから、こゝにも吟味の要がある。而してこら等の歸納は、常に其蓋然性の大なる範圍に止め、猥りに假案の水掛論に陷らないことが大切である。其歸納方向も、傳統？に捉はれて、年代論や民族論などに走ることなく、文化内容を明にすべく、生業様式其他人類生活の内容に進まねばならない。

一義である。

2. 姉妹學的關係

舊石文化研究に於ける姉妹學關係の密度は、新しき中、新石文化のそれに對し、常に大である。從つて此點に於ても舊石研究に特徴づけらるゝのであつて、現實に文化遺物の遺留が尠い以上には致し方もない。且つ移動性を有する文化內容に對し、確たる時的經過を捉ふるには、動かない自然現象に基礎づけらるゝことが、最も安全確實であるから、姉妹學的研究の結果に待つて、其確實性を增大するのが當然である。中には文化研究であるからとて、これ等姉妹學的內容に觸れることを、忌むものもあるが、考へ違ひである。少なくとも舊石文化研究には、絕體的に近く必要であり、他學の力を借りるからとて、不名譽と考ふる必要もない。要は學術が進めばよいのであり、又相互各學問に關係の存することは、獨り史前學に限つた現象でもない。深淺はあるにしても多くが學として連關して居る。それにも拘はらず、或る傳統から、これ等に捉れる必要はない。寧ろ私の見る所は、反對であつて、猥りに他學の領域にまで手を廣げない樣に、注意したいのである。

3. 遺跡學的關係

舊石文化には、狹義の遺跡が尠ない上に、其內容に於ても、直接遺跡學的研究を行ひ得る程、其實在資料に乏しい。此點も舊石研究の一特質であり、この資料不足を補ふ爲の努力を必要とする。且つこの現實は、恰も歐洲に於けるが如き、遺物偏重の傾向を助長もする。遺跡に對する現實の研究に當つても、常に細心な研究を必要とする。其上これが報告に當り、遺跡學的研究に務めたけれども、不幸にして其現實に歸納し得る多くを發見し得なかつた場合には、其點を明にして置かないと、或は人より誤解も受ける。さりとて不確實な實在を以て、無理

其七　結　　論

四十一　研究の綜合

1. 文化相の問題

これで漸く一通り述べ終つた。一先づこれを綜合して見る。本書の最初に述べた舊石文化相の一般と、其後に研究した其個々の內容とにより、或る點までは、これを明にし得たこと丶信ずる。而して吾人等の最も多く見て居る、我新石文化等進步した文化階梯に對しては、著しい階梯差違の存する點も究明したのであるが、この階梯差違に對する標準尺を正しく認識しないと、誤認を生ずる。一面では、新、舊石間には中石文化があり、又舊石以前は未決の原石問題があるから、舊石文化の文化相が究明せられなければ、其文化階梯が正しき位置に了解せられ得ない。この基礎が確立せざる限り、舊石文化を論ず可き根柢が定まつて居らないのであるから、先づ第一に此點を究めてから、舊石論に入る可きである。如何なる文化を舊石文化となすやら、其根本をも定めずに、徒に新奇に走る如きは戒む可きことである。定石通りの舊石文化に遭遇するのみならば、比較的研究も容易であらうが、特異相の濃厚な特殊舊石文化だの、多くが時的下限に見らる丶縮舊石文化乃至は、沖積舊石文化等に出會して見たら、基礎薄弱な研究では、潰滅もしよう。從つて先づ舊石文化の根本が了解せらる丶ことが、存否論の第

S. 60. Fig. 76. (Magdalenien) の諸例がある。

(247) 介殼有孔垂飾例は、拙著、歐洲、續、S. 22. Fig. 23—24. の一部、S. 24. Fig. 25—26. に示してあるが、何れもオーリナシアン所產で他は圖示してない。これも介殼の種類によつては、遠く海岸から持つてきた海棲のものなどあり、研究に價するものがあるけれども、今回は略する。

域である等の故を以て、歐洲史前學者の多くが、舊石藝術と認定して居るが、其證據は弱い。第一理由から史前藝術とは認めらるゝが、果して舊石所產か、それ以降の作物かは明でない。それ故私はこれを舊石藝術中に入れないで、單により廣く史前藝術とするに止める。尙本藝術に就ては左記に詳述せられて居る。

H. Obermaier u. a. 1925

Hadschra Maktuba.

(239) 南阿の藝術作品も北阿に似て居るから、同樣に史前藝術と取り扱つて置く。この一般は、M. C. Burkitt ; (L. 2) にある。

(240) 瑞西のケースレルロッホ洞窟の如きは、其マグダレニアン層より小品な傑作彫畫が出土して居るに拘はらず、岩壁天井等には何等の繪畫もない。尙本遺跡に就ては、J. Heierli ; Das Kesslerloch bei Thaingen. 1907. があり詳報せられて居る。

(241) 歐洲後期舊石藝術の眞である理由に就ては、拙著、歐舊、續、S. 90—91. 參照。

(242) 藝術遺留物には、彫畫が最も多く、稀に浮彫、彩畫もある。畫題は動物が最も多く、人物は稀であり石塊上に畫いたのも、骨角上のもある。石塊にては大なるものは五十糎程に達し小なるものは、十五糎位である。拙著、歐舊、續、に多數例出してある。又骨角片に大さ二糎弱な鹿の彫畫がある發見に就ては (66) 參照。其の實物は目下私共研究所にある。

(243) こゝでは、現實的な遺存物を立前として述べて居る。尙こゝで述べて居る以外に、動物の爪、嘴、羽毛等や植物質のものも存したであらうが、今日に遺存がない。僅にカプシアンの人物繪畫からして、一部が想像せらるゝのみである。更にこれ等各種の繪畫研究からして、當時の生活內容の復原に資するものも存するけれども、こゝでは省畧する。其一部は拙著、歐舊、續に述べても居る。

(244) こゝで藝術品と云ふて居ることゝ、裝飾品と云ふこととで、或は喰い違いが出來ぬかとも心配するが、裝飾品なるものが、今日の目で藝術的價値が無いと認めても、當時にはこれを認めたかも知れないのであるから、こゝでは裝飾品なるものを、藝術的作品の一部として取り扱つて置く。これが詳細に就ては、將來藝術關係の基礎的研究を行ふ時まで保留する。

(245) L. S. B. Laekey ; (L. 13) Pl. XIV. Gamble's Cave II. upper Kenya Aurignacien. 出土の小石へ有孔垂飾 (多くが小形環狀をなして居る) 例がある。但しこの小形環狀垂飾は、北阿より多出するが、多くが石鏃 (尖頭鏃) 等と共出する爲に、これを新石所產と見るものが多いが、又一方では、舊石器と覺しき中にも共存するから、舊石所產と見る人もあり、今の所決定し得ない。又私はエジプト舊石文化中には余く藝術的作品を見たことがない。

(246) 歐洲後期舊石文化の骨角齒牙製垂飾は、拙著、歐舊、續、S. 22. Fig. 23—24. (Aurignacien) : S. 36. Fig. 38. 6. (挿圖追入) (Solutrén) :

一二型態が、他の舊石器に近似するとか、或は其術工が古拙だから等の理由から、無闇に舊石文化を肯定する如きは、今日通用しないことである。前述して居る如く、時代決定の如きは、殆んど姉妹學的研究の結果であつて、これに基礎づけられて、始めて舊石文化としての時的關係が明になり、遺跡及び出土狀態の研究と併せて、其文化相が明にせらるゝ。遺物學的方面より文化內容に歸納するにしても、其主要觀點は、彼れ等の主要利器が如何なる種類であるかにある。これよりして今述べた、狩獵、鬪爭等の用具が考定せられ、引いて生業樣式、生活樣式等の內容にも觸れてくる。所が從來に於ては、我が新石文化研究に當つても、兎角、年代論や民族論にまで歸納せられ、尙この傾向が遺存して、蓋然性の有無大小は顧慮せず、歸納の大なることが悅ばれ勝である。それが我が國全般のことなら、まだよいが、一箇所や二箇所の發掘で、そんなに都合よく總てが解るものではない。從つて公算なき水掛論も多い。而してこの傾向の一面には、大切な文化內容が、一向鮮明にせられて居らない。それ故、もし我が內地に舊石文化を發見し、且つこれが遺物學上の研究を行はれた結果、下す可き歸納方向は、如上の如き、古い傾向に促はるゝことなく、遺物の現實に卽して進み得る、生業や生活樣式等に向つてすべきであり、以て其文化內容をより明にするのが、今日に於ける史前學上の進路と考へる。

(235) 歐洲後期舊石藝術に就ては、拙著、歐舊、第、S. 89–122. 參照。

(236) 歐洲カプシアンの岩壁繪畫に就ては、(235) 前揭拙著に槪說してあるが、其後に次の好著が發表せられた。
H. Breuil a. M. C. Burkit; 1929, Rock paintings of southern Andalusia.

(237) グリマルデアンには繪畫藝術はない。從來發見せられて居るものは、グリマルデイより石偶が若干出土した外、有名な Panaro の石偶が一個あるばかりで他に顯著なものを知らない。R. Vaufrey; (L. 30), S. 110. u. Fig. 36. 參照。

(238) 北阿各地の史前藝術として岩壁繪畫の面白いものがあり、中には、今日同地方に棲息しない動物畫がある所、及びカプシアン文化の分布區

く。要するに歐洲後期舊石文化の藝術的作品としては、總てが特例とすべきであつて、我內地に舊石文化を見るとしても、全く期待し得ない。

四十　遺物學的研究の綜括

今概觀した遺物學的內容を綜括すると、其出土天然遺物に就ては、多く姉妹學的研究に待つ所ではあるが、其種の決定に基いて、如何なる文化關係を持つかを、研究すべきである。特に人類として無くてはならない、食料方面へ歸納し得るものが、幾何存するかに就ては、注目すべきである。もし食料殘骸中より、主要なる狩獵對象が發見することが出來れば、これが獵法獵具と對比研究に導かれ、一面からは天然、人工兩遺物相關研究と云ふことゝなる。

人工遺物の研究としては、土器の如き研究上の手係りが無いから、必然的に石器や骨角器が重心を形成する。これ等の研究に當り、先づ夫々の特徵に基いて、類形を區分し、其區分ごとに典形的と認めらるゝものより、外周的に亙るものに就て、各々其型態、術工に就て、研究を行はるゝものであるが、常に其全般の觀察を等閑に附してはならない。特に一二特異物等の抽出的研究は、甚だ危險である。平凡なる多數こそ、其內容を最もよく告白して居ることを忘れてはならない。又藝術的作品は、已述の如く、我內地に舊石文化を見ても、多くを期待し得ないが、萬一にも發見したからとて、矢鱈に歐洲後期舊石藝術などゝ比較するは、考へものである。夫々其文化を背景として其藝術の生る可き基礎を明にして後、彼我藝術上の或る近似現象が認めらるゝならば、非難は無いが、單なる抽出的比較は、無意義と考へる。

又遺物學方面から、直に文化階梯論等、時代に關した歸納は、愼む可きことゝ考へる。これも單純な考へから

Fig. 50

藝術的作品例（N. G.）

1－2　石製垂飾
3－6　齒牙製垂飾
7－12　貝製垂飾
13－15　形象術工品

佛、Laugerie-Basse 出土
（Magdalenien）
（nach P. Girod u. a. (L. 8)）

貝等で、これ亦歐洲後期舊石所產が多く、アフリカ、ケニア地方の外は疑い存するものがあり、明言し得ない。[245]石製としては、只小石に有孔せられた普遍的な垂飾のみが見らるゝが、兎に角舊石文化に於ても、石へ穿孔する術工が生れて居つた所は、認めねばならない（第五十圖1. 2.）。骨角齒齒牙の有孔垂飾も歐洲後期舊石には、廣く見らるゝが、歐外には聞知して居らない[246]（第五十圖3―6）。特に面白く見らるゝのは、歐洲後期舊石人が介殼を愛好した所であつて、これも骨角垂飾と同じく、同文化としては比較的普遍化して居る[247]（第五十圖7―12）が、これも歐外には今の所見ない。以上の樣な單純な作品であつたなら、若干なりとも藝術心の芽へて居る舊石文化なれば、所有せられても不均衡とは思はれない。

Fig. 49
藝術遺留物の一例（N.G.）
佛. La Geniére 岩陰B層出土
(nach C. Gaillard u. a.; L'Anthr. XXXVII. 1927)

舊石所產の形象術工品も亦、歐洲後期舊石文化の特產で、其姉妹文化を除けば、全く他に見ないし、且つ其術工品中には優品もあり、彼れ等が著しく藝術に傾いて居つた所產で、一般舊石文化の標準としては、餘りに優れ過ぎる。今述べた天然物加工品の程度ならよいが、石偶、動物彫像、各種浮彫、複雜な有紋加飾品等其多くが、餘りに飛び離れて居る。從つてこゝに總てを略するが、同じ術工品でも最も簡單な一例だけを圖示（第五十圖13―15）して置

限り、これを想起し得ない。もしも其文化内容に特異相のない文化であるならば、舊石藝術を有するとしても、簡單古拙のものを見るが當然に思はれる。

以上の見地よりすれば、天井岩壁等の繪畫所在に就ても、多くの期待を持たれないし、萬一にこれを見ても、それが舊石文化所産であるとの證明が確立せられねばならない。(241) 比較的期待せられ得るものは、通常遺物層中に包含せらるゝ、小品な出土物である。今これに就て概述して參考に供する。

三十九　出土藝術的作品の概要

石器や骨角器にして藝術的意義を保有するものがあるけれども、暫くこれを保留して、單なる出土藝術的作品を見ると、大態二つに分けられる。其一つは石塊や骨角片等に繪畫、紋樣などを畫かれたもので、其石や骨角には特別の意義を有して居らないもの＝今これを藝術遺留物と云ふ＝と、他は彫刻物とか裝飾品とか、其個體に藝術的な意義あるもの＝これを藝術的作品と名ける＝とである。

前者は、天井岩壁畫等の一延長であり、歐洲後期舊石所産で、天井岩壁畫と同樣、特殊發展の一現象であるから、こゝには略する(242)（第四十九圖）。後者の藝術的作品は更に二分し、第一は天然物を利用して、何等かの加工を施ししたもの＝これを自然物加工品と云ふ＝と、第二は、全く人爲的に所望型態を作出したもの＝これを形象術工品と呼ぶ＝とである。

天然物加工品として、最も有り得るものは、(243) 有孔等の垂飾であり、(244) これを原料上から區分すれば、石、骨角、齒牙

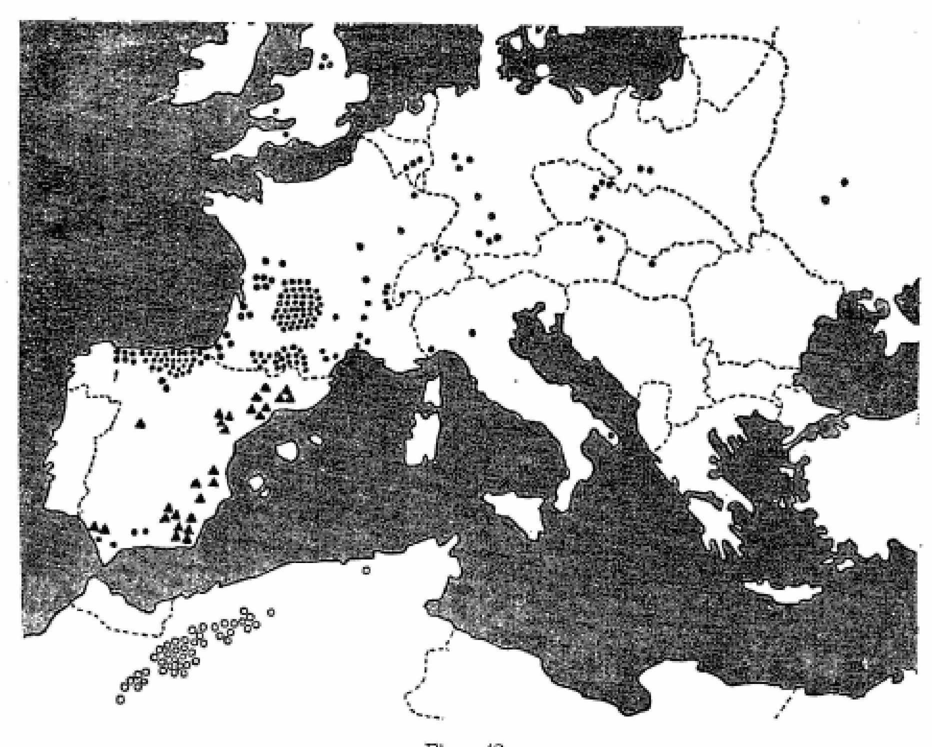


Fig. 48.
舊石並に史前藝術分布一覽
●歐洲後期舊石所產（出土品を含む）
▲カプシアン岩壁繪畫
○北阿史前藝術
（nach H. Kühn; Kunst u. Kultur d. Vorzeit Europas.）

なり、二三の特異例の外、見る可きものなく、天井岩壁繪畫に至つては、これ等中心外の諸地には全く見られない。卽ち優越した傑作例は、全く其文化中樞地に存するのみである。（第四十八圖）從つてこれ等藝術作品なるものも、大局より見れば、時間的には歐洲後期舊石文化の所產であり、空間的には佛國地方を中心とするに過ぎない、一特異現象とすべきであり、全舊石文化に必ずしもこれが隨伴すべきものとは定められない。從つて我が內地に舊石文化と覺しきものを發見したからとて、必ずしも藝術的作品が附隨出土するとは限らない。勿論出土しても不合理はないけれども、佛國中心地の如き作品は、文化內容に近似現象を見ない

居らなかつたが、今後はこれを區別することゝする。

(230) 中石文化に於ける有齒骨銛例は、拙著、(L. 24.) Taf. VI. 3—6. : S. 128. Fig. 24. b. : S. 149. Fig. 35. g—k. m. に掲出してある。新石文化に於ては、北歐にもあり、又我東北地方繩紋式文化よりも出土して居る。

(231) マグダレニアンの有拘骨銛は、拙著、歐荷、譯. S. 53—59. Fig. 55—58. に掲出して居る。但し同書では假名でハルプンと書いた所もあるが、今回から有拘骨銛とする。又この有拘骨銛にして、尖端の所に拘部が一つしかないものは、單拘骨銛、多數あるものは、多拘骨銛と、必要に應じて區別する。但しマグダレニアンに於ては、其殆んどが、多拘であつて、單拘は例外的である。

(232) 投擲補助器に就ては、拙著、歐荷、譯. S. 59—62. Fig. 60—64. 參照。その中には傍證例にも及んで居る。

(233) 縫針に就ては、拙著、歐荷、譯. S. 65. Fig. 72. に小針として例出してある。又これ以外、特別な大形なものは、P. Girod, u. a. (L. 8.), PL. LXXVIII. 1—7. に掲げられ居るが、遺憾乍ら大形の三個悉く折れて、全長が知られない。

(234) 用途不明器の一例は、拙著、歐荷、譯. S. 62. Fig. 65—66. にマグダレニアンに於けるものがある。

三十八　藝術的作品の一般

歐洲前期舊石文化中には全く藝術的要素を見ないに反し、其後期舊石藝術として、天井、岩壁等の繪畫、乃至は浮彫、彫刻等の作品に就ては、餘りに有名である。[235] この姉妹文化の歐洲カプシアンにも、岩壁繪畫を見るが、[236] グリマルデアンには未だ發見がない。[237] 又北阿[238]並に南阿[239]等にも所謂史前藝術に屬する多くの岩壁繪畫もあるが、果して舊石文化所産かは更に吟味を必要とする。

又歐洲後期舊石藝術の分布地域を見ると、佛國平地を中心とし、カンタバリーに亘つて見らるゝが、英、獨、瑞西、[240] チエック等に入ると、文化内容に著しい地方色が見らるゝに比例して、其藝術的作品も同様に低下僅少と

(217) チーリナシアンに於ける骨劍の一例は、拙著、歐舊、舊. S. 20. Fig. 21. 1. に例出してある。

(218) 刺突器例は、拙著、歐舊、舊. S. 21. Fig. 22. 7, 9, 11.（オーリナシアン）S. 36. Fig. 38. 1.（ソリユートレアン）例を揭出、マグダレニアンは例出してない。

(219) 歐洲後期舊石文化に於ける骨角尖頭器例は、拙著、歐舊、舊. S. 21. Fig. 22. 4. 5. 8. ?（オーリナシアン）S. 36. Fig. 38. 3.（ソリユートレアン）がある。

(220) 骨角匕例は、拙著、歐舊、舊. S. 36. Fig. 38. 5. にソリユートレアンの一例を示したのみである。

(221) 指揮杖例は、拙著、歐舊、舊. S. 20. Fig. 21. 2. にオーリナシアン例があるが、未だ彫刻其他裝飾意匠がない。S. 63. Fig. 67.; S.64. Fig. 68—69. に立派な藝術的なマグダレニアンの例が出してある。

(222) 剡尾尖頭器は、拙著、歐舊、舊. S. 19. Fig. 20.（挿圖逆入）に三例を出し、剡尾骨銛としたが、今回これを改める。

(223) 尾部削平尖頭器は、拙著、歐舊、舊. S.21. Fig. 22. 10.（オーリナシアン）S. 36. Fig. 38. 2.（ソリユートレアン）S. 54. Fig. 53. 向つて左三個（マグダレニアン）の諸例があるが、同書では斜尾骨銛と云ふたが、今回これを改める。

(224) 有孔尾部削平尖頭器例は、拙著、歐舊にない。本器は南佛マスタジールに數例を見る外、一例がスキス Kesslerloch bei Thayngen (M. Hörnes; (L. 11) S. 68. Fig. 24) にある。

(225) 胴部削平尖頭器で直軸なしのは稀である。其一例は拙著、歐舊、舊. S. 65. Fig. 71. 上の一個. 但し同書には斜尾骨銛とし、且つチーパーマイヤーに從つて、下の一個はソリユートレアン形、上、卽ち本器はマグダレニアン形と書いて置いたが、其後調査して見ると、出土地もカンタバリー地方とのみであり、類例も稀であるから、この兩形區分は疑はしい。餘りに決定的であり、蓋然性に乏しい。

(226) 尾部剜抉尖頭器は、拙著、歐舊、舊. S. 68. Fig. 74. に例尾骨銛として例示して居る。尙本器はマグダレニアンの特徴であり、剡尾尖頭器がオーリナシアンの特色であるのと對比せらるゝ。これに關する研究は、E. Cartailhac (L. 5) Tom. II. にある。

(227) 側抉骨角尖頭器は、拙著、歐舊、舊. S. 36. Fig. 38. 9.（挿圖逆入）に典形的一例を示してある。これは申すまでもなくソリユートレアンの一特徵である。且つこれを型態學的に眺めると、石製品に對し異材料同目的の一好適例である。

(228) 斜軸關係の一端に就ては、拙著、歐舊、舊. S. 37—39. 參照。

(229) マグダレニアンに於ける有齒骨銛は、拙著、歐舊、舊. S. 55. Fig. 54. に例示してある。但し同書では未だ有齒有拘骨銛に就て、區別して

三十七　骨角器小括

以上舊石文化に於ける骨角器を、一通り眺めて見ると、已述の如くマグダレニアンを除けば、甚だ單純な器具のみで、舊石文化全般としては、未だ發展して居らない。それ故、マグダレニアン文化を直接對象として研究するなら、骨角器に就ても、より多くの研究を必要とするが、一般的に舊石文化を見るには、多くが其必要を見ない。特に我が內地に舊石文化を見るにしても、骨角器として特異發展すべき理由を考察し得ない。マグダレニアンの如きは、大陸平地々方で氷河環境に培はれた文化であるから、少なくとも天然環境がこれに對比せらるゝ様な狀態になければ、骨角器發展の一基礎的條件が整はない。寧ろ普遍的內容を備ふると見る方が穩當である。しで見れば骨角器としての發展は、餘りに期待が出來ない。あつても普遍的な單純なものと考へてよい。こゝでは、舊石文化中にも、特異な文化相を備ふるものには、此の如き骨角器もあると云ふ舊石文化認識の一端になれば、例出した目的が遂せらるゝ。

(212) (27) 參照。
(213) オーリナシアンの骨角器に就ては、拙著、歐舊、難. S. 19—25. Fig. 20—22. 參照。
(214) ソリユートレアンの骨角器に就ては、拙著、歐舊、難. S. 37—39. Fig. 38—39. 參照。
(215) 北岡舊石文化所產として、拙著、歐舊、難. S. 87 Fig. 87. に骨角刺突器を尖頭器として紹介してあるが、これは刺突器と改める。又其所屬が果して舊石文化であるかは、此頃疑ひ出して居る。或は中石所產と見る可きかとも考へて居る。其他の地方に就ては (28) 參照。
(216) 舊石文化に於ける磨製術工に就ては (26) 參照。

これ亦巧緻な彫刻を施された藝術的な作品が多い。本器は未開民族例、ローマ時代の使用例等に基き、傍證せられて、かく考定せられたのであるが、單なる實用品としては、附飾多く立派過ぎる。[32] 其尾端は多く切損して知ることが出來ないが、中には尖端を備へた骨劍兼用もあるまいか。私は投擲補助器と認めるにしても、單目的のみでなく、指揮杖、或は骨劍等をも兼ね備ふるものがあると考へる。而して本器は單にマグダレニアンに見るのみで、他の舊、中、新石にも類例を見ない。



Fig. 47
1. 投擲補助器 (N. G.)
佛. Saint-Michel 出土 (Magdalenien)
(nach E. Piette ; A-P-A-R)
2. 縫　　針 (N. G.)
英. Church Hole 出土 (同　　上)
(nach D. Garrod ; (L. 6))

9. 縫針 (Aiguilles=Naehnadel) (第四十七圖2)

鋭利な尖端を備へ、小形精良細身であつて、頭部に穿孔せられて居る。其長さは通常五－一〇糎の間にあり、それ以上の大形は稀である。[33] 本器はソリュートレアンにも見得るが、其殆んどがマグダレニアン所產であり、他の舊、中、新石文化にも、これ程の精品は殆んど見られない。

10. 其他の骨角器

以上舊石文化中の主要骨角器の概目を述べたが、猶この外に、骨角器が無いのではないが、其多くが用途不明やら、[34] 切損出土して資料不完やら、乃至は單一類例ない出土等であるから、こゝに省略する。

比し甚だ稀である。然し中石以降にも見らるゝ。[23]

Fig. 46
1. 有歯骨銛（Magdalénien）（½N.G.？）
　a. 佛. Laugerie-Basse 出土
　b. 佛. Gourdan 出土
　（nach L. Capitan u. a. (L. 4)）
2. 有拘骨銛　（同上）
　a. ベルギー Goyet 出土（½N.G.）
　（nach D. Garrod；(L. 6)）
　b. 英. Kent 洞窟出土　（同上）（½N.G.）
　c. スキス Kesslerloch 出土（⅔N.G.）
　（nach H. Hoernes；(L. 11)）
　d. チエック Kostelik 洞窟出土（½N.G.）（同上）

7. **有拘骨銛**（Harpun）（**第四十六圖2**）

本器は有歯骨銛の一層發育した型態を有する尖頭器の一つで更に普遍的なものである。本器も有歯骨銛と同じく、マグダレニアンにのみ見、[24]未だ他の舊石文化に見られない上、同文化の本器が特異な發展を遂げた、精良な傑作の存する點に於て、特殊扱にせらるゝ。但し本器の型態術工に就ても研究すべき多くがあるけれども、此の如きものが、他の舊石文化に多出するとも思はれないから、總てを略する。

8. **所謂「投擲補助器」**（Propulseur=Wurfstange）（**第四十七圖1**）

本器は指揮杖に等しい大形器で、其頭部に投擲に際し投鎗の尾端に挿入すべき拘部と考へらるゝものが存する。

削平部が胴部にあるもの。但し本器は胴部削平の關係上、斜軸的傾向が著しい。從つて斜軸尖頭器として取り扱はるゝものが多く、こゝに述べて居るものは、直軸類に過ぎない。

5.) 尾部刳抉尖頭器 (Pointes à base fourche)[22]（**第四十五圖5**）

本器は其尾端に刳抉部の存する點は、1.)の割尾尖頭器と同樣であるが、本器の刳抉部は、より深く大きく、且つ孔部が貫通して居るに拘はらず、前者程に尾部が大きくない。本器はマグダレニマン所産で1.)とは所屬を異にする。

6.) 側抉骨角尖頭器 (Pointes á cran en os=Kerbspitze aus Knochen)（**第四十五圖6**）

本器は特殊石器として述べて居る、ソリュートレアンの一特徴である側抉尖頭器（第三十二の18參照）の一種であつて、其材料が單に石に代るに骨角を以てしたに過ぎない。[23]

7.) 斜軸（曲軸）尖頭刺突器類（**第四十五圖7**）

以上述べてきた尖頭器類は、主として直軸のものを指したのであるが、往々斜軸や曲軸のものが混用せられて居る。この中を分類すると、色々にもなり、又研究の價値あるものもあるが、[24] 餘りに複雜となるから、こゝに省畧する。

6. 有齒骨銛 (Pointes d'os barbelées=Fischgabel=Gezähmte Fischspeer)（**第四十六圖1**）

廣義の尖頭器に屬するが、單に尖端を備ふる外、一側乃至兩側に小なる齒狀の凸起を附し、其刺突効果を大にするのみならず、場合により刺突後これが脫落を防ぐ用をも便する刺突用の器具である。其齒部が著しく發育すれば最早や齒部ではなく、拘部となり後述して居る有拘骨銛となる故、極限的には區別もせらるゝが、兩者の間には型態連絡が見られ多くが型態學上、有拘骨銛の古形と考へられて居る。（第四十六圖1）

本器は我が國などから見れば珍しくも無いが、舊石文化にも既に本器を有すると云ふ點が、特筆すべきであり、且つ僅にマグダレニアンにのみ存するから、此の如く特殊器とした所以である。但し本器の出土は、有拘骨銛に

せられた溝がある。オーリナシアンの一特徴。

2.) **尾部削平尖頭器** (Pointes base biseau=Knochenspitze mit abgeschrägter Basis)[illegible]（**第四十五圖2**）

本器は其尾部に削平部が多く斜めに作出せられ居るが、單に一側のみ（單削平）と、兩側よりしたもの（兩削平）との二様があり、前者はソリュートレに始まり、マグダレニアンに多出する。後者は主としてマグダレニアン所産である。

Fig. 45.
特種骨角尖頭器 (½ N. G.)
1. 割尾尖頭器 (Aurignacien)
佛. Gorge d' Enfer B. 出土
(nach P. Girod; (L. 7))
2. 尾部削平尖頭器 (Magdalenien)
佛. Laugerie-Baase 出土
(nach P. Girod u. a. (L. 8.))
3. 有孔尾部削平尖頭器 (同上)
(同 上)
4. 胴部削平尖頭器 (同上)
(同 上)
5. 尾部割抉尖頭器 (同上)
佛. Lourdes 出土
(nach E. Cartialhac; (L. 5))
6. 側抉骨角尖頭器 (Solotréen)
佛. La Colombière 出土
(nach L. Mayet; La Colombière)
7. 曲軸尾部削平尖頭器 (Magdalenien)
(2に同じ)

3.) **有孔尾部削平尖頭器**[illegible]（**第四十五圖3**）

尾部削平尖頭器の削平部に孔が穿たれるもの。マグダレニアンに數例ある。

4.) **胴部削平尖頭器**[illegible]（**第四十五圖4**）

三十六　特殊骨角器の概觀

以上の外、主として歐洲後期舊石文化に屬する骨角器でこれを一般大局から見れば、例外的な特殊器がある。これ等に就ては單に列擧して、舊石文化認識の一助とするが、決してこの樣な器具が、普遍化して居るとは考へられない。

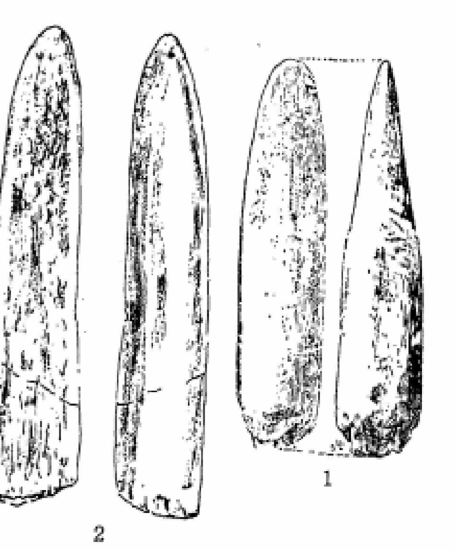


Fig. 44.
骨　角　匕
1. 佛. La Vallée du Roc 出土 (Solutréen) (nach H. Martin; (L. 14)) (½?)
2. 佛. Laugerie-Basse 出土 (Magdalenien) (nach P. Girod u. a. (L. 8.)) (½N.G)

4. **指揮杖** (Bâton de commandment=Commando-Stab)

本器は大形棒狀をなし、其多くが頭部に大きな孔を穿たれて居る。其用途に就ては解らない。只立派な浮彫等彫刻が附されたものが多い所から、古くラルテ (E. Larte, 1801—1871) によつて指揮杖（王笏）と名づけられ、これが今日通用して居るが、我新石の石棒と同樣、實用品と思はれない節が多い。(註)

5. **特殊尖頭器類**

こゝに包含せらるゝものは、中々多い。尖頭器ではあるが、何れかの部分に特殊構造を有するものである。

1.) **割尾尖頭器** (Pointes á base fendue=Pointe á fente=Knochenspitze mit gespaltener Basis)(註)（**第四十五圖1**）

尖頭器にして、尾部が稍々卵形に張り出し、且つ其部分が幾分か偏平であるが、これを側面から見ると其部分に、割截

2. 骨角尖頭器（Knochenspitze）　第四十三圖

本器は、石製尖頭器と略同様の構成目的を有し、我新石中に見る一部の骨鏃の如きも廣義の本器中に編入せられ得る。本器に於ても二十糎以上に達する様なものは、多く骨鎗と呼ばるゝが、これ亦舊石文化中には稀である。本器の多くが端末が細いから、頭と云はないで、尾と云ひ、往々この尾部に裝着に備ふる爲、若干の加工が見らるゝものがある外、尖端と直軸長身の胴部とを有するに過ぎない。從て特徴に乏しく、其多くが一〇―一五糎の間にある。其分布も大約刺突器と同様であり、(註)これ亦舊石文化にのみ見るものでない。

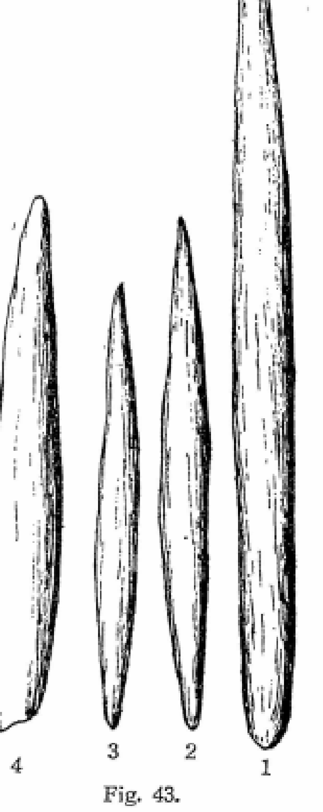


Fig. 43.
骨角尖頭器 (N. G.)
1—3. 佛. Laugerie-Basse 出土 (Magdalenien)
(nach P. Girod u. a. (L. 8))
4. 佛. Pape 洞窟出土
(nach E. Piette ; L'Art pendant L'Age du Renne.)

3. 骨角ヒ　第四十四圖

尖頭器、刺突器等の尖端利用器に對し、本器のそれは鈍化し、最早や鋭利な穿貫刺突の用に服し得ない、端末を以て剳抉等恰も鑿の様な用途に服するものを指すのであつて、中に刃を備ふるものもあるが、骨角なる性質上鋭利ではない。歐洲では本器を往々、篦（Spatule=Spatel）乃至は鏝（Lissoir=Glätter）と稱するが、(註)特義を持つのでない。其大さは、長さ一〇―二〇糎、幅一―三糎内外が通常である。これ亦舊石特産でない。

に過ぎない。

1. 刺突器（第四十二圖）

尖端を利用して、刺突穿孔等の用に供するものであり、利器であるのか、日常の什器であるか、明でないものが多い。其大形なものになると、骨劍[217]（Poignard en os=Knochendolch）乃至刺突武器（Stosswaffen）等と呼ばれもするが（第四十二圖1. 3.）、舊石文化では稀である。其中小形なものは、用途に於て、石錐と相通する點も存する

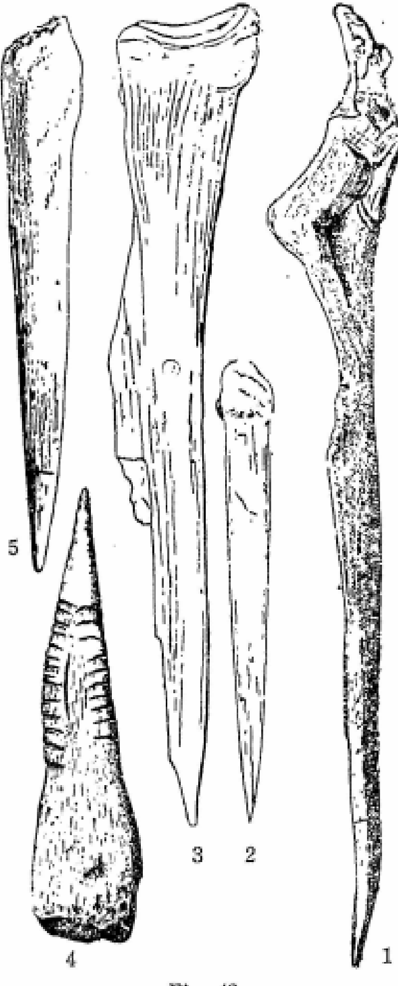


Fig. 42.
骨角刺突器
1. 骨劍. 佛. Laugerie-Basse出土 (Magdalenien)（nach G. et A. de Mortillet；（L. 17)（[illegible] N. G.）
2. 刺突器. 墺. Willendorf 出土 (Solutréen？)（[illegible] N. G.）（nach M. Hörnes；(L. 11)）
3. 骨　劍.（2に同じ）
4. 刺突器. 佛. Grotte de l'Eglise 出土 (Magdalenien ？)（1に同じ）（[illegible] N. G.）
5. 同上. 佛. Vallée du Roc 出土 (Solutréen)（nach H. Martin；(L. 14)）

が、後述して居る骨角製の尖頭器と比較すると、本器には通常頭部を備へ且つ大形なものを包含する點で、區別せらるゝが、互に形態連絡は認めらるゝ。

本器は歐洲後期舊石各文化[218]、北阿、ケニア、シリア地方、印度等に廣く見らるゝと同時に、舊石文化に限つたものではない。

でない。試みに歐外を眺めて見る。北阿[215]エジプト等アフリカの舊石文化中には殆んど骨角器の發育がなく、僅にシリア・パレスタイ及び印度シベリア等の各地方に若干を見るけれどもこれ亦存在して居ると云ふに止まり、決して發展しては居らない。それ故舊石文化の一般としては、骨角器は發育して居らないのが通常と見てよい。其個々に就て見るに先きだち、骨角器なる性質を一應基礎的に吟味して置く。

骨角器なるものは、其原料たる骨角の性質に支配せらる可きは申すまでもない。この骨角なるものは、通常長身筒狀をなし、これを木質に比較すると、より堅硬ではあるが、彈力に乏しいから、搞く様な場合には折れ易い。石質に對しては重量が輕いから重量利用には不充分である。即ち用途は刺突に傾き、且つ原料に制限があるから、形態の變化にも、大小の差にも乏しくなるのが、其一般性質である。一面に於ては、角牙の如きは天與の刺突器であるから、これが利用も容易に氣付かれもする。かく見てくると、特異の發達なき限り、骨角器としての範圍も狹められ、且つ變化に乏しい所以も考定せられ得る。

これを術工學的に見ると、殆んど打製し得ない。少なくとも細部は磨製しなければ、精品は得られないから、骨角磨製の術工を會得しない限り、出現は困難であり、こゝにも制限がある。[216]それであるから現實に於て、如上の如く舊石文化一般としては、發展を見て居らない。

三十五　普遍的骨角器

舊石文化に於ける普遍的骨角器として見るものは、種類に乏しく、漸く刺突器、尖頭器、骨角匕等を數へ得る。

利用加能なるの故を以て、矢鏃にこれを細石器と認定するは、危險が伴ふ。それ故、本文の如く小剝取を認め得るもの丶みを採用するのが安全確實である。但しこの剝取なき細石器様石片を、明確に使用した現品出土が伴ふならば、其際には、細石器様石片利用として、これを取り扱ふ可きである。

(208) 細石器の分布は、文化階梯を問はず見たならば、歐洲、アフリカ、小アジア、インド、シベリア、滿洲國蒙古支那等に見らる丶。但し滿、蒙、支の細石器として報ぜられて居るなかには、(207)に述べた、石屑と細石器とに就て、幾何まで認識したものであるか、再吟味を必要とするものがある。

(209) 文化階梯上から見ると、本器は歐洲後期舊石、アフリカ等歐外舊石より中石各文化、新石文化に亘り中には金石併用期にまで下るものがある。

(210) 巨石器に就ては、(158)參照。

(211) 打製石器であつて、舊石器中に見ないものは、本文に掲出した以外に、石環の様な孔部を有する有孔石器、乃至は左右に縊れ様の凹抉部を存する石器等、數へることが出來るが、其多くが一般的でないから略する。

三十四　骨角器の一般

舊石文化に於ける骨角歯牙器—略して單に骨角器と云ふ—としては、殆んど發育を見て居らない。只僅に歐洲後期舊石のマグダレニアン文化に異常の發展を見るのみであるけれども、これは特例である。もしこのマグダレニアン文化の骨角器を除いて他を見るなれば、殆んど特筆す可き何物もない。根本に於て歐洲前期舊石文化中には、骨角器と稱す可きものがない。(212) 歐洲ではオーリナシアンに始めてこれを見るけれども、未だ發達して居らず、(213) ソリユートレアンには石器發展し、(214) 骨角器が平行してない。只マグダレニアンのみが、骨角主用文化で石器に見る可きものが無いけれど、これは歐洲の地に於て、且つ氷河環境のもとに發生した現象であつて、決して一般的

(195) グリマルディアンの本器に就ては、R. Vaufrey; (L. 30) Fig. 28. 29. 32. 34. 等の中に掲出せられて居る。

(196) 月桂葉鏃に就ては、拙著、歐舊、鏃. S. 31—34. 及び Fig. 32—33. 參照。特に Fig. 32. の方は精品であり Fig. 33. は前者より劣つて居る。又中には本器にして巾廣きものを、特に柳葉鏃 (Pointes en feuille de saule=Weidenblattsptze) と呼ぶものもあるが、單に樣式上の一小變化に過ぎず、特にこれが分類の必要はない。

(197) 側抉石鏃に就ては、拙著、歐舊、鏃. S. 34—36. 及び. Fig. 34—36. 參照。但し同書ではポアンタクラーン乃至側缺鏃と稱したが、今回改める。本器に對し有柄石鏃とも稱す可きかと考へたのであるが、有柄骨鏃と紛れ易い故、かく呼ぶことにした。

(198) 兩側刳抉の一例は、前掲拙著、Fig. 36. 弁. にあるがこれ以外に見て居らない。

(199) 本器に最も近似形を有するものは、エジプトの新石乃至金石文化に於ける、側抉せられた石包刀であり、中に尖端を有するものがある。(J. de Morgan; (L. 16). Tom. II. S. 61. Fig. 55.: S. 62. Fig. 56. u. a.)

(200) 本器は北阿の S'baikia(EL Ouesra)發見に因んだものであり、其所屬文化に就ては、狹義のカプシアンに入れ可きであるか、所謂プレー・カプシアンに編入するかに就て問題があるのみでなく、中には新石所産と疑はれたことすらある。今これ等の內容深くにまで觸れないで、單に北阿に於ける舊石所産とのみ認むる。

(201) 本器は、拙著、歐舊、鏃. S. 51. Fig. 49. 170—176. に圖示してあるが、單に彫刀として、説明を加へてない。今同本名の如く改める。

(202) L. S. B. Laekey; (L. 13). Fig. 26—28. 參照。

(203) 本器の圖例は、拙著、歐舊、鏃. Fig. 48: Fig. 49. 169. に掲出し、本器の一亞形とも稱せらるゝ樣な、シシリー島出土例は、同書、S. 84. Fig. 90. に出してある。

(204) 本器の圖例は、拙著、歐舊、鏃. S. 53. Fig. 52. にある。

(205) 新石文化に於ける鋸齒形石器は、歐洲北歐系 (O. Montelius; Minnen från vår Forntid. I. 1917. No. 576.) に典形的な一例があり、エジプトにも見らるゝ。

(206) 細石器の概念に就ては、拙著、(L. 24), S. 119—121. 參照。特に S. 120. Fig. 18. に舊石文化の本器例がある。

(207) 石器術工に於て、打剝片利用の行はるゝものにあつては、其石器作出に當り、多大の打剝片の生ずることも當然である。其打剝片にして、何等使用の意識がなく、術工上、生じたものを石屑と稱するが、この中には、小形であり、尖端や刄を備ふるものも多數生ずることがあるから、勢、細石器と近似狀を呈する。從つて最初から作出意志がなくとも、これ等の近似狀をなすものは、細石器の用途にも服し得る。只其

の石核もマグレモージアン（Taf. II. 10. 11.; S. 118. Fig. 16. A.）中に例出してある。

(185) 圓形掻り槌としての典形的の一例は、拙著、歐舊、Ⅱ. S. 218. Fig. 129. 71. アシユレアンの石器中にある。又エジプトの圓板形石器に就ては、本誌前號、拙稿、S. 189. に觸れて居り、此國にも出土を見て居る。

(186) オーリナシアンの龍骨形石掻例は、拙著、歐舊、續. S. 14. Fig. 15. にある。但し同圖は G. G. Mac Curdy に依つたが、其後調べて見たら、本器に就ての研究、L. Bardon, J et A. Bouyssonie; Grattoir caréné et ses déivés.（拔刷に基くも、原雜誌、年號等未詳。恐らく Rev. men. Ecol. Anthr. Paris 誌と想像して居る）の第一圖であつた。

(187) マグダレニアンに於ける龍骨形石掻の一例は、拙著、歐舊、續. S. 52. Fig. 50（挿圖逆入）にある。

(188) 圓形細石器の一例は、拙著、歐舊、續. S. 84. Fig. 91. シシリー島出土のがある。但し同著では、これをカプシアンとしたが、グリマルデイアン設定の今日、其何れに屬す可きか、將來に保留する。

(189) 歐洲に於ても、圓形石掻と平圓板石剝との區別は不明瞭のものがある。特に人々によつて、石掻とも石剝とも見られて居るから、根本を明に定めてから見ないと、判斷に困むことが生ずる。

(190) 歐洲舊石の平圓板石剝と思はれる例は、見ないのではないが、平面と側面とが見られ、([illegible]) に述べた樣な不安がない例を見出して居らない爲、これを掲出し得ないのは遺憾である。又中石文化、マグレモージアンに於ける一例は、拙著、（L. 24）S. 118. Fig. 16 C. に掲出してある。但し同書には薄形皮剝等と書いて居る。

(191) 拙著、歐舊、續. S. 17—18. 及び Fig. 16. に於て、本器を原名でラームエトラングレーと稱したが、今回これを繭形石器と稱する。而して本器の例を掲出したが、歐舊に掲出した以外に、典形的と稱し得る程のものを見出さない。歐外に於ても同樣である。

(192) 本器は最初佛國 Font Robert 洞窟に於て、其典形的なものが多數發見せられ、これを其發見研究者が次の樣に發表して居る。 Abbés L. Barbon, A. &. J. Bouyssonie; La Grotte de La Font-Robert. (Corréze). Cong. Int. Anthr. Arch. Monaco. 1906. Tom. II. P. 172—184.（更に同報告は補訂の上、一九〇八年に發表せられた）而して其發見者達は、これを表記の如く有柄尖頭器と報告したが、其後に別記の如くフオン・ローベル尖頭器等其發見地名に因んだ稱呼が慣用せられて居る故、こゝにこれを並用して置く。本器に就ては、拙著、歐舊、續. S. 18—19. 及び Fig. 17—18. 參照。

(193) 拙著、歐舊、續. Fig. 17. に掲出してある方が、一般的であり、Fig. 18. の方は殆んど左右等齊と認めらるゝ稀なる一例である。

(194) 本問題に就ては、拙著、歐舊、續. S. 18—19. 參照。

13; Gravette typus. 同. S. 15. 及び Fig. 14. 參照。但し其後研究して見ると、第一樣式であるオーディ形は、出土稀であり、且つ尖頭器と見る可きか、双器とすべきかの疑もある。他の二者は出土が多い。

(177) 歐外に於ても、尖頭器は挿圖に揭出した、北阿、ケニアの外、シリアに見らるゝが、エジプトは新石以降とせらるゝ階梯には見らるゝが、舊石文化に於ける存否は未詳である。

(178) 双器の根本は、本文の如く日常器具で狩獵闘爭の具でない。從つて史前人類生活の上から見れば、これを以て文化を代表せしむる如きは、本器に對する過重の負擔である。然るにメンギン（O. Menghin; (L. 15)）の如きは、主要闘具たる握り槌を有する文化を、握り槌文化（Faustkeilkultur）とするは認めらるゝも、この文化に對應して双器文化（Klingenkultur）と稱して居る如きは、了解に苦む。もし必要であるなれば、前者は打突器文化であり、後者は刺突器文化と區別せらる可きであり、歐洲にもこの樣な認識不足がある。

(179) 双器に就ては、拙著、歐舊に於て多くを述べて居らない。搜出するなれば、マグダレニアン各種石器（續. S. 51. Fig. 49.）の中の下段、左より二個及び下段右端の三個が双器であり、左より三番目が石搔と双器と兼用と見らるゝ。カプシアンに於ては、北阿チユニス（續. S. 79. Fig. 84. 2. 3.（挿圖道入）; 同. Fig. 85. 1.）スペイン（同. S. 80. Fig. 86. 2. 3.）等がある。尙(176)に述べたが、オーリナシアンのオーディ形尖頭器（同. S. 11. Fig. 12.）中の316の如きは、寧ろ本器とすべき樣に考へらるゝ。

(180) 歐洲の發掘報告中にも此種混同の多いものが見らるゝ。確實なる双器と双器様打裂片とは區別する方が間違ひがない。

(181) 石錐であつて舊石所產の多くの如くに、其尖端が特に多く突出して居らないものは、寧ろ石錐と云はず、刺突器とでも稱し、我新石等に見る樣な、細身尖銳で長身なものを石錐として區別したらとも思ふたが、中間にある型態を區別することが困難であつた爲、等しく石錐として取扱ふことにした。

(182) 歐洲前期に於ける石錐例は、拙著、歐舊、（正. S. 199. Fig. 114. 上より第二段. 右端）にシエルレアンの一例があるが餘り顯著でない。後期舊石に於ては、（續. S. 32. Fig. 34. 136. 139.）ソリユートレアンに於ける體部を有する二例と、同圖、（142 143）が體部なきものゝ例とを出してある。

(183) 石核に對しても、從來殺製殘石其他の稱呼を以てしたが、最近本名を附したものがあるに氣付き、この方が適當する樣に考へたから、これに從ふことゝした。

(184) 石核に就ては、拙著、歐舊では述べて居らない。歐洲後期舊石（文化階梯未詳）の一例は、拙著、(L. 20) S. 33. Fig. 10. に典形的な圓𡌛形の一例を揭出してある。又中石發見例は、拙著、(L. 24) Taf. II. 7. 及び S. 119. Fig. 17. 上. にマグレモージアン例がある。又不規形

皮剝（拙著、(L. 24.)等）と稱し、或は厚刄石搔とも云ふたが、今回これを單に「石搔」とし、最早や改めない。

(165) 石搔の用途に就ては、拙著、歐舊、II. S. 187—188. Fig. 106. に於て1通りを述べて居る。

(166) 石搔の歐洲舊石文化に於ける初現は、プレー・シエルレアン（拙著歐舊、II. S. 185. Fig. 104. 向つて右上）に始まり、シエルレアン（同上、II. S. 199. Fig. 114. 向つて右上. 同. 200. Fig. 115. 中央二個）ムステリアン（同. 253. Fig. 154. 上段の中央）オーリナシアン（同. 續. S. 18. Fig. 19.）ソリュートレアン（同. 35. Fig. 37）マグダレニアン（同. 51. Fig. 49. 上段向つて右より二番目. 下段向つて左より三番目等. 同.52. Fig. 51. 向つて右端）等を例出して居る。

(167) 歐外に於ても北阿、エジプト（前掲本誌前號參照）ケニア（第二十四圖參照）シリアパレスタイン等にも見て居る。

(168) 中石文化に於ける石搔の一例は、其後期に屬するカムピニアン（(42)參照）の報告、P. 23. Fig. 19.—20. に見られ、同じく後期のデンマーク貝塚時代にもエルテベレ貝塚等より出土を見て居る。(A. P. Madsen. u. a.; Affaldsdynger fra Stenalderen i Danmark, 1900. Taf. VI. u. a.) 但しマグレモージアンには只今適例を見出して居らない。其他に就ては、未だ取調べてない。

(169) 我新石等に於ける皮剝と稱せらるゝ中には石匙等の如き、本文4に述べて居る、石剝と稱せらるゝものまで含んで居る樣であるから石搔と石剝との區別を明にする爲、皮剝と稱せないことにした。同樣に英語の scraper 中にも兩者の區別明でないものが多い。

(170) 本器に對しても、從來、ラクロア、凝形皮剝ぎ、等と書いて居つたが、今回これを石剝として決定語にする。

(171) 歐洲舊石に於ける石剝例は、拙著、歐舊に於て、プレー・シエルレアン（II. S. 185. Fig. 104.（右上の一個を除く他の五個）同. S. 186. Fig. 105.）シエルレアン（II. S. 199. Fig. 114. 下の一個. 同. S. 200. Fig. 115—116. 中段の二個）ムステリアン（II. S. 254. Fig. 155. 上段左端. の中段左端等; 同. S. 258. Fig. 160.）暖ムステリアン？の亞形石器出土のクラピナ（同. S. 266. Fig. 167. 右側上. 下二個）等を例示して居るが、後期舊石文化以降に就ては、掲出して居らない。

(172) エジプト石剝例は、本誌前號、拙稿、S. 192. Fig. 5. 參照。

(173) ムステリアンに於ける石剝の好例は前註掲出の拙著、(II. S. 258. Fig. 160) である。

(174) カプシアンに於ける尖頭器の例は、拙著、歐舊、續. S. 79. Fig. 84. 下段の左端.（アフリカ）同 S. 80. Fig. 86. No. 1.（スペイン）。但し同書　續. S. 83. Fig. 89. のシシリー出土は、グリマルディアンの成立を許すなれば、これに編入せらる可きと考へる。

(175) グリマルディアンの尖頭器例は(174)參照。

(176) オーリナシアンの三樣式に就ては、拙著、歐舊に於て、Audi typus. 續 S. 13. 及び Fig. 12; Châtelperron typus. 同. S. 14. 及び Fig.

156）アシユーレアンに於ける楕圓形握り槌例は、拙著、歐舊、II. S. 215. Fig. 126.; S. 216. Fig. 127.; S. 217. Fig. 28（向つて左下）の三例を揭出した。但しムステリアンにも皆無ではない。其一例は、同拙著、II. S. 253. Fig. 254.（向つて左、三段目、三段目）にある。

157）エジプト握り槌の鈍端的特色に就ては、本誌、前號、拙稿、エジプトの舊石器、S. 187—188. 參照。

158）巨石器の詳細に就ては、未だ發表はして居らない。これが概要は拙著、(L. 24) S. 57. A. 參照。

159）一般に石斧と稱するものは、刄と重量とを利用する打割具を指すのである。我が國では、これを術工上から打石斧と磨石斧と區分して居るが、打石斧と稱せらるゝものゝ中には、必ずしも刄と重量とを備へたものゝみでなく、より廣く私の云ふ、土掻きまで包含せられて居る。それ故必要に應じて區別して考へなければならない。土掻きとの區別に就ては、拙著、神奈川縣新磯村字勝坂遺物包含地調査報告、（昭和二年）參照。

160）楕圓形握り槌乃至これに近似形の多數出土を見たのは、佛領印度支那にあり、これを握り槌と見るものもあるが、其出土地名に因んで、バクソニアン（Bacsonien）だのホアビニアン（Hoabinien）などと稱し、最近來朝せられたカーレンフエルス氏は、横濱市菊名貝塚發見の近似石器をキクナニアンと稱したいと提唱せられた。これ等は殆んど楕圓形に近く、型態學的に見て、刄十重量か刄十尖端十重量か判斷に苦むものが多いことは事實である。この補足に就ては、本誌前號、カ氏の口演筆記參照。

161）歐洲前期舊石に於て亞形握り槌問題として有名なのは、ミコク（La Micoque）出土のそれである。勿論この問題は獨り大さに就てのみでなく、他に尖端の形式、術工等も含まれては居る。これが概要は、拙著、歐舊、II. S. 263—266. 參照。又エジプトの亞形握り槌に就ては、拙稿前揭、本誌前號、參照。

162）歐洲前期舊石に於ける手用尖頭器に就ては、拙著、歐舊、II. S. 199. Fig. 114. に於て上より第二段、左端の一個はシエルレアンに屬する一例。アシユレアンのに就ては、同. S. 222. 及. S. 218. Fig. 129. に於て、右上67とある一個。ムステリアンに就ては、同. S. 257. Fig. 154（上段の三個）. Fig. 157—159. 參照。但し同書圖版第二十七及同二十八の二個は、當時小形握り槌の分類を試みなかつた結果、これを本器として揭出してあるが、小形握り槌を分類する以上には、これを同器として取扱ふことに改める。

163）歐外に於ける手用尖頭器は、第二十三圖に例示した北阿、ケニアの外、エジプト（前揭本誌前號參照）シリア等に見らるゝ。これ等は氣候環境を異にする所もあるから、一概に歐洲と同様の發生であるかは研究を要する。又他の一面には本器の如き器形比較的單純な且つ小形のものであれば、隨所に近似形出現もあり、後述して居る特殊石器中にも、これを指適して居る。

164）石掻は從來適當な和名を考出し得なかつた爲、私はこれを色々に云ふて居つた。拙著、歐舊では佛語のまゝ、グラトアと呼び、其後に厚形

(146) 舊石文化の土器存否に就ては、(31) 參照。

(147) 型態學の研究に就ても、私としては一通り研究もし、手記してもあるが、諸種の關係で未だ發表して居らない。何れ發表すべき時がくると信じて居る。

(148) 術工學の研究に於ても、型態學と同樣、未だ發表して居らない。但し術工學的研究の一參考として、L.Pfeiffer; Die Werkzeuge des Steinzeit-Menschen. Jena. 1920. を紹介して置く。

(149) 打裂、打瘤等に關しての研究も、未だ發表しては居らない、僅に其一端を、拙著(L. 20) S. 31—34. Fig. 9. 十五。術工學的研究。に於て述べたに過ぎない。

(150) 元來 Retusche なる語は、單なる補修、整形等の意味ではあるけれども、史前學上に於ては、殆んど石器の緣邊に近く、これに小なる壓力を加へて取り去り、石器に於ける不規なる部分を整形する意味に使用せらるゝを以て、補修整形と云ふよりも、この整形行爲をより實際的に剝取と私が稱し、旣に隨所に慣用して居る故、其儘これを使用することにした。

(151) 歐洲前期舊石文化に於ける握り槌の槪要は、拙著、歐舊に於て、プレー・シエルレアンの粗形握り槌は 亙. S. 187. にシエルレアンの握り槌は、同. S. 197—198. Fig. 109—113. アシユレアンのは、同. S. 215—222. Fig. 125—133. 一般のムステリアンのは 同. S. 251—256. Fig. 152—156. 曖ムステリアンに於ける所謂亞形握り槌、乃至はミコク形握り槌と稱せらるゝものに就ては、同. S. 260—265. Fig. 162—164. Taf. 29. に述べて居る。

(152) アフリカの握り槌に就ては、研究を述べてはないが、挿圖は拙著、歐舊に於て、エジプト(歐舊. S. 74. Fig. 78) ソマリーランド (同. S 75. Fig. 79.) ローデシア (同. S. 76. Fig. 80.) チユニス (同. S. 78. Fig. 83.) に掲出して居る。又エジプトに就ては、本誌前號、拙稿、エジプトの舊石器、S. 187—188. Fig. 1. に發表して居る。又第十九圖に掲出した、中部アフリカ東海岸地方のテルドウエーに於ける握り槌發見に就ては、同じく本誌前號 S. 200 の餘白錄中に最も簡單に報じて居る。

(153) 印度に就ては、述べたことがない。拙著、歐舊、歐舊. S. 77. Fig. 82. に印度出土の挿圖を揭げたのみである。尙印度舊石器全般に就ては、(11) 參照。

(154) 歐、阿、印度以外には、シリア(拙著、歐舊、歐舊. S. 76. Fig. 81.) パレスタイン地方に多く發見せられて居る。これに就ては、(10) 參照。

(155) 握り槌として、通常あり得る形式の一般圖は、拙著、歐舊、亙. S. 214. Fig. 125. に圖示してある。但しこの中で、6. 12. (影を附してない形) の二式は理論分類で現實には見て居らない。

ら、もし出來たら學校等の一室を借用することが便利である。

(139) 整理箱は小規模の發掘の樣な場合なら、遺物も少ないから特別に製作する必要もないが、大規模の場合では、有り合せの箱類では間に合はないし、整理の上からも、一定の大さに造るがよい。私共では、長さ約六十糎、巾約四十糎、高さ約十糎、松材製のものを用ひて居る。要は石器を入れても、其重器量に耐へればよい。

(140) 石、土質等は、地質學者に、動植物は夫々動植物學者に依頼するは申す迄もないが、動物遺骸の如きは、成る可く哺乳類、鳥類、魚類等に應じ、夫々の專攻家に鑑別を乞ふがよい。特に洪積動植物であると古生物學者を煩す場合も多い。其内でも絶滅種の如きものは、寧ろ古生物學者の方が、より興味を以て見てもらへる。又、最初から鑑別が出來ないならば、最寄りの動物學關係學者に就て、大體、哺乳類、鳥類等の分類を煩して後、夫々の專攻家に送るなり、或は招聘するなりするがよい。

(141) 史前學の研究範圍に就ての一般は、拙稿、史前學と年代及び民族問題。（本誌、一の四）S. 293—294. 參照。更にこれを敷衍すれば、夫々專門科學である、地質學、動物學、植物學等と史前學との間に、重複分野を見るのであつて、將來學術進展を見るに於ては、そこに一分科の成立も可能である。例へば史前學の立場より、この方面の分野を對象とすれば、動物史前學、植物史前學等の分科が生れ、反對に動物學方面から分科すれば、史前動物學等が生れもするが、現實に於て、研究がこれまで到着して居らないから、今の所は、一面から全く緣の無い他學の力を借りる樣な、風にも見らるゝ。特に我國史前學方面から、この感が深い。

(142) 鑑別を受くるにしても、其出土の地點、層位等を混亂しない樣に、夫々嚴重に區分し、且つこの旨を明にして、依賴す可きである。

(143) 時に基く氣候變化によつて、舊石人の生活に及ぼしたことに就ては、拙稿、舊石原人の盛衰。科學知識。第七の一號。（昭和五年）參照。

(144) 木器は、器具全般が木製であるのと、或は石器等の柄を成形するとを問はず、理論上からして、舊石文化中には、存在したものと想像は許さるゝけれども、私は未だ適確な木器出土例を聞知したことがない。

(145) 舊石文化に於て、貝が直接乃至某部分を加工せられて、其儘、器具として使用せられた例は聞知したことがない。外に貝に穿孔し、これを垂飾として使用せられた例は、歐洲後期舊石のオーリナシアン等に其例が見られ、且つ其一特色とも云はれて居る。これに就ては、拙著、歐舊、舊 S. 23. Fig. 23—26. 及び本文後述、四十參照。

但し歐洲後期舊石時代は、寒冷なる氷期であつた故、水に親しむ機會も、貝それ自身に於ても北的の種が多かつたと思はるゝから、大形な或は美しいやうな種にも乏しかつたと考へらるゝ。然しもし他に南暖的で貝類が豐富である地方であれば、舊石文化中に貝器を有したからとて、不合理であるとは思はれない。只私の知つて居る範圍では、未だ何處の舊石文化中にも見て居らないと云ふに止まる。

得ると同時に、舊石器と同樣石器の併存も亦可能であることを忘れてはならない。それ故、石器のみで文化階梯の判斷が困難なのであるから、少なくとも一發見地出土の全般を一揃として眺め、決して抽出した個々に眩惑せられてはならない。而して全般的に見た或る標準尺が生れ、これと他の人工遺物とが、合せ見らる可きである。

術工學的に舊石器を見ると、作出法は打製のみであり(前述した例外的なランプは暫く除外)其術工の粗なるもの丶全般的に多いことは事實であるけれども、これ亦個々に就て見れば、同一型態でも精粗の開きもある。この現象は中、新石文化に於ても見られ、我内地出土の所謂打製石斧の如き、粗製品の一適例である。それ故、單なる術工上の精粗良否からのみで、文化階梯の判斷も強くは出來ない。これ亦、一出土一揃として、或る術工標準を得るに過ぎない。又石質上にも舊石器のみの特異相はない。

只從來發見例からすると、今迄舊石文化に見ない打製石器がある。其顯著なものは[21]、打割具である石斧と、小形刺突器の石鏃(尖頭鏃)とである。前者は中石以降、後者は全く新石所産であるから、この混合出土の場合は、よく研究しないと、誤斷も生じ得る。

かく見てくると、石器のみでは舊石判斷の困難なことが了解せられたと考へる。然し又他の一面から見れば、今日我内地の繩紋式にせよ、彌生式にせよ、夫々新石文化として一通りの文化內容が知られて居るのであるから、これ等の文化と、かけ離れた一揃の發見があつた場合には、其文化階梯の如何は、決定し難くとも、兎に角、異文化として從來と相異る疑が存する發見である以上には、果して從來と幾何の差があるかを檢討すると同時に、より廣く各階梯眼でも、これを眺めて見る可きである。

(138) 研究室と云ふて居るのは、特別に裝置せられた室を云ふて居るのではない。只個人的な住居の一室では、遺物が多いと、狹き過ぎもするか

但し本器の石材は砂岩其他軟質のものが多いが、中央の凹部は、打製でない。磨製してある。この點が亦、舊石文化に於ける唯一の例外的な磨製石器である。其大さも區々で長さ二〇—三〇糎、幅一五—二〇糎内外位が通常である。而して本器は殆んどマグダレニアンのみに出土し、他の舊石文化には見られないし、中、新石以降にもない。

三十三　舊石器小括

以上舊石器として、比較的普遍的な八種と特殊的な十七種、合計二十五種を例出した。更に細分すれば、より多くもなるが、大約は紹介したと考へる。從つてこれ等を準據として見て行けば、新に舊石器に遭遇しても、一通りの研究にはヒントともなり得ると信ずる。只こゝで考へねばならぬことは、如上の各種が幾何まで一發見で共存出土するかは、全く見當がつかない。大局的には、打裂片利用の有無により、二様に分たれ得るけれども、これが併用せられても不合理はない。又これ等舊石器は、全般的に舊石文化にのみ存し、中、新石文化以降には全く見ることの出來ないと云ふ程の特別なものでない。其特殊石器中にこそ獨特のものも見られもするが、普遍性がないからこそ、特殊扱いにせらるゝので、全般的に舊石器としては、總てに特異性を備ふるものではない。其内でも握り槌の如きは、よく舊石器獨自の典形とせらるゝが、仔細に見ると、中石器にも巨石器[10]の様な類形があり、新石器中に有り得ないと否定し得る根據もない。これを要するに、石器の型態のみでは、これを舊石器也とまで强く認定するだけの型態特徴に乏しい。又舊石文化より進歩した文化であつては、舊石器より進んだ石器があり

何や尖端、刄等の狀態に關せず、其一部分に微細な剝取が行はれて、加工意識が明なものでなければならない。

次に考ふ可きことは、本器を立前として見れば、其地理的分布も廣く[208]、文化階梯上からも各階梯に亙つて見らる[209]ゝが、本器の最も發達して居るのは中石文化であり、歐洲前期舊石文化の如きには全くない。本器の性質上、打剝片利用を見る文化でなければ、存在しないのであるから、本器の多數出土を見るときは、中石文化に屬するやの疑も生じ、よし舊石文化でも、末期に近いものと見る可きである。又第三には、本器の中には、遠戰器の一つとして鏃端に利用せらるゝものがあるから、遠戰器所有の考慮を以て見る必要も生ずる。而して我新石器中に見らるゝ通常の石鏃との間に如何なる關係が存するかに就ても研究を要する。但し今迄に於て、我新石器中には、隨分注意はして居るものゝ、細石器と確認せらるゝが如きものが、私の知れる限り發見せられて居ない。もしも我內地に確實なる細石器の發見があれば、其所屬文化の如何に關せず、重大な發見と云はねばならない。

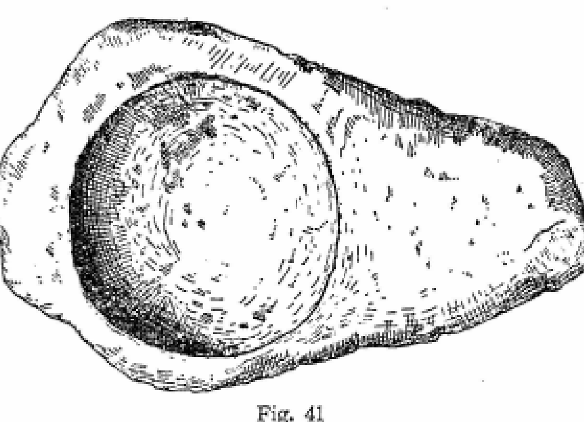


Fig. 41
所謂石製ランプ ($\frac{1}{3}$ N. G)
佛. La Grotte du Coual 出土 (Magdalenien)
(nach Bergougnoux aus R. de Saint-Périer)

25. 所謂石製ランプ　第四十一圖

本器は全く特異なものである。其樣式には多少の變化を見るが、稍々大形で軟質薄形の石片の中央に淺く廣い圓狀の凹部を存するものを指す。これは專ら奧深い暗黑の洞中に生活した歐洲後期舊石人が、特に岩壁天井畫等を畫くに際し、燈火用具として使用したものと想像せられて居るが、確實ではない。或は然らんと云ふ程度にある。

本器は石彫の一種であるが、其彫端が恰も鸚鵡の嘴の如く、著しく曲走して居る故、かく稱せらるゝものである。[203] これも石彫と同樣、藝術等の彫刻に用ひらるゝものと想定せらるゝが、多數出土するものでなく、マグダレニアンの一特色とせられ、中石以降には通常見ない。其大さは大略一般石彫と同大である。

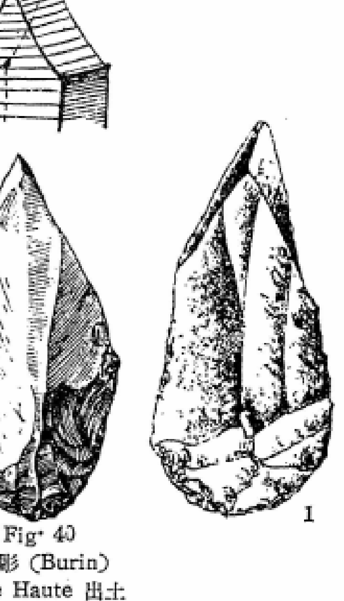


Fig. 40
石彫 (Burin)
1. 3. 佛. Laugerie Haute 出土 (nach 4. P. Girod; (L. 7)) (N. G.?)
2. 佛. La Vallée du Roc 出土 (Solutréen) (nach H. Martin; (L 14)) (N. G.?)
3. 彫端形式圖 (nach P. Girod; (L. 7))

23. 鋸歯形石器 (Lames denticulées)

細長く薄肉なる體の一側に、鋸歯狀をなした剝取を行はれて居るものを指すが、果して石鋸として裁斷の用に服す可きか、未だ明確でない。其大さは、長さ五糎内外幅一糎位が通常であり、餘り大形器を見ない。本器もマグダレニアンの一特徴とせらるゝが、[204] 出土は稀であり、中、新石中にも類形があるから、[205] 必ずしも舊石所產のみではない。

24. 細石器 (Microlith)

本器は、多く二糎以下の薄肉小形石器の總稱名であつて、細石器として取纏つて一用途に服するものでない。從つて細石器中には色々の任務に服するものがある。其個々に就ても述ぶ可き多くが存するけれども、餘白の無いのを遺憾とする。[206] 只本器に就て一二要項を書けば、先づ第一に、本器を認識するには、石屑と區別せねばならない。[207] これが爲、本器に於ては、其型態の如

は粗であり剝取を加へてあるが、等齊でない。往々左右等齊を缺くものすらある。

20. アテリアン石鏃 (Atérien Spitze) **第三十九圖**

本器は有柄尖頭器の一つである。只スバイキヤンと同様に北阿に產する故、其地名に因んで名けられたもので柄部が存するから特徴づけらるゝ。長さ四—七糎、長幅二—四糎内外が通常である。其術工はスバイキヤンと同様粗であり、左右等齊を缺くものが多い。又中に尖端鈍化して孤狀をなすものがあるが、恐らく折損後加修せられた第二次様式と想像せらるゝ。

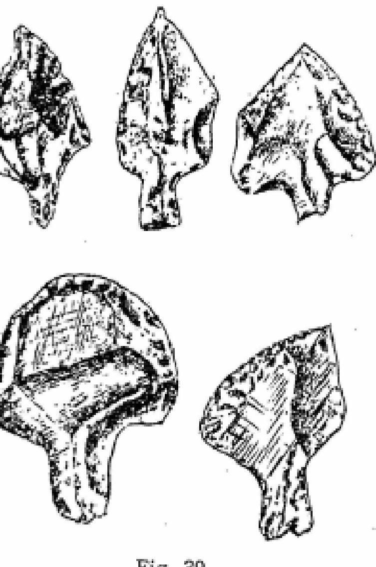


Fig. 39
アテリアン石鏃（½ N. G.）
北阿 Ain-el-Mouhaad 出土
（nach Debruge; Cong. Prehis. France. 1912）

21. 石彫 (Burin=Stichel) **第四十圖**

本器は、横幅ある尖端（これを彫端と云ふ）（第四十圖4）を利用して、骨角、木材、軟質の石等を彫り削り刻む等の用に便する器具と想定せらるゝ。[201] 主として歐洲後期舊石藝術の作出に用達つものとせらるゝが、斷定は出來ない。想定に止まる。其様式は概ね如上の彫端を備へ、多くが長身であると云ふ外、特出するものがない。其大さは、長さ五—一〇糎、幅二—四糎内外で、往々双器其他と複合形もある。術工上特筆するものはないが、其彫端は通常打裂よつて作出せらるゝが、稀に剝取を以てしたのが存する故、かく彫端を故意に作出したものと認め得るのである。本器は歐洲後期舊石各文化のみでなく、ケニアよりも出土して居る。[202]

22. 嘴狀石彫 (Bec de perroquet=Papageischnabel)

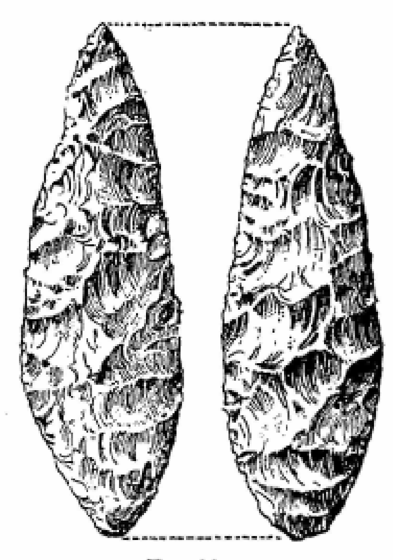


Fig. 36
月柱葉鏃
佛. La Vallée du Roc (G. ?)
(nach H. Martin; (L. 14.))



Fig. 37.
側抉石鏃
(同　右)

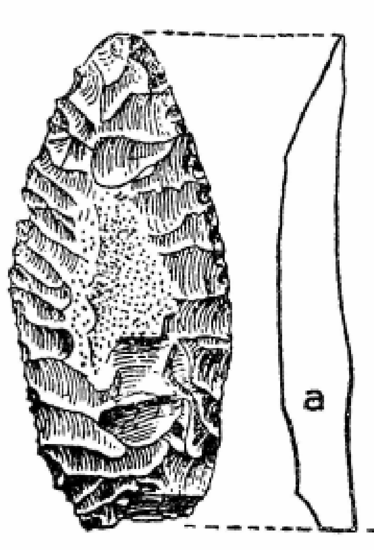


Fig. 38.
スパイキアン石鏃 (N. G.)
北阿チュニス地方出土
(nach H. Obermaier; (R—L))

抉部があり、中に恰も抅部狀を呈したものも存する。[197] 但しこの刳抉部たるや一側にのみ存し、其兩側にあるが如きは、特例とすべきである。[198] 從つて前述の有柄尖頭器(フヲン・ローベル式尖頭器)とは、近緣ある樣でいて、違つてゐる。本器は月柱葉鏃よりは小形細身であり、其長さ五—一五糎の間にあつて、幅は概ね二糎以下である。其術工も前者と同樣規整的な平行等齊同大の剝取が加へられて居り、從つて精品が多い。

本器も亦、ソリュートレアンの一大特色であり、他の舊石器中には、殆んど類形がない。中、新石器に於てすら、例外的に見らるゝに過ぎない。[199]

19. **スパイキヤン石鏃** (Sbaikien Spitze) **第三十八圖**

石鏃の一種であるが、其特徵顯著でない。其型態は月柱葉鏃に似て、より粗惡であり、手用尖頭器に比して、幾分か薄肉細身である。只本器が北阿に產し、[200] 多くが握り槌と共出する點に於て特異視せらるゝに過ぎない。其大さは、長さ三—一五糎の間にあつて、七—八糎のものが多い。術工

本器はオーリナシアン所産と云はるゝが、これには問題もある。[194] 其近似形は同じ歐洲に於けるソリユートアン(18參照)にも、グリマルディアン[195]にも見らるばかりでなく、後述してゐる居る北阿舊石中にも見らるゝから、有柄式の考へが既に舊石文化に芽へて居つた點は認めねばならない。

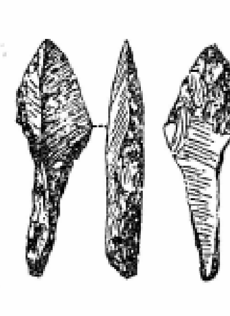


Fig. 35.
有柄尖頭器(＝フォン・ローベル型)
佛. La Font-Robert 出土($\frac{1}{2}$ N. G)
(nach L. Bardon, u. a; La grotte de la Font-Robert)

17. 月桂葉鏃 (Pointes en feuille de laurier=Lorberblattspitze) 第三十六圖

本器は尖端を利用して刺突を目的とする利器であり、見方によれば純然たる石鏃である。其型態が月桂樹葉に似て居るから、かく名づけられたに過ぎない。本器は甚が精鋭なものがあり、薄肉大形で左右等齊である。其大なるものは、二〇糎を越ゆるも稀で、多くは五―一五糎の間にある。其術工に於ても、大きく粗な第一剝取を以て概形を作り、更に小さき第二次剝取を加へて整形し、中に微少な第三次剝取すら加へられたものがある故、かく精良となり、其術工に於ては發育して新石打製術工と何等損色なきものすら見らるる。

本器はソリユートアンの一特色とせらるゝが、[196] これが精良品程に出來た舊石石鏃は、他には殆んど見られない。本器は型態としては單純であるけれども、其術工に於て、餘りに立派過ぎる點で、特殊石器と認めたのである。

18. 側抉石鏃 (Pointes à cran=Kerbspitze) 第十八圖、第三十七圖

本器は月桂葉鏃に似た石鏃の一種であり、只其體部が前者に比し、細身で其後半部に、本名を生じた顯著な剝

14. 半月形石器 (Croissants de pierre)

本器は凹抉石剝の一增特色を發揮したもので凹抉が大きく淺いので半月形を呈して居る。これ亦舊石器としてエジプト等に於ける一特色であるけれども、北歐新石文化にも同様式の石器は相應に出土して居る。（挿圖同前）

Fig. 34.
平圓板石剝
北阿 EL-Mekta出土 (½ N. G.)
(nach J. de Morgan ; (L. 16.))

15. 繭形石器 (Lames étranglées=Lame à encoches=Hohlschaber)

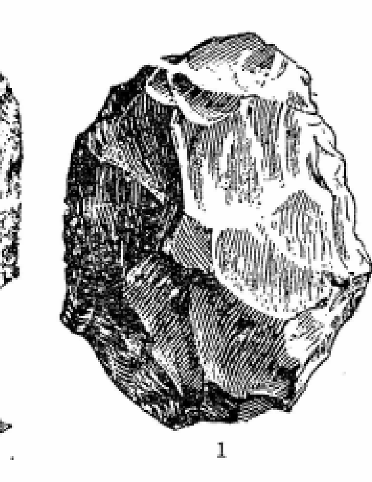
本器は細長い體部の中央附近兩側に、主として剝取に基くやゝ大きな剜抉部の存する石器であつて、恰も繭狀をなして居る故、私がかく名づけた。其用途は明でない。恐らく石掻の一種に思はれる。其大きさは、通常長さ一〇—一八糎、幅二—四糎の間にある。本器はオーリシアンの一特徴とせらるゝ以外、殆んど類形を見ない。但し其典形的のものは甚だ稀であり今の所よい挿圖例が見當らない。

16. 有柄尖頭器 (Pointes à soie=Pointes pendoncule)
(=**フラン・ローベル型尖頭器**(Font-Robert Spitze)) **第三十五圖**

本器は尖端を有する體部と柄とより成り、一見有柄石鏃とでも稱す可き形と大きさとを有して居る尖頭器の一特形である。これも一般の尖頭器と同樣、通常は左右等齊にまで達して居らない。其大きさは最大に於て、長さ約一〇糎、最少で長さ約四糎、通常は五—八糎の長さを有するから、石鏃と見るには大に失する。

鋭くなると、圓板形石剝と形態連絡を生じ、全形が二糎以下になると、圓形細石器として取り扱はるゝ。

本器は歐洲前期舊石には見ないし、後期舊石と雖も、多い方ではないが、時々これを見、歐外にも發見せらると共に中石以降にも存して居る。



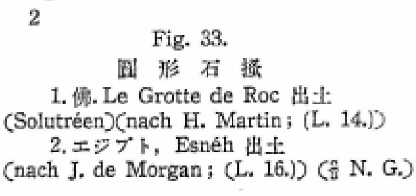


Fig. 33.
圓形石掻
1. 佛. Le Grotte de Roc 出土 (Solutréen) (nach H. Martin; (L. 14.))
2. エジプト, Esnéh 出土 (nach J. de Morgan; (L. 16.)) (⅔ N. G.)

12. 平圓板石剝 (Scheibenschaber) **第三十四圖**

本器は石剝の一亞形である。石剝にして特に圓板狀をなし其四圍に附刄せられた様式のものを指し、恰も石掻の亞形として圓形石掻を見ると同様の立場にある。但し圓形石掻と比すれば、より偏平薄肉であり從つて刄も薄く、中に一面は平なものも存する。(18) 其大さは直徑三－七糎、高さ五粍内外を通常とする。

本器の出土は稀であるが、捜出すれば歐洲前後期舊石中(19)にも歐外に亘つても見られ、且つ中石以降にも往々發見せらるゝ。

13. 凹抉石剝 (Racloire concaves)

本器も亦、石剝の一亞形であつて、形態に凹抉部が存するより本名を生じて居り、特徵顯著であるが、今日北阿アルゼリー地方及びエジプトに見る外、他に見たことがない。（本器の挿圖は、本誌前號、拙稿中にあるから略する）

は一文化に於ける特徴と見らるゝとか等の現象を見ざる限り、夫々、握り槌、石掻等の一様式として取り扱つて置く。

Fig. 32.
龍骨狀石掻 (Aurignacien)
佛. La Coumbo-del-Boïtou 出土 (2/3 N. G.)
(nach L. Bardon, u. a. Grattoir caréné.)

10. 龍骨狀石掻 (Grattoir-caréné=Kielkratzer=Keeld scraper) **第三十一圖**

石掻の一亞形である。其底面が打裂によつて生じた平面をなし、これに對し山形に長い剝取を試みたもので、底面を上にして見ると、舟底形をなすので本名が生れて居る。從つて本器は一般の石掻より更に鈍刄を有するから、最早や斷壓の用には服し難く、單に掻剝の用を便するものと考へる。其大きさは底長幅二—五糎、高さ二—四糎を通常とする。又前述の石核が往々本器に利用せられて居る。

本器は歐洲に於て、オーリナンアン[186]の一特徴であり、マグダレニアン[187]にも見らるゝが、其他の文化に幾何まで見得るものか、詳にしたことがない。

11. 圓形石掻 (Grattoir-discoide=Rundkrazer) **第三十三圖**

本器も亦、石掻の一亞形である。其全形が圓形であり其周圍に掻刄を有する。多くが其一面が平であり、直徑三—五糎、高さ一—二糎の大さである。この圓形が楕圓狀をなすと、龍骨形石掻と近似し、高さを減じ、刄部が

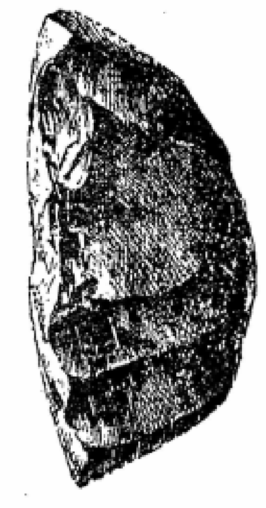



Fig. 31.
圓板形石器
北阿 EL-Rédéyef 出土（2/3 N. G.）
（nach J. de Morgan；（L. 16））

三十二　特殊石器の大要

こゝで特殊石器と云ふて居るのは、同じ舊石器でありながら、或る定まつた文化のみに見る石器であるとか、又は特徴顯著の爲特出せられたもの等を集め、著者が勝手に特殊石器としたもので、歐米等に行はれて居る稱呼ではない。これ等は萬一に備へ且つ舊石文化認識の一助とも思うて述ぶるのであるが、最も簡略にして、多くを省いてある。又其番號は一船石器を追ふて附する。

9. 圓板形石器（Disqus）第三十一圖

圓板形石器とは、通常厚肉圓形の石器を漠然と指すのであり、其大なるものは直徑一〇糎に逵し、握り槌の一樣式である圓形握り槌[158]と名稱交雜し、其小形なるものは、圓板形石搔と混同もする。只此の如き稱呼のもとに圓板狀となす石器を取り扱はるゝことがある故、こゝにこれを述べて、混雜を防ぐ。而して著者は、本樣式が一發見地等に多出するとか、或

へる。

本石の型態は受動的に成立するのであるから、一定はして居らない。只所望打裂片の大さ形狀により差も出來るが、大局的には其多くが原錐に對し、其四圍を漸次に略等齊に剝ぎ取らるゝ結果、石核としては圓壔形をなすものが多い。勿論中には雜然たる形のものもあり(第三十圖)、或は一度石核として出來たものを、更に加工して器具としたと認めらるゝものも、稀に存する。



Fig. 30.
石核 (Nucléus)
佛, Dordogne. 出土. (⅔ N.G.)
(後期舊石, 史前學研究所藏)

而して本石が舊石文化中に最も多く利用せられて居るのが、後述して居る龍骨狀石搔である。其大さも區々であるが、長さ一〇糎以上は稀れであり、直徑も一〇糎以下が多い。

本石の性質が以上の如くであるから、歐洲前期舊石の如き殆んど小打裂片利用を見ない文化では、顯著な本石出土がない。後期舊石以降には發見せられ、(四)獨り舊石特有のものでもない。

以上列擧したものが、舊石器としては、多い方に屬するものであるけれども、これ等が悉く共出するか否かは全く別問題であり、更に特殊石器も一應見て置く必要がある。

其主要素たる尖端が備はれば、體部はそれが運用に便であれば、其形態には特別な要求がない。從つて現實に於ても區々である。中には細身薄肉な體部を有するもの(插圖1.2.)もあれば、短小な體部もある(同3.)。其尖端作出術工は、其殆んどが剝取によつて作成せられ、且つ舊石石錐の多くが左右等齊ではない。但し尖端の甚しく嘴狀に曲走したものは、嘴狀器として別扱いにせられ、他に小形な尖端を延長して特別に體部が區別出來ない樣な、細身のものは多くが細石器として取り扱はれて居る。本器の大さは全く一定してない。尖端のみに於て長さ五粍より二糎内外の間にある。

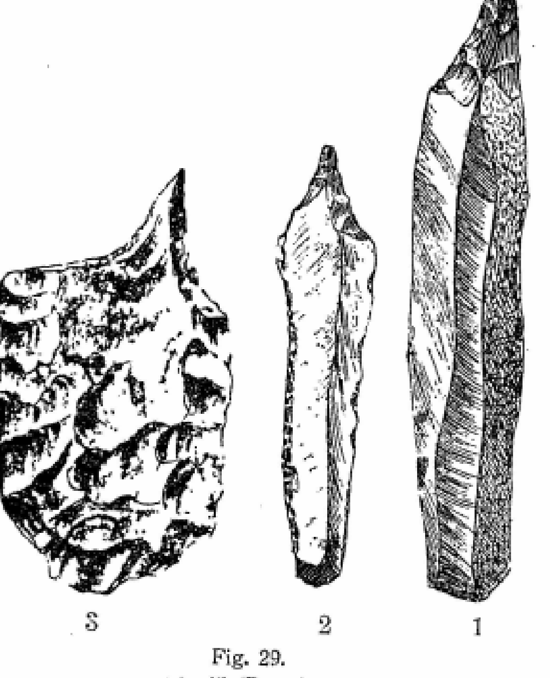


Fig. 29.
石　錐 (Percoirs)
1.2. 佛, Les Cottés (Vienne) 〔Aurignacien〕 (nach H. Breuil ; 1906) (½ N. G.)
3. 佛, Gorge d' Enfer. A. (Dordogne)〔Solutréen ?〕 (nach P. Girod ; (L. 7)) (N. G.)

8. 石核 (Nucléus—Kernstein) 第三十圖

[18] 石核は必ずしも石器であるとは申されない。元々或る原鑛(主として燧石)から漸次所望の打裂片を打剝せられた結果、其最後に殘された殘部を指すのであるから、器具に使用するにしても、これを應用したものである。從つて石器として見る可きものではないけれども、本石出土は、打裂片利用を物語る有力なる鍵であり、其文化には打剝術工の存するものがあり、從つて打裂片を利用した、尖頭器、双器等の薄肉小形器の共存可能を物語ることにもなるから本石出土は間接的に重要性を帯ぶるものと考

甚だ多い。而して本器のみ單用せらるゝものは、通常比較的長く且つ鋭利な刄部を備ふる關係上、薄肉細長である。

其術工に於て見る可きは、鋭利な刄を要求するから、剝取刄でなく、打裂刄を以てして居る。從つて鋭利な打裂刄を備ふれば、本器として目的は達成せらる可きであるから、單なる利刄を備ふる打裂片との區別困難な場合も容易に起る。(180) これが丁寧なものでは、第二十七圖に掲出した如く、何處かに剝取を加へて成形もして居るから認識することが出來る。其大さは區々である。最大なものになると、長さ二〇糎、巾三—四糎に達するが、通常は長さ五—一二糎、巾二—四糎の間にあり、長さ三糎以下の小形器は、これ亦細石器に編入せらる。

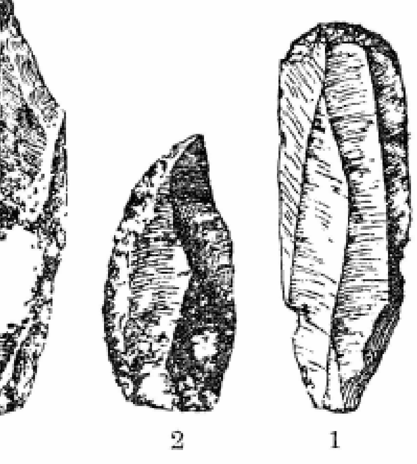


Fig. 28.
複合刄器
1. 石掻刄器, 佛,La Comba-del-Bouïtou (Corrèze) (nach L. Bardon, u. a.) (2/3 N. G.)
2.3. 尖頭刄器, 北阿, El-Mekta. (nach J. de Morgan,; (L. 16)) (1/2 N. G.)

7. 石　錐 (Perçoirs=Bohrer) 第二十九圖

本器は尖鋭な尖端を利用して刺突穿孔等の用に供さる可き小形な日常具を指すのであつて、同じく刺突の目的を有する尖頭器に對し、握把等これを運用すべき體部を備ふるを特異とする。但し本器に於ても、特に尖端のみが著しく細尖に其體部より突出した樣なものになると、甚だ稀であり、尖端の突出と細鋭さが少なければ、少ない程、量は多くなる。從つて兩極限に於ては可なりの隔ても生ずる。(181) この稍々廣き目で見れば、歐洲前期舊石器(182)以降後期舊石器、歐外にも見られ、中石器以降にも存し、普遍化せる一石器と認めらるゝ。

し、部厚な手用尖頭器を生み得たに過ぎず、本器等刺突器の盛用が其後期に存する點であつて、本器出土と、握り槌如き打突具が共存するかに就ては、特に注意すべきと同時に、其出狩獵動物の種に於ても、併せ考へる必要を見るのである。

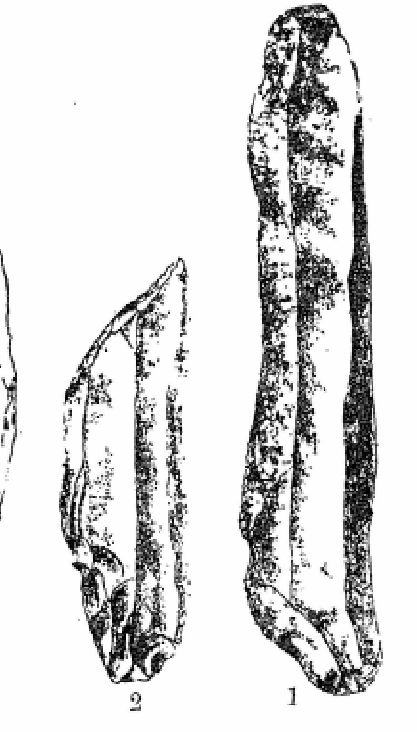


Fig. 27.
刄器 (Lame)
1. 佛, Laugerie Haute (Dordogne) 〔後舊〕 (nach P. Girod; (L. 7)) (3/4 N.G.)
2. 佛, Cro-Magnon (Dordogne) 〔Aurignacien〕 (ibid)
3. ケニア地方, Gamble's II. (nach L. S. B. Laekey; (L. 13)) (7/10 N.G.)

6. 刄器 (Lame=Klinge) 第二十七、八圖

刄器とは、單に刄部を使用して截斷の用に供す可き、薄肉小形の日常器具をなす石器の一類を指すのであるが[註]、これ亦尖頭器と同樣に漠然たるもので、特徴は顯著でない。本器は歐洲前期舊石器中には通常見られないで、後期以降に多い[註]。歐外にも、打裂片利用の小形器を存する文化中には概ね見ることが出來る。

本器の主能部は刄にあるが、これ亦特色あるものは、夫々取り除かれ、且つ使用者の要求が單に刄部にあるのみであるから、單獨な刄部のみを備ふる本器よりも、刄部の外、其截斷に際しては不要な部分である末端に、厚形な剝取刄を作出して石搔として兼用せられ、或は其一端を尖銳にして尖頭器と兼、乃至は嘴端を作出して彫刀と併用する等、複合形式をとるものが

其術工上見る可きものは、本器の殆んどが、打裂片乃至は剝取片を利用して作出せらるゝから、一側には打裂乃至剝取の際生じた、鋭利な刄部が存し、其側はこれを利用し他の側である刀背に小なる等齊剝取を加へて本器が完成せらるゝ。所が往々にして、單なる打裂片のみであつて、何處にも剝取の行はれて居らない本器狀をなす

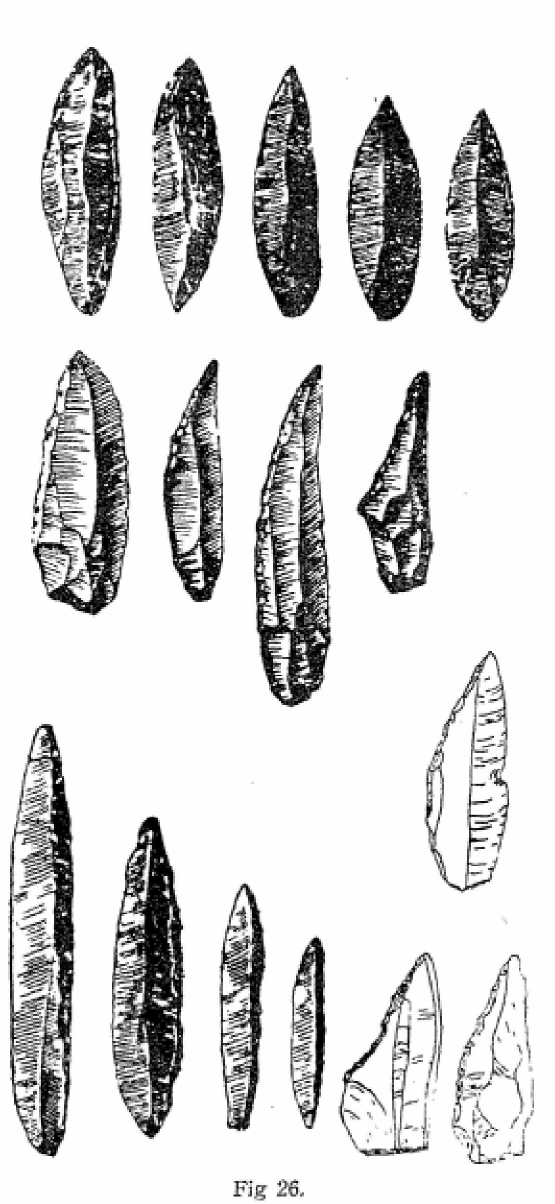


Fig 26.
尖頭器 (Point)
上段左五個　佛, Durand-Ruel (Dordogne) 〔Aurgnacien〕 (nach E. Pittard u. a. Cang. Inter. A. A. P. 1912) (4/5 N.G.)
中段左四個　サハラ, Ouled Djellal (3/5 N.G.) (nach H. Breuil; L'Anthr. XLI. No. 1-2 1931)
上段左四個　〔上段左五個に同じ〕
中段右, 下段右二個　ケニア, Gamble's II. (nach L. S. B. Laekey; (L. 13)) (4/5 N.G.)

石片に對しても、等しく本器として取り扱ふものもあるけれども、よしそれが本器として使用可能であるにせよ、積極的な作出表示の確證がない以上には、區別して尖頭器狀打裂片として取り扱ふ可きと考へる。

更に本器に就て考ふ可きことは、本器多出の場合の如きに當つては、其文化中に刺突器利用が行はれて居ると認めねばならない。處が歐洲の例を以てすると、其前期舊石は打突具を主用して、僅にムステリアンに本器に比

本器の大さは、一定して居らないが、通常双幅、五—一五糎内外、刀幅（双より刀背までの間）は三—七糎内外、双厚五粍内外位のものが、通常である。

舊石器中に於て、本器の亜形とせらるゝものに、平圓板石剥（Scheibenschaber）、凹抉石剥（Raclois concaves）等があるが、特殊石器と見る可きであり、後述して居る。

5. 尖頭器（Point=Spitze）第二十六圖

主として巾狹く薄肉な尖端のみを利用して刺突の用に供し、或は尖端に添ふるに双を以てして刺突の効果をより大にする所の中、小形器具の一類を指す。本器は例外的の外、歐洲前期舊石中には見ないに反し、其後期舊石文化並に其姉妹文化であるカプシアン、[174] グリマルディアン[175]に盛用せらるゝものがあり、特にオーリナシアンには特徴視せらるゝ三樣式が存する。[176] 歐外に於ても、[177]中、新石文化中にも共に見らるゝ普遍化せる一石器である。

本器の主能部は尖端にあることは申すまでもないが、單に尖端利用器として見れば、甚だ漠然たるものではあるけれども、これ亦前例にもある如く、左右等齊に作出せられた、月桂葉鏃、石鏃、石鑛等は悉く、夫々名稱のもとに取り除かるゝ結果、意味の廣いに拘はらず、特徴顯著でない殘餘が雜然と本器として編入せられて居る。而して本器として通常取り扱はるゝ所のものは、殆んどが左右等齊を缺き、且つ一側には小剥取が殆んど尖端近くまで行はれて居るものを指して居るが、一方に特別細身の尖端を有する石錐と他方に巾廣く肉厚ある手用尖頭器とは亦區別せらるゝ。更に全形の薄肉小形で長さ三糎に逹しない樣な本器は、これ亦細石器（Microlith）として除外せらるゝから、本器としては、樣式の變化に富み得ない。其大さは、概ね最長十二糎、最少三、四糎、幅二—三糎の間にあり、通常長さ五—七糎位が最も多い。其多くが薄肉であり、肉厚も五粍以下が通常である。

も、これ以外他に必要上からの要求はないから、刄と廣い刄背とが組み合さるゝのみで、定まつた様式はない。この

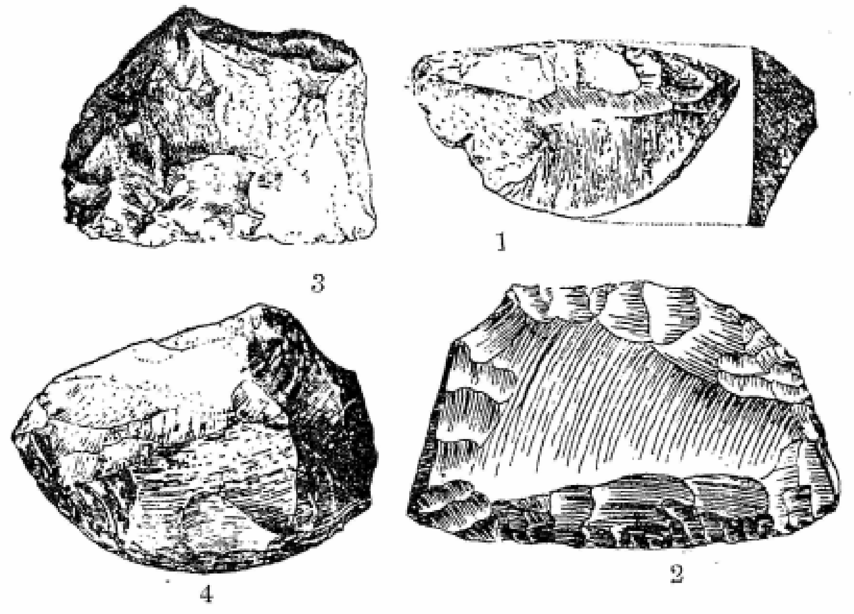


Fig. 25.

石剝 (Racloir)

1. スペイン, Cueva Hora (Granada) 〔Mousterien〕
(nach H. Obermaier; (L. 18)) (2/3 N.G.)
2. イタリー, Vallée de la Vibrata
(nach R. Vaufrey; L. 30) (3/5 N.G.)
3. 北阿, アルゼリー, Lac-Karar
(nach Boule; L'Anthr. XI. aus E. Werth: (L. 31)) (4/5 N.G.)
4. 佛, Les Rebiéres II. 〔Aurignacien〕 (3/5 N.G.)
(nach E. Pittard u. a. Cong. Inter. Anthr. Arch. Praehis. 1912.)

點は石掻と異る所である。一面からは、特定様式の無い爲、石剝ぎとの判別も出來惡い結果も起り得る。更に亦、同じ石剝ぎの性質を持つても、中には特定の型態を・有する、我が國の石匙、歐洲新石の半月形石器、乃至は平圓板石剝等夫々特別な稱呼のもとに、亞形的に取り扱はれる傾があるから、本器が特徵顯著でないものゝ綜合名の如くになる所以でもある。特に歐洲前期舊石中に比較的多いのも、型態分課が明でない爲であり、これがより進んだ文化では、特定の型態とこれに伴ふ稱呼がある故、漠然と本器として取り扱はれない所と考へらるゝ。それ故、特定の様式のない本器の多數出土は、一面からは古拙を思はしむることにもなる。

他の部分は問題でない。所が兩端に附刄した雙刄石掻もあり、或は頭部に尖端を附して、尖頭器と兼ねた尖頭石掻等も見らるゝ。一般に本器の大さは、刄巾二―四糎、全長三―一〇糎、刄厚〇・五―一糎内外の間にあるのが通常である。

本器の術工に就ては、特記すべきものがない。其多くが打裂片を利用して、其一端に剝取附刄して居るのであるから、見方によれば片刄とも見らるゝ。又丁寧に刄部のみならず、其四周に剝取を加へた樣なものは、稀であり、又一端に附刄しただけで、所望の用途に服し得るものと判斷せらるゝ。

本器の一亞形としては、龍骨狀石掻 (Grattoir-caréné=Kielkratzer=Keled scraper) や、圓板形石掻 (Grattoir-discoïde=Rundkratzer) 等があるけれども、これ等は特殊石器として後述する。

4. 石 剝 (Racloir=Schaber)[四一] 第二十五圖

本器は石掻に對し、より巾廣く、幾分薄めの刄を以て抑斷乃至は截斷の用に任ずる日常用具の一つであつて、恰も庖丁の如き用をなす石器である。從つて其用途から云へば、石包刀と稱したいのであるが、我が國には既に石包刀なる特定の石器が存するから、これと混交しない爲、かく石剝ぎと云ふたのである。

本器も亦構造單純である故か、歐州[四二]、歐外に亙つてよく見られ[四三]、特に歐洲ではムステリアンに好例がある。[四四]これが歐洲後期舊石には、比較的少ない所は、石掻の多出することゝ對比す可きことゝ考へる。又中石文化以降も亦特形を有するもの丶外、一般的な本器は多くない。

主要要素である刄は、石掻よりは薄身であるが、肉厚の無い刄器よりは厚身であり、丁度我が新石器の石匙位な肉厚と見ればよい。この刄を有効に使用する爲には、稍々巾廣な刄背を必要とする爲、巾廣な形となるけれど

り多出する一つとして見る可きである。

其構成要素は巾狹き肉厚ある刄部と、これを運用すべき體部とに過ぎないから、構成單純である。其特徴も特別顯著でないから、人人の取扱い方により、本器の範圍にも可なりの廣狹も生じ、且つ類形も相應に見らるゝ。其最も大切な刄部の構造は、單一な打裂面を其儘利用したものではなく、多くが放線狀に試みられた剝取に基く孤狀をなした、所謂外曲刄（蛤肉）である。（第二十四圖）。この刄に對し狹長な胴部を有するものが、一般樣式と見らるゝけれども、存外短小な胴部を有するものも、決して稀ではない。又本器としては、刄と胴とが備はれば、足るのであるから、

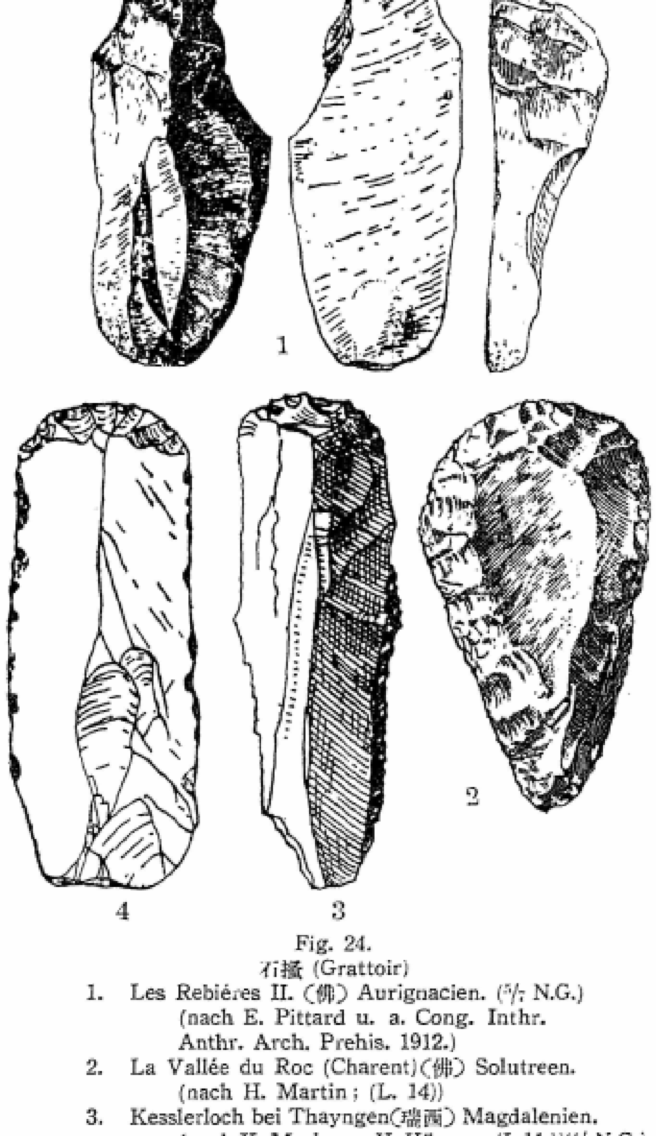


Fig. 24.
石搔 (Grattoir)

1. Les Rebiéres II. (佛) Aurignacien. (5/7 N.G.)
   (nach E. Pittard u. a. Cong. Inthr. Anthr. Arch. Prehis. 1912.)
2. La Vallée du Roc (Charent) (佛) Solutreen.
   (nach H. Martin; (L. 14))
3. Kesslerloch bei Thayngen (瑞西) Magdalenien.
   (nach K, Merk aus H. Hörnes; (L.11.)) (4/5 N.G.)
4. ケニア地方, Gamble's II.
   (nach L. S. B. Leakey; (L.13)) (9/10 N.G.)

さは最大長さ十糎、最少は四糎内外で肉厚も一糎以下が通常である。

其術工を見るに、握り槌と大差がない。只本器が主として前期舊石の後半に多數出現した故か、自然面殘存のものがなく、多くが打裂片を利用して、其面の背面のみに加工したムステリアン術工が多い。

只本器に就て最も注目に價する所は、本器の出現事情である。歐洲前期舊石前半は暖期であり、この時代には稀に見るのみである。これが暖期を過ぎ温期のアシュレアンに入ると、握り槌それ自身が、甚しく改全進歩すると共に薄肉漸少尖鋭の様式をとり、こゝに本器との中間性を有する小形握り槌が勃興すると同時に、本器も著しく發展し、次の氷期文化であるムステリアンに入るや、更にこの傾向が顯著となるに止まらず、本器の大さも亦若干縮少して居る。この現象を如何に見るかと云ふに、暖期に發生した握り槌は、森林内の如きに於ける近迫格闘器であつたのが、氣候の變化に伴ふ共狩獵對象である動物群の變化に基き、漸次遠隔倒敵の器具、即ち遠戰器を要求した結果に外ならないと私は確信する。これが氷期に入り、其氷期動物群の習性上多くが、野馬、馴鹿の如き群棲であり且つ地形上草原的乃至岩原的の所に棲む故、これ等の獲得には、必然的に遠戰性の獵具を要求する。これの一發露として、少なくとも歐洲前期舊石文化に、握り槌に比し尖鋭、小形、輕量な、本器を見るものと考へる。

3. 石　搔（Grattoir=Kratzer）[164]（第二十四圖）

本器は肉厚を有する巾狹き刄を以て、搔劄乃至は壓斷の用に供す可き器具であり、狩獵闘爭等の利器とは認め難く、日常、皮、肉、骨等の所理に使用せらるるものと判斷せらるゝ[165]。本器は歐洲舊石の各文化階梯に見るに止まらず[166]、歐外にも存し[167]、中石文化以降にも發見せられ[168]、我新石に於ても古くより皮剝（scraper）と稱せらるゝ一部に、本器が見らるゝ[169]。從つて舊石文化のみに見る石器ではないが、普遍的な石器の一種とし、又舊石文化中よ

謂ブレー・シエルレアン術工)或は總てに打裂及び剝取を加へて所望の形を作るか、乃至は先づ大なる衝擊に基く打裂片を作り、この一面を利用して、他の一面のみに加工を施すか(所謂ムステリアン術工)、等其何れを採用して居るかを見定む可きである。

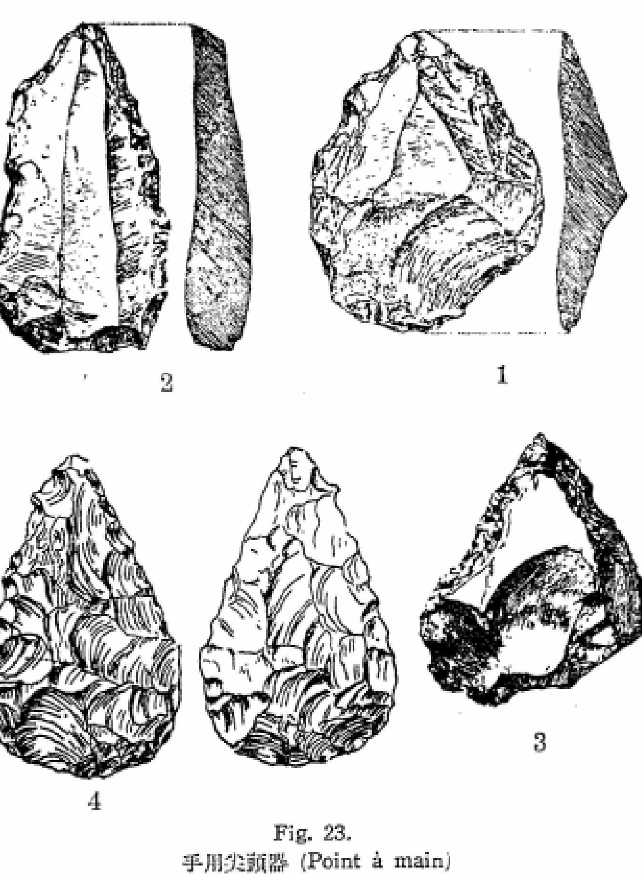


Fig. 23.
手用尖頭器 (Point à main)
1. 2. スペイン, Fuente de La Zarza (Granada)
(nach, H. Obermaier; (L. 18))(⅔N.G.)
3. 北阿, Lac Karar (N.G.)
(nach, M. Boole; L,Anthr. Xi)
4. ケニア, Stillbay 型
(nach, L. S.B. Leakey; (L. 13))(7/8N.G.)

2. 手用尖頭器 (Point à main=Handspitze)

(第二十三圖)

尖端のみを主用せられ、場合により僅少の重量が加はゝる刺突主用具である。歐洲前期舊石の後半に於ける一重要石器であるが[註]、これ亦歐外にも見らるゝ。[註] 其型態は握り槌を小形薄肉にしたものと見ればよい。只主として薄肉に俱ふた結果か、其尖端は著しく尖銳となり、見方によつては、無柄式の石鏃とも見らるゝが、新石石鏃の多くの如くに、右左對照までに整然とはして居らない(第二十三圖)。而して往々尾部が巾廣く且つ肉厚の厚きものまである。此の如き様式、特に尖端の尖銳化は、他に握り槌の様な、楕圓其他の鈍端のものが少ない(第二十三圖1)。其大

十九圖參照）[152]、印度（第二十二圖２）[153]其他に[154]亙り發見せられて居る。其様式はこれを細別すると十種内外に分ち得るが[155]、通常多く見らるゝ様式は、有頭楕圓形、尖楕圓形（第二十二圖１）直化楕圓形（同２）等であり、往々有頭圓形（同４）楕圓形（同３）等も存し且つこれ等はアシユーレアン[156]及びエジプト舊石器中に比較的多く見らるゝ[157]。こゝに型態學上注意を要する所は、楕圓形である。これは尖端が鈍であるから、打突的な性質を失ふて居り、打斬突性を帶ぶる上、萬一にもこれが一入鈍化すると、要素上尖端なる性質を失い、これに代るに刄を以てすることゝなる。卽ち尖端十刄十重量の範圍を越へ、刄十重量なる打割具となるから、最早握り槌と稱し得なくなる。かくなると巨石器（Macrolith）[158]の一部や石斧[159]と同一性質を帶ぶるに至り、從來舊石器中に殆んど見ることが出來なかつた、新器形の出現ともなるから、楕圓形握り槌が、數多く出土する場合は、特に考慮を要する。[160]一面に於て、如上の現象は型態學上、型態連絡の一例證として、尖端尖鋭（第一次）より發して尖端鈍化（第二次）、尖端喪失＝刄部發生（第三次）となり、もしこれが時的經過に於て見らるゝならば、甚だ面白き様式系統を示すことゝもなる。又其肉厚に於ても、最厚七八糎、最薄、一糎强であるが、もしこれ等の肉厚を減ずれば、重量は著しく輕減せられ、こゝに重量利用の一要素に動搖を見、單なる刺突具である石鎗に近寄つても行くから、この點も着目を要する。

更に見る可きものは、握り槌の大さである。從來各地發見例に徴すれば、長さの最大三〇糎、最少一〇糎、通常一二―二〇糎の間にある。これが一〇糎以下になると、所謂小形握り槌と稱し、亞形視せらるゝ所となり[161]、更に薄肉縮少せらるゝに於て、其重量を失い終に手用尖頭器（Point à main＝Handspitze）となり、こゝに兩者間に型態連絡を見るに至るのである。

握り槌に於ける作出術工上、注意すべき所は其原鑛の一部、卽ち自然面を利用乃至殘存せしめて加工するか（所

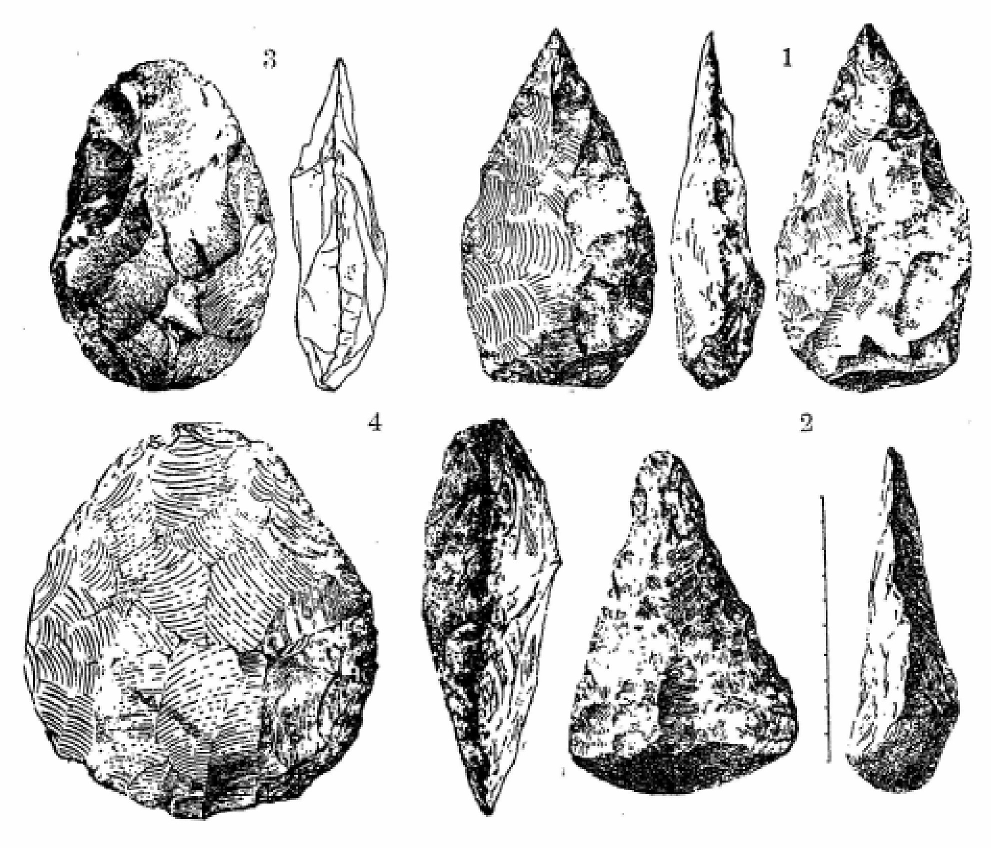


Fig. 22
握り槌 (Coups de poing)
1. 尖楕圓形。北阿, アルゼリー, El-Mekta 出土。(nach J. de Morgan ; (L.16)) ($\frac{1}{2}$N.G.)
2. 直化楕圓形。印度, Nellore (Prov. Madras) 出土。(ibid)
3. 楕圓形。小亞, D'oumm-qatafa 洞窟出土。
(nach R. Neville ; L'Anthr. XLI. No. 1-2. 1931) ($\frac{1}{3}$N.G.)
4. 有頭圓形。北阿, アルゼリー, El-Rédéyef 出土。(nach J. de Morgan ; ibid.) ($\frac{1}{4}$N.G.)

る故、こゝに從來歐阿等に於て、舊石器としては、比較的普遍して居るものを例出して、一準據を作り萬一の際に備へて置く。但し以下順次に述ぶる所の各石器が、悉く同時に共存出土するものとは限らない。只共顯著なものを抽出したに過ぎない。

1. 握り槌 (Coups de poing =Faustkeile)(第二十二圖)

尖端＋重量、乃至は尖端＋刃部（側刄）＋重量を以てする稍々大形なる打突乃至打斫突具である。本器は歐洲前期舊石器に於ける代表的石器であり、(四)歐外に於てもアフリカ(第

主要利器基本要素一覧表（著者）

番號	要素	使途	一例 舊石	中新石
1.	Sp.	刺突	尖頭器類	石槍、石鏃
2.	Sp.+Kl.	斬突		石劍
3.	Sp.+Gw.	打突	一部握槌	
4.	Sp.+Kl+Gw.	打斬突	一部握槌	巨石器
5.	Kl.	斬截	刃器	刃器 一部組石器
6.	Kl.+Gw.	打割		石斧
7.	Gw.	打砕		石槌

以上の如き形式分類の研究と同時に、單に其外形の研究に止まらず、これが作出術工上の研究、即ち術工學（Technologie）的研究[98]も併せ行はなければならない。特に石器に於ける術工に於て、舊石器の大部は從來燧石を原料とし且つ其殆んどが打製であるから、打製術工上、第一次的に行はるゝ所の、大打裂及び往々これに俱ふ打瘤（Bulbus）等の有無[99]、乃至は自然面利用の存否等を見更に第二次工程に於ける、打裂及び剝取（Retusche）の要領[100]に就て研究せねばならない。其上型態術工相關々係として、刃尖端等の作出術工に觸れ、特に術工上に於ける、癖の發見に務めねばならない。

此の如く、研究の基礎を定め、其大局的見地を明にしてから、個々の研究に移らないと、兎角現實に捉はれ易く且つ眩惑せられもする。特に舊石器の研究の如きは、多くが一見單純の如き器形であり、この中より歸納せらる可きものを究出するのであるから、最初から其大局を失はない様にしてかゝらないと、方向違に其觀點を誤る結果も起り得る。

三十一　主要舊石器個々の研究

我が内地に舊石文化が存するとしても、果して如何なる種類の舊石器が包含せらるゝのか、今日全く不明であ

抽出すれば、中石新石等に劣ない石器もある。これ等は根本に於て、石材なる原料上に制限があり、其使用目的とする所も、殆んどが刺突、斬劄、打碎等にある以上は、近似形式も生れて來可きであるから、舊石器だからとて特異なものばかりではない。要はこれ等出土の一群に存する共通した、形態、術工等の過程を見るにある。從つてこれのみによる研究觀察なるものが、必ずしも絶體的のものでないから、重ねて述べて居る如く、姉妹學のある結果に待たなければ、輕々と人工品のみで、舊石所產と決定し難い。

これが形態學(Typologie)(2)的見地から見ると、石器に於ける型態分課明瞭を缺くものも存するけれども、中に典形的なものをも見出し得ることがある故、この典形的の器形を準據として、型態分類を行い、夫々其性質を明にす可きである。こゝでは型態學的研究、それ自身の内容に對し其多くを述べる紙數を有して居らないから、單に利器に於ける一原則を表示して參考に供する。

〔別註七〕　利器に關する型態學上の一原則

利器に於ける基本要素は、尖端、双、重量及びこれ等の複合利用である。それ故利器を研究するに當つては、其主用要素が何れにあるやを見て行けば、これに基く分類が出來る。勿論この分類は、最も簡明に其基本的な要素のみを摑んだのであるから、これを基本分類として、更に夫々の分類内に於て第二次以下多くの分類も可能であるけれども、これ等には觸れない。又其要素構成が顯著でなければ、何れに所屬するものか、分類困難なものも生じ、他の一面には分類上中間的な位置に當るものも出來得る。其要素を最もよく發揮したものを、典形的のものとし、これに準據して要素構成不明確のものに及べば、構成が明にせられ得る。今前述した基本要素の尖端(Spitze=略稱 Sp.)双(Klinge=略稱 Kl.)重量(Gewicht=略稱 Gw.)の三者を配合して見ると次の一覽表で殆んど主要利器を包含することが出來る。

に於て研究すべきであり、不徹底なる研究は、これを避くるが學術的である。

二十九　人工遺物の研究

舊石文化所產の人工遺物としては、其種に乏しい。又中に術工が新石器程に顯著でないものもある。從つてこれ等の研究に於ても、若干は新石器研究と其觀點を異にする所は存するけれども、大局的には變りはない。

研究の現實に當つては、先づ地點及び層位によつて區分せられたる一群に對し、更にこれを、石器、骨角器等に分ち、石器、骨角器等は、次の三〇に述べて居る如く、類形を夫々取り分けて樣式群を設定し、其樣式群ごとに研究を行い、其後に夫々の相關々係に就て見て行く。石器と骨角器以外に木器、(144)貝器、(145)等は通常の場合では無いと見てよい。もし土器があり、これが後世の混入でないならば、從來よりの舊石文化に對する考察を改めねばならない程、重大問題を惹起するから、其出土狀態は勿論、其土器の有する性質に對しても、綿密なる研究を必要とする。(146)今これ等主要人工遺物に就て、更にこれを個々に見て行く。

三十　舊石器研究の一般

舊石器であるからとて、舊石器それ自身が全く他の文化階梯に無いものばかりではない。石器時代の各階梯を通じて見らるゝ種類も存する。又術工上に於ても、概觀すれば、舊石器の方が粗製品は多いが、これとて中より

の最も多い種にあつては、舊石人の嗜好關係と相待つて、狩獵に對する傾向をも想定せらる可きである。其種に於て、哺乳類以外の共存の有無に就ては、特に注意するを要する。又植物の出土に於ても、動物に對すると、略同樣の觀點を持つて居る。

二十八　人骨の研究

人骨は其出土に際しては、前述の如く研究もし、特に埋葬の有無を檢し、其埋葬せられたものは、墳墓として精密に研究を行ふけれども、一度、これを取り出され、全く一出土遺物として、其人骨の帶ぶる所の特性等、これが天然の性質に對する研究は、史前學者の任でない。これ亦、他の諸動物遺骨鑑定研究と同樣の立場に於て、其專門である自然人類學者に依囑して、精確なる測定研究を乞ふ可きである。其結果、これが舊石文化に及ぼす關係に就て、史前學上の研究を行ふ可きである。例へば同じ舊石文化に於ても、體質を異にするネアンデルタール人の所有するムステリアン文化と、所謂クロマニヲン人の文化に屬する歐洲後期舊石とには、文化上にも大なる相違を見るのであるから、もし我內地に舊石人骨の發見があり、文化隨伴を見るに於て、自然人類學上、其體質が從來發見の洪積人骨の何れに近いか、文化上からは如何なる文化に相似點が多いか等、夫々對比研究せらる可きである。只こゝに注意すべきは、舊石人骨の發見の如きに際し、自から總てを盡さんとして、研究範圍を超脫し、猥りに他學の範圍にまで手を廣げざることである。夫々專門がある以上は、其專門研究に委ぬ可きである。もし萬一にも自から其出土人骨を研究せんとするならば、全く自然人類學者としての素養を體得して後、其見地

い。夫々其專問學に屬するから、其鑑別の如きは夫々專問學者に依頼するがよい。[40] 其結果に於て、史前文化に及ぼす所を史前學として研究す可きである。[41] 從つて天然遺物研究の第一歩は、先づ鑑別よりするが順序である。[42]

鑑別決定後に於ては、岩石、土質等より、其史前文化研究に齎さるゝ所を、基礎として研究を進める。例へば土質は、洪積所產であると定まれば、遺物出土狀態にして、後世の陷沒等がないならば、少なくとも其出土群は洪積時代の所產であるとの、時代決定上の一基底が生るゝ。或は其地方に通常見られない石材等の出土は、人爲搬送の一準據をなす等、文化研究に導かれ得べきものを求むる。

同様に動植物に於ても、出土地點、層位等の區分ごとに、其種と量とを見る。特に動物遺骨に就ては、骨骸部分の多寡にも注意し、出來るならば、年齡（老若の程度にても可）、雌雄、等も夫々鑑別を受ける。而してこれよりして、史前文化研究に對し、導かるゝ所は、第一には、これ等が、果して洪積所產の動植物群であるか、否かと云ふ點である。これには象科犀科等の如き、絕滅種でも混在すれば、判定資料を有力にもする。第二には、一見直接文化の內容には觸れない樣であるが、文化背景をなす天然環境を形成する動植物群に基く氣候判斷である。根本に於て文化低ければ低きに從つて、自然の支配をより多く受く可きであるから、舊石文化の如きは、最も多く自然に支配せらる可きである。從つて其自然界が明となれば、其景觀を背景とする舊石人類の生活上に於ける或る基底が見らるゝ。卽ち氣候環境上、熱帶的、溫帶的、寒帶的であつたか如何は、夫々其文化構成上の觀點を異するものである。特に時に從つて氣候變化が見らるゝ事狀を見るなれば、當然これに伴ふ文化變移も見らる可きである。[43] 第三には、其出土及び遺存狀態等よりして、これ等を舊石人が捕食したものであれば、夫々其動物の種に於ける習性に基き其捕獲法及び狩獵具の判斷となり、人工遺物との對比を要することゝなる。特に其出土量

其出土遺物が多量の如き場合では、中々單獨では、諸作業も、研究も容易でない。もし助手でもあれば、其學術程度に應じて、筋肉的なり、又は學術一部をも擔任せしむるがよい。もし多くの助手があれば、大約其任を分擔せしむ可きである。

研究は一般に氣長に根氣よく、やらないと落ちが出來る。石器の多くが一見、構造單純であるからとて、研究も單純でよいと云ふ解はない。寧ろ反對である。其單純で少ない中から、彼れ等の生活現象を、より多く復原しなければならないのであるから、より困難な仕事である。新石研究の様に土器でもあれば、直にヒントも得らるゝし且つ手掛りも出來て、或る安心さを以て研究することが出來るけれども、石研究になると、其對象たる資料が惠まれないと、甚だ心寂しいものである。又其特徴がはつきりと頭に畫かれてくる迄は、最も不安な經過を見るものであり、所謂五里霧中と云ふた様な、全く見當のつかない場合も生ずる。それ故に、かく基礎的研究を高唱して居るものであり、萬一讀者諸君にして、石乃至は石様のものゝ、現實に直面せられた日、この記述が思い合はさるゝことがあると信ずる。

今更にこれを遺物學的に、天然遺物と人工遺物とに分ち夫々其大極を見て行く。

二十七　天然遺物の研究

天然遺物として、多く研究の對象たる可きものは、發掘出土に隨伴する、動植物及び所要の石、土等の標本類である。而してこれ等が何物であるか、其天然に基く種の鑑別、性質等の如きは、直接史前學研究の對象ではな

其六　遺物學的研究

二十五　遺物學的研究への道程

舊石存否を徹底的に見極めるには、前述の如く發掘調査を必要とするから、發掘調査を立前として、其發掘遺物の到着より、研究に取り掛る一般を述べる。これも必ずしも舊石研究に限つたことではないけれど、研究を容易ならしむる意味で附加する。

其遺物か研究室[四〇]に到着した際には、包裝を解くと共に一々其附札を改め、これを落さぬ様に、夫々其區分に從つて、これを整理箱[四一]に侈す。この整理箱侈換作業を終ると共に、整理箱を順序よく、其區分ごとに整頓集績して其所別を明にし、要すれば箱には白墨等で更に番號を與へて標式を便にする。かくして後、第二段の作業、即ち水洗いや、若干の應急補修作業乃至は、カルシユーム等の削剝作業に入り、先づ採集遺物を研究に最も便なる様にしてから、始めて研究に侈る。

二十六　遺物研究の一般

其後に容易に第二次發掘を行い得ない樣な場合には、一層この感を強ふするものである。私も今にして見れば、歐洲旅行の際、今少し注意して充分に採集して置けばよかつたと、常に後悔して居る。

(135) 荷造りに關しては、濱田博士(L. 9) S. 112−114 參照。

(136) これも舊石發掘にのみ限つたことでない。土地の人々から後になつて、色々云はれることは、土地人に充分に發掘研究の立場を呑み込ませない結果が多いと考へる。多くが單なる金錢關係で其時かたづけたことからも、生ずる。然し一方に於て、所謂山仕事とでも云ふた風に、大金を與へることも、後害があり所謂發掘相場なるものが定まり、後に發掘が出來悪くなる。我内地の新石遺跡にも、この樣な土地が無いではない。最初の發掘者としては、將來のことも一通り考ふ可きである。特に出土遺物のみを求むる爲、各自に發掘させて、これを買い上げる如きは、非學術的の甚しいものと云はればならない。而して學術研究の對象をして、獨り骨董品視せしむるに止まらず、地方風俗の純眞さを破壞することも出來て甚だ面白くない。

(137) 私共の手元にある舊石器樣の石器が、果して如何樣に且つ如何なる地層より出土するのか、全く解つて居らない。それ等のみ一群をなして出土するのか、或は我新石に隨伴するものかも解らない。それ故過早に發表して、人さはがせをしたり、或は見當違い等をしない爲、こゝに其確證を得るまで、發表を保留するものである。

なるから、注意を要する。

(126) 掘下標準の二米なるものは、人が物を手渡し得る限度である。

(127) 櫓と云ふと、如何にも大仕掛の様にも思はれるが、三本の丸太を括つて、それに滑車を垂下せしむれば足る程度のものを指して居り、歐洲では往々見らるゝが、こゝに掲出する寫眞例を見出して居らないことを遺憾とする。又石灰洞では崩落層に出合すべきことに就ては、本文十六。參照。

(128) 洞窟に就ては、前述、十六の1、二十の4後半等參照。

(129) 洞窟に於ける住居跡の入口に多いことは、獨り歐洲舊石に限つた現象のみでない。我新石洞窟遺跡で私共の調査した、岩手縣の諸洞窟（93參照）に於ても女神、闇谷、蝙蝠穴、熊穴等悉く入口に近く遺物層を見て居る。歐洲舊石に於ての一例は、拙著、歐舊、III、S. 55. Fig. 22. Altamira 洞窟平面圖に於て、Nが入口でありBに遺物層がある。

(130) 完全人骨の出土要領は、必ずしも舊石人骨に限つたことではない。幾分の違もあるけれど、概ね新石人の場合には通用し得る。只これに就て詳述せられて居るものを、私は見出して居らないから、こゝで幾分精しく述べることにした。

(131) 私の貧しい體驗中に於ても、佛ドルドニューのムスチエー上洞のムステリアン層では、カルシユームにより甚だ堅く、終に化石採集用のハンマーを使用して居る。同じく南佛マスタージール洞窟マグダレニアン層の骨角集積部分は、カルシユームで出土甚だ困難であり、多くの骨角を折損した苦い記憶がある。獨りこれ等舊石遺跡に止まらず、新石文化であつても琉球伊波貝塚の如きは、カルシユムに土器等が密着して、苦んだこともある。

(132) 準寶石の出土した例は、天井壁畫で有名な、スペイン、アルタミラ洞窟のソルトレアン層より水晶片が出土し、オーバー、マイヤー博士發掘の一片は現に私共研究所にある。

(133) 我が新石に於ける骨角出土の體驗は、多くが水分を含んで柔くなつて居るか、又は乾いた爲か、質がボロ〳〵になつて居る兩極端があり、中には理想的に保存良好なのも存する。歐洲舊石に於ける、私の貧しい體驗では、カルシユーム密着は別として、骨角それ自身は、概ね保存良好であつた。これは氣候が我國に比し、より乾燥の結果であらうと想像して居る。萬一この想像の如くでありとし、我新石所存の骨角より考へて見ると、我内地で舊石文化所產の骨角ありとするも、今日の氣候狀態から見ると、やはり我新石所產の多くの如くに、水分を多く含んだ場合が多からうと想像せらるゝ。

(134) 研究室作業に際して、發掘に際してその不足を感ずることも、獨り舊石研究に限つた現象ではない。只萬一にも大なる作業を行ふて發掘し、

2. 往復の旅費（遺物搬送を含まない）

3. 滞在費（宿泊料、日々往復費等）

4 發掘要具費

5. 人　夫　賃

6. 遺物搬送費

(120) 私が曾て歐洲石器時代遺跡行脚をした際には、上述した、竹箆（後になくなり木箆を使用）、鐵箆（長さ約二〇糎巾約二糎位のもの、これは體驗した結果、三十糎位の長さのものが、木槌で搞く際に使用するには、よりよかつた）木槌並にハムマーとを携行したのみで、鐵鑿を使用した體驗はない。

(121) 奥深い洞窟の發掘で、體驗したのは、佛のマスタジール洞奥約四百米の所で作業中、懐中電燈を水中に落して、豫備の蠟燭で辛ふじて、出洞した苦い經驗がある。又我内地氣仙郡の熊穴洞窟の發掘でも、蠟燭盡きて發掘を中止したことがあり、其後照明は必ず二重に携行することがよいと考へて居る。而してこれには、懐中電燈（發掘者各個人一個又豫備一個、並に予備電池）と、蠟燭があればよいが、通路、特に梯段等には、石油燈がよいと考へる。

(122) 發掘用具の一般に就ては、前掲、濱田博士、(L. 9) S. 96–97. 參照。此外、特に入用と考へるものは、私共が遺物袋と云ふて居る木綿製、通常、巾約二〇－三〇糎、深さ三〇－四〇糎位の口紐を麻縄等丈夫なものでつけた小袋であつて、これに日々採集した遺物を入れて、整理して居る。この際必要なものが、其發掘日次、出土地點等を記入した附札であつて、小形なカードを使用し、遺物と共に投入し、口をしめた後は、重復して、これに荷物附札を附し、外からも見らるゝ様にして居り、これが落ちても、中に尙一枚あれば、其出土は確保せらるゝ。

(123) 發掘方法の一般に就ては、前掲、濱田博士、(L. 9) S. 99–109 參照。通常は小規模の場合であれば、遺物層の中心と思はるゝ附近を、縦貫する如く、巾二米内外の稍々長き壕を作り、模様によつて、それより何れなりとも掘進する所謂横壕式を撰ぶが、規模大であれば、一坪乃至四坪位に最初より地盤を碁盤目に割り夫々を一區とし、順次一區づゝに發掘して行く、區劃式を撰ぶ場合が多い。

(124) 斜面の發掘等の場合には、傾斜がないと崩落する恐れがある。特に雨等に出會すると、この恐れが大きい。それ故、降雨を顧慮すれば、斜面上方の地表に簡單な排水壕を設けて置かねばならない。私共も我新石發掘に際し、降雨崩落に遇ふて、切角の發掘壕を、土砂を以て埋めこれが復舊に數日を濫費した苦い經驗がある。

(125) 發掘壕の側壁を抉り過ぎ、其爲に崩落に出遇ふた經驗もある。特に野外で晴天の日は、發掘壕の水分が蒸發し、土に罅裂を生じ、崩れ易く

(112) 遠地發掘に於て、其宿舍として附近に宿屋があれば、これに越したことはない。然しこれも日々發掘地まで通勤するのであるから、近ければ近い程よい。場合により、一二里を隔てゝ居つても、中途に利用し得る鐵道、乘合等があれば、間に合ふ。然し一番よいのは、發掘者の傍の民家へでも、談合して宿泊することである。特に好意を持つ其地主の家なら、萬事が好都合である。私共は我新石發掘に當り、特別の場合には天幕生活までしたことがある。

(113) 交通網の關係は、日々發掘現場へ通勤する便否の外、發掘遺物の搬出に就ても考慮せねばならない。

(114) 人夫に就ては、前掲、濱田博士(L. 9) S. 94—96. 參照。又これ等は季節により、雇用の難易、賃銀の高下がある。

(115) 損害賠償は、畑地、山林、原野等により、一定して居らず、土地により高下もある。又地主と小作との間には圓滿に行く樣にしないと、後に事件を起すこともある。只凡てに於て、事が學術調査であり、慈みではないのであるから、餘り多くを仕拂ふことは、次の發掘者に對する標準ともなるから、注意があつて欲しい。我内地で往々慈み半分に、高い仕拂をするものがあり、土地人に一種の發掘相場を作り、爲に吾々學術調査の、障碍をなす樣なことすらある。

(116) 發掘調査が長期に亘る場合には、途中に休養が必要である。大約一週間に一日、もし勞働甚しい場合には、五日働いて一日休む程度が通常と考へる。又私共の發掘の經驗では、雨天を利用して發掘作業を休み、其休日には採集遺物の整理に費して居る。

(117) 發掘日次は、舊石發掘となれば、理論上から新石の場合より、深位にあり、覆土も厚く、土質も堅いのを立前とするから、通常新石發掘より、より多くの日次を要すると見なければならない。勿論場所により其差も多い。要は覆土除却作業、遺物層の發掘、後仕末等の夫々に所要日次を見ればよい。これも發掘者の人數によつても增減を生ずる。我新石の場合には、通常人夫一名が覆土除却作業は、一日大約一立坪内外であり、私共自身の遺物層發掘は、丁寧に行ふと、一日一立方米内外しか掘れない。多くの場合、僅少なる地域の覆土除却作業を人夫に行はせ、遺物層の露出後は、私共がこの發掘に取りかゝり、人夫は、更に覆土除却地の擴大を行はしめ、平行して作業を進捗せしむるから、日數も最初の除却作業だけの日を見ればよい。

(118) 發掘參加者に就ては前述して居るが、尙注意すべきは、個々別々の寄合いではなく、統一がなくては、返つて進捗を妨ぐる結果も生ずるから、この點は豫め明にして置くを要する。

(119) 豫算に就ても全く標準がない。發掘の難易、日數、人數、等によつても增減する。而して遠地發掘の場合を立前として見れば、大約次の諸件に就て、採算せらる可きことゝ思ふ。

1. 發掘地の損害(復舊費、謝禮等を含む)

ものが、これを補ふと共に、一面には自信をも增さしむる。他人の發掘になると、所謂岡目八目とやらで、よく其缺陷も見へるが、自分も亦同樣であることを、省みる必要がある。史前學者の發掘研究は、恰も解剖學者の解剖と同じく、自からのメスによつて、研究進展を見ると共に、其メスには史前學者としての冱へがあつて欲しい。且つ史前學なる根本性質上、獨り研究室作業のみが、研究の總てゞない。廣義の遺跡、出土狀態、遺物等の三者の研究が揃ふて、始めて確實性を增大する。又發掘調査を行はないと、取り出だされた遺物に於ても、總べてが揃ふたものか、所謂抽出的な遺物であるか等、そこに不安がある。特に專門外の人々の採集品に於て、これが大きい。これが我內地で今迄知られて居る新石所屬のものであり、類品も多いなら見當もつくけれども、舊石器樣品となると、全く比較の根底は、只今我內地にないのであり、一般的な舊石知識上より判斷せねばならないから、更に困難と、不確實とが伴い、結極學者の發掘調査を行はなければ、決定し得ないことになる。現に私共の手元にも、それだけを抽出して見るなれば、如何にも舊石器である樣にも見らるゝ、出土の詳細未詳な石器すら在りもする。然しこれだけでは何んとも申されない[137]。

それ故、我內地に舊石存在を明にするには、是非とも學術的な發掘調査を行ふ必要がある。それも徹底的な發掘がより確實である。從つて舊石存否の研究を行ふには、一般的に舊石文化に對する認識を高むることは勿論、他の一面には、獨り机上研究に止まらず、現地研究が亦重要なることを辨へ、これに應ずるだけの素養を修めて置くことも必要である。

(110) これ等發掘研究に就ては、濱田博士、(L. 9) S. 90—130. 參照。

(111) 發掘の豫算に就ては、(119) 參照。

終了直後には、一通り見落しが無いかをよく見、測定、撮影等を完了（圖版參照）してから復舊作業に移らなければならない。其際特異地層、例へば、粘土層や砂礫層等の介入があるなれば、夫々遺物包含の有無に拘はらず、遺物層を中心として、其上下の層位等に基く各層土質標本を採集して置くことも、忘れ易いことであるから、最後に取つてあるか否かを檢す可きである。又第二次發掘を企圖して、一端埋める場合の如きには、未發掘部分と發掘部分とを明に標示する爲、杭等を植へて置くがよい。更に現狀を其儘保管するには、大掛りでありこれが詳細を議し得ないが、場所によつては、簡單にも出來得る（第二十一圖）。然しながら何れの場合を問はず、土地の人々に迷惑を掛けてはならないと同時に射倖心を增長せしめない樣にすることも大切である。(136)

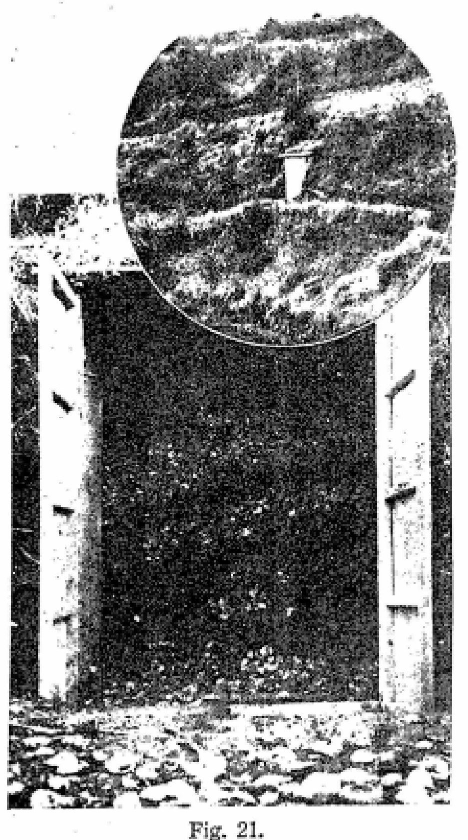


Fig. 21.
千葉縣良文村貝塚貝層保管現況
（上、一般圖並に閉塞狀態）同地繪葉書より）

二十四　發掘出土研究小括

發掘調査には、こゝに述べ來つた以上に、且つ新舊石器時代を問はず、心掛く可き件々がある。又口や紙上でこそ色々云い書きもするけれども、さて現實に於ては、多くの缺陷も出來る。そこに學術研究心に伴ふ體驗なる

二十三　發掘の仕末

發掘後の跡仕末も、新石發掘の場合と變りはない。長期に亘る發掘であるなれば、日々出土したものは、日々仕末して置かないと、混亂し終に精確な出土位置を不明にもする。それ故日々早めに發掘を打ち切り、出土遺物は出土の地區や、層位によつて區別し、且つ夫々の品種、例へば、石器、骨角、骨角器等によつてもこれを分け、特に或る一群をなすもの、例示すれば一體分の獸骨の如きものは、取り纏める樣にして、夫々に附札を附ける〔（第二十圖）。（私共も同樣、長さ三〇—四〇糎、巾二〇—二五糎内外の木綿袋使用して居る（㊂參照）〕。かくして日々出來た袋群を、最後の日には、更に取り纏めて荷造し、㊃これを研究室に發送の手續きを行はなければならない。

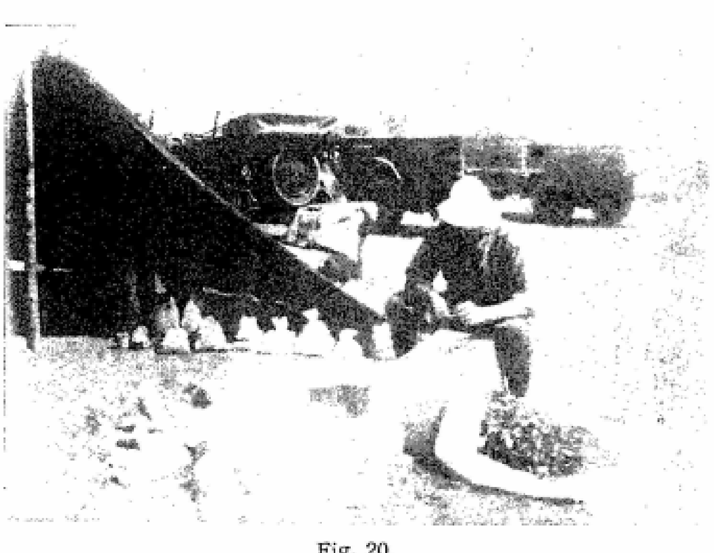


Fig. 20.
發掘遺物の整理
（アンドリユース蒙古探險隊の Nelson 氏と
Schabarach-Usu 出土石器）
（nach Ch. Andrews）

他の一方に於ては、經濟關係を清算すると共に、現場の復舊作業にも取り掛らねばならない。舊石發掘であれば通常より深き場合が多く、爲に除土の復舊には相當の人力を要することゝなる。特に其後の調査を打ちきる樣な場合では、中々容易に再掘する場合がこないから、發掘

さなくんば、前に述べて居る原形保持出土作業に準じ、其四圍と共に切り取り、其後は研究室作業に移すがよい。

3.天然、人工兩遺物間の關係

今兩遺物に就ては、別々に述べてきたけれども、多くの場合は兩者相混出するものと見なければならない。勿論部分によつては、夫々密在する所もあらうが、整然と區別があるとは考へられない。從つて天然遺物と思ふて發掘して居る直下には、折れ易い人工遺物の介在する様な場合が、決して無いのでは無いから、發掘中は常に油斷があつてはならない。

特に注意せねばならないことは、其後に於て研究室作業の進捗を見た時に、著しい不足を生ずることである。[134]天然遺物にしても、發掘によつて生じたと思はるゝ新しき切斷部がある骨角等の一片はあるが、他が見當らない。それが足らないと、種の鑑別が容易でない等のことも起り、又其種の鑑定の結果、これを獵獲する器具との對比の必要も生ずる。又其器具に富むに拘はらず、採集不足の結果狩獵對象の動物の種に乏しく、これが爲其習性と出土獵具との間には、連絡を見出し得ない等のことも起り得る。それ故、現狀に於て兩者の關係を結ばる如き出土狀態に注意するは勿論、これが採集に於ても兩者に偏りがあつてはならない。今日我新石發掘でも、未だ隨分所謂珍品採集の傾向が見らるゝから、この要領で、萬一にも舊石發掘をしたならば、大きな間違いでもあり、寧ろ發掘しない方が、まだよいと云ふ様な結果も起り得る。文化研究の對象は、珍品のみではない。否、珍品は當時文化レベルでなく其最高を示すものであることゝ、天然遺物と人工遺物とが互に共存して文化內容がより鮮明に寫し出さるゝことゝを忘れてはならない。

した除土を次の日に一通り概見する等の細心さがあつて欲しい。又多くの例から見ると、獨り純然たる石器に止らず、未完成品と認めらるゝものや（第十八圖）、乃至は所謂石屑と稱せられ、石器作製に際して生じた石片や、又は石器か單なる打裂片か、判別困難なものも、一應取り纏めて置くが、確實である。又石器が集在する樣な場合には、其一群存在に意義の存するか否かを、判斷する必要も生ずるから、此の如き密在に對しては、これ亦過早に個々に取り出さないことである。更にこれ等石器等人工遺物の地層に於ける存在狀態に就ても、記帳、測定、撮影を怠らないことである。特に後に當りこの狀態を報告するには、出土圖と寫眞とが、總てを雄辯に物語ることを考へて置く必要がある（第十九圖）。

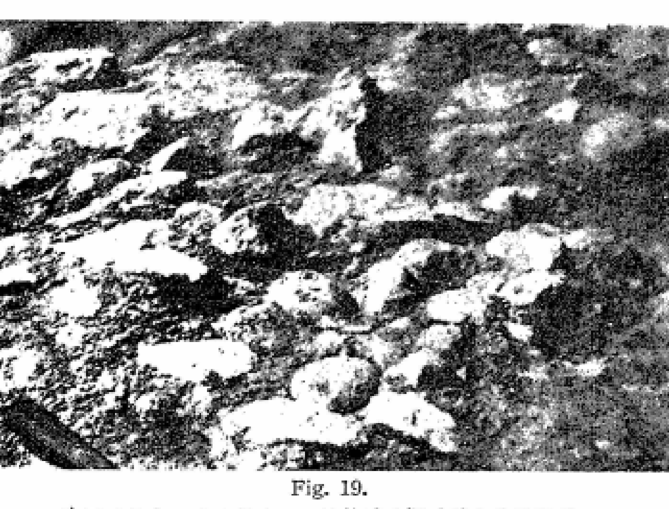


Fig. 19.
東アフリカ、ヲルドウエーに於ける握り槌の發見狀態。
(nach Leck)

骨角器の出土は、多くの場合石器に比し、一層困難である。これも豫め其存在が知られず、突然に出會するのが通常であるから、より痛め易い。單なる棒狀をなした所謂尖頭器の類でも、骨角なる原料の性質上、細長であるから、保存良好の場合でも折れ易い。我國新石の場合ですら、餘程注意せないと折損することは、發掘を行ふた人々には體驗がある筈である。[三] それが、舊石文化であれば、より一層に困難なことがあることも、體驗者には想起し得ることゝ考る。從つてこれが出土は、長時間をかけて、人骨の場合と同樣に、除々に土を剝いで行くか、

集し、後に捨てゝも遲くない。又原鑛と覺しきものや、加工がなくとも美しい水晶、琥珀、瑪瑙、蛋白石等所謂準寶石が混在すれば、(四)これ亦一應は採集し、後に石器中にこれ等石材使用有無を對比すべきであり、他の稀れな石材も同樣に採集して置くが安全である。

B　A

Fig. 18.

ソリユウトレアン側抉石鎗

A. 未製品と認めらるゝもの。佛 La Colombière 出土。
(nach L. Mayet; La Colombière)

B. 既製品。佛 La Vallée du Roc 出土。
(nach H. Martih; (L. 14))

2. 人　工　遺　物

舊石文化である以上、人工遺物としては、通常石器乃至は石器と骨角器とが主體をなし、他は稀と考へる。總てこれ等人工品の存在狀態に就ても、何等かの行爲を物語るか否か、或は單に堆積したのみであるか等に就ても常に着意すべきは、新石の場合と變りはない。

石器の出土は、特別にカルシユーム等が附着して居らなければ、他に比し樂である。然し細長い器形であり、土質が堅いと、折損もするから亂暴には出土せしめられない。又石器の大小に就ては着眼して、大凡どの位の大きさのものが多いかを見當をつけて置くことも大切である。大形器の方は誰れでも氣付くが、萬一にも細石器の様な小形器の存否には、最初から充分に注意してないと、見落しが出來る。我新石の發掘に於ても、地層中より石鏃を發見することが中々困難と同樣である。從つて大きな土塊を生じた場合には、一々割つて見、前日に搬出

一般を概述する。



Fig. 17.
哺乳類（上、野牛；下、山羊）出土の一例
佛伊國境グリマルディ
(nach Boule, (L. 5) T. 1.)

1. 天然遺物の發掘

舊石隨伴の天然遺物として、通常の場合は動物の殘骸と、石器原鑛等を含む石塊とであり、植物其他は稀である。而して動物の殘骸と云ふても、哺乳類が主で鳥類、魚類、貝類等の如きは、通常多くない。

これ等動物遺骨を發掘する要領は、前述した人骨發掘の要領に準ずればよい。これも一端を發見したなら、其儘で全部を共位置に露出せしめ、寫眞、測定等を終つて、取り上ぐ可きであり、中には疊々たるものも見らるゝ（第十七圖）。これも人骨と同樣、水分を多く含んだ場合、又はもろくボロ〳〵になつて居る場合等出土困難な時は、前の人骨の所で述べた原形保持出土作業の要領で、稍々廣く其周圍と共に切り離し、それ以降は研究室作業で、ゆる〳〵附着物を削剝するがよい。特に土にカルシユームを含む場合に於て然りである。[四] 又前にも動物遺骸の重要意義あることを述べて置いたが、出土に際し、これ等を捨てないで、悉く採集してあつて欲い。

石塊中には、加工の顯著でなく、人工か自然所產か、一寸判定困難なものも往々共出もする。これも一度は採

である。萬一にも人骨が多數出土する樣な場合ならば、夫々の方法によつて、出土させてもよい。然しながら、舊石人骨の如きが決して多數出土するものとも思はれず、從來發見例も、人工遺物發見地數に比し、甚だ尠ない。それ故學術的に貴重なる發見である。此の如き貴重なる發見をなした以上には、飽くまで學術的に取扱ふのが當然であり、萬一にも人骨出土等に體驗少ないならば、前述の如く、斯道の先輩に指導を乞はるゝことが、最良の手段と思はれる。

3. 其他の諸遺跡の發掘

舊石野外住居跡の如きは、直接爐跡の如き顯著な存在がなくては、これを認定することが困難である。特に野外に於て最初は狹義の遺跡か、或は單なる發見地か判別し得なくとも、發掘進捗に伴い、炭、灰、燒土、燒骨等の部分的發見があれば、爐跡に出會す可き可能性は大である。從つて此の如き場合には爐跡を突き留む可く、炭灰等のより多い方向に掘進す可きである。一般に爐跡に近けば、近くに從つて炭灰等の量を增すのが通常であるから、こゝに到達し、これを確認せねばならない。而してこの爐跡の平面によつて、更に當時の住居平面を考慮し搜出することが必要である。勿論舊石文化では、住居構成の一部である、支柱跡、外溝跡等の構築遺跡は無いと見ねばならず、食料殘骸、人工遺物存在の狀態等から、朧氣に住居面積等を想定し得るに過ぎない場合が多かろうと考へらるゝ。

二十二　遺物出土の要領

舊石遺跡なると、遺物發見地なるときを問はず、その發掘に際しこれが出土の要領は、概ね新石發掘と大差がない。只場合により、土がより堅いものも存し、從つて氣長く、丁寧に掘らねばならない場合もある。今これが

掛けなければ見られないのであるから、交通不便の地では、實視に困難が伴ふ。又これとて其儘放置するわけには行かない。後々に損廢の無い樣に、或は風雨を防ぎ、又は心なき見物人が好奇的に觸れない樣に、周圍には前述の原形保持出土の場合と同樣な外枠を作り、硝子蓋を附し、金網で覆ふ樣な、直接人骨保護の外、其周圍には柵を設け、管理人を依賴して置く等、後々までも關係を生ずるから、多くの場合、個人的な仕事では困難と思ふ。公共的の仕事で、特に其土地の人々が力を入れて吳れねば、だめである。

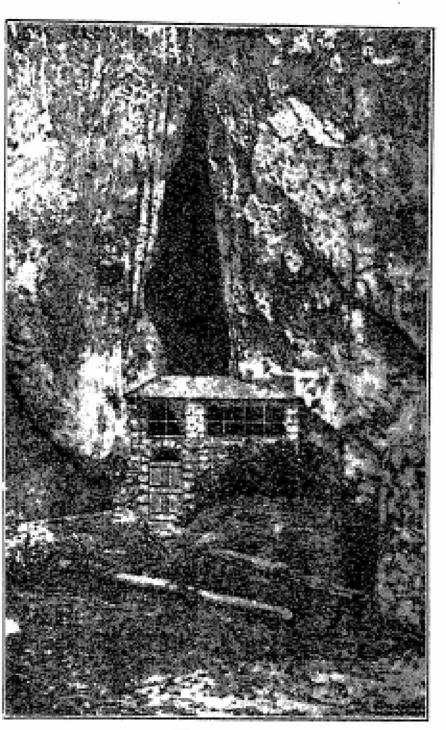


Fig. 16.
佛伊國境グリマルデイ、Barma-Grande 洞窟保存景況
(nach Verneau; The men of the Barma-Grande)

然し更に考ふ可きは、我が內地始めての舊石人類出土の如き場合であつたなら、少なくとも體質人類學の專門家によつて、詳細綿密なる體質上の研究を行ひ、其舊石人の特性を明にする必要がある。それ故、これが爲には、この現狀原形保管は出來ないことゝ考へねばならない。多數に發見の上であれば、出來得る。現に私の見た中にも、佛のドルドニューのカツプ・ブラン洞窟內に、舊石人骨が其儘、枠に入れられて保管せられ、他は佛伊國境、グリマルデイ洞窟群中、バーマ・グラン(Barma-Grande)洞窟にも同樣例がある。この後者の如きは、個々の人骨枠の外、入口は立派に閉塞せられ、番人を通じて見ることが出來る(第十六圖)。人骨ではないが、我が國の新石貝塚の一部も千葉縣良文村では、立派に保存せられて居る(第二十一圖)。

5. 小括

以上述べ來つた、人骨出土作業、特に、2—4に述べた各方法は、夫々利害があり、其決定は一つに以て出土模樣による可き

れ、従つて全重量は甚だ重く、數人掛らなければ搬出が出來ないことも豫め覺悟を要する。

又この方法によつて作出せられた、枠入人骨の運送には特に注意しないと、運搬中の震動により、各部の位置が變つたり、折損したりもする。それ故輸送に際しては、枠を嚴重にし、要すれば外枠を附し、内部も移動の無い様、布片紙等で表面を覆い、其上の空間には、藁、籾殻等を充塡しなければならない。此際最初に木材を以て、假枠を作り、一端切り離し出土せしめた後、將來の保管を考慮して、コンクリートの外枠を作つて、これに入れてから輸送するのも一案である。但しこのコンクリート枠は、後に研究室作業で、多少内部の變化の生ず可きことを豫期して設定しなければならない。



Fig. 15.
アフリカ、ケニア地方 Gambles 洞窟 II. に於ける人骨原形保持出土作業。(石膏使用)
(nach Leakey; (L. 13))

愈々完全なる枠が出來た次には、これが輸送方法が定めらるゝ。要は重いものであるから、何回も乘り換へのない程よい。現狀が許すなれば、トラックを枠の所まで來させ、これに乘せるがよい。其後はこれを汽車輸送すべきか、或はトラックのまゝ遠距離でも、研究室所在地まで直送するかは、道路の關係、運賃等により決せらるゝことではあるが、學術本位から云へば、よし長距離でも、道路が良好なれば、トラックのまゝ輸送するのが、一番安全の様に考へらるゝ。

4. 現場原形保管作業

これも獨り人骨に限つたことでもなく、又單に人骨のみを保管するか、より廣く他の部分までも併せ保管するかによつて、施設の差も生ずるが、直接人骨のみの場合を見る。これは出土した地點に、出土のまゝの姿で、其現場に保管することを指すのである。永久に其儘の姿を其現場で見らるゝ利益はある。然しそうなれば、詳細な體質研究の如きは、殆んど不可能であり、現場まで出



Fig. 14.
佛伊國境グリマルディ小兒洞に於ける成人骨原形保持出土作業
(nach Cartailhac; (L. 5))

でも、今述べた様に各個に分解しなで、次いに述べる原形保持のまゝ出土させたいと思ふ。又此の様な場合に出會したら、著名な體質人類學者、史前學者等へ報導其來援を受ければ、最も確實安全である。

3. 原形保持出土作業

この方法は、直接人骨を掘り出すことなく、其上面より一通り人骨の概形が見らるゝ程度に止め、其人骨を中心として更に其四周を掘り廣げ、人骨が伸ば埋藏のまゝ、これに狂いを生ぜざる厚さ（多くが三〇—七〇糎位）に、地層を切り離し、其儘これを研究室に送つて、其後の研究は總て研究室作業に俟すことを云ふのである。

この作業は、大仕事である。獨り日次と經費とを要するに止まらず、相應な技術も必要である。其作業は所在人骨より更に深く、其四周を掘り下げ、前述の如き厚さを持たせ、この周壁に厚板の枠を組んで崩壊を防ぎ、（第十四圖）次いで底の切り離し作業に掛る。底の切り離しには、準備した底板の巾だけに、横貫する様に掘り貫き、これに一枚づゝ底板を當てがい、横枠に連着せしめ、次の底板に俟る様、順次に切り離しながら、底板を裝着して行き最後の底板挿入と共に底板の裝着が終了するのである。この底板に代るに石膏乃至セメントを以てしてもよい（第十五圖）。

この方法に於ては、崩壊を防ぐ爲には厚く大きく切り取るのがよいけれども、其結果重量増大を來し、運搬困難となる。其大さも人骨の狀態によるけれども、横臥伸展して居るなれば、長さ二—二・五〇米、巾は・五〇—一米、厚さは三〇—七〇糎位になるのが通常と考へら

又人骨發見に當つては、其何れの部分が最初に發見せられたにせよ、先づ頭部の方向に掘り進め、これを確認するがよい。頭骨の存在は獨り體質研究上重要のみでなく、人骨全狀態を見、埋葬の有無、倍葬品の存否等各關係をよりよく律し得るからである。次に注意す可きは、人骨保存の狀態である。保存良好であれば申し分はないが、保存不良で、骨に觸れるとボロ〳〵になり、何んとも發掘出來難い樣な場合も、あり得べきことゝ考へる。此の如き場合は、次の3に述べて居る人骨原形保持出土の要領によつて、出土せしむるのが安全の樣に考へる。

此の如き方法で、成る可く人骨を損傷せしめず、且つ倍葬關係等見落しの無い樣に發掘するには、徐々氣長に掘らねばならず、從つて一體の人骨でも、數日を要することゝなり、發掘豫定日次にも變更を生ずることも出來るが、もしそれが我國最初の舊石人類の發見であつたなら、僅少の超過時日の如き、學術上の一大發見によつて、充分に償はるゝことを考へ、出來得る限り細術に且つ學術本位で掘る價値が充分にある。

今述べた樣な、人骨出土作業は、局部的に土を剝いて行く樣にするのであるから、四周が掘り擴げられた後は、多くの場合作業者に直接助手は要らない。もし補助者でもあれば、發掘局部を手分けして、掘るのも一案である。但し人骨が伸展した狀態にあれば、左右から數名が取り掛り得るけれども、屈葬の或る場合には、大勢では反つて互に發掘を妨げることになる。

かくして人骨は其上土を剝がされて、全身の上部が露出すれば、少なくとも其出土高等、所要の測定と共に其狀態は撮影して置かねばならない。而して丁寧にするなれば、最初に發見した狀態から、漸次作業の進捗を見らるゝ如く寫し、且つ所要の局部乃至は人工品との關係等夫々を寫して置けば、遺漏はない。特に人骨の保存良好で、一端各部各個に取り出して、研究室まで運ぶ場合でも、將來體質研究終了後、再び原形の樣に組み立てようとするには、更に多くの局部撮影が必要であるのみならず、單に上から下に見た寫眞のみでなく、側面から上下の關係等を明にする樣寫して置く必要も出來てくる。

愈々全身の露出作業が進捗し、これを頭骨、四肢骨等各部分に分解するに當つても、充分に下方の土と分離してないと、折損することがある。又多少の土等が附着しても、運搬に支障のない程度なら、大きく土と共に切り取る方が安全である。然しながら、我內地に舊石人骨を發見することは、世界の史前學界にも重大影響も與へることゝなるから、いくら骨の保存が良好

人骨と覺しきものが發見せられたならば、稍々廣く掘り擴げて、其存在狀態も大約見當がついてき、完全人骨と考へらるゝ樣な場合には、其全身發掘を企圖せねばならない。これには其四周に餘地がないと、直接人骨出土作業に不便であるから、思い切つて廣く、人骨を中心として、其四周の掘除を行ふ可きである。これが爲には、一先づ直接人骨出土作業を中止し、人骨上には新聞紙等で覆い、以て標識となし、四周の掘擴作業に移らねばならない。此際特に氣を付けなければならぬことは、人骨を早く露出させたい人情から、兎角四周への擴大作業が手荒くなり勝になる。私共も惡い惡いと思いながら、つい急いだ覺へが多い。最初この人骨發見が朝の内であつても、其日には直接發掘を行はないで、次の日から取掛る心持ちで、四周の掘擴作用を行はねばならない。特に人骨に近い所は、綿密に行はないと、飛んだ見落しも出來る。又人骨に近く其周圍に人工遺物等を發見した際には、それが直接人骨との關係が無い樣でも、其位置に取り殘して、全般出土の上で、有無を判別しても遲くはない。かく取り急がぬ樣に四周を掘り下げて後、以下2―4に述べてある各種何れかの出土作業を決定し、これに依つて始めて直接人骨出土作業に取り掛る可きである。

2. 直接人骨出土作業

直接人骨の發掘には、我新石人骨發掘と同じく、細く箒に近い樣な、彈力ある竹箆を薄く鋭く削つて、土を剝ぐ樣に掘り、時々小箒で土を掃いつゝ、漸次露出せしむるがよい。萬一にも土堅く竹箆では掘り惡い場合には、竹箆を十五―二〇糎程の長さにし、これを鑿の樣に用いて、左手に持ち右手に槌で輕く敲いて行けば掘られる。それでも尙カルシューム等によつて、どうしても掘り惡い時に、最後の手段として彈力ある薄い鐵箆を竹箆に代へ、相變らず木槌を使用する。總て木槌で敲く場合は、骨に穴を明ける等これを傷けない爲、骨に向つて成る可く鋭角に箆を向け、弱く敲かねばならない。而して直接鐵器の使用は鋭利に過ぎ對象を傷け易いから、成る可くこれを避けたい。鐵箆を鐵槌で敲く如きは、洪積層の發掘としては、容易に起る場合とは考へられない。洪積所在の人骨であるなれば、場合により、土やカルシュームの削剝が充分に出來ないこともあり、この際局部的に水洗も一方法ではあるが、現場では、確實に出土せしめ、細い作業は研究室に歸つて後に修す樣にする方がよいと考へる。

1. 洞 窟 の 發 掘

洞窟發掘に對する一般の注意は、既に述べても居るが[128]其發掘す可き位置は、最初洞奥に何等か手掛りを得た場合でも、入口に近く概ね光線の逆する範圍に於て、先づ試掘するのが普遍的要領である。[129]洞幅が狹ければ、洞奥に對し直角的に縱斷して横壕掘りを試みるのが有利なことが多い。

2. 墳 墓 の 發 掘

墳墓の所在も、最初から知り得ないのが一般であり、發掘中人骨等に出會して後、これを認知するが通常である。特に舊石墳墓なるものが、單純で特異構造がなく、通常遺物層中に見らるゝものなれば、（前述、十六の3.參照）其發見の手掛りがなく、何時人骨に出會するかは、豫見が出來ない。又人骨に遭遇しても、果して埋葬せられた所のもの卽ち狹義の墳墓か、乃至は自然狀態のまゝであるかに就ても、主體を出土せしめなくては、判斷困難の場合も多からうと考へる。從つて發掘に際しては、常に人骨に出會す可きことを顧慮して居らねばならない。それ故、骨角の樣なものに遭遇した場合には、過早に引出すことなく、掘り擴げ、其骨が單獨か、取り纏つて居るかを、確めれば、人獸の區別は容易に出來る。只識別困難なのは、不完人骨であり、特に切損斷片の如きは、發掘中、土がついて居ると、兎角見逃し易い。それ故、骨の出土量が多くとも、人骨か否かに就て、一通り見ながら發掘して行く可きである。これを人夫任せ等粗雜な發掘をすると、骨の發掘要領を心得ないで、矢鱈に取り出したり、折損したり乃至は人獸骨の見境なく取り出し、後に取り留めがつかなくなる。

〔別註六〕 完全人骨の出土

1. 一 般[130]

も覆土を除却して掘る可きである。(四五) 總て地表より二米以上の深さに掘下する際は、(四六)地表への交通斜坂を設けないと不便である。梯子を用ふるより斜坂の方が確實である。場合により石塊其他の重量物搬出の必要があれば、簡單な櫓を組み滑車を附して、引上げるのが便利なことがある。(四七)

　これ等發掘に際し、特に注意す可きは、遺物層が層位的に存在して居るか否かである。獨り新石と舊石と云ふた樣な大きな文化階梯間に止まらず、同じ舊石層内に於て、更に層位的存在があれば、一界にして二つ以上の階梯が見出さるゝことゝなるから、これには充分注意かあつて欲しい。歐洲の如きは第十二圖に掲出した如き、十三の文化層を見る樣なこともある。此の樣な層位ある場合は、夫々の部分ごとに發掘(分層發掘)を行ふのが通常である(第十三圖)。

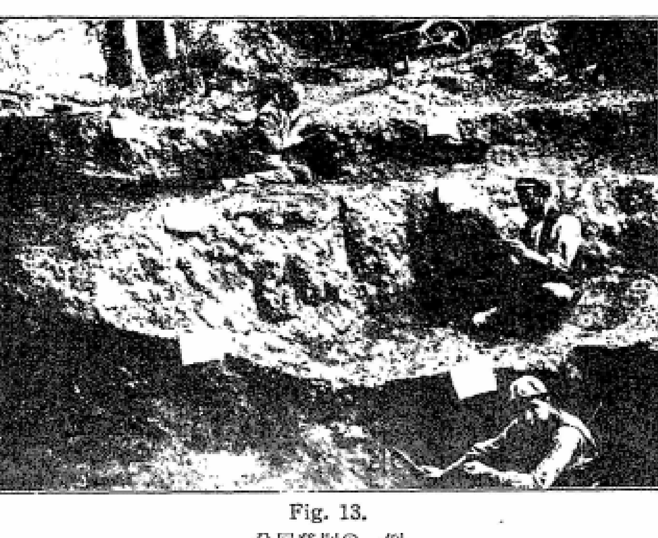


Fig. 13.
分層發掘の一例
佛、ドルドウニュウ、
La Madeleine 岩陰發掘。
(nach Capitan et Peyrony; (L. 4))

二十一　舊石遺跡の發掘

　舊石發見の機會は、必ずしも舊石文化らしき痕跡を見出して、これを手掛りとして發掘する場合のみには限らない。又これが手掛りを得ても、前述した如き狹義の遺跡なりや、或は遺物發見地であるか、最初より解らない場合も多いと考へるが、順序として、狹義の遺跡と認めらるゝもの〻發掘に就て、概言する。

嘴）がいる。これ等は多く人夫に携行せしめるか、現地で借用すれば足るものである。

遺物層の發掘は、ローム位の堅さなら、新石と同様、竹篦、小鶴鍬、移植鏝等で足りるが、それより、より堅い場合には、竹篦様の鐵篦と木槌とが入用であり、カルシューム附着の様な特殊狀態では、古生物學者の化石採集用のハムマーと鐵鑿とが用立つ。(四〇)

13. 金石併用時代
12. アジリアン（中石）
11. マグダレニアン後期
10. マグダレニアン前期
9. 古期ソリユウトレアン
8. 7. 6. オーリナシアン後期
5. オーリナシアン前期
4. ムステリアン後期
3. 典型ムステリアン
2. ムステリアン前期
1. アシウレアン

Fig. 12.
スペイン、カスチロ（Castilko）洞窟層位圖
(nach Obermaier aus Osborn)

此外、洞窟發掘等の場合には、照明裝置が絶體的に必要であり、(四一) 單に發掘用のみならす、寫眞撮影の照明も入用となる。其他各種の發掘要具は、我新石發掘の場合と大差がない。(四二)

5. 發掘方法及び諸注意

發掘方法も新石發掘と變りはない。(四三) たゞ通常の場合は除土量がより多い筈であるから、其除土捨場は豫め撰定し且つ將來擴張を妨げない所にす可きである。又覆土が深い場合には、若干傾斜を持たせる關係上、底の方の面積が以外に狹くなるから、最初にこれを考慮中に入れて置かねばならない。(四四) これ等遺物層に到達以前の作業は、主として人夫に行はせ、學者はこれを傍から監視指導し、遺物層の發掘には自から、これを行ふのが、一番確實である。（(三五)參照）こゝに注意すべきは深き壕底で作業中に、側壁を抉る様に掘り込むのは危險である。而倒で

3. 發掘計畫

愈々發掘を行ふことになつたなら、大約次の諸項に就て、發掘計畫を立案するがよい。

1) 發掘日次(17)
2) 發掘參加者(18)
3) 發掘準備（後述）
4) 發掘方法（同右）
5) 發掘後の所置（同右）
6) 豫算(19)



Fig. 11.
ドイツ、ウユルテンブルグ Heidenschmiede 岩陰の發掘。
(nach E. Peters; Fundbericht aus Schwaben. VI. 1931)

4. 發掘準備

總ての準備、特に發掘用具の如きは、發掘地附近に都市があり、手近に間に合ふ場合は、必要に直面してからでも應急に所置し得るけれども、邊鄙な所の發掘には、萬一の場合を顧慮すれば、後に不要なものが多くても、豫め準備して行く方が、間違はない。

舊石發掘用具も大體新石發掘用具で足り得る。只より堅い地層に出會する場合を準備せねばならない。これは前述した豫察に際し、其堅さを見、何んで掘る可きかを見て置けば、見當がつく。覆土除却作業には、新石の場合と畧同様であり、萬一にも赤土（ローム）乃至礫石層があればトグワ乃至マンガが必要であり、往々十字鍬（鶴

地層存在を確認す可きである。又この小試坑もなし得るなれば數箇所に行い、包含體積を豫察し得れば、發掘計畫の樹立は容易である。又斷面等に一部露出の場合に於ても、露出部の兩端を見極むることが必要であり、覆土の狀態によつては、上から小試坑法を併用すれば、存在地積が想定し得る。

又これ等發掘地が洞窟、畑地、山林等を問はず、其所有者に對し、其發掘の許しを得べきであり、特に畑地等に對しては、損害賠償に就ても豫め相談を行ふて置くことが必要である。[11]

2.發掘時季及び發掘者

これは新石の場合と變りがない。只前述の如く我內地最初の試みである樣な場合、これを愼重に實施するには、理想から云へば、春秋等の最も溫良な時がよく、且つ雨季等は避く可きである。又萬一遺物層等に出水の恐れがあるなら、當然減水期に行はる可きである。

又發掘に當つては、其規模にもよるけれども、如何に小規模に行ふとしても、自己單獨よりも、學術的な幇助者があれば、遺漏を少なくする。特に比較的長期に亘る發掘になると、漸次疲勞の累加は、知らず知らず、總てを簡畧にする結果を生することは、自然であるから、[12]此の如き場合には、益々幇助者の必要を生する。特に舊石發掘の如き場合には、經驗ある史前學者の立會を求めることも有意義であり、同好の學友に援助を受けるか、或はよく働く助手を得るか等、何れなりとも出來れば、遺漏を少なくする。

人夫の使用は、發掘體驗者であれば、便利であるけれども、一面には遺物等に愛好心ある人は、反つて間違も起し易い。最初に骨は折れても、純眞な人物を撰ぶ可きである。これ等の數は、學者一人で監視の最大限は三人であり、通常二名か理想的である。

致し、引いて經濟問題をも惹起してくる。萬一にも發掘中途にして、經濟問題等の爲、これを中止する様なことは、學術上からは遺憾に耐へないことであるから、これ亦豫め發掘者としては、考慮して置く可き一つである。(11)然しこゝに述べることは、あくまで學術本位として、直接、夫々の社會關係や經濟事情等に觸れて居らない點は、豫め御斷りして置く。

二〇　發掘作業

こゝに發掘作業の總てに亘つて詳述するだけの紙面もなく、且つ舊石所在の位置と、種類性質等により、發掘作業は必ずしも一様でもないから、單に其端緒をなす概要に止むる。又舊石發掘と雖も、其大局に於ては、新石發掘と大差があるのではない。從つてこゝでは、主として新石發掘と異る所を、主眼として述べる。

1. 豫察調査

何等かの動機に基き、舊石器らしきものを發見した際、愈々これが發掘調査を試むるか否か、發掘するとせば、如何様に施行するか等、一應豫察を行ふて置けば、確實性を増大する。特に發掘者の自家より遠く離れて、發掘に當つて發掘地附近に宿泊せねばならない様な場合に於て、特に然りであり、其際には、獨り遺跡の豫察に止まらず、發掘者の根據地の撰定、(12)交通網の關係、(13)並に發掘に所要の人夫、(14)物資等の有無に就ても、一應は見る可きである。

發見地現場に於ては、もしも舊石器らしきものが、其表面採集であるなれば、其包含地層まで、小試坑を穿ち

其五　發掘及び出土の研究

十九　發掘調査の一般

史前學上の對象が、特例を除いては、通常地中に埋沒して居る關係上、これを發掘調査によつて、其埋沒の狀態を知り、且つ夫々の遺物を發見す可きである。從つて發掘調査が、史前學上重要なる意義を存するは勿論、其發掘調査の精粗良否は、直に學の內容に及ぼす所が深い。一部遺跡の狀態、乃至は遺物存在の原狀等は、一度發掘するに於ては、其存在事實に對する未來永劫に亙る破壞である。從つて、これが破壞に對し、記帳、測定、撮影、寫生等のあらゆる手段によつて、其原狀を机上に保存し、且つこれに學術研究を加ふる等の補償によつて、始めて其破壞の責を免る可きものである以上、發掘調査が愼重を要す可きは當然過ぎる當然であり、[三]獨り舊石存否研究に限つたことでない。

特に舊石發掘になると、我が內地では手近に先例がなく、それが最初の一例ともなる可きであるから、豫め舊石文化に對する認識を高め、遺漏ない樣に計畫し、且つ實施せられねばならない。加ふるに我が國に於ける最初の試みであるなれば、學術上からは徹底的に發掘し、其內容資料を豐富にして、舊石文化存在の確證を增大す可きである。只これに對し一顧す可きは、此の如き徹底的な發掘となれば、勢、發掘日次の延長や、規模の擴大を

(105) 歐洲の野外住居の一部には、天幕住居說があることに就ては、(19)の前半參照。

(106) 爐跡を容易且つ確實に認知し得るには、吾が新石文化に見らるゝ樣な、爐圍があればよい。(我國の石で圍んだ立派な一例は、東京上荻窪の爐跡、本誌二の三、圖版第九(甲野氏論文)にある)。此外、我が新石文化には土器を以てした等色々見らるゝが、それが中石文化になると、爐底に石塊を敷いた程度のものが見らるゝに過ぎない。(拙著、(L. 21 S. 21. Fig. 3.) 又カムピニアンでは、特異構造もない。(第二圖參照)

(107) 土が燒けた場合、もしそれがローム(赤土)であつた場合には、熱量にもよらうが、赤く煉瓦色を呈する。此の如き場合は、私共は我新石文化の爐跡で屡々出合し、其甚しいのになると、燒土の厚さ二十糎に達し直徑一米を越ゆるものすら見て居る。

(108) 地層の吟味に於ては、其所屬層が洪積層であることを確認するに止まらず、其遺物包含層を中心として、洪積及び沖積層の層位狀態を明にし、且つそれが、後世に於ける崩落、陷沒等の諸現象の有無に就ても一應は點檢することが必要と考へる。

(109) 共存動物に關しては、前述、其三の十一、及び其五の二十二の1等參照。

(98) H. Klaatsch; Der Werdegang der Menschheit und die Entstehung der Kultur. S. 296. „Einige Steininstrumente in der Nähe — ein hervorragend schön gearbeiteter Faustkeil und ein Schaber vom Acheuléentypus—waren wohl auch absichtlich hingelegt;" と述べられ、且つ其傍に置かれたと著者の肯定せられた握り槌等の圖（同書の二三一圖）の下には、明に副葬品 (Grabbeigaben) と書いてある。而してこの遺骨は目下、伯林人種博物館、史前學部に陳列してあり、出土原形を見ることが出來、私も實視はした。

(99) 我新石文化の特異相の一般に就ては、〔別註四〕參照。又我新石人の葬法に就ては、小金井良精博士、Bestattungsweise der Steinzeitmenschen Japans, Zeitschr. f. Ethnor. Bd. 55. 1923. S. 166－200. 及び清野謙次博士、日本原人の研究等參照。

(100) 獨り舊石時代の石器原料に止まらず、歐洲、北阿、エジプト等に於ける各石器時代の石器原料の大部分は燧石であり、他の石材はないのではないけれども、前者に比すれば、甚だ僅少である。此の如く原鑛に著しい偏の存する結果、石器原料採集跡の如きも、より意義を存して居る。この點は我新石文化に於て、石鏃等にこそ、よく黒曜石が使用せらるゝ外、他に色々の石材を混用せられ比較的偏が尠ない。勿論黒曜石の如き火山關係の所産物で、原鑛所在地に制限を存する等は研究に價するが、一般石製品の多くが其石材採集には、特別の考慮を要しないものが多く、これとは、自づと異る點は考へらるゝ。

但し歐洲の如きも、舊石原鑛採集地として、異論の存しない程度のものは聞知して居らない。等しく認めらるゝ程度のものは新石文化以降である。(H. W. Sandars; On the Use of the Deer-Horn Pick in the Mining Operations of the Ancients. 1910.) 參照。

(101) 舊石文化に於ける工作場跡なるものも、前述の石器原料採集跡と同樣、多くが肯定するだけのものを、未だ聞知して居らない。洞窟住居跡等の一部に比較的多くの石器、石屑、原料(?)等を發見せられた部分を、輕い意味で工作場跡と稱する程度であるなら見られもする。例へば、L. Pfeiffer; Die Werkzeuge der Steinzeit-Menschen. 1920. S. 83—85. に、Schweizersbild bei Schaffhausen (Schweiz) の第四層マグダレニアン?に於て、Nuesch 氏が工作場 (Werkplatz) を發見したと云はるゝ如きである。然しこれはよしこれを工作場なりと認めても、住居跡内の一部であつて、獨立した遺跡ではない。更に歐洲新石文化では、佛の Grand-Pressigny (Indre-et-Loire) の如きは工作場跡として有名である。

(102) 陷穴問題に就ては、(19) 參照。

(103) (22)(87) 等參照。

(104) 歐洲舊石時代には、猛獸も居つたことは、(85)(86) 等參照。但し從來の發見に基けば、我内地の洪積動物群中には、歐洲の樣な危險性ある動物は居らなかつた樣である。この動物群に就ては、長澤氏、論文〔別註五〕參照。

は、拙著、歐荷、正. S. 207. に例出して置いた。

(88) アフリカに於ける洞窟遺跡は、第五圖に揭出したローデシア例の外、ケニア (L. S. B. Leakey ; (L. 13)), 北阿 (J. de Morgan ; (L. 16)) 等にも見らるゝ。

(89) 小亞細亞に於ける洞窟住居跡例は、前揭、(10) の9參照。尙同地方其他に就ては、H. Obermaier ; Der Mensch der Vorzeit. S. 316—324. Fig. 199. にも略述せられて居る。

(90) Karl Weule ; Leitfaden der Völkerkunde. 1912. Taf. 81. 2. Bergdamara (舊獨領西南アフリカ)の洞窟生活の寫眞が揭出せられて居る。

(91) 中石文化に屬するアジリアン (Azilien) には洞窟遺跡が多く、南佛 Mas d'Azil 洞窟の如きは、其一例である (著者實視)。又北歐ノルエーの中石文化に屬する Viste の洞窟貝塚 (H. Shetelig ; Primitive Tider i Norge. 1922參照) も亦其例であり、新石例は餘りに多く、歐洲以外にも多く見られ、我が國にも其例がある。

(92) 石灰洞の成因に就ては、拙著、歐荷、正. S. 53—56. に述べて居る。

(93) 八幡一郞及び大山。岩手縣南部石器時代遺跡調査旅行。人類、四〇の十。(大正十四年) 參照。但しこの報告は單なる畧記したのみで、詳報は行ふて居らない。

(94) 歐洲舊石岩陰遺跡例は、拙著、歐荷、正. S. 206. Fig. 121—122. Laussel ; 正. S. 245. Fig. 148. La Quina ; 正. 圖版. 十二. 其一. St. Christophe ; 續. 圖版. 第三. La Madeleine ; 續. S. 5. Fig. 5—6. Cro-Magnon ; 其他多くを揭出してある。

(95) 史前學上墳墓の基礎的研究を行ふたものは、不幸にして未だ見て居らない。特に舊石文化に關したものは、歐洲等に於て其現實に關しては論議せらるゝものも多いが、夫々論者が、どれだけに墳墓なるものを基礎的に考定して、論述して居るのか、私には了解し得ないものも多い。從つてこゝに述べて居ることは、全く私獨自の考へであるから過ちも多からうし、傾もあると信ずる。此點は讀者に推搞を御願する。

(96) 私自身には、埋葬なるものは「死者に對し、好意を以て、其遺骸を仕末する」ものと考へたい。從つてこの意義から見ると、本文最初に述べた所の「死者に對し、何等かの人爲的な所置を行ふ」と云ふよりも狹くなる。而して後者の場合には、同じ遺骸を取扱ふにしても好意を以て行はない、卽ち委棄の樣な場合も含まれるし、尙其上理論上首祭りだのアメリカのインカ文化に行はれた心臟取りだのゝ樣な、精神文化所産の諸行爲もこれに含まれてくる。

(97) ネアンデルタール人の發見狀態の概要に就ては、長谷部博士、(L. 10). S. 151—161. 淸野金關兩博士、(L. 12). S. 267—301. 等に述べられてあるから、同書參照。

を云ふて居るのであつて、例へば或る時日、住居した結果、其住居跡の殘存を示す、爐跡、食料殘骸、人工遺物等が相關的に發見せられたり、或は埋葬せられた人體等を發見するとか、凡て當時の或る行爲を示す場所を指すのである。これも新石文化に見る樣な、構築術工跡である、竪穴等の住居跡であるとか、或は食料殘骸の集積した貝塚であるとか、乃至は歐洲の樣な構築せられた巨石墳の樣な場合になれば、夫々其研究對象は、より明確になり、且つ直接其構成樣式に關する研究資料も存する。從つてこれが人爲構成の跡か、如何かは問題でない場合も多い。

(83) 我が國に於ては、從來より主として貝塚、竪穴等に對し、遺物包含層、包含地、遺物散布地等の稱呼區分がある。これ等後者の多くが、確たる住居跡等を發見しない結果、かく稱せらるゝものが多いと考へらるゝ。これ等の中には、單に地表上に遺物を發見したのみのものと、地層に遺物を認めた樣な、場合もあるが、他の一面からは、住居跡を確認するまで發掘を行い得なかつたもの、或は住居跡が破壞せられて、これを認め得なかつたもの等、其當時に於て住居が在つた場合と、遺跡に直接關係少なく、遺物のみが、單に地層中に介在する樣な場合もある。

今こゝで遺物發見地と稱し、前述の遺跡と區別して居る所は、其內容が不明のものが多い結果、嚴格狹義の遺跡以外を、かく漠然と指して居るのである。

(84) 舊石人が定住性を有したか否かは、未だ明確でない。定住性のない、所謂放浪生活とでも云ふた生活を營むものがあれば、洞窟は利用を見ても、其意義は定住者のそれとは相異る。又季節により移動性を有する場合には、前者に比しては、より有意義となるけれども、これ等を認識する事實の發見もなく、又歐洲等では、それだけにも考へて居らない樣である。而して定住性を帶ぶるに於て、本文の如き意義を生ずるのである。

(85) 洞窟の占據は必ずしも無條件ではない。特に歐洲洪積期の如きは、恐る可き洞窟住居者である、洞獅子 (*Felis spelaea*) 洞ヒエナ (*Hyaena spelaea*) 洞熊 (*Ursus spelaeus*) 等の獰猛な哺乳類が居り、恐らく人類の洞窟發見以前から彼れ等が先づ占據して居つた場合が多かつたと考へる。從つてこれ等を驅逐するだけの鬪爭を見ればならないのであるから、容易なことではない。

(86) 其一例は(85)參照。　特に洞熊の如きは、群棲したものと見へ、其洞窟より出土する數も甚だ多い。例へば Tirol, Kufstein に於ける Tischoferhöhle の如きは、成熟せるもの二百體を越へ、若齡のもの百八十體を發見したことがある（文化關係未詳）。(H. Obermaier ; Der Mensch der Vorzeit. 1912. S. 93.) 又最近支那北京郊外の周口店洞窟より北京原人骨が出土した。これには文化所產として、石器(?)を發見せられた由ではあるが、文化所產がなくとも人類として洞窟生活は可能である。

(87) 歐洲舊石時代に於ては、最初のプレ・シエルレアンとシエルレアンとは、未だ洞窟遺跡がない。兩者共に暖的な氣候環境にあつたことは注目に價する。但し暖ムステリアンには洞窟住居跡は見らるゝ。文化人類として洞窟住居の、最初はアシユーレアンにあるが、この遺跡名

十八　遺跡學的研究小括

舊石文化の存否に對し、これを遺跡學的に見ると、狹義の遺跡發見が、一番確實でもあり、且つ早道である。それなら上述した諸遺跡に於て、どれが發見容易かと云へば、申すまでもなく、洞窟乃至岩陰等の住居跡の發見である。これは洞窟岩陰等、住居跡の有無に拘はらず、搜索の目標となり得るからである。其他の諸遺跡乃至は發見地の搜出に就ては、意識的に發見す可き方法は、私には未だ考出し得ない。場合により、地表に何等か手掛りとなる遺物等を發見するとか、或は地層斷面に於て、舊石器らしきものを見い出したとか、乃至は發掘中、下層に於て、更に舊石器に遭遇したとか等のことは有り得るけれども、これは豫め其存在を認知した結果ではない。偶然の結果である。されぱとて、此の如き發見を誹毀し、又は偶然を企圖した搜索を排斥する必要はない。有り相に思はるゝ所は勿論、洪積斷面露層の如きは、常に注視す可きである。これ現下の科學として止むを得ない所であり、獨り史前學に限つた現象でもなく、古生物學上に於ける化石發見の如きと其軌を一つにして居る。

(81) 遺跡に對しては、歐洲に於ても適確な研究を、不幸にして未だ見てない。一部には Fundstation=Station と稱し、これを Terrain と區別するものがあるけれども、これは主として原石問題に際して、前者に遺跡的概念を、後者は化石包含の樣な、發見地の意味で使用せられたもので、果して石器時代内に、この區別があるか否かは、明でない。總じて私の見た歐洲の諸書では、遺跡觀は淺く、單に遺物を出土する所と、輕く扱はれ、遺物研究偏重の傾が深い。而して多くの野外に於ける遺物を發見せらるゝ場合、其人爲遺存の有無に拘はらず、簡單に住居跡發見（Wohnpratz-Fund）と定められるものも多い。特に新石文化に多く見らるゝ。從つて、この住居跡發見と號せらるゝ中には、性質不明のものも混在するから、この點は吟味しないと、誤認をなすことにもなる。

(82) こゝで嚴格狹義の遺跡と云ふて居るのは、生活乃至社會現象に基く、其當時に於ける某行爲が營まれた結果、直接其行爲の殘存を物語る跡

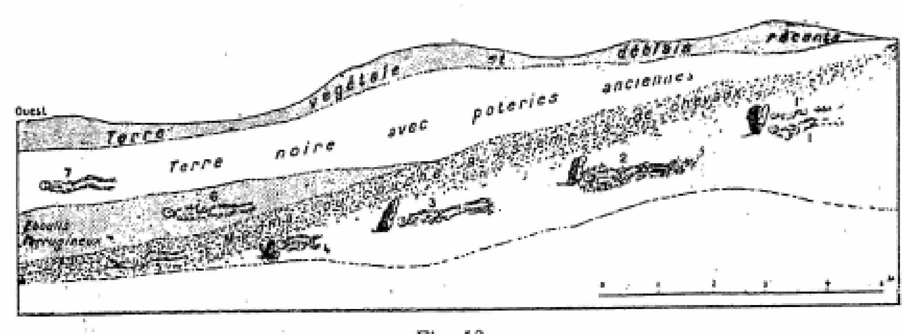


Fig. 10.
佛國 Solutré 岩骨下に於けるチーリナシアン層人骨發見の狀態。
（頭部の傍に岩石が配置せられて居る所に注意）
(nach Depéret u. a. aus G. H. Luquet; L'Art et la Religion.)

溝、等何等か構造を物語る一端でもあれば、其時は住居跡と確認することが出來るが、上述の如く期待は出來ない。

十七　舊石遺物發見地

前述の如く、狹義の遺跡と、發見地とを區別して見ると、發見地なるものは、單に舊石遺物を包含するのみであり、直接當時に於ける人爲の跡が知り得ないものを指すから、前者に比すれば確實性に乏しい。勿論最初から、狹義の遺跡なりや、單なる發見地であるかは不明の場合が多く、發掘調査の結果に於て、何等直接人爲の跡を見出し得ない爲、單なる發見地と見ざるを得ないことは生ず可きである。

此の如き發見地に遭遇した場合に於ては、其確實性を增大する爲に、其地層の吟味は勿論、(109) 其出土遺物に於ても、共存動物の檢出に務め、(110) 直接人爲を示す人工遺物に於ては、種と量とに於て豐富でありたいと共に、他の文化遺物、特に炭、灰等火の利用を物語るとか、或は共存骨角片に截斷、搔刮等の跡を示すか等何等か人爲を强調し得るものが伴へば、發見地であつても、舊石文化所在の認識をより强め得ることゝなる。

るなれば、[105]より存在可能である。只彼れ等が野外住居を營んでも、上述した如く其構築術工が發育して居らなかつたと考へらるゝから、其痕跡が果して今日まで遺存し得るかは、大なる疑問である。[106]これに對し唯一の手掛りとも思はるゝのは、其爐跡の發見である。

野外に於ける爐跡の發見は、もしそれが一時的の焚火跡でもない限り、住居跡たる可き可能性は大きい。勿論舊石爐跡に於ては、別段特異な構造も期待は出來ない。[107]當時の土面に於て、比較的長時間同一箇所で焚火を繰り返された結果そこに炭、灰等が或る箇所に集積し、且つ場合によつては、其下面の土が熱を受けて、變色して居る等[108]の事情が認められ、更に燒骨燒石等が傍にでも發見せらるれば、これを爐跡としてより確認し得ると云ふた程度のものと考へらるゝ。但し以上の樣な爐跡を發見したからとて、直に以て、住居跡其ものではない。住居跡たる可き可能性が大であると云ふに止まる。住居跡より、より廣い意味で生活跡とでも云ふて置けば間違はない。それ以上に爐跡の外、柱跡



Fig. 9.
グリマルディ Barma Grande
洞窟成人人骨發見狀態
(nach R. Verneau, aus Cartailhac (L. 5))

めらるゝ。[99] 又同地發見の成人人骨にしても、多くが自然狀態其まゝとも思はれない（第九圖）。さりとて構築術工的には、未だ顯著に認識し得る程度ではなく、中に其頭部を大石で標式したものもあるが（第十圖）、此の如きは例外に近いものであり、其多くには、何等の術工も施されて居らない。

以上の如き現況から考へると、よし我が內地に舊石人の遺體を發見せらるゝとしても、大約舊石文化としては死者に對し或る程度の精神行爲は認められ得るものがあるにしても、特別に標式せらるゝ樣な構築術工は、ないと見てよい。見方によつては、殆んど自然狀態乃至はこれに近い姿で發見せらるゝものと考へれば、間違はない。再言すれば、我新石人の出土中にも、この樣な狀態に發見せらるゝもののもある。[100]

Fig. 8.
佛國國境グリマルデイ小兒洞發見
小兒骨（腰部にある貝殼に注意）
(nach E. Rivière aus H. Obermaier)

4. 其他の諸遺跡

上述の洞窟、岩陰住居跡、墳墓等を除いた以外に、遺跡として見る可きものが少ない（發見地を含まない）。野外住居跡を除けば、殆んど特別なものゝみである。歐洲では、往々所謂、石器原料採集跡、[101] 工作場跡、[102] 陷穴跡[103] 等が擧げられもするが、果して其論據に幾何の確實性が存するか、吟味に價するものが多く、從つてこれを採用することに躊躇する。

然しながら野外住居跡の存在は、決して不可能ではない。特に溫暖な氣候環境であり、[104] 保安上からも良好であ

とでも稱せねばならない。文化上、果して死者に對し、どれだけの精神行爲が伴ふか否かを見ることが、有意義なのである。



Fig. 7.
佛國ドルドニユウ La Moustier 洞窟少年頭骨と石器との發見狀態
(nach H. Klaatsch: Der Werdegang d. Menschheit)

此見地から從來發見の舊石人類を見ると、歐洲前期舊石文化の內、確實にムステリアン文化所産者である、ネアンデルタール人の遺骨は發見せられて居る。但しこれが完全乃至完全に近く、其全身的發見狀態の、知られ得るものは尠ない。[47] 中にドルドニユウ、ムスチエー洞窟發見の少年男兒と認めらるゝ遺骨頭部の周圍には、石器が故意に配置せられて居る（第七圖）と研究者は述べて居るが、[48] 寫眞で見るが如き程度のものが、果して故意に配置せられたか否か、これを明確には決定し得ない狀態と考へる。要するにネアンデルタール人の死者に對する所置に對しては、研究上未だ明でない所か存するけれども、積極的に丁重な行爲が行はれたとのは、考へられない。

同じ歐洲でも後期舊石人になると、人爲の結果が明に認め得るものがある。其最も顯著な一例は、グリマルデイ小兒洞發見の兩體の小兒骨であつて、其腰部には、有孔せられた、貝（*Nassa neritea*）が密在するのが見らるゝ（第八圖）。然かもこれは或る帶狀をなして居る所を見ると、有孔貝類を紐で連接してあつたかも知れず、これで體を覆ふたものかも知れない。何れにせよ、人爲の所産とは認

根本に於て墳墓なるものに就ては、基礎的研究を行ふ可きことが多いけれども、これ亦多岐に亘るを以て略する。[88] 特に舊石人の場合に於ては、舊石人が何等かの原因によつて死んだ場合、其死者に對し何等かの人爲的な所置が行はれたか否かを判別することが、大切なのである。もし何等の人爲が加へられて居らないものなら、自然狀態に人骨を發見したものであり、極限的には野獸骨を發見したと變りがない。化石の發見に等しい。もし墳墓の意義を狹く解し、埋葬[89]を行はれた結果のみを墳墓とするなれば、以上の如き場合は、これに含まれないで、人骨發見地

Fig. 6.
典型的岩陰例
(佛 Colombière 岩陰遺跡)
(nach L. Mayet ; La Colombière. 1915)

前の文化に遭遇した例は聞知して居らない。然しながら我内地に於ける洞窟調査例は、他の調査に比し決して多いとは考へられないし、又特に舊石存否に着意して發掘を行はれなかつたものもあると考へるから、將來多くの洞窟調査を行ふ必要があると同時に、其際には舊石存否にも配慮して發掘を行ふことが、存否問題に對する有力なる一資料である。

2. 岩　陰

岩陰は不完全なる洞窟に過ぎない。從つて歐洲、特にドルドニューのウエゼール河畔の如き、洞窟密在し且つ夫々に住居跡を見る樣な、密在地方では、場合により過剰人員か洞外に排除せらるゝ場合も起ふし、こうした人々が止むを得ず利用もするであらう。然しながら構築術工が發育して居れば、其不完全な部分も人工を以て補ふことも出來るけれども、舊石人が果して如何樣に利用したものか、全く見當もつかない。然し少なくとも歐洲では、岩陰遺跡も少なくない。(14) それ故、兎に角、我が國でも調査を試みて見る必要はあるが、私共も未だ試みては居らない。

Fig. 5.
舊石洞窟住居跡の一例
(アフリカ、ローデシア、Impey's 洞窟)
(nach M. C. Burkitt ; L. 3.)

十六　舊石遺跡

今區別した嚴格狹義の遺跡に就て見る。何んとなれば、もしこの樣な舊石遺跡の發見は、舊石文化存在を確認し得るからであり、其遺跡内容に於て、實在資料の充實した場合に於て、益々然りである。

これ等舊石遺跡として、從來發見せられた諸例を見ると、洞窟岩陰等に於ける住居跡、野外に於ける爐跡を存する生活跡、墳墓等が主要なものであり、以下夫々に就て見る。

1. 洞窟遺跡

舊石遺跡の主要なる一つである。未だ構築術工の發展して居らない舊石人は、彼れ等の生活樣式に適應した洞窟があり、[84] 且つこれの占據が容易であるなれば、[85] 天然の住居として、獨り氣候風雨に對するに止まらず、保安上からも良好な條件を備ふる洞窟が利用せらるゝことは、容易に考へられ、文化を有して居らない、自然生活者である野獸類の或るものにも洞窟住居者は見らるゝし、[86] 又現に歐洲にては多くの舊石住居跡を見るに[87]止まらず、アフリカ（第五圖）[88]小亞細亞等[89]にもこれを見て居る。更に現在の一部未開民族にも洞窟利用者も存して居るし、[90]中石文化以降にも少なくない。[91] それ故舊石文化があるなれば洞窟遺跡が存在す可き蓋然性は大きい。私共はこの見地のもとに、しかも歐洲によく見る樣な石灰洞[92]の集在地である岩手縣氣仙郡地方を既に調査もし、其典形的な女神洞窟の發掘を行ふたこともあるが、不幸にして崩落岩層に達し、上層に新石文化層を見た外、其下層に於ては、何物にも出會せずに止んだ。[93] 又從來二三我内地に於ける洞窟調査報告を見たが、何れも新石以降に屬し、それ以

其四　遺跡學的研究

十五　其　一　般

獨り舊石存否探査に止まらず、苟も史前學上の調査であるなれば、遺跡學上の研究も亦、重要であることは申すまでもない。其根本に於て、遺跡なるものゝ考へ方に就ては、人々に違いもあり又これに伴ふて、其取扱い方の輕重をも生じてくるけれども、[31] こゝに遺跡に對し其基礎的研究を行ふ餘白もなく、且つ本著の目的より餘りに横道に深入りして、多く抽象的な研究ともなるから、總てを他日に讓り、こゝは直接具體的な問題を提供して、舊石存否の探査資料とする。

この遺跡學的實在資料も夫々の文化階梯に於て、著しい相違がある。特に舊石文化に於ては、定義にも述べた如く、中、新石等の進んだ文化階梯とは異り、見る可き構築術工の發育が無いのであるから、其研究の對象に乏しい。從つて多くの場合に於て、嚴格狹義に、直接人爲の跡を物語る遺跡なりや、[32] 或は單に人工遺物を地層中に包含せらるゝに過ぎない、所謂遺物發見地であるかを、[33] 判別することが、主要なる研究對象となり、通常遺跡內容に觸れ得る資料は少ない。此點も亦、舊石文化研究が、他と異る所であり、この目で見て行かねばならない。卽ち遺跡學的に舊石文化を肯定す可き現實資料は不足勝である。

氷間期層出土であつても、人工遺物とは層位を異にするか等、其何れなるやは知り得ないけれども、歐洲氷間期出土の植物例として置く。

北歐に於ける泥炭に就ての一般は、拙著、(L. 24) S. 77—81. 參照。但しこれ等は中石關係の泥炭である。洪積泥炭（或は最早泥炭と稱し得ないものもあるかも知れない）に就ては、未だ研究したこともなく、歐洲に於ける舊石出土を聞知して居らない。僅に特殊な泥炭關係と見る可きものは、ドイツ、シュッセンクエルレに一例ある。(これに就ては、拙著、歐舊、II. S. 61—62. Fig. 28. 參照)

(76) 大塚氏、(L. 19) S. 60 u. S. 57—64. には植物群に基く考察はあるが、こゝには參考書の添加がない。

(77) 歐洲洪積時代に於て、純なる植物學的編年が存するか否かは保證し得ないが、少くとも舊石關係に引用せらるゝ程度に、史前學上に普遍化した洪積植物編年なるものは、未だ見たことがない。これに對し北歐に於て主として中新石時代に當る植物編年は既に古くより成立して居る。これに就ては、拙著、(L. 24) S. 71—77. 參照。

(78) 舊石人類なる意味と、洪積人類とでは、必ずしも一致しない。舊石人類とは舊石文化所產者を指し、洪積人類とは洪積時代の人類を云ふのであつて、文化の存否に拘はらない。又假に洪積人類を發見しても、そこに何等文化遺物が隨伴しないならば、それは最早直接史前學上の對象ではない。勿論間接には連關する所はある。こゝでは舊石人類に就て述べて居るのであつて、より廣い洪積人類に就てゞはない。此點は、明にして置く。

(79) こゝで人骨鑑別に對する知識と云ふて居るのは、主として他の哺乳類と人類との鑑別を意味し、人類内に於て、相互的關係より、何々人等と呼ばるゝ樣な、人類を直接對象としての意味ではない。

(80) 歐洲では、一部舊石共存動植物に對する研究の如きは、進んだ所が見らるゝが、アルプス氷期問題の如きは、未だ三氷四氷說に就て、決定までには達して居らない。

同行の史前學者 Didon 氏が、こんなものと靴先で蹴つたのであるが後に採集後、洗つて見たら小さな鹿の畫が彫つてあつた。多くの場合、出土の際は土がついて居るから、この様な見落しも出來てくる。

(67) 我新石文化に於ける顯著な例は、古く坪井正五郎博士、常陸國椎塚貝塚、（東洋學藝雜誌、一一の三三九）に鯛の顱頂骨に骨器の突入せるまゝの發見である。（同一報告は、大野雲外氏、人類、十三の一四〇、五九項にもある）

又歐洲に於ける此の樣な例は、拙稿、原始人の鬪爭、科學畫報、八の六、第五圖に例示したことがある。

又不確實と思はれる程度のものは、相應にある。これが一例は、拙著、(L. 24) S. 66. (6) Vig. (N. Hartz, u. H. Winge; Om uroxen fra Vig. Aarbög. f. Nord. Old. o. His. 1906. S. 225—236; 同. S. 155 (98). Taaderup 等參照。

(68) 拙著、歐舊、正. S. 68—150. 參照。この内に哺乳類七十三種を揭出してあるが、其後の增補を加ふれば、八十種に達する。鳥類は三十三種、貝類は三十一種を揭げたが、若干は增補が出來ると考へる。魚類に就ては、本書、〔別註三〕の2參照。

(69) 拙著、歐舊、正. S. 71—116. 第五表參照。

(70) 最近私共の研究所に於ける關東地方の貝塚發掘中、夫々一例ではあるが、モグラ及びネヅミの類と覺しき長さ一糎程の頭部を出土せしめた。これに就ては未だ專門家を煩して居らないし、從つて發表もしてないが、貝層中には存在し得る事實を確認したのである。これが鼠大の大さになると、檢出も餘程樂である。

(71) 前揭、(68) 參照。

(72) 歐洲に於ける爬虫類、兩棲類の出土は、M. Boul; (L. 5) に爬虫四例、兩棲二例が揭出せられ、R. R. Schmidt; Die Diluviale Vorzeit Deutschlands. 1912. 卷末、動物群一覽表に、*Rana sp.*; *Bufo*; *Pelobtes sp.* 等が揭出せられて居る外他にまだ見當らない。

(73) 前揭、(68) 參照。

(74) 歐洲舊石時代の植物に就ては、拙著、歐舊、正. S. 150—166, 參照。但し植物學に關する知識が少ない上、出土が稀であるから、惡いと思ひながら、勉强を怠つて居る。この舊石植物の研究に就ても、更に更に研究すべき諸件はあるが、拙著、歐舊上でも略したものが多い。

(75) こゝに揭出したハンノキの葉の出土に就ては、其採集記述者である E. Werth; (L. 31) I—II. 43—47. (Fig. 13) に植物界として述べてあるに拘はらず、殆んどこれに觸れて居らない。單にエーリングスドルフの氷間期植物群の一例と見るに止まる。只この地は有名な問題を釀した、所謂暖ムステリアンの發見地である（拙著、歐舊、正. S. 226—241.: 259—266. 特に. S. 239. Taubach-Ehringsdorf の Fauna 及び S. 265. Eig. 165. 出土. 石器. 參照）。只この植物が果して人工遺物に隨伴出土するのか、又は單に同一地層より出土するのか、或は同じ

大塚彌之助氏、(L. 19) S. 29.

「黒潮型の海棲動物群化石の日本海方面の各地より發見は、日本群島と朝鮮又は他の未知の陸橋との連續な失はれた時期を暗示し」云々と云はれ、S. 50. *Elephas indicus Buski Matsumoto* の東京附近、北海道、青森縣、和歌山縣、岐阜縣等に發見せられ、これ等の地層が眞の沈積層であるなれば、東北日本沖積期初期に於て北海道と東北地方とが連續して印度象の分布を許した程の暖い氣候狀態であつたことを示すことになる」云々と部分的に觸れられて居る。

(62) 文化現象の一つとて考へねばならないことは、文化衰退の現象である。理論として見れば、有史以降に幾多の興亡を見たと同樣、或は場合により、より以上に史前文化にこの現象を見てもよい。然らば一端中石文化に進んだ民が、衰退の結果、舊石文化に還原せらるゝことも、理論上は可能であるけれどもこゝでは、こんなことまで意味して述べて居るのではない。又今日の史前學研究には、殆んど文化衰退乃至は文化喪失等に就て研究せられては居らない。然しあつてもよい現象である。

(63) (61)に引用した大塚氏論文參照。

(64) 洞窟だからとて、必ずしも安心は出來ない。何んの理由かは、よく知らないが、石灰洞等にはよく、洞窟に棲まない哺乳類の遺骨が、全く人類に關係なく化石として存在することもある。こゝでは人類生活の遺層中に共存する場合を指すのであり、私自身には、ドルドニュ、ウエゼール河畔の諸洞窟を追懷しつゝ執筆したものである。只これ等遺骨出土を示す寫眞は第十七圖以外に適當なものゝ無いのを遺憾に考へる。

(65) 歐洲舊石發見地よりは、よく象科の遺骨が出土する。例へば暖系の *Elephas antiquus* (出土地例は、拙著、歐舊。 II. S. 111. 參照) 等或は寒系のマンモス (*Elephas primigenius*) (出土例、前書、II. S. 112.) 等相當に出土し、其一部骨牙も利用せられて居る。又其肉も食用に供し得らるゝものと考へる。從つて歐洲史前學者の間には、この象科の內で、最も多く出土するマンモス等に對し、舊石人の狩獵を肯定するものが多い。特に W. Soergel (L. 29.) の如きは、舊石發見地出土のマンモス遺骨の多くが、中年期の年齢が一番多いから、死骸より骨骼等を採集したものではなく、積極的に人類が獵獲したものと判斷して居る。この研究の根柢は認められもするけれども、さてそれなら如何なる手段によつて獲得したのか、其獵法に就ては、最も多く適用して居るのが、(19) に述べた陷穴說である。これには容易に贊成出來ないが、さりとて他の手段は事實上に於て考察し得ない。何んにせよ、マンモスの如きは身長四米にも達し、所によつては四十糎に達する肉厚があるから、矢鏃には獲れまい。いくら舊石人が腕力があるからとて、人間の力位で打擊刺突した所で、中々致命傷を負はすことは困難である。それ故かく陷穴說も生れたとは考へるが、これに就ては暫く將來の研究まで保留して置きたい。

(66) 動物學的研究直接の例ではないが、私がドルドニユーのサン・クリストフ發掘に際し、マグダレニヤン層から一角片を出土せしめた。其際

(55) 史前學と姉妹學との關係一般に就ては、拙稿、史前學研究と年代及び民族問題。本誌。一の四。S. 12—14. 參照。又舊石文化研究と姉妹學關係の概要は、拙著、歐舊。Ⅲ. S. 8—10. Fig. 1. 參照。

(56) 單に石器の型態が不規であり、衝工が粗惡であるからとて、これのみでは舊石器とは決定し得ない。中石、新石の中にも、抽出すれば、この樣な類品もある。現に我が內地出土の打石斧に對する考察は、(3)にも述べてあり、又カーレンフエルス氏の如きは同じく打石斧の或るものを、ホアビニアン型と稱し佛領印度支那との相關々係にまで觸れんとして居る。(本誌、前號、同氏述、國際的研究の一分課としての日本史前學の使命。參照。) 此の如きは、一文化內容を究明せず、抽出比較であるから、萬一他に同樣な反證的な抽出比較を試むれば、公算は互に二分の一で水掛け論に終ることゝなる。

最も顯著な失敗例は、ベルギーのルトーが、石器の原的な故を以て、シエルレアンとしたものは、中石文化に屬するものであつたことである。(E. Rademacher; Frühneolithikum und belgische „Chelleen". Praehis. Zeitschr. 1912. S. 235—. 參照)

(57) 歐洲氷河の槪念に就ては、拙著、歐舊、Ⅲ. S. 21—45. 參照。但し歐洲舊石に最も關係深く、其標準となるアルプス氷期に就ても、決定を見たのではない。三氷說と四氷說とがある。又細部にも諸論はあるけれども大局的に史前學上の或る標準とはなる。又最近では、自然科學的な氷河それ自身を對象とする氷河學 (Glaziologie) なる一分課も生れ、研究も進展しつゝあるから、漸次鮮明になつて行くことゝ考へる。又舊石編年との關係一般に就ては、拙著、(L. 25) 參照。

(58) 歐洲の洪積河岸段丘に就ては、拙著、歐舊、Ⅲ. S. 49—52. 參照。

(59) 黃土に就ては、拙著、歐舊、Ⅲ. S. 59—61. 參照。但し其說明が餘り簡略に失したことを後悔する。實はこの黃土に就ては、色々問題があり、其細部に觸れると、必然的に諸問題に觸れざるを得なくなる爲かく略記した。特に何故にかく黃土が歐洲の或る地帶に限つて持ち來たされたかゞ問題である。又新黃土は Paröserlöss=Pariserlöss と稱せられこゝにも諸問題があるけれども、玆に多くを述べる餘白もなく、又餘りに必要も見ないから略する。

(60) 〔別註五〕參照。

(61) 日本島分離時期問題に就ては、未だ緒術に搜索しては居らない。長澤氏(〔別註五〕參照) が觸れられた外僅に次の片鱗を見出したに過ぎない。佐藤傳藏氏。地質及古生物學。(考古學講座) S. 447.「象犀其他の哺乳類が更新世の日本に棲んでいたことは、當時若しくは其直前迄は、日本群島は亞細亞大陸と地續きであつたことを裏書さするものである。而して其果して南方九州から對馬を經て朝鮮方面と地續きであつたか、或は北方北海道から樺太を通してシベリア方面と地續きであつたかは、更に研究を要する問題である」

十四　姉妹學的研究小括

舊石研究には以上概説した如き、姉妹學的方面の研究が甚だ重要な分野を占むるに拘はらず、私自身にも多くの研究不足があると同時に、一方では夫々の方面に對しても物足らなさを持つ。これは夫々其學自身に於ける傾向もあり、必ずしも史前學方面から期待して居る部分に歡心を持たれるとも限らないから、細部に行くと要求不實にまで到達するのも、止むを得ない。

歐洲の如きは、既に古くより舊石器の發見があり、これに伴ふて史前學方面よりの要求が、漸次滿されても行き、或る所までは進んでも居る。(80) 然るに今日我が國の如きは、未だこの事態にまでも到達して居らない。特に私共史前學側よりは、何等實在資料の提供すべきものがなく、これから捜出しようとして居るのであるから、餘り多くを姉妹學方面へ要求するのは、少々勝手過ぎる樣な氣もする。然し今の所は、各學全く各個別々であり、爲に舊石研究に必要な姉妹學的内容を研究するに、不足、不便を感ずるもの丶、必要であるからには、一通りなりとも夫々の基礎的知識を得て置かねばならない。又現實に際し必要を生じたなら、夫々專門學方面に研究を乞ふて、其指導を受く可きである。更に一言附加して置きたいのは、もしも舊石研究を行はんとするならば、いきなり石器其他の人工遺物の研究に入らずして、先づかうした姉妹學方面に對し研究を行ひ、舊石文化を生む所の、其自然環境を明にし、依つて以て其文化の培はる丶所以を明にすべきが、順當なる研究の經路であると云ふことである。

十三　自然人類學的研究



Fig. 4.
ドイツ Ehringsdorf の氷間層出土の
ハンノキ (Alnus incana) 葉。
(nach E. Werth ; (L. 31))

舊石遺物と、これが所有者である舊石人類の遺骨が共出した場合には、其確からしさは大である。(78) 然し從來の諸例に徴すれば、文化遺物の發見に當り、人骨共出例は甚だ尠く、單に舊石遺物のみの發見の方が多い。從つて常に期待はなし得ないにせよ、一般に動物遺骸に富み、且つこれが保存良好の様な場合であつたなら、極力捜索も行ふ可きである。此捜索に當つては獨り完全人骨に止まらず、其一破片でも捉へ得れば、文化所有者を確認することにもなるから、綿密な注意と、これに伴ふ努力とが必要である。又これが爲には、人骨鑑別に對する一通りの知識(79)があれば、現地調査に於て、遺漏も防ぎ得る。更にこの出土に就ては、後述して居る。(其四、十六の3、其五、二十一の2等參照)

して居る如く、未だ農耕も見ないのであるから、舊石人によつて採集利用せらるゝ植物は、野生植物であり、文化植物ではない。又構築術工の見る可きものもないから遺存物として今日に殘存す可き樹木等を使用した殘骸も少ない理である。[74]

2. 植物群 (Flora)

植物群も亦動物群の帶べる性質と同一である。これに基いて相對的に種の新古も、寒暖に基く習性も知ることが出來る。然しながら舊石發見地に於ける植物の遺存の如きは、泥炭等の如き特殊狀態でなければ、通常殘存しない（第四圖）[75]。從つて其出土に對し多くの期待は通常出來ない。

又我が內地洪積時代の植物群には如何なるものが存するかに就ては、怠慢の結果、殆んど何んにも知つて居らない。[76]從つてこゝに何等の參考資料を提供し得ないことを遺憾とする。

3. 植物編年

植物に於ても、時の經過に從つて種の新古が生じ、又寒暖の時的經過によつても變化する。これにより絕滅種も生ずる。從つて動物編年が出來るなら、對應して植物編年があつてもよい。[77]もしも植物編年が出來て居るなれば、其後に發見せられた場合は、これに當て嵌めて行けばよいのであるから、比較的困難も少ないと考へるが、萬一今日我洪積植物編年がないのであるなれば、舊石共出の植物を檢出しても、場合によつては行詰りも生ずる。勿論あるものは先學研究の跡も辿れやうが、一部には全く新しい事態に直面すべきことが、あり得ることは、豫め覺悟を要する。これとて單に植物として取り出されたる上に於て、天然の姿の研究は、旣に史前學直接の對象でないこと勿論である。

の對象でもある。只こゝで注意す可きは、天然に於ける介殻の集積した様な沈澱層中より萬一にも舊石器らしきものを發見した際の判斷である。この沈澱層中に舊石器が落ち込んだものとか、或は逆に舊石文化層の上に、沈澱層が出來た結果を生じたとか等そこに研究を必要とする。又捕食判斷、地層判斷を誤ると、直接關係がないに拘はらず舊石貝塚などゝ、誤つた兩者の結合も生れ出るから、此の如き場合は愼重な研究があつて欲しい。

7. 小　括

人類生活になくてはならない食料に對し、舊石人は前述の如く獵者でありとすれば、其動物質食料としては、當然哺乳類が主要な對象となる可きことも考へられ、其主獲哺乳類の習性によつては、これが狩獵法も考察せねばならず、從つて其獵具たる可き器具の出土との對照の必要も起つて來る。又獨りこれに止まらず、共存動物群の鮮明よりして、前述の如く、時代、氣候、地形等の文化背景をなす自然環境の複原資料ともなるのであるから、これ等の研究が直接間接に舊石文化鮮明に及ぼす所が深い。この點はより進歩し且つより現代に近い、中、新石文化研究とは、自づと異る所であり、これ等の事情を辨へて見る可きことゝ考へる。

十二　植物學的研究

1. 一　般

植物の史前文化に及ぼす關係は、理論上全く動物のそれと縫りはない。たゞ植物質の方がより朽廢し易く、其資料の遺存することが、甚だ尠ないので、研究上の對象となり得ないに過ぎない。特に舊石文化の如きは、前述

澤氏（［別註五］參照）によつて述べられて居るから、こゝには略し、これに就て史前學上注意すべき二三を述べるに止むる。歐洲の如きは、共存動物の種も相應に知れ、[68] 且つ小形なネヅミやモルモットの類までもある。[69] これ等が果して捕食の主要な對象とも思はれないが、出土に際し細部に留意して居る一範令であり、我貝塚の一部の如き遺骨保存狀態良好のものがあるに拘はらず、一向に此の如き小形哺乳類出土の報のないのは、反省を要す可きことゝ思はれ、[70] 萬一にも舊石文化に遭遇した際には、更に戒心して發掘すべきことと考へる。

6. 動物種別と舊石文化

舊石人が主として獵者であるとの立前から見れば、これに關係深き共存動物は、通常哺乳類であり、この中より捕獲の對象の多寡が見出さるゝ。他の陸生動物として見る可きものは鳥類であるけれども、歐洲舊石ですら、多くの發見はない。[71] 我が洪積動物群中に幾何を發見せられて居るものか、不幸にして私は見出して居らない。萬一これが發見に當つては、哺乳類と同樣な研究對象となるは勿論、其種によつては捕獲法に遠戰器使用の考慮を要す可きものがある。

爬蟲類、兩棲類に至つては、從來共存出土は稀であり、多く研究の對象となつて居らない。理論として其研究の必要な點は、他と變りはないが、現實がない故か、等閑視もせらるゝ。私の如きも亦其一人であることを告白する。[72]

海棲動物群として先づ見る可きは、魚類であるが、これは前述したから畧し（［別註三］參照）、貝類を見る。[73] これも魚類と同樣、舊石人の主要食料對象ではない。萬一にも舊石層より貝類出土の場合には、第一に捕食の有無を判斷せねばならず、次に裝飾等の加工品資料の有無も見ねばならない。又これも前述した天然環境等間接研究

以上述べてきた種の鑑別は如何にすべきであるかと云へば、それは通常動物學者乃至は古生物學者等夫々の専門家に依す可きものと考へる。史前學者として鑑別に對する知識があれば、それに越したことはないが、文化研究の立場上、其出土の狀態、大略の種別及び個體部分等が究明せらるれば足ることが多く、其取り出されたる後に於ける、單なる骨骼としての研究は、天然を對象とするものであり直接史前學の研究分野外にある。

4. 出土量と出土部分

僅少なる破片のみの出土では、前述した種の鑑別にも捕食其他の研究資料にも不充分である。これ亦多數を集める必要がある。發掘の如き場合であれば、其出土遺骨全部を取り揃へることが安全であり、自分等の認識不足から大切な資料を見落さないことが必要である。[66] この遺骨の中でも特に其特徴を容易に鑑別し得る部分、即ち頭骨とか、或は其一部である歯牙や角等の様な所が、多く欲しい。

これ等遺骨は單に天然のまゝであるか、或は人爲截斷削剝等の痕を止むるか、乃至は焼けた部分を存するとか等、直接文化關係の有無を檢し、萬一にも人爲を認められ、或はこの疑ある諸部は見逃してはならない。それを一歩進めると、骨角器等の加工品と共種を同ふする遺骨の出土は、より密接な存共關係が成立する。更に其上一歩を進めると、石器時代の各文化を通じ、世界に稀なる例ではあるが、動物遺骸に直接獵獲を物語る捕獲具の突入したまゝの殘存である。[67] 此の如き發見は通常あり得ないことゝは思ふが、心得て居るだけは必要であり、又それだけの細心さがあつて欲しい。

5. 我が洪積出土の動物群

翻つて我が洪積期の動物群を見る。これは舊石存否に拘はらず、一通り心得て置くことが必要であり、且つ長

文化の內容にまで立ち入つて、研究せられ得る資料とは、通常なり得ない。從つてこの共出關係の程度は、これを明にして置かねばならない。

3. 共存動物の種類

共存動物に就て、更に見る可きものは、其種である。一般的には、共存動物の種が、多ければ多い程よい。但しこれ等動物相互間には、互に或る關係を有するもの、卽ち動物群であれば最もよい。これが水棲陸棲の混出する沈積層に見る化石の様なものでは、反つて惑を生ずる。且つ舊石人が容易に捕食したと見らるゝ種に富んで欲しい。これが人類生活に緣遠いものでは、これ亦判斷に困む。第三圖に示したトラルバ象牙出土狀態の如きは、天然に出來た姿ではない。人爲搬入とは認めらるゝも、さてこれを獵獲したものか、死骨より得たものかに就ては、尙疑はある。(6) 前述した我內地出土の印度象の如きものは、古生物學的に見れば示準化石でもあらうが、舊石人が日々捕食したものとは考へられない。勿論間接には時代、氣候、地形等の判斷ともなるから、決して等閑に附する意味はないけれども、この様な動物と舊石器と覺しきものが共出したからとて、直接舊石文化の內容に考慮せらる可き文化現象の多くを存しない。

此の如き間接的に諸判斷を明にすべき種類としては、比較的長期に亘つて變化の少ない種であるとか、或は寒暖を厭はないものとか等、其特徵の著しくないものよりも、極寒性、暖性、又は特別な共棲關係、乃至は絕滅種とか等特徵の顯著なものであれば、各種判斷を容易にすることが出來る。

又萬一にも家畜の類でも出土した際は、愼重に考慮して文化階梯を決定しないと、誤解も起り得る。特に家犬以外の家畜の如きは、到底舊石文化にあり得るとは思はれない（(16)參照）。



Fig. 3.

スペイン Torralba に於ける南象 (*Elephas Meridionalis*) 牙と握り槌との出土狀態

(nach Marquis de Carralbo; Cong. Inter. Anthr. Arch. Prehis. Geneve. 1912.)

事實の檢出である。此の點に就ては、從來歐洲等に於ける報告、特に野外發見地に於ける砂礫層等より出土の共存動物に就ては、吟味を必要とするものがある樣に思はれる。それが洞窟の如き狹き所に、人工遺物と相重疊するなれば、確からしさは、より大でもあるし(64)、又野外でも爐跡等を存する傍に存するなれば、これ亦確からしさ多く、特に燒骨でも隨伴する場合は、より確かである。或は人爲搬出投棄等を物語るか、乃至は動物遺骸のみ集在して、極限的には骨角層を成形する樣な場合等とか、綜括して云へば、共出土狀態に於て、何等か人爲を物語るものがあり、天然に動物遺骸が集積したもの、即ち化石層とは相異る所がある點が明にせられ得れば、確實性はより大である。それが直接關係もなく、單なる同一地層に共存したと云ふ事實のみであれば、時代等をトする準據とはなるが、

古代地理學的研究の進展に基き、本問題が或る所まで明になれば、舊石存否の目安とはなる。只今日尚これに就て、研究の餘地があるなれば、其進捗をまち、其結果に於て、存否を決するのが妥當にも思はれるが、これが何時に、史前學上の要求が滿され得るかは全く不明である。それ故こゝでは萬一にも存在する場合を考慮して、史前學上の研究を行ふて行く。

更に考慮す可きことは、洪積時代より沖積初期に亙る間に於ける氣候問題である。これには長澤氏(〔別註五〕參照)も觸れられて居るし、又次に述ぶる動植物群との關係もあること故、此所には述べない。

十一　動物學的研究

1.　一般關係

動物と植物とが史前文化の大なる背景をなすことは、改めて申すまでもなく、直接其生活資料たるに止まらず、生物界に於ける諸現象は、獨り舊石文化にのみならず、石器各時代を通じて、其共存關係に基き、文化上の時的經過を徴し得る場合も多い。今茲に舊石器と覺しきものを發見した場合、其共存動物群を知ることが出來たならば、一判斷資料が增され、且つ前述の地質時代と一致するものなれば、更に其確實性を增大することゝなる。

2.　共存關係

舊石器等の人工遺物と、動物遺骸との關係は、單なる同一地層より共出であつても、兩者相互間に何等かの因果關係の有無深淺によつて、其確實性に差も生ずる。一番確かなのは捕食の殘骸乃至は遺骨の利用等を認め得る

は本著と共に發表する考へであつた所私の方が以外に膨大となつた爲、雜誌經濟上、止むを得ず割愛して、本誌五の二號に讓らざるを得ないことを遺憾とし、同號に於て讀者の一讀を煩されんことを願ふと同時に私の述べて居らない部分を、直接專門家である同氏より知らるゝことが、より確かでもあることを附加するものである。

十　古代地理學的研究

今述べた地質問題に連關して起つてくる問題は、洪積當時の地形問題である。其局地的な部分に就ても色々と研究すべき件はあるけれども、それより我が舊石存否に密接な關係がある重大なる問題は、今日の日本諸島の大陸よりの分離時期が何時に起つたかの決定である。今日の日本諸島も古く第三紀では、アジア大陸の一部であつたものが、漸時陷沒し大約第三紀末か或は洪積期に於て遂に最後の陸橋も切れて、今日の樣な、或は今日に近い、島を形成したとは、地質學者より聞知する所ではあるが、この分離問題の內容、特に切斷時機及びこれが分離の景況等其詳細に就ては、私不學の結果か、一向に明でない[61]。

この日本島分離時期が、萬一にも舊石文化を見る以前に起つたとすれば、水に親みのない舊石人は容易に渡つてはこられない。卽ち舊石文化を我內地に見ないと云ふことになる。[62]然し大塚氏に依れば、[63]我內地の沖積初期にまで印度象 (*Elephas indicus*) が棲息したとのことであり、この事實が確認せらるゝなれば、當時我內地は少なくとも象の如き大陸的動物が生育可能の狀態にあつたと考へねばならず、從つて東亞大陸との間に想定せらるゝ陸橋の喪失時機にまで考慮が延長せられてもくる。萬一舊石文化を見る時代、これを地質學上から見れば、洪積中期以降にまでも、陸橋が殘存して居つたとすれば、舊石人の渡來は不可能のことではない。要は地質學乃至は

舊石文化なるものが、主として洪積期に存在したものである以上には、其洪積所產であることの證明が必要である。

歐洲の場合では、同地方洪積期に幾回かの氷河現象を見、これに基いて氷河編年が出來、それに舊石文化が結ばるゝに於ては、單に其洪積所屬を明にし得るに止まらず、其氷河編年に於ける或る階梯にまで誘導せられ得る。[87] 又氷河現象の一作樣として、數段の河岸段丘も生じ、其丘上に存する舊石發見地の時代も、これに基礎づけられて、或る所までは決定せらるゝ。[88] 同樣に黃土(Löss)も亦、氷河現象に關係ありとせられ、洪積期間に新舊の兩黃土層があるから、これよりしても時代決定の或る標準が得らるゝ。[89] 此の如く、洪積層內に編年的準據があれば、舊石文化の時代決定は容易安全である上、これ等地質學上の編年に基き、洪積內の或る時代までも定めらるゝ。

然るに我內地に於ける洪積時代に就ては、餘り標準が普遍化して居らない。[90] 我內地に於ては、主として山嶽地帶には氷河も存した由ではあるが、低地方面に幾何の影響があつたものか、又黃土關係に就ても、私不學の故か、一向聞知して居らない。我內地に於ける主要洪積層は、ローム(赤土)層、砂礫層、粘土層等であるらしい。これ等の地層から舊石器が出土し且つこれが後世の混入でないことが認めらるれば、兎に角洪積所產とは認めらるるが、これ以上に洪積時代の何れに當る可きか等洪積內容を研究するには、全く地質學的專門研究を行ふか、さなくんば、地質學者を煩はさねばならない。

〔別註五〕 長澤譲次氏、「日本洪積時代」に就て

此稿は、私が本著を發表するに當り、同氏を煩して、日本洪積時代の認識をより深くする爲、執筆を乞ふたものであり、實

其三　姉妹學的研究

八　姉妹學的關係一般

一般に舊石文化は、より進んだ中石乃至は新石文化に比し、文化内容の貧弱であるのは當然である。(第二表參照) 從つてこの貧弱な資料を基礎とする以上には、常にこれが確實性にも不足、不充分を生ずる。この缺陷を補充する爲には、必然的に姉妹學の力を借らざるを得ない。此の點は、中石や新石文化と夫々研究上の立場を異にして居る。[55] 從つて舊石文化であるとの判定を下さんとするが如き場合には、何れか姉妹學的事實に徴して、其確實性を增大せねばならない。其文化遺物特に舊石器の如きは、其型態、術工等も一般に簡單であり、其種類も少ないのであるから、これ等のみを以て、文化階梯を決定するには、大なる危險も伴ふ。[56] 特に時代の決定等には、動かない自然現象を捉ふることが、確實有効であり、これには姉妹學的研究が必要である。今これ等因緣深い姉妹學の夫々に就て概見して見る。

九　地質學的研究

(42) カムビニアンに就ても、未だ紹介したことがない。又この期名を生じたカムビニーの發掘報告は、Ph. Salmon, D'Ault du Mesnil & Capitan; le Campignien. (Rev. mensuelle de l'Ecole d'anthr. de Paris) 1898. である。

(43) デンマーク貝塚構成時代の爐跡に就ては、拙稿、(L. 21) Fig. 3. 〃, (L. 24) S. 103. (51) 等參照。

(44) 歐洲新石時代に就ては、宮坂光治氏、歐洲新石器時代（考古學講座）がある。これに就ては、拙著、(L. 24) S. 64. (2) 及び〔別註四〕參照。

(45) ソリユートレアンの石器に就ては、後述其六に一部觸れて居る。これが一般は、拙著、歐舊、續、S. 31—37. Fig. 32—37. 參照。

(46) 巨石器に就ての概要は、拙著、(L. 24) S. 115. 參照。又これが分布も獨り歐洲に止まらないが、詳細は將來述べる機があると考へる。

(47) 細石器に就ての概要は、拙著、(L. 24) S. 119. 參照。これも巨石器と同樣、細い研究は將來に保留する。

(48) 祖形斧に就ての概要は、拙著、(L. 24) S. 116. 參照。但し祖形斧は獨り歐洲にのみ發育したばかりでなくアフリカ、小アジアにも見らるゝ。其外形は我が新石文化の打石斧に似て居る。これに就ては(3)參照。

(49) 新石文化に普遍的な尖頭鏃が、中石文化に絶體的に類形がないのではない。例へば北歐のリングビー文化 (Lyngby-Kultur)（本文化に就ては諸論があり、中には舊石文化と認むるものがある。これが概要は、拙著、(L. 24) S. 66. (6) 參照）には、大形（長さ約五—一〇糎）粗造であり、且つ必しも左右等齊でない石鏃型があるが、尖頭鏃の長さ二—三糎に比しては、甚だ大形ではある。又イタリーのカムビニアンにも、リングビー出土と同樣な大形粗大（長さ四—六糎）の左右等齊でない類型はあるが、我內地の所謂大形石鏃とでも云ふ可きもので類形には違ひないが、未だ尖頭鏃と稱し得る程には進展して居らない。

(50) 拙著、(L.24) S. 122—133.參照。

(51) カムビニアンの文化內容に就ては、未だ紹介して居らない。この所、(42) に述べた原報告に依られたい。

(52) 中石文化の藝術に就ても、未だ紹介して居らない。これが片鱗は拙著、(L. 24) S. 134—136. に觸れたに過ぎない。

(53) 中石文化にして、土器の出土を見たのは、デンマークの貝塚（拙稿 (L. 21) S. 40—41. u. Fig. 10. 參照）カムビニー（(51)參照）及びポルトガルの Mugen 貝塚 (Carlos Ribeiro; (F. 15), p. 279—290. 參照）の三例であつて、他は未だ知らない。

(54) 北歐の氷後期編年に就ては、拙著、(L. 24) S. 67—86. 參照。

卷末に文獻一覽を附して置いたから、これを手掛りとして、研究を進められたい。これも遺憾乍ら、邦文の研究は、僅に永井、清野金關長谷部の諸博士が簡單に述べられた外、私には見當らない。

(37) 本表に就て、不審を懐かれる部分もあると思ふが、原石に就ては、(36) の拙著を參照せらるれば、或る點は明にし得ると考へる。舊石文化は後述した部分を讀了せらるれば、より明になる所があると信ずる。

(38) (34) に述べた如く、Cromerien が問題となり、ブロイはこれを認めても、發見者である J. Ried Moir がこれを鮮新世と報じたに拘はらず、第一氷間期とし、より古き第一氷期 (Günzglazial) に Foxhollien を認定したものゝ、未た第三紀に人類文化は認めて居らない。(拙著、(L. 25) S. 101—104 並に拙著、(L. 20) 第二版、S. 44. 參照) 但し第三紀人類文化を認める人々は他に尠なくない。原石肯定論者は殆んど、これを認めて居る。

(39) 今日の發見では、未だ確たる第三紀人類は發見せられて居らない。これ等は直接人類或は其祖先が第三紀に存せしや否やと云ふ問題であつて、第三紀人類が文化を有したか否やとは、自づと問題を異にする所がある。この單なる第三紀人類の問題に就ては、左記參照。

一、長谷部言人博士　自然人類學 (L. 10)

二、清野謙次博士
金關丈夫博士　人類起源論 (L. 12)

(40) 〔別註 一〕に述べて居る如く、舊石文化の概要は、取り纏めて述べられて居り、從つて入り易い。然るに中石文化の方は、未だこれと平行するまで研究が進んで居らず歐洲でも久しい間、溝渠問題 (Hiatusfrage) として、新舊兩文化間の連接を見なかつたのであるが、この十年この方、中石文化研究も個々に就ては、目覺しい發展を遂げて居る。これも取り纏む可き時は、とつくにきて居るが、中石專門研究家の殆んど無い結果、多岐な新石文化と同樣に、概覽書が生れて居らない。從つて中石文化を取り纏めて研究するには、多數の個々の文獻を必要とし、我國では殆んど困難なことゝも考へられ、この方の研究を後に廻した次第である。又前述の如く、邦文としても、甚だ粗惡であるが拙著、歐習があるけれども、中石文化の方は、僅に個々のマグレモージアン (L. 24) とデンマーク貝塚構成時代 (L. 21) とを發表したに過ぎず、これを地理的に見ても兩者共に北歐であり、他には未だ及んで居らない。從つて中石文化判定資料を出すとすれば、他の各地等の中石文化夫々に就ての解說もせればならないのであるから、到底紙數の許されない所ででもあるから、中石文化の方を保留したのである。判定資料として、必要な程度は、舊石文化と變りはない。

(41) 中石文化に屬するアジリアン (Azilien)、カプシアン終期 (End-Capsien)、所謂アンシルス文化 (sog. Ancylus-Kultur) マグレモージアン (Maglemosien) 等には、確たる構築住居跡發見を聞知して居らない。

Leakey ; (L. 13) PL. XII. にケニアの Gamble's Cave II. upper Kenya Aurignacien 層より土器片を發見したが、これ亦認めては居らない。(p. 103—104) 私もこれに贊成する。而して確實なる出土は、次の中石文化に初現するのである。

(32) 獨りマグダレニアンの藝術に止まらず、歐洲後期舊石文化(歐洲カプシアンを含む)の藝術の梗槪は、これを取り纏めて、拙著、歐舊、續 S. 89—130. に述べて居る。又、この終りに、文獻第十三、舊石藝術に關する文獻、として七を揭出したが、更に其後の氣付を增補して置く。

8. M. C. Burkitt ; 1928. (L. 3)

9. 〃 a. H. Breuil ; 1929.

Rock paintings of southern Andalusia.

10. L. Capilan. H. Breuil et D. Peyrony ; 1910.

La Caverne de Font-de-Gaume.

11. P. Girod ; 1900. (L. 8)

12. H. Kühn ; 1929.

Kunst und Kultur der Vorzeit Europas.

13. H. A. del Rio, H. Breuil et R. R. L. Sierra. 1911.

Les Cavernes de la Région Cantabrique. (Espagne)

14. R. R. Schmidt ; (?)

Die Kunst der Eiszeit.

(33) アフリカの史前藝術に就ては後述其六の三十七。參照。

(34) 從來歐洲發見の舊石文化は、アルプス氷期に三氷說と四氷說とあるに拘はらず、プレー・シエルレアンが第二氷間期と考へるものが多く、從つて歐洲舊石は洪積中半以降より始まるものとせられ、上限には動搖りがある爲、特別の考慮を必要としなかつた。所が最近、ブロイの Cromerien 認定以來、文化を古く第一氷期まで引き上げた結果、こゝに第三紀とは接着する樣になり、上限に就ても、一應は考慮することが必要となつたのである。(これに就ては、拙著、(L. 25) S. 99—108. 參照)

(35) 下限關係に就ては、後述、七、參照。

(36) 原石に關しては、拙著、(L. 20) に簡單に取り纏めて說いた。但し同書は紙數の關係上、最も簡單に述べたに過ぎないが、これを補ふ可く、

(Praechelléen ?) を掲出して居る。)立派に加工せられた人工骨角器としては、無いと考へる。但し器具ではないが、骨角を截斷したり、或は其上に刻彫したりしたものは、ムステリアン文化に見らるゝ。（拙著、歐舊、Ⅱ S. 25ª, u. Fig. 150—151. 參照）又このムステリアンの骨角利用研究に就ては、下記の大著がある。H. Martin ; Recherches sur l'Évolution du Moustérien dans le gisement de la Quina (Charente). 1907—1910.

(28) 骨角器として、人工顯著なるもの、當初の出現は歐洲に於ては、後期舊石文化の始めである、オーリナシアンにある。（拙著、歐舊、續 S. 19—22. 參照）

歐外に於ても、北阿（同上拙著、續 S. 81 Fig. 87）アフリカ東海岸地方 (L. S. B. Leakey ; (L. 13). Pl. XIV.)小アジア (H. Obermaier; Der Mensch der Vorzeit. Fig. 202.) 印度 (ibid ; Fig 205.) 等に報ぜられて居るけれども、未だ詳細に研究したことがない。但しこれ等は最も簡單な刺突器が多く、特別に發育して居る樣には見られない。

(29) 原石關係に就ては後述、六參照。

(30) 木器の利用、特に木製武器 (Holzwaffen) までも歐洲前期舊石文化に於て想定するものがある。(W. Soergel ; (L. 29) S. 15—22.) 而してこのソルゲルは、木製武器よりして、後期舊石人の骨角器作出を暗示したのであらうとまで云ふて居る。（前掲書 S. 20.）然しながら、この論據とすべき現實の出土は何物もない。即ち木製武器は全く假想である。從つて萬一にも、この樣な假空の想像を以て、現實の缺陷が補へるものなら、多くの研究は不要である。この樣な論述は、學術の根柢を誤るものと、私は考へる。但し舊石文化、特に前期舊石に於ても、全然木器の存在を否定するものではない。存在したとて不合理はない。寧ろあつてもよいとは考へらるゝが、現實の出土があるか、さなくんば木器を肯定せしむる樣な間接資料でも無い以上には、研究の手掛りがない。私の云ふ史前學なるものは、事實事物に基いて其當時を研究するのであるから、これが無い以上には研究の對象がないのである。

(31) 舊石文化に土器の出土を見たとの報告は、古く Julien Fraipont ; la potterie en Belgique à l'âge de Mammouth. Revue d'Anthropologie. 1887.（同書著者未見. J. de Morgan ; Prehistoric Man. 1924. p. 66. による）マグダレニアン地層中より出土したとの由であるが、これに對し、J. Déchelette ; Manuel d'Archéologie. I. p. 171. : M. Hoernes ; (L. 11). S. 211. Amm. 2. : R. A. S. Macalister ; A Text-Book of european Archaeologie. p. 402. : J. de Morgan ; (L. 15) S. 66.) 等が、悉くこれを否定して居る。發見も古い時代のことであるし、他に出土の確實な類例もないのであるから、舊石文化には、無いと見てよい。但し上述 M. Hoernes ; S. 211. に依ると、E. Dupont ; Capitan ; Rutot 等は、これを認めて居る由である。他の一面では、Macalister の如きは上層より陷没したものと想定し、L. S. B.

それ以外に火の利用跡が幾何あるのか未だ調べたことがない。

(22) ブレー・シエルレアンとシエルレアン共に、遺物發見地のみで、洞窟岩陰等にある住居跡の如き、狹義の遺跡もない。又其發見地數もアシュ—レアン以下とは甚しく尠ない。且つ兩者共に暖系動物が共出して居るから暖期、卽ち氷間文化である。特に河馬如きが出土して居るから、暖く洞窟に強いて入る必要もない。だから野外に多いのではあるまいか。して見ると、今日に殘存する生活跡も少なく、且つ內容も充實してない様に思はれる。此の如く暖期であれば、保暖の必要も尠なく、野外住居の結果は、遺存良好でないとすれば、この文化で火を知つたか否かは、全く見當がつかない。但し焚火でもすれば、其跡には炭灰の遺留もあらうが、確實に私の云ふ住居跡を發見せられて居らないのであるから致し方がない。不明として置く。

(23) 原石に就ては、後述、六、參照。

(24) 舊石器として從來發見せられて居る一通りのものに就ては後述もして居るが、こゝで述べて居るのはこれ等の個々に就てではなく、これを一纏めとして見た場合と云ふのである。又一發見地に於ては、最も立派な、典形的なものと、石器か石屑か判斷出來ない様な程度のものと、術工差のあることは、我新石文化等にも見らるゝ普遍的な現象であつて、舊石文化も亦同様であるが、こゝで述べて居るのは、此の如きものを指して居るのでない。原石、舊石器、中新石器と互に一揃を取り出して、大局的に比較した場合と見ればよい。

(25) マグダレニアン文化の主要器具は、骨角器であつて石器として、其內でも利器に於て特徵づけらるゝ様なものが尠ない。これに就ての一般は、拙著、歐舊、續 S. 43—71. 參照。

(26) 舊石器は悉く打製のみであつて磨製はないとは、一般不動の定論ではある。勿論其利器に於ては然るを認める。然しながら、こゝに注意を要することは、其骨角器は、打製してない。磨製して居る。故に磨製術工は知つて居つて、石器中の利器、特に硬度高い燧石にこれを施して居らないのである所は辨へねばならない。轉か、あらさがしに類するかも知れないが、舊石文化に磨製石器が絕無か否か。無論例外的特例ではあるが、マグダレニアン所産の所謂ランプ(四十一圖參照)は、打製ではない。これを術工上より見れば、磨製とす可きものであり、其石材も軟質のものゝ様である。これ等は例外としてよいが、骨角術工上、磨製のあることに就てすら、認識不足が多い。勿論骨角磨製に着意したものもある。(W. Soergel ; (L. 29) S. 17.) 然し一般には、未だ徹底して居らない。試みに歐米の舊石述作をこの目で見らるれば、直に了解せらるゝと思ふ。

(27) 歐洲前期舊石文化には、作出器具としての骨角器は、未だ私は見たことがない。天然のまゝなる、角、牙等の利用、卽ち天然物利用は存したか否か、今日では多く知り得ない。又加工顯著でないものは、あるとしても、(この一例は、拙著、歐舊、正 S. 189 Fig. 107. Piltdown.

農耕關係ありと認めらるゝ人工遺物もある。(其一例は拙著、神奈川縣新磯村字勝坂遺物包含地調査報告(史前研究會小報第一號)(昭和二年)S. 31—33. 參照)これ等の事實よりして、更に研究す可き諸件があり、これよりして、文化進展、特に生業分課に到達す可き說明が出來て、始めて舊石文化に農耕の生じて居らないことが明にせられ得るとは信ずるが、今回はこゝまで云い及ぼす餘白のないことを遺憾とする。

(16) 家畜始原の研究も、農耕、漁撈始原等と共に、重要なる研究であり、他日取り纏めて發表したいと考へて居る。

不確實の記憶で、其書名を忘れたが、一部歐洲では、最初の家畜は、舊石末に於て馴鹿が飼育せられたと書かゝれたものを讀んだが、事實上には何等證據は無い。單なる想像に過ぎない。又後期舊石のマグダレニアン藝術出土品中に、馬首の彫刻があり、これに手綱樣の刻線が入つて居るとて調馬論が稱へられたこともあつたが、他の動物の表現にも同樣の手法があるとて、この論は打ち消されたこともある。

舊石家犬に就ても、古く出土報告があつたと記憶するが、今日殆んどの諸家がこれを認めて居らない。又根本に於て、家犬の由來に就ても、諸論があるが、こゝでは多くに觸れ得ない。

(17) 拙著、(L. 24) S. 109—110. u. (58) 參照。

(18) 舊石發見地より出土する動物の主なものは、哺乳類であり、僅少の鳥類(拙著、歐舊、II. S. 125—140. 參照)魚類(同上 S. 140—141 及び本著、〔別註三〕參照)貝類(同上、S. 141—144)等は、集成すれば、種としては相應にもなるが、現實に其量は甚だ稀で、哺乳類と對比すれば、微少な對比數となる。

(19) 歐洲ではよく構築術工例として、舊石絵畫に存するあるものを、小屋乃至天幕と想像せらるゝものがある。(拙著、歐舊、(舊 S. 119. u. Fig. 129.)參照)然しこれも見方によつて、かく見らるゝと云ふても、現實の發見ではない。想像である。勿論氷河時代の氣候では、何物もない野外生活は困難と思はるゝが、今日現實の發見は何んにもない。

次に同じく歐洲では、舊石時代にマンモス其他の狩獵目的で、陷穴を構築したとの說がある。これも證據は不充分である。一面にはマンモス獵獲なることが困難のことゝ想定する結果、陷穴說なども生れてくる。其一例は、W. Soergel; (L. 29) S. 15. u. 121. 及び O. Abel; Lebensbilder aus der Tierwelt der Vorzeit. 1922. S. 27. 等にある。特にマンモスなる動物が寒的なものであり、氷期の冬の如き、凍結地など、鐵器を以てすら容易に掘れないことも併せ考へればならない。

(20) 拙著、(L. 24) S. 103. (51) 參照。

(21) アシユーレアンの火の利用跡は、拙著、歐舊、II. S. 203. Achenheim (Alsace) u. S. 211—212. Achenheim 地層—覽表 (nach R. R. Schmidt) に一例を揭出した。同表には、ムステリアン層にもこれを認められ、同表中に記載漏となつたが、オーリナシアンにも火の利用形跡がある。

Most Ancient East. (本書は直接舊石文化には多く觸れて居らない)

7. P. A. Mallon ; 1925.

Quelques stations préhistoriques de Palestine.

(Mélanges de l'université Saint-Joseph, Tom. X. Fas. 6)

8. R. Neuville ; 1931.

L'acheuléen supérieur de la Grotte d'Oumm-Quatafa.

(L'Anthr. Tom. XLI. No. 1—2. p. 13—51. 249—263.)

9. W. M. F. Petrie ; 1906.

Researches in Sinai.

(11) 印度に就ては、私は未だ研究したことがない。最近 F. Sarasin ; Étude critique sur l'age de la pierre a Ceylan. (L'Anthr. 1926. p. 75—115) の研究を見、同稿、卷尾には一八八三—一九二五年間の三六文獻がある。又 J. de Morgan ; (L. 16) Tom. III. p. 124—に於て印度を概述し、且つ若干の文獻も添へてあるから、これ等を手掛りとして、研究して行くことは出來るが、これも今回は將來に保留して置きたい。

(12) シベリアの舊石文化に就ても、未だ研究して居らない。特に露文が讀めないから、手掛も掛ない。露文外にはない、G. von Merhart ; The palaeolithic period in Siberia : Contributions to the Prehistory of the Yenisei Region. (Americ. Anthr. 25. p. 21—. 1923) なる論文があるとのことであるが、これすら見て居らない。これ亦將來に保留する。

(13) 滿洲國、蒙古、支那等に就ては、(6) 參照。

(14) 私は拙著「歐舊」に於て、歐洲舊石時代に對し「歐洲舊石時代とは、加工顯著なる打製を主とせる最も古き石器時代を指し、地質學上、主として洪積紀に存在せるものを云ふ」と述べて居るが、これが簡單に失し、誤解を起したことがあるから、今回は詳記することにした。又獨り歐洲に止まらず、廣く見る關係からも、繁雜にはなるけれども、間違を尠なくする上から、かく改めたのであつて、歐洲舊石のみなら、上述の通りでもよいと考へるし、又今回とて、其大局上からは、大なる差は無いと考へて居る。又これ等舊石文化に對して、歐米等に於て如何様に定義して居るかに就て、私の注意が不足の故か、未だ見て居らない。

(15) 農耕始原に就ても、こゝでは舊石文化に存して居らない、理由をより明にせねばならないのであるが、事實に於ては、後遁して居る、舊石各遺物に徴しても、何等農耕關係と認む可きものが無い。中石文化の多くですら、認め得ないに對し、新石文化に於ては、文化植物も亦、

知り得ない場合が多いものと考へるが、これ等に就ては、本文で述べやう。

(7) 拙稿、(L. 22) 中に研究の過程に就ては、述べて居る。其一般は其稿末、史前學研究年表參照。

(8) 歐外に亘り、比較的取纏つた文獻としては、〔別註1〕のIに J. de Morgan (L. 16)；O. Menghin (L. 15) の二例を揭出した。これ以外に廣く亘つた遺作は、未だ氣付かない。

(9) アフリカの舊石文化に關する個々の文獻は、集めて見ると多い。從つて、こゝに集成揭出するには、餘りに多過ぎる。其一例は、拙著、歐舊 (L. 26) 舊 S. 86—88. Literatur der Capsien. に主として北阿例を、又拙稿、エジプトの舊石器（本誌四の三・四號）稿末にエジプトに關したものを揭出し、更に其餘白錄には、西部アフリカの二例を揭出して置いたが、尙これ等は一部に過ぎない。將來集成の上、發表したいと考へて居る。

(10) 小アジア特にシリア、パレスタイン、シナイ等に關しては、未だ紹介したことが無い。これ等の文獻も(9)と同樣、相應にあるが、未だ見て居らないものが多いから、こゝでは單に研究の手掛りとして、私の藏書中より、左記を例出するに止め、將來の補訂を期する。

1. J. Bayer ; 1922
   Alter und Wesen der Askalonkultur.
   (Mannus Bd. XV. H, 3.)
2. 〃 ; 1929.
   Die Grundlagen zur Universalgeschichte der Menschheit.
3. M. Blanckenhorn ; 1905.
   Ueber die Steinzeit und die Feuersteinaltefakte in Syrien-Palaestina. (Zeitschr. f. Ethnol. Bd. XXXVII. S. 447—450)
4. 〃 ; 1921
   Die Steinzeit Palästina-Syriens und Nordafrikas.（本書卷末に多數の文獻がある）
5. E. Bracht ; 1905.
   Datierbare Silexgeräte aus den Türkisminen von Magahara in der Sinaihalbinsel.
   (Zeitschr. f. Ethnol. Bd. XXXVII. S. 173—)
6. G. Childe ; 1929.

及ぼす所も生ずるから、こゝで最も簡單に述べ、何れ將來に、より詳細を開陳したいと考へる。

我が新石文化、特に繩紋式に於ては、從來の發見に基けば、遺跡としては、住居跡（多くが所謂竪穴住居跡）貝塚及び多くが遺物としての内容が明でない、遺物包含地等であつて、他のものは稀である。これを構築術工なる目で見ると、住居の構成は、竪穴の外、平地住居もあるけれども、其平面は圓乃至圓に近い八角乃至は六角等で、北海道を除けば、角形は殆んどない。卽ち住居の構築術工として、特に發達してない。歐洲では、圓形及びこれに近い同樣なものがある外、多くが末期の所産ではある樣だが、杙上住居や或は平地角形住居の如き發育したものも見らるゝ。これは色々の起因もあろうが、一つには我が氣候環境の穩良に基く所も多いと考へる。又我が國の東北乃至北海道等に、チアシなるものがあり、これを新石所産としても、普及したものではない。所が歐洲には、新石保塞は相應に見らるゝ。これも歐洲の如き大陸平地では、保安上發育するのも當然に考へられ、我内地の如きは、住居位置の撰定によつて、この目的の大部分を達成せられ得るから、特別に發展を見なくてもよい。又我繩紋式には墳墓として特別に地表にまで構築せられて居らないのに對し、歐洲では、卓石墳（Dolmen）羨道墳(Ganggrab)石箱墳（Steinkisten）等の巨石墳（Megalithgrab）が發育して居る。この理由は未だ其適確なるものを考出し得ないから、讀者に高敎を乞ふものである。兎に角、構築術工は、我に對し、歐洲では一段進んで居る。

人工遺物に於ては、これと反對に、歐洲の多くが、我に比して精巧でない。特に新石藝術としては、我繩紋式の如き、世界に於て最も優秀な作品が多い。又夫々個々に就て特徴もあるけれども、これを畧し、概觀すると、我が人工遺物は精良優雅である。これ構築術工に費さるゝ生活の餘裕が、こゝに傾いたと見ればよく、かく導かるゝ所は、平穩にして、陸上交通が大陸の如くでない、孤立的な島生活に發する所と考へる。

此の目で、我新石より、より古き祖原を考へると、我が新石階梯に近い、中石祖原に出會する場合に於て、もしも中石文化が、既に我が内地に到達し、且つ我天然環境に順應した文化を營んで居るものであれば、畧我が新石と同樣な文化發育の經路をとるまいか。もしそれが大陸にあるなれば、大陸なる天然環境を考へねばならない。

又萬一にも我新石祖原で、文化躍進があり、舊石文化より直に飛んで新石文化を見る樣な場合には、文化移行の經過が明に

第二表。石器時代各文化階梯比較一覽表（著者）

階梯／內容	新石文化	中石文化	舊石文化
生業	狩獵 漁撈 農耕　牧畜	狩獵 漁撈 （家犬を有す）	狩獵
構築工術	巨石建造物｛立石、環狀石籬／卓石、羨道墳｝ 構築住居（平地、竪穴、杭上）保塞	構築住居（竪穴住居）	天然住居＝洞窟住居
主要人工遺物	一、打石器—尖頭鏃 二、磨石器—石斧 三、骨角器 四、土器（多）	一、打石器｛巨石器、細石器／粗形斧｝ 二、磨石器始原 三、骨角器—有拘釣針 四、土器始原	一、打石器｛握り槌、手用尖頭器／尖頭器、刄器、石搔｝ 二、骨角器—尖頭器
動物群	森林系｛赤鹿／野猪｝	森林系｛赤鹿、エルク鹿／野猪｝	極北系｛馴鹿／氷狐／麝香牛｝ 暖系｛大海狸／河馬／古象／メルク犀｝
氣候	海洋的	準海洋的—北的	極北的—暖的
地質	沖積	沖積—洪沖過渡期（氷後期）	洪積（氷期—氷間期）

〔別註四〕　我新石文化相と歐洲新石との相違

この問題は、直接本研究と縁遠い様にも思はれるが、一つには、我が新石文化を、より廣い目で眺めて、其特異相を明にし、彼我同一文化階梯にあつても、必ずしも總てが相等しいものでないことを明にして置くと共に、他には直接我が新石文化それ自身の上限に向つて探査研究を行ふに當り、其出會すべき古き文化階梯の一判斷資料ともなると考へ、引いて我が祖原文化に

達したものもあれば、(50) カムピニアンの様な、石器の主體をなすものがあつて、(51) 各文化により夫々一樣ではない。又貝器も一向に發育して居らない。

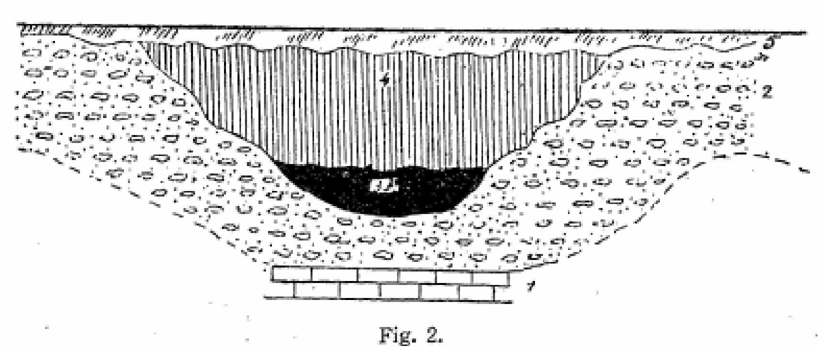


Fig. 2.
カムピニーの竪穴
(中石後期)
(nach Ph. Salmon u. a.)

其藝術は、歐洲後期舊石文化の樣なものは稀で、且つ寫實的傾向よりも、便化した紋樣藝術の方が多く、(52) この點は寧ろ新石藝術に近い。

中石文化が、舊石文化より一段と進展して居ることの、一要素として、土器を有するものがあることである。(53) 勿論全部でなく、且つ中石文化としても其後期の所產であり、それが出土は稀でもあるけれども、既に土器の所有は、食料其他の貯藏可能なる、日常生活上に於ける大なる安定性を與へたものと云はなければならず、玆に次の新石文化に於ける、これが發展の始原を物語つて居る。

この中石文化の地質時代は、北歐(54)の外、標準となるものが見當らない。從つて漠然としては居るか、一般に沖積初期と云ふに止まる。これも經過年代が、舊石文化の樣に長大でないし、沖積層の內分の如きは、地質學としては、其末端に過ぎず、何等か標準となる、自然現象を捉へなければならないのであるから、所謂第四紀地質學の發展を待たねばならない。

今これを簡單に取り纏めて、第二表を作出する。

(Cong. Int. Anthr. Arch. Praehis. Lisbon.)　（ポルトガル・ムージェン貝塚）

備考　1.本文獻は、こゝに引用乃至參照したものに過ぎず、全部の集成ではない。將來增補する。
2.番號の肩に※を附したのは、私未見のものであるが、參考に附加した。
3.デンマークの貝塚に就ての文獻は、F. 9 の諸種、卷末に附してある。
4.單に（L.　）としてあるものは、本書卷末文獻一覽中にある。

更に中石人には、新に家犬が飼畜せられ、人類は茲に生活の一旅伴を得、其後に來る可き新石文化に於ける、牧者分業の始原をなして居る。

中石文化の構築術工は、其各文化悉くに見らるゝのではないが、[41] 西歐の中石後期の一文化である、カムピニアン (Campignien) には立派な堅穴住居跡（第二圖）が發見せられ、[42] 同じく後期に屬するデンマークの貝塚構成文化にも、小石を敷いた爐跡がある。[43] それ故、少なくとも中石後期には、野外構築住居はあつたと考定し得るが、特別に築營した墳墓はなく、こゝに歐洲新石文化とには階段がある。[44]

其人工遺物の中で、石器の如きは、打製を主とする點は舊石文化と變りがなく、特に個々に抽出して見ると、中石文化だからとて、特に舊石器より發達したものばかりでなく、中には舊石文化のソリュートレアンの石鏃程の立派なもの[45]すらない。勿論其内容に於ては、舊石器とは自づと特徴を異にし、中石器としては、握り槌に近い打突具であり尙所屬未詳の所があるが、巨石器 (Macrolith)[46] と共に、細石器[47]とが代表せられ中石後期には祖形斧[48]が出現して居るが、新石文化に普遍的に見る磨石斧、石鏃（尖頭鏃）[49]の如きは、未だない。

骨角器に於ても、舊石文化と對比して、これぞと指適するものがない。強いて求むれば、有鉤釣針の如き漁撈具の發生發育の點が進んで居る。然しながら各文化を個々に眺めると、マグレモージアンの樣に、器具として發

La péche dans la préhistoire.

F. 5. E. Krause ; 1904.

Vorgeschichtliche Fischereigeräte und neuere Vergleichstücke. (Zeitschr. f. Fischerei u. d. Hilfswiss. Bd. XL.)

F. 6. J. de Morgan ; 1925.

(L. 16)　（北阿陸產貝塚、エジプト貝塚等）（中石以降）

F. 7. G. de Mortilett ; 1867.

Origin de la Navigation et de la péche.　（拔刷。原載誌名未詳）

F. 8. H. Obermaier ; 1919—20.

Das Palaeolithikum und Epipalaeolithikum Spaniens. (Anthropos. Bd. XIV—XV.)　（アストウーリアス貝塚）

F. 9. K. Ohyama ; 1928.

(L. 21)　（デンマーク貝塚）

F. 10. 〃 ; 1931.

(L. 24)

F. 11. R. de Saint-Périer ; 1928.

Engins de Pèche paléolithiques.

(l'Anthr. Tom. XXXVIII. No. 1-2. p. 17—22.)

F. 12. W. Soergel ; 1922.

(L. 29)

F. 13.※ Ch. Rau ; 1884.

Prehistoric Fishing in Europa and Northern America.

(Smiths Contribution to knowledge, No. 509.)

F. 15. C. Ribeiro ; 1880.

Les Kjökkenmöddings de la Vallée du Tage.

なく、我四周にも見らるゝが、悉く舊石所産ではない。從つてこの點から見ても、舊石文化に未だ漁撈生活の發育して居らなかつたことを裏書きする。

5. 小　括

今述べた如く、舊石文化としては、其遺跡に於ても其出土水産物よりしても、はたまた其人工遺物上から見ても、漁者ではない。漁撈が全く不可能ではないけれども、主業者でない。云ひ換へれば、未だ漁者とまで申すだけに達して居らないと、私は確信する。これにも拘はらず歐洲に於ける本問題に關する一般傾向は、其殆んどが舊石漁撈を肯定して居る。試みに揭出文獻に就て見れば Gruvel, Krause, Mortilett, Soergel 等悉くが舊石漁撈を認定して居るけれども、更に一歩を進めて夫夫の立脚點を吟味すると悉くが基礎薄弱である。今これ等の個々に就て述べ得ないが要は認識不足に盡きる。これは今日に於ても漁撈に親しみ少ない歐洲人としては、其日常環境より既に其觀點の一步を踏み違へて居るに原因するものと考へる。

この漁者でないと云ふことは、本研究に於て何を意味するかと云へば、舊石人たるものが水に親しみ尠ない生活をなして居るものであると云ふ點が明にせらるれば足るのである。又從つてこの樣な水に親しみのない、狩獵者であり、且つ文化も低い舊石文化では、舟筏等海上交通に關した知識も未だ芽へて居らなかつたと見てもよいと考へる所は豫め申述べて置く。

6. 漁撈始原關係文獻*

F. 1. Anderson; 1897-8.
Notes on the Contens of a small Cave or Rock-Shelter at Druimvargie, Oban; and of three Shell-Mounds in Oronsay.
(Proceedings of the Society of Antiquaries of Scotland. XXXII.)　(中石貝塚)

F. 2. M. Boule; 1919.
(L. 5) Tom. I, Fas. IV. p. 338—339.

F. 3. M. C. Burkitt; 1929.
(L. 3) p. 105—108.　(南アフリカの中石貝塚)

F. 4. A. Gruvel; 1928.

したものであり、比較民族學の傍證上、可能性は認め得ても(第一圖A)、これを積極的に肯定することは出來ない。より甚しいのになると、細身石片（多くは細石器）の中央結紐による釣針であるが、單なる假想に過ぎず（第一圖C—E)、出土の石器、骨角器等を後世の頭で組み合せれば、色々な器材も生れ得る。史前學としては、事實を發見するか、さなくんば、これを肯定するだけの理由が伴はなくてはならない。

尚この外、偶針其他の釣魚法の考案 R. de Saint-Périer；漁撈文献（以下單に F. と略する）(11) もあるし、錘石其他間接的な釣魚論もあるけれども、何れも有力とは認め難い。これ等に就ては改めて將來研究もするが、私が認識し得るものが無いことだけを述べて置く。

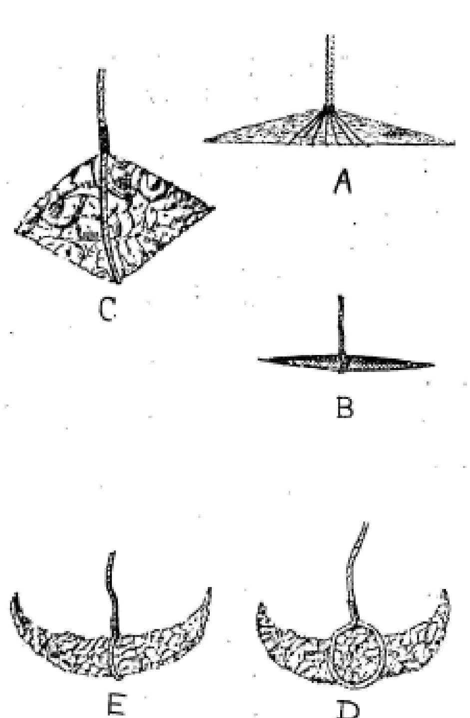


Fig. 1.
A. Gruvil 氏針釣假定
A. Borneo 土人の丁形針釣(現用)
B. 同氏の骨角牙製の舊石所產と稱するもの。(出土地、文化期不詳)
C. 丁形初期のものとの考案。
D. E. これが進步した半月形をなすもの。(同氏 (F. 4) より)

4. 貝塚の文化階梯

貝塚は漁撈生活跡である。勿論漁撈生活と云ふても今日の様に分業進化はして居らないのであるから、獨り水產に限らず、陸產食料も併せ取つたものではある。特に新石文化以降の貝塚民は、漁撈狩獵の外、農耕にも從事したものも有り得る。然しながら、大局的に漁撈主生業と認め得る。此の如き顯著な遺跡が、舊石文化にあれば舊石漁者は認定せられ得るけれども、從來發見の貝塚であつて、私が内容を知れる限り、中石文化以降しかない。例へばデンマークの貝塚（拙稿、L. 21 參照）、スペイン、アストウリアス (Asturias) 貝塚 (F. 8) ポルトガル、ムージエン (Mugen) 貝塚 (F. 15) 等歐洲に存する有名なものは、悉く中石文化に屬して居る。特にアストウリアスの如き、其の下層には、全く漁撈の痕跡なき舊石文化層がある。歐外に於ても、北阿、エジプト、中南阿等にも見られ、我が國は申すまでも

魚類の出土は前述の如き狀態にあるに對し、漁獲具と認む可きものが、果して出土して居るか、如何を見ると、歐洲前期舊石各文化の如きは、全く漁獲を考察す可き資料が皆無である。これ等の文化は、打突具である握り槌（內容は、後述、其六の三十一の1參照）を主用して居るから、これでは漁獲用にはならない。簡單な漁撈でも刺突具を必要とする。それには手用尖頭器（後述、其六の三十一の2參照）ならば、不可能ではないけれども、適應した漁獲具とは認め難い。これが歐洲後期舊石文化になると、刺突器が主用せられ、且つ細身尖鋭な、骨角刺突器が生れて居るから、前者に比すれば、可能性はより大ではある。この內でも刺突器であつて、拘部を有する有拘骨銛（Harpun）（後述、其六の三十六參照）乃至は未だ拘部とまで稱し得ない、有齒骨銛（Fischgabel）（後述、其六の三十六參照）の如きは、確かに漁獲具と認められ得る。然るにこれ等有拘有齒の骨銛類は、單にマグダレニアンに見らるゝのみであつて、他の階梯乃至は歐外舊石にも、殆んど見られない。而してこのマグダレニアン文化には、他の骨角刺突具はあるけれども、この骨銛の類は、主要なる一要具でゞもあり、必ずしも漁獲專用具とまでは、認め難い。（拙著、歐舊、續、S. 57—59. 參照）單に個々に取り出して見れば、上述の如く認められもするけれども、これを一發見共存群として見ると、大に見解を異にせざるを得ない。

更に他の漁獲具として見る可きものは、有拘釣針である。この有拘釣針として、疑ない程度のものは、未だ舊石發見地より出土したことがない。疑いの存するものには現チェッコスラバキヤの Mähren の Sloup 地方に於ける Kulna 洞窟より古く發見者の Križ により有拘釣針として洪積所產（文化階梯は示されてない）と報ぜられたものがある。（Križ; Beiträge zur Kenntnis der Quartärzeit in Mähren. 1903. S. 439. Fig.）然しこれには、說明もなく、同書は隨分思い切つた議論も多く、根本に於て舊石文化それ自身に對しても、甚しい認識不足もあり、後に M. Hoernes (L. 11) によつて、補正せられた所も多く、報告それ自身、特に文化現象に對しては採用し得ざる所が多い。この釣針と稱せらるゝものに就ても、云ふ可きことが多いが、これを略するが、要するに今日の目から見ると、疑はざるを得ない。其確實に有拘釣針と認めらるゝものは、中石文化のマグレモージアンにある。（拙著、(L. 24) S. 130. u. 131.〔註四〕釣針始原考。參照）

更に、鼓狀の釣針なるものが想定せられて居る。＝これをT形釣針と名づける＝これも現在未開土俗にこれが使用者あるに發

1. *Labrax sp.*
2. *Sciaena aquila*　イシモチの類
3. *Thynnus sp.*　カツヲの類
4. *Labrus merula* ⎫
5. *L— mixtus* ⎭　ベラ，カンダイ等の類
6. *Salmo sp.*
7. *Trutta sp.*
8. *Anguilla ou Conger.*

以上の魚類は、出土したには違いないが、問題は其多寡にある。然しこれ等は決して、陸産獸骨よりも多いのではない。中には僅々一片に過ぎないものもあると信ずる。特にカツヲの如き所謂洋上魚なるものが、多獲せられた結果があるなれば、舊石人の漁獲に對する知識に就ての解釋を改むる必要もあるけれども、以上の資料のみでは、私の考を改むる程度には達して居らない。魚獲も行ふたことがあると云ふ程度であり、特にこのグリマルディの如きは、當時は如何であつたか、詳なことは解らないが、今日は波打ちぎはにある、海岸洞窟であるから、今日に近い地形にあつたとすれば、舊石人は日々海を見、海岸にも出たことゝ思ふから、かく魚類捕食の機會も多かつたことゝ考へる。然しやはり獸骨の方が多く出土して居る。勿論この獸骨と魚骨とでは、保存の良否の差もあつて、一概には申されないけれども、更に他の水産物たる貝類を見ると、これ又出土はして居るが、寡少である。故に豐富な水産に直面しながらも、洞背に聳ゆる山地に入つて、獸類を獵獲して居つた所に、私の云ふ獵者たるの、素質が大きいと考へる。

尚海に面した舊石洞窟住居跡には、歐洲では佛のピンダルやスペインのアストウル等もあり、川に臨んだものは、ドルドーニュのウエゼール遺跡群八十餘箇所の如きものを見るけれども、何れも多數魚骨出土は聞知したことがない。

3. 舊石文化に於ける魚獲具

するものをも見る、文化階梯を指し、地質學上、主として沖積初期に存在せる文化を云ふ』これを說明しながら、舊石文化と比較して行くと、其生業上に於ては、舊石人の單なる獵者であつたに對し、中石人中には、新に漁者なる分業が生れ、これを食料上から見ると、殆んど陸產のみであつた食料に、魚貝等の水產が併用せらるゝに及んで、其範圍は著しく擴大せられ、不獵の飢に襲はるゝ機會を、より縮少して居る。

〔別註三〕　漁撈始原概說

1.　一　般

漁撈始原に關する研究が、史前學上、他の生業始原問題と共に、一重要なる研究であるに拘らず、未だ徹底して居らない所の多いのは遺憾である。特に我內地の如きは、今日でも世界三大漁場の一つとして、漁撈を營む民衆も多く、又我新石文化に於ては、他より日本貝塚文化と云はれて居る程、顯著であり、且つ六百內外の貝塚數は世界に冠たるものである。此の如き史前漁撈民を生んだ我國としては、本文に述べつゝある舊石文化の存否に拘はらず、漁撈始原に就ても、研究す可き任がある。只こゝでは紙數もなく、單に我舊石文化探究に關係を見る以上、これに必要な範圍に於て、將來研究の端緒をなすに止めて置き、これに就ての愚見も、多くを將來に保留して置く。

2.　歐洲舊石發見地出土の魚類に就て

本文に於ても述べて居る如く、舊石人が絕對的に漁撈を試みなかつたと、其全部を否定するものではない。さりとて、簡單に薄弱なる理由のもとに、其漁撈を肯定することは出來ない。先づ現實に於て歐洲舊石發見地より、魚骨の出土に就て見ると、私の研究が足らぬ故か、甚だ稀であり、僅に拙著、歐舊、正 S. 140—141. にドイツ出土例を揭出し得たに過ぎない。勿論私の手元には中心地たる佛國の文獻に乏しいし、且つ其後特別に探査したのでは無いが、漸く此程、佛伊國境、Grimaldi 出土、(L. 5.) Tom. I. Fas. IV. p. 344. 左記八例を發見した。勿論今後も注意し、漸次集成もして行くが、兎に角、揭出して置く。

3. 更に省みる可きは、簡單に考へると、主として洪積以前の地層より、恰も人爲加工せられた如き石片、或は何所よりか發見せられた原石に近似狀の石を發見したからとて、何んの研究も俱はなければ、よしそれを原石と認められても、單に原石發見地に一新例を加へたに止まり、原石研究を一步なりとも推進せしめたことにはならない。肯定、否定何れにせよ、相應な基礎に立脚して、根底ある研究を發表す可きものと、私は考へる。それ故、これ亦出來心でやり、後に認識不足の生ぜないやうに豫め研究がしてあつて欲しい。

七　中石文化との相違

今上限に向つて、原石との相違を述べたから、更に下限に對し、中石文化との違を明し、引いて舊石文化をより鮮明に寫し出し度と考へる。特に我內地の如きは、單に新石文化しか發見せられて居らず、其目で一躍して舊石文化を眺めるに當り、其中間缺除した部分を、一通り知つて居らないと、そこに認識不足も生じ得る。

實は、我が內地に於て中石文化の存否も亦、原石や舊石文化の存否と同樣に、目下未決の問題であり、これ亦判定資料の研究を必要とする點は、この舊石文化と何んの變りもない。只こゝで舊石文化を取り出したのは、舊石文化の方が、早くより知られ、且つ有名でもあるからこの方を先きにしたに過ぎない。[40]

先づ中石文化を見るに當つて、これを次の樣に定義して置く。

『中石文化とは、舊石文化と新石文化との中間にある文化階梯にして、生業上、狩獵の外、漁撈も併せ營み得、中に家畜を有するものも存し、構築術工としては簡單なる人工住居を營むものも生じ、其人工遺物に於ては、僅に磨製石器の始原を想定するものあるも、大多數は打製石器、骨角器等を併用し、中には僅少の土器を所有

こゝで特に注意す可きは、右表の如く舊石文化は目下の發見研究を立前とすれば、上限に於ては洪積期を越へて居らないのであるから、[illegible]萬一にも第三紀層、其内でも鮮新世（Pliocaen）等に舊石器らしきものを發見した場合には、從來の諸例を破つた新發見ともなる重大なる新事態を生じ、引いて舊石文化に對する考へ方も、亦原石論や姉妹學上の第三紀人類問題[31]にも及ぼしてくるから、特に愼重に研究して欲しいと同時に、輕機みな發表は、學界を惑はす結果をも生ずる。更に舊石器と原石との相互をよく比較して、夫々の型態、術工等に關した標準尺を明にしてないと。（〔別註一〕の2參照）其根本を誤ることがあるから、こゝにも基礎的研究が必要である。

〔別註二〕　原石の判定

1. 我が內地にも原石があるか否か、これ又舊石文化の場合以上に、解らない。從つて萬一にも原石發見の際の研究資料も必要であることは、認めても居る。然しながら、本研究は舊石文化の判定資料として、述べつゝあるから、原石發見の場合とは、自づと相異る所がある。さりとて、こゝでは原石發見の場合に對し、多くを述ぶるだけの紙數がない。從つてこゝでは、單に二三の抽象的な要目に觸れるに過ぎないが、本文に述べて居る一部も亦、原石發見に際し、適用し得べき項目も存して居ることだけは、申し添へて置く。

2. 根本に於て、原石なるものが、人爲作出の結果か、天然の所產であるかに就て、玆に六十餘年に亙つて、論爭の歷史を有し、大約三百に近い研究論文を見、今日尚引續いて、歸締を見てない。從つて萬一にも日本內地で原石發見の報告でもすれば、世界の耳目を引くに止まらず、この報告に確乎たる研究が伴はない以上には、獨り我學界の鼎の輕重を問はるゝばかりでなく、同時に贊否何れにせよ、今日兩論ある以上、反對の一方から、鋭い追擊も受く可きことは、豫め覺悟して掛らなければならない。卽ち自から原石論爭の渦中に投入することになるのであるから、論爭の歷史に鑑み、充分な所信ある研究が出來て居らないと、後に差し引きの出來なくなることも生ずる。

定義の説明の所で觸れてきた如く、舊石文化なるものは、石器時代内にある明確なる一文化階梯であつて、これが存在に就ては、何等の疑問もない。これに對し、原石（Eolith）なるものは、認否交々兩論があり、未だ定論を見て居らない。[36] これを舊石文化に比較して見ると、遺跡、遺物出土狀態、遺物等總てに亘つて、人爲とす可き諸件が充實してない。爲に論爭も起つて居るのであるから、この點は豫め考慮し、且つ舊石文化と原石との區別を明にして置かないと、これが混合も生じ得る。今この區別を最も簡單に次の一表に示して置く。

第一表。原石と舊石文化と比較一覽表（著者[37]）

		舊石文化	原石
生業		狩獵	未詳
發見地		遺物發見地 洞窟住居跡もある。	遺物發見地
火の利用		アシユーレアン以降は存在	未詳
共存遺物		一、中に捕食殘骸と認めらるゝものがある。 二、ムステリアン以降には人骨が共出して居る。	一、單に同一地層より動物遺骸が出土して居る。 二、未だ確たる人骨の發見はない。
人工遺物	一般	一、型態分課顯著なものを認む。 二、打製なるも中に第二次補修を行へるものがある。	一、未だ顯著でない。 二、打裂片、剝取片、打瘤跡等はあるも第二次補修なし。
	石器	握り槌、手用尖頭器、石搔、石刲、石核、刄器、石錐等がある。	抽出的に見れば、尖頭器、刄器、石錐等もあるが、主用利器と認めらるゝものはない。
	骨角器	一、未だ利用を知らざるものもある。 二、中に著く發達したものもある。	明に骨角器と認めらるゝ程度のものはない。
時代		主として洪積時代	第三紀の始新世以降各世に存し洪積層にも發見せらるゝ。
姉妹學的傍證		一、現ヲーストラリア土民中には、原石様の石器使用者がある（肯定） 二、自然現象中には疑原石を生ずる（否定）	

て、これが直に舊石文化であると云ふ如き逆定理は成立しない。更に藝術の存否を見ると、歐洲後期舊石、其中でもマグダレニアンにあつては、卓越した藝術民であり、[32]又歐洲カプシアンにも、岩壁繪畫があり、他に果して舊石文化所產であるか、明でない所謂史前繪畫なるものが、アフリカ各地にもある。[33]然し歐洲前期舊石文化中には、未だ全くこれがなく、歐外にあつても、藝術的作品發見の件はないもの丶方が、寧ろ多いと考へらる丶。從つてこれ等の存在は、舊石文化の內容を價値づけこそすれ、これが舊石全般の特徴とはならない。其藝術所有の有無は、主として、舊石文化內に於ける文化發育の一標準とはなるけれども、他の中石以降の文化階梯との相違を示す準據とは、ならないことが多い。

以上の樣な文化內容を有する舊石文化が、地質學上、何れの時代に存したものかと云へば、主として洪積期に存したものを指すのである。現在の發見に於ては、洪積期が主體をなし、其上限に向つても、[34]又下限に於ても、[35]若干は問題を藏するものが、皆無ではないけれども、これを舊石文化の全般より見れば、寧ろ例外とすべきである。特に文化下限に於て、今日は未だ確たる發見は無いけれども、理論上、舊石文化が永く沖積期にまで遺承することも決して不可能ではないから、定義には主として冠して置いた次第である。只古い時代にあると云ふことを大約洪積と、其古さの標準を示したものと見ればよい。これで一通り直接定義に就て說明をしたのであるけれども、猶申加ふ可き諸件がある。

六　原石と舊石文化との相違

ある、シエルレアンとブレー・シエルレアンにある。[22] 又歐外舊石文化に於ても、私は明確な記錄を見出して居らない。然しこの火の利用は、文化上大切なことであり、自然界に見ない文化現象なのである。こゝに述べた主旨は、寧ろ今日問題を藏する原石 (Eolith)[23] との相違にあつて、他の文化進展した階梯との差の少ないことの一例でもある。

人工遺物としては、全般的に見て、術工顯著であつて兎に角、石器と認めらるゝ程度にあり、石器であるか、自然の所產であるか、疑問を挿む程度のものではない。これ亦前述した原石の加工顯著でないとの對照である。勿論吟味すると中には隨分怪いものもあるが、典形的の舊石器であれば、加工は顯著である。[24]

其器具を見ると、歐洲マグダレニアンの如き特殊發展をなしたもの[25]を除いては、歐洲及び歐外を通じて主要なる器具は石器であり、且つ其石器たるや、術工上打製のみであつて、磨製は通常ない。[26] 磨製石器の如きは中石文化にも稀であつて、寧ろ新石文化の所產である。

骨角器は舊石文化中には、全くこれを見ないものもある[27]と共に、併用せらるゝものも多く、[28] 前述の如く例外的にマグダレニアン文化に主用せられても居る。從つて原石に對しては、骨角器を有するものは、文化內容に充實を見せても居る。[29] 中石以降に向つては、益々これか利用を見、中に發展したものまであるから、單に舊石文化中にも既に見ると云ふに止まり、綜括的な特徵とはならず、個々の特質が、物を云ふに止まる。

貝器としては、舊石文化中には、僅に裝飾品に利用せらるゝものゝ外、器具としては見たことがない。又一部には木器の利用を說述するものがあり、[30] 其一部は理論として認められもするけれども、現品の發見は殆んど見たことがない。土器及び土製品も亦、舊石文化中確たる出土を聞知したことが無い。[31] 但し土器を發見しないからと

ものが、想定せらるゝのである。又彼れ等の遺した洞窟等の住居跡からは、主として哺乳類殘骨の夥々として發見せらるゝものもあるに拘はらず、貝塚の如き漁撈を物語る何物も、舊石文化としては、未だ發見せられて居らない。(〔別註三〕漁撈始原概說參照)勿論水產攝取も試みたであらうし、これを全然否定するものでは無いけれども、陸產攝取を主としたもの、卽ち獵者と考へる。此の如く舊石人は主獵者であるとの前提が成立するものとすれば、水上作業等を營む可き舟筏の類が、この文化に生るゝものとも考へられない。

更に他の生業を見る。農耕の如きは、其始原的のものが、中石文化の後期に漸く芽へたものと認められ、寧ろ新石文化の所產と見る可きものである以上、[15]より古き舊石文化にこれが存在は、到底考へられない。又牧畜始原と云ふよりも、家畜すら、只今の發見を準據とすれば、確認せらる可きものが、舊石文化中にはない。[16]家畜として史前文化の最初に見らるゝものが、家犬(*Canis familiaris*)であつて、最も古き文化階梯としては、歐洲中石文化のマグレモージアンに初現して居る。[17]卽ち舊石文化には農耕も牧畜もなく、野生哺乳類[18]等の捕食の跡がある以上、獵者たる所の公算は大である。

次には、構築術工であるが、例へば家とか墳墓とか等に對し、竪穴、墳丘等の如く、人爲築造せられたものが、今日まで未だ一ケだに發見せられて居らない。主要なる舊石遺跡と認む可きものは、洞窟岩陰等に於ける住居跡で、これを遺跡學的に見れば天然住居跡である。さなくんば、我が國で云ふ所謂遺物包含地であつて、他には確たるものがない。[19]從つてこの點も未だ進步を見て居らず、確たる構築住居は、中石文化に始めて見らるゝ[20]。

火の利用に就ては、全稱的ではない。これが爲定義には「旣に其多くが」と斷つて居る。其現實發見は歐洲前期舊石文化のアシューレアン[21]には確實に見らるゝから、この以降は存在可能である。只問題はそれ以前の文化で

五　舊石文化の定義

今舊石文化の內容を見る以前に、先づこれが根本をなす舊石文化それ自身に對し、それが如何なるものであるかに就て、決定して置かないと、或は誤解も起し、又は問題も生ずる。特に新に發見する樣な場合には、一增愼重さを以て、研究すべきである。

私はこれに對し、次の樣に考へて居る。[14]

『舊石文化とは、石器時代の始めに於て、狩獵を主なる生業となし、未だ漁撈、農耕の見る可き發展もなく、家畜も普及せず、又構築術工としては止むる跡なきも、火の利用は旣に其多くが了解し、其人工遺物に於ては、術工の顯著なるは認めらるゝも、尙打製石器を主とし、一部に骨角器を有し、中には藝術に秀でたるものあるも、未だ磨製石器及び土器等を有せざる、最も古き文化階梯にあつて、且つこれ等は地質學上、主として洪積期に存在せる文化を指す』

これを簡單に說明すると、人類なるものは天賦の習性上、其歯は雜食的である。從つて其食料は動植物質を雜取するものと見ねばならない。これとて未だ牧畜農耕の如き生業が生れざる以前であるなれば、天然の生物を食用に供したものと判定せらるゝ。又人類習性中には游泳の心得がない。從つて水に近緣少ないものと見ねばならない。それ故自然生物を捕集するにしても、水に親みのない、陸産生物が自然と其對象となる。其內天然植物の採集には難易はあるにしても、動的の勞作ではない。從つて主なる生業としては陸上動物の捕獲、即ち狩獵なる

其二　舊石文化の文化相

四　舊石文化の一般

現在に於て舊石文化として知られて居る範圍は、歐洲を最とし、研究七十餘年の歴史を有して居る。[7] 歐外[8]に於ては、アフリカ[9]、小アジア[10]、印度[11]、シベリア[12]、滿洲國、蒙古、支那[13]等に舊石文化は見て居るものゝ、未だ歐洲程には研究の進展を見て居らない。從つて歐洲の樣な編年も出來て居らず、多くは單に洪積所產であつて、文化傪行が中石乃至は新石まで脈胳としては見られない。

又歐洲舊石文化なるものは、歐洲の自然環境を背景とし、特に幾回かの進退があつた氷河現象によつて培はれた文化であるから、これに範例を求むるとしても、よくこの消足を吞み込んだ上で、不消化の起らない樣に、見て行かねばならない。さりとて、今日研究の充實して居らない歐外各地に標準を求むることも、歐洲と同じく、夫々の地に芽へた文化である以上、そこに地方色も生る可きであるから、これ亦輕々と取り扱ふことは出來ない。要するに、我が內地に對し、これぞと云ふ可き準據となる可き舊石文化が不明なのである。從つて、舊石文化の內容を廣く理解して置く必要も生ずる。

る。

（3）此の如き單純な考察は、獨り我が國にのみ存するのみでない。歐洲にも相應に見らるゝ。特に其一例とすべきが、（2）の2に紹介したメンギンの中にもある。其 S. 821. „Unter den Steingeräten aus Japan gibt es zahlreiche Typen von Campigniencharakter, die man gerne als Zeugnisse einer solchen Vorstufe ansehen möchte.“ 卽ち『日本石器中にはカムピニアン〔大山註。主として西歐方面に於ける後期中石文化であつて、北歐方面の貝塚構成文化と平行關係ありと稱せらるゝ文化。尙これに就ては、（42）參照〕の性質を帶ぶる型式のものが多出して居るから、これを一證として、其祖原階梯にカムピニアンの如きがあつて欲しい』と云ふて居る。云い方は强くはないが、恐らく關東平地等に最も多い、所謂打製石斧を見て、かく云ふたことゝ考へる。此の如き所論は、獨り認識不足勝な東洋方面ばかりの研究に止まらない。歐洲それ自身内にもある。これに就ては、（56）參照。

（4）歐洲の舊石文化に對する槪論書は、拙稿、石器時代に關する歐米の文獻。人類。四一の六、七、八號（大正十五年）參照。又同一文獻は、一覽として、拙著歐洲舊石器時代（考古學講座、文獻。其二（正編第一一項）（但其二とあるは其一の誤植）同。其二（正編第一三―四項）等參照。

注意。以下述ぶる所の文獻は、其主要なるものは本書卷尾の文獻一覽の番號と著者名とを記載する。又雜誌略號は史前學年報所載の略號を用ふる。

（5）私の歐洲に於ける體驗の槪要は、拙稿、歐米見聞記、（第一―七信）人類。第四十の一―五、九、十號（大正十四年）參照。

この際、机上で簡單に覺へた舊石文化に對し、實際に臨んで見て始めて、理解した樣な氣がした。これが歸朝後に更に研究して見ると、甚しい研究の不實を感じ、それが次第に增してきて、只今では疑問が增すばかりである。

（6）滿洲國、蒙古、支那等に發見せられた舊石器に就て、私は未だ多くを知つて居らない。僅にテルドス發見のものを、巴里で槪見したのみで、他の實物を見て居らないし、現地に臨んだこともない。從つて今回はこれに多く觸れなければならない必要も認めては居るが、尙私自身に自信の出來るまで保留を許されたい。而してこれ等の文獻等に就ても、（2）に述べた如く、近く取り纒めて發表も期して居るから、その際に讓り、又研究は將來行ふ可き時に愚見を開陳することゝする。

最後に御斷りす可きことは、私自身のことであるが、私自身は元々舊石文化の專門研究家ではない。然らば私の專門と御尋ねあらば、日本石器時代と申すに躊躇しない。只一通りは在歐中、舊石文化も研究してはきたものゝ、在歐中研究の主體は、中石文化にあつた。從つて私が舊石文化に就て多くを發表して居ることも、一面に其僭越を憚らないのでは無いけれども、今日我が國に未だ舊石研究者の尠ないまゝに、かく研究發表もして居る。それ故、間違も不充も多く存するのであらうと思はれるから、充分に吟味し、出來るだけ歐米のそれと對比して戴けば一番正鵠を得らるゝことゝ信ずる。

（1）日本諸島と云ふて居るのは、臺灣より北海道に亘る現在乃至は、現在に近き狀態にあるものを指すのであつて、日本諸島と云へば、朝鮮を含まない。これを略して「我が內地」と云ふ。朝鮮を含む場合は「我が國」と稱し、夫々區別する。これ等は後述する日本島分離問題（其三の十、參照）にも聯關するから、かく嚴格に區別するのである。

（2）歐洲方面よりの東洋石器時代研究は、旣に古くより始まり、其數も甚だ多く悉くを、こゝに揭出し得ない。其最近に於ける一例とすべきもの摘出する。

1. R. Heine-Geldern ; 1928.

Ein Beitrag zur Chronologie des Neolithikums in Südostasien (Festschrift Publication d.Hommage Offerte au P. W. Schmidt)（この概目は本誌、四の一にある）

2. O. Menghin ; 1928.

Zur Steinzeit Ostasiens. (ibid)

3. 〃 ; 1931

Welt-Geschichte der Steinzeit. S. 297—302.

4. H. Schmidt ; 1924.

Prähistorisches aus Ostasien. (Zeitschr. f. Ethn. LVI.)（この論評は、拙稿、東亞の史前に就て、人類、第四十の十一、十二參照）

これ等東洋關係の歐米論文に就ては、近く集成の上、改めて發表を期して居る。獨り此の如く研究の發表を見る外、我が國に來朝せられた史前學者も尠なくない。例へば、本誌前號に載せてある論者のカーレンフエルス氏、又セーリックマン博士等殆んど每年來朝者を見て居

原石 (Eolith) 樣のものまで取り扱ふ樣にもなる。これ等は他の原因もあるとは考へるが、夫々其頭に描く標尺の程度に起因する所も大きい。この標尺の規制には現品實視が何よりのことゝ考へる。

それ故、舊石文化を研究せらるゝ方々には、是非一度なりとも實物を見て置かるゝことを御勸めする。但し我内地では舊石器所藏者が幾何あつて、如何樣な内容を所藏せられて居るかに就ては、殆んど知つて居らない。私共の史前學研究所に主として歐洲舊石器が約千點程ある外、京都帝大考古學敎室、東大人類學敎室、東京帝室博物館等にどれだけ有るのか、精確に聞いて居らない。

3. 拙著、歐洲舊石器時代（考古學講座）(L. 26) に就て

今日舊石文化に就て、邦文で書いたものは、不幸にして掲題した拙著の外、見當らない。最も簡單に觸れたものや、翻譯物はあるかも知れないが、これが特に普及したものとして聞知したことがない。所がこの拙著（以下單に歐舊と略稱）は、私が校正其他著作指導に熱せず、所謂本屋まかせにした結果甚しい誤植や挿圖の逆入等、失敗の甚しいもので、こんな著述をしたことを甚だ後悔し、又決して人樣に御讀みを願い度もない。出來るなら全部やり直したいと考へて居るが、只今本論文との對比には何と云ふても間に合はない。然し其論述内容には、勿論不充も多く、改訂す可き所も、増補する點もあるけれども、無責任な考で書いたのではない。從つて止むを得ず、今回は拙著を對照として使用する點を豫め讀者に御了解を願ふて置く。但し同書述作の時には、單に代表的のものに限つて、圖版挿圖としたけれども、他の歐米一般概論書に比してはこれを倍加し、自分では紙數に對し論述を省いて圖版挿圖を充分に入れた心算であつたが、今から見れば、やはり足りない。それ故今回本書には、この歐洲舊石器時代に用いた圖版挿圖の一齊を重用してない。而して常に同書に掲出したものと對照して、成る可く多くの資料を開陳して、一つには舊著の不出來を補い、他には資料の充實に一歩なりとも進みたいと考へたからである。又この舊著に述べて居らない舊石編年問題に就ては、拙著、(L. 25) に述べて居る。又この拙著歐舊は連續すべき性質にあるに拘はらず、私に何んの相談もなく、二編に分斷せられて居り後期舊石以降は續編とせられて居る。これ爲見らるゝ場合には、兩者の併用が必要である。又これ等を引用する際頁數は前編を正とし續編を續と略稱して置く。

るが、多くは雜誌に載つて居る。だから雜誌の取り揃へることになると、到底個人の力では及ばなくなり、個人的研究としては借覽するより外に道がない。直接狹い史前學關係の雜誌ですら各國を通じて著名なもので二十餘種を數へたことがあり、少し廣くすると五十種を越へもし、中に三十卷以上を經て居るのも尠くない。これ等個々の雜誌名、內容等に就ても一通り紹介すべき責を感ずるが、紙面の都合上割愛せざるを得ないことを遺憾とする。歐洲舊石文化に關係深い雜誌名は、前述 Mac Curdy; Vol. I. XXXVII. Key to Abbreviations. に取り纒つて居ることを申し述べるに止むる。但しこれ等の雜誌類が幾何まで、我國に將來されて居るものか、僅少な一部を私自身が所有して居る外、他の藏書に就ては多くを知らない。

以上の有り樣であるから、文獻上から云ふても研究は中々困難の伴ふことを覺悟せねばならない。私の多く引用して居る雜誌の如きは、多くが拔刷が主であり、常に拔刷を入手に注意して直接外國（主して獨佛）の史前學關係書店と取り引きして居ることを申加へて置く。

2. 舊石器の實物研究

舊石文化を會得するには、現狀の發掘出土の體驗と、これが現實な遺物直接研究とは、簡單に了解をよくするとは、古く百聞一見とも云ふて居る。然しながら、我が內地では、目下其有無不明なのであるから、現地研究は歐洲其他舊石出土地に行かざる限り不可能である。從つてせめて、遺物なりとも實視して置く可きと考へる。これを單に圖版挿圖のみで研究して居ると、兎角誤も起り易い。これが現品を直視すると、個々の色彩、大小、術工等によつて眩惑を生ずることがあると同時に、刄とか尖端等の利鈍、術工の精粗等、こゝに舊石器なるものを認識すべき、はつきりした標準尺度が生れてくる。特に我が內地に於て、我新石器の精良なものを見馴れて居る目からしては、兩樣の極端な標尺が生れ易い。第一は我が精良なる新石器を標準とする爲、舊石器に對しても、標尺高過ぎ、こんなものは石器と認む可きでない等、石器の範圍を著しく壓縮する結果、元々種に乏しい舊石器であるから、殆んど合格するものが無い樣になる。從つてこうした目で見てゆけば間違はないけれども、舊石器を抹殺する恐れは多い。第二の場合は前者と反對に、舊石器と云ふのであるからとて、恐ろしく古拙粗造であるとの、前提が餘りに深く、爲めに寬かに過ぎる標尺を頭に描く結果、果して石器と認む可きか否かと云ふ樣なものまでも取り入れ、所謂

〔別註一〕 舊石文化研究餘錄

本文で述べて居る如く、本著に於ては研究が廣くなり各個の研究に就て充分に述べる餘白がないが、萬一にも新しく舊石文化の研究を試みようとせらるゝ讀者に對しこゝに二三の氣付きを申し加へて、其研究に資すると共に、他には私自身の立場も明にして置きたい爲に、この別註を設けたものである。

1. 舊石文化研究の文獻

先づ最初に舊石文化の概念を得らるゝ爲には、（4）に述べてある 拙稿に一通り紹介してあるから、 他に指導者が無いならば、この内から採ばるればよい。又各人の語學關係もあらうが、 其内でも英語なれば、G. G. Mac Curdy ; Human Origins. 1924. (New-York & London) 獨語なれば、F. Birkner ; Der Diluviale Mensch in Europa. 1925. (Innsbruck-Wien-München) 等を御勸めする。 それとて他と大差がない。夫々個性學風のあることであるから、多ければ多い程よい。

以上は歐洲舊石文化の概覽であるから、更に一歩精しくなると、主として國別地方別等によつて、取り纏つたものに歩を進めねばならない。例へば H. Obermaier ; Fossil Man in Spain. 1924 (New Haven) : R. R. Schmidt ; Die Diluviale Vorzeit Deutschlands. 1912. (Stuttgart) 等の如きであり、これ等の一部は(4)の拙稿にも紹介して居る。但し歐洲舊石器は佛國平地が中心であり、英、(D. A. E. Garrod : L. 6) スペイン (前掲) イタリー (R. Vaufrey ; L. 30) ドイツ(前掲)墺地、ポーランド、南露、スキス、ベルギー等に見るのであるから、これ等を一通り見らるれば落ちがない。更に歐外舊石に就ては、個々の述作報告等は隨分數多い樣であるが、取り纏つたものは、甚だ稀で、J. de Morgan ; (L. 16) 1925 と最近發表せられた O. Menghin ; Weltgeschichte der Steinzeit. (L. 15) 1931. (本書の紹介は本誌四の三・四號文獻欄にある) 位しか私は知つて居らないから、歐外に廣く手を擴げるには、第一に其文獻蒐集に多大の困難が伴ふ、現に私自身でも、文獻名は索出し得ても、原本を入手して居らないものゝ方が多い。

更に研究が進んで第三次に入ると主として個々發掘報告の如き部分的な研究に目を通さねばならない。これには單行本もあ

る爲には、甚しく廣き範圍に亘らねばならない。從つて夫々の總てに對し、悉くを述べるわけには行かない。又根本に於ては、舊石文化それ自身の認識をより深くして置くことが、重要なる基礎條件でもあるから、更に内容を複雜增大せしむる。今日では、あるのか、無いのか、決定して居らない、受身の位置にあるから、落ちを尠なくする爲には、必要尠ないことゝ思ふても、つい餘計に述べて萬全を期することにもなるから、この點は豫め御斷りして置く。又特に明確に舊石器と認識せられ得る、所謂典形的とでも云ふた出土があるとばかり豫想も出來ない。從つて先づ舊石器と認む可きか否かと云ふ樣なものにも出會する場合もあり得ることを、豫め覺悟もして置かねばならない。そこに色々な問題を醸し得る樣な、これを舊石文化を立前として見れば、外周的な位置にある可きものに對しても、一通りは考慮して置く可きであるから、研究するにしても、常にこの點にも着意する必要がある。まして今日滿洲國や支那等、東洋に發見せられた所の、所謂舊石器なるもゝ中[7]には、更に吟味を必要とするものがある樣に思はれる。又特に其人工遺物上にも立派な典型的のものがあるのか否か、私は未だ直接研究したことが無いが、これ等を吟味するにも、吟味するだけの素養が必要であり、無條件で鵜呑にするのは、危險も伴ふことも在り得る。かく述べて居る私自身にもこの過ちを犯しても居る。(〔別註二〕參照) 而してこれ等が只今では、最も手近かにある舊石器である以上には、萬一にも比較資料だの範例等に使用するにしても、如上の點は考慮し、吟味して使用す可きものと考へる。

　これを要するに、茲に述ぶる所は、舊石文化が必然的に發見せられ得るか否か、及萬一これに直面した際にも備へると共に、根本に於て舊石文化それ自身の認識をより深くして、研究の端緒としたい爲である。

（［別註二］參照）、歐米では、舊石文化を概述した單行本が、可なりに多く且つ普及し、我が國にもヲスボン、アーブベリー等は、往々散見して居る。(4) 然るにこれ等は夫々個性はあるにしても概ね所謂概覽の範圍は越へては居らない。而してこれ等の目的とする所も、一通りの理解にあつて、專門的研究の域にまでは逹して居らない。從つて萬一にもこの程度の所謂舊石文化概說とでも云ふ可きものを讀了したからとて、決して舊石文化の內容深く會得したとは申されない。この程度の了解を以て、直に舊石文化の實際に遭遇して、兎に角、舊石研究專門家と相伍して、研究して行く場合に、色々の不都合や不足が起るまいか。これは私自身にも貧しい體驗ではあるが、嘗て味ふても居る。(5) 從つて舊石文化に直面を豫期して、豫めこれに備へる爲であるなれば、從來多く見て居る概論の程度をより踏み越へて研究を行ふことが必要と考へる。勿論舊石專門家として一生をこれに捧げる樣な深い研究を意味するのではない。舊石認識に對する必要の最低限に於て、萬一にも其事實に出會した際、研究の緒口となれば足るのであり、これを狙ふて本文を草しつゝある。これとて決して故意に舊石文化を難解のものとする樣な、考は毛頭ない。さりとて今述べた樣な、誤解でも起りはせぬかとの老婆心によつて、事實は事實として、舊石文化の內容を少しでも明にして、認識に資したい考に外ならない。

三　本論の構成に就て

本論に於て述べんとする所は、獨り存否論そのものゝみではない。萬一に舊石器らしき發見に際し、これを舊石器と認む可きか否かの判定資料たらしむる目的であるから、其事實に臨み、各種各樣な場合でも、手掛りにな

に研究すべきものと考へる。勿論この祖原文化研究と、今こゝに述べようとする我日本島に於ける舊石存否論とは、自づと其規模を異にし、寧ろこの舊石存否論の如きは、前者に包含せらる可きものではあるが、今回は單に、直接舊石存否研究の一資料とし、且つは將來に於ける我祖原文化研究に對する一端緒ともと思い本文を草した次第である。

更に從來に於ける我が舊石存否論を見ると、不幸にして研究の徹底を缺くものが多い。單なる功名心に驅られて調査を行ふの如き、淺薄なるものは別として、單純な考へから、確たる學術的研究も行はないで、粗造石器等から、これを舊石器として發表を見る樣なものが無いのではない。[三] 中には眞面目な研究をなして居るものゝ、研究不足の結果、自分だけで舊石器と認識した樣なものがあり、この場合に對しては同情に價する。此の如き有り樣であるから、萬一にも舊石器らしき發見でもあつた場合に、研究上の一手掛りとして本文が、幸にして用立ち得ば本文を草した目的は充分に達し得たことになる。

二　舊石研究に就て

私は本著に於て縷々開陳する所以は、一般の舊石研究を阻む意志は毛頭ない。否、研究者の一人でも多からんことを衷希より希望して居るものである。又史前學者としては、其出土の有無に拘はらず一通り理解して居つて欲しい。只萬一にも踏み違つて舊石文化を誤認して欲しくない爲に、かく僭越を省す、こゝに多くを開陳して居るので此點は、豫め諸者の了解を得て置き度と考へる。特に舊石文化に關した邦文研究は殆んどないに拘はらず

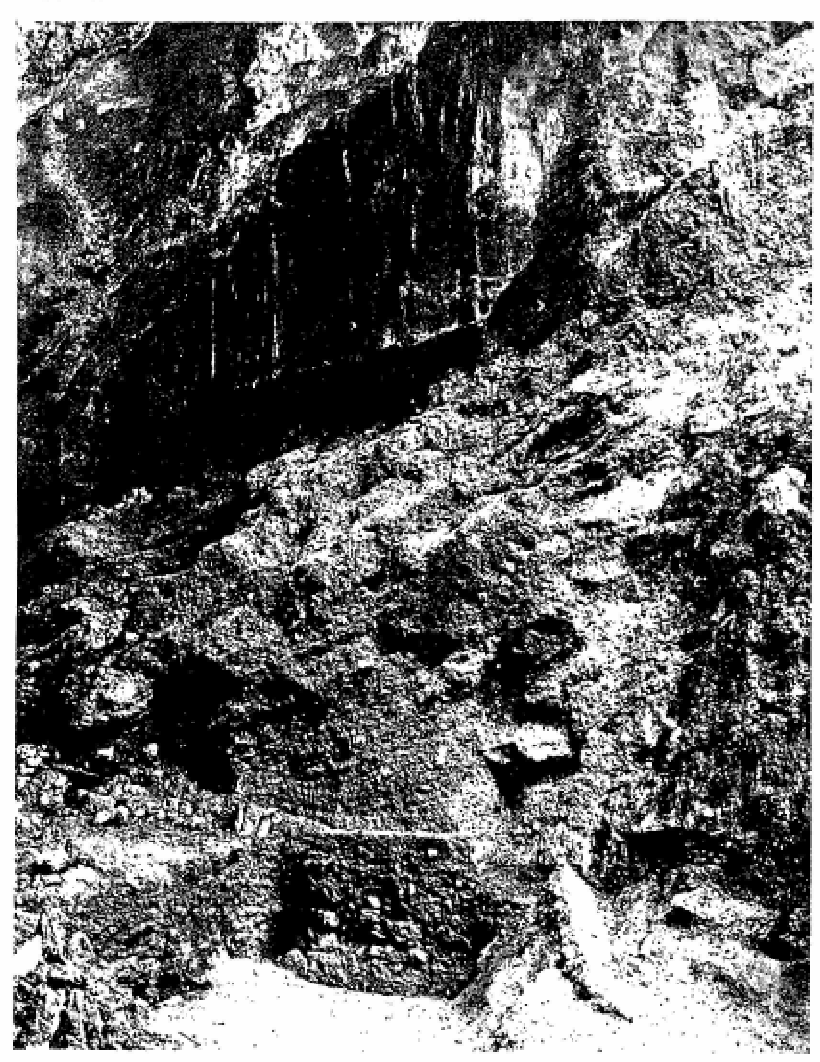
日本舊石文化存否研究

大山柏

其一　一般

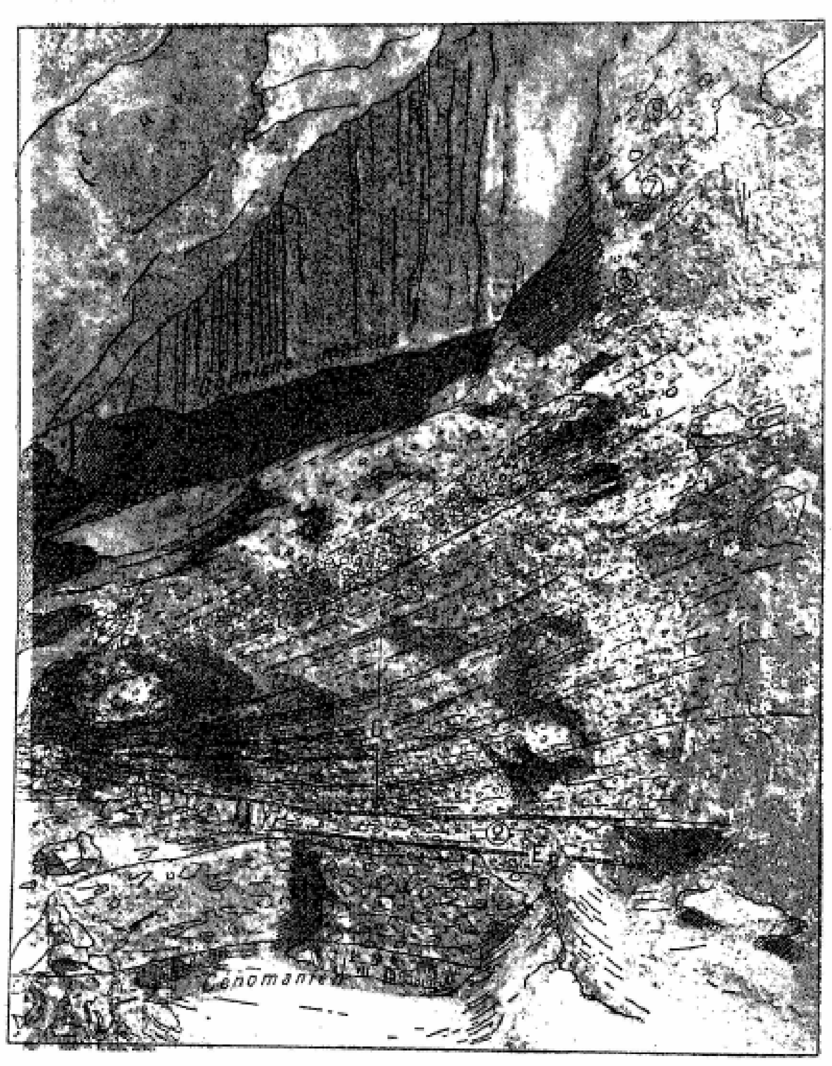
一　はしがき

從來より我が日本諸島[1]に發見せられて居る石器時代の文化は、其悉くが新石文化以降に屬することは、周知の事實である。時偶、それ以外に、主として舊石文化の發見の報は皆無では無いけれども、これが我が學界に齊しく認められて、定論に到達した樣な、有力なる發見報告は未だ聞いて居らない。從つて此種疑い存する程度のものはあるにしても、確實とは申されない。然るに最近に於ける一部我學界の傾向には、獨り我內地に於ける舊石存否論を見るの外、廣く舊石文化研究に歡心を持たれて來ても居る。更に歐洲方面などよりも、東洋方面への感興を引くものが多く、[2]且つ我國石器時代を知るに從つて、何故にかく新石文化のみ發見せらるゝのであるかに就ては、疑を起し、其甚しいのになると、我史前學界の信任問題にまで及ぼさんとするものがある。それは意に掛ける必要はないとしても、かねてより私は我內地の新石文化には、其何地で發生したかは、目下不明であるにしてもより古き文化階梯にある祖原文化が存す可きものであることを、論述して居るが、これに對しては、眞面目



佛伊國境グリマルディ大公洞の發掘

Grotte du Prince (Grimaldi) (nach Boule (L, 5))



弗伊國境グリマルヂイ大公洞の發掘

Grotte du Prince (Grimaldi) (nach Boule (L. 5))

目次

插圖目次

其六 遺物學的研究

其五　發掘及び出土の研究

其四　遺跡學的研究

目次

其三 姉妹學的研究

目次

其一　一般

其二　舊石文化の文化相

大山柏著

日本舊石文化存否研究

史前學會刊行

史前學雜誌
第四卷第五・六代冊

日本舊石文化存否研究

大山柏

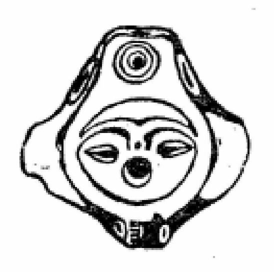
Jahresbericht

der

Japanischen Praehistorie

(SHIZENGAKU-NEMPO)

1931



3.Jahrgang

Tokio

Janual 1932

Japanische praehistorische Gesellschaft

(SHIZENGAKU-KWAI)

9. Onden Aoyama Tokio

Satzungen der Gesellschaft.

1. Der Name der Gesellschaft ist "Shizengaku-Kwai" (Praehistorische Gesellschaft)
2. Der Zweck der Gesellschaft ist das Studium der Praehistorie und ihrer Grenzgebiete und dessen Popularisierung
3. Die Tätigkeit der Gesellschaft erstreckt sich auf
   A Herausgabe kleiner Mitteilungen und Schriften
   B Herausgabe der Shizengaku-Zasshi (Zeitschrift für Praehistorie) (Zweimonatlich) und des Jahresberichts.
   C Veranstaltung von Forschungs-und Studienreisen
   D Veranstaltung von Vorträgen und Ausstellungen
4. Mitglieder
   Die Mitgliedschaft wird erworben durch jährliche Vorauszahlung eines Beitrags von 5 Yen. Personen welche einen einmaligen Beitrag von 200 Yen oder mehr zahlen, werden lebenslängliche Mitglieder. Personen welche sich um die Gesellschaft besonders verdicnt gemacht haben, können Ehrenmitglieder werden und haben damit die Stellung der lebenslänglichen Mitglieder
5. Die Mitglieder erhalten die Zeitschrift und den Jahresbericht frei, jedoch wird für Zusendung nach dem Ausland das Porto berechnet
6. Rechte der Mitglieder
   Die Mitglieder haben das Recht, die Einrichtungen des Ohyama Instituts für Praehistorie zu benutzen
   Die Arbeiten der Mitglieder sollen in der Praehistorischen Zeitschrift veröffentlicht werden
   Ferner haben die Mitglieder das Recht, an den Forschungs- und Studienreisen der Gesellschaft teil zu nehmen, die Vorträgen und Ausstellungen zu besuchen, sowie die Sammlungen und die Bibliothek der Gesellschaft zu benutzen
7. Ein aus mehreren Mitgliedern, bestehender Vorstand führt die Geschäfte der Gesellschaft
8. Wenn es sich als notwendig herausstellt, können diese Satzungen später geändert werden
9. Das Büro der Gesellschaft befindet sich:

   9, Onden Aoyama Tokio
   Ohyama Institut für Praehistorie
   (Ohyama Shizengaku-Kenkyujo)

für den Vorstand

Fürst Kashiwa Ohyama — Suco Sugiyama
Isamu Kohno — Kingo Tazawa
Mitsuji Miyasaka

Abhandlungen

der

Japanische praehistorische Gesellschaft

auf

Europäische Srpache

1929. Kashiwa Ohyama

Resume des Ausgrabungsberichts über die Muschelhaufengruppe Kaizuka beim Dorf Yoshibumi, Provinz Chiba.

Præhis. Zeitschr. Bd, I, No. 5, S. 1—4.

1930. Chiyomatsu Ishikawa

Professor Edward Sylvester Morse.

ibid. Bd. II, No. 1, S. E. 1—E. 3.

Kashiwa Ohyama

Denkmal beim Muschelhaufen Ohmori zum Gedächtnis an Prof. Edward S. Morse.

ibid, S. E. 4—E. 8.

Letter from the Family of Late Prof. E. S. Morse.

ibid, S. E. 9.

Kashiwa Ohyama

Korekawa-Funde, vom Korekawa, einer charakteristischen Station von Kame-ga-oka Typus der Nord-Ost Jomon-Kultur.

ibid, No. 4, S. E. 11—E. 41.

Mitsuji Miyasaka

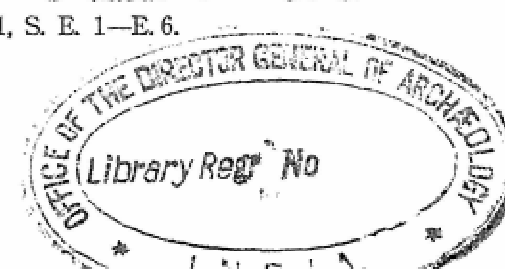
Le gisement préhistorique d'Ichioji prés de Korekawa (Préfecture d'Aomori). (Résumé de l'étude de Mr. Miyasaka) (texte japonais, p. 1 à 20) par M. Haguenauer, pensionnaire de la Maison Franco-japonaise.)

ibid, No. 6, S. E. 43—E. 49.

1931. Kiyoyuki Higuchi

Resume über die neu gefundenen Muschelhaufen Mori (森) unweit von Takada (高田), Prov. Bungo (豐後), Kyushu (九州),

ibid, Bd. III, No. 1, S. E. 1—E. 6.



題目	著者	掲載誌	巻	號
京畿道高陽郡國玗峰の遺蹟に就て	橫山將三郎	史蹟名勝天然紀念物	六	一一
南滿洲石器時代土器に關する二三の事實について	樋口清之	考古學雜誌	二一	一
直良氏播磨發見の所謂舊石器時代の石器に就いて	鳥居龍藏	上代文化		六
南滿洲石器時代石斧の遺物型態學的研究	樋口清之	同		同
山東省黃縣龍口附近貝塚に就いて	駒井和愛	東方學報	東京	一
考古圖編　第五輯	東京帝國大學文學部考古學研究室編		單行本	
マグレモージアン文化概說	大山柏	史前學雜誌	三	二·三合
佛領印度支那の石器時代 一、ソムロンセンとロングプラオの史前遺蹟 二、ロングソン及びテウエンカン附近の史前遺蹟	アグノーエル譯述	同	同	四·五
一九二九年に於けるソビエット露西亞の考古學的調査	B. Arendt 池上啓介抄譯	同	同	同
擇捉島東海岸發見の骨牙器	谷敬一	同	同	四

題目	著者	誌名	巻	號
土器成形上に於ける轆轤の意義	島田貞彦	考古學雜誌	二一	六
飛行機と考古學	森本六爾	考古學	二	二

（六）

題目	著者	誌名	巻	號
朝鮮釜山村東萊に於ける甕棺發掘	森本六爾	考古學	二	一
慶尙北道達城郡達西面古墳調査報告	野守健 小泉顯夫	單行本		
高句麗時代の遺跡（圖版）	關野貞	同		
慶州金鈴塚飾履塚發掘調査報告（圖版）	梅原末治	同		

（七）

題目	著者	誌名	巻	號
支那古代の瓶形土器に就いて	駒井和愛	人類學雜誌	四六	一
ウインスロープ氏所藏の支那古代の遺物	梅原末治	歷史と地理	二七	一
支那の古鏡鑑に關する二三の新資料	梅原末治	同	二八	三
所謂桑銅器に就いて	梅原末治	史學	一〇	三
支那南北朝の陶器に就いて	原田淑人	考古學雜誌	二一	一
六朝の石枕	濱田耕作	同	同	二
東洋古代の硝子と釉	中尾万三	同	同	三・五
支那出土の青銅刀子について 特にその柄と柄形銅器との類似	榧本龜生	同	同	四
北支那發見の一種の銅容器と其の性質	梅原末治	東方學報	京都	一
工藝史上より見たる漢様式と銅鏡	長廣敏雄	同	同	同
支那古代の銅利器に就いて	梅原末治	同	同	二
玉璧考	水野清一	同	同	同
師比並に郭落帶に就きて	江上波夫	東方學報	東京	二
印度支那發見の漢鏡 ―其の資料集―	森本六爾	考古學	二	五・六合
漢三國六朝紀年鏡集錄	梅原末治	單行本		
樂浪 ―五官掾王旴の墳墓―	原田淑人 田澤金吾	同		

（八）

題目	著者	誌名	巻	號
續古人類學閑話	松本彥七郎	人類學雜誌	四六	三
アルタイの古代文化 エム・ペー・グリヤズノフ	平竹傳三郎譯	同	同	三・七
播磨國西八木海岸洪積層中發見の人類遺品	直良信夫	同	同	五・六
天津北疆博物館に代表されし新石器時代の遺蹟	エ・リサン 松本信廣譯	同	同	二・三・四
蒙古多倫淖爾に於ける新石器時代の遺蹟	小牧實繁 水野清一 江上波夫 駒井和愛	同	同	八
張家口元寶山の洞穴遺蹟	小牧實繁 水野清一 江上波夫 駒井和愛	同	同	九
南滿洲のドルメンと其の方位	山本正 久原市次	歷史と地理	二八	二
アルタイ地方に於ける考古學上の新發見 ―露西亞博物館員の活動―	梅原末治	史學	一〇	一
巨石文化と洞窟文化 ―佛蘭西石器時代遺跡探訪記―	松本芳夫	史學	一〇	三
臺灣の先史時代遺跡の概要	宮本延人	同	同	四

上代墳墓の社會性 ——上代墳墓への一私考 その一—— 淺田芳郎 考古學 二 三
埴輪と御神寶 後藤守一 同 同 四
埴輪及び土師部に關する上代文獻の考察(下) 中島利一郎 同 同 四
埴輪の始源及びその生產に關する問題 永倉松男 同 同 同
甕棺埴輪私考 島田貞彦 同 同 同
埴輪への二つの發書 ——上代墳墓私考 其二—— 淺田芳郎 同 同 同
埴輪圓筒の合口棺(下) 直良信夫 同 同 同
有鰭埴輪圓筒 太田陸郎 同 同 同
人物の繪畫ある埴輪圓筒 倉光清之 同 同 同
奈良縣多村の圓筒埴輪 島本一 同 同 同
美濃發見の埴輪 林魁一 同 同 同
北九州に於ける埴輪 島田寅次郎 同 同 同
　豐前國京都郡小波瀨村興原御所山の圓筒
　同　國糸島郡周船寺村丸隈山古墳の圓筒
　同　國筑紫郡那珂村東光寺古墳の圓筒
　筑後國八女郡長峰村岩戸山古墳の圓筒と土偶
　同　國三潴郡大善寺村權現塚の土偶と圓筒
　同　國八女郡北山村矢部川沿岸古墳の土偶
　埴輪に關する管見
顏面に箆書ある埴輪 相川龍雄 同 同 同
伊豫荏原發見の埴輪窯址 柳原多美雄 同 同 同

Poor Memorandum 淺田芳郎 考古學 二 五・六合
上古時代の住宅 後藤守一 東京博物館講演集
埴輪に關する二三の考察 濱田耕作 同
古墳 島田貞彦 日本考古圖錄大成 一三
埴輪集成(一—五) 帝室博物館編 單行本
日本上代に於ける轆轤の起源とその使用 瀧川政次郎 思想 一一 九
朝鮮及び內地發見の耳飾に就いて 藤田亮策 日本文化叢考
東八代郡右左口村大丸山古墳 / 同　郡豐富村大塚古墳 仁科義男 山梨縣史蹟調查報告別冊
裝飾付𤭯の一新例 樋口清之 史前學雜誌 三 五

（四）

多度の貝塚と經塚 大西源一 史蹟名勝天然記念物 六 一・二
柚井貝塚發見の木履 鈴木敏雄 考古學雜誌 二一 五
本邦出土の唐式鏡 後藤守一 同 同 一二
奈良時代に於ける一女性の墳墓 森本六爾 考古學 二 一
奈良時代に於ける墳墓の一例 和田千吉 同 同 三
但馬出石神社近傍發見藏骨器 太田陸郎・淺田芳郎 同 同 同
佛心寺境內の火葬墳墓 淺田芳郎 同 同 五・六合
指定史蹟拂田柵址 上田三平 單行本

（五）

山城幡枝の土器 島田貞彦 考古學雜誌 二一 三

昭和六年　考古學論文并報告資料

(一)

石器時代の土製猿	八幡一郎	人類學雜誌	四六	一
磨製石斧の形態と石質との關係に就て	赤堀英三	同	同	三
打製石鏃の地域的差異	赤堀英三	同	同	五
磨製石斧の石質に就いて	八幡一郎	同	同	同
岩手縣二戸郡一戸町石器時代遺跡に就て	菊地山哉	同	同	同
先史考古學に於ける分類	八幡一郎	同	同	九
東京府下池上町久ヶ原庄仙出土の石器時代遺物	齋藤房太郎	同	同	同
遺跡の分布と遺物の關係	赤堀英三 勿那將愛	同	同	一一
先史時代の交通	上田三平	歷史地理	五七	四
上總國小櫃川流域に於ける石器時代遺蹟に就て	横山將三郎	史蹟名勝天然記念物	六	一
山ノ口原始時代住居阯	河井田政青	同	同	五
相模國谷ヶ原石器時代住居阯群	石野瑛	同	同	一〇
甲斐國穂坂村先史時代の調査	仁科義男	同	同	一一
三河國幡豆郡西尾貝塚發見の注口土器に就いて	吉田富夫	考古學雜誌	二一	四
飛騨國初發見の土偶と注口土器に就て	笠原烏丸	同	同	八
神奈川縣帷子川上流の先史遺跡	鈴木一	上代文化		四・五合
羽前國高森の先史遺物	神林淳雄	同		六
石器時代勾玉の研究	兩角守一	考古學	二	三、五・六合

甲斐先史考古學資料	仁科義男	考古學	二	三
土器の民族的時空的相異(下)	石野瑛	同	同	同
土器石器の分類に就て	山村肯作	同	同	五・六合
繩紋土器	杉山壽榮男	日本考古圖錄大成		一四
アイヌ人と其史前	米村喜男衛	單行本		
北都留郡大原村及七保村先史時代 北巨摩郡日野春村先史時代	仁科義男	山梨縣史蹟調査報告別冊		
大分縣西國東郡河内村森貝塚の研究	樋口清之	史前學雜誌	三	一
リサン師と姥山	大山柏 甲野勇	同	同	同
北海道石器時代遺物發見地名表	谷敬一	同	同	同
宮崎縣梅北村發見の遺物	大山柏	同	同	同
松田蜂氏寄贈の石製裝飾品	甲野勇	同	同	同
常陸國麻生大宮臺貝塚調査報告	池上啓介	同	同	四
武藏國野川石器時代遺跡出土の遺物	池上啓介	同	同	同
武藏國菊名宮谷貝塚調査豫報	松下胤信	同	同	同
羽後國石名館出土の木製品	武藤鐵城	同	同	同
繩紋ある土器片	中根君郎	同	同	同
關東に於ける奥羽薄手式土器(上)	大場磐雄	同	同	五
下總香取郡神里村の貝塚	大山柏	同	同	同
霞ケ浦行	田澤金吾	同	同	同

遺　跡　記　號　例

地上標式の一例

種別		記號
貝塚	鹹水	▲
	淡水	[symbol]
	鹹淡	[symbol]
	未調査	△
住居跡	竪穴	[symbol]
	平地住居	[symbol]
	洞窟	[symbol]
單なる遺物發見地		×
繩紋式を示す場合		↑
彌生式を示す場合		＋

備　考

1 本標式は私共研究所で主として遺跡を標式する爲に作出したもので、會員諸君の御參考までに揭出したのであります。
今後私共ではこれによつて標式してまいりますから、本標式と御對照を御願します。

2 標式は猶不足のものもありますが、漸次增補を加へて行きたいと思ひます。

3 標式の樣式は必ずしも、本標式のみとも限らず、更に色々の考案もあることゝ思はれますから、これ等に對し、諸君の御考案を御知らせ下さい。

本名	略號
科學知識	科知
考古學會雜誌	考會雜
考古界	考古界
考古學研究	考研
Korrespondenz Blatt dër deutschen Gesellsochaft für Anthropologie, Ethnologie und Urgeschichte.	Korr-Blatt d. deutschen Ges. f. Anthr Ethnol. u. Urgeschichte.
L	
L'Anthropologie.	Anthr.
M	
民俗藝術	民藝
Man.	Man.
Mannus.	Mannus.
Memoires de la Société Royale des Antiquaires der Nord.	Men. d. l. Soc. Roy. d. Antiq. d. Nord.
Mitteilungen der Anthropologie. Gesellschaft in Wien.	Mitt. d. Anthr. Ges. Wien.
民俗學	民俗學
民族	民族
N	
日本研究	日研
Natural History.	Nat. His.
P	
Praehistorische Zeitschrift.	Praehis. Zeitschr.

本名	略號
R	
歷史地理	歷地
歷史と地理	歷と地
Revue anthropologique.	Rev. d'anthr.
Revue mensuelle de l'Ecrle d'anthropologie de Paois.	Rev. mens. d. Ecol. anthr. d. Paris.
S	
社會學雜誌	社雜
宗教研究	宗研
史學	史學
信濃考古學會誌	信考
埼玉史談	埼史
史學雜誌	史雜
史蹟名勝天然紀念物	史蹟名
史前學雜誌	史前雜
史苑	史苑
史林	史林
T	
東北文化研究	東文
東洋學藝雜誌	東學誌
東洋學報	東學報
Z	
Zeitschrift für Ethnologie.	Zeitschr. f. Etbnol.

雜誌名略稱一覽 （再錄）

1 論文中に屢々引用せらるゝ雜誌名を、一々記載する煩を避け、或は本名未詳の略稱等を統一する爲、本覽を設けた。便利であるなれば、御使用を願ふ。

2 雜誌の種類も、手近にあり、且つ比較的多く引用せらるゝものと考へらるゝ範圍に止めた。特に外國雜誌に於て然りである。

3 本覽は、本年度の試みに過ぎない。次年度に於て、改正增補も期して居る。

本名	略號
A	
American Anthropologist.	Americ. Anthr.
Aarböger for Nordisk Oldkyndighed og historie.	Aarbög. f. Nord. Old. o. His.
B	
Bulletius ef Mémoires de la Société D'Anthropologie.	Bull. et mém. Soc. d'anthr.
C	
地理學評論	地評
地質學諸誌	地質
中央史壇	中央
D	
動物學諸誌	動物
E	
Eurasia Septentrionalis Antiqua.	Euras. Sept. Antiq.
G	
現代の科學	現科
J	
上毛及上毛人	上毛
人類學雜誌	人類
上代文化	上文
人性	人性
Journal of the Royal Anthropological Institute of Great Britain and Irland.	Jour. Anthr Inst.
K	
考古學雜誌	考雜
國學院雜誌	國雜
考古學	考古學

東京市麻布區富士見町二八　渡邊泰三
東京市本郷區駒込林町一　別所弘三方　渡邊鶴松

Ｙ之部

東京市芝區三田綱町一　山口　昌
横濱市中區本牧町箕輪下三九二　山木磐彥
仙臺市琵琶首町六八　武內氏方　山本桝藏
京都市中立賣通烏丸西　山本行範
長崎縣南高來郡加津佐村　山崎醫院　山崎重長
仙臺市東北帝國大學解剖學教室　山內清男
東京市外代々木山谷二八三　柳澤保承
東京市外砧村成城學園前　柳田國男
秋田市川口下裏町　鑓野目條藏
長野縣諏訪郡永明村　矢崎源藏
東京市外代々木富ヶ谷一四五三　矢崎芳夫
長野縣屋代中學校內　安間　清
東京市外岩淵町下村一四三三　八幡一郎
東京市芝區三田小山町八　横山　重
東京市外世田ヶ谷豪德寺前一〇九五　横山健堂
朝鮮京城府東四軒町五〇　横山將三郎
北海道北見國網走町　米村喜男衛
奈良縣高市郡金橋尋常高等小學校　吉田宇太郎
兵庫縣西宮市社家町一　吉井太郎
横濱市神奈川區神奈川通六丁目一八一　吉川菊藏
東京市麻布區今井町三　瀨戶口藤吉方　吉川長雄
福岡縣築上郡友枝村　吉村鐵臣
東京市外澁谷町國學院大學　吉成安親
東京市本郷區駒込蓬萊町五八淸林寺內　吉野嚴成
長野縣上伊那郡赤穗町下平　吉澤正男
東京市牛込區神樂町二ノ二五　依田雄甫

合計　二九一名　（退會者四三名、死亡者四名　新入者二六名）

横濱市鶴見區東寺尾町一五一二　多田純二
東京市外杉並町阿佐ヶ谷七九六　高橋一凱
東京市外東調布町田園都市第八四號　高橋正人
東京市下谷區上野帝室博物館　高橋直一
群馬縣前橋市紅雲町　高橋照之助
熊本縣鹿本郡山東村　高群清太
茨城縣新治郡石岡實科高等女學校　高野修正
東京市外落合町上落合四五六　高島徳三郎
東京市外千駄ヶ谷町字穏田九大山研究所内　竹下次作
神戸市外西灘村上野八二　田村文雄
東京市牛込區矢來町九二　田村壯次郎
東京府南葛飾郡金町一〇七四　田邊孝次
石川縣金澤市騎兵第九聯隊　田中春雄
北海道函館市谷地頭町八六　谷　徹一
千葉縣君津郡小絲村根本　谷中國樹
東京市外井荻町上荻窪五八六　田澤金吾
兵庫縣西宮市鞍掛町七九　辰馬悦藏
東京市外千駄ヶ谷穏田八　田原鎮雄
仙臺市　東北帝國大學附屬圖書館
東京市外大森山王二、八三二　徳富武雄
臺灣臺北市東門町五條一一三　富田省吾
大阪市港區八雲町四丁目三一　遠山滐雄
高田市高田病院　外山哲二郎
千葉縣立千葉高等女學校　豐澤藤一郎
長崎市本紙屋町五八　津田繁二
東京市牛込區市ヶ谷谷町一一二　塚越卯太郎
東京市芝區白金三光町一一九　塚本壽一
東京市外代々木本村八三七　筑波藤麿
東京市赤坂區高樹町三　岡本方　恒松安夫

U之部

京都市左京區下鴨中川原町三四　梅原末治
東京府荏原郡世田ヶ谷町字羽根木一七一五　宇宿　捷
東京市外大森木原山一六一八　上田恭輔
香川縣香川郡安原村　上原準一
臺灣花蓮港高等女學校　上原景爾
大阪市北區中之島三丁目　終身會員　上野精一

W之部

東京市小石川區林町九五　和田千吉
京都市左京區高野清水町二六　和食　和
福島縣雙葉郡請戸村請戸　渡部晴雄

東京市外世田ヶ谷町代田五〇七　齋田平太郎
東京市外千駄ヶ谷町五〇　神代方　齋藤　忠
東京市外杉並町馬橋二九八　齋藤昜太郎
東京市外世田ヶ谷町代田鶴岡六三二　齋藤　弘
東京市四谷區愛住町一六　齋藤庄太郎
高田市高田師範學校　齋藤秀平
東京市本郷區元町二ノ六六第一清輝館　坂口保治
東京市小石川區高田老松町四三　酒井忠一
新潟縣西頸城郡大和川村　榊　道造
臺灣臺中能高郡埔里街五二　坂元軍二
奈良縣高市郡眞菅村大字曾我眞菅小學校内　﨑山卯左衛門
Köln, Hansaring 32 a Deutschland　Dr. Alfred Salmony
兵庫縣津名郡廣石村　佐野淡一
東京市外澁谷町國學院大學　佐野又治
青森市榮町　佐々木新七
横濱市神奈川區青木町神奈川高等女學校　佐藤善治郎
東京市外澁谷町國學院大學　關口竹治
東京市外上練馬村東向山四一　柴田常惠
東京市牛込區市ヶ谷仲之町三八　志賀三家
東京市外淀橋町柏木三四八　鹿野忠雄
京都市下立賣通西洞院西入　島田貞彥
奈良縣高市郡八木町新道　島本一
東京市外池袋五〇一　島村孝三郎
東京市外世田ヶ谷町池尻一五五　下村作次郎
大阪市住吉區駒川町八丁目一七　下村正信
東京府小金井村一四二八　品川潤(ジュン)
東京市本郷區根津須賀町七梅園館内　新海功
三重縣宇治山田市古市町　篠田良二
東京市外世田ヶ谷町若林九五　白井長助
靜岡縣小笠郡土方村入山瀬　白井光男
仙臺市東北帝國大學理學部地質古生物學教室　曾根廣
東京市外碑衾町碑文谷一二七　鈴木一
三重縣津市縣立女學校　鈴木敏雄
埼玉縣秩父郡白川村三峰口驛前　菅原一
東京市四谷區南寺町五〇　菅沼秀助
東京市麻布區富士見町五三　菱田駒喜方　菅崎三文
東京市牛込區河田町一一　杉山壽榮男
東京市日本橋區小舟町三ノ一　杉原莊介
東京市外砧村喜多見一〇四六　角田文衞
横濱市中區南太田町太田小學校　砂川孝平

T之部

東京市外澁谷町國學院大學　中川德治

東京市神田區三崎町二ノ九東京齒科專門學校　中井武一郎

奈良縣吉野郡下市町大字下市　中村幸之

東京市外大井町四七三八　中根君郎

東京市本郷區西片町一〇ろノ九號　中澤澄男

大阪市大阪每日新聞社　中島秀雄

長野縣埴科郡坂城町農蠶學校　中島惣左衛門

Fondation Japanaise cite Universitaize 3 Boulverd Jourdan Paris 14e　中谷治宇二郎

愛媛縣北宇和郡吉田町　長山源雄

福岡市荒戸町四　中山平次郎

兵庫縣明石市大藏谷山崎　直良信夫

東京市芝區田町二ノ一八川崎鐵網工場內　那須寧彌

京都市室町通中立賣下ル　西村保太郎

東京市小石川區小日向臺町一ノ七五　新渡戸稻造

新潟市新潟醫科大學　乃木惇

東京市外東中野九二六　野間淸六

東京市赤坂區氷川町三四　額田年

O之部

東京市外砧村成城學園前　小原一夫

橫濱市神奈川區北幸町三四九七　尾形順一郎

岡山市醫科大學衛生學教室　緒方益雄

東京市外澁谷町伊達八五　小川晃平

朝鮮釜山府釜山中學校　及川民次郎

神戸市楠町七丁目神戸日々新聞社　岡田定信

東京市外澁谷町字北谷四三　岡田義智

神戸市荒田町四ノ五六　小野楠雄

東京市外武藏野町吉祥寺一七六ノ三號　大場磐雄

東京市小石川區小日向臺町二丁目一六　大口喜六

長野縣埴科郡松代町　大平喜間多

和歌山縣粉河中學校　大地原寬龍

茨城縣北相馬郡文間村字大房　大野一郎

京都市伏見桃山大谷邸三夜莊　大谷光瑞

東京市本郷區森川町七九　太田天洋

東京市麴町區有樂町東京日々新聞社　大塚虎雄

東京帝國大學理學部地質學敎室　大塚彌之助

岩手縣江刺郡岩谷堂町　小田島祿郎

神奈川縣小田原町本町　尾崎亮司

東京市外千駄ヶ谷町字穏田九　大山柏方　大山梓

東京市外千駄ヶ谷町字穏田九　特別幹事　大山柏

S之部

東京市芝區三田慶應義塾大學寄宿舍
東京市外澁谷町國學院大學
栃木縣足利市通五丁目三、一九五
東京市牛込區矢來町
東京市麴町區有樂町東京日々新聞社
東京市淺草區馬道町八ノ一
臺灣臺北臺灣博物館
東京市芝區白金今里町三九
埼玉縣北足立郡浦和町鯛ヶ窪
東京市本鄕區曙町一六
富山縣立礪波中學校
大阪市東區高麗橋二丁目　松下幸四郎方
東京市小石川區丸山町一一
東京市本鄕區駒込神明町五四
東京市外澁谷町國學院大學
石川縣江沼郡大聖寺町寺町一
富山縣氷見郡氷見町上伊勢
兵庫縣川邊郡川西町加茂
京都市馬町通東山西入
東京市外高井戸町大宮前二二六
東京市外千駄ヶ谷八三七

前原光雄　東京市外西巣鴨町宮仲二五七四
丸茂武重　東京市本鄕區彌生町三　香取方
丸山瓦全　中華民國、北京東華門、內、北河沿五六號
正木直彥　東京市外大崎町下大崎二四九　藤田藤吉方
增田　東京市外馬込町原丸三八五〇
松田蟒　新潟縣高田市横町一四
松倉鐵藏　東京市外澁谷町國學院大學
松本信廣　岐阜縣大垣市東長町一〇四一ノ一
松本與三郎　京都市東洞院丸太町南入
松村瞭　長野縣諏訪郡上諏訪町
松承安道　大阪府泉北郡濱寺公園羽衣松傍　終身會員
松下胤信　福岡市春吉三軒屋四三三
明治聖德記念學會　宮城縣石卷町住吉町
水谷泰夫　横濱市中區南太田町一七五五
三木文雄　横濱市中區南太田町一七五五　村田重義方
三森定男　秋田縣河邊郡豐岩村
湊嘉平次　秋田縣仙北郡神大村小松村木町
宮川雄逸
三宅宗悅

N之部

宮坂光次　東京市外世田ヶ谷町若林一一
宮島貞亮　横濱市神奈川區青木町東輕井澤一、八五七

宮下孝雄
宮內悅藏
Dr. Herbert Mueller
桃井秀治郎
森潤三郎
森成麟造
森貞次郎
森俊雄
守屋考藏
兩角守一
本山彥一
許山道磨
毛利總七郎
村田重義
村田義夫
武藤一郎
武藤鐵城
內藤政光
中川直亮

海法　仙臺市本柳町七一　佐藤彰方
加藤要　函館市會所町六二
賀古明　東京市神田區小川町五〇
神林淳雄　東京市外澁谷町國學院大學
神出徳明　大阪府堺市三國ヶ丘四七〇反正帝陵前通東端
神山美太郎　栃木縣足利郡御厨町福居五三三
金關丈夫　京都市帝國大學醫學部解剖學教室
金高勘次　京都市木津屋橋通リ堀川東入
神崎正　青森縣弘前市弘前女學校
神田重夫　横濱市神奈川區青木町輕井澤一三八
關東廳圖書館　關東州旅順市松村町二〇
川合貞一　東京市外大崎町桐ヶ谷向原一一二
川村眞一　東京市牛込區拂方町一三
桑野藤二郎　石川縣金澤市高等工業學校機械工學科
菊池山哉　東京市深川區東平井町一
菊池三顯　宮城縣宮城郡多賀城村市川
木村善吉　東京市小石川區音羽町五丁目一七
喜田貞吉　東京市小石川區川青柳町一〇
桐生和夫　秋田縣秋田市中龜ノ丁上丁一三
清野謙次　京都市左京區田中關田町二三
Dr. Herbert Kühn　Institut für Vorgeschichte Köln, Ubierring 11. Deutschland.

桑山龍進　東京市芝區三田豊岡町三〇
小林胖正　東京市外澁谷永住町二七
小林林之助　大阪市西區小堀江上通四丁目
小林行雄　神戸市平野雪御所町一五二
小堀治平　東京府下巣鴨町二ノ二四
小金井一郎　東京市外小岩町下小岩四四八
小金井良精　東京市本郷區駒込曙町一六
小牧實繁　京都市左京區北白川小倉町五〇
小島勇之助　終身會員　京都市上京區寺町廣小路上
國學院大學圖書館　東京市外澁谷町
甲野勇　東京市牛込區横寺町五七
紅野芳雄　兵庫縣西宮市鞍掛町七
久米本幸種　東京市外澁谷町國學院大學
九島勝太郎　東京市外野方町下沼袋一九三
楠目勝俊　神戸市大塚町二丁目一六
栗山一夫　大阪市東淀川區中津南通四丁目二三　廣田方
倉本彦五郎　東京市外大井町五二八〇
栗山邦二　富山縣上新川郡大久保町
忽那將愛　京都市帝國大學醫學部解剖學教室

M之部

函館圖書館　北海道函館市
濱田耕作　京都市左京區田中野神町一八
羽田一成　山梨縣南都留郡福地村
原田博　大阪府堺市神明町西二丁一七
原田廣作　大阪市住吉區天王寺町一、二六五
原田久太郎　横濱市吉田町六二
橋本増吉　東京市外井荻町下荻窪三丁目四七
長谷部言人　仙臺市北六番市一二三
服部清五郎　東京市外北品川御殿山七一八　中村方
早川荘作　富山縣富山市清水町五八
林田芳太郎　滋賀縣彦根町勘定人町
林魁一　岐阜縣加茂郡太田町
林體　東京市芝區愛宕町慈惠會醫科大學解剖學教室
林良幹　愛知縣清洲町
樋口清之　東京市外代々木富ケ谷一五〇二
樋畑正太郎　東京市外大井町字水神下二一一五
平井庸一　東京市本郷區森川町一三六　梨本方
本田七郎　福島縣安積郡福良村中町
北條憲政　東京市神田區田代町二　中村方
細淵實象　埼玉縣北足立郡六辻村大字沼影
細尾榮一　和歌山縣西牟婁郡三栖村

I 之部

泉山岩次郎　青森縣八戸町
池上敬介　東京市深川區冬木町一一　青山方
生沼豊彦　茨城縣西茨城郡笠間町
今井楢三　新潟縣長岡市殿町三丁目
今宮新　茨城縣新治郡美並村南根本
石淵三郎　富山市外稲荷三四
石田憲吾　岡山市南方鐵道官舎
石川千代松　東京市四谷區大番町一九
石川文彦　大阪府豊能郡麻田村大字麻田一七三一
石川武雄　東京市赤坂區青山南町一ノ五一
石野瑛　横濱市神奈川區岡野町一三一
石坂福治　長野縣埴科郡松代町六二九
伊丹信太郎　東京市麻布區龍土町五八
伊東信雄　仙臺市土樋一五四　渡邊方
伊藤富太郎　三重縣桑名郡七取村大字香取
岩井貞麿　東京市外杉並町字田端三二六

K 之部

貝塚保存會　千葉縣香取郡良文村貝塚區豊玉姫神社社務所内

史前學會々員名簿（昭和六年十二月卅一日）

A之部

東京市神田區駿河臺鈴木町二六日佛會館圖書係氣付　Haguenauer
群馬縣伊勢崎町西町　相川之賀
横須賀市公郷町二七九六　赤星直忠
京都市山科町厨子奥若林三五　明石國助
石川縣石川郡出城村字北安田　曉烏敏
東京府荏原郡玉川村奥澤四五八　荒井幸之
東京市芝區愛宕町慈惠會醫科大學解剖學教室　新井正治
横濱市鶴見區平安町一丁目五一　新井和臣
東京市外下目黒九六六　有賀智
京都市左京區北白川平井町二二　岡村馬市方　有光敎一
東京府荏原郡駒澤村大字上馬引澤八四　有坂鉊藏
東京市外南品川淺間臺　有阪與太郎
東京市本鄕區向ケ岡彌生町三　淺野長武
兵庫縣尾崎市竹谷町二丁目四七　淺野隆

D之部

岩手縣盛岡市内丸岩手醫學專門學校　大坊晉章
關東州大連市　大連圖書館
東京市麴町區下二番町四六　土肥慶藏

E之部

東京市外松澤村上松澤八七七　江上波夫
宮城縣石卷町裏町　遠藤源七

F之部

和歌山縣西牟婁郡串本町笹屋峰吉方　藤井誠一
長野縣上諏訪町本町　藤森榮一
朝鮮京城府景福宮朝鮮總督府博物館　藤田亮策
3 Square Montsouris, Paris.　藤田嗣治
横濱市關東學院中學部　福田正作
神戶市五番町二丁目二　福島義一
大阪市西成區南海道一ノ三五　船越政一郎方　船越章
東京市外吉祥寺一九〇一　布施安昌

G之部

東京市外杉並町阿佐ケ谷五二六　後藤守一

H之部

東京市外澁谷町國學院大學　樋口淸之

史前學會昭和六年度會計報告（昭和六年十二月三十一日〆切）

收入之部

總計　金一、四九四、一一錢也

內譯

一、前年度より繰越殘金　金　四九、五五錢也

一、昭和六年度會費納入合計二一〇人　金一、〇四四、〇〇錢也

內譯

一、昭和六年度分會費一八〇人分　金九〇〇、〇〇錢也

一、昭和六年度以外の分二三人分　金一二四、〇〇錢也

一、年額に充たざる分納のもの七人分　金　二〇、〇〇錢也

一、拔刷代金、寫眞代金等拂込五人分　金　三九、九九錢也

一、史前學研究所より補助金　金　三一五、〇〇錢也

一、雜誌、小報、パンフレット等賣上金　金　四五、五七錢也

支出之部

總計　金一、三八六、六一錢也

內譯

一、雜誌製作費　金　九五七、五七錢也

內譯

一、昭和五年度年報索引費　金　七九、三六錢也

一、第三卷第一號雜誌　金二四九、二三錢也

一、第三卷第二、三號雜誌　金二八四、二八錢也

一、第三卷第四號雜誌　金二〇二、八七錢也

一、第三卷第五號雜誌　金一四一、八三錢也

備考　本年度は以上の第三卷第五號までにて打切り決算しましたが昭和七年度に於て定期の第四卷第一乃至第六號の外第三卷別冊を含んで發行する豫定であります。

一、史前學會において拔刷、寫眞代金等未受領の分　金　三九、六一錢也

一、集金豫告端書其他諸印刷費　金　一五、五〇錢也

一、雜誌發送料郵便切手購入及通信費　金　一三一、〇四錢也

一、事務委託手當　金　二〇〇、〇〇錢也

一、振替貯金諸手數料　金　三二、九三錢也

一、諸雜費　金　九、九六錢也

差引殘額（次年度へ繰越金）　金　一〇七、五〇錢也

本年度から論說欄の次に、二段組の彙報欄（特に彙報と斷つてはない）を設けたが、前年報で御斷りした如く、肩の張らない報告等の爲に設けた所、大きに成績よく、色々の記事が掲載せられたのは、悅ばしいことではあるが、これが爲、返つて第一の論說欄が壓迫を受けたものか、一向振はなくなつたのは遺憾である。これが對策として、今後論說は、前年度には、凡て九ポイント組としたのを、再び五號活字に復活させて見たいと考へる。勿論場合により、論說輻輳等の際は、九ポにする等、兩者併用して、記事の緩急を緩和したいと考へ、これを本年末發行の分より實施して見ることを御斷りする。

資料欄も、相變らず發展とまで申し得ない。何卒筆まめに、重々御投稿を御願する。文獻欄も同樣である。

更に本年度、第五號よりは、餘白を利用した餘白錄を設けた所、存外、一部の好評を博したから、次年度も引續き、續け度と考へるが、これ亦、論說欄と彙報欄との相關々係の如く、資料欄との相關々係が生ず可きことは、相當注意して取扱ひ度とは、考へて居る。

六、パンフレツト・史前學年報等に就て

これ等も、引續き不振である。主要なる原因は、經濟上にある點は、遺憾に堪へない。會計報告でも、御覽の如く、缺損續きである。從つて、これ等の發展を妨げて居るのである。これは前述した如く、會員の増加にまたねばならない。

七、會合其他に就て

本年度も前年度の如く、何も特別な事業を行ふては居らない。これは一つに、史前學會の幹事の殆んどが、史前學研究所で研究して居り、史前學研究所としては、今回本年度最終號で發表を期し、只今準備中にある、東京灣沿岸地方の繩紋式石器時代の編年學的研究に對し、五年餘を費し、猶これが研究續行中であるので、自然とこの研究に追はれて、時の餘裕が無く、色々の研究會や會合の必要を思ひながらも、實施にまで立ち到らない、內容を告白して、寛容を願ふ次第である。

以上を以て、會務一般に對する報告として、會員諸君に報導すると共に、諸君よりの御敎示を待つものである。

幹事を代表して　大山　柏

前年報にも述べて居る如く、會員數に於ては最低五百名が標準である以上、こゝに二百餘名の不足の存する故これより生ずる經濟的の壓迫も大きく、考へて居つてもこれが爲實施し得ない多くが存するのであるから、本會をして充分發展せしめ、其使命をよく發揮せしむる爲には、會員增加が必須の要件である以上、會員諸君に於ても相互發展の爲、臨時隨所に新會員の誘導を御願する次第である。もし一會員にして、一名の新會員を誘引せらるゝに於ては、本會は忽ち六百餘名の優勢となり、引いて、史前學雜誌の增大は勿論、其他の諸事業を大に發展せしめ得ることゝなるのである。それ故、會員諸君、特に東京以外の地に於て、未だ本會存在に就ても、未知の方々に對して、入會方御勸誘を御願したいのである。これが爲、御迷惑とも思ふが、史前學會趣意書、並に入會申込書を同封して置くから、以上の趣示を御酌量の上、切角御活動を御願ひする。又趣意書等御入要の際は、遠慮なく御申越しあれば、直に御屆けもする。

四、幹事に就て

幹事に於ては、只今の所、前年度と變りがない。相變らず會務沈滯勝ちである所は、誠に汗顏の到りである。この幹事の人選に就ても、忌憚なき御意見を御伺ひすると共に、御申出でなき場合は、前年度に倣ひ、幹事信任として、會務に服す可きことを御諒承ありたい。只全く實務に遠ざかつて居らるゝ北條君に引退して戴いたことが變りである。

五、史前學雜誌に就て

本年度に於ては、これ亦幹事怠慢の結果、五冊を刊行したのみで、一冊を次年度に遲刊せしめたことは、幾重にも御詫びする。勿論この遲れた第六冊分は、昭和六年度に入る可きもので、昭和七年度に於ては、この一冊を含み七冊分刊行する豫定である點は、御斷りして置く。

これ等個々の雜誌に於ても、其內容が單行本として發行し得る性質の時は、努めて單行本の形式をとることにした。これは雜誌の名が、其內容の如何を問はず、動もすれば輕視せらるゝ樣な、不幸な風潮が存するからである。從來本雜誌に發表したものでも、例へば「是川研究號」等の如き、この趣示に基き編纂したものではあるが、今後一層この意味の明確を期して居る。從つて、雜誌として各號の頁數に可なりの厚薄も生ずるが、每年全卷歐文を含み年報を除き約三八〇――四一〇頁を立前として戴き度。これ は昭和四年年報に報告（第二頁）して居る如く、每號六四――六八頁を立前とすれば、以上の如き數になるのであるが、實際は甚しく超過し、第一卷は五冊であるが、歐文を除いて四一三頁、第二卷は邦文四〇〇頁（第二の六號、卷末三四〇は四〇〇の誤植）歐文四八頁、合計四四八頁に達して居るが、前述の如き立前にある點は、重ねて申して置く。

史前學年報　昭和六年

昭和六年度史前學會事業報告（創立第三年）

一、會務一般に就て

昭和六年度に於ても、幸に會員諸君の御贊助により、兎角怠慢勝ちな幹事の會務執行に對し、よく鞭撻督勵して戴いたのみならず、多くの遲滯不行屆きに對しても、寛容なる態度を以て、會務を進展させて戴いたことに就ては、幹事一同の御禮を申す所であり、次年度に於ても引き續き、御贊助を御願する所である。

本年度に於ても、本會としては、特別な會合等も催して居らないから、前例に倣ひ、本年報に於て、細目に亙る報告をなし、一つに幹事の責を明かにすると共に、これに基き、會員諸君の忌憚なき御意向を伺ひ、以て昭和七年度に於ける會務を律し、史前學會々員相互の研究機關たるの實を、益々發揮して行きたいものと考へる。又便宜上、此際御申し出でなき場合は、これ亦例年の如く、御贊同を得たものとして、會務に從事する故、御遠慮なく御意見を寄せて戴き度いのである。

二、會則に就て

前年度より、其儘踏襲して行くが、何か御意向があるや否や。會則に就て吟味を御煩はせする。

三、會員諸君に就て

本會はこゝに、本年報を以て、漸く創立第三年を送り茲に第四年を迎へるものであるが、世間一般に云はれて居る如く、「最初の苦しい三年」をどうやら乘り越したのであるが、只今御承知の樣な、經濟界の不況の、本會の樣な學術機關にまで、直接間接に及ぼす所があると見へ、別項會員名簿の如く、其總人員は、二百九十一名であつて、これを前年度の三百十二名に比すれば、こゝに二十一名の減少を見て居ることは、遺憾に耐へない所であると同時に、一つに以て幹事一同の怠慢の致す所と、深く御詫びする次第である。只このことに就て辯解がましくもあるが、幹事として、會員數を明にする爲、其入退會者の數を明瞭に報告して居る結果であり、本會に對し不利な退會者數の發表を避けたり、或は會員數に加減を加へたりする等の所謂トリックは一切存して居らないことだけは、責任を以て發表する所である。又こゝに不幸なことは、四名の死亡會員のあつたことで、これに就ては、御一同と共に重ねて弔意を表するものである。

史前學會々則

一 本會ヲ史前學會ト名付ケル

二 本會ノ目的ハ史前學研究ヲ主體トシ、併セテコレニ關連スル諸學ヲ考究普及スルニアル

三 本會ノ事業ハ左記ノ通リデアル

研究小報及パンフレツトノ發行

史前學雜誌(年六回隔月發行)及年報ノ發行

調査竝ニ研究旅行、臨時講演會竝ニ展覽會ヲ催ス

四 會員

本會ノ趣旨ニ贊成シ年額金五圓ヲ前納スル者ヲ以テ會員トシ金貳百圓以上ヲ一時ニ納ムル者ヲ以テ終身會員トスル

特ニ本會ニ貢獻シタル會員ヲ名譽會員ニ推選シ、終身會員ニ準ズル

五 本會員ハ隔月發行ノ史前學雜誌竝ニ毎年一回發行スル年報ノ配布ヲ受ケルモノトスル(但海外在留者ハ別ニ郵送料ヲ要スル)

六 會員特典

本會々員ハ大山史前學研究所ニ於テ研究ノ便宜ヲ受ケ共研究ヲ雜誌ニ於テ發表スルコトヲ得ル

本會ノ調査竝ニ研究旅行、講演會及展覽會ニ出席シ、本會所藏ノ資料圖書等ヲ使用閲覽スルコトヲ得ル

七 本會ニ數名ノ幹事ヲ置キ、本會ノ會務ヲ執ル(將來必要ニ應ジテ本會々則ヲ變更スルコトヲ得ル)

八 本會ハ事務所ヲ左記ノ所ニ置ク

東京府豐多摩郡千駄ケ谷町穩田九
大山史前學研究所内

史前學會 電話青山一二五番

幹事 大山柏　甲野勇　宮坂光次　田澤金吾　杉山壽榮男

會計 岡田義一

投稿規定

寄稿の範圍は史前學研究を主體とし、之に關連する諸學を包括す。寄稿者は會員並に會員の紹介ある者に限る

原稿は返還せず、但し寫眞、圖表等は豫め申出であるものに限り之を返還す

原稿掲載の先後は編輯者に一任されたし

寄稿者の希望に依りては内容に關し相談に應ずることあるべし

寄稿の別刷は豫め申込みある場合に限り、當分所要部數の實費及び送料を申受け需に應ず

昭和七年二月二十九日印刷
昭和七年三月　一　日發行

第三卷附錄

編輯者　東京府豐多摩郡千駄ケ谷町穩田九番地　大山柏

發行者　東京府豐多摩郡千駄ケ谷町穩田九番地　岡田義一

印刷者　東京市神田區表猿樂町二　中村修二
株式會社開明堂東京營業所

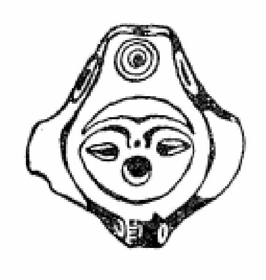
發行所　東京府豐多摩郡千駄ケ谷穩田九大山史前學研究所内　**史前學會**　電話青山一二五番　振替東京五八九六九番

發賣所　東京市神田區北甲賀町四番地　**岡書院**　電話神田二七七五番　振替東京六七六一九番

史前學年報

昭和六年





史前學會

